

# 山陽自動車道 建設に伴う発掘調査 6

(本文)

1. 矢部古墳群A
2. 矢部古墳群B
3. 矢部大坑遺跡
4. 矢部奥田遺跡
5. 矢部堀越遺跡

1993・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会



1. 矢部古墳群 A53号墳主体部（南から）



2. 矢部古墳群 A38号墳横穴式石室（東から）



1. 矢部奥田遺跡貝塚検出状況（北東から）



2. 矢部奥田遺跡粘土採掘場（北西から）



1. 矢部堀越遺跡 X301 検出状況 (西から)



2. 矢部堀越遺跡 X301 出土特殊器台形埴輪



## 序

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所は、山陽自動車道の建設に伴い、その予定路線敷地内にある遺跡について、岡山県教育委員会と協議し、記録保存のため、発掘調査を実施しております。

昭和59年度～平成4年度には、船穂町～岡山市所在の26遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書は、倉敷市矢部地区所在遺跡の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育・学術のため広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は、岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成5年3月

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

所長 佐伯博三

## 序

山陽自動車道は、瀬戸内圏域をむすぶ東西交通の大動脈であり、建設後の交通量の緩和および文化的・経済的波及効果については図りしれないほど大きいものがあると期待され各方面から早期建設の要望がだされていたところでもあります。

こうした大規模開発事業の施行にあたっては、埋蔵文化財の保護・保存をいかに果たすかが課題になります。岡山県教育委員会ではこのたびの山陽自動車道の建設に先立ち、関係当局と繰り返し協議、調整を図ってまいりましたが、やむなく記録保存の処置を講じなければならない遺跡については、日本道路公団・建設省からの委託を受け、昭和52年度より発掘調査を実施してきました。

今回の6分冊には、昭和59年度から昭和62年度に調査した倉敷市矢部に所在する遺跡を5箇所収載しております。矢部古墳群は1つの屋根上に並ぶ十数基の前半期と後半期の古墳からなり、当該地域の古墳研究に貴重な資料を提供しています。矢部奥田遺跡は重要な縄文時代の貝塚を含んでいましたが、全体を保存することができず、やむをえず一部発掘調査を実施しました。また、県下では類例のない古墳時代の粘土採掘坑の調査は興味を引くところです。矢部堀越遺跡は弥生時代～中世の墳墓・集落跡であり、とくに特殊器台形埴輪の出土は注目されます。

このように、それぞれ特徴を持った遺跡の報告が、今後の埋蔵文化財の調査研究の資料として、また埋蔵文化財の保護の一助として活用されることを希望します。

最後に発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の御教示と御指導を得、また日本道路公団をはじめ地元の方々から御協力を賜りました。関係各位に対し、記して厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

## 例 言

1. 本報告書は、岡山県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて、山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施した倉敷市矢部所在の矢部古墳群A・矢部古墳群B・矢部大塚遺跡・矢部奥田遺跡・矢部堀越遺跡の5カ所の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査期間は、昭和59年度（1984）11月～3月、昭和61年度（1986）4月～3月、昭和62年度（1987）4月～1月で、調査総面積は、18,870㎡である。

3. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会のご指導とご助言を得た。記して深く感謝の意を表する次第である。

鎌木義昌（岡山理科大学教授）

西川 宏（山陽女子高校教諭）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

根木 修（岡山市教育委員会）

間壁葎子（倉敷考古館）

稲田孝司（岡山大学教授）1991年から

高見周夫（岡山県遺跡保護調査団）1985年から

土井基司（岡山大学助手）1991年から

西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）1991年まで

新納 泉（岡山大学助教授）1985年から1991年まで

近藤義郎（岡山大学名誉教授）1984年まで

藤田憲司（大阪府埋蔵文化財協会）1984年まで

4. 発掘調査の実施は、岡山県古代吉備文化財センター（以下センター）が当たり、矢部地区の第一次調査は、浅倉秀昭と中野雅美が担当した。古墳群A（以下矢部を省く）は浅倉・大智浩、古墳群Bは井上弘・大智が担当した。大塚遺跡は内藤善史・大智、奥田遺跡は山磨康平・佐守学、堀越遺跡は浅倉・石田善人が担当した。

5. 発掘調査現場における写真撮影は、担当調査員が行った。報告書収載の遺物写真は政田孝の撮影による。

6. 出土遺物の整理については、水洗・注記作業は調査中および次年度中に堀越遺跡事務所・黒住事務所・津寺事務所で実施し、復元・実測・原稿執筆・遺物写真撮影は平成3年度に津寺事務所で実施した。

7. 遺構図のトレースは古墳群Aを浅倉、古墳群Bを井上、大塚を内藤、奥田を山磨、堀越を浅倉が行った。川崎康代は地形図などに協力した。

8. 遺物の実測は、津寺事務所で実施し、古墳群Aを浅倉、古墳群Bを高畑知功・古市秀治、大塚を古市、奥田を高畑・古市、堀越を浅倉が主として行った。特殊器台形埴輪は古市、石器は三垣佐知子他が担当した。実測補助として原田美佐子・山本恵美子・近藤明子が協力した。遺物のトレースは浅倉・高畑・古市他が担当した。

9. 特殊な遺構・遺物の鑑定・分析等については、下記の諸先生・機関にご教示・原稿を賜った。記して感謝の意を表する。

- |        |               |        |          |          |         |
|--------|---------------|--------|----------|----------|---------|
| ①人骨の鑑定 | 池田次郎          | 九州国際大学 | ②赤色顔料の分析 | 安田博幸     | 武庫川女子大学 |
| ③炭素14法 | 山田 治          | 京都産業大学 | ④動物遺体の鑑定 | 金子浩昌     | 早稲田大学   |
| ⑤地形環境  | 日下雅義          | 立命館大学  | ⑥石材の鑑定   | 三宅 寛     | 岡山理科大学  |
| ⑦鉄滓の分析 | 大澤正巳          | 新日本製鉄  | ⑧粘土胎土分析  | 備前陶芸センター |         |
| ⑨備前焼作家 | 松井興之          |        | ⑩縄文土器    | 高橋 護     | 岡山県立博物館 |
| ⑪種子同定  | パリノ・サーヴェイ株式会社 |        |          |          |         |

10. 報告書中の遺構図のレベルはすべて海拔高を用い、方位は真北を使用している。

11. 報告書中の時代区分は考古学上の区分と一般的な歴史時代区分および世紀を併用した。

12. 報告書中の遺構・遺物の縮尺は原則的に共通する。住居は1/80・土器は1/4など。特殊なものについては図中に縮尺を記入している。

13. 本報告書の作成は平成3年度に行い、編集は浅倉が担当した。なお執筆担当者は文末に記した。

14. 発掘調査にかかる諸記録・出土遺物のすべては、センターに保管・収蔵している。

## 総目次

I. 収載遺跡の地理的・歴史的環境	1
II. 調査の経緯と調査体制	3
III. 発掘調査報告	
1. 矢部古墳群A	9
2. 矢部古墳群B	77
3. 矢部大埴遺跡	121
4. 矢部奥田遺跡	141
5. 矢部堀越遺跡	327
IV. 自然科学分野における分析・鑑定	451

## 図目次

第1図 調査遺跡位置図 (1/20万)	2
第2図 調査遺跡位置図 (1/100万)	3
第3図 調査遺跡と周辺遺跡の分布図 (1/25,000)	4
第4図 矢部古墳群Aとトレンチ配置図 (1/2,000)	4
第5図 矢部古墳群B・矢部大埴遺跡とトレンチ配置図 (1/2,000)	5
第6図 矢部奥田遺跡とトレンチ配置図 (1/2,000)	5
第7図 矢部堀越遺跡とトレンチ配置図 (1/2,000)	5

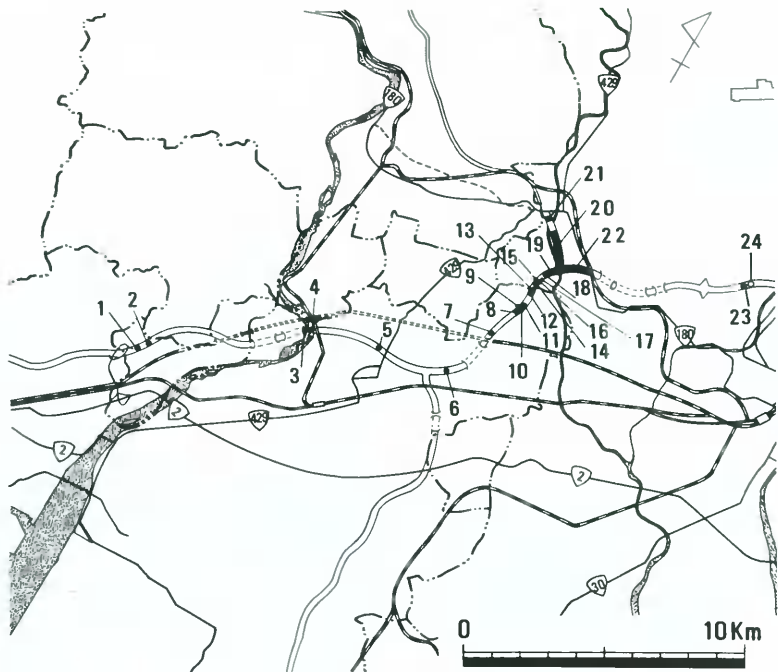
## 表目次

発掘調査遺跡一覧表	2
-----------	---

## 巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版1—1	矢部古墳群A53号墳主体部 (南から)
2	矢部古墳群A38号墳横穴式石室 (東から)
巻頭カラー図版2—1	矢部奥田遺跡貝塚検出状況 (北東から)
2	矢部奥田遺跡粘土採掘壙 (北西から)
巻頭カラー図版3—1	矢部堀越遺跡X301検出状況 (西から)
2	矢部堀越遺跡X301出土特殊器台形埴輪





第1図 調査遺跡位置図 (1/20万)

第1図 調査遺跡位置図 (1/20万)

- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1. 中山3号貝塚 (第5分冊)    | 2. 中山2号貝塚 (第5分冊)  |
| 3. 酒津八幡山平谷遺跡 (第5分冊) | 4. 酒津・水江遺跡 (第5分冊) |
| 5. 養生小学校裏山遺跡 (第5分冊) | 6. 三田散布地 (第5分冊)   |
| 7. 二子14号墳 (第5分冊)    | 8. 矢部古墳群A (第6分冊)  |
| 9. 矢部古墳群B (第6分冊)    | 10. 矢部大塚遺跡 (第6分冊) |
| 11. 矢部奥田遺跡 (第6分冊)   | 12. 矢部堀越遺跡 (第6分冊) |
| 13. 郷境墳墓群           | 14. 前池内古墳群他       |
| 15. 前池内3号墳          | 16. 前池内4～7号墳      |
| 17. 後池内古墳           | 18. 黒住・雲山遺跡       |
| 19. 雨崎天神山遺跡         | 20. 三手・津寺遺跡       |
| 21. 高塚遺跡            | 22. 政所遺跡          |
| 23. 富原大池奥山遺跡        | 24. 富原西奥古墳 (第7分冊) |

## I. 収載遺跡の地理的・歴史的環境

本報告書に収載している遺跡は矢部古墳群A・矢部古墳群B・矢部大坵遺跡跡・矢部奥田遺跡・矢部堀越遺跡の5ヶ所である。いずれも倉敷市矢部に所在する。矢部は市の東北端に位置し、岡山市に接する。遺跡の所在する付近の地形は東に足守川、西は標高200mの日差山によって画され南北を低丘陵に囲まれた東西400m・南北400mの小さな入り江状の平野である。純農業地域で近年平野部と緩斜面の水田をほとんど全て圃場整備している。この工事に伴っていくつかの埋蔵文化財の発掘が行われている。南の低丘陵には大規模な住宅団地が十数年前造成され今では約800戸の住宅が建築され、岡山市や倉敷市中心部のベッドタウンへと変貌している。この団地造成工事に伴って埋蔵文化財の発掘が行われている。(註1)山陽自動車道はこの地区の西端の山腹を南北に貫通する。なお農業は稲作がほとんどで一部に温室ブドウの栽培が行われている。

矢部地区周辺で最も古い遺物は縄文時代早期の土器片である。第3図の6若宮神社東遺跡の調査で出土している。圃場整備に伴い倉敷市教育委員会が発掘調査した。縄文時代の遺跡としては矢部中須賀貝塚(矢部奥田が正しい小字名)と矢部堀越貝塚がある。前者は一部が山陽自動車道に掛かって調査対象となった。この報告書に収載している。後者は用水路建設等で破壊されているようで当該位置で遺物は採集できない。

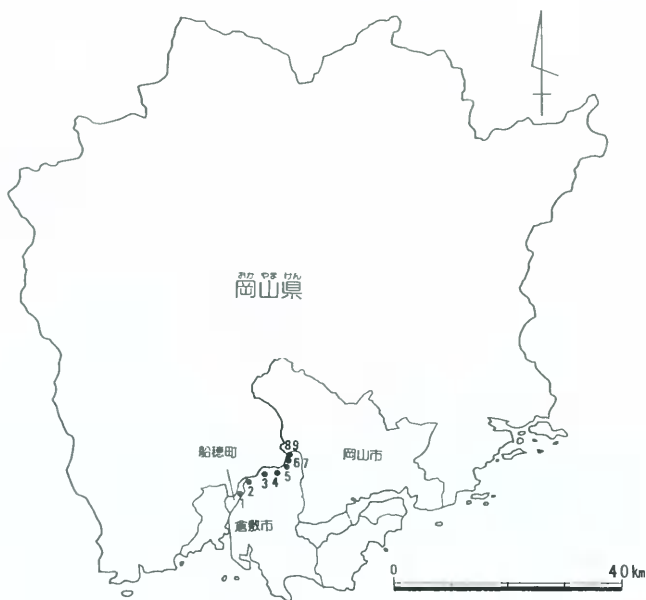
弥生時代の遺跡としては7琵琶池北遺跡・9矢部南向遺跡・10足守川加茂遺跡・12桶築遺跡・15岩倉遺跡などがある。7は倉敷市教委が調査したもので中期の遺構・遺物が検出された。9・10は岡山県教委・岡山県古代吉備文化財センターが調査し、現在報告書作成中で、小銅鐸・ト骨・銅鏡などが出土している。12は岡山大学考古学研究室が発掘調査し、報告書が刊行されている弥生墳丘墓である。(註2)15は前期の遺跡と言われていたが、倉敷市教委が調査し、後期の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代の遺跡としては1・2矢部古墳群・5日差山古墳群・13王墓山古墳群がある。1・2は全長50mの前方後円墳である矢部大坵古墳を含む。5は後半期の古墳群である。13には鏡・馬具等豪華な遺物を副葬し、家型石棺を伴う横穴式石室の王墓山古墳を含む。

古代の遺跡としては8矢部廃寺・11惣爪廃寺・14日畑廃寺がある。8は奈良時代の軒丸・軒平瓦が温室建設工事で出土している。駅家説もある。11には塔心礎が現存する。14は倉敷市教委が市道建設に伴い調査し、大量の瓦を出土している。

(註1) 間壁忠彦・間壁霞子 『王墓山遺跡群』 倉敷市教育委員会 1974年

(註2) 近藤義郎ほか 『桶築遺跡』 山陽カラーシリーズ 山陽新聞社 1980年



第2図 調査遺跡位置図(1/100万)

発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(一次)	調査員名
1	中山貝塚	船穂町中山	59.7～59.8	850	浅倉・中野
2	酒津八幡山平谷遺跡	倉敷市酒津	59.5～59.6	770	浅倉・中野
2'	酒津・水江遺跡	倉敷市酒津	59.6	260	浅倉・中野
3	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市西坂	60.4～62.9	16800(300)	浅倉・中野・亀山・小松原
3'	西坂古墳	倉敷市西坂	61.8～61.12	250	亀山
4	三田散布地	倉敷市三田	61.4	200	井上
5	二子14号墳	倉敷市二子	61.5～62.6	1700	井上・亀山
6	矢部古墳群A	倉敷市矢部	60.1～62.3	4400(400)	浅倉・大智・亀山
7	矢部古墳群B	倉敷市矢部	60.2～62.7	2400(200)	井上・大智
7'	矢部大坑遺跡	倉敷市矢部	60.3～62.3	1200(70)	内藤・大智
8	矢部奥田遺跡	倉敷市矢部	59.12～63.1	2800(200)	山磨・佐守・内藤・大智
9	矢部堀越遺跡	倉敷市矢部	59.11～62.11	7000(200)	浅倉・石田・内藤・大智

## Ⅱ．調査に至る経緯と調査体制

### 1. 発掘調査の経緯

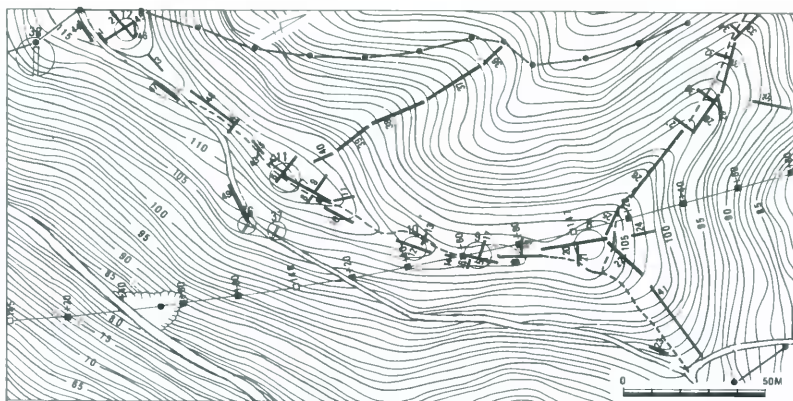
岡山県教育委員会は山陽自動車道の路線決定に先立って昭和47年（1972）に国庫補助金を受け、岡山県遺跡保護調査団の協力を得て、山陽自動車道候補地500m幅内の遺跡分布調査を実施した。さらに用地幅が確定し、用地買収もほぼ完了したため、昭和59年（1984）4月には倉敷市矢部地内の山陽自動車道用地内における埋蔵文化財の分布調査を実施した。この調査によって矢部古墳群・矢部散布地・堀越散布地が第一次調査の対象地として認識された。このことを受けて日本道路公団は同年10月19日付で埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の3）を、県教委は同年11月6日付で文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘調査の通知（第98条の2）を提出した。第一次調査は昭和59年11月16日～12月8日に矢部散布地200㎡、昭和60年1月17日に堀越散布地200㎡、3月14日に矢部古墳群A 400㎡・矢部古墳群B 200㎡を調査した。その結果を南から説明する。

矢部古墳群Aではトレンチは合計52本を数える。倉敷市文化財分布図によれば用地内には尾根上に5基（8号～12号墳）・南斜面に1基（36号墳）の合計6基の古墳が記されていた。立ち木（赤松林）伐開後の踏査で南斜面に1基横穴式石室が増加した。発掘によりさらに南斜面で1基横穴式石室が増加した。すなわち南斜面には合計3基の横穴式石室を主体部とする後半



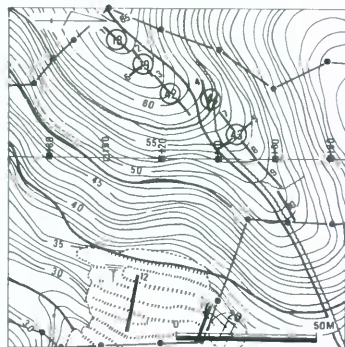
1. 矢部古墳群A
2. 矢部古墳群B
3. 矢部貝塚
4. 矢部堀越遺跡
5. 日差山古墳群
6. 若宮神社東遺跡
7. 琵琶池北遺跡
8. 矢部廃寺
9. 矢部南向遺跡
10. 足守川加茂遺跡
11. 惣爪廃寺
12. 楯築遺跡
13. 王墓山古墳群
14. 日畑廃寺
15. 岩倉遺跡

第3図 調査遺跡と周辺遺跡の分布図 (1/25,000)



第4図 矢部古墳群Aとトレンチ配置図 (1/2,000)

期の古墳が存在することが判明した。尾根上の5基については、最高所の12号墳は古墳ではなく昭和初期の石材抜き取り跡であり、11号墳は古墳の可能性が低く、10号墳は長方形土壌を主体部とする前半期の古墳である。9・8号墳はほとんど削平された古墳であろう。その他数本の溝と土壌が検出できた。遺物としては土師器・須恵器・鉄剣が出土している。したがって、尾根上は11号墳より下方に何基の古墳があるのか全面調査しなければわからない状態である。この結果矢部古墳群Aは4,300㎡の調査対象面積が確認できた。



第5図 矢部古墳群B・矢部大塚遺跡とトレンチ配置図 (1/2,000)

矢部古墳群Bではトレンチは合計12本設定して掘り上げた。倉敷市文化財分布図によれば用地内の尾根上には2基の古墳が記されていて、用地外だが隣接して2基の古墳が存在していた。西方の用地外の古墳は全長50mの前方後円墳である矢部大塚古墳で、その基底部から用地杭まで10m弱しかないので周溝が掛かる可能性がある。また東方の用地外の古墳は20号墳で横穴式石室を主体部とする後半期の円墳で、用地内に周溝が掛かる可能性が高い。その上立ち木伐開で2基古墳が増加し、岡山大学考古学研究部の分布調査によって弥生中期土器包含層が用地内に記されている。以上の前提をもって調査した結果尾根上には前半期の古墳が5基と弥生中期の包含層が残存し南斜面の棚田部分には弥生中期土器包含層と中世土器包含層を検出し

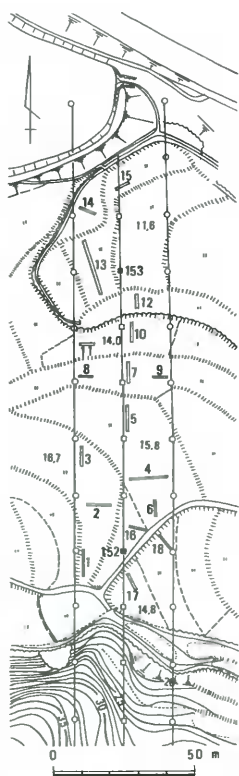


た。こうして矢部古墳群Bは尾根上2,000㎡と南斜面1,200㎡を調査対象とすることになった。南斜面は矢部大丸遺跡と呼称した。

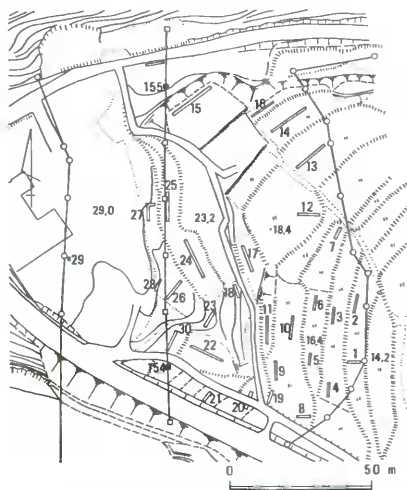
矢部散布地は発掘前には中世土器片がわずかに表面採集できるだけであった。現状はすべて水田で、北と南は谷水田である。トレンチは18本入れた。台地上では柱穴を検出し谷部では縄文～中世の土器が出土した。特筆すべきは南の谷部とその斜面で矢部中須賀貝塚と呼称されている縄文貝塚を地元作業員の記憶から確認できたことである。この「中須賀」は小字名の誤りで、正しい小字名を使用し矢部奥田遺跡とし、2,800㎡の調査対象とした。

堀越散布地には30本のトレンチを入れた。数カ所で柱穴を検出し、ほとんどのトレンチで弥生中期の土器包含層を認めた。全面調査が必要であり、対象面積は7,000㎡になり、矢部堀越遺跡と呼称した。

以上の第一次調査の結果を踏まえて昭和61年度は4月から矢部古墳群A・Bの全面調査を始め、Aのみ昭和62年3月に終了した。昭和62年度はB・大丸・奥田・堀越の全面調査を始め、昭和62年12月には矢部地区の調査は完全に終了した。



第6図 矢部奥田遺跡  
とトレンチ配置図 (1/2,000)



第7図 矢部堀越遺跡  
とトレンチ配置図 (1/2,000)

## 2. 調査の体制

発掘調査は日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会が当たった。なお、昭和59年（1984）11月1日には文化課から独立して岡山県古代吉備文化財センターが設立され、契約事項は文化課が行い、発掘調査はセンターが担当することとなった。

昭和59年度 4月1日～10月31日

### 岡山県教育委員会文化課

課長 松元昭憲 参事 橋本泰夫 課長代理 逸見英邦 文化財主幹 佐々木清  
課長補佐（埋文係長） 河本 清 主任 古瀬 宏・遠藤勇次 主事 檜原充二  
文化財保護主査 浅倉秀昭（中山・酒津調査） 文化財保護主事 中野雅美（同調査）

昭和59年度11月1日～3月31日

### 岡山県教育委員会文化課

課長 松元昭憲 課長代理 逸見英邦 課長補佐（埋文係長） 河本 清  
主任 遠藤勇次

### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 松元昭憲 次長 橋本泰夫 総務課長 佐々木清 主任 古瀬 宏・遠藤勇次  
主事 檜原充二 調査課長 河本 清  
文化財保護主査 浅倉秀昭（酒津・中山調査）・文化財保護主事 中野雅美（同調査）

昭和60年度

### 岡山県教育委員会文化課

課長 松元昭憲（12月15日まで）・高橋誠記（12月16日から） 課長代理 逸見英邦  
埋蔵文化財係長 正岡睦夫 主査 遠藤勇次

### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 松元昭憲（12月15日まで）・高橋誠記（12月16日から） 次長 橋本泰夫  
総務課長 佐々木清 主査 遠藤勇次 主任 花本静夫 主事 檜原充二  
調査課長 河本 清 文化財保護主任 浅倉秀昭（菅生調査）  
文化財保護主事 中野雅美（同調査）

昭和61年度

### 岡山県教育委員会文化課

課長 高橋誠記 課長代理 逸見英邦 埋文係長 正岡睦夫 主任 仁宮秀博

### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 橋本泰夫 総務課長 佐々木清 主査 遠藤勇次 主任 花本静夫  
主事 片山淳司 調査課長 河本 清

文化財保護主査 井上 弘 (三田・二子14号・矢部B・津寺調査)

文化財保護主任 浅倉秀昭 (矢部A・三手・津寺調査)

文化財保護主事 中野雅美 (菅生調査)

主 事 亀山行雄 (二子14号・菅生・矢部A調査)

主 事 大智 浩 (矢部A・矢部B・三手・津寺調査)

昭和62年度

岡山県教育委員会文化課

課長 高橋誠記 (12月15日まで)・吉尾啓介 (12月16日から) 課長代理 河野 衛

課長補佐 (埋文係長) 伊藤 晃 主査 藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所長 橋本泰夫 総務課長 佐々木清 総務主幹 藤本信康 主任 岡田祥司

主任 花本静夫 主事 片山淳司 調査第二課長 葛原克人

文化財保護主幹 (第一係長) 正岡睦夫 文化財保護主査 (第二係長) 松本和男

文化財保護主査 山磨康平 (奥田) 文化財保護主任 中野雅美

文化財保護主任 浅倉秀昭 (堀越) 文化財保護主事 宇垣匡雅

文化財保護主任 内藤善史 (大垵・堀越・奥田) 文化財保護主事 片山泰輔

文化財保護主事 川崎 肇 主 事 亀山行雄

主 事 佐守 学 (奥田) 主 事 小松原基弘

主 事 大智 浩 (大垵・堀越・奥田)

主 事 石田善人 (堀越)

平成3年度

岡山県教育委員会文化課

課長 鬼澤佳弘 (1月20日まで)・渡辺淳平 (1月21日から) 課長代理 大橋義則

課長補佐 (埋文係長) 柳瀬昭彦 主査 時長 勇

岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山常實 次長 河本 清 総務課長 藤本信康

課長補佐 (総務係長) 小西親男 主査 平松郁男 主任 坂本英幸

主事 大西治郎・亀山幸治・渡辺徹也

調査第二課長 正岡睦夫 (報告書整理) 文化財保護主幹 高畑知功 (報告書整理)

第二係長 浅倉秀昭 (報告書整理) 文化財保護主査 中野雅美 (報告書整理)

文化財保護主事 亀山行雄 (報告書・調査) 主 事 古市秀治 (報告書・調査)

### 3. 調査上の問題点

本報告書所載の遺跡発掘調査上幾つかの問題点が持ち上がった。それらを以下箇条書きにしてみよう。

- ①矢部奥田遺跡中の貝塚の保存について。 ②各遺跡の調査区の線引きについて。
- ③調査体制について。 ④排土・廃水について。 ⑤騒音の苦情について。
- ⑥調査後の監視について。 ⑦報告書の体制について。

①については元来山陽自動車道はこの貝塚と矢部大塚古墳を旨く避けつつもりであった。にもかかわらず貝塚が用地内に取り込まれたのは、詳細がわからなくなっていたため、倉敷市文化財分布図に位置の誤認があった為である。しかし昭和59年12月に実施した第一次調査の結果から山陽自動車道用地内に一部が入っていることを確認した。そしてこの貝塚は学術上極めて重要で、しかも県内では残存状態が最も良好な貝塚である事も解り、そのため対策委員会から保存の要望が出た。保存についての文化課と公団の協議は昭和61年2月から昭和63年2月まで数度行われ、その結果橋脚の位置変更が決定した。しかし工事上貝塚の北端がどうしても破壊されるため、その部分はやむを得ず調査せざるを得なくなった。調査の概要は後述している。

②については第一次調査の結果から担当調査員が全面調査範囲の線引きを行い、それを基礎資料としてセンター所内会議で討議したものである。用地幅一杯の発掘を行う必要の有るところは矢部奥田遺跡だけであった。古墳群については尾根筋と横穴式石室墳周辺の調査だけで良く、残る遺跡は第一次調査の結果から妥当と判断された。

③については昭和61年度5名の調査員が菅生・三田・二子・矢部A・矢部B・三手・津寺の7ヵ所の調査を行っている。足守川の東側に位置する三手・津寺遺跡は広大な面積であり、現状は水田となっていたため、早急に遺跡の状況を確認する必要があり、やむをえず、一部の調査を中断して、一次調査を実施した。

調査地の増加のため、短期間であったが、一部の遺跡については、調査員が1名で担当せざるをえない状況が生じた。この状態は昭和62年度15名の体制になり、各遺跡2名の調査員になって、解消した。

④⑤は調査上避けられない問題である。地元住民とセンターの協議で解決した。

⑥は貝塚の保存部分に接近した工事に際して、工事関係者に十分徹底していなかったため一部未調査のまま破壊を受けた。その部分の出土遺物は採集している。

⑦調査担当者が多数いたが、他の部門への人事移動や他事業への配置換などがあり、すべて本報告書作成に従事できない状況にあった。そのため、収載遺跡の調査担当者がいない遺跡については、調査担当者との協議を行いながら、報告書作成担当職員が、分担してこれにあたった。可能な範囲については他事業の担当者にも報告を書いてもらった。 (浅倉)

### Ⅲ. 発掘調査報告

## 1. <sup>や</sup><sup>べ</sup>矢部古墳群 A



矢部古墳群A

目 次

第1章 発掘調査の経緯	15
第1節 発掘調査の経緯	15
第2節 日誌抄	16
第2章 発掘調査の概要	19
第1節 調査区の概要	19
第2節 弥生時代の遺物	25
第3節 古墳時代前半期の遺構・遺物	26
(1) 58号墳	26
(2) 57号墳	30
(3) 56号墳・55号墳	34
(4) 54号墳	34
(5) 53号墳	37
(6) 8号墳	41
(7) 39号墳・9号墳	43
(8) 10号墳	44
(9) 51号墳・52号墳・11号墳	48
第4節 古墳時代後半期の遺構・遺物	50
(1) 38号墳	50
(2) 37号墳	58
(3) 36号墳	61
(3) 45号墳	65
第5節 古代～中世の遺構・遺物	68
(1) 溝	68
(2) 炉	69
(3) 土壇	69
(4) 古代～中世の遺物	69
第3章 まとめ	70
1. 矢部古墳群Aの前半期古墳について	70
2. 矢部古墳群Aの後半期古墳について	71

矢部古墳群A

表 目 次

表-A 古墳一覧表	19	表-C 土器観察表	72
表-B 石鏃一覧表	25	表-D 金属器一覧表	75

図 目 次

第1図 周辺地形図 (1/2,000)	17	第21図 55号墳溝-14断面図 (1/40)	34
第2図 発掘前地形測量図 (1/1,000)	18	第22図 54号墳土壙-8・出土遺物 (1/30)	35
第3図 発掘後地形測量図 (1/1,000)	20	第23図 54号墳溝-13・出土遺物 (1/40)	36
第4図 1・2区全体図 (1/500)	21	第24図 53号墳シスト-1 (1/30)	37
第5図 3区全体図 (1/500)	22	第25図 53号墳石蓋土壙-1 (1/30)	38
第6図 4~6区全体図 (1/500)	23	第26図 53号墳土壙-7 (1/30)・出土遺物	39
第7図 古墳配置図 (1/1,500)	24	第27図 53号墳土壙-6 (1/30)	39
第8図 弥生時代の石鏃	25	第28図 53号墳溝-17断面図 (1/40)	40
第9図 58号墳土壙-10 (1/30)	26	第29図 8号墳溝-9 (1/30)	40
第10図 58号墳壺棺-3 (1/20)	26	第30図 溝-9 出土遺物	41
第11図 58号墳壺棺-2 (1/20)・出土遺物	27	第31図 8号墳溝-10 (1/40)・出土遺物	42
第12図 58号墳溝-19断面図 (1/40)	28	第32図 39号墳溝-8 (1/40)・出土遺物	43
第13図 壺棺-3・溝-19出土土遺物	29	第33図 10号墳墳丘断面図 (1/100)	44
第14図 57号墳シスト-2 (1/30)	30	第34図 10号墳溝-5・5' 断面図 (1/50)	44
第15図 57号墳土壙-9 (1/30)	31	第35図 10号墳土壙-1 (1/30)	45
第16図 57号墳石蓋土壙-2 (1/30)	31	第36図 10号墳土壙-2 (1/30)	46
第17図 57号墳石蓋土壙-3 (1/30)	32	第37図 10号墳土壙-3 (1/30)	46
第18図 57号墳溝-16断面図 (1/40)	33		
第19図 溝-16出土遺物と鉄剣	33		
第20図 56号墳溝-15断面図 (1/40)	34		

矢部古墳群A

第38図	10号墳壺棺—1 (1/20)	46	第54図	37号墳横穴式石室 (1/60)	60
第39図	10号墳出土遺物	47	第55図	37号墳石室内遺物出土状態 (1/40)	
第40図	52号墳溝—3 (1/40) ・ 出土遺物	48			60
第41図	51号墳溝—2 断面図 (1/40)	48	第56図	37号墳出土遺物	61
第42図	11号墳溝—1 断面図 (1/40)	49	第57図	36号墳発掘前地形図 (1/200)	62
第43図	38号墳発掘前地形図 (1/200)	51	第58図	36号墳発掘後地形図 (1/200)	62
第44図	38号墳発掘後地形図 (1/200)	51	第59図	36号墳墳丘断面図 (1/80)	62
第45図	38号墳墳丘断面図 (1/100)	52	第60図	36号墳横穴式石室 (1/60)	63
第46図	38号墳石室内遺物出土状態 (1/50)	52	第61図	36号墳石室内遺物出土状態 (1/40)	64
第47図	38号墳横穴式石室 (1/80)	53	第62図	36号墳出土遺物	65
第48図	38号墳出土遺物(1)	55	第63図	45号墳発掘前地形図 (1/200)	65
第49図	38号墳出土遺物(2)	56	第64図	45号墳墳丘断面図 (1/80)	66
第50図	38号墳出土遺物(3)	57	第65図	45号墳発掘後地形図 (1/200)	66
第51図	37号墳墳丘断面図 (1/80)	58	第66図	45号墳横穴式石室 (1/60)	67
第52図	37号墳発掘前地形図 (1/200)	59	第67図	溝—4 断面図 (1/40)	68
第53図	37号墳発掘後地形図 (1/200)	59	第68図	溝—12断面図 (1/40)	68
			第69図	炉—1・2 (1/30)	69
			第70図	古代の遺物	69

図版目次

図版1—1	58号墳全景 (南西から)	—2	石蓋土壇—3完掘後 (西から)
—2	土壇—10 (北から)	図版6—1	57号墳全景 (北から)
図版2—1	壺棺—2 (南から)	—2	57号墳全景 (西から)
—2	壺棺—3 (北から)	図版7—1	54号墳全景 (東から)
図版3—1	シスト—2 (北から)	—2	54号墳全景 (東から)
—2	シスト—2天井石除去後 (西から)	図版8—1	シスト—1 (西から)
—2	シスト—1頭骨検出状況 (東から)	—2	シスト—1頭骨検出状況 (東から)
図版4—1	石蓋土壇—2 (東から)	図版9—1	53号墳全景 (南から)
—2	石蓋土壇—2完掘後 (西から)	—2	53号墳全景 (南から)
図版5—1	石蓋土壇—3 (西から)		

矢部古墳群A

- |        |                     |        |              |
|--------|---------------------|--------|--------------|
| 図版10—1 | 10号墳全景（西から）         | 図版16—1 | 45号墳発掘前（東から） |
| —2     | 土壇—1（北から）           | —2     | 45号墳全景（北から）  |
| —3     | 鉄斧出土状況（南から）         | 図版17—1 | 45号石室（南から）   |
| 図版11—1 | 古墳群A 3・4区（北から）      | —2     | 45号墳石室（北から）  |
| —2     | 炉—1・2（北から）          | 図版18   | 壺棺の土器        |
| 図版12—1 | 38号墳発掘前（東から）        | 図版19   | 溝出土の土器       |
| —2     | 38号墳天井石除去後（東から）     | 図版20   | 38号墳出土の土器(1) |
| 図版13—1 | 38号墳遺物出土状況<br>（東から） | 図版21   | 38号墳出土の土器(2) |
| —2     | 38号墳石室完掘後（東から）      | 図版22—1 | 37号墳出土の土器    |
| 図版14—1 | 37号墳発掘前（北から）        | —2     | 36号墳出土の土器    |
| —2     | 37号墳遺物出土状況（南から）     | 図版23   | 各区出土鉄器       |
| 図版15—1 | 36号墳発掘前（北から）        | 図版24—1 | 37号墳出土鉄器     |
| —2     | 36号墳遺物出土状況（東から）     | —2     | 38号墳出土耳飾り    |
|        |                     | —3     | 各区出土石鏃       |

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査の経緯

#### 調査目的

矢部古墳群は古墳時代の全期間に亘る古墳群と考えられ、日差山の東斜面に幾筋も伸びる尾根上、斜面、谷間に集中し、或は散在して分布する古墳を総称したものである。この古墳群の真中をほぼ南北にトンネルではなくオープンカット工法で山陽自動車が貫通することになり、尾根は完全に削平され、谷間は埋め立てられてしまうことになった。そこでこの調査の目的は工事に先立ち用地内に所在する古墳を記録保存する事である。

#### 調査の方法

昭和47年（1972）の500m幅の遺跡分布調査はかなり粗い調査とならざるを得ない。はっきりと用地境が確定し、幅杭が打たれた後の分布調査は昭和59年（1984）の4月に調査員2名で実施された。これにより、1筋の蛇行した長い尾根が間に谷を含んで2カ所に別れる形になることが判明した。南に位置する標高115m～80mの部分を矢部古墳群Aとし、標高65～50mの部分を矢部古墳群Bと呼称した。その上で、昭和60年1月矢部古墳群Aに調査員2名と発掘作業員10数名で一部の立ち木伐開も行いながらトレンチによる古墳の一次調査に入った。この結果4,300㎡の全面調査が必要になった。昭和61年（1986）4月から調査員2名と発掘作業員10数名で全面発掘調査に入った。全面を覆っている赤松の林を日本道路公団の協力により横穴式石室墳の周辺と尾根筋を幅約20m～30m伐開してもらい、測量業者により地形測量用の基準杭を10m間隔に設置した。発掘は横穴式石室墳から始め、尾根筋は高いほうから低いほうに向かって徐々に下っていった。途中1カ月間、全員が三手・津寺遺跡の一次調査を担当したが、昭和62年（1987）3月には完掘している。最終的には、全面調査の面積は100㎡増えて4,400㎡になっている。

#### 調査体制

一次調査は古代吉備文化財センターの文化財保護主査浅倉秀昭と文化財保護主事 中野雅美の2名が担当した。全面調査はセンターの文化財保護主査（7月1日付け文化財保護主任）浅倉秀昭が当初から最後まで担当し、主事大智浩が4月～7月、主事亀山行雄が3月に応援した。

#### 報告書作成

平成3年（1991）津寺事務所に於いてセンターの調査第二課第二係長浅倉秀昭が遺構・遺物のトレース・原稿執筆等を行い、政田孝が遺物写真の撮影をした。



矢部古墳群A

第2節 日誌抄

昭和59年度担当調査員……………浅倉秀昭・中野雅美

昭和59年（1984）11月6日 文化財保護法第98条の2（埋蔵文化財発掘の通知）提出

昭和60年（1985）1月21日 矢部古墳群A一次調査開始

2月22日 矢部古墳群A一次調査終了

3月20日 実績報告提出

昭和61年度担当調査員……………浅倉秀昭・大智浩（亀山行雄）

昭和61年（1986）4月11日 器材運搬

4月16日 36号墳地形測量・発掘開始

4月21日 37号墳地形測量・発掘開始

4月28日 45号墳新発見・発掘開始

5月6日 45号墳発掘通知（98条の2）提出

5月22日 38号墳地形測量・発掘開始

5月23日 11号墳地形測量・発掘開始

5月28日 38号墳天井石撤去作業

7月17日 10号墳地形測量・発掘開始

8月1日 埋蔵文化財保護対策委員会開催

8月7日 9号墳地形測量・発掘開始

8月12日 調査員1名になる

8月22日 8号墳地形測量・発掘開始

9月11日 8号墳東方測量・発掘開始

10月6日 埋蔵文化財保護対策委員会開催

10月9日 シストー1の人骨鑑定

11月5日 8号墳西方測量・発掘開始

12月8日 2区地形測量・発掘開始

12月25日 一時調査中断

昭和62年（1987）2月12日 調査員2名で調査再開

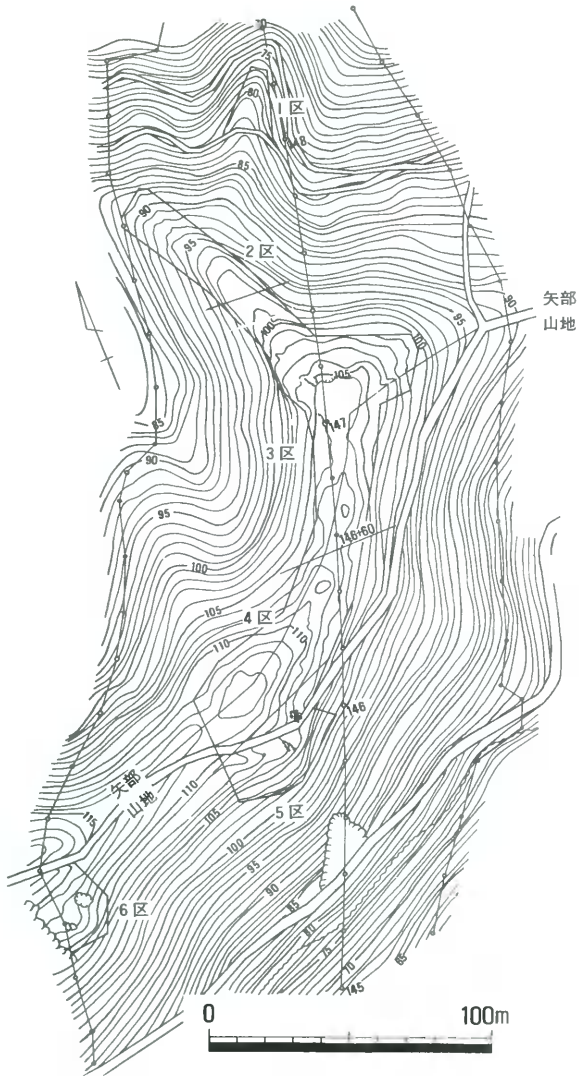
2月25日 1区発掘開始

3月11日 調査完了・器材運搬

3月12日 埋蔵文化財保護対策委員会開催

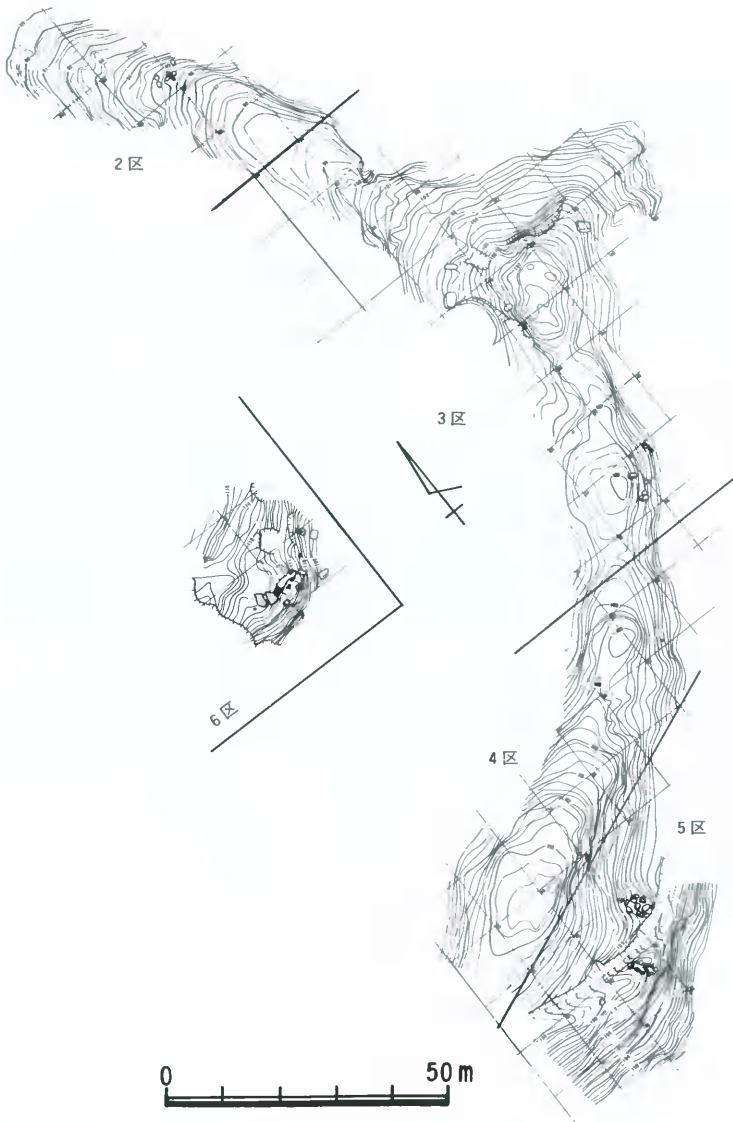
3月20日 実績報告提出

矢部古墳群A



第1図 周辺地形図 (1/2,000)

矢部古墳群A



第2図 発掘前地形測量図 (1/1,000)

## 第2章 発掘調査の概要

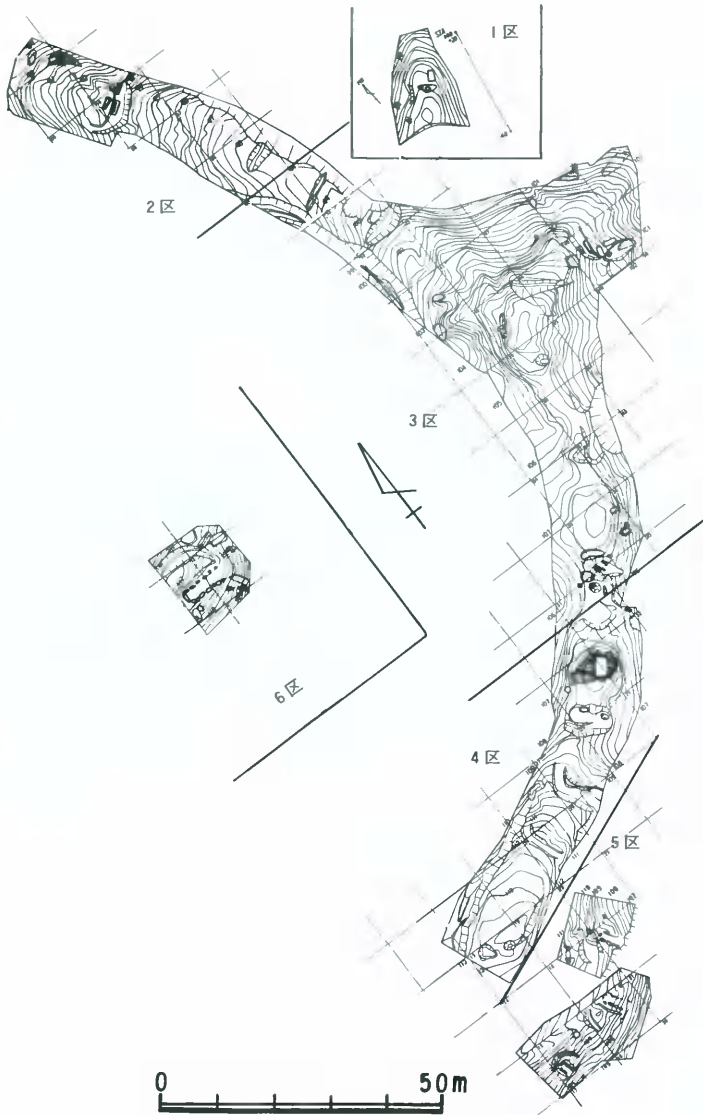
## 第1節 調査区の概要

矢部古墳群Aの全面発掘調査区域は、海拔115m～77mの尾根筋とその南斜面にあり、尾根稜線の南側が倉敷市山地・北側が倉敷市矢部に属しているが、調査および報告書の都合上6区に分割して本調査区の概要を説明する。調査の順序は5区→6区→4区→3区→2区→1区であった。5区・6区の横穴式石室にはほとんど封土がない。尾根上の古墳にも封土がなく、遺構検出上の困難な点は、赤松や雑木の根を取り除くことであった。遺構の密度は比較的薄く、下記の表のように古墳と考えられるものが17基あるが、周溝のみで主体部のないものが8基もある。横穴式石室は4基ある。遺物はコンテナに23箱出土し、38号墳が5箱を占める。

表-A 古墳一覧表

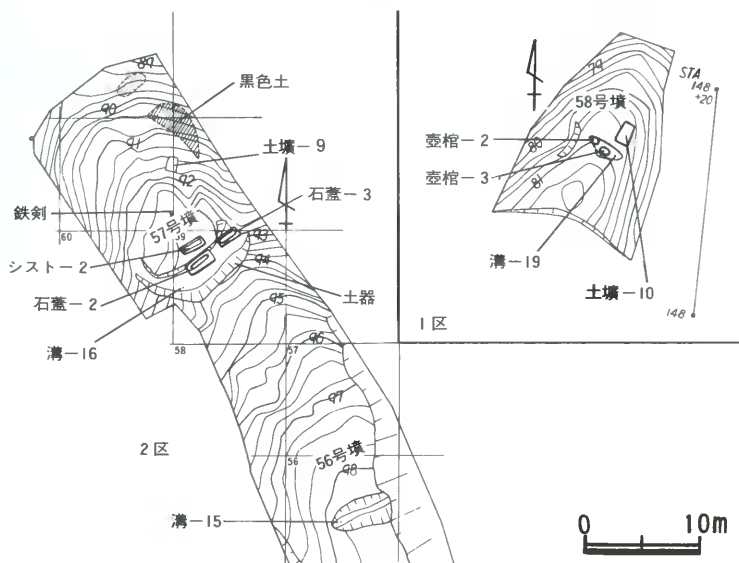
番号	古墳	地区	図	図版	時期	遺構
1	58号墳	1区	4・9～13	1・2	古墳前期	土壇-10・壺棺-2・3溝-19
2	57号墳	2区	4・14～19	3～6	古墳前期	土壇-9・シト-2・石蓋-2・3・溝-19
3	56号墳	2区	4・20		古墳前期	溝-15
4	55号墳	3区	5・21		古墳前期	溝-14
5	54号墳	3区	5・22・23	7	古墳前期	土壇-8・溝-13
6	53号墳	3区	5・24～28	8～10	古墳前期	シト-1・石蓋-1・土壇-6・7・溝-17
7	8号墳	3区	5・29～31		古墳前期	溝-9・10・11
8	39号墳	3区	5・32		古墳前期	溝-8
9	9号墳	3区	5		古墳前期	溝-7
10	10号墳	4区	6・33～39	11	古墳前期	土壇-1・2・3・壺棺-1・溝-5
11	52号墳	4区	6・40		古墳前期	溝-3
12	51号墳	4区	6・41		古墳前期	溝-2
13	11号墳	4区	6・42		古墳前期	溝-1・土壇5
14	38号墳	6区	6・43～50	13・14	7世紀初頭	横穴式石室・周溝
15	37号墳	5区	6・51～56	15	7世紀前半	横穴式石室・周溝
16	36号墳	5区	6・57～62	16	7世紀前半	横穴式石室・周溝
17	45号墳	5区	6・63～66	17・18	7世紀前半	横穴式石室・周溝

矢部古墳群A



第3図 発掘後地形測量図 (1/1,000)

矢部古墳群A



第4図 1・2区全体図 (1/500)

1区 (第3・4図)

1区は本調査区の最北西端にあり、この尾根筋から派生する一段低い尾根筋の頂点に位置する。海拔82m～77mのところであり、トレンチを入れてみたところ、土器細片が出土したため拡張したもので、面積は約150㎡になる。溝1本・土壌1基・壺棺2基の4遺構を検出し、土師器壺・鉢が出土している。これらを全部含めて58号墳と呼んでいる。

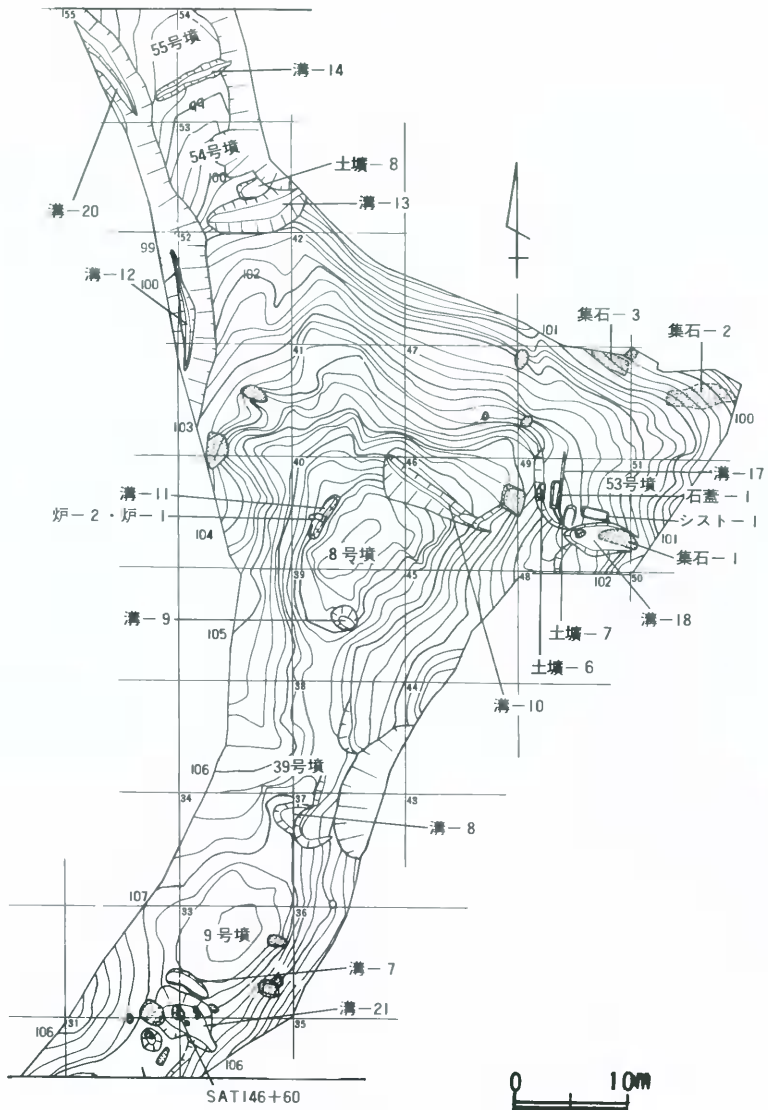
2区 (第3・4図)

2区はこの尾根筋の最北端に当たり、海拔99m～88mのところであり、長さ50m・幅平均13mで面積約650㎡になる。確認調査のときにここでは鉄剣が1本出土していた。検出できた遺構は次の通りである。溝2本・土壌1基・シスター1基・石蓋土壌の6遺構である。溝1本の56号墳とその他の遺構で57号墳を形作っている。出土遺物は先述の鉄剣以外に土師器壺・高杯がある。

3区 (第3・5図)

3区はトの字形を呈する調査区で尾根がここで二股に分れるところである。海拔108m～99mのところであり、長さ92m・幅平均15mで二股部分が広い面積約1,900㎡になる。倉敷市文化財分布図で8号墳と9号墳が記されているところである。検出できた遺構は次の通りで

矢部古墳群A

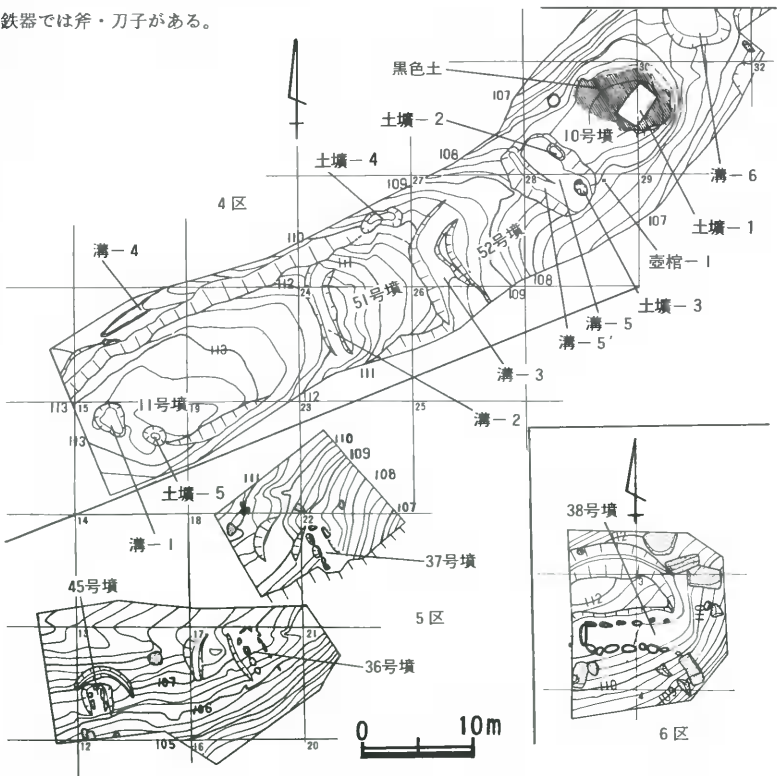


第5図 3区全体図 (1/500)

ある。溝12本・土壌3基・シスト1基・石蓋土壌1基・集石遺構3カ所・炉跡2基の22遺構である。出土遺物は土師器では壺・甕・高杯・鉢・器台・手あぶり・手づくねがあり、鉄器ではのみ状鉄器がある。古墳として認められるのは、55号墳・54号墳・53号墳・8号墳・39号墳・9号墳の6基である。この区の遺構の中には中世以降と考えられるものも2～3ある。

4区(第3・6図)

4区は比較的なだらかでやせた尾根筋にある。海拔113m～108mのところであり、長さ70m・幅平均16mで面積約1,100㎡になる。倉敷市文化財分布図で10号墳が記されているところである。検出できた遺構は次の通りである。溝6本・土壌5基・壺棺1基の12遺構である。古墳として認められるのは、10号墳・52号墳・51号墳・11号墳である。中には中世以降と考えられる遺構も2～3ある。出土遺物は土師器では壺・鉢、鉄器では斧・刀子がある。



第6図 4～6区全体図(1/500)



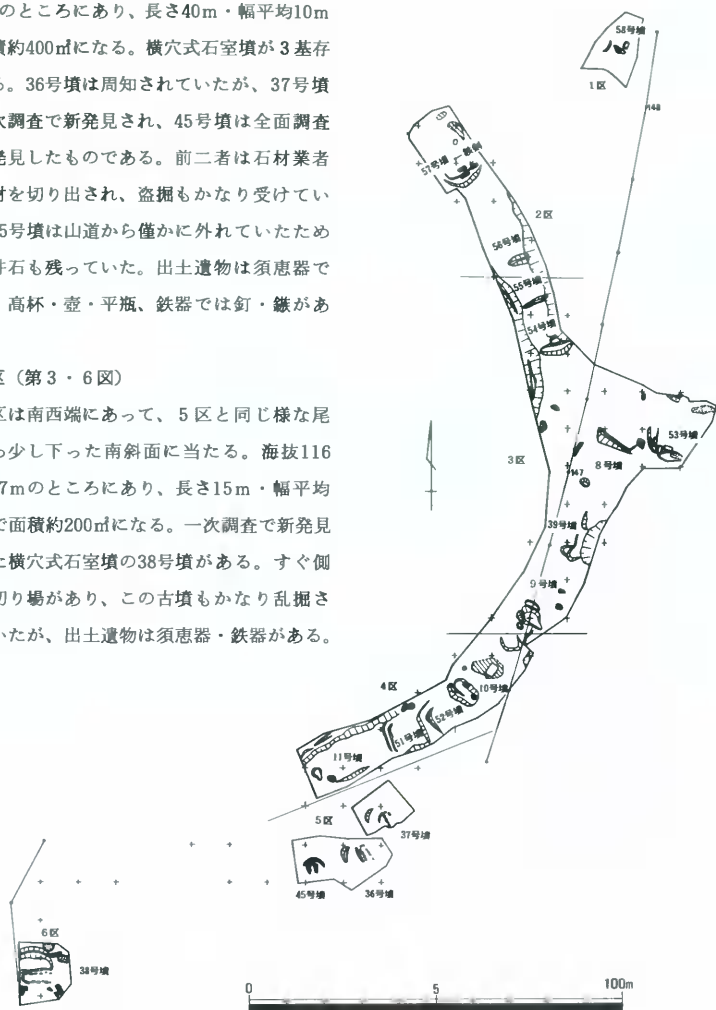
矢部古墳群A

5区 (第3・6図)

5区は4区の南斜面にあって、海拔111m～101mのところであり、長さ40m・幅平均10mで面積約400㎡になる。横穴式石室墳が3基存在する。36号墳は周知されていたが、37号墳は一次調査で新発見され、45号墳は全面調査中新発見したものである。前二者は石材業者に石材を切り出され、盗掘もかなり受けていた。45号墳は山道から僅かに外れていたために天井石も残っていた。出土遺物は須恵器では杯・高杯・壺・平瓶、鉄器では釘・鉄がある。

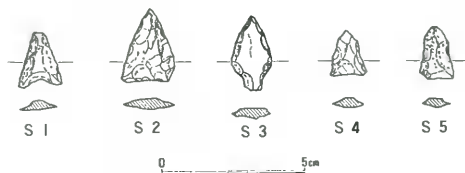
6区 (第3・6図)

6区は南西端にあって、5区と同じ様な尾根から少し下った南斜面に当たる。海拔116m～97mのところであり、長さ15m・幅平均13mで面積約200㎡になる。一次調査で新発見された横穴式石室墳の38号墳がある。すぐ側に石切り場があり、この古墳もかなり乱掘されていたが、出土遺物は須恵器・鉄器がある。



第7図 古墳配置図 (1/1,500)

## 第2節 弥生時代の遺物



第8図 弥生時代の石鏃

表-B 石鏃一覧表

図	番号	遺物	地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量kg	形状	時期
8	S 1	石鏃	5区	45号墳	サヌカイト	20	16	4	6	凹基	弥生中期
8	S 2	石鏃	4区	10号墳	サヌカイト	27	20	5	16	平基	弥生中期
8	S 3	石鏃	4区	10号墳	サヌカイト	27	15	5	13	凸基	弥生中期
8	S 4	石鏃	4区	溝-4	サヌカイト	17	13	4	5	平基	弥生中期
8	S 5	石鏃	6区	38号墳	サヌカイト	19	12	4	7	平基	弥生中期

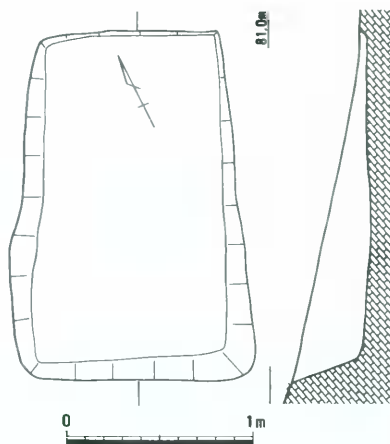
弥生時代と考えられる遺構はまったく検出できなかった。遺物としてはサヌカイト打製の石鏃が5本4～6区から出土している。小動物の狩り場としてこの付近が使用されたのかもしれない。出土した遺構を見ると45号墳・38号墳は古墳時代後期の横穴式石室で後世混入したものであることがはっきりしている。10号墳は古墳時代前期のほとんど封土の失われた古墳で、石鏃はその表面で採集している。もちろん混入である。溝-4は51号墳・52号墳などの北側数m尾根筋を下ったところに検出できた中世と考えられる溝である。この鏃も流れ込んだものと言える。なぜ弥生時代に属するとしたのか。その理由は矢部古墳群Bの弥生時代中期の堅穴住居と掘立柱建物にある。また形状からみても縄文時代には属さ無いように思える。重量を見るとS2とS3は他の3本より2～3倍ある。

### 第3節 古墳時代前半期の遺構・遺物

(1) 58号墳

土壙-10 (第9図・図版1)

1区のはほぼ中央にあって、主軸を北北東から南南西にとる長方形の土壙である。検出面が北に傾斜しているため少し北辺が狭く、また浅い。検出面の海拔高は80.9m、長辺193cm、短辺125~95cm、深さ4~36cmを測る。床面は平坦である。埋積土は褐色砂質土の単一土層で、土器・炭化物・粘土・朱は含まない。遺物がないので時期は不明と思われるが、周辺の状況から58号墳の主体部と考えて良いようである。したがって、この土壙の時期は古墳時代前半期に比定できる。

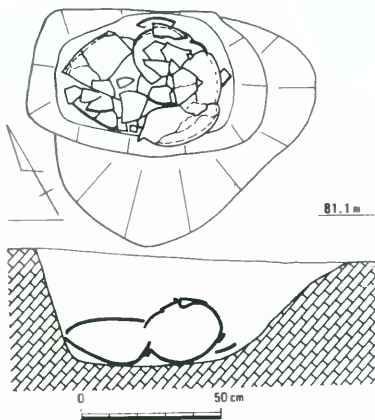


第9図 58号墳土壙-10 (1/30)

壺棺-2 (第11図・図版2)

1区のはほぼ中央にあって、土壙-10の西2m、溝-19の北西端で検出した小土壙である。主軸を北西から南東にとる長楕円形を呈し、北西が一段浅いのは溝-19の残存部と考えられる。したがってこの土壙の大きさは長軸55cm、短軸45cm、深さ32cmを測る。この中に二重口縁の壺の口縁部を意識的に切り取った2の壺を横に寝かせ、1の壺を大破して蓋としてかぶせていた。壺1は口縁の半分が残っていたが、壺2は焼成後の切り取り痕跡が明瞭に認められる。

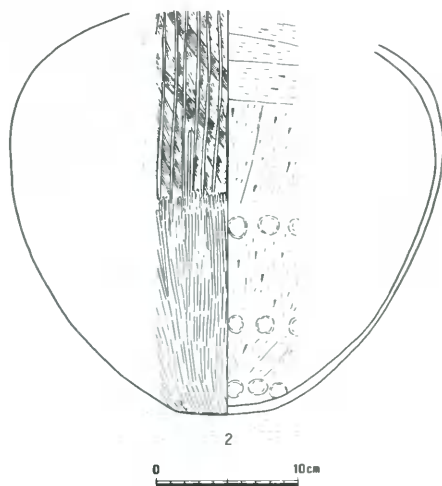
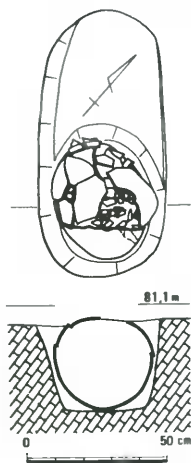
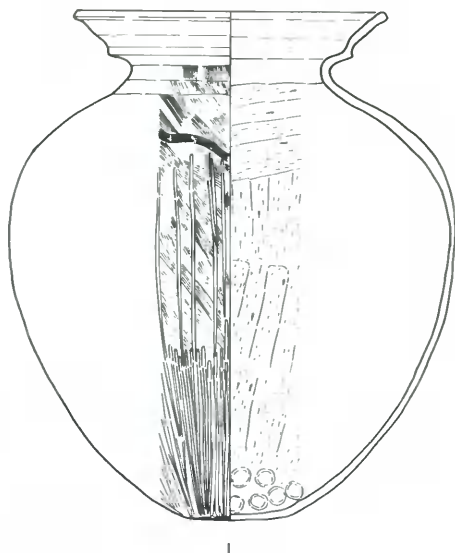
これらの土器からこの壺棺の時期は古墳時代前半期に比定できる。



第10図 58号墳壺棺-3 (1/20)

壺棺-3 (第10図・図版2)

1区のはぼ中央にあって、土壙一10の南西1m、溝一19の中央で検出した小土壙である。主軸を北西から南東にとる不整形な長楕円形を呈し、南と東側に崩れた跡がある。溝一19の底部から掘り込まれ、黄褐色土が埋積し、検出面から15cmで壺の一部が現れた。土壙の大きさは崩れた跡を除いて長軸85cm、幅51cm、深さ43cmを測る。壺が3個と鉢を組み合わせて壺棺としている。3の壺は肩部に切離しの為の摺切り痕跡が沈線として残っている。4の壺は7の壺に入れ子になっていた。7の壺は焼成後埋葬のために肩部から切離され

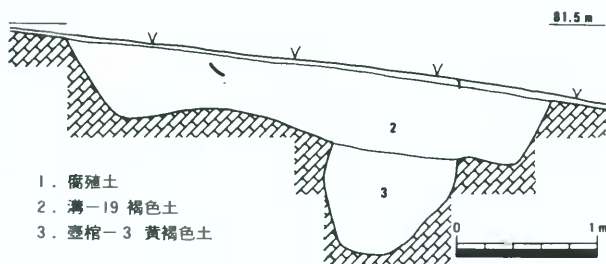


第11図 58号墳壺棺-2 (1/20) ・出土遺物

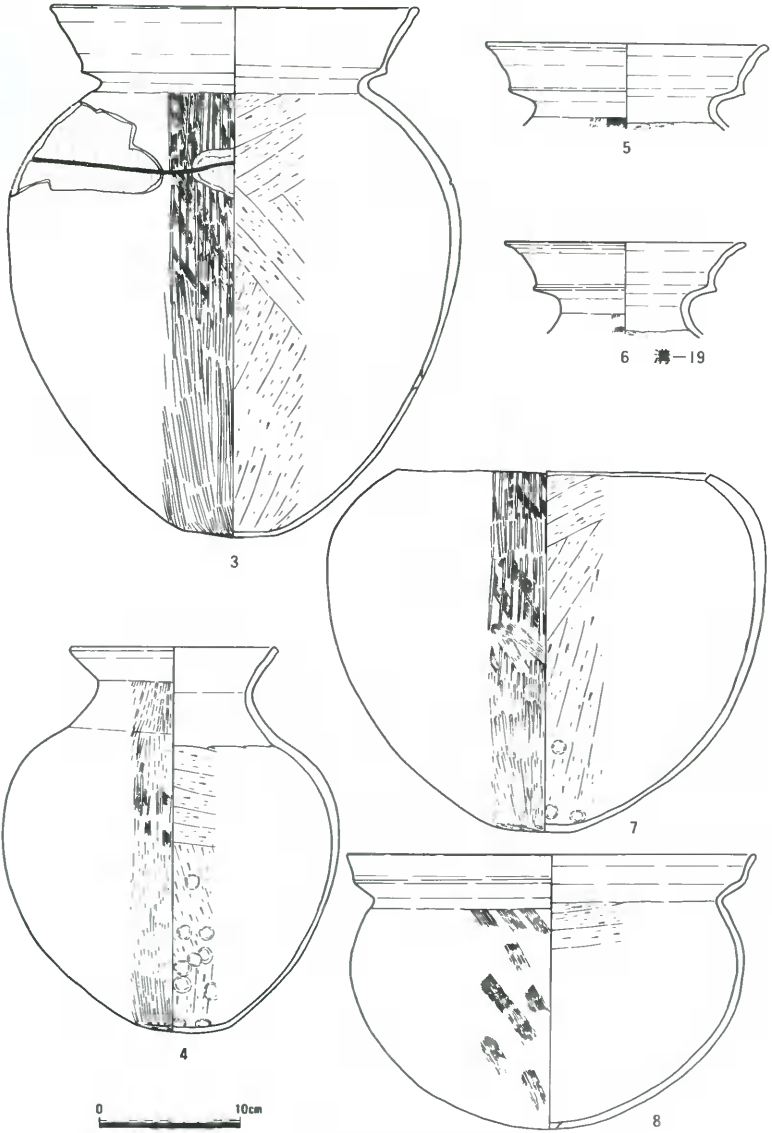
ている。8の鉢は蓋として使用していた。5の壺の口縁部は7とは別個体である。この壺棺の時期は古墳時代前半期に比定できる。

溝一19 (第12・13図)

1区のはぼ中央にあつて、土壌一10の南西1m、壺棺一2・壺棺一3の上層で検出した長さ2mの溝である。主軸を北西から南東にとる不整形な二等辺三角形を呈しているが、尾根筋を直線的に切断して古墳を区画する溝と考えることができる。土層断面図によると、海拔81.4mで検出できる。実際には松の根によってかなり下方で検出したため、溝のような平面形にならなかった。埋積土は褐色土で、若干の土師器を含んでいた。6の壺の口縁部がそれである。5より少し外反の度合いが大きいように思える。この溝の時期は古墳時代前半期に比定できる。



第12図 58号墳溝一19断面図 (1/40)

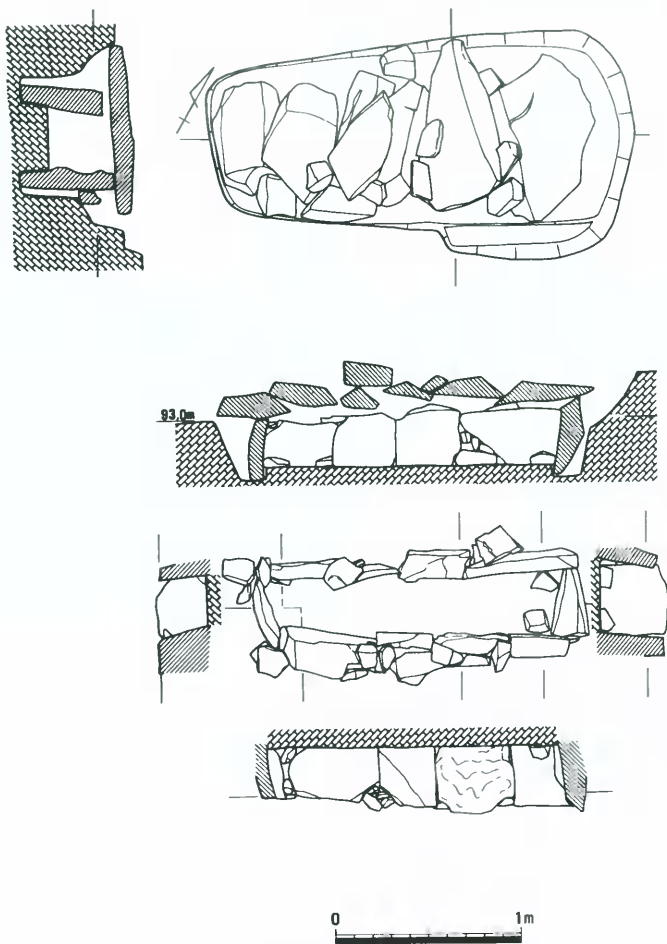


第13図 壺棺-3・溝-19出土遺物

(2) 57号墳

シストー2 (第14図・図版3)

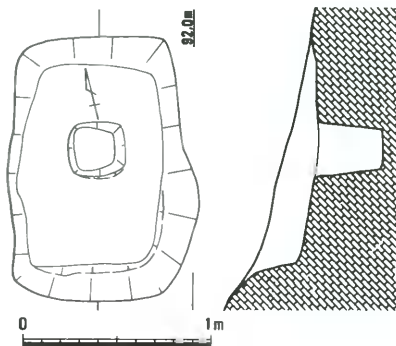
2区の北西で検出した箱式石棺である。検出面の海拔は93.2m、掘り方の平面形はやや丸みをもった長方形で、頭部のほうが足部より幅が広い。石棺ぎりぎりに掘っている。主軸は北東



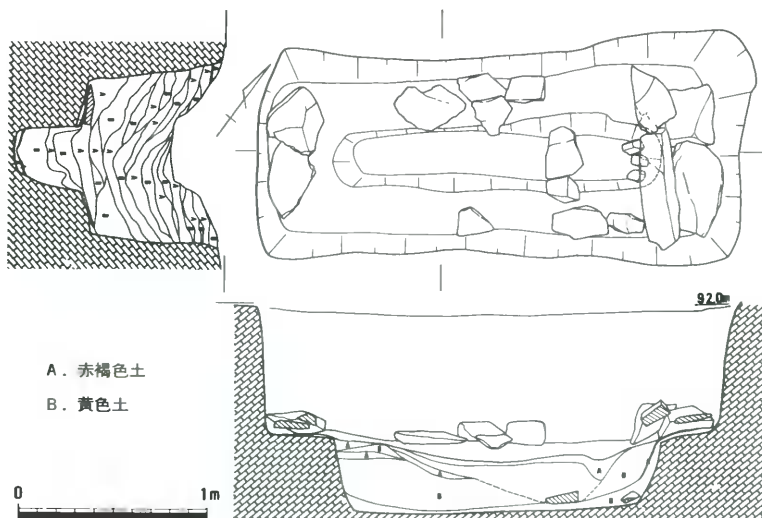
第14図 57号墳シストー2 (1/30)

矢部古墳群A

から南西で、大きさは長さ225cm、幅120cm～70cmを測る。箱式石棺はこの掘り方の底部にまず10cm前後の溝を壁に沿って長方形に掘って、頭部の小口石を据え、それを挟んで左右の側石を4枚ずつ並べ、足部の小口石を閉じるように据えている。棺底には何も敷いていないが、拳大の角礫が2個10cm離れて枕としておかれていた。人骨も副葬品もないし、赤色顔料も認められない。棺の内法は長辺85cm、短辺40cm～26cm、床から天井まで32cm～26cmを測る。蓋石は頭部と足から乗せ腰部に至ったようである。使用している石材はこの山に産出する閃緑岩と流紋岩の板石である。このシストは57号墳の中心主体と考えられる。封土は全く流失し、僅かに北10m離れた斜面に黒色土が見られた。時期は周辺の土器9と鉄剣Fe1から古墳時代前半期か。一次調査で出土した鉄剣Fe1とこのシストとの関係は2m離れているので明らかでないが、棺外供献の可能性もある。



第15図 57号墳土壇-9 (1/30)



第16図 57号墳石蓋土壇-2 (1/30)



土壙-9 (第15図)

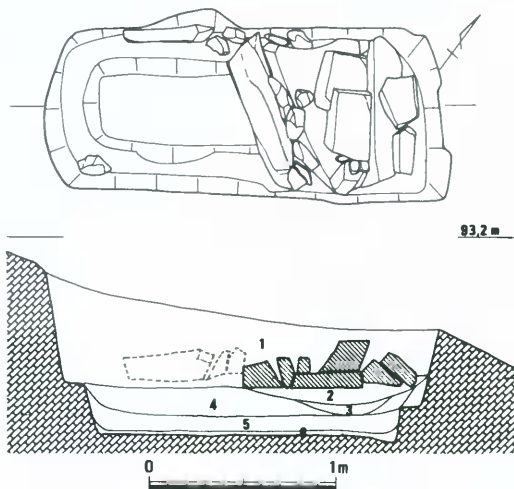
シスト-2の北6mで検出した主軸をほぼ南北にもつ長方形の土壙である。この土壙の特徴は平坦な床面の中央に一辺30cm・深さ32cmの正方形の柱穴状の穴が開いていることである。土壙の大きさは長さ130cm、幅100cm、深さ50cm～5cmを測る。検出面の海拔は91.8mである。埋積土は褐色土で遺物は出土していない。時期・用途不明。

石蓋土壙-2 (第16図・図版4)

シスト-2の南60cmで検出した主軸を北東から南西にもつ長方形の土壙である。シスト-2に平行している。溝-16の床面から掘り込まれ、検出面の海拔は92.0mである。掘り方は長さ253cm、幅124cm～100cm、深さ70cm～65cmを測る一段目と長さ172cm、幅40cm～28cm、深さ35cmを測る長楕円形の二段掘りである。壁はほぼ垂直で、下の土壙の床面は僅かに丸みをもち、北東隅には拳大の角礫が3個U字形に置かれ、枕にされている。上の段には細長い石や平らな石などで木の蓋を押さえたかのように角礫を配置している。埋積土は赤褐色土と黄色土の互層で遺物は出土していない。最下層は灰色粘土で、朱が僅かに認められた。この土壙は57号墳の第2主体と考えられる。時期は古墳時代前半期か。

石蓋土壙-3 (第17図・図版5)

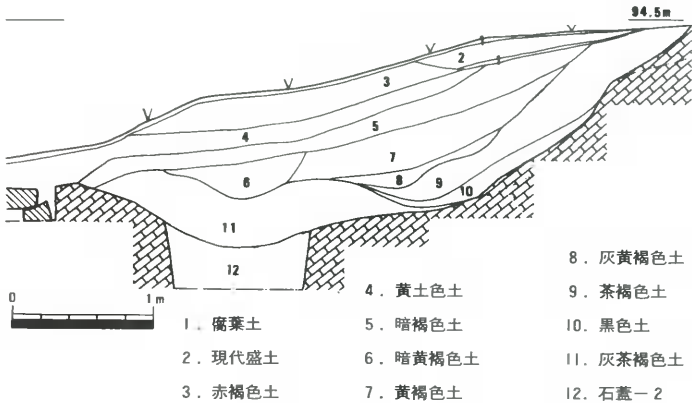
シスト-2の東1mで検出した主軸を北東から南西にもつ長方形の土壙である。シスト-2に平行し、石蓋土壙-2と直列に並ぶ。掘り方は長さ210cm、幅90cm、深さ60cm～40cmを測る。一段目と長さ166cm、幅50cm、深さ25cm～15cmを測る長方形の二段掘りである。床直上と壁下方に厚さ2cmの灰色粘土が堆積し、朱が僅かに認められた。上の段には細長い石や平らな石などで木の蓋を押さえたかのように角礫を配置している。石が北東半分集中していることからこちらが頭部であろう。時期は古墳時代前半期か。



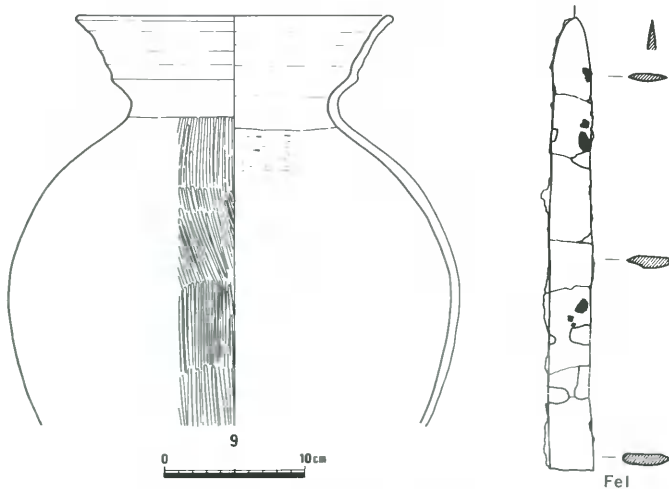
第17図 57号墳石蓋土壙-3 (1/30)

溝-16 (第18・19図)

石蓋土壇-2と3の上層でL字状に検出された溝である。尾根を分断して57号墳を区画する。方墳であったことが辛うじて判明した。土層断面図から石蓋土壇-2に盛り土があり、溝-16は元の幅は250cm、深さ130cmあった。壺9から時期は古墳時代前半期に比定できる。



第18図 57号墳溝-16断面図 (1/40)

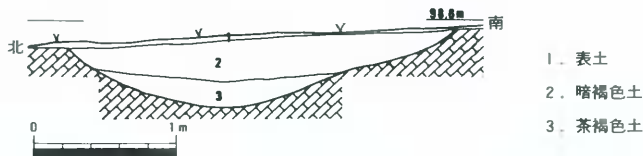


第19図 溝-16出土遺物と鉄剣

(3) 56号墳・55号墳

溝-15 (第20図)

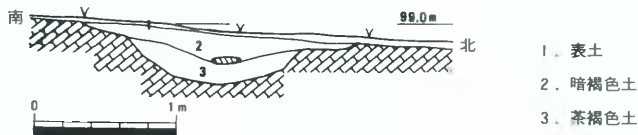
2区の南で検出された溝である。尾根を分断して56号墳を区画する。56号墳は主体部が完全に削平されている。溝は長さ550cm、幅270cm、深さ50cm～0cmを測る。暗褐色土と茶褐色土で埋まり、土器細片が若干出土している。甕・高杯の破片である。



第20図 56号墳溝-15断面図 (1/40)

溝-14 (第21図)

3区の北で検出された溝である。尾根を分断して55号墳を区画する。55号墳も主体部が完全に削平されている。溝は長さ750cm、幅240cm、深さ45cm～0cmを測る。暗褐色土と茶褐色土で埋まり、土器細片が若干出土している。これから時期は古墳時代前半期に比定できる。



第21図 55号墳溝-14断面図 (1/40)

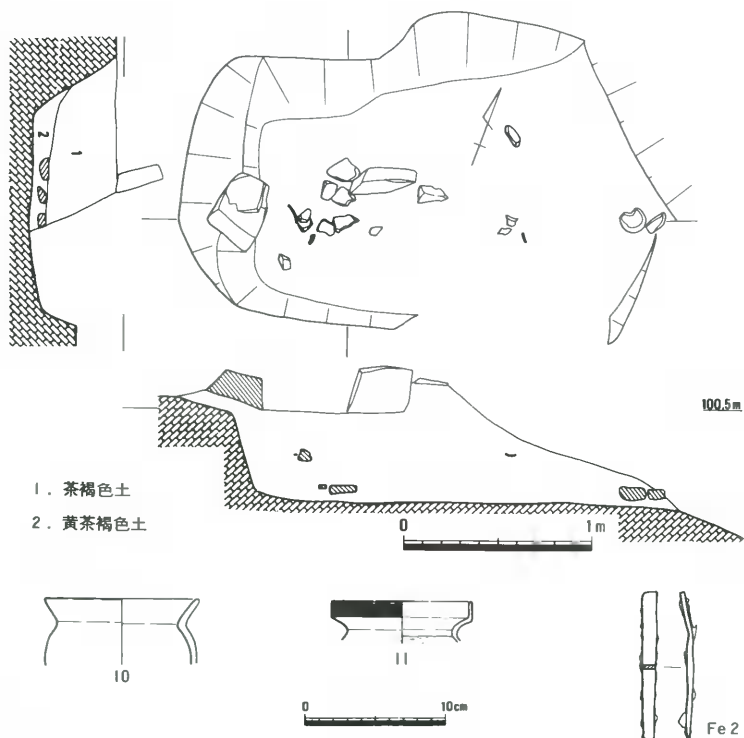
(4) 54号墳

土墳-8 (第22図・図版7)

3区の北で検出された主軸を北北東から南南西にもつ不整形長方形の土墳である。掘り方の大きさは長さ260cm、深さ50cm～0cmを測る。床面は水平で、4cmほど上がった位置に一辺 cm以下の扁平な角礫を数枚敷いている。この石の上面が棺底であろう。棺底から15cm上がった位置で鉄器Fe2が出土した。壺かやりがんなか不明。茶褐色の埋積土から鉢10と甕11が出土した。これから時期は古墳時代前半期に比定できる。なお、土墳上面に立石があるがこれは後世の境界石と考えられる。この土墳が54号墳の主体部になるだろう。頭部と足部の区別は困難だが、敢えて言えば、北北東が幅広だから頭部であろうか。

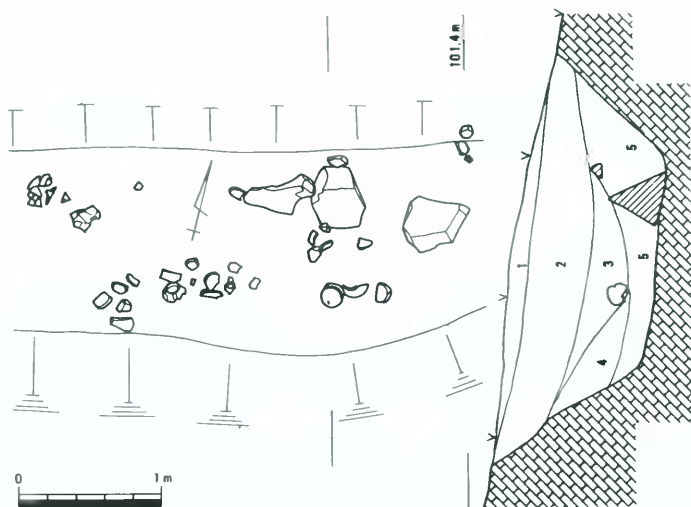
溝-13 (第23図・図版7)

土壇-8のすぐ南で検出された溝である。尾根を南北に分断して54号墳を区画する。溝は長さ900cm、幅400cm×0cm、深さ100cm×0cmを測る。検出面の海拔は101.3m。埋積土は明茶黄褐色土・茶褐色土・黒褐色土・茶黄褐色土であるが、黒褐色土がこの溝の最下層であろう。この土層から図の土師器が出土している。12~14は壺、15は鼓形器台、16・17は高杯、18は手あぶり形土器である。18は完形の土器で底部に焼成後外から打撃を加えて穴を開けている。これらの土器は土壇-8を祭るための供献土器であろう。なお、手あぶり形土器は矢部南向遺跡・西加茂遺跡など近所の集落跡からまとも出土しているが、用途不明の土器である。供献土器として発見されたのは非常に珍しい。鼓形器台は多く山陰地方で出土し供献土器として使用される。これからこの溝の時期は古墳時代前半期に比定できる。



第22図 54号墳土壇-8 (1/30)・出土遺物

矢部古墳群A



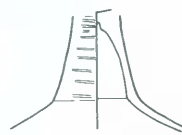
1. 腐葉土                      3. 黒褐色土                      5. 茶黄褐色土  
2. 明茶黄褐色土              4. 茶褐色土



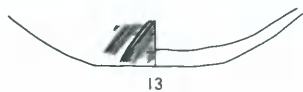
12



16



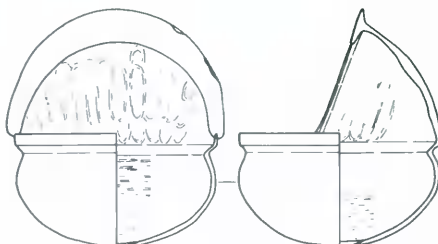
17



13



14



18



15

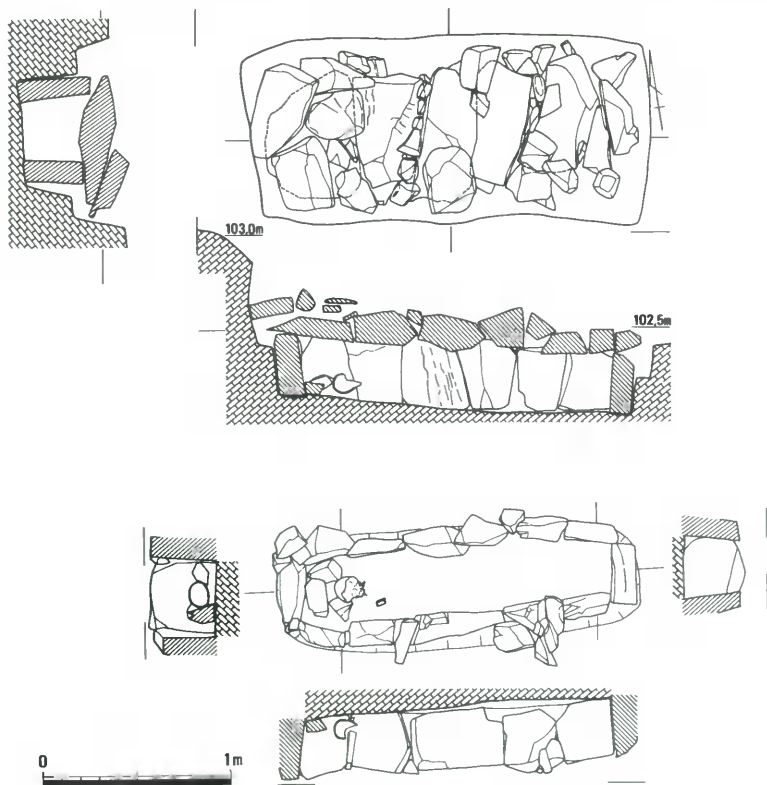


第23図 54号墳溝-13 (1/40) ・出土遺物

(5) 53号墳

シストー1 (第24図・図版8)

3区の東で検出した箱式石棺である。検出面の海拔は103.1m、掘り方の平面形は長方形で、石棺ぎりぎりに掘っている。主軸は西から東で、長さ212cm、幅100cmを測る。二段に掘り下げ下段は側石ぎりぎりに掘っている。箱式石棺はこの掘り方の底部にまず西の小口石を据え、それを挟んで南側石を5枚・北側石を4枚並べ、東の小口石を閉じるように据えている。棺底には何も敷いていないが、西端には拳大の角礫が3個コの字形に枕としておかれていて人の頭骨が上向きに乗っていた。顔面は崩れ若干の臼歯が床に散在していた。この人骨の取り上げ方法の現地指導と性別・年齢の鑑定を当時岡山理科大学教授の池田次郎先生に依頼した。鑑定結果

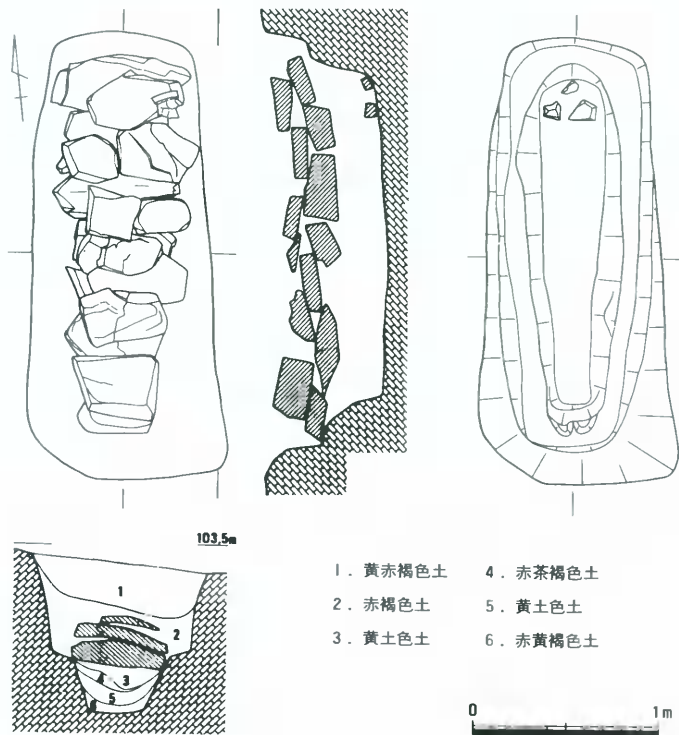


第24図 53号墳シストー1 (1/30)

は後に載せている。石棺の内法は長辺160cm、短辺30cm～25cm、床から天井まで30cmを測る。蓋石は頭部と足部から乗せ腰部に至ったようであり、頭部は二重に覆っている。使用している石材はこの山に産出する閃緑岩の板石である。時代は古墳時代前半期か。

石蓋土壇一（第25図・図版9）

シスト一1の西2mで検出した主軸を南北にもつ不整長方形の土壇である。溝一17の床面から掘り込まれ、検出面の海拔は103.5mである。掘り方は長さ235cm、幅102cm～75cm、深さ50cm～25cmを測る一段目と長さ190cm、幅55cm～30cm、深さ30cmを測る長楕円形の二段掘りである。隅には拳大の角礫が3個三角形に置かれ、枕にされている。上の段には細長い石や平らな石などで全面にしかも二重に蓋している。遺物は出土していない。この土壇は53号墳の第2主体と考えられる。時期は古墳時代前半期か。



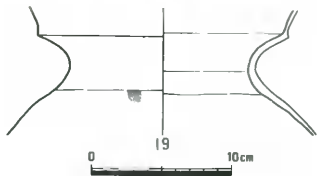
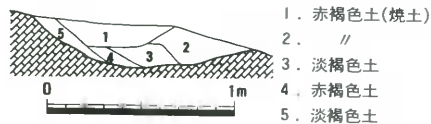
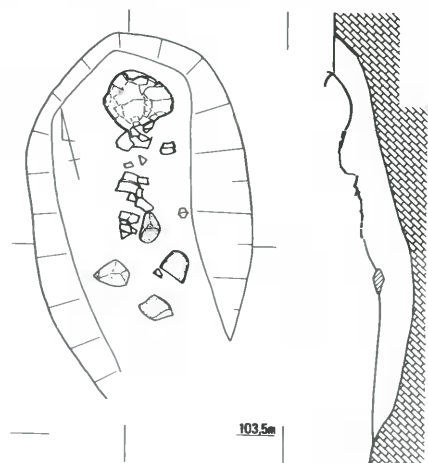
第25図 53号墳石蓋土壇一（1/30）

土壙-7 (第26図・図版9)

シスト-1と石蓋土壙-1の間で検出した主軸をほぼ南東にもつ楕円形の土壙である。この土壙の大きさは長さ215cm、幅115cm、深さ25cm~0cmを測る。検出面の海拔は103.3mである。底部は中央が深い。土師器壺19と焼土が出土しているが、床から10cmも浮いている。時期は古墳時代前半期である。土壙というよりも溝の残りとも考えられる。

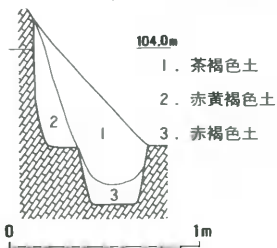
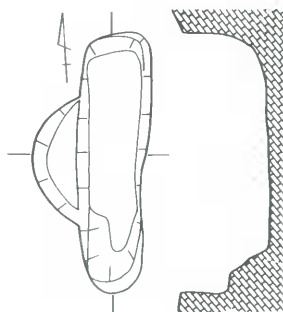
土壙-6 (第27図・図版9)

石蓋土壙-1と平行して60cm西で検出した主軸をほぼ南北にもつ隅丸長方形の土壙である。溝-17の床面から掘り込まれ、検出面の海拔は103.5mである。大きさは長さ136cm、幅35cm~30cm、深さ50cm~30cmを測る。小児用の墓であろう。埋積土は茶褐色土と赤褐色土である。遺物は出土していないが、溝-17の遺物から時期は古墳時代前半期である。



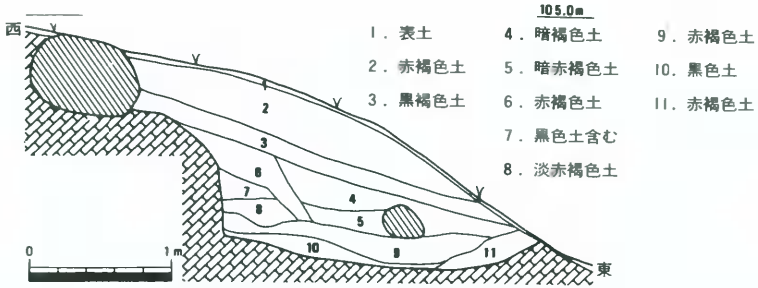
第26図 53号墳土壙-7 (1/30) ・出土遺物

物は出土していないが、溝-17の遺物から時期は古墳時代前半期である。



第27図 53号墳土壙-6 (1/30)

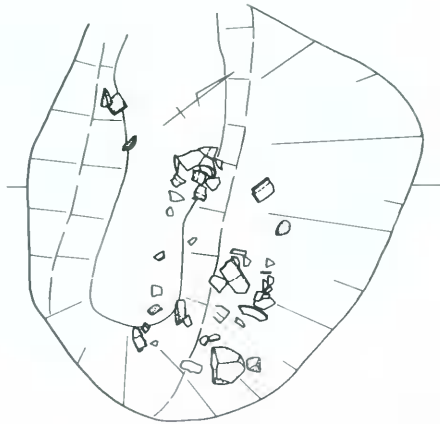




第28図 53号墳溝-17断面図 (1/40)

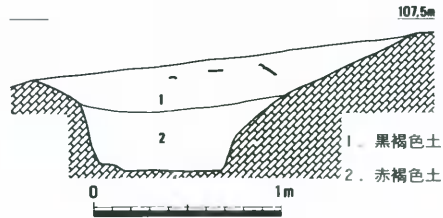
溝-17 (第28図)

石蓋土壇-1と土壇-6の上層で検出されたL字状溝である。尾根を分断して53号墳を区画し方墳であったことが辛うじて判明した。溝は長さ700cm、幅250cm、深さ80cm～0cmを測る。土層断面図から溝-17の埋積土は第4層から第11層までであるが、第10層の黒色土から若干の土師器が出土しているが、実測できるものではない。これらの土器から見てこの溝の時期は古墳時代前半期である。



溝-18 (第5図)

溝-17の続きと考えられる。東西に長く伸びる。長さ650cm、幅300cm～0cm、深さ30cm～0cmを測る。東端には拳大の石と土師器の細片が集中していた。実測できるものはないが、時期は古墳時代前半期である。

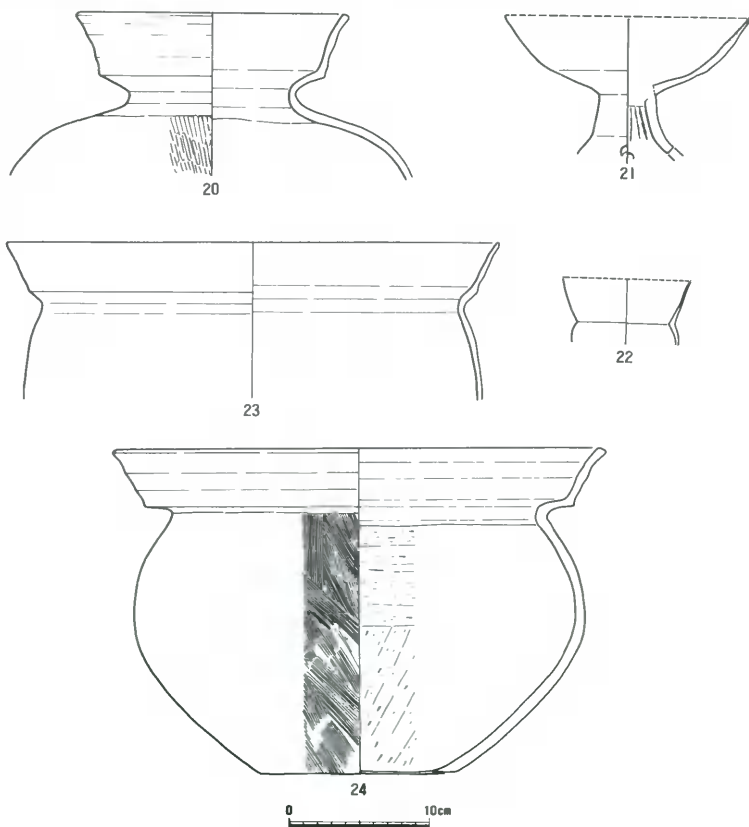


第29図 8号墳溝-9 (1/30)

(6) 8号墳

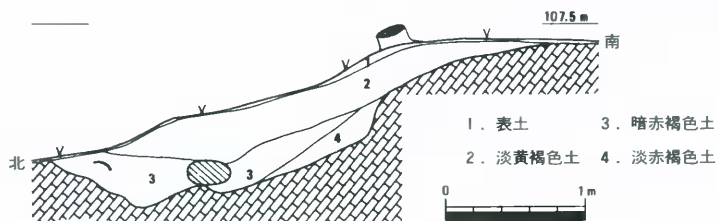
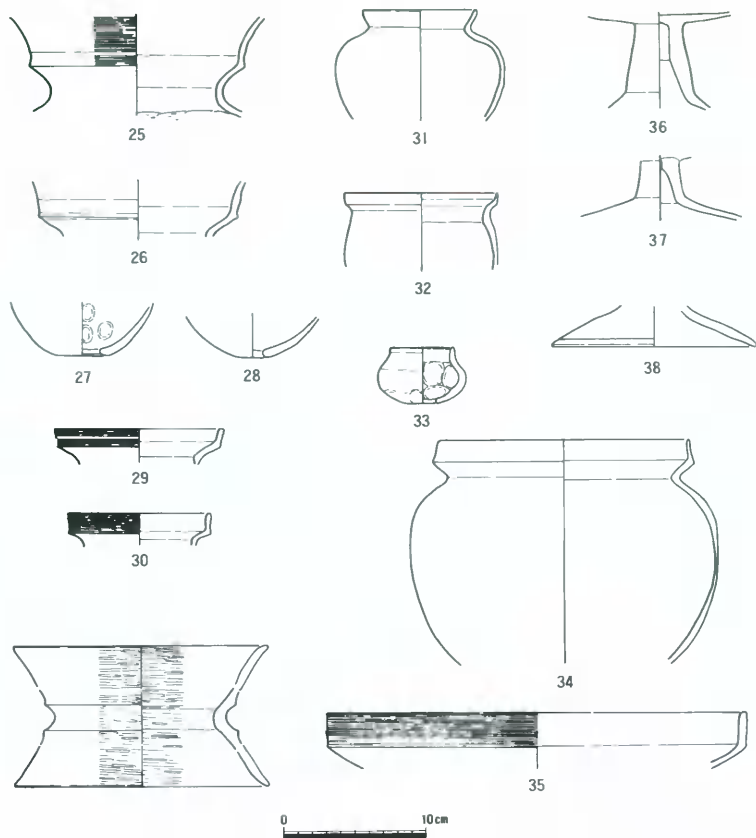
溝一9 (第5・30図)

3区の中央で海拔107.4mで検出された土壇状の溝である。尾根を分断して8号墳を区画する。8号墳は主体部が完全に削平されている。溝は北西から南東に伸び長さ230cm、幅209cm、深さ70cm～0cmを測る。黒褐色土と赤褐色土で埋まり、土師器を若干出土している。20は二重口縁の壺、21は高杯、22は小型埴、23・24は二重口縁の大型鉢である。24はほぼ完形に復元できたが、底部に大きな穴が開けられている。墓前祭に使用されたものと思われる。これらから時期は古墳時代前半期に比定できる。



第30図 溝一9出土遺物

矢部古墳群A



第31图 8号墳溝-10 (1/40)・出土遺物

溝一10 (第31図)

3区の中央で海拔107.4mで検出された溝である。尾根を分断して8号墳を区画する。溝は北西から南東に伸び長さ1150cm、幅450cm、深さ115cm～0cmを測る。溝一9と平行関係にあり、11mの間隔がある。これが8号墳の長軸の長さである。淡黄褐色土・暗赤褐色土・淡赤褐色土で埋まり、かなりまとまって土師器が出土した。25・26は二重口縁の壺、27・28は壺か鉢の底部、29・30は櫛描き文の甕、31・32・34は鉢、33は小型手づくねの鉢、35は大型の甕の口縁か。36～38は高杯、39は鼓形器台である。27・28・33は底部に穴が開けられている。墓前祭に使用されたものと思われる。これらから時期は古墳時代前半期に比定できる。

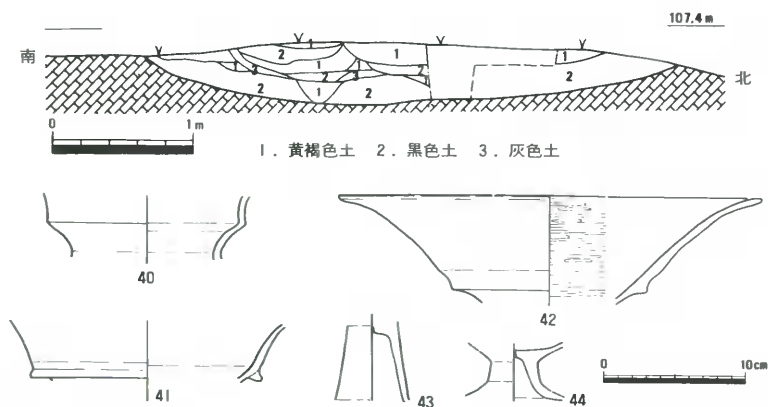
溝一11 (第5図)

3区の中央で海拔107.4mで検出された溝である。尾根を分断して8号墳を区画する。溝は北東から南西に伸び長さ450cm、幅100cm、深さ40cm～0cmを測る。出土遺物なし。

(7) 39号墳・9号墳

溝一8 (第32図)

3区の南部で検出された主軸を西北西から東南東にもつ不整形な溝である。検出面の海拔は107.2m。大きさは長さ500cm、幅370cm、深さ45cm～0cmを測る。尾根を分断して39号墳を区画する。39号墳の主体部は完全に削平されている。埋積土は黄褐色土・黒色土・灰色土である。土師器が少量出土している。40は二重口縁の壺、41も二重口縁の壺で凸帯が屈曲部に張りつけられている。42は大型鼓形器台と考えられる。43・44は高杯で、長脚のものと短脚のものがある。これから時期は古墳時代前半期に比定できる。



第32図 39号墳溝一8 (1/40) ・出土遺物

矢部古墳群A

溝一7 (第5図)

3区の南端で検出された溝である。尾根を分断して9号墳を区画する。溝は長さ400cm、幅120cm、深さ20cm～0cmを測る。検出面の海拔は109.0m。9号墳は主体部が削平されている。埋積土から土師器が出土している。甕・高杯の破片である。これから溝の時期は古墳時代前半期に比定できる。

溝一21 (第5図)

溝一7の南に接して検出された溝である。長さ700cm、幅400cm、深さ30cm～0cmを測る。検出面の海拔は108.0m。埋積土は明茶黄褐色土である。この層から土師器が出土している。これからこの溝の時期は古墳時代前半期に比定できる。

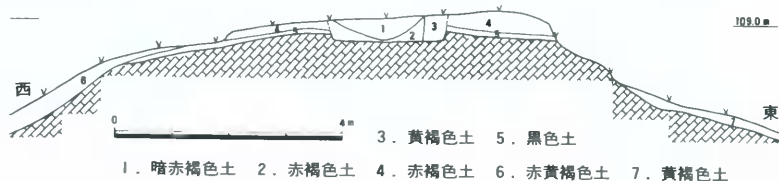
(8) 10号墳

墳丘 (33図)

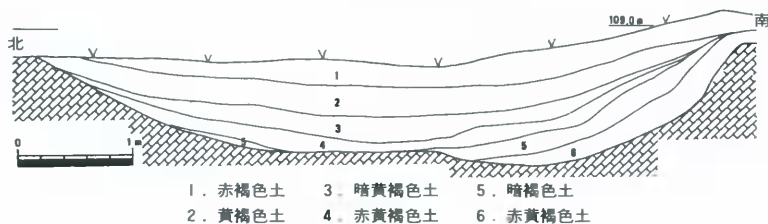
4区の東端で検出された10号墳はこの古墳群Aの尾根上にある前半期古墳の中で唯一墳丘が残っているものである。後世の削平が顕著で、残存率は低い。地山の上に5cmの厚さで旧地表と考えられる黒色土が第6図のように東西8m・南北5mの範囲に見られ、その上層には第33図のように盛り土の赤褐色土が中央部分に厚さ40cmも乗っている。

溝一5・5' (第34図)

10号墳を尾根を分断して区画する溝である。海拔108.9mで検出された。溝一5は北西から南東に伸び長さ750cm、幅500cm、深さ64cmを測る。溝一5'は長さ850cm、幅210cm、深さ90cm



第33図 10号墳墳丘断面図 (1/100)



第34図 10号墳溝一5・5' 断面図 (1/40)

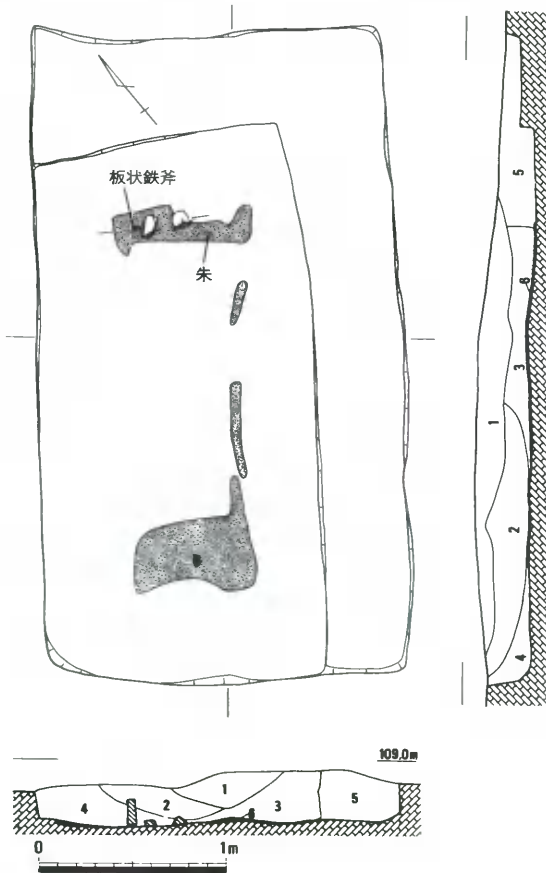
を測る。土師器が若干出土しているほかには上層で48の須恵器高杯と鉄器Fe4 刀子が出土している。これらから時期は古墳時代前半期から後半期まで存続したものと考えられる。

土壇一1 (第35図・図版10)

10号墳の中央で検出した第一主体部である。主軸は北東から南西に向き、盛り土した後に長方形に掘り込まれている。掘り方の大きさは長さ344cm、幅195cm、深さ25cmを測る。床面には薄く朱の散布が見られ、その範囲が木棺の大きさがある程度示しているようである。その範囲

はほぼ掘り方の中央にあり、長さ205cm、幅74cmを測り、長方形を呈する。北東端には拳大の角礫が2個約8cm離れてハの字形に置かれ、枕とされ、この石にも朱が薄くかかっていた。枕の西には板状鉄斧Fe3が1本刃部を下にして立てた状態で出土した。他には副葬品はなかった。板状鉄斧の出土例は県下でも数少ない。

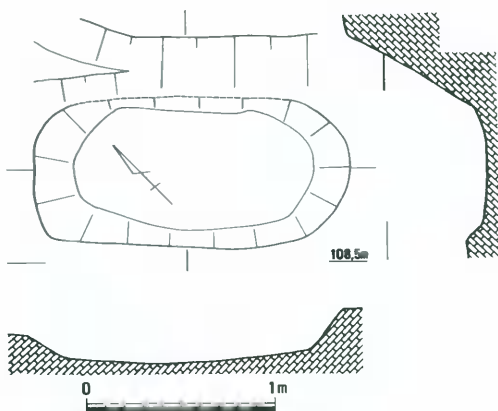
1. 暗赤褐色土
2. 黄赤褐色土
3. 赤褐色土
4. 暗黄赤褐色土
5. 黄褐色土
6. 朱の散布



第35図 10号墳土壇一1 (1/30)

土壇-2 (第36図)

10号墳の南西裾部・溝-5の北東底部の海拔108.3mで検出された土壇である。主軸が北西から南東で、小判形を呈し、長さ165cm、幅80cm、深さ30cmを測る。遺物の出土はない。溝-5と同時期の古墳時代前半期に比定できる。

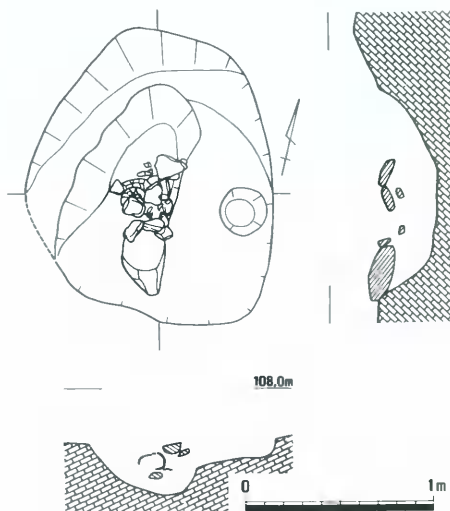


第36図 10号墳土壇-2 (1/30)

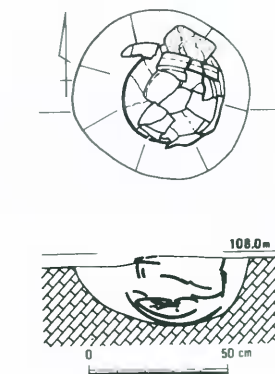
土壇-3 (第37図)

10号墳の南南西裾部・溝-5の南東底部の海拔107.9

mで検出された土壇である。主軸はほぼ南北で、不整形な楕円形を呈し、長さ150cm、幅130cm、深さ35cmを測る。東底部に直径24cm、深さ10cmの柱穴がある。土壇底部は中央が一段下がり、そこに角礫と土器がまぎらって出土した。47の壺は復元してほぼ完形になったが、大きく歪み、しかも底部穿孔されている。時期は古墳時代前半期に比定できる。



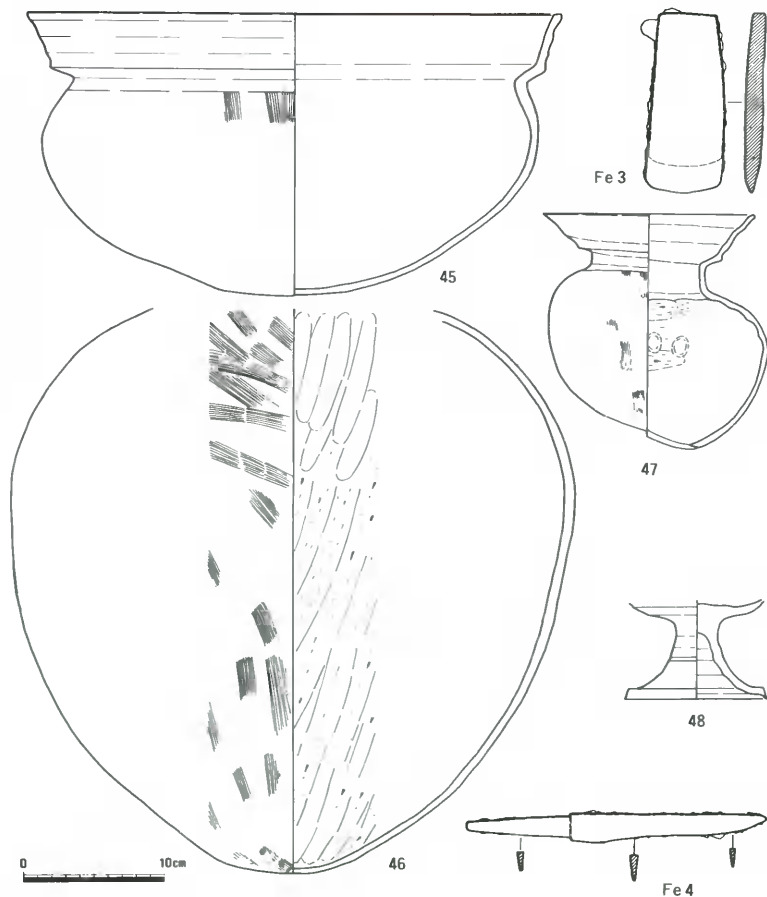
第37図 10号墳土壇-3 (1/30)



第38図 10号墳壺棺-1 (1/20)

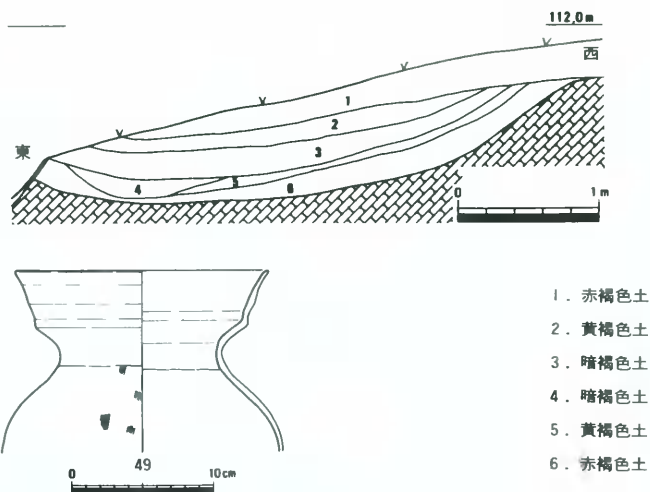
壺棺—1 (第38図)

土城—3の東15mで検出された壺棺である。掘り形は円形を呈し、大きさは直径90cm、深さ35cmを測る。土師器は壺と大型鉢の2個で組み合わせていたが、土圧で潰れていたため初めは壺棺になるとは予想されなかった。掘り形も非常に検出しがたい難解な土質であった。45は蓋にされていた大型鉢で二重口縁を呈する。46は壺の体部で、口頸部を意識的に打ち欠いている。時期は古墳時代前半期に比定できる。



第39図 10号墳出土遺物





第40図 52号墳溝-3 (1/40)・出土遺物

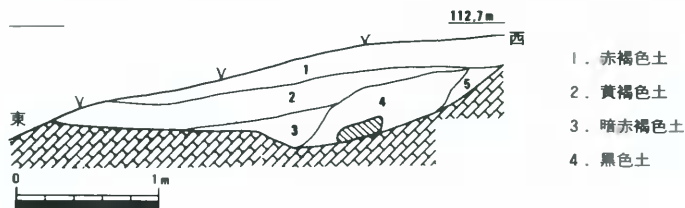
(9) 52号墳・51号墳・11号墳

溝-3 (第40図)

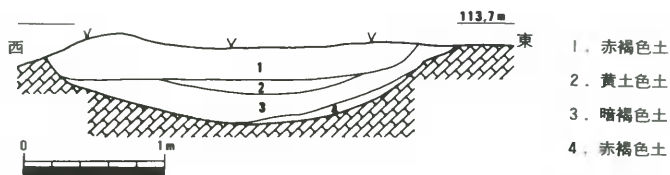
4区の中央部にて溝-5'から9m離れて海拔111.6mで検出された溝である。倒L字形を呈し、尾根を分断して52号墳を区画する。52号墳は一辺9mの方墳であった事がわかる。溝の長さ1100cm、幅400cm、深さ90cmを測る。49の二重口縁の壺が出土し、古墳時代前半期に比定できる。

溝-2 (第41図)

溝-3から8m離れて海拔112.4mで検出された溝である。倒L字形を呈し、尾根を分断して51号墳を区画する。51号墳は一辺8mの方墳であった事がわかる。溝の長さ900cm、幅200cm、深さ60cmを測る。二重口縁の土師器細片から時期は古墳時代前半期に比定できる。



第41図 51号墳溝-2断面図 (1/40)



第42図 11号墳溝一1断面図 (1/40)

溝一1 (第42図)

4区の西端にて海拔113.6mで検出された溝である。倒卵形を呈し、尾根を分断して11号墳を区画する。溝の長さ320cm、幅280cm、深さ50cmを測る。土器器細片から時期は古墳時代前半期に比定できる。

土壌一5 (第6図)

溝一1の南東1.5m離れて海拔115.0mで検出された土壌である。楕円形を呈し、主軸は西北西から東南東を向き、長さ200cm、幅150cm、深さ30cmを測る。遺物はないが、時期は古墳時代前半期か。

## 第4節 古墳時代後半期の遺構・遺物

### (1) 38号墳 (図版12・13)

#### 墳丘 (第43図)

6区で検出された38号墳は尾根上にはなく、尾根稜線から5mほど下った南向きの斜面に作られている。斜面の高い方を削り、平坦にした後、石室建設部分を掘りくぼめている。発掘調査前の地形は、海拔113mの等高線から石室の天井石の下端の海拔111mまでは8mで見た目にはほとんど平坦であった。石室の天井石については奥壁の上に乗っている石は長さ3m・幅15m・厚さ0.5m・重さ約4tもあって、原位置にあったが、完全に土が付いてなくむき出しであった。その前方の天井石は側石が少し崩れた関係で原位置から少しずれていたが、これもほとんどむき出しの状態であった。この石の大きさは長さ3m・幅2m・厚さ6m・重さ約5tもあった。第3の天井石は石室の中に片方が落下していた。この石の大きさは長さ3m・幅1.5m・厚さ0.4m・重さ約3tもあった。いずれも閃緑岩であり、この山産出岩である。この石室から5mのところには戦前の石切り場があり、この石室の石も石材として持ち出されている。墳丘断面図を見ると、地山を整形した後、石室を築造し、側石一段毎に盛り土し、天井石が隠れるまで盛り土していたことが分かる。周溝底から少なくとも高さ2.5m以上の墳丘が復元可能である。

#### 周溝 (第44図)

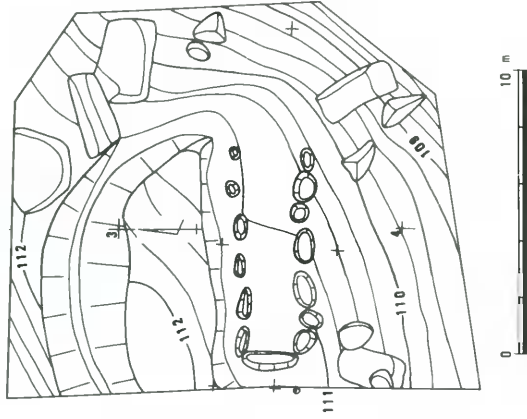
周溝底の中心から石室の中心までの距離は7mを測る。周溝は石室の北側から東北にかけて半円形に検出できた。西北から西にも残っていると推定できるが、用地外であるため調査できない。南側は急斜面であるから周溝は必要ないであろう。地山の面で検出したため周溝の幅は正確でないが約3mもある。検出面からの深さは30cmしかない。周溝の最下層の埋積土は褐色土、その上層は黒褐色土である。この範囲での周溝の埋積土中からは遺物は出土していない。この周溝の東端は石室の東端と一致する。

#### 横穴式石室 (第45～47図)

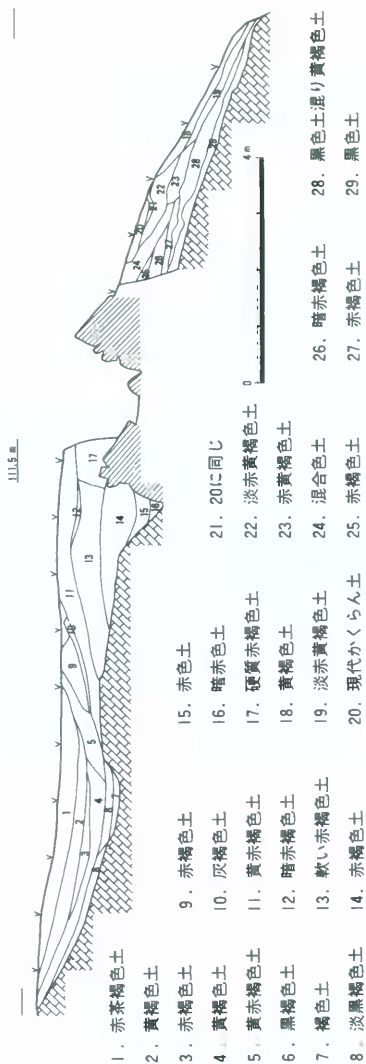
石室の長軸はほぼ東西に向き、出入り口は東にある。すなわち東に開口する。天井石は前述したように3枚残っていた。奥壁は天井石より少し小振りだが一枚石を使っている。その高さ200cm、幅160cm、厚さ36cmを測る。重さは約2tはあるだろう。奥壁の高さと幅がこの石室の大きさを示している。矢部古墳群Aの4基の石室中一番大きい。周辺100m以内に所在する石室中でも一番大きい。奥壁から東開口部までの長さ、すなわち石室全長は880cmを測る。奥壁から東460cmのところ側石の出っ張りが左右にある。ここまでが玄室と考えられる。側石の出っ張りは南のものが20cm、北のものが10cmしかない。羨道になる部分の幅は150cm～140cmと



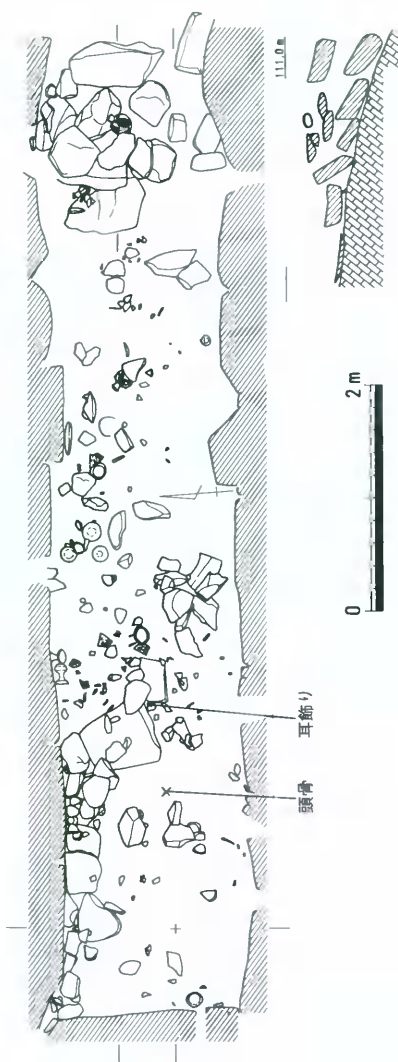
第43図 38号墳発掘前地形図 (1/200)



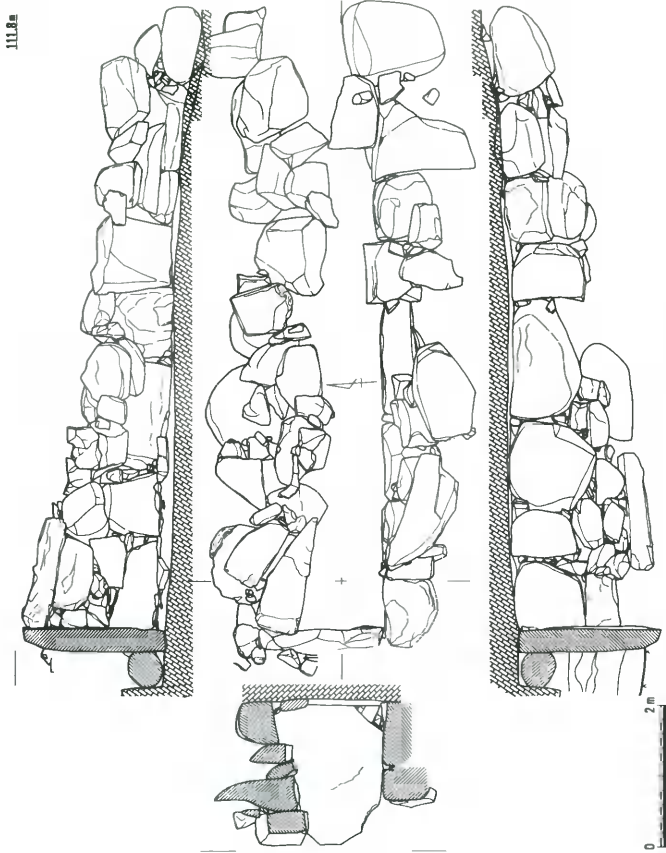
第44図 38号墳発掘後地形図 (1/200)



第45図 38号墳丘陵断面図 (1/100)



第46図 38号墳石室内遺物出土状態 (1/50)



第47図 38号墳横穴式石室 (1/80)

少し狭くなっている。側石の積み方は出っ張りの玄門を意識した2個の石が縦積みしている以外に一段目は全部広口を使って横積みしている。二段目は横口を使って平積みし、崩れているが少し内側にずらす持ち送りの技法を採用しているようである。崩れの状態は両側石ともに南側にずり、一部は石室内や南斜面に落下している。側石に使用している岩石はすべて閃緑岩で大きさは奥のほうが大きく、一段目が大きく、開口部に行くほど小さく、二段目・三段目になるほど小さくなっている。北側石の一段目の奥から3番目の石は幅140cm・高さ130cm・奥行き140cmもある。北側石の四段目の奥から1番目の石は幅160cm・高さ30cm・奥行き60cmである。南側石の一段目の奥から4番目の石は幅170cm・高さ90cm・奥行き50cmである。南側石の二段目の奥から6番目の石は幅90cm・高さ30cm・奥行き70cmである。大きな石の間隙は拳大の角礫2～3個使用して詰め物にしている。

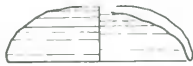
遺物出土状態（第46図）

石室内部はかなり荒らされていて、南半分は土器の細片が少量と鉄釘が数本散在していた。北半分は側石が閉鎖後間もなく崩れたために棺台に使用していた板石や完形の土器や耳飾りや頭骨も出土している。

出土遺物（第48～50図）

50～57は須恵器の杯蓋である。51～55は完形品である。口径は12.5cm～14.0cmを測る。器高は3.5cm～4.5cmを測る。天井部は1/2をヘラケズリし、体部との境は凹線になっている。口縁部はやや外に広がる。口唇端部はやや尖る。58・59は少し小振りの須恵器の杯蓋で、完形品である。天井部はヘラオコシする。60はさらに小振りの須恵器の杯蓋で、3/5の破片である。61～71は須恵器の杯身である。61～65は完形品である。口径は12.0cm～13.0cmを、器高は3.7cm～5.0cmを測る。底部は1/2をヘラケズリし、受け部よりも長い立ち上がり部はかなり内傾する。72・73は須恵器の有蓋高杯である。73は完形品で口径は12.3cm、器高は10.7cmを測る。杯部の形は63と同じで、内屈折したハの字脚が付く。脚端は内側に肥厚する。74～77は須恵器の無蓋高杯である。74～76は完形品で、口径は14.6cm～14.0cmを、器高は10.5cm～9.5cmを測る。内湾する杯部と外反するハの字脚でできている。74の脚には4個の円孔がある。78は須恵器の長頸壺で、完形品である。焼成が悪く、白色を呈している。口径は9.0cm、器高は16.1cmを測る。79は須恵器の壺で、口縁の一部が欠ける。胴部に1個の円孔と2本の沈線をもつ。80・81は須恵器の甕瓶で、2個とも完形品かそれに近い。口径は6.6cm～6.0cmを、器高は20.3cm～20.1cmを測る。偏平な胴部の肩に一对鉤形の耳が付く。82は須恵器の平瓶で、口唇部を欠く。偏平な胴部の片隅に口が付く。83は須恵器の甕の口縁部である。体部破片もかなりの量出土しているが復元できなかった。Fe5は前底部に掻き出されていた袋状鉄斧。Fe6～9は鉄釘で、細片も含めると11本ある。Fe10～12は鉄鏃。Fe13は鉄刀子。Fe14は鉄曲刃器とも言

矢部古墳群A



50



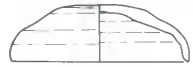
51



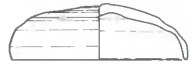
52



53



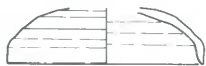
54



55



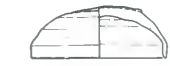
56



57



58



59



60



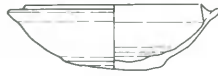
61



62



63



64



65



66



67



68



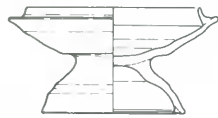
69



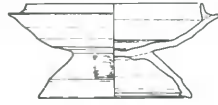
70



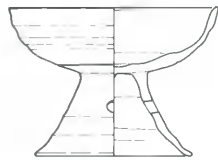
71



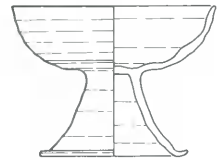
72



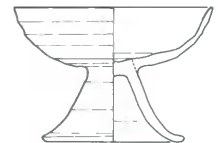
73



74



75



76



77

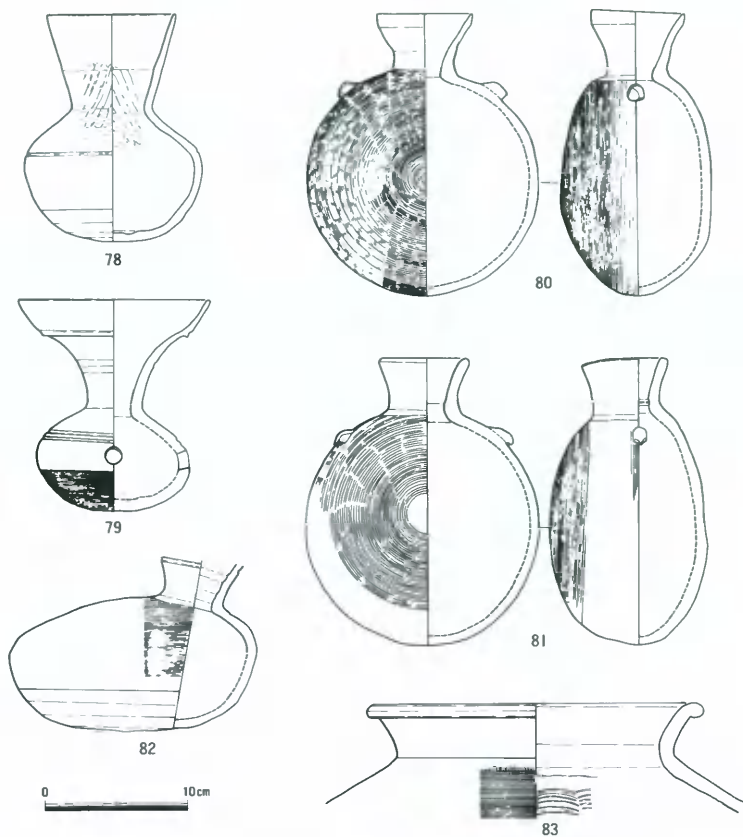


第48図 38号墳出土遺物(1)



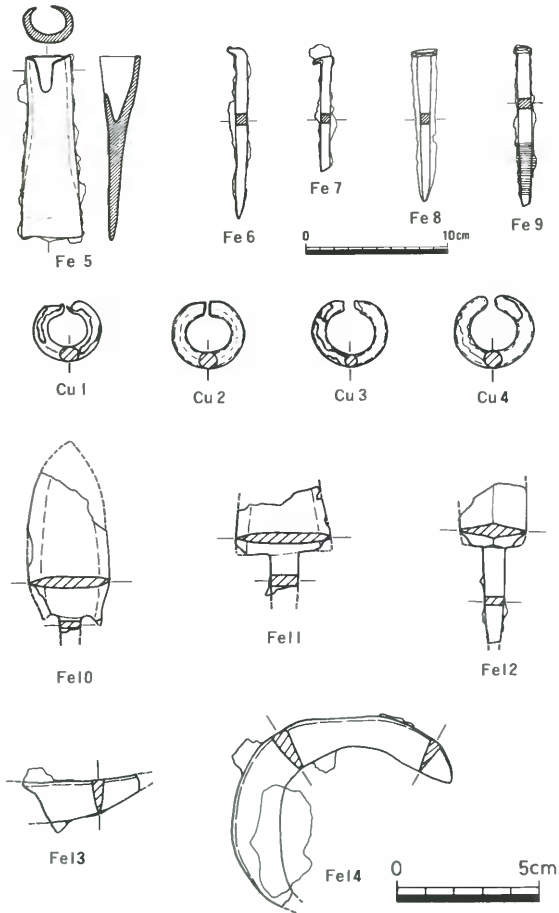
矢部古墳群A

うものか。Cu1～4は銅地銀張りの耳飾りで、Cu1の残りが一番よい。この他出土した遺物には鉄滓・窯壁・人骨がある。



第49図 38号墳出土遺物(2)

矢部古墳群A



第50図 38号墳出土遺物(3)

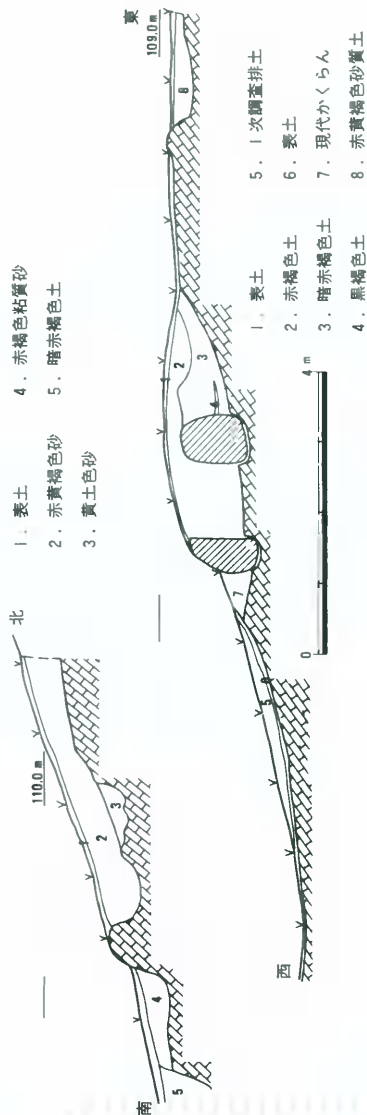
(2) 37号墳 (図版14)

墳丘 (第51図)

5区で検出された37号墳は尾根上にはなく、尾根稜線から5mほど下った南向きの斜面に作られている。斜面の高いほうを削り掘りくぼめ、ひくい南側を埋め立て平坦にした後、石室を築造している。発掘調査前の地形は、海拔110mから107mまでは9mで見た目にはやや緩斜面で、風化して角の丸くなった自然石が2〜3個集まっている状態であった。したがって、墳丘についてはほぼ完全に削平されている。確認調査で側石の列が見えるまで数十cm周辺を掘り下げるまで石室と確認出来なかった程である。断面図を見ると、側石の外に暗赤褐色土が埋めてある。この層以外に盛り土と考えられる土はない。

周溝 (第53図)

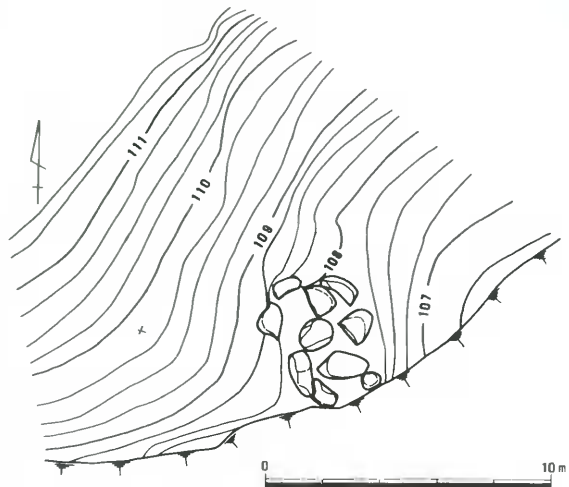
周溝底の中心から石室の中心までの距離は6mを測る。周溝は石室の西北側で三日月形に検出できた。他には全く残っていないかった。南側は後世の山道で石室も一緒に削り取られている。検出面での周溝の長さ3.5m・幅約2mを測る。検出面からの深さは30cmを測る。周溝の最下層の埋積土は赤褐色土である。この範囲での周溝の埋積土中からは遺物は出土していない。



第51図 37号墳墳丘断面図 (1/80)

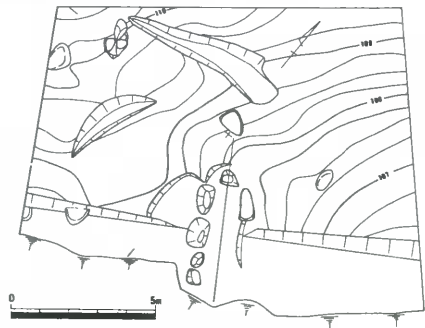
横穴式石室（第54図）

石室の長軸は北北西から南南東を指し、南南東に開口する。天井石は既に取り去られていた。奥壁は一枚石を使っている。しかしこれも上半部を切り取られている。その残存の高さ40cm、幅100cm、厚さ50cmを測る。重さは約300kgあるだろう。石室全長は440cm、幅100cmを測る。床の平面形を見ると中央が僅か10



第52図 37号墳発掘前地形図（1/200）

cm膨らんでいる。側石には風化して角の丸くなった自然石を半砕し、その平らな面を内面として使用している。側石残りのよい部分では二段残っていた。その高さは130cmある。石室の天井までの高さは130cm以上あった事が分かる。側石の積み方は全部広口を使って横積みしている。東側石の二段目は石室の内外に崩れ落ちている。また南端の両側石は南へずり落ちつつある。岩石はすべて閃緑岩で、大きさはほぼ同じ大きさである。東側石の一段目の奥から1番目の石は幅130cm・高さ75cm・奥行き85cmもある。西側石の二段目の奥から1番目の石は幅125cm・高さ70cm・奥行き110cmある。大きな石の隙間は拳大の角礫2～3個使用して詰め物にしている。

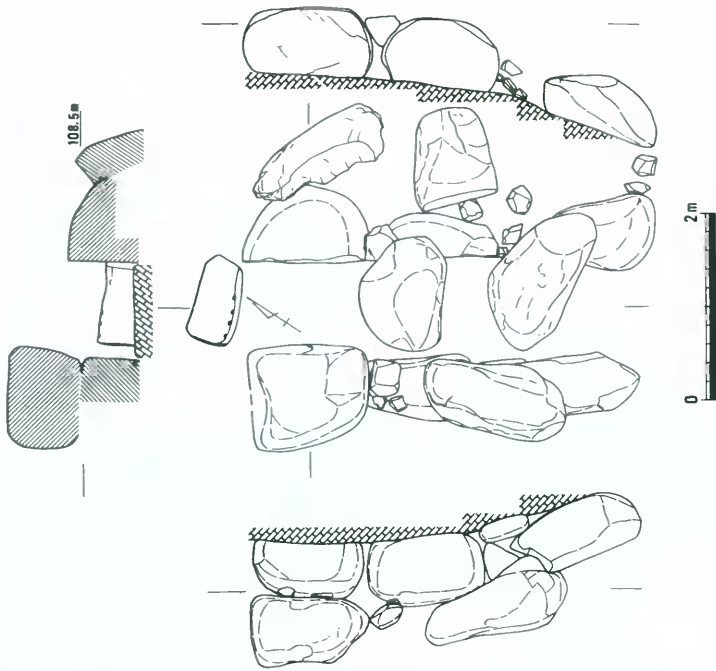


第53図 37号墳発掘後地形図（1/200）

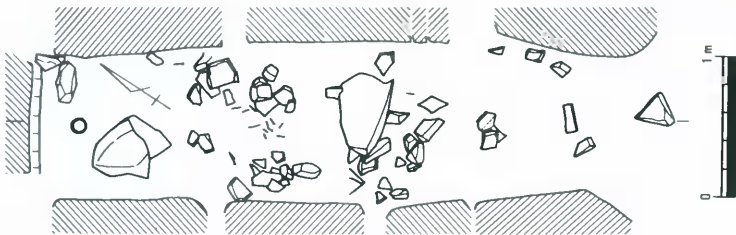
遺物出土状態（第55図）

遺物出土状態（第55図）

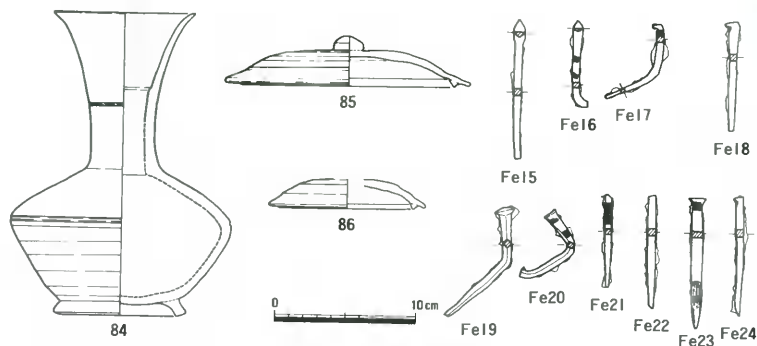
石室内部はかなり荒らされていたが、南半分では須恵器の長頸壺が出土し、北半分では鉄釘と杯身が出土している。鉄釘は奥壁から150cmのところ集中していた。その周辺には拳大の



第54図 37号墳横穴式石室 (1/60)



第55図 37号墳石室内遺物出土状態 (1/40)



第56図 37号墳出土土遺物

角礫が長さ180cm・幅60cmの範囲内に散在していた。最終埋葬の棺台の可能性もある。

出土遺物 (第56図)

84～86は須恵器である。84は完形品に近い長頸壺である。口径は10.0cm、器高は21.5cm、底径9.4cmを測る。頸部と胴部に沈線を施し、高台はハの字に踏んばる。85は1/5が欠けた杯蓋で、口径は15.0cm、器高は2.7cmを測る。宝珠つまみが付き、内面にはかえりがある。86は杯蓋の破片で、口径は9.5cmを測る。内面にはかえりがある。Fe15・16は鉄製の細根鎌である。鉄釘の中に混入して出土した。他に1点ある。Fe15は刃部の長さ15mm、幅8mm厚さ4mmをはかり、断面形は二等辺三角形である。基部は端部が欠けているが、現存長83mm、幅・厚さとも5mmを測り、断面形は正方形である。Fe16は基部がすべて残存している。Fe17～24は鉄釘で全部で71点を数える。鉄釘には木質が付着したものが多い。

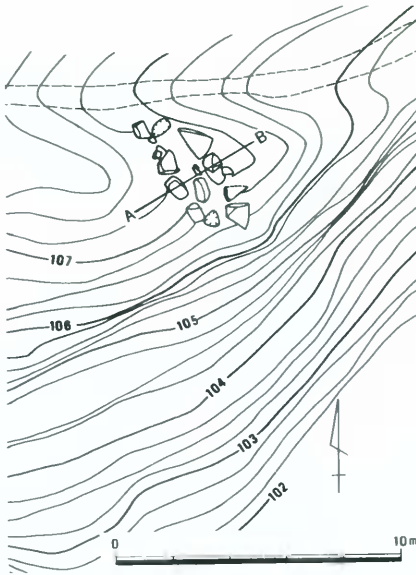
(3) 36号墳 (図版15)

墳丘 (第59図)

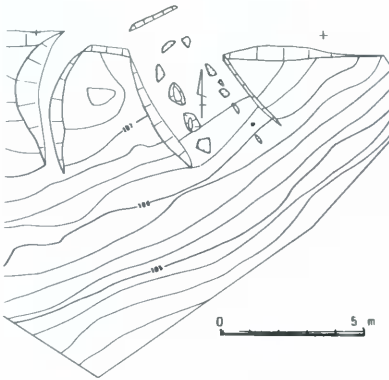
36号墳は37号墳の南西に接して築造されている。発掘調査前の地形図を見ると明らかなように、山道の脇にあるため既に石室の床面は現れる程掘込まれ、奥壁は取り去られ、両側石の一段目と二段目の2個が残存していただけであった。したがって墳丘については断面図から推定する以外にない。斜面の高いほうを削り掘りくぼめ、低い南側を埋め立て平坦に造成後、石室を築造している。両側石の段毎に盛り土していったものであろう。

周溝 (第58図)

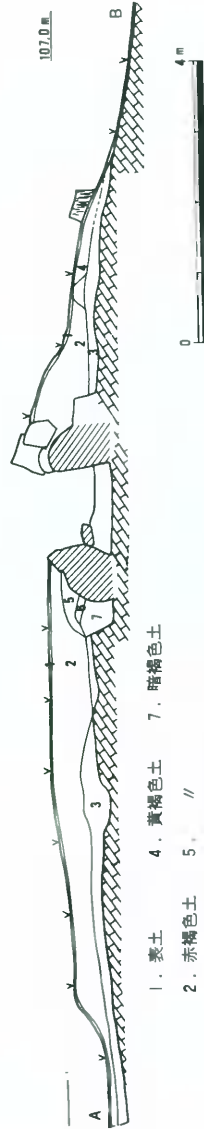
周溝底の中心から石室の中心までの距離は5.5mを測る。周溝は石室の西北側で三日月形に検出できた。北側は後世の山道で奥壁も一緒に削り取られている。検出面での周溝の長さ5.0m・幅約1.7m、深さは30cmを測る。周溝の最下層の埋積土は赤褐色土である。



第57图 36号墳発掘前地形図 (1/200)



第58图 36号墳発掘後地形図 (1/200)

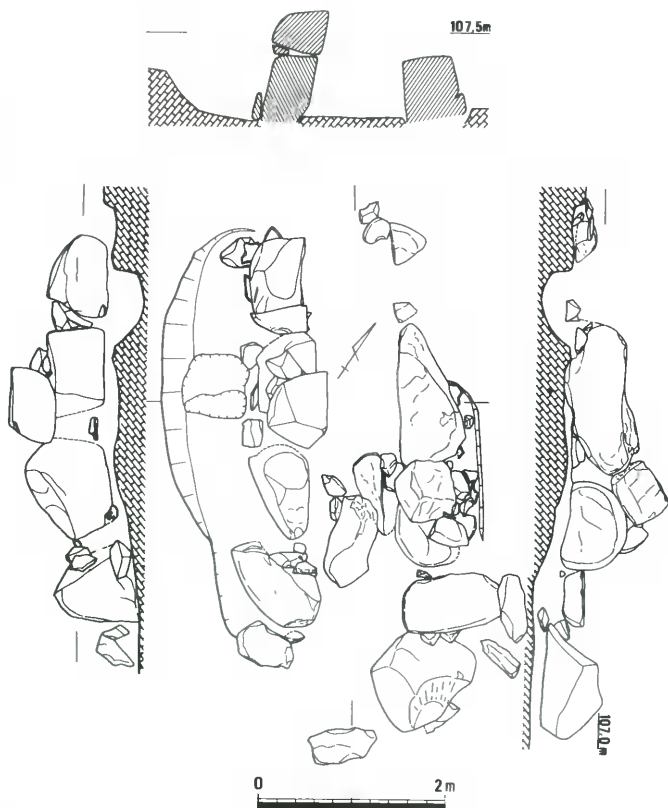


- 1. 表土
- 2. 赤褐色土
- 3. 黒褐色土
- 4. 黄褐色土
- 5. //
- 6. 黒褐色土
- 7. 暗褐色土

第59图 36号墳墳丘断面図 (1/80)

横穴式石室（第60図）

石室の長軸は北西から南東を指し、南東に開口する。天井石は既に取り去られていた。奥壁は一枚石を使っていたであろう。抜き取り穴を検出した。石室現存全長は500cm、幅110cm～120cmを測る。床の平面形を見ると中央が僅か10cm膨らんでいる。側石には角な石と丸い石を半砕したものを使用している。側石の残りのよい部分では二段残っていた。その高さは115cmある。石室の天井までの高さは115cm以上あった事が分かる。側石の積み方は全部広口を使って横積みしている。側石の二段目は石室の内外に崩れ落ちている。また南端の両側石は南へずり落ちつつある。岩石はすべて閃緑岩で、大きさはまちまちである。たとえば、東側石の一段



第60図 36号墳横穴式石室（1/60）



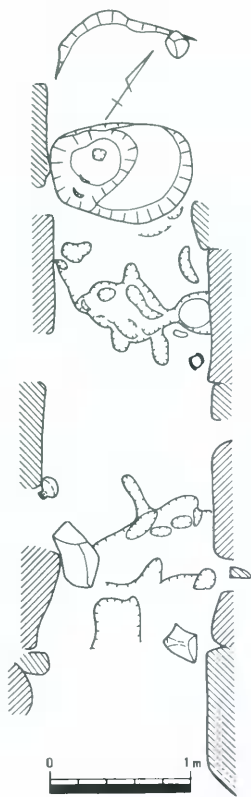
目の奥から2番目の石は幅160cm・高さ70cm・奥行き70cmあり、西側石の二段目の石は幅75cm・高さ50cm・奥行き65cmある。大きな石の隙間は拳大の角礫2～3個使用して詰め物にしている。

遺物出土状態（第61図）

石室内部はかなり荒らされていたが、傾いた西側石の下端に完形の平瓶が出土したほか側石の下端で杯身・杯蓋・高杯が出土している。鉄釘も散在していた。第61図の北西端の凹みは奥壁抜き取り跡で、その南の楕円形の穴は現代攪乱である。中央の凹凸は石室築造時の地山の凹凸であり、南東部下がりには石室築前の斜面を表したものである。

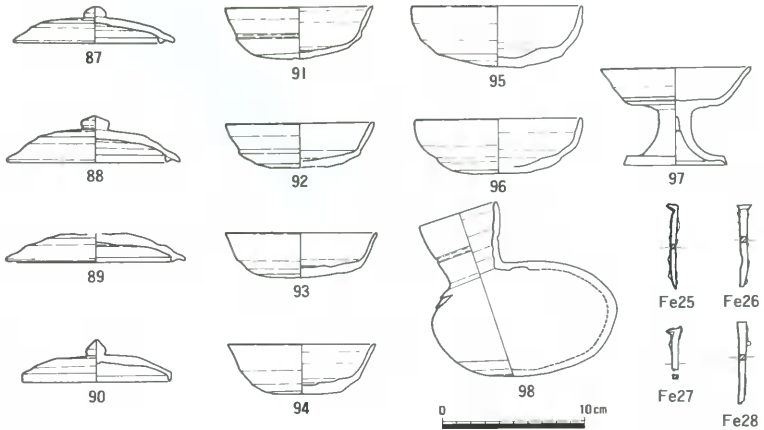
出土遺物（第62図）

87～98は須恵器である。87～90杯蓋で、91～96は杯身で、97は高杯で、98は平瓶である。以下一点ずつ説明して行く。87は完形品で、口径9.5cm、器高2.5cmを測る。宝珠つまみが付き、内面にはかえりがある。88は完形品で、口径10.5cm、器高3.2cmを測る。宝珠つまみが付き、内面にはかえりがある。89は1/2の破片で、口径11.0cmを測る。90は一部を欠いているが、口径10.5cm、器高2.9cmを測る。宝珠つまみが付き、内面にはかえりがない。焼成は不良である。91は一部を欠く。口径は10.5cm、器高は3.6cmを測る。口縁部と体部の境に凹線が施される。92は1/2の破片で、口径は10.5cm、器高は3.1cmを測る。93は完形品で、口径は10.6cm、器高は3.2cmを測る。94は完形品で、口径は10.5cm、器高は3.5cmを測る。95は完形品で、口径は12.0cm、器高は4.0cmを測る。96は一部を欠く。口径は12.0cm、器高は4.0cmを測る。焼成は不良である。97は完形品で、口径は10.0cm、器高は7.25cm、底径は7.0cmを測る。98は完形品で、口径は5.4cm、器高は12.4cmを測る。Fe25～28は鉄釘である。鉄釘は他に14点ある。Fe25は長さ65mm、幅・厚さ3mmを測り、断面形は正方形である。Fe26は長さ58mm、幅・厚さ4mmを測り、先端部が欠けている。Fe27は長さ30mm、幅・厚さ3mmを測り、頭部が欠けている。



第61図 36号墳石室内遺物出土状態 (1/40)

矢部古墳群A

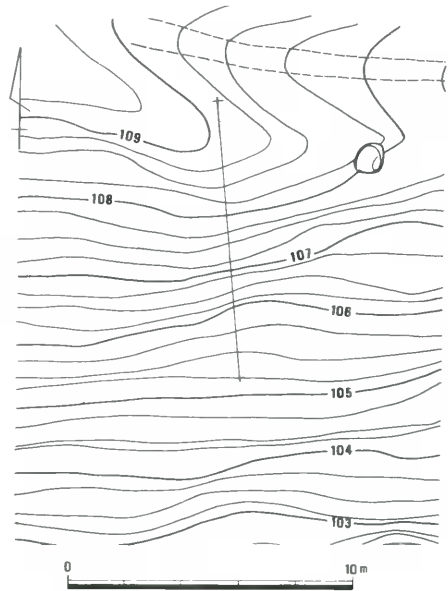


第62図 36号墳出土遺物

(4) 45号墳 (図版16・17)

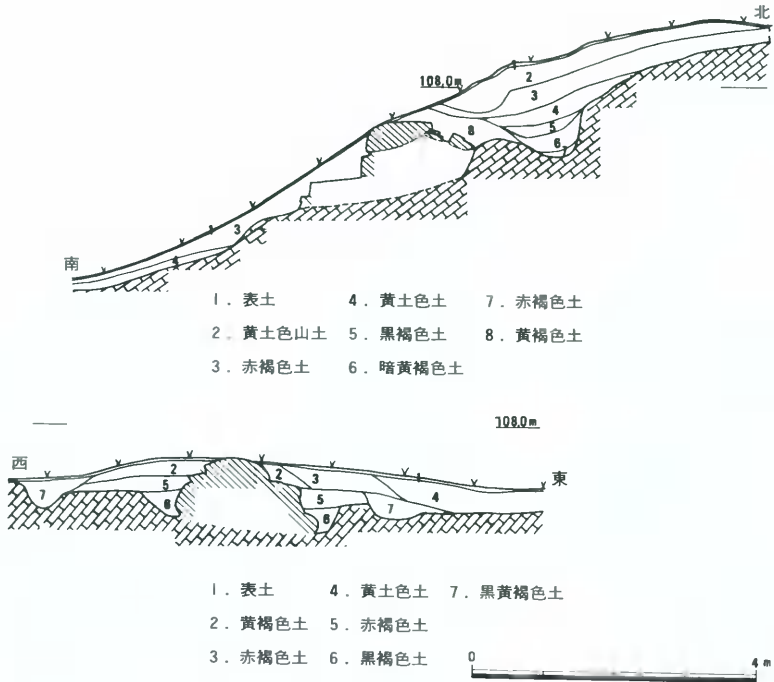
墳丘 (第63・64図)

45号墳は36号墳の西5m離れて築造されている。発掘調査前の地形図を見ると明らかなように、海拔107mの等高線が微妙に南に膨らんでいるように、後で予断を持って見れば見えないこともないが、ほとんどここに古墳があることを確認できないものである。たまたま36号墳の西を拡張したところ、一辺1mの丸い自然石が現れた。これが天井石だと認識出来るまでさらに掘り下げなければならなかった。断面図の上の図で8層黄褐色土が盛り土になる。下の図で2・5・6層が盛り土になる。盛り土中は無遺物である。



第63図 45号墳発掘前地形図 (1/200)

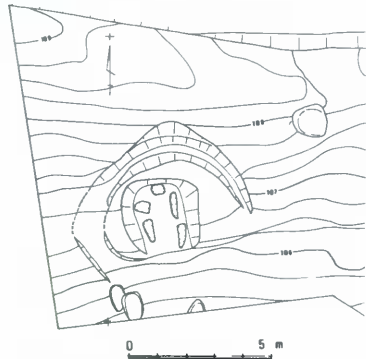
矢部古墳群A



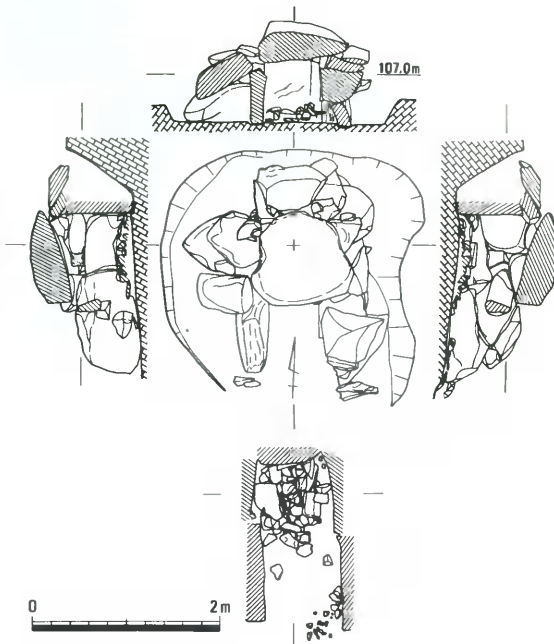
第64図 45号墳填丘断面図 (1/80)

周溝 (第65図)

周溝底の中心から石室の中心までの距離は2.3mを測る。周溝は石室の西・北・東側で三日月形に検出できた。北側が山を削っているので幅も広く深い。周溝の長さ7.0m・幅約1.5m、深さは70cmを測る。第64図を見ると周溝の埋積土は最下層が赤褐色土、その上層が暗黄褐色土、黒褐色土である。1～4層は北のほうからかなり後世に山道を作る時に流れこんだものと考えられる。



第65図 45号墳発掘後地形図 (1/200)



第66図 45号墳横穴式石室 (1/60)

横穴式石室 (第66図)

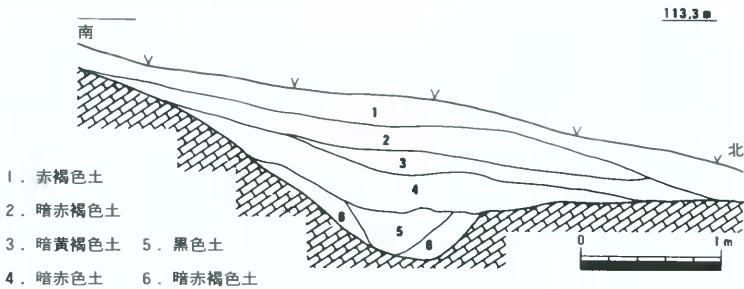
石室の掘り方は隅丸の正方形を呈する。その大きさは東西275cm、南北275cm、深さ70cmを測る。この中に小さいが、しかし完全な形の横穴式石室を築造している。石室の長軸は南北を指し、南に開口する。天井石は一辺1mの丸い自然石が一枚奥壁に乗っており、その南は既に取り去られていた。二枚乗っていたものと考えられる。奥壁は一枚石を使ってる。その大きさは幅60cm、高さ70cm、厚さ30cmを測る。石室現存全長は170cm、幅80cm、床石敷から天井石辺の高さ75cm～55cmを測る。床には拳大の角礫を奥から70cmまで敷いてさらに一辺15cmくらいの偏平な石で四角に囲んでいた。また天井石の南端には閉鎖石と思える20～30cmの石が立てられていた。つまり小さい横穴式石室をさらに小さく使っているのである。側石は二段積みで、広口を使って横積みし、三段に積まれている。側石の一段目は大きく、二段目はかなり小さい。たとえば、西側石の一段目の奥から2番目の石は幅110cm・高さ65cm・奥行き35cmあり、東側石の二段目の石は幅50cm・高さ40cm・奥行き45cmある。無遺物である。

## 第5節 古代～中世の遺構・遺物

### (1) 溝

#### 溝-4 (第67図)

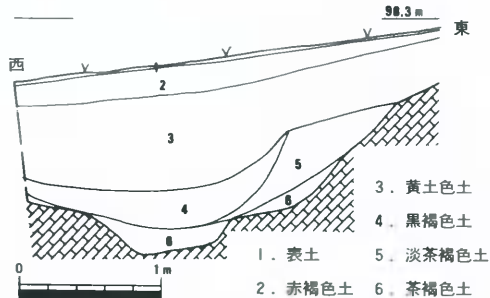
4区の西北端で検出した溝である。11号墳・51号墳の北にあって北側斜面を削り取って作られ、尾根筋とはほぼ平行である。西のほうはまだ伸びていくようであるが調査期間の制約のため調査できていないが、トレンチの断面から尾根の稜線にあがってしまうと考えられる。つまりこの溝は山道と考えられる。時期は古代から中世か。



第67図 溝-4断面図 (1/40)

#### 溝-12 (第68図)

3区の北西部で検出した溝である。尾根の西側斜面をけずって作られている。長さ11mを測るが、南にまだ伸びそうである。調査区設定上排土と排材が動かさないため調査不可能であった。トレンチの断面などから溝-4に繋がる。



第68図 溝-12断面図 (1/40)

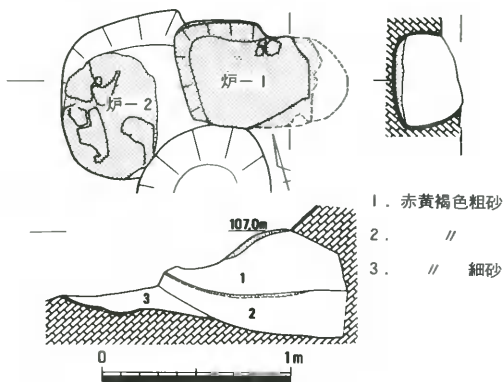
#### 溝-20 (第5図)

3区の北西端部で検出した溝である。尾根の西側斜面を削って作られている。長さ10mを測るが、北にまだ伸びそうである。用地外のため調査できなかった。断面などから溝-4・12に繋がる山道と考えられ、時期は古代から中世か。

(2) 炉 (図版11)

炉-1 (第69図)

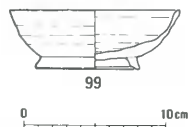
3区の8号墳内溝-11のほぼ中央部で検出した炉である。海拔107.0mで検出した。斜面に横穴を掘って、その中で火を炊いたものである。長さ100cm、穴の幅48cm、穴の入口の床から天井の高さ32cm、天井部の残存奥行きは壁際で50cmを測る。床は手前の方に高くなっている。時期不明。



第69図 炉-1・2 (1/30)

炉-2 (第69図)

炉-1の西に接して検出した炉である。良く焼けた床面は、楕円形を呈し、長さ66cm・幅50cmを測る。土層断面図を見ると、炉-1の下層に位置する。炉-2を廃棄した後はほぼ同じ位置に炉-1を作り直したもの。炭化材が少量出土しただけで時期不明。



第70図 古代の遺物

(3) 土壇

土壇-4 (第6図)

4区中央部51号墳の北斜面で検出した土壇である。海拔110.0mで検出した。平面形は氾篔形を呈し、長軸は尾根筋と平行、すなわち東北東から南南西にあり、長さ380cm・幅150cm・深さ100cmを測る。無遺物で、用途不明、時期不明。

(4) 古代～中世の遺物 (第70図)

99は36号墳横穴式石室の中から出土した須恵器の杯身である。杯部は内湾し、張り付けの高台を持っている。一部を欠いている。口径は12.2cm、底径7.0cm、器高4.2cmを測る。

その他36号墳の周辺調査の時、山道で土師器の碗の極小片を採集している。また確認調査の時に尾根筋で古代の縄目のついた平瓦片を採集している。これらは実測に耐えられないので割愛し、記述にとどめた。

## 第3章 まとめ

### 1. 矢部古墳群Aの前半期古墳について

矢部古墳群Aでは前半期と考えられる古墳が58号墳・57号墳・56号墳・55号墳・54号墳・53号墳・52号墳・51号墳・8号墳・9号墳・10号墳・11号墳・39号墳の13基もあった。あるいはもう1～2基多かったのかもしれない。たとえば57号墳と56号墳の間に入る余地があり、8号墳と54号墳との間に入る余地があり、10号墳は溝—5と5'で2基あるのかもしれない。しかし全体に残存状態が非常に良くない。全ての前半期古墳が尾根稜線上にあり、表土がほとんど流出しており、盛り土も主体も削平されている。かろうじて周溝のみ残存しているものが多い。この周溝の形から円墳ではなく方墳であることがわかった。盛り土がやっと残っていたのが10号墳である。盛り土が下方に流れとどまっていたのが58号墳である。葺き石が流出し下方に集積遺構として残存していたのが53号墳である。

主体部については、58号墳は土壙墓1基と壺棺2基、57号墳は箱式石棺1基と石蓋土壙2基、54号墳は土壙墓1基、53号墳は土壙墓1基と箱式石棺1基と石蓋土壙1基、10号墳は土壙墓3基と壺棺1基を持つ。石蓋土壙は3基あるがどれも一様でない。石蓋土壙—1は53号墳にあって下方の棺を全部覆い、しかも二重・三重に覆っている。石蓋土壙—2は57号墳にあって下方の棺を頭部と周辺部だけを、石蓋土壙—3は57号墳にあって下方の棺を頭部から上半部と周辺部だけを覆っていた。

古墳の時期を決める遺物は、ほぼどの溝からも出土している。土器としては土師器の壺・甕・高杯・鉢・器台・手あぶりがある。この遺物から見ると全て同じ時期に属している。上東遺跡の下田所期か亀川上層期に当たる時期である。(註1) 壺棺に使用している壺で興味をひくのは、焼成後肩口を擦り切るために一生懸命に線引きした後が残っているものがあるということだ。第13図の3の壺である。同じ壺棺にしようしている7はしっかりと切れているのにどうしてこれが途中であきらめたのか不思議である。埋葬を急ぐ何か理由があったのだろう。溝から出土している土器の底部には穿孔してあるものがかかり認められる。破片はそれが認めにくい、完形に近いものは非常にはっきりする。溝—13から出土した手あぶり形土器は出土すること自体珍しいが、底部穿孔のもっとも良い例である。

鉄器としては板状鉄斧・のみ状鉄器・刀子がある。中でも板状鉄斧は用木古墳群1号墳・3号墳、備前車塚古墳など前半期の古い古墳からしか出土していない。金蔵山古墳では袋状鉄斧になっている。(註2)

## 2. 矢部古墳群Aの後半期古墳について

後半期古墳とは横穴式石室を主体とする古墳のことである。倉敷市文化財分布図（註3）の段階で36号墳が1基が用地内に入っていると周知されていた。岡山大学考古学研究部の矢部地区分布調査の結果（註4）や山陽自動車道用地図と比較検討した結果、38号墳が日差山支群の4号墳として用地内に入っていることが判明した。そして一次調査の結果37号墳が新発見され、また全面調査で45号墳が新発見された。結局矢部古墳群Aは4基の古墳が残存していた。

前に述べた日差山支群の3基を含めてこの4基を考えて見よう。この日差山支群の7基はすべて尾根稜線から5～10m下方の南斜面に所在している。海拔125m～107mの非常に見晴らしの良いところに立地している。しかし前半期古墳が尾根稜線上を占地しているのと好対照である。前半期古墳をまだ意識していることがわかる。7基の古墳の間隔は日差山1号墳・2号墳間が約100m、2号墳・3号墳間が約50m、3号墳・38号墳間が約50m、38号墳・45号墳間が約80m、45号墳・36号墳間が約5m、36号墳・37号墳間が約0mを測る。この間隔から考えると45号墳・36号墳・37号墳の3基が一つの支群を形成しているようである。

38号墳は7基中最大で推定直径14mの円墳で、石室全長8.8mを測る。しかも東に開口しているのはこの古墳だけで、他は南に開いている。最小は45号墳で、推定直径4.6mの円墳で、石室全長1.7mを測る。37号墳は推定直径12mの円墳で、石室全長4.4m。36号墳は推定直径11mの円墳で、石室全長5.0m。1号墳は推定直径10mの円墳で、石室現存長4.0m。2号墳は推定直径10mの円墳で、石室現存長3.0mで、天井石が残る。3号墳は推定直径12mの円墳で、石室現存長5.0mで、天井石が残る。

出土遺物については、38号墳は須恵器と鉄器と耳飾りと鉄滓と窯壁がある。袋状鉄斧が珍しい。袋状鉄斧が横穴式石室から出土しているのは備中では6世紀前半の三輪山第6号墳・美作では6世紀前半の四つ塚1号墳・備前では6世紀中葉～7世紀初頭の岩田14号墳などが上げられる。（註5）鉄滓は38号墳のほか37号墳、45号墳で出土している。周辺の横穴式石室からは大抵出土している。鉄滓分析の結果は後述する。（浅倉）

（註1）「上東・川入」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（16）』岡山県教育委員会 1977年

（註2）『岡山県史第18巻考古資料』岡山県 1986年

（註3）『倉敷市文化財分布図』倉敷市教育委員会 1976年

（註4）『倉敷市矢部遺跡分布調査報告書』岡山大学考古学研究部 1984年

（註5）註2に同じ



矢部古墳群A

表一C 土器観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1	土師器	壺	22.0	7.0	36.0	二重口縁・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	完形
2	"	壺	—	6.5	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	口縁欠く
3	"	壺	26.0	6.5	37.5	二重口縁・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	完形
4	"	壺	14.5	6.8	27.2	ヘラミガキ・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	完形
5	"	壺	20.0	—	—	二重口縁	茶褐色	砂粒多	口縁部片
6	"	壺	17.0	—	—	二重口縁・丹塗り	赤褐色	砂粒多	破片
7	"	壺	—	5.5	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	口縁欠く
8	"	鉢	29.0	—	19.5	二重口縁・ヘラケズリ	茶色	砂粒多	底部穿孔
9	"	壺	22.0	—	—	二重口縁・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	口縁 4 / 5
10	"	鉢	11.0	—	—	—	茶褐色	微砂多	口縁 1 / 2
11	"	甕	—	—	—	クシ描き沈線	茶褐色	微砂多	細片
12	"	壺	17.0	—	—	丹塗り	赤褐色	砂粒多	口縁全て
13	"	壺	—	8.5	—	ハケメ	茶褐色	砂粒多	底部全て
14	"	壺	—	3.0	—	ハケメ	茶褐色	微砂少	底部全て
15	"	器台	25.0	—	—	丹塗り・ヘラミガキ	赤色	砂粒多	細片
16	"	高杯	—	—	—	—	茶褐色	砂粒多	細片
17	"	高杯	—	—	—	長脚・ヘラミガキ	茶褐色	粘土	脚部片
18	"	手あぶり	14.5	0	16.9	鉢に風帽・ヘラケズリ	茶褐色	砂粒多	底部穿孔
19	"	壺	—	—	—	二重口縁・ハケメ	黄褐色	砂粒多	口縁 1 / 2
20	"	壺	19.5	—	—	二重口縁・ヘラミガキ	茶褐色	砂粒多	口縁全て
21	"	高杯	(17.5)	—	—	やや長脚・円孔4個	赤褐色	粘土	復元図
22	"	埴	(9.0)	—	—	小型丸底	茶褐色	砂粒多	細片
23	"	鉢	35.0	—	—	二重口縁	茶褐色	砂粒多	口縁破片
24	"	鉢	35.0	—	(23.0)	二重口縁・ハケメ	茶褐色	砂粒多	底部穿孔
25	"	壺	(17.0)	—	—	二重口縁・ハケメ	黄褐色	砂粒多	口縁 1 / 3
26	"	壺	—	—	—	二重口縁	茶褐色	砂粒多	口縁細片
27	"	壺	—	4.0	—	指圧痕	茶褐色	砂粒多	底部穿孔
28	"	壺	—	2.2	—	ナデ	茶褐色	砂粒多	底部穿孔
29	"	甕	12.0	—	—	クシ描き沈線	黄褐色	砂粒多	口縁細片
30	"	甕	10.0	—	—	クシ描き沈線・丹塗り	赤褐色	砂粒多	口縁細片

矢部古墳群A

31	土師器	壺	8.0	—	—	丹塗り	赤黄色	砂粒多	底部欠く
32	"	鉢	11.0	—	—	二重口縁	黄茶色	砂粒多	底部欠く
33	"	鉢	5.0	2.0	3.5	指頭圧痕・手づくね	茶褐色	砂粒多	底部穿孔
34	"	甕	18.0	—	—	二重口縁	黄褐色	砂粒多	1/2残
35	"	鉢	—	—	—	二重口縁・クシ描き沈線	茶褐色	砂粒多	口縁細片
36	"	高杯	—	—	—	長脚	赤褐色	粘土	脚部片
37	"	高杯	—	(12.0)	—	短脚	赤黄色	粘土	脚部片
38	"	高杯	—	(14.6)	—	—	赤褐色	粘土	裾部片
39	"	器台	18.0	18.0	—	鼓形・丹塗り	赤褐色	砂粒多	復元図
40	"	壺	—	—	—	二重口縁	茶褐色	砂粒多	口縁細片
41	"	壺	—	—	—	二重口縁・凸部	茶褐色	砂粒多	口縁細片
42	"	器台	30.0	—	—	大型鼓形・ヘラミガキ	茶褐色	砂粒多	口縁細片
43	"	高杯	—	—	—	長脚	赤褐色	砂粒少	脚柱片
44	"	高杯	—	—	—	短脚	赤褐色	粘土	脚部片
45	"	鉢	38.0	8.0	20.0	二重口縁・ハケメ	淡茶色	砂粒多	完形
46	"	壺	—	8.6	—	ハケメ・ヘラケズリ	赤褐色	砂粒少	口縁欠く
47	"	壺	15.0	—	16.5	二重口縁・ハケメ	淡褐色	砂粒多	底部穿孔
48	須恵器	高杯	—	10.0	—	細い沈線2本	灰白色	砂粒多	脚部
49	土師器	壺	18.0	—	—	二重口縁・ハケメ	茶褐色	砂粒多	口縁全て
50	須恵器	杯蓋	13.0	—	3.9	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰色	砂粒多	破片
51	"	杯蓋	13.0	—	3.8	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰色	砂粒多	完形
52	"	杯蓋	13.0	—	3.5	ヘラケズリ・ヨコナデ	淡灰色	砂粒多	完形
53	"	杯蓋	14.0	—	4.5	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰色	砂粒多	完形
54	"	杯蓋	12.5	—	4.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	黒色	砂粒多	完形
55	"	杯蓋	12.5	—	3.9	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰黒色	砂粒多	完形
56	"	杯蓋	13.0	—	4.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	淡灰色	砂粒多	口縁1/2欠
57	"	杯蓋	(14.0)	—	(4.0)	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰褐色	砂粒多	1/6破片
58	"	杯蓋	11.0	—	4.8	ヘラオコシ・ヨコナデ	灰白色	砂粒少	完形
59	"	杯蓋	9.5	—	3.6	ヘラオコシ・ヨコナデ	灰白色	砂粒多	完形
60	"	杯蓋	5.2	—	4.3	ヘラオコシ・ヨコナデ	灰色	砂粒多	3/5破片
61	"	杯身	12.5	—	3.7	斜めのたちあがり	灰褐色	砂粒多	完形
62	"	杯身	13.0	—	4.6	斜めのたちあがり	灰褐色	砂粒多	完形

矢部古墳群A

63	須恵器	杯身	12.0	—	4.0	斜めのたちあがり	灰白色	砂粒多	完形
64	"	杯身	12.5	—	4.6	斜めのたちあがり	灰褐色	砂礫多	完形
65	"	杯身	12.0	—	5.0	ひずみ大きい	黒色	砂礫多	完形
66	"	杯身	12.0	—	3.5	斜めのたちあがり	灰褐色	砂粒多	2/3破片
67	"	杯身	12.0	—	3.8	斜めのたちあがり	灰褐色	砂礫多	1/2破片
68	"	杯身	(12.0)	—	(3.5)	ヘラオコン	灰色	砂粒多	小破片
69	"	杯身	13.0	—	3.5	粘土ひも巻上げ明瞭	灰褐色	砂礫多	3/4破片
70	"	杯身	12.5	—	4.0	斜めのたちあがり	淡灰色	砂礫多	1/4破片
71	"	杯身	12.5	—	3.5	斜めのたちあがり	灰褐色	砂粒多	1/3破片
72	"	有蓋高杯	12.0	10.0	7.5	斜めのたちあがり	灰褐色	砂粒少	破片
73	"	有蓋高杯	12.3	6.7	10.7	斜めのたちあがり	灰白色	砂礫多	完形
74	"	高杯	14.6	10.8	10.5	ハの字脚に円孔3個	灰色	砂礫多	完形
75	"	高杯	14.4	12.2	10.6	ハの字脚に孔なし	灰青色	砂粒多	完形
76	"	高杯	14.0	10.0	9.5	ハの字脚に孔なし	灰青色	砂粒多	完形
77	"	高杯	14.4	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰黒色	砂粒多	脚欠く
78	"	長頸壺	9.0	—	16.1	球形胴部に沈線1本	白色	細砂多	完形
79	"	罍	12.2	—	15.0	球形胴部に円孔1個	灰褐色	砂礫多	口縁一部欠く
80	"	提瓶	6.6	—	20.1	カギ形耳・カキメ	灰色	砂粒多	完形
81	"	提瓶	6.0	—	20.3	カギ形耳・カキメ	灰色	砂礫多	口縁一部欠く
82	"	平瓶	—	—	—	カキメ・ヘラケズリ	灰色	砂礫多	口縁部欠く
83	"	甕	23.0	—	—	カキメ・タタキ	灰色	砂礫多	破片
84	"	長頸壺	10.0	9.4	21.5	頸・胴部に沈線	灰色	砂礫多	口端一部欠く
85	"	杯蓋	15.0	—	2.7	つまみ・かえり	灰白色	砂礫多	1/5欠く
86	"	杯蓋	9.5	—	—	かえり	淡灰色	砂礫多	1/3破片
87	"	杯蓋	9.5	—	2.5	つまみ・かえり	灰褐色	砂礫多	完形
88	"	杯蓋	10.5	—	3.2	つまみ・かえり	灰色	砂礫多	完形
89	"	杯蓋	11.0	—	—	かえり	灰白色	砂礫多	1/2破片
90	"	杯蓋	10.5	—	2.9	つまみ	灰白色	砂粒多	一部欠く
91	"	杯身	10.5	—	3.6	ヘラオコン・ヨコナデ	灰青色	砂礫多	一部欠く
92	"	杯身	10.5	—	3.1	ヘラオコン・ヨコナデ	灰色	砂礫多	1/2破片
93	"	杯身	10.6	—	3.2	ヘラオコン・ヨコナデ	灰白色	砂礫多	完形
94	"	杯身	10.5	—	3.5	ヘラオコン・ヨコナデ	灰白色	砂礫多	完形

矢部古墳群A

95	"	杯身	12.0	—	4.0	ヘラケズリ・ヨコナデ	黄白色	砂礫多	完形
96	"	杯身	12.0	—	4.0	ヘラオコシ・ヨコナデ	灰白色	砂礫多	一部欠く
97	"	高杯	10.0	7.0	7.2	杯部に2本の沈線	灰褐色	砂礫多	完形
98	"	平瓶	5.4	—	12.4	頸部に1本の沈線	灰色	砂礫多	完形
99	"	杯身	12.2	7.0	4.2	高台	灰色	砂礫多	一部欠く

表-D 金属器一覧表

図	番号	遺物	地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
19	Fe1	鉄剣	2区	57号墳	鉄	320	35	10	157.9	布痕跡	古墳前期
22	Fe2	のみ	3区	54号墳	鉄	104	11	3	7.1	先折	古墳前期
40	Fe3	鉄斧	4区	10号墳	鉄	130	55	10	193.8	板状	古墳前期
41	Fe4	刀子	4区	10号墳	鉄	212	23	5	39.5	復元完形	古墳前期
51	Fe5	鉄斧	6区	38号墳	鉄	130	55	30	363.3	袋状	7 C 初
51	Fe6	鉄釘	6区	38号墳	鉄	121	9	9	33.9	完形	7 C 初
51	Fe7	鉄釘	6区	38号墳	鉄	(88)	12	9	23.1	先欠	7 C 初
51	Fe8	鉄釘	6区	38号墳	鉄	108	13	7	32.5	完形	7 C 初
51	Fe9	鉄釘	6区	38号墳	鉄	113	9	7	27.2	木質残	7 C 初
51	Fe10	鉄鏃	6区	38号墳	鉄	(55)	29	3	12.6	平根式	7 C 初
51	Fe11	鉄鏃	6区	38号墳	鉄	(38)	33	4	6.3	平根式	7 C 初
51	Fe12	鉄鏃	6区	38号墳	鉄	(57)	(25)	4	6.5	平根式	7 C 初
51	Fe13	刀子	6区	38号墳	鉄	(41)	(15)	4	4.8	木質残・茎部	7 C 初
51	Fe14	刀子	6区	38号墳	鉄	(120)	(15)	7	31.5	大きく曲る	7 C 初
57	Fe15	鉄鏃	5区	37号墳	鉄	100	8	5	7.7	細根式	7 C 前
57	Fe16	鉄鏃	5区	37号墳	鉄	60	8	5	5.0	細根式	7 C 前
57	Fe17	鉄釘	5区	37号墳	鉄	73	—	5	6.1	完形	7 C 前
57	Fe18	鉄釘	5区	37号墳	鉄	(78)	—	5	7.3	先欠	7 C 前
57	Fe19	鉄釘	5区	37号墳	鉄	95	—	5	9.7	完形	7 C 前
57	Fe20	鉄釘	5区	37号墳	鉄	(68)	—	5	7.2	先欠	7 C 前
57	Fe21	鉄釘	5区	37号墳	鉄	65	—	5	4.7	頭欠	7 C 前
57	Fe22	鉄釘	5区	37号墳	鉄	(80)	—	6	9.8	頭欠先欠	7 C 前
57	Fe23	鉄釘	5区	37号墳	鉄	93	7	4	10.8	木質残	7 C 前
57	Fe24	鉄釘	5区	37号墳	鉄	(82)	—	6	7.6	先欠	7 C 前

矢部古墳群A

63	Fe25	鉄釘	5区	36号墳	鉄	60	—	3	2.9	完形	7 C 前
63	Fe26	鉄釘	5区	36号墳	鉄	(58)	—	4	3.6	先欠	7 C 前
63	Fe27	鉄釘	5区	36号墳	鉄	(30)	—	3	2.0	先欠	7 C 前
63	Fe28	鉄釘	5区	36号墳	鉄	(58)	—	4	3.9	先欠	7 C 前
51	Cu 1	耳環	6区	38号墳	銅+銀	23	—	6	7.6	銀残り一番良	7 C 初
51	Cu 2	耳環	6区	38号墳	銅+銀	25	—	5	9.5	銀残り微量	7 C 初
51	Cu 3	耳環	6区	38号墳	銅+銀	26	—	4	3.0	銀残り少量	7 C 初
51	Cu 4	耳環	6区	38号墳	銅+銀	28	—	6	14.4	銀残りなし	7 C 初

## 2. 矢部<sup>や</sup>古墳群<sup>べ</sup>B

矢部古墳群B

目 次

第1章 調査の経緯 .....	81
第1節 調査の経過 .....	81
第2節 日誌抄 .....	82
第2章 遺構・遺物 .....	84
第1節 弥生時代の遺構・遺物 .....	84
第2節 古墳時代の遺構・遺物 .....	90
第3節 遺物 .....	109
第3章 まとめ .....	114

図 目 次

第1図 地形測量図 (1/400) .....	83	第17図 19号墳主体部 平面図・断面図 (1/30) .....	92
第2図 遺構全体図 (1/500) .....	83	第18図 18・19号墳 出土遺物 (1/4) ...	93
第3図 竪穴住居1 (1/80) .....	84	第19図 19号墳 出土遺物 鉄器 (1/2) .....	
第4図 竪穴住居1 出土遺物 (1/4・1/2) .....	85	第20図 42号墳土層断面図 (1/80) .....	94
第5図 竪穴住居2 (1/80) .....	86	第21図 42号墳主体部 平面図・断面図 (1/30) .....	95
第6図 竪穴住居2 出土遺物 (1/4・1/2) .....	86	第22図 42号墳 出土遺物 (1/4・1/1) ...	96
第7図 建物1 (1/80) .....	87	第23図 42号墳 出土遺物 (1/3) .....	97
第8図 建物2 (1/80) .....	87	第24図 42号墳 出土遺物 (1/3・1/6) ...	98
第9図 建物3 (1/80) .....	88	第25図 42号墳 出土遺物 (1/3) .....	99
第10図 土壙1 (1/30) .....	88	第26図 42号墳 出土遺物 (1/6) .....	100
第11図 土壙2 (1/30) .....	88	第27図 46号墳 出土遺物 (1/4) .....	101
第12図 土壙2 出土遺物 (1/4) .....	88	第28図 43号墳地形測量図 (1/300) .....	101
第13図 18・19・42・46・47号墳地形測量図 (1/300) .....	89	第29図 43号墳土層断面図 (1/80) .....	101
第14図 18号墳土層断面図 (1/80) .....	90	第30図 43号墳主体部 平面図・断面図 (1/30) .....	102
第15図 18号墳主体部 平面図・断面図 (1/30) 出土遺物 (1/2) .....	91	第31図 43号墳 出土遺物 (1/1・1/2・1/4) .....	102
第16図 19号墳土層断面図 (1/80) .....	92		

矢部古墳群B

第32図 44号墳地形測量図 (1/300) ……	102	第38図 47号墳 出土遺物 (1/1・1/2) ……	106
第33図 44号墳土層断面図 (1/80) ……	102	第39図 出土遺物 (1/4・1/2) ……	109
第34図 44号墳主体部 平面図・断面図 (1/30) ……	103	第40図 出土遺物 鉄器 (1/2) ……	109
第35図 44号墳主体部掘り方 平面図・断面 図 (1/30) ……	104	第41図 出土遺物 分銅形土製品 (1/2) ……………	109
第36図 44号墳 出土遺物 (1/1) ……	104	第42図 出土遺物 (1/4) ……	110
第37図 47号墳主体部 平面図・断面図・掘 り方平面図 (1/30) ……	105	第43図 出土遺物 (1/4) ……	111
		第44図 出土遺物 石器 (1/2) ……	112
		第45図 出土遺物 石器 (1/2) ……	113

表 目 次

表一 1 土器観察表 …… 116

図 版 目 次

図版25—1 調査前の遠景 (東から)	— 2 46号墳の全景 (北西から)
— 2 表土除去後の遠景 (東から)	図版32—1 特殊埴輪出土状態
図版26—1 竪穴住居1 (北から)	— 2 鼓形器台出土状態
— 2 竪穴住居2 (北から)	図版33—1 44号墳主体部検出状態 (北から)
図版27—1 建物1 (東から)	— 2 44号墳主体部 蓋石除去後 (北から)
— 2 建物2 (北から)	図版34—1 43号墳主体部の全景 (西から)
図版28—1 建物3 (北西から)	— 2 47号墳主体部の全景 (南から)
— 2 竪穴住居1、建物1、2の全景 (南西から)	図版35 出土遺物 (弥生土器、分銅形土 製品、紡錘車)
図版29—1 18号墳主体部の全景 (南から)	図版36 出土遺物 (特殊埴輪)
— 2 18号墳主体部枕石 (東から)	図版37 出土遺物 (須恵器、土器、鼓形器 台)
図版30—1 19号墳主体部の全景 (北西から)	図版38 出土遺物 (玉類、鉄器)
— 2 19号墳主体部木棺痕跡 (南西から)	図版39 出土遺物 (石鎌、石錘、石庖丁)
図版31—1 42号墳主体部の全景 (北西から)	図版40 出土遺物 (砥石、石錘等)



## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査の経過

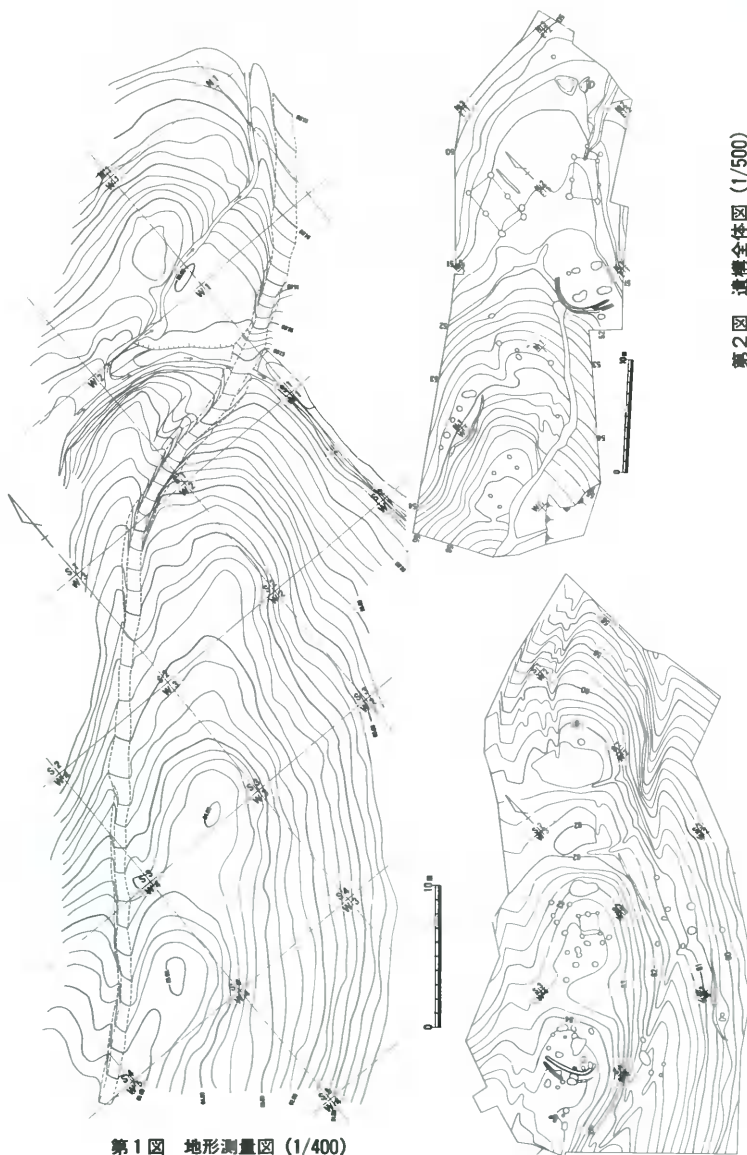
今回の遺跡調査対象範囲内には、倉敷市文化財分布図によると2基の古墳が記載されており、周知の遺跡であった。18号墳、19号墳がそれに相当する。18号墳の北西約20mの位置には用地境に接して全長約50mを測る前方後円墳が所在する。矢部大塚古墳と呼称されるこの古墳は、竪穴式石室を主体部に持つ古式の前方後円墳で、特殊器台形埴輪が出土したと伝えられている。全面調査を実施する前に本格調査の基礎資料を得ることと、古墳の下層に遺構が存在するかどうかを確認するための調査を実施した。一次調査においては、新たに3基の古墳と古墳の下層及びその周辺において弥生土器の包含層を確認したことにより遺跡の存在が推測されるに至った。44号墳の北東側墳端部分には小範囲ではあるが平坦面が認められた。その部分からも弥生土器が出土し柱穴を検出した。また、古墳の掘り下げ途中にも、盛土やその周辺からも弥生土器が出土した。さらに、古墳の主体部の下層からは柱穴などの遺構を検出した。以上のことから、44号墳の北東側を含めて調査区の全域に古墳築造以前の弥生時代の遺構が存在するものと考えられるに至った。そのため全面調査は、5基の古墳と弥生時代の遺跡を調査することとなった。調査中に新たに1基の古墳を発見したため、合計6基の古墳を調査した。

調査は、昭和61年8月の中旬に着手した。調査区の北東部から発掘にとりかかった。この部分は、狭いながらも平坦面が見られ弥生時代の遺構の存在が予測されていた。調査の結果、竪穴住居と建物跡を検出した。その間に調査前の地形測量を行った。遺構を実測するための基準杭は、道路の中心杭（STA 150+40）を利用して真北を基準に10mグリッドを組んだ。古墳の調査は、42号墳から着手し19号墳、18号墳、44号墳、43号墳の順に実施し、最後に47号墳の調査に着手した。12月から翌年2月にかけては、岡山市津寺地区の一次調査のため一時調査を中断した。古墳の調査終了後に、墳丘下の遺構の調査に着手し、住居跡、建物等の調査をした。

調査は、昭和61年度は井上弘と大智浩が、昭和62年度は大智が担当した。報告書作成のための遺物整理は平成3年度に津寺事務所で行った。

## 第2節 日誌抄

- 昭和61年
- 8月18日(月)～23日(土)  
調査着手。調査区の整備。器材の搬入。
- 8月25日(月)～30日(土)  
調査区東端部より発掘着手。
- 9月1日(月)～6日(土)  
古墳の地形測量。
- 9月8日(月)～10日(水)  
東端部 遺構の検出作業、掘り下げ。
- 9月11日(木)～16日(火)  
建物1 写真撮影、実測。
- 9月17日(水)～20日(土)  
遺構の検出作業と掘り下げ。
- 9月22日(月)～27日(土)  
水路を付替え、調査区を拡張する。
- 9月29日(月)～10月2日(木)  
拡張部分の掘り下げ。遺構の検出作業。
- 10月3日(金)  
建物2 掘り下げ、実測、写真撮影。
- 10月6日(月)～11日(土)  
住居跡の掘り下げ。43・42号墳 表土除去。
- 10月13日(月)～18日(土)  
住居跡の写真撮影、実測。42号墳 表土除去。
- 10月20日(月)～25日(土)  
42号墳・19号墳 確認トレンチの掘り下げ。
- 10月27日(月)～11月1日(土)  
19・18・44号墳 表土除去。確認トレンチ。
- 11月4日(火)～6日(木)  
44号墳 表土除去。S 3 W 4区 表土除去。
- 11月7日(金)～10日(月)
- 19・42号墳 清掃と周溝の掘り下げ。
- 11月11日(火)～15日(土)  
42号墳、埴輪の検出、実測。19号墳 周溝の検出。
- 11月17日(月)～22日(土)  
42号墳、墳丘の検出、埴輪の取り上げ。
- 11月25日(火)～29日(土)  
18・19・42号墳調査。
- 12月1日(月)～6日(土)  
42・18号墳の調査。
- 昭和62年
- 2月12日(木)  
調査再開。
- 2月16日(月)～19日(木)  
18・19号墳の調査。
- 2月20日(金)～23日(日)  
18・19号墳の調査。
- 2月24日(火)～28日(土)  
18・19・44号墳の調査。
- 3月2日(月)～6日(金)  
44・18号墳の調査。
- 3月9日(月)～13日(金)  
44・47号墳 実測、写真撮影。
- 3月16日(月)～20日(金)  
44・47号墳 実測、遺物の取り上げ。
- 3月24日(月)～31日(火)  
各古墳の補足測量。
- 4月6日(月) 南調査区開始。
- 6月11日(木) 北調査区開始。
- 6月22日(月) 南調査区完了。
- 8月11日(火) 全調査区完了。



第1図 地形測量図 (1/400)

第2図 遺構全体図 (1/500)

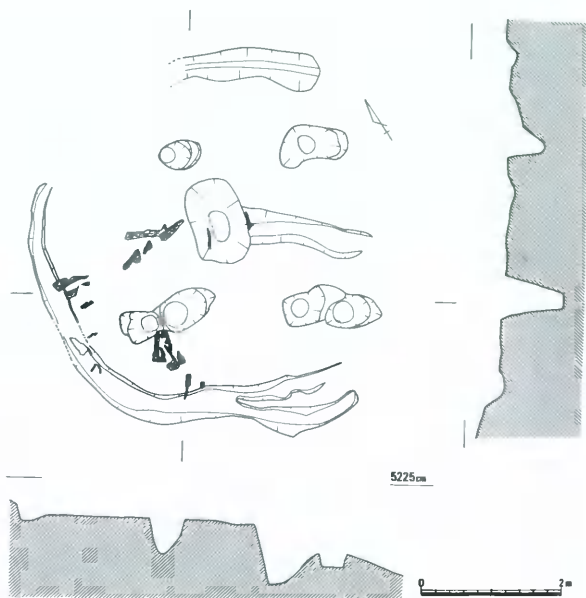
## 第2章 遺構・遺物

### 第1節 弥生時代の遺構・遺物 (第2図)

調査の結果は、18・19号墳の下層と44号墳の北東側に遺構が集中することが判明した。検出した遺構は、竪穴住居2棟、建物3棟、土壇及びその他の柱穴等である。時代としては、弥生時代中期の後半と考えられる。

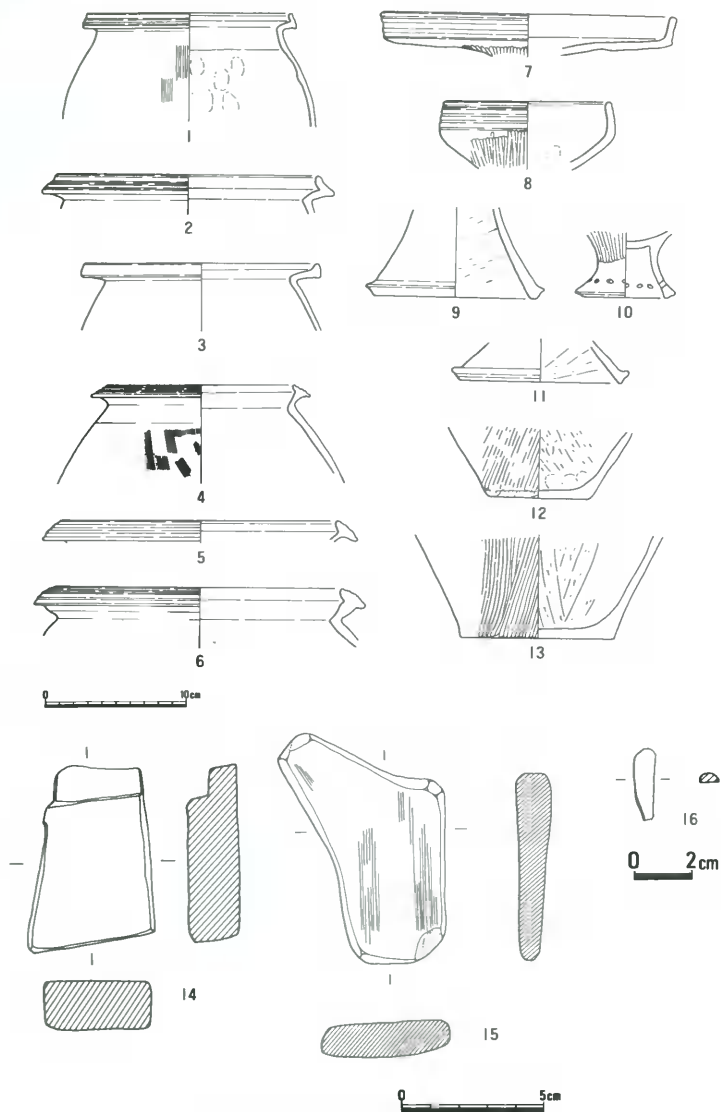
#### 1. 竪穴住居1 (第3図)

44号墳の北東側裾で検出した。丘陵の斜面で検出したため丘陵側の壁帯は遺存するものの反対側は削平されていた。また、農業用水路による削平も一部に見られた。住居跡は、東側を削平されているため全体の形状は不明であるが、ほぼ円形を呈するものと考えられる。住居跡の規模は、径520cmを測るものである。柱は4本柱で、台形に配置されている。また、1回の建替えがあった



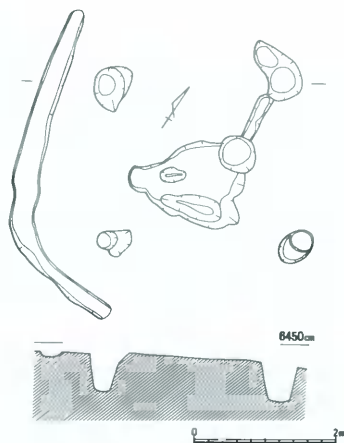
第3図 竪穴住居1 (1/80)

矢部古墳群B



第4図 竪穴住居1出土遺物 (1/4・1/2)

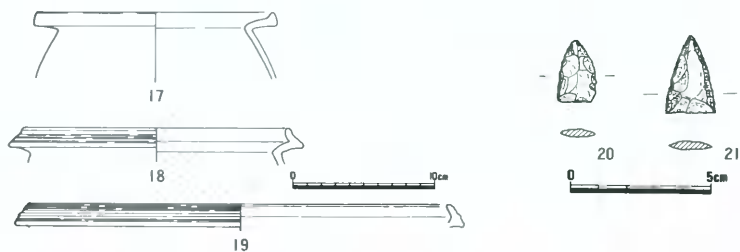
ものと考えられ、南側の2本はそれぞれに重複するように検出した。柱穴間の距離は北側の2本を除いて220cmを測る。北側の2本は200cmを測る。床面のほぼ中央には、中央穴を検出した。



第5図 竪穴住居2 (1/80)

中央穴は、長径120cm、短径80cmを測る。中央穴からは南東に向けて1条の溝を検出したが、その終末については削平されているため不明である。また、床面からは、少量ではあるが炭化材を検出した。

出土遺物(第4図)1~6は、甕であるが、口縁端部が上方に折り曲げられたものと、上下に拡張するものがある。何れも口縁端部外面には、凹線が施される。7・8は、高杯の杯部である。9~11は、高杯の脚部である。脚端部が少し肥厚するもので、内面にヘラケズリが施される。14・15は、砥石である。16は、錘と考えられる鉄器である。



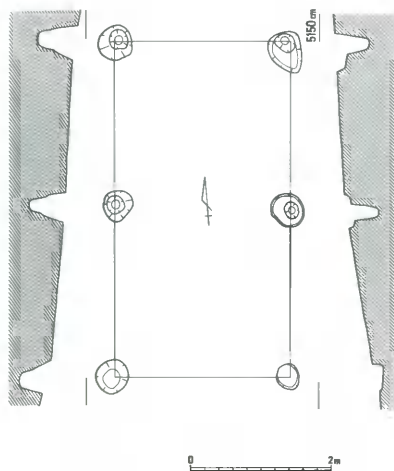
第6図 竪穴住居2出土遺物 (1/4・1/2)

## 2. 竪穴住居2 (第5図)

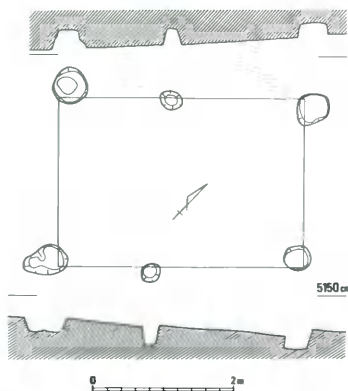
18号墳の下層で検出した。古墳築造時に削平されたものと考えられ遺存状態は悪く壁帯は残存していなかった。壁帯溝は、その一部を検出したのみで、ほとんどは削平されていた。残存する壁帯溝は形状からして隅丸方形を呈するものと考えられる。柱穴は、4本を検出した。柱穴間の距離は、南北が220cm、東西が250cmを測る。4本の柱穴のほぼ中央に浅い窪みを検出した。中央穴と考えられるその窪みの北隅から北東の柱穴に向けて1条の溝を検出した。

出土遺物（第6図）17～19は、甕である。17は、口縁端部が少し肥厚するもので、19は、口縁端部が上方に折り曲げられるものである。20・21は、平基式のサヌカイト製の石鎌である。

### 3. 建物1（第7図）



第7図 建物1 (1/80)



第8図 建物2 (1/80)

堅穴住居1の北約7mの位置に検出した。梁間1間、桁行2間の掘立柱建物である。長軸の方向は、ほぼ北を向くものである。柱穴の平面形はほぼ円形を呈するもので直径約40cmを測る。柱穴内に検出した柱痕の径は約20cmを測る。柱間の距離はそれぞれ240cmを測る。

### 4. 建物2（第8図）

堅穴住居1の北東約5mの位置に検出した。建物1と同じく梁間1間、桁行2間の掘立柱建物である。長軸の方向は北東を向くものである。柱穴の平面形はほぼ円形を呈するものであるが、直径が50～30cmと不揃いである。

柱間の距離は、梁間240cmを測るが、

桁行は不揃いであり、全長は340cmを測る。

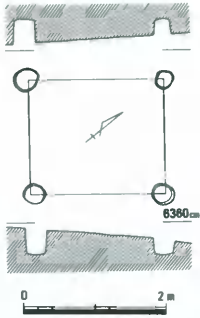
北側の柱間は、190cm、150cmを測り、南側は、210cm、130を測る。

### 5. 建物3（第9図）

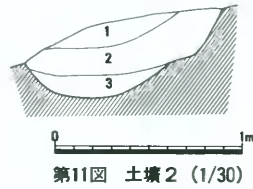
19号墳の下層に検出した。梁間1間、桁行1間の掘立柱建物である。長軸の方向は北東を向くものである。柱穴の平面形はほぼ円形を呈するもので、直径約30cmを測る。柱間の距離は、梁間160cm、桁行190cmを測る。

### 6. 土壌1（第10図）

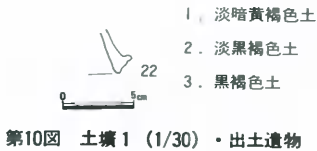
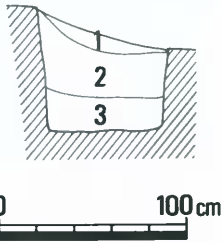
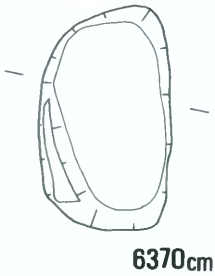
堅穴住居2の南東約4mの位置に検出した。平面の形態は、楕円形を呈するものであり、その規模は長径120cm、短径70cmを測る。



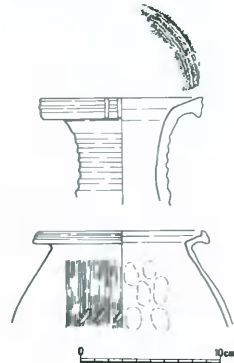
第9図 建物3 (1/80)



第11図 土壌2 (1/30)



第10図 土壌1 (1/30) ・出土遺物



第12図 土壌2出土遺物

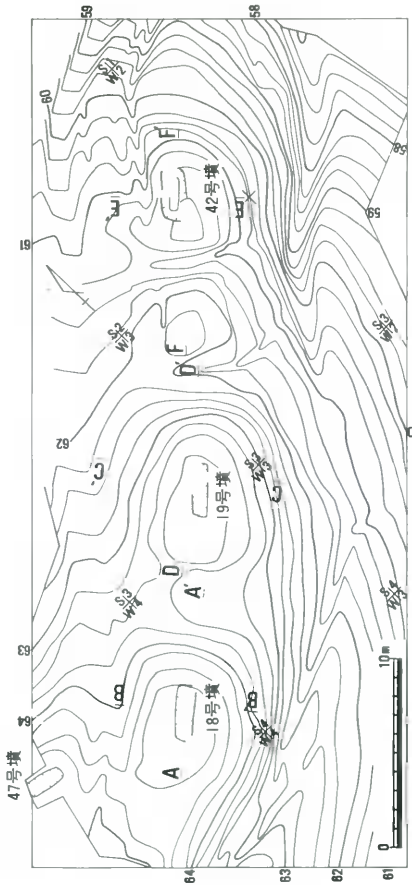


壁帯はほぼ垂直であり、底面は水平に掘られている。検出した深さは68cmを測る。埋土からの出土遺物は極少量であり、形状の判明するものは図示した弥生時代中期後半と考えられる高杯の脚部片1点のみである。

7. 土墳2 (第11・12図)

建物3の北東約2mの位置に検出した。平面の形態は、長楕円形を呈するもので、その規模は長径約240cm、短径90~115cmを測る。断面の形状は、浅くU字状に窪むものであり、検出面

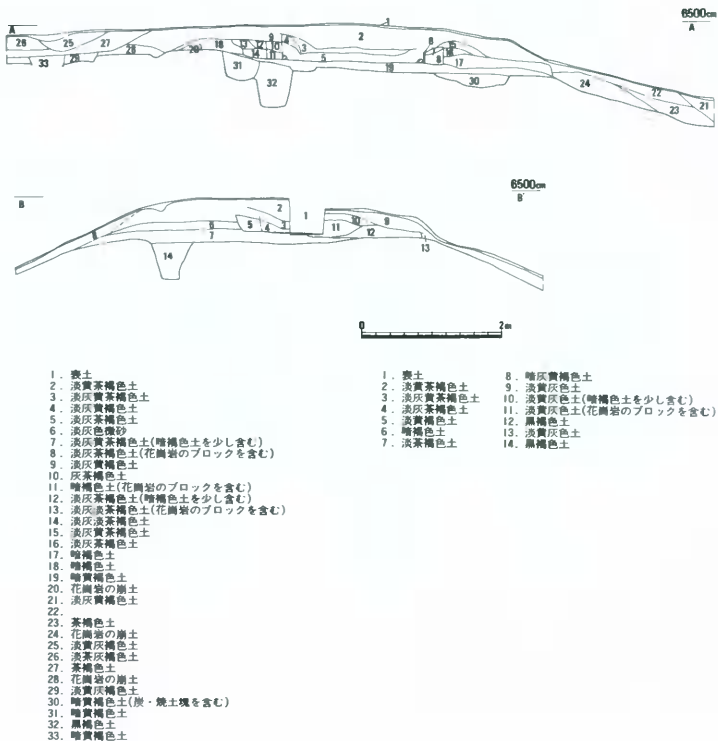
からの深さは40cmを測る。土壌内に埋まる土は3層に分けられ、最下層には炭を多く含んでいた。出土遺物としては、22・23がある。22は、長頸壺で口縁端部外面に棒状の貼り付け浮紋が、また、口縁部内面には櫛描波状紋が施される。23は甕で胴部外面に櫛による刺突紋が、内面には指による押圧痕が見られる。



第13図 18・19・42・47号墳地形測量図 (1/300)

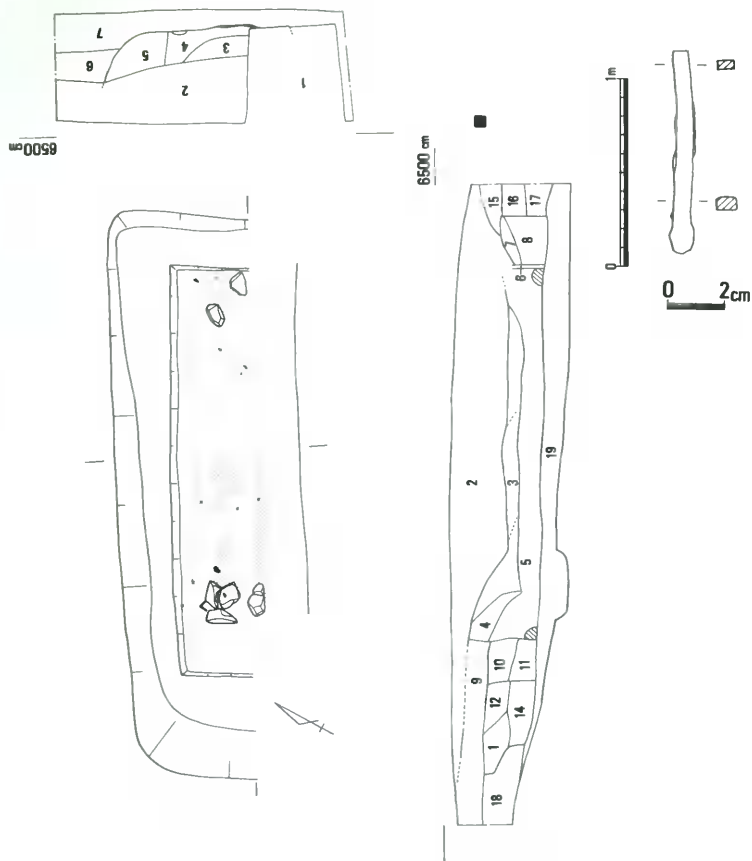
## 第2節 古墳時代の遺構・遺物

日差山から北に伸びる尾根が、平地と接する辺りで幾つもの舌状のものを形成する中の一つに築造された古墳群である。北東方向に伸びた尾根上に、その背部を利用して造られたものである。尾根の南西側斜面は、比較的急な面を見せており古墳が築造される背部において緩やかな面を形成している。倉敷市文化財分布図には、調査対象区内には2基の古墳の記載がある。



第14図 18号墳土層断面図 (1/80)

矢部古墳群B

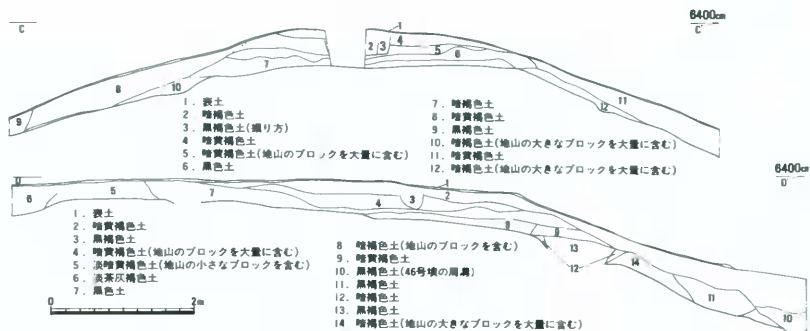


- |                       |                          |             |
|-----------------------|--------------------------|-------------|
| 1. トレンチ               | 8. 淡灰茶褐色土(花崗岩のブロックを含む)   | 14. 淡灰淡茶褐色土 |
| 2. 淡黄茶褐色土             | 9. 淡灰黄褐色土                | 15. 淡灰黄茶褐色土 |
| 3. 淡灰黄茶褐色土            | 10. 灰茶褐色土                | 16. 淡灰茶褐色土  |
| 4. 淡灰黄褐色土             | 11. 暗褐色土(花崗岩のブロックを含む)    | 17. 暗褐色土    |
| 5. 淡灰茶褐色土             | 12. 淡灰茶褐色土(暗褐色土を少し含む)    | 18. 暗褐色土    |
| 6. 淡灰色微砂              | 13. 淡灰淡茶褐色土(花崗岩のブロックを含む) | 19. 暗黄褐色土   |
| 7. 淡灰黄茶褐色土(暗褐色土を少し含む) |                          |             |

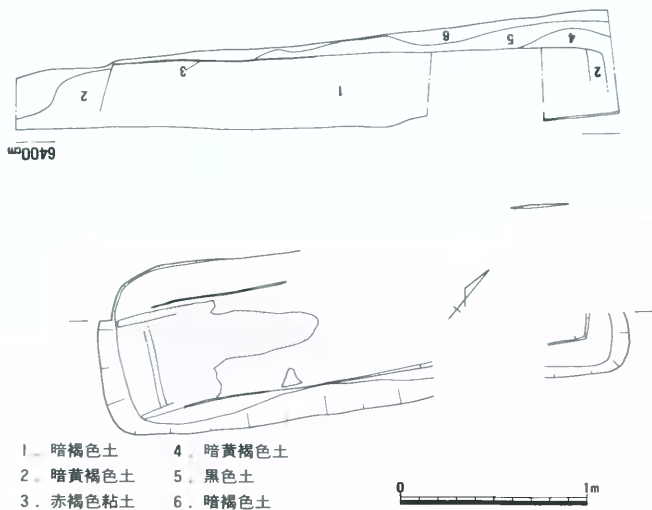
第15図 18号墳主体部平面図・断面図 (1/30) ・出土遺物 (1/2)

矢部古墳群B

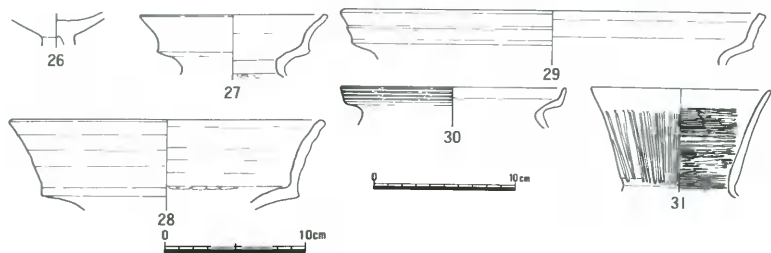
今回調査した18・19号墳がそれに相当する。42～44号墳については、一次調査で新たに発見したものである。47号墳は、調査中に発見したものである。18・47号墳の南西には、全長約50mを測る前方後円墳が存在する。



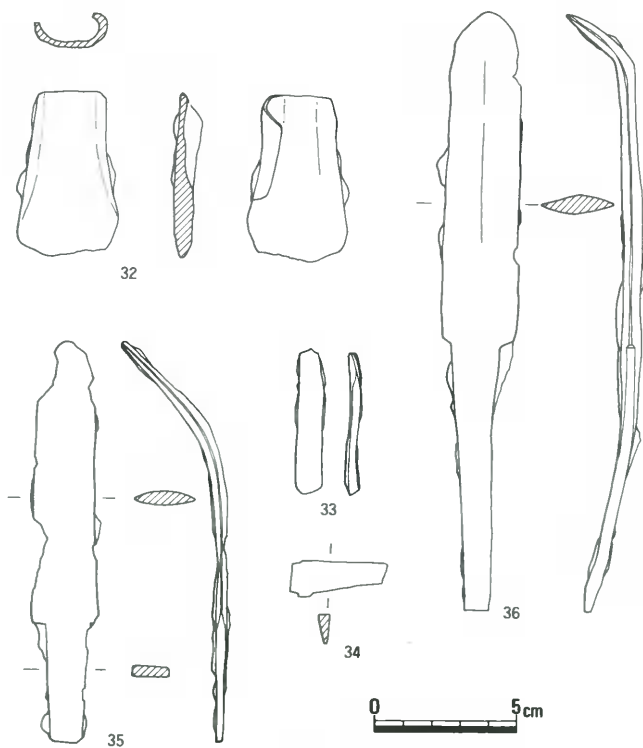
第16図 19号墳土層断面図 (1/80)



第17図 19号墳主体部平面図・断面図 (1/30)



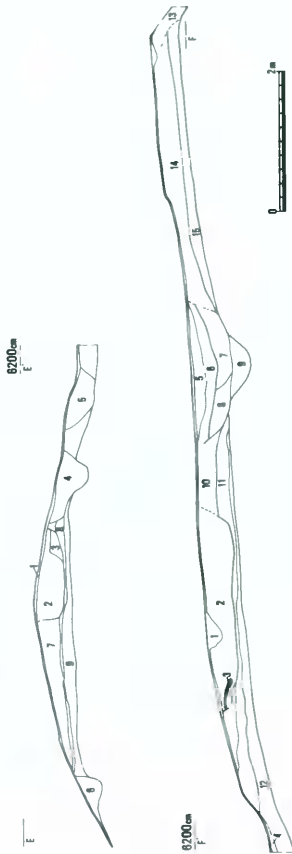
第18図 18・19号墳出土遺物 (1/4)



第19図 19号墳出土遺物鉄器 (1/2)

1. 18号墳 (第13・14・15・18図)

調査区内の最も高い位置で検出した。倉敷市文化財分布図にも記載されている古墳であり、

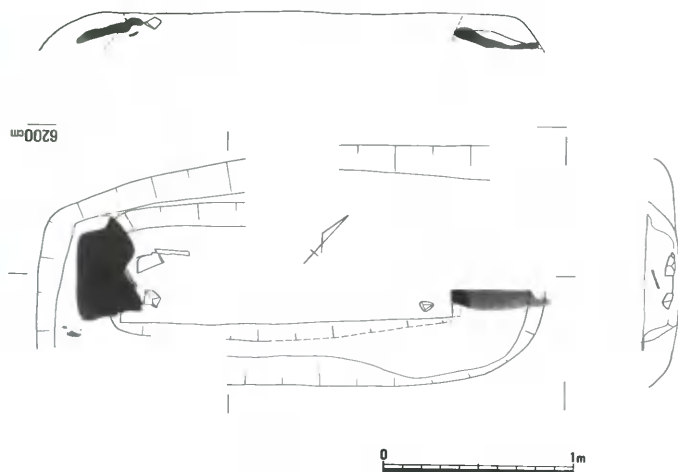


第20図 42号墳土層断面図 (1/80)

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 表土                   | 8. 淡黒褐色土                |
| 2. 暗黄褐色土                | 9. 黒色土(砂質)              |
| 3. 朱                    | 10. 暗黄褐色土               |
| 4.                      | 11. 黒色土                 |
| 5. 暗黄褐色土                | 12. 黒褐色土(地山のブロックを大量に含む) |
| 6. 黒褐色土                 | 13. 暗黄褐色土(地山のブロックを少し含む) |
| 7. 淡黒褐色土                | 14. 暗黄褐色土               |
| 8. 淡黒褐色土                | 15. 黒褐色土(地山のブロックを大量に含む) |
| 9. 黒色土                  |                         |
| 10. 暗黄褐色土               |                         |
| 11. 黒色土                 |                         |
| 12. 黒褐色土(地山のブロックを大量に含む) |                         |
| 13. 暗黄褐色土(地山のブロックを少し含む) |                         |
| 14. 暗黄褐色土               |                         |
| 15. 黒褐色土(地山のブロックを大量に含む) |                         |

地形的にも高まりが見られた。古墳は、北東側には斜面が見られたが、南西側にはそれを区画する状況は明瞭ではなかった。また、古墳の頂上部も平坦に近い状態であった。しかし、土層断面に見られる第25層は周溝の一部と見られるが、平面においては明瞭な状態においては検出できなかった。北西側の19号墳との境は、直線的に尾根を切り放つ状況の溝を検出した。その

ため、北東側の等高線は直線的である。北西側の等高線にも直線的なものが見られるが、一部は山道の影響が考えられる。しかし、北、および東に等高線の角張った部分が見られることは、この古墳は方墳である可能性が高いものとする。古墳の規模は、長辺約7m、短辺約5mを



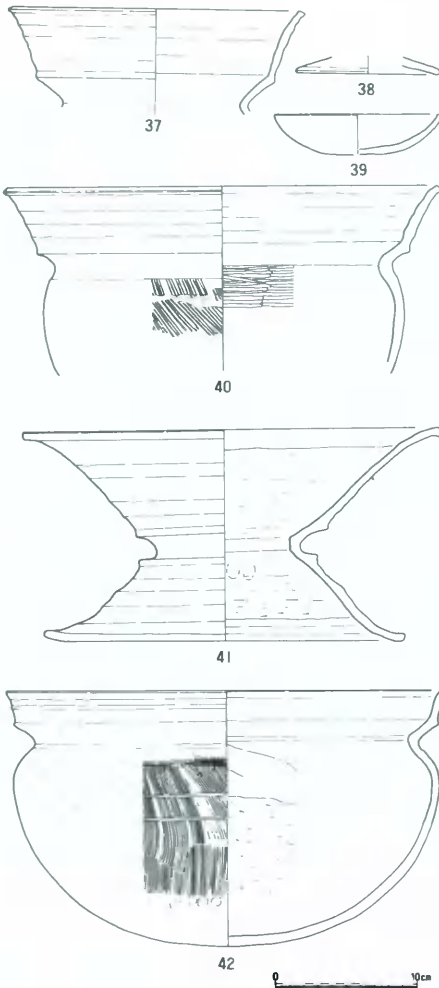
第21図 42号墳主体部平面図・断面図 (1/30)

測る。

古墳のはば中心から木棺直葬の主体部を検出した。主体部の掘り方は、隅丸の長方形を呈するものである。主体部掘り方の南側は一次調査トレンチのため上端部は不明であるが、下端部の一部は検出できた。主体部掘り方の上端の規模は長さ3mを測る。下端の規模は、長さ260cm、幅70cm～90cmを測る。この掘り方のはば中央に木棺が置かれたものである。その床面からは、粘土と朱を検出した。棺内の西側に数個の石を検出した。置かれた状態から枕石と考えられる。棺は長方形を呈するもので、長辺220cmを測る。棺内の出土遺物として、断面が長方形を呈するが器形の不明な鉄器が出土している。墳丘からの出土遺物として図示できる遺物として29がある。鉢の口縁部と考えられる。

## 2. 19号墳 (第13・16～19図)

18号墳に接して北東側に存在したもので、倉敷市文化財分布図にもその記載が見られる。調査前の古墳の上面は平坦で、42号墳側に斜面が見られる。18号墳と42号墳との境は尾根を切り放つように直線的に溝が掘られている。第16図の下段の断面図の第6・11層がそれに相当す



第22図 42号墳出土遺物 (1/4・1/1)

形成した鉄斧である。33は鉈、34は刀子である。35・36は折れ曲がっているが短剣である。墳丘の調査からは26・28の土器が出土している。26は精製粘土で作られる高杯で、28は壺の口縁

る。掘られた溝が直線であるため、北東側の等高線も直線的である。また、全体的な等高線の廻りかたは方形的である

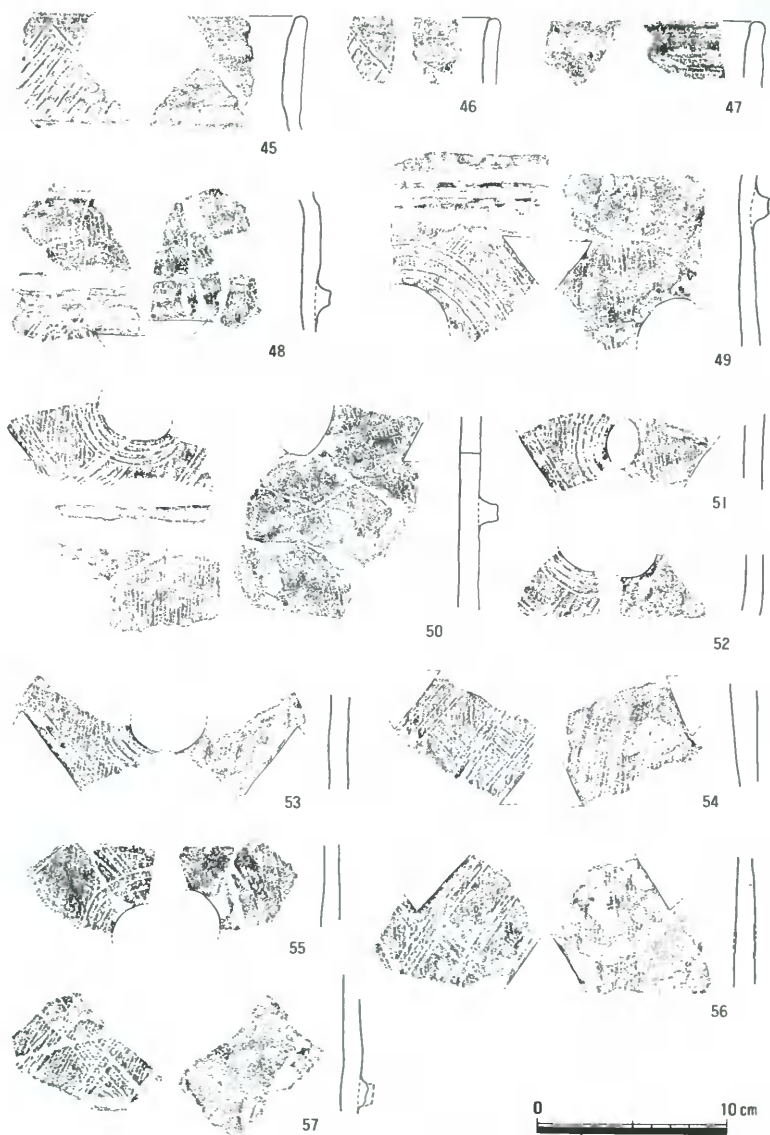


ことからして、方墳であると考えられる。古墳の規模は、長辺約10m、短辺約8mを測る。

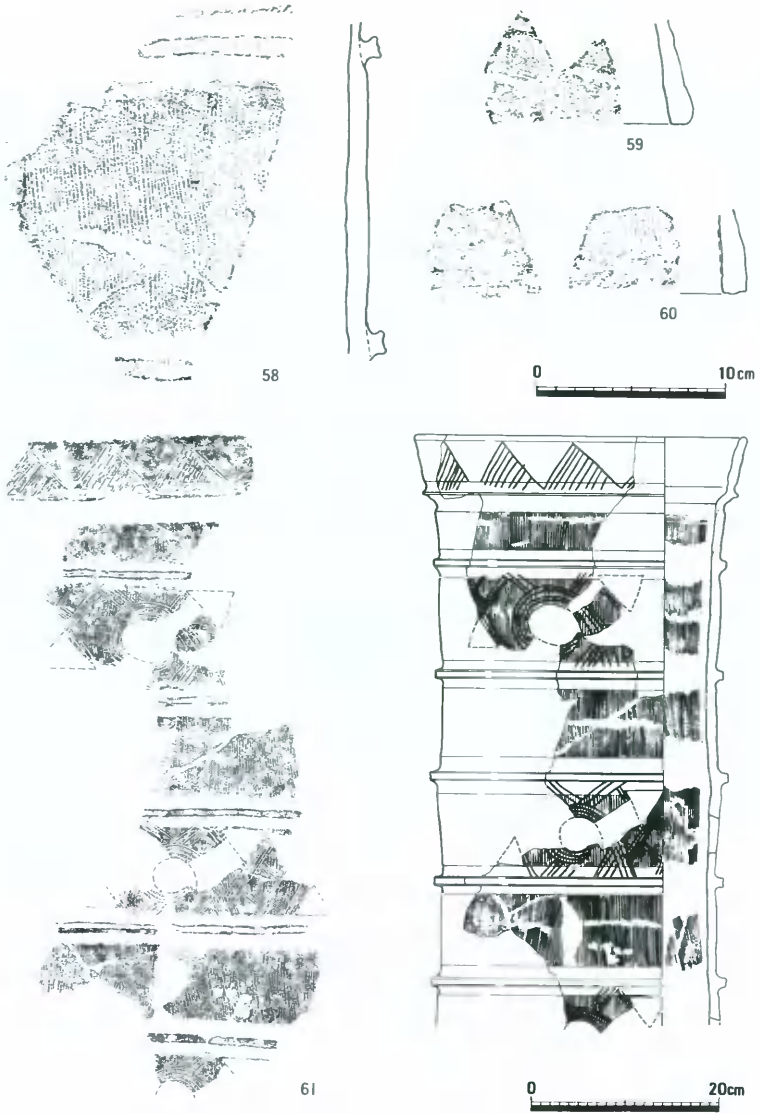
古墳のほぼ中央に木棺直葬の主体部を検出した。主体部掘り方は隅丸の長方形を呈するものであるが、一次調査トレンチのため不明な部分があるが、長さ280cm、幅90cmを測る。掘り方の内部に木棺の痕跡を検出した。木棺痕跡は掘り方ほぼいっぱいに検出した。また、床面より検出した粘土から木棺の形状が判明した。判明したのは南西側であり、北東側はトレンチにより不明である。検出した粘土の状態から、木棺の側板に小口板が狭まれるもので、側板の端部から少し内側よった位置にある。木棺の幅は52cm、側板の全長240cmを測る。

木棺の床面から一次調査時に鉄器が出土した。出土した位置は、平面図(第17図)の方位付近である。32は両側を折り曲げて袋部を

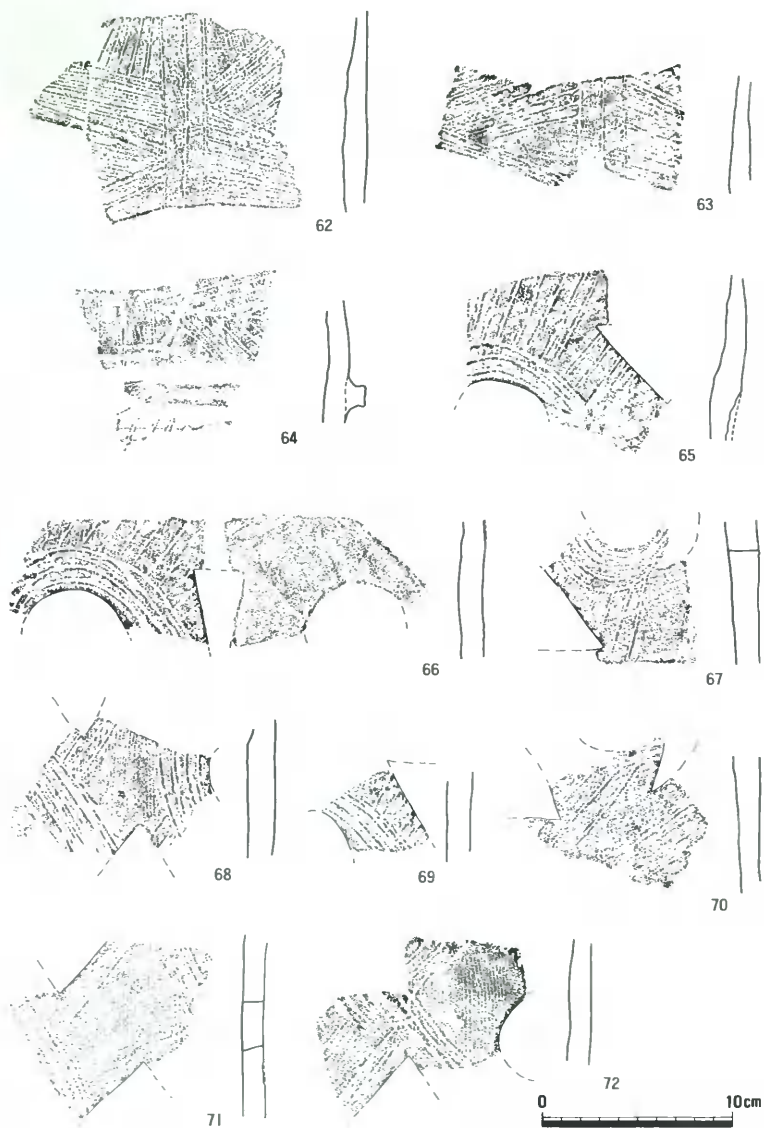




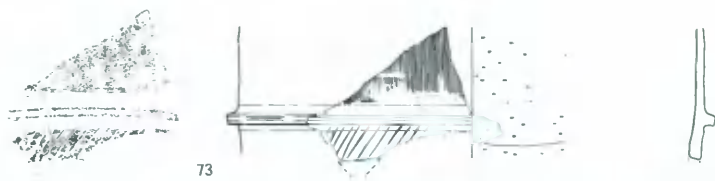
第23図 42号墳出土遺物 (1/3)



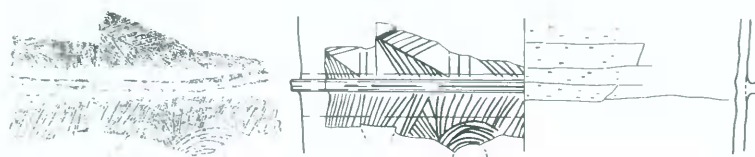
第24図 42号墳出土遺物 (1/3・1/6)



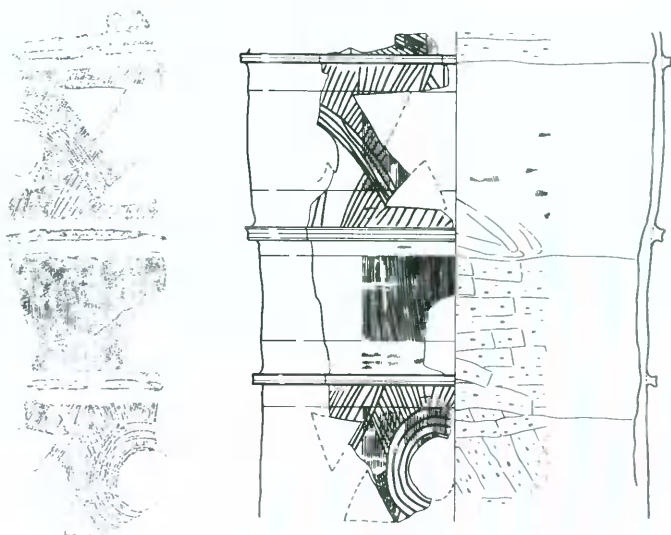
第25図 42号墳出土遺物 (1/3)



73



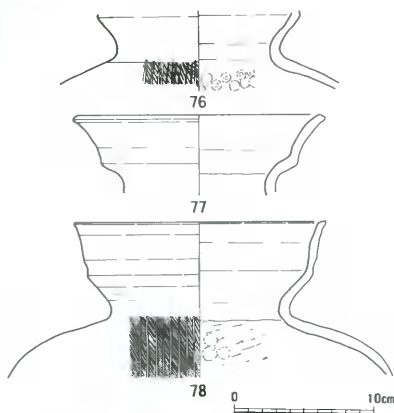
74



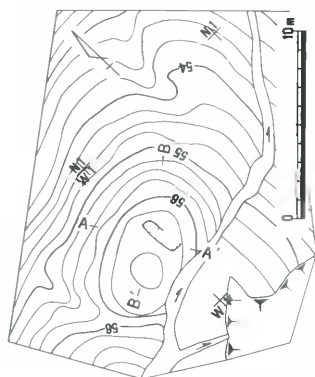
75



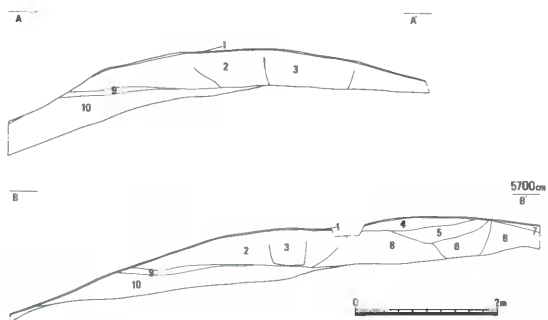
第26図 42号墳出土遺物 (1/6)



第27図 46号墳出土遺物 (1/4)

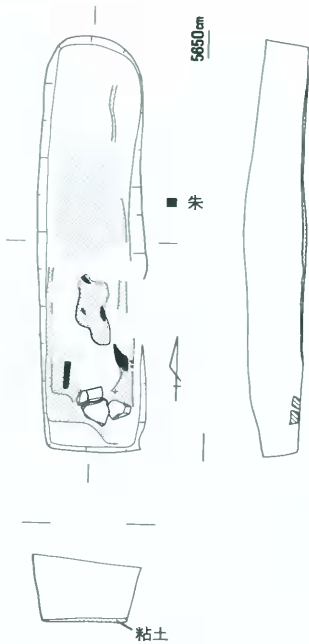


第28図 43号墳地形図 (1/300)

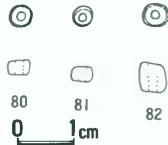
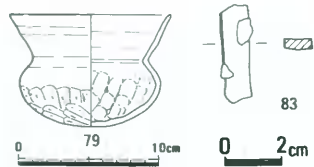


- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| 1. 表土                  | 6. 黒褐色土     |
| 2. 暗褐色土(地山の小さなブロックを含む) | 7. 暗黄褐色土    |
| 3. 暗褐色土                | 8. 黒褐色土     |
| 4. 暗褐色土                | 9. 黒色土(旧地表) |
| 5. 淡黒褐色土               | 10. 暗黄褐色土   |

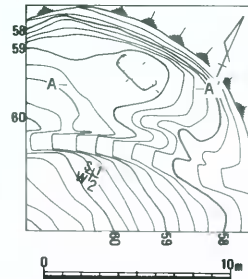
第29図 43号墳土層断面図 (1/80)



第30図 43号墳主体部平面図・断面図 (1/30)

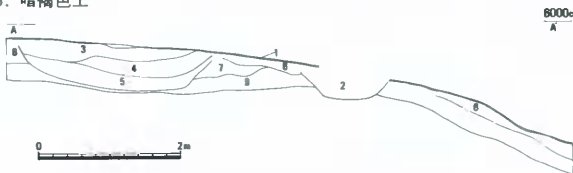


第31図 43号墳出土遺物 (1/1・1/2・1/4)

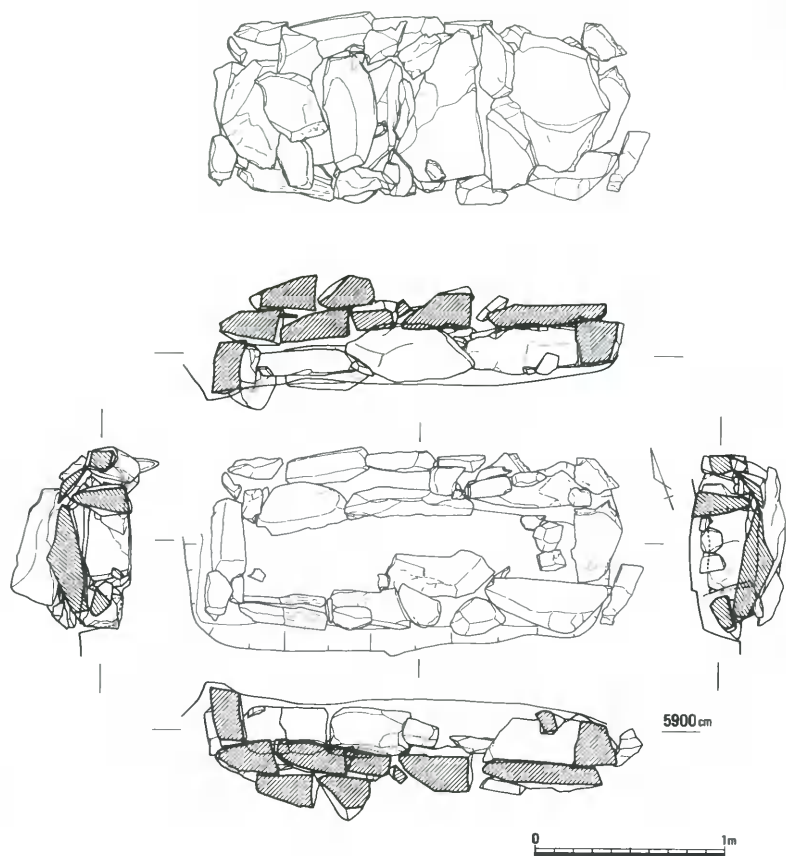


第32図 44号墳地形測量図 (1/30)

- |              |                     |
|--------------|---------------------|
| 1. 表土        | 6. 暗黄褐色土            |
| 2. 暗褐色土(掘り方) | 7. 暗褐色土             |
| 3. 暗黄褐色土     | 8. 暗黄褐色土            |
| 4. 淡黒褐色土     | 9. 暗褐色土(地山のブロックを含む) |
| 5. 暗褐色土      |                     |



第33図 44号墳土層断面図 (1/80)

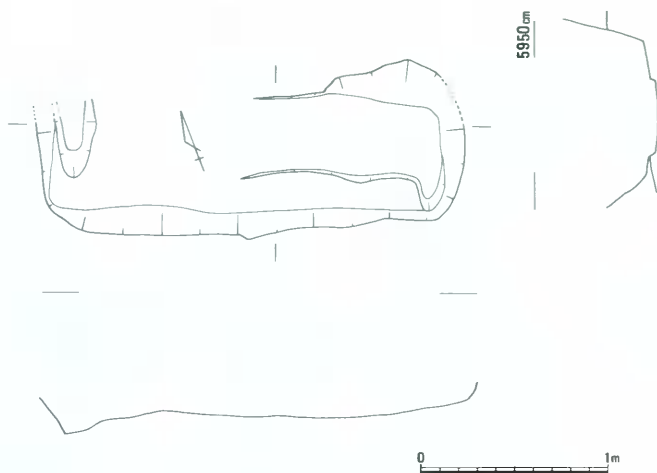


第34図 44号墳主体部平面図・断面図 (1/30)

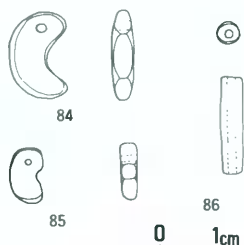
部である。27・30・31は、18・19号墳の間に掘られた溝から出土したものである。27は壺、30は甕、31は小型の壺で内外面に丹塗りが見られる。

### 3. 42号墳 (第13・20～26図)

19号墳の北東側に接するように存在したもので、一次調査においてその存在が知られるところとなった。19号墳の墳端から北東に向けて非常に緩やか下るもので、墳丘状の盛り上がりは見られなかった。しかし、19号墳の墳端から約5mの位置で尾根に直行に掘られた溝を検出し



第35図 44号墳主体部掘り方平面図・断面図 (1/30)



第36図 44号墳出土遺物 (1/1)

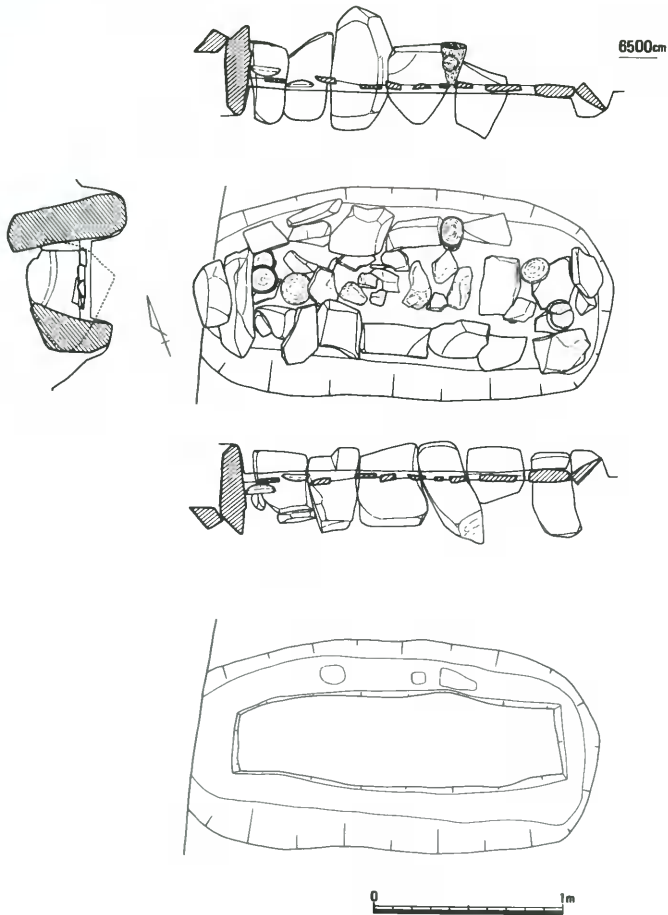
た。墳丘はこの溝より北東側に築造されるものである。墳丘を廻る等高線を見ると溝に接する部分は直線的であるが東側は弧を描く。北側は山道により大きく変形している。そのためこの古墳の墳形は確定しがたい。古墳の規模は、長径6.5m、短径5mを測るものと考えられる。

墳丘のはほぼ中央で主体部を検出した。盛土の多くは流出したものと考えられ、表土除去後の浅い位置で検出した。主体部の掘り方の平面形は隅丸の長方形を呈するもので、長さ270cm、幅約100cmを測るものである。掘り方内にはややまとまった量の朱を検出した。朱の出土状態と棺痕跡の状況からすれば、朱は棺外に置かれた可能性が高い。また、層位中の棺痕跡は明瞭ではないが、断面図(第21図)に示す破線が概ねその位置と考えられることから、小口板の外側に置かれたものと考えられる。棺内の南西側に2個の石を検出した。この石は枕石と考えられ、その外方に朱のまとまりが見られた。また、その反対側にも朱のまとまりが見られた。棺痕跡は長方形を呈するもので、長辺190cm、短辺70cmを測る。棺内からは、淡いブルー色を呈するガラス製小玉が2個出土した。

第22図は、周溝から出土したものがほとんどで、41・42は2個体が並んだ状態で溝の底面か

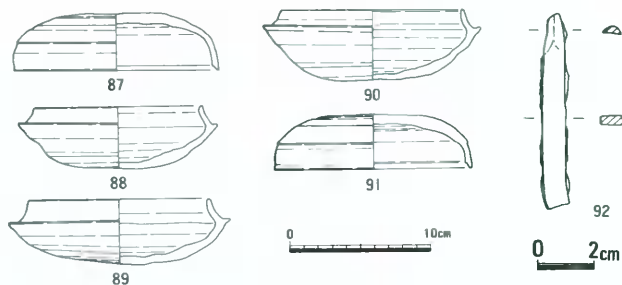


矢部古墳群B



第37図 47号墳主体部平面図・断面図，掘り方平面図（1/30）

ら出土した。41は、内外面に丹塗りを施した鼓形器台である。42は、鉢であり整理中に判明したことであるが、18号墳出土の破片とも接合するものが見られた。墳丘上からは特殊器台形埴輪の破片が出土した。埴輪は、ほぼ一ヶ所に固まるものであるが、この古墳に据え置かれた状況は見られなかった。また、円筒棺等のように二次転用も考えたがその様な出土状態でもなく、



第38図 47号墳出土遺物 (1/4・1/2)

各破片が不規則に散在するものであった。埴輪は内面の調整と文様から2個体が考えられる。61は図に示すように内面に縦方向にハケメが施されるものである。口縁部外面にはヘラ描きによる鋸歯文が描かれ、その内部は左下がりの斜線が施される。文様帯には蕨手文と斜行する沈線が施される。蕨手文の中心には右下に端部を置く巴文の透し孔が施される。蕨手文は右下がりに突帯まで描かれる。蕨手文と蕨手文の間には3条の左下がりの斜線が描かれる、その間には短く右下がりの斜線が描かれる。この斜行する沈線文の間に上向き、下向きの三角透し孔が施される。文様帯は3段と考えられ、交互に無文帯が配置されるものである。75は、内面にヘラケズリが見られるものである。文様帯は、2種類ある。蕨手文の施される文様帯は、蕨手文の中心に右下に端部を置く巴文の透し孔が施される。蕨手文は右下がりに描かれ、脚部は上向きの三角透し孔により切られる。この脚部と三角透し孔の下部には、左下がりの斜線が描かれる。蕨手文の右肩部に下向きの三角透し孔が施され、その右斜辺に平行に2本の斜線が描かれ蕨手文の左肩部にかけて短い斜線が描かれる。もう一つの文様帯は、縦に3本の沈線を描くことにより方形の区画を設け、その区画内に右下がり、左下がりの斜線により文様を描くものである。その文様も62・63のように区画内を三角形状に区切りその内部を斜辺に平行に斜線で埋め尽くされるものと、64・74・75のように区画内を三角形状に区切った線を軸に綾形状に斜線が描かれるものとがある。文様帯の構成を考えると、最下段に基底部となる無文帯、その上に蕨手文の文様帯、無文帯、蕨手文の文様帯、綾形状の文様帯、蕨手文の文様帯、無文帯と配置されるものと考えられる。口縁部の形状については不明である。

#### 4. 46号墳 (第13・20・27図)

19号墳と42号墳の間に5m四方程の空間が存在するため、46号墳として調査した。42号墳と19号墳との間の溝は直線的であるのに対し、19号墳と19号墳との間にある溝は南側において46号墳を廻るように

少し曲がる。そのこともあって古墳の可能性を考慮に入れて調査した。しかし、主体部と考えられるものは検出されなかった。墳丘の調査中に第27図に示す遺物が出土している。76は溝からの出土であるが78は墳丘と考えられる部分からの出土である。

#### 5. 43号墳（第28～31図）

一次調査で新たに発見した古墳である。42号墳から比高差約4mと一段低い位置に存在した。古墳の南側は用水路により削平されていること、北側はやや急な斜面になることもあって溝は明瞭には検出できなかった。しかし、断面図（第29図）の6層が丘陵と古墳とを分ける溝と考えられる。古墳は、径約5mを測る円墳と考えられる。

墳丘のほぼ中央で木棺直葬の主体部を検出した。主体部の掘り方は長方形を呈するもので、長辺220cm、短辺60cmを測る。掘り方の床面からは、粘土と朱を検出した。粘土は、床面の幅いっぱい広がる部分と、細く帯状に検出できた部分とがある。帯状に検出できた部分は側板の痕跡と考えられる。掘り方の南側に3個の石を検出した。朱の散布もこの付近に多く見られる。石は、枕石と考えられ、南側に頭位を想定できる。

棺内からの出土遺物として淡いブルー色を呈するガラス製小玉3点と形態の不明な鉄片1点がある。墳丘からの遺物として79がある。小型の壺で、底部の外面にヘラケズリのあとナデが、内面にはユビオサエが施されるものである。

#### 6. 44号墳（第32～36図）

この古墳も一次調査において新たに発見した古墳で、42号墳の北側に位置するものである。古墳は、北側は、急な斜面になっており、南側は山道により一部変形している。墳丘の南西側には、尾根を切るように溝を検出した。古墳は、径約5mを測る円墳と考えられる。

墳丘のほぼ中央部で主体部を検出した。主体部は、板状の石を組み合わせた石棺である。石棺は、板状の石を立てて側壁にするもので、南側は小口の石の外まで伸びるが、北側は、小口の石の間に納まるものである。蓋石は、東側は1段のみであるが南側は2重に置かれている。床面は、西に向けて少し下がり、東側に枕石と考えられる石を3個検出したことから、東に頭位を想定できる。石棺の内法は、長さ178cm、幅40cmを測る。

出土遺物としては、ひすい製の勾玉2個、碧玉製の管玉1個が棺内から出土している。84は、長さ1.59cm、幅1.0cm、重さ0.7g、85は、長さ1cm、幅0.59cm、重さ0.4g、86は、長さ1.71cm、径0.42cm、重さ0.5gを測る。

#### 7. 47号墳（第13・37・38図）

18号墳の西側に検出した。用地境で検出したため溝については不明である。表土直下で検出したため盛土は確認されていない。検出時において蓋石は存在していなかった。また、東側の小口石も取り去られていた。石棺の側壁は、板状の石を縦に使用するもので、小口石と小口石

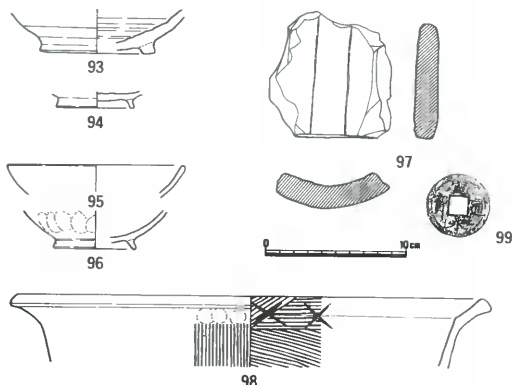
矢部古墳群B

の間に納まるものである。棺の内法は、長さ170cm、幅30～40cmを測る。床面にも板石を敷詰めるものである。

出土遺物として床面より杯蓋2点、杯身3点と、鉄製の鉋1点がある。

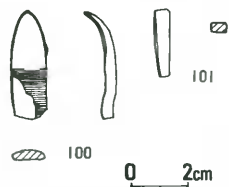
### 第3節 遺物 (第39~45図)

第39図は、古代から近世にかけての遺物である。量的には少ないが出土している。ただし、その時代の遺構は検出されていない。93は、須恵器の壺底部と考えられるものである。古代に属するものと考えられる。94~96は、中世の土師器碗である。97は、時期は不明であるが瓦で



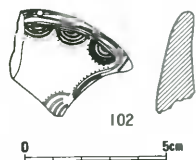
第39図 出土遺物 (1/4)

ある。98は、中世の土鍋である。100・101は、鉋で堅穴住居1の埋土からの出土の可能性が非常に高い。弥生時代と考えられる。102は、堅穴住居1を含めその周辺の遺構検出中に出土した分銅形土製品である。クシによる弧文、刺突文、ヘラガキ沈線文で施



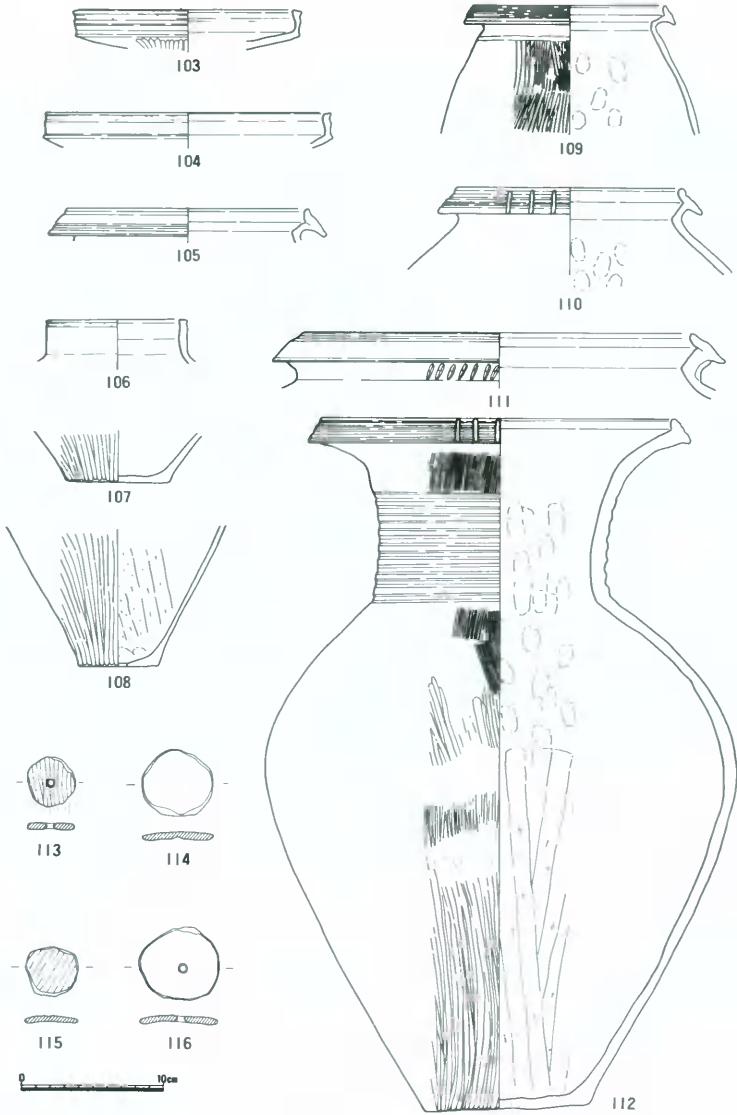
第40図 出土遺物鉄器 (1/2)

文される。端部上面には裏面に抜ける小孔が穿たれる。第42図は、堅穴住居1、建物1・2の検出中に出土したものである。103・104は、高杯、105・109・110・111は、甕である。どれも口縁端部が上下に拡張されるものである。112は、壺である。胴部内面の下半はヘラケズリ、上半はユビオサエが見られる。口縁端部は、上下に拡張されるもので、頸部には凹線文が施される。113・116は、土器を打ち欠いて作った紡錘車である。114・115は、土器を打ち欠いて外形のみできたもので穿孔途中のものである。第43図は、堅穴住居2の周辺から出土したものである。117・121・124は、壺である。117は口縁端部が少し肥厚するものである。118・122・123・125・126は甕である。口縁端部は、上下に拡張する。127は、無頸壺である。外面にはヘラガキによる斜格子が見られる。128・129・130は、高杯



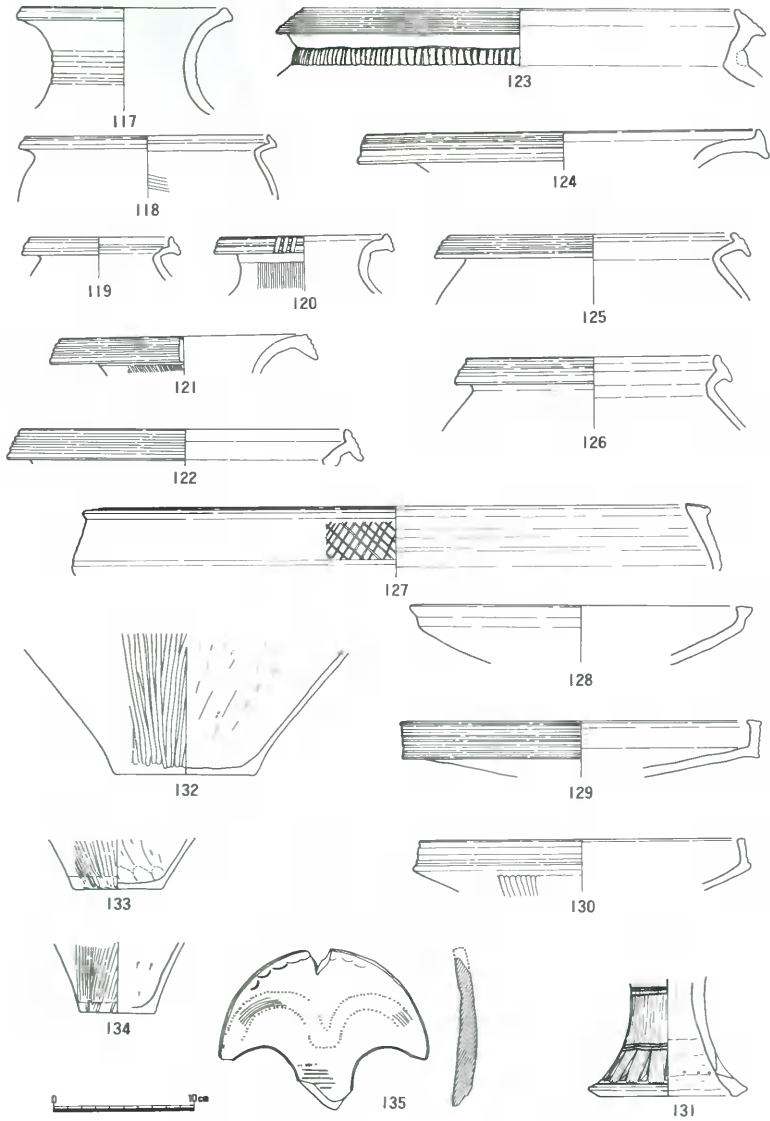
第41図 出土遺物分銅形土製品 (1/2)

矢部古墳群B



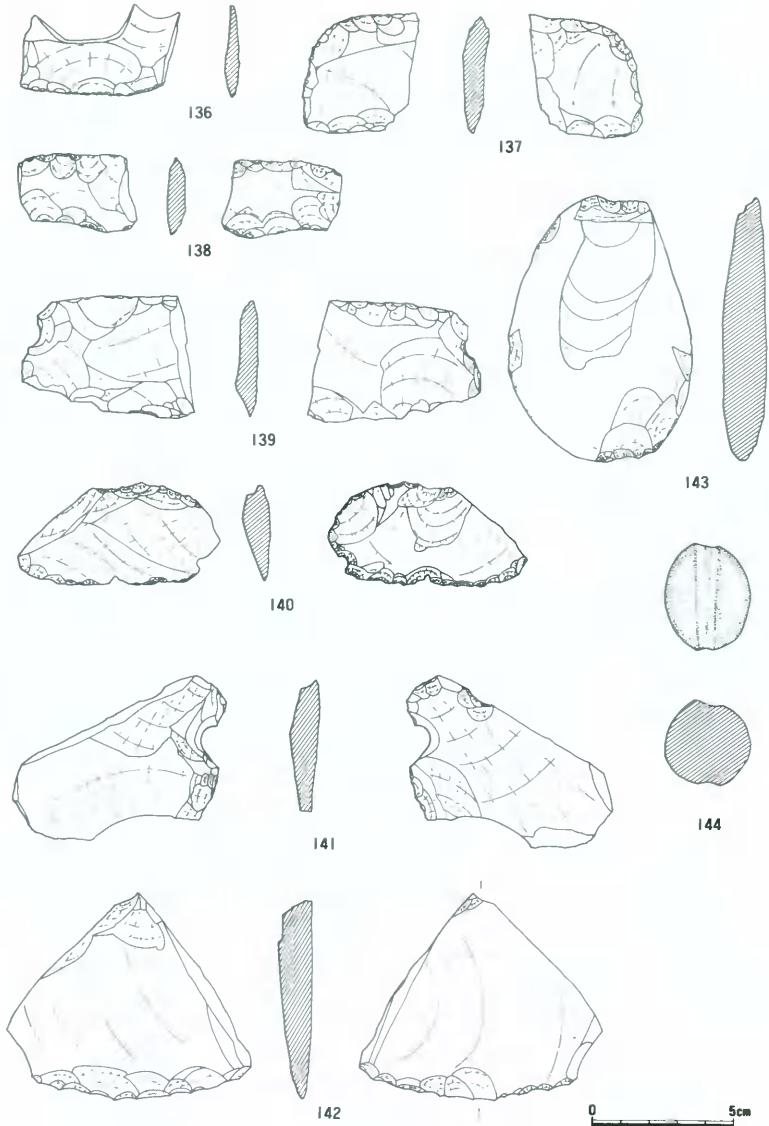
第42図 出土遺物 (1/4)

矢部古墳群B



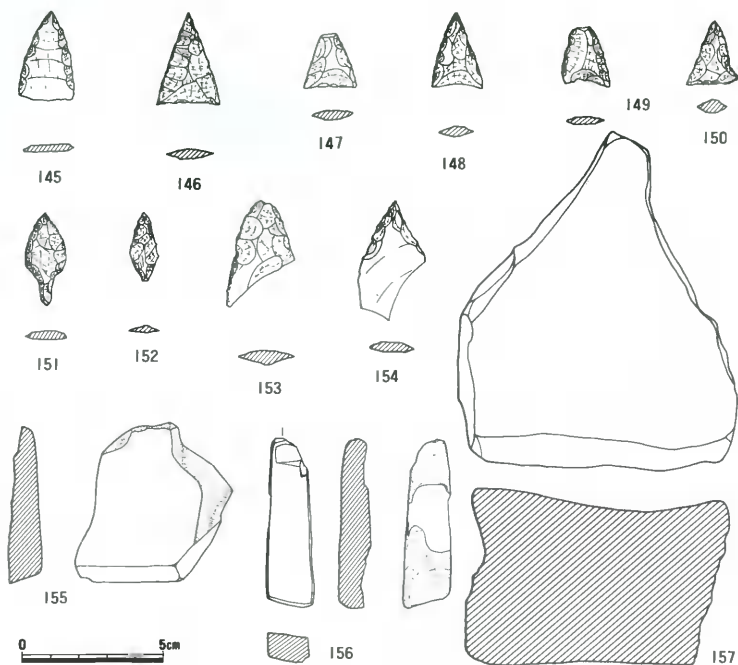
第43図 出土遺物 (1/4)

矢部古墳群B



第44図 出土遺物石器 (1/2)





第45図 出土遺物石器 (1/2)

の杯部である。135は、分銅形土製品の大型のもので長径14.9cmを測るものである。136～142はサヌカイト製の石庖丁である。143は扁平な石の両端を打ち欠いて作った石錘である。144は、円形な石に溝を掘りこんだ石錘である。145～154は、サヌカイト製の石鎌である。155～157は、砥石であり、157は堅穴住居2の遺物の可能性がある。

### 第3章 まとめ

弥生時代の遺構として調査したのは、堅穴住居2棟、掘立柱建物3棟、土壙2基、その他の柱穴等である。古墳築造時の削平等があり、全体に依存状態は悪い。また、遺跡の立地としても痩せ尾根上に営まれており継続的な居住地とは考えられない。出土した土器から見ても弥生時代中期後半のほぼ一時期である。石器を見ると、石庖丁、石錘、石鏃、砥石が出土しており稲作農耕に、漁労に、狩猟にと当時の生活を窺わせる遺物である。堅穴住居は2棟しか検出していないにも係わらず砥石が5個出土していることは鉄器の普及に見るべきものが有ることを示唆しているようである。堅穴住居1から出土した炭化材の年代測定によると1980±40 BP (KSU-2130) とする結果報告を得ている。

古墳は、6基を調査した。この中にあって47号墳のみが須恵器を副葬している。この須恵器の時期からして6世紀中頃と考えられ、他の5基の古墳とは明らかに新しい時期の古墳と言える。他の古墳は、時期的に相前後するものと考えられる。各古墳とも埋葬主体は1基のみで、複数有るものは検出されていない。主体部の主軸の方向を見ると18号墳、19号墳、42号墳は北東を向き概ね同一の方向を向く。それに対し43号墳は北を向き、44号墳は東南東をむく。頭位の方向を見ると、19号墳は不明であるが18号墳、42号墳は南西を向き、立地する尾根の方向と平行している。43号墳は南を向き尾根とは直行する。44号墳は、東南東を向き18号墳等とは反対を向いている。

墳丘上もしくは古墳に伴う溝から出土した土器を見ると、18号墳、19号墳、42号墳にはほとんど形態に差がなく、同時期に近い状態の下に築造された可能性が高いものと考えられる。また、頭位の向く方向に何か意味が有るとすれば、今回調査した調査区の外側に所在する前方後円墳を意識しているとも考えられる。43号墳は、これらの古墳と比べると若干時期が新しいものとされるであろう。44号墳は、時期が判明するような遺物の出土がないので明確にはし得ないが43号墳とは近い時期のものと考えておきたい。

42号墳の墳丘から出土した特殊器台形埴輪は、都月型埴輪に含まれるもので、制作技法、文様の差から2個体が考えられる。しかし、それらは本来からその場所に有ったものではなく、転用も可能性は薄いと考えられる。それが二次転用であるとしても、他の何処からか持ち込まれたものと推測される。第24図61に代表されるものは、都月Ⅰa類とその文様構成が非常によく類似している。と言うよりほとんど同じ文様と言えるであろう。(註1) また、第26図75は、蕨手文と蕨手文の間に左下がりの斜線が入らないため、文様の間隔は狭い。これに類似したものとしては、文様帯の幅は異なるが纏向遺跡出土のものをあげることができる。何れにして

矢部古墳群B

も、都月 I a 類の文様から斜線文帯を省略したものであり、61より新しい要素を持つものと考えられる。(註2)

18号墳と42号墳、43号墳の主体部から赤色顔料が出土している。その分析結果を見ると、18号墳と43号墳は水銀朱であり、42号墳はベンガラであるとの報告がある(報告論文後掲)。赤色顔料の出土位置を見ると、何れも主体部分掘り方内ではあるが、18・43号墳は棺内であるのに対して42号墳は棺外で検出されている点が異なっている。(井上)

.....

註1 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第5号考古学研究会 1967年2月

註2 春成秀爾 「箸墓古墳の埴輪」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集「箸墓古墳の再検討」  
1984年1月

高井健司 「1号墳出土埴輪と都月b類」『七つぐろ古墳群』七つぐろ古墳群発掘調査団 1987年

矢部古墳群B

表-1 土器観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			形態・手法 の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1	弥生	甕	14.4				(内)ぶい黄橙色 (外)橙	微粒子の砂粒、雲母を含む	スス付着
2	"	"							
3	"	"							
4	"	"	13.1				(内)ぶい黄橙 (外)浅黄橙	1mm以下の砂粒を含む	
5	"	"	21				(内)ぶい橙 (外)"	2mm以下の砂粒、黒雲母	
6	"	"	20.2				(内)橙 (外)浅黄橙	1mm以下の砂粒を含む・赤色土粒、黒雲母	
7	"	高杯	20.5				(内)灰黄橙 (外)灰黄褐	0.5mm以下の砂粒 金雲母	
8	"	"	11.4				(内)浅黄橙 (外)橙	微粒子の砂粒、黒雲母・金雲母を含む	
9	"	"		10.6			(内)浅黄橙 (外)ぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	
10	"	"		5.5			(内)ぶい橙 (外)ぶい黄橙	1mm前後の砂粒	
11	"	"		11.4				1mm前後の砂粒を含む	
12	"	甕		7.2			(内)黒 (外)灰白	微粒子の砂を少し含む	
13	"	"		10.8			(内)淡黄 (外)浅黄	0.5mm以下の砂粒を含む	
17	"	"	16.5				(内)黄橙 (外)"	1mm前後の砂粒を含む	
18	"	"	18.4				"	"	
19	"	"							
22	"	高杯					(内)淡黄 (外)浅黄橙	1mm以下の砂粒を含む	
23	"	壺	11.4				(内)橙 (外)橙	1mm以下の砂粒、黒雲母を含む	
24	"	甕	11.6				(内)浅黄橙 (外)"	微砂を含む	
26	"	高杯				杯部内面は円滑に仕上る	(内)橙 (外)"	赤色粒を含む 精製粘土	
27	"	壺	12.2				(内)ぶい黄橙	1mm以下の白色砂粒を含む	
28	土師器	"	21.85				浅黄橙	白色小砂粒を含む	

矢部古墳群B

29	土師器	鉢	30.7					浅黄	1mm以下の白色砂粒黒雲母を含む	
30	"	甕	15.6					(内)橙 (外)橙	1mm前後の白色砂を含む	
31	"	壺	12.7					にぶい赤褐	1mm以下の白色砂粒、雲母を含む	内外面丹塗り
37	"	"	20.1					にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を含む	
38	"	高杯						浅黄	1mm以下の白色砂粒を含む	
39	"	皿	11.5					浅黄	白色砂粒、黒色粒を含む	
40	"	鉢	30.27					(内)にぶい黄褐 (外)にぶい褐	2mm以下の白色砂粒を含む	
41	"	器台	29.6	25.5	15.5	内面ヘラケズリ 後に指ナデ?		明赤褐	白色小砂粒を含む	内外面丹塗り
42	"	鉢	31.2		18.1			橙黄灰		
45 ~75	"	埴輪								
76	"	壺						にぶい橙	2mm以下の白色小砂粒を含む	
77	"	"	17.2					橙	" 赤色粒を含む	
78	"	壺	18.7					(内)にぶい橙 (外)橙	1mm以下の白色砂粒を含む	
79	"	"	11.4		8			にぶい黄橙	長石・石英を含む	
87	須恵器	杯蓋	14.4		4.0			(内)暗青灰 (外)青灰	微砂を少し含む	
88	"	杯身	11.8		4.45			(内)暗紫灰 (外)青灰	"	
89	"	"	12.6		4.7			(内)青灰 (外)"	"	
90	"	"	12.9		5.2			青灰	"	
91	"	杯蓋	14.0		4.15			(内)暗紫灰 (外)暗青灰	"	
93	"	長頸壺						明紫灰	石英・長石を少し含む	
94	土師器	椀		5.35				淡黄	石英・長石をやや多く含む	
95	"	"	12.3					淡黄	"	
96	"	"						淡黄	"	
97	"	瓦						(内)にぶい橙 (外)灰褐	石英・長石粒を多く含む	
98	"	鍋	32.8					浅黄	微砂・赤色土粒を含む	

矢部古墳群B

103	弥生	高杯	12.2				(内)浅黄橙 (外)にぶい橙	1mm程の砂粒を含む	
104	"	"	20.1				(内)浅黄橙 (外)灰白	1mm前後の石英を含む、赤色土粒、金雲母	
105	"	甕	21.6				(内)浅黄橙 (外)灰白	1~1.5mmの砂粒を含む 金雲母	
106	"	壺	8.9				(内)にぶい橙 (外)橙	砂粒を含む 黒雲母	
107	"	甕		6.8			(内)にぶい橙 (外)橙	微砂を少し含む 黒雲母	
108	"	"		5.75			(内)灰白 (外)浅黄橙	1mm前後の砂粒を少し含む赤色土粒	底部穿孔あり
109	"	"	14.6				(内)にぶい黄橙 (外)浅黄橙	0.5mm以下の砂粒 赤色土粒	
110	"	"	15.8				(内)黄橙 (外)浅黄橙	1~2mmの砂粒を含む、赤色土粒	
111	"	"	25.4				黄橙	少量の砂粒 赤色土粒を含む	
112	"	壺	24.6	11.8	49.15		(内)にぶい黄橙 (外)橙	0.5mm以下の砂粒 少し含む赤色土粒	赤色顔料
117	"	"	14.3				にぶい橙	1mm以下の石英・長石を含む	
118	"	甕	17.2			内面ハケメ	(内)灰白 (外)黄灰	0.5~1mmの砂粒を含む	
119	"	"	9.6				にぶい橙	微砂を含む	
120	"	壺	11.8				にぶい橙色	1mm前後の砂粒を含む 赤色土粒	
121	"	"				口縁端部に棒状浮文	にぶい橙色	白色砂粒を含む	
122	"	甕	22.9				にぶい橙	3mm以下の石英・長石を含む	
123	"	"	30.4					1mm前後の砂粒を含む、雲母	
124	"	壺						1~2mmの砂粒を少し含む	
125	"	甕	19.6			内面円滑なナデ	(内)淡黄 (外)灰白	0.5~1.5mmの砂粒を少し含む	
126	"	"	17.7			内面は円滑な仕上げ、一部に指オサエ	(内)にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	
127	"	無頸壺				口縁端部に棒状浮文	(内)橙 (外)橙	0.5~2mmの砂粒多く含む	
128	"	高杯	24.2			ヘラミガキが一部に残る	橙	1.5mm以下の砂粒を含む、長石が目立つ	

矢部古墳群B

129	弥生	高杯	23.6					1mm前後の砂粒を含む 金雲母
130	"	"	23				(内)浅黄橙 (外)にぶい橙	0.5mm前後の砂粒を含む
131	"	"		9.1				微砂を含む 赤色土粒
132	"	壺		9.8			淡黄	1mm前後の砂粒を含む
133	"	甕		6.3		底部指おさえ	(内)灰褐 (外)にぶい黄橙	微砂を含む
134	"	"		5.4			(内)にぶい黄橙 (外)黒褐	1～2mmの砂粒を含む

や べ おおぐろ  
3. 矢部大坩遺跡



矢部大坑遺跡

目 次

1. 発掘調査の経緯 .....	125
2. 発掘調査の概要 .....	126

図 目 次

第1図 調査位置図 (1/2,000) .....	125
第2図 中央東西土層断面図 (1/80) .....	126
第3図 遺構配置図 (1/300) .....	127
第4図 溝-1 (1/60) .....	128
第5図 溝-2 (1/60) .....	129
第6図 井戸 (1/30) .....	129
第7図 出土遺物(1) (1/4) .....	130
第8図 出土遺物(2) (1/4) .....	131
第9図 出土遺物(3) (1/4) .....	132
第10図 出土遺物(4) (1/4) .....	133
第11図 出土遺物(5) (1/4) .....	134
第12図 岩陰遺構 (1/30) ・出土遺物 (1/4 ・ 1/2) .....	135
第13図 その他の出土遺物 (1/4) .....	136

表 目 次

土器観察一覧表 .....	138
---------------	-----

図 版 目 次

図版41-1 南区全景 (南西から)	図版44 出土遺物(2)
-2 北区全景 (南から)	図版45-1 出土遺物(3)
図版42-1 溝-1 土器出土状況 (西から)	-2 出土遺物(4)
-2 岩陰遺構 (東から)	図版46-1 出土遺物(5)
図版43 出土遺物(1)	-2 出土遺物(6)

# 1 発掘調査の経緯

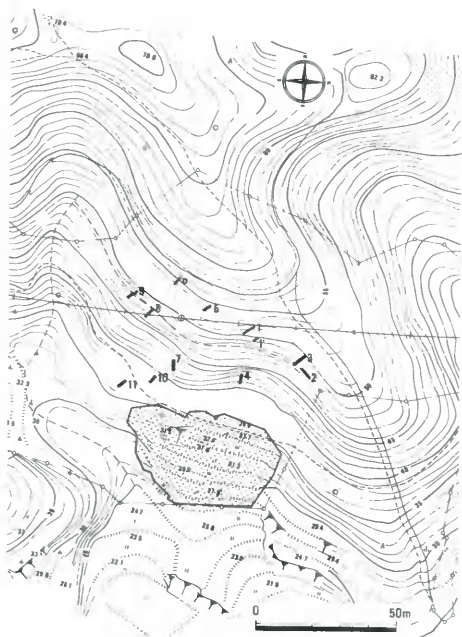
## (1) 発掘調査の経過・概要

矢部大坑遺跡は、矢部B古墳群のある丘陵の東斜面裾部に所在する。丘陵東斜面裾部の一部が緩やかにのび、緩斜面になっている。

その中央部に斜面と直行するトレンチによる調査を行い、柱穴を検出し、部分的にはあるが包含層も確認された為、全面発掘調査を実施した。

また、尾根上の遺跡との間のやや急な斜面部には、12本のトレンチを設定し、遺跡のひろがり調べた。その結果、尾根上の遺跡からの流れ込みによるとみられる土器片が僅かに認められたトレンチがあったものの、遺構は存在していない。

発掘調査は、一次調査によるトレンチを境に、北半を北区・南半を南区とし、南区から実施した。調査の結果、矢部大坑遺跡では、弥生時代中期から中・近世土器が出土し、遺構として集落跡の他、中世の岩陰遺構等が検出された。



第1図 調査位置図 (1/2,000)

## (2) 日誌抄

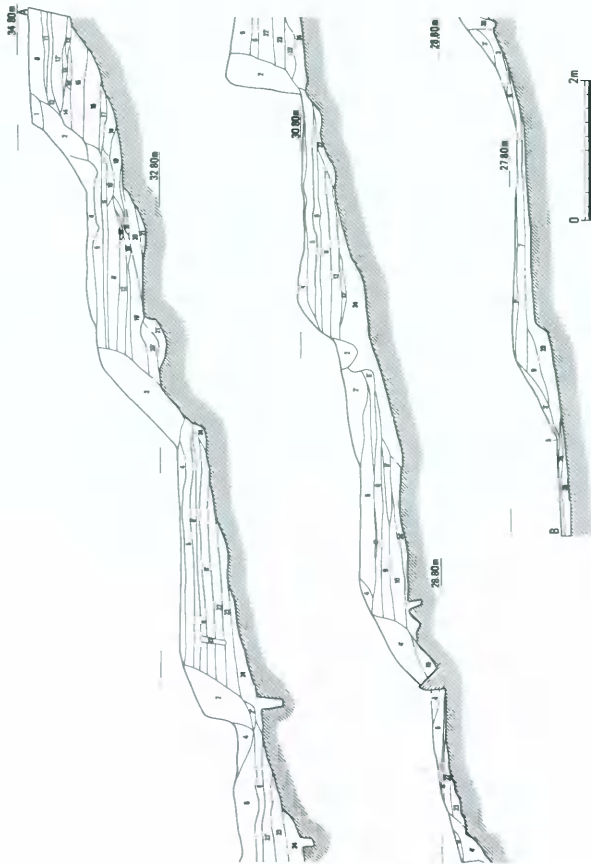
昭和62年

4月8日	器材搬入	南区調査開始	6月30日	南区調査終了
4月27日	斜面部確認トレンチ調査開始		8月7日	北区調査終了
5月20日	斜面部確認トレンチ調査終了			
6月10日	北区調査開始			

## 2 発掘調査の概要

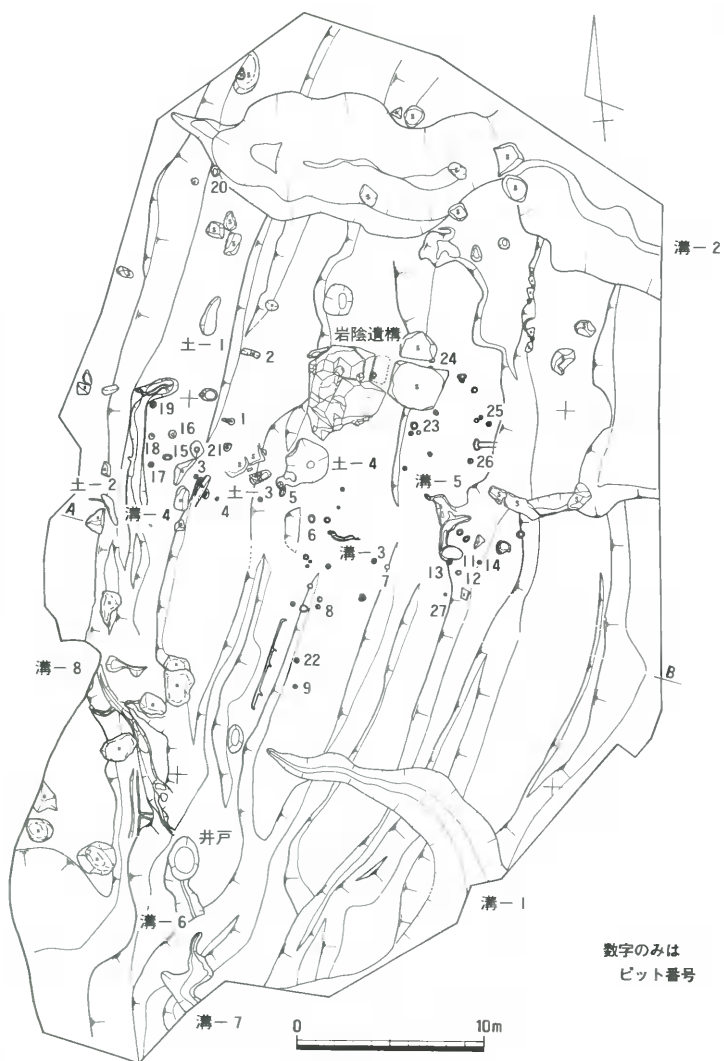
### 基準土層（中央東西土層断面）

緩斜面とはいえ現状で、一番高い西端から最も低い東端までおよそ31mで、7.6m程の高低差があり、地山面のみでも7m弱だらだら下がる斜面である。調査前の状態では、斜面が9段の平坦面に閉塞されている。断面土層のうち第1層～第4層は表土および新しく丘陵上部から流れ込んで堆積した黒灰色土・暗黄褐色土である。第5層は耕作土、第6層および第25層はその床土である。また第20層、第22～24層は暗褐色土・暗灰褐色土の包含層で、中世の土器が出土している。なお第24層からは、弥生時代の土器片が出土している。包含層は斜面全体には広がらず、ところどころ地山直上に薄く堆積しているのが確認されている。遺構はいずれも地山面を切り込んで検出されている。



第2図 中央東西土層断面図 (1/80)

矢部大坑遺跡



第3図 遺構配置図 (1/300)

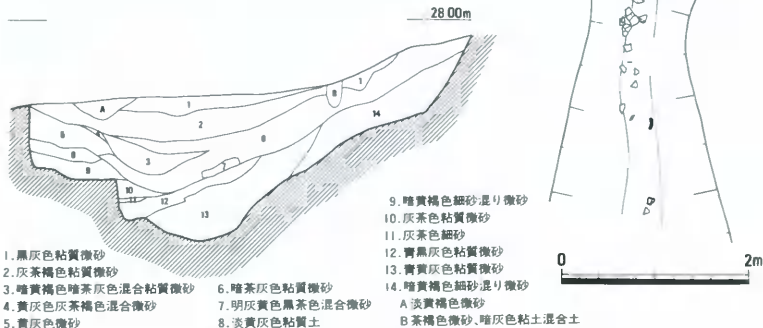
(1) 弥生時代・古墳時代の遺構・遺物

矢部大坑遺跡では、斜面の大部分が後世の削平を受けており、包含層は一部に遺存しているのみである。この為、検出された遺構はほとんど同一面で地山面を切り込んで検出されたもので、明確な時期決定は困難である。

検出された遺構のうち、弥生時代・古墳時代に推定されるものとしては、溝・井戸のほか土壇・柱穴等がみられる。

溝-1 南区の中央部から南西に向い、斜面を「V字」形に切り込んで南西に向って流れ、次第に幅を広げて南に流路方向を変えて調査区端に至る溝である。調査区端では幅4.4m・深さ約2m程に広がっているが、溝上流部では幅1.5m・深さ0.8m前後で、断面が「V字」形をし、底面近くの埋土中に、多量の土器が認められている。出土した土器には、7・8・12・13等、ほぼ完形のものをはじめ、1~4・10・15~18等の壺形土器、19~31・33~37等の甕形土器、39~54・56等の高杯形土器がある。

出土している土器は、溝上層の第1層黒灰色粘質微砂から出土した69・70や第2層の灰茶褐色粘質微砂から出土した71・72等を除いて、いずれも弥生時代中期頃のものが多いが、検出された溝は、掘削された遺構と考えるよりも、自然に掘開された流路に土器が埋没したとみられるものである。なお、南区では、後世の畑による削平などで、発掘調査では断続的に検出された溝-6・7・8も元々は連続した1本の自然流路と考えられるものである。溝-6の埋土



第4図 溝-1 (1/60)

矢部大坑遺跡

中からは、図示していないが、埴輪の小片が出土している。

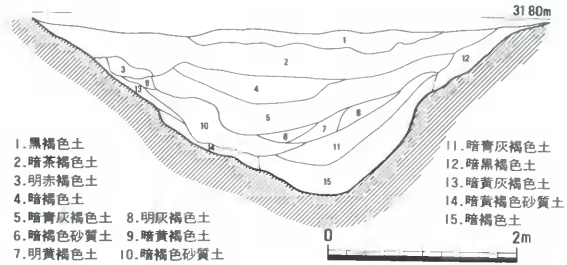
溝-2 北区の北端において検出された、西から東に流れる溝である。検出した溝の規模は中央付近で幅5.4m、深さ約1.8mを測り、断面形は口の大きく広がった「U」形である。

出土遺物としては、9のようなほぼ完形の壺形土器の他、38は甕形土器の底部、55は高杯形土器の脚部等、弥生時代中期の土器とともに68の土師器の甕や、73~75等の須恵器がみられる。また、上層の第1層黒褐色土中にはいわゆる早島式土器と呼ばれている中世土器が出土している。

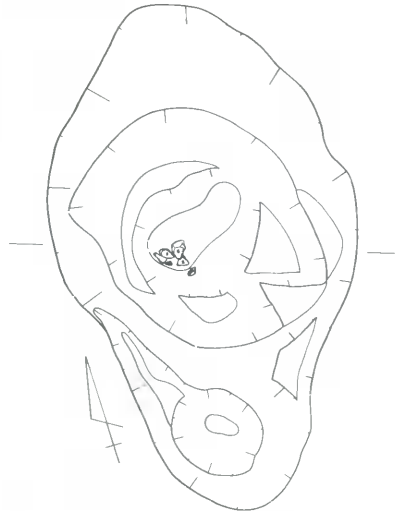
この溝も、南区で検出された溝-1等と同様に、自然に掘開された流路に土器が埋没した遺構とみられる。

溝-3 北区の南端部において検出された溝状の遺構である。幅20cm、深さ10cm程の浅い窪み状の溝が、長さ1.5cm程遺存していたもので、埋土中から62の壺形土器や高杯形土器等、弥生時代中期の土器片が出土している。これもまた自然に掘開された溝に土器の埋没している遺構と考えられる。

井戸 南区の南西部において、上部を溝-6に切られて検出された、井戸状の

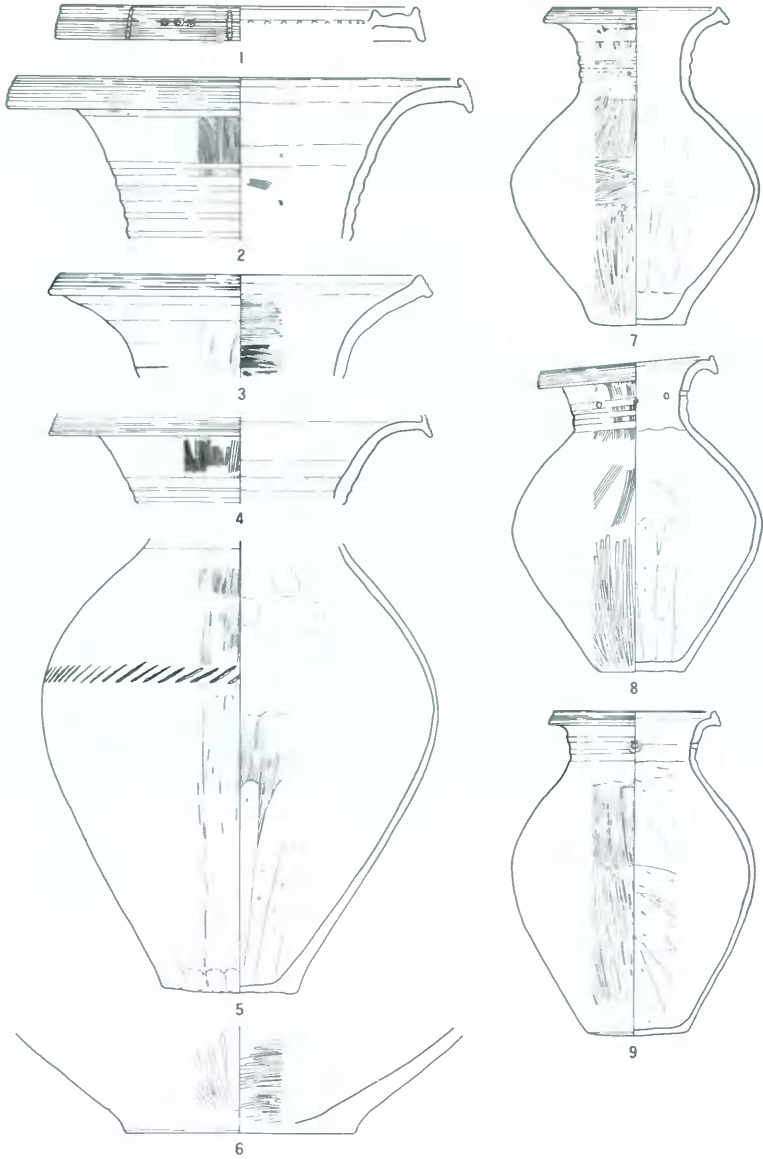


第5図 溝-2 (1/60)



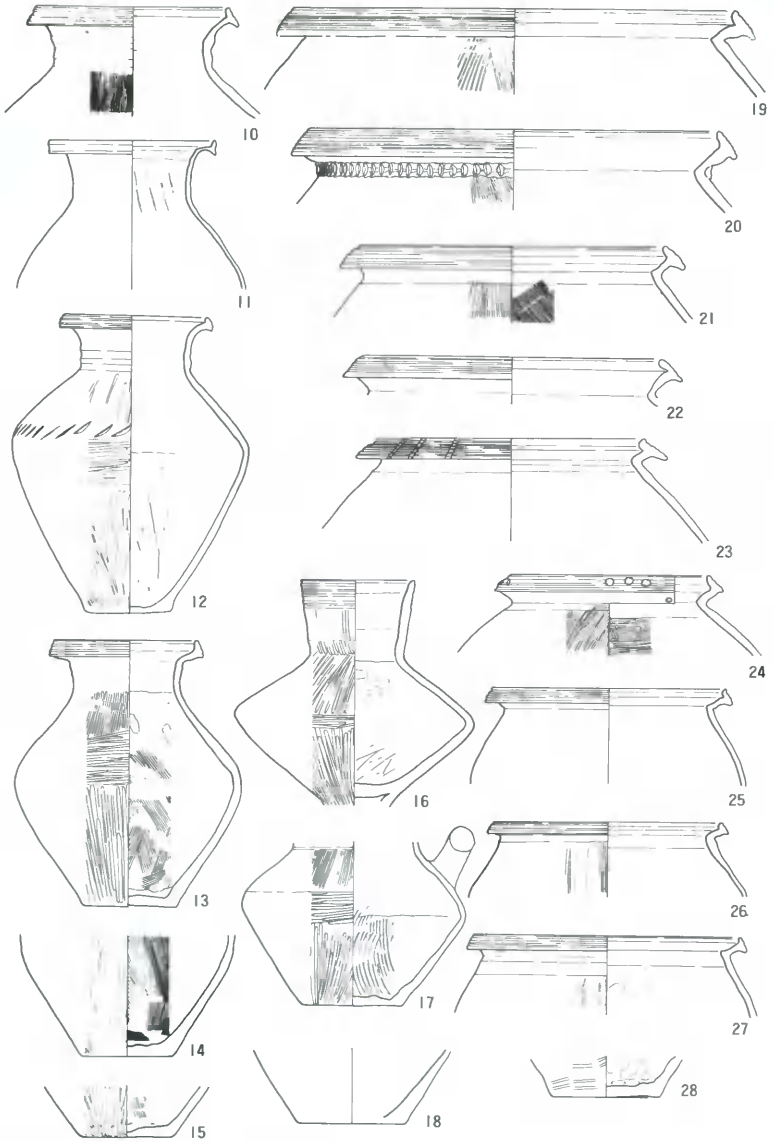
第6図 井戸 (1/30)

矢部大坑遺跡



第7図 出土遺物(1) (1/4)

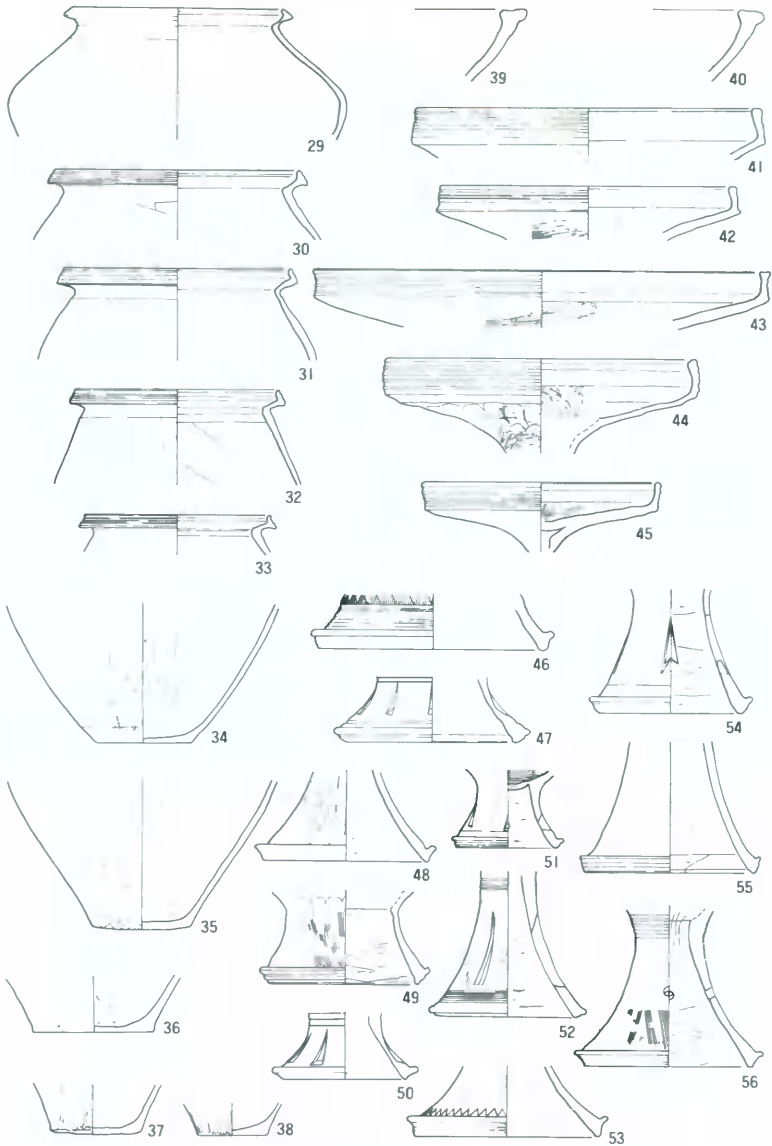
矢部大埴遺跡



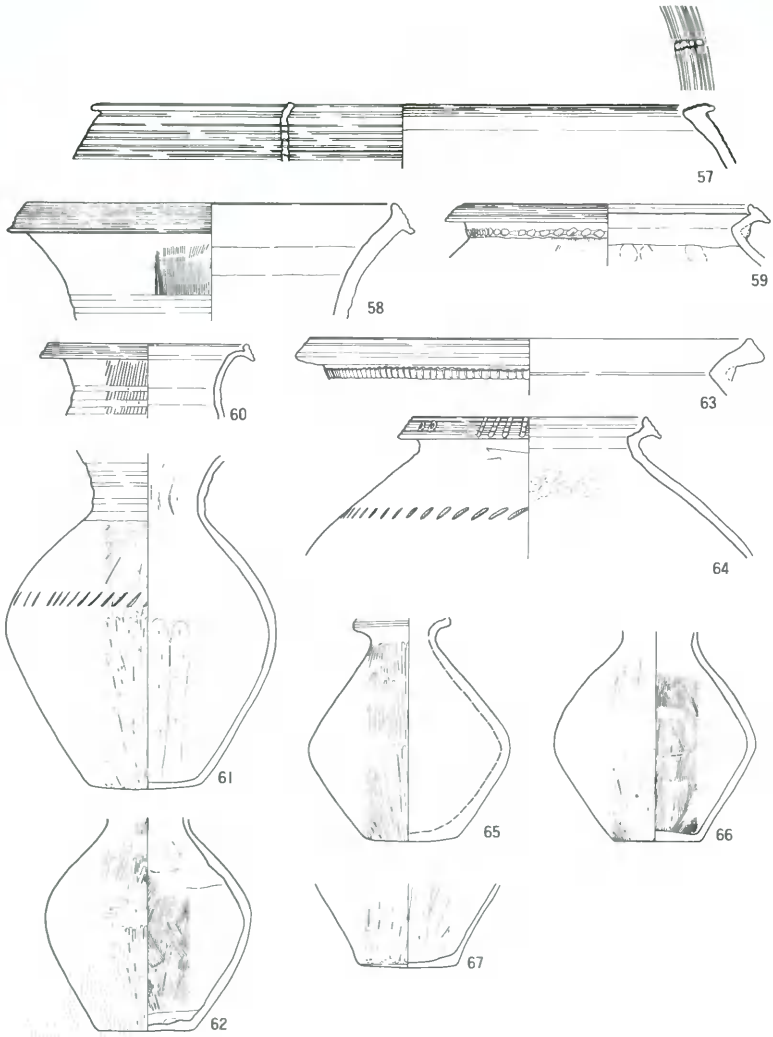
第8図 出土遺物(2) (1/4)



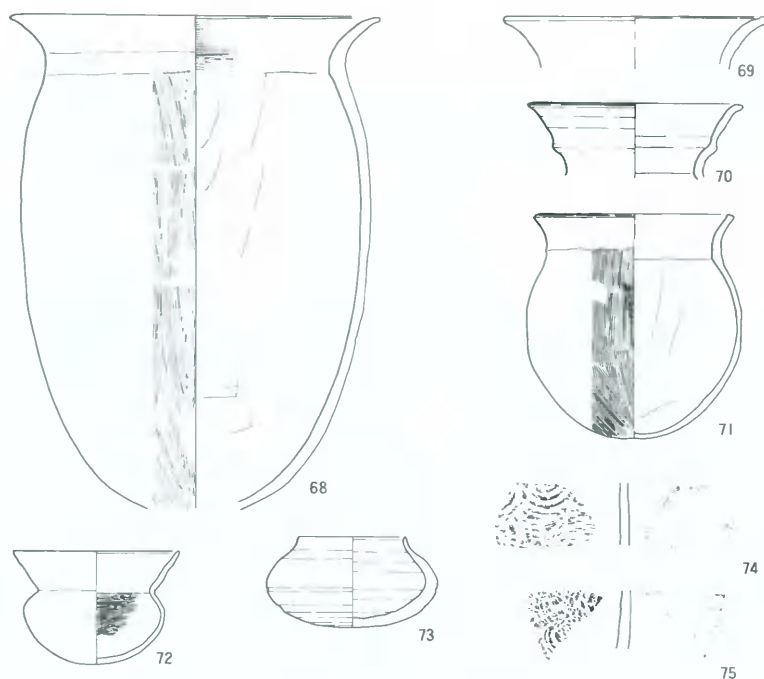
矢部大坑遺跡



第9図 出土遺物(3) (1/4)



第10図 出土遺物(4) (1/4)



第11図 出土遺物(5) (1/4)

遺構である。形状がかなりくずれているが、南北2.7m、東西1.6m、深さ0.9m程の規模の遺構で、底にはりついて、弥生土器片が数点出土している。

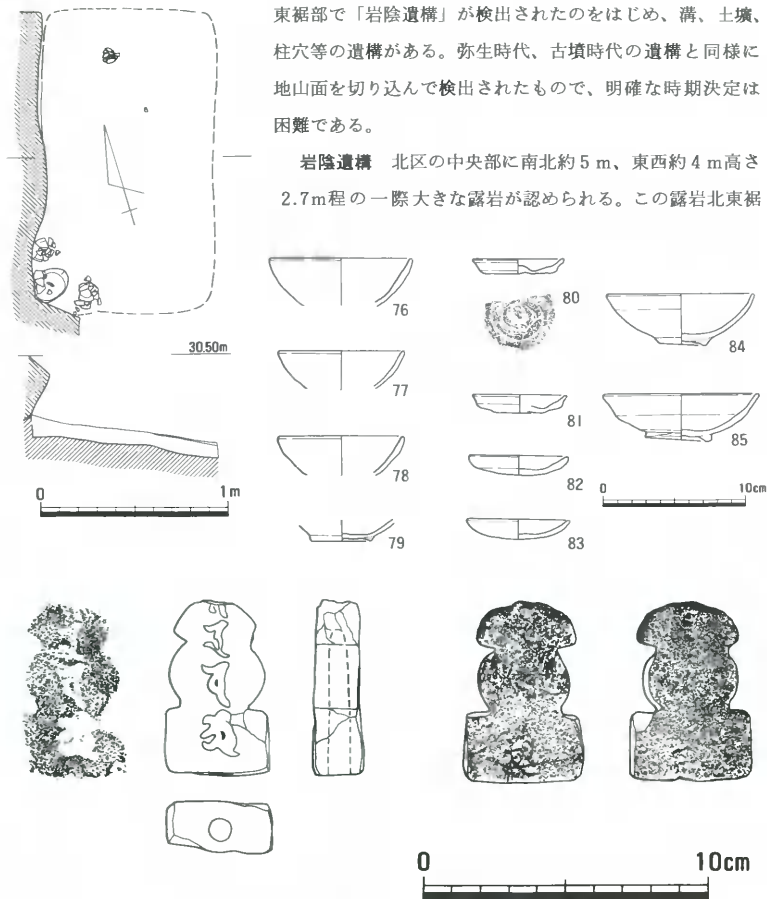
柱穴 矢部大坑遺跡では60を超える柱穴が確認されているが、このうち弥生時代あるいは古墳時代の柱穴と推定されるのは、P-1～19である。P-2は長径100cm、短径30cm程の細長いもので深さ20cm程を測る。埋土中から弥生土器の細片が出土している。P-1は径35cm、深さ13cm程の規模で、弥生時代中期の土器片が出土している。P-17は径30cm、深さ60cm、P-18は径30cm、深さ50cm、P-19は径30～40cm、深さ45cm程の柱穴でP-17からは弥生土器の細片が出土している。P-15は長径48cm、短径25cm、深さ10cm程の土壇状のピットで、弥生時代中期の壺形土器65が出土している。P-12は、径40cm、深さ50cm程の柱穴で、弥生時代中期の土器片が出土している。P-4は径15cm、深さ20cm程の、P-8は径24cm、深さ15cm程の柱穴で、弥生土器の細片を出土している。P-11は長径120cm、短径80cm、深さ30cm程の土壇状の遺構で、弥生時代中期の土器片が出土している。この他P-3は径20cm、深さ20cm、P-5は径

40cm、深さ20cm、P-9は径20cm、深さ10cm、P-12は径20cm、深さ45cm、P-13は径30cm、深さ15cm、P-14は径13cm、深さ10cmの柱穴で、ごく細片であるが、弥生時代から古墳時代にかけての土器片が出土している。

## (2) 中世の遺構・遺物

中世の遺構としては、北区中央部にある大きな露岩の北東裾部に「岩陰遺構」が検出されたのをはじめ、溝、土壇、柱穴等の遺構がある。弥生時代、古墳時代の遺構と同様に地山面を切り込んで検出されたもので、明確な時期決定は困難である。

**岩陰遺構** 北区の中央部に南北約5m、東西約4m高さ2.7m程の一際大きな露岩が認められる。この露岩北東裾



第12図 岩陰遺構 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

部の岩陰に南北160cm、東西90cm程の範囲に、暗黄灰褐色土、褐色土で平垣な面をなし、その上層に木片等の混る灰色粘土が薄く覆っている床面が認められる。床面上からは、いわゆる早鳥式といわれる白色の土師質土器の碗76～79、84、85、皿80～83等が押しつぶされた状態で検出された。また、これらとともに、偏平な板状の泥塔（偏平五輪塔形泥塔）が2基出土している。この他に、古銭が1枚出土しているが、遺存状態が非常に悪く、判読できたのは、「寶」のみであるが、渡来銭と推定されるものである。

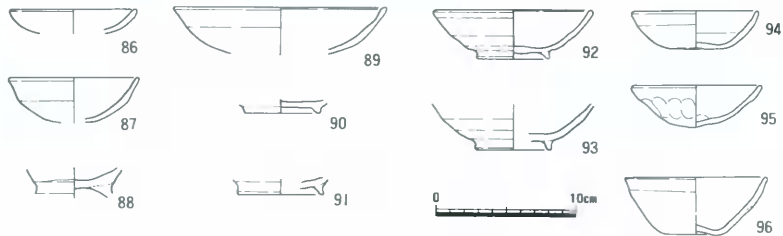
溝-4 北区の南西端近くで検出された、北から南に流走する溝状遺構である。幅80cm、深さ20～30cm程の規模で底から「早鳥式」の土器の碗92、93が出土している。

溝-5 北区の南端部で検出された溝状の遺構で、自然流路とみられるものである。埋土中から、弥生時代中期の壺形土器61が出土しているものの大半は「早鳥式」の土器である。青磁の細片も出土している。

土壇 土壇-1、2はいずれも北区の西部において検出された浅い不定形の窪み状の遺構である。土壇-1は、長径120cm、短径80cm、深さ7cm程を測る。土壇-2は長径180cm、短径40cm、深さ10cm程を測り、埋土中から土鍋の細片等が出土している。土壇-3は北区の南西部において検出された。長径110cm、短径50cm、深さ20cm程の土壇である。土壇-4は径2m、深さ50cm以上を測る。この2基の土壇の埋土中には、近世陶磁片が含まれており、新しい時代の土壇の可能性がある。

柱穴 P-20～27の各ビットからは、いわゆる早鳥式といわれる土師器片（碗、小皿等）が出土している。これらの柱穴は、いずれも径20～30cm程の規模で深さ10～30cm程の柱穴状を呈する遺構であるが、いずれも散在しており、建物としてまとまりをもつものはみられない。

その他の遺物 遺構上層からも若干の遺物が出土している。89～90は溝-2上層から出土している。また、91は井戸上層から、94～96は北区の基盤上面で出土した、いわゆる早鳥式の土器で、いずれも遺構には伴わないとみられるものである。



第13図 その他の出土遺物 (1/4)

### (3) 小 結

矢部大坑遺跡から出土した遺物は、弥生時代中期から近世、近代に至るまで多岐にわたっているが、畑の開墾等により後世の削平を大きく受けて、遺存状態は非常に悪い。また、出土した土器の多くは、自然流路的な溝の埋土中から出土しているもので、特に溝-1からは大量の土器がしかも完形に近いものを多く含んで出土しているものの、これらの土器に伴っている遺構は、矢部大坑遺跡内に見出すことはできない。検出された遺構等の状況からみても、斜面上部の尾根上の遺構から流れ込んだものではないかと思われる。矢部大坑遺跡において明らかな遺構として確認できたのは、柱痕跡を伴った柱穴であるが、数はそれ程多くなく、また、建物等を形作るようにまとまって検出されたものもない。一応集落跡が想定されるが、遺構はまばらであり、遺物も、弥生時代中期の土器と中世の早島式土器が目立っているが、他の時期の土器は極めて稀れで、流入した遺物とみられる。矢部大坑遺跡はこの2時期においてわずかに生活痕を残している遺跡とみられる。

露岩の北東裾部で検出された「岩陰遺構」は遺存状態が良好でない為、詳細は不明であるが、中世段階に墓として祀られていた遺構とみられる。一部に殆ど土と化した木片が遺存していたことからみて、骨等は木箱に納められていたものであろう。共伴遺物として、土師質の椀及び小皿、古銭が1枚、それに泥塔が2基ある。その他、後世持ち去られたものであろうか五輪塔の一部火輪のみが出土している。泥塔は2基ともほとんど同じ形状を呈しており、いずれも「空」「風」輪を欠いているが、型作りされた偏平な五輪塔形である。高さ6.5cm、幅3.7cm、厚さ1.8cmを測り、底から直径0.8cmの穴が5.2cm程穿たれている。表裏には梵字が刻まれている。磨滅していて判読しづらいが、片面は「火」・「水」・「地」の各部位に「ラ」・「バ」・「ア」の梵字がみられる。

矢部大坑遺跡

土器観察一覽表

種別	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	
		口径	底径	器高				
1	弥生土器	装飾壺	24.8		24	口縁端部に5条の凹線と棒状浮文、竹管文、上面に波状文	橙	1mm程度の長石、石英を少量含む
2	"	壺形土器	31		11.4	内外 上横ナデ下横ナデ後指ナデ横ハケメ 口縁部に4条の凹線頸部に5条以下の凹線 横ナデ後ハケメ沈線(5本)	橙 にぶい橙	1mm前後の石英を含む
3	"	壺形土器	25.3		7.4	内外 ハケメ後、ミガキ 口縁部に3条の凹線頸部に2条以上の凹線下 ハケメ	明黄褐	1mmぐらいの長石雲母を含む
4	"	壺形土器	27		6.15	内外 横ナデ 口縁部に3条の凹線と頸部に2条以上の凹線		0.5~1mmの長石石英を含む
5	"	甕形土器		9.5	32	内外 上横ナデ ユビオサエ 斜方向ハケメ 上ハケメ 刺突文縦方向ヘラミガキ	橙	1~2mmの長石石英雲母を含む
6	"	鉢形土器		16	7	内外 横方向ミガキ 横ナデ 縦方向ミガキ	外面 5 Y R 7 / 6 橙	1~3mmの長石石英を含む
7	"	壺形土器	11.8	6.7	22.5	内外 上横ナデ 下指ナデ? 上沈線 横ナデ後ハケメ横方向ミガキ縦ミ ガキ	明黄褐	2.5mm前後の長石雲母を含む
8	"	壺形土器	12.3	6	22.5	内外 上横ナデ 指オサエ 指オサエ 後ケズリ 上沈線 横ナデ 後ハケメ 縦方向ミガキ	にぶい黄橙	1mm前後の長石を含む
9	"	壺形土器	11.5	7	23	内外 上横ナデ 指ナデ 左あがりのヘラケズリ 上凹線 縦ハケメ 縦ヘラミガキ ナデ	浅黄橙	1mm前後の石英長石を含む
10	"	壺形土器	18.6		7.5	内外 上横ナデ 下ナデ 口縁部に4条の凹線、頸部に2条の凹線	にぶ橙	1.5mm前後の長石石英を含む
11	"	壺形土器	11.8	16.2	10.5	内外 横ナデ 絞り 調整不明	橙	0.5~2.5mmの長石石英を多く含む
12	"	壺形土器	10.2	6	21	内外 上横ナデ 指ナデ 縦方向ヘラケズリ 上凹線 縦方向ミガキ列点横縦ミガキ	淡黄	1mm前後の長石石英を多く含む
13	"	壺形土器	10.2	6.5		内外 上横ナデ 指押さえハケメ左斜ハケメ 上凹線縦方向ミガキ横方向ミガキ	灰色 5 Y 8 / 2	2mm未満の石英長石粒子を含む
14	"	壺形土器?		6.4	8.5	内外 ナデ後ハケメ ヘラミガキ	両面 橙 5 Y R 6 / 6	所々に0.5~1mmの長石の砂粒を含む
15	"	"		6.8	3.6	内外 上部分的に縦ハケメ下ナデ 縦ハケメ 底ナデ	両面 にぶい黄橙 10 Y R 7 / 2	0.5~1.5mmの長石石英の砂粒を全体に所々に角閃石の砂粒有り
16	"	壺形土器	8		16	内外 上横ナデ指オサエ斜にケズリ 上ハケメ下横方向ミガキ縦横 縦にミ ガキ	内面 7.5 Y R 7 / 6 外面 " 橙	3mmぐらいの岩石(2~30) 1mmぐらいの黒雲母を含む
17	"	把手付壺形土器		7	11.5	内外 上ナデ 下 ハケメ 上ハケメ下横方向ミガキ縦方向ミガキ	内面 7.5 Y R 7 / 6 外面 " 5 / 6 明赤褐	1mmぐらいの長石と2mmぐらいの赤色土粒を含む
18	"	壺形土器?		7.6	5.2	内外 調整不明	内面 2.5 Y R 6 / 8 橙 外面 " 5 / 6 明石褐	2~3mmぐらいの長石、石英、雲母を含む
19	"	甕形土器	31.15			口縁部に5条の凹線	両面灰白	0.5~1.5mmの長石と石英の砂粒を全体に多く含む
20	"	"	28.8		5.3	内外 横ナデ 口縁部に5条の凹線 頸部に貼付突帯と指頭圧痕	橙	1mmぐらいの長石、雲母を含む
21	"	"	21.4		5.1	口外 ヨコナデ後斜め方向のハケメ 口縁部に4条の凹線	両面灰白	0.5~1mmの長石、1mmの石英を多く含む。
22	"	"	21		3.3	内外 横ナデ 口縁部に3~4条の凹線強い横ナデ	浅黄橙	1~3mmの赤色土粒と雲母を含む
23	"	"	18.9			内外 ヨコナデ 口縁部に5条の凹線と棒状浮文	両面灰白	0.5~1.5mm程度の長石 1mm程度の石英雲母の砂粒を全体に多く含む
24	"	"	14		5.5	内外 上横ナデ横方向ハケメ後ミガキ 上口縁部に3条の凹線と3つ1単位の円形 浮文が4ヶ所横ナデ斜方向ハケメ	橙	1~3mmの長石、雲母を含む。
25	"	甕形土器	16.5		6.8	内外 口縁部に2条の凹線が? ヨコナデ	にぶい橙	1~2mmの長石、石英の砂粒を多く含む
26	"	甕形土器	16		5.3	内外 ヨコナデ ヨコナデ後縦方向ハケメ	"	0.5mm程度の長石、金雲母を全体に含む
27	"	"	19		5.5	内外 上強い横ナデ下指オサエ 上口縁部に3条の凹線	橙	1mmぐらいの長石を含む
28	"	壺形土器		7.6	2.6	内外 ユビオサエ ヘラミガキ又はタタキ底ヘラミガキ	明褐灰	1mmぐらいの長石石英角閃石を多く含む
29	"	"	14.6		9.2	内外 上横ナデ 下 調整不明	黄橙	1mm程度の長石、石英を全体に多く含む
30	"	甕形土器	17.2		5	内外 ハケメの工具跡 ヨコナデ 頸部に3条凹線口縁部に3条の凹線	"	1mm程度の長石の砂粒を多く所々に1mm程度の砂粒1~3.5mmの赤色土粒を多く含む
31	"	"	16		6.5	内外 上横ナデ下? 口縁部に3条の凹線の?沈線横ナデ、下横ナ デ?	明黄褐	0.5mmぐらいの赤色土粒黒雲母少し含まれている
32	"	"	14.2		6.8	内外 上ヨコナデ 下ナデ " 下ハケメ?	両面灰白	1~2mmぐらいの長石、石英、金雲母を全体に多く含む

矢部大坑遺跡

種別	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土
		口径	底径	器高			
33	弥生土器	13		2.65	内外 ヨコナデ ハケメ ヨコナデ後縦方向ハケメ	両面灰白	0.5~1mm長石、石英、金雲母を全体に多く含む
34	壺形土器	6.8	9.7		内外 ヘラケズリ 縦方向ミガキ 下横ナデ	赤黒	1~3mmの長石、石英を全体に含む
35	甕形土器	6.9	10.5		内外 ヘラケズリ ヘラミガキ	浅黄橙	所々に0.5~2mmの長石の砂粒、0.5mm程度の金雲母の砂粒
36	壺形土器	8.4	3.75		内外 ヘラケズリ ヘラミガキ 底ナデ	橙	1~3mmの長石、石英の砂粒や礫を全体に多く含む
37	壺形土器?	6.4	3.6		内外 上ナデ下横ナデ、ナデ 上斜にミガキ下横にミガキ	内面 橙 外面 明赤褐	1mmぐらいの長石、雲母を含む
38	壺形土器?	4.95	2.25		内外 ナデ ヘラミガキ	両面灰白	1mm程度の長石の砂粒を所々に含む
39	高杯形土器				内外 ヘラケズリ 沈線4条ヘラミガキ	灰白	0.5~1mmの長石の砂粒を含む
40	"						
41	"	23.8		3.8	内外 ナデ? 上ナデ下横ヘラミガキ	淡黄	0.5~1mmの前後の砂粒を含む
42	"	20.8		3.85	内外 ヘラミガキ 杯部外面に4条の凹線	灰白	1mm程度の長石、石英の砂粒を多く含む。 1~1.5mmの赤色土粒を所々に含む
43	"	32.2		4.1	内外 上ヨコナデ下ヘラミガキ 上ヨコナデ杯外面に4条の凹線	橙	0.5~1mmの前後の砂粒を多く含む
44	"	21.5		6.7	内外 杯外面に5条の凹線 上ヘ横ナデ斜にミガキ中心ヘラミガキ 上ヘ横ナデ指ナデ後ミガキ	"	1mmぐらいの長石を含む
45	"	16.7		5	杯外面に4条の凹線	内面 にぶい黄橙 外面 明黄褐	0.5mmぐらいの長石、雲母を含む
46	"			3.9	内外 ヨコナデ 脚根部に7条の凹線と鋸歯紋	橙	1mm程度の長石、石英を全体に多く含む
47	"			46.5	内外 ヘラケズリ ヨコナデ 沈線、スカン窓 脚根部2条の凹線脚	にぶい橙	0.5~1mmの長石、石英の砂粒を全体に多く含む
48	"			6.6		橙	1~1.5mmの長石、金雲母の砂粒を全体に多く含む
49	高杯形土器			6.7	内外 ヘラケズリ 脚根部2条の凹線 ナデ後ミガキ	暗灰黄	1~2mmの長石、黒雲母を含む
50	高杯形土器			4.65	外 ヨコナデ 沈線脚根部に4条の沈線 脚上部に2条以上の沈線	両面 橙	0.5~1mmの長石、砂粒を全体に多く含む
51	高杯形土器			5.5	内 上ヘラミガキ脚根部に4条の沈線 脚上部に2条以上の沈線	にぶい橙	0.5mm前後の長石を多く含む
52	高杯形土器			10.4	内外 ヘラケズリ 脚根部に4条の沈線 ヘラミガキ 脚上部に2条以上の沈線	にぶい橙	0.5~1mmの長石石英を多く含む
53	高杯形土器			5	内外 工具によるケズリ 上ヘミガキ 脚根部に鋸歯紋	内面 赤褐 外面 赤	1~3mmの長石、赤色土粒、雲母を含む
54	高杯形土器			8.7	内外 ヘラケズリ 上調整不明 6個の矢羽根状透かし孔?	明黄褐	1mm前後長石、雲母を含む
55	高杯形土器			9.4	内外 ヘラケズリ 下横ナデ 上ナデ?		1~3mm前後の黒雲母石英を含む
56	"			11	外 脚上部に4条の沈線 裾部に4個の透かし孔か?	内面 暗オリーブ 外面 灰オリーブ	1mmぐらいの長石、雲母を含む
57	甕形土器	43		4	内外 横ナデ 口縁部に6条の沈線および棒状浮文	明黄褐	1~2mm長石、石英を含む
58	器台の受部	25.5		8.2	内 強い横ナデ口縁部に5状の凹線、頸部に2条以上の凹線 外 上ヘ沈線 ハケメ後横ナデ沈線	内面 橙 外面 "	1mmぐらいの雲母長石を含む
59	甕形土器	20		3.8	内外 上横ナデ 下指押さえ 口縁部に4条の凹線 頸部に貼り付け 上ヘ突符後列点文縦ハケメ後ナデ	灰色	1~0.5mm内の長石、石英の砂粒を含む
60	壺形土器	14.05		5.1	内外 横ナデ 口縁部に3条の凹線 頸部に3条凹線	淡橙	0.5~2mmの長石、石英の砂粒、0.5mm程度の金雲母を所々に含む
61	壺形土器	8		24	内外 上ヘナデ上げ指オサエ、指ナデ後ケズリ 上ヘ4本の凹線、刺突文 ミガキ	橙	1~3mmの長石と石英を含む
62	壺形土器	5.8		15	内 上ヘ指オサエ 後紋り目、ハケメ指ナデ	内面 7.5YR 7/6 外面 5YR 6/6橙	1mmぐらいの長石黒雲母を含む
63	甕形土器	31.2		4	ヨコナデ 粘土ひも覆り付け 口縁部に2条の凹線頸部に貼付突符と指頭圧痕文	両面 橙	0.5~1mmの長石の砂粒を全体に多く含む
64	甕形土器	16		9.8	内外 ユビオサエ 口縁部に4条の凹線と円形と棒状の浮文 胴部上半には刺突文	7.5YR 8/2灰白	0.5~1mm程度の長石を全体に多く含む、所々に0.5mmの金雲母1~2mmの赤色土粒を含む
65	壺形土器	6.5		15.8	内外 上ヨコナデ 下調整不明 上ヨコナデ 縦方向ヘラミガキ	2.5Y 8/3淡黄	2mm前後の白色粒を若干含む、大体は1mm未満の石粒



矢部大坑遺跡

種別	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	
		口径	底径	器高				
66	弥生土器	壺形土器		6	15	内外 縦方向のハケメ 上ヘラミガキ 刺突文斜のハケメ	10YR 4 / 2 灰黄褐	0.5~1mm程度の長石 石英の砂粒を含む、所 々に3mm程度の長石石 英の礫を含む
67	"	"		7	5.9	内外 上ヘラケズリ 下コピオサエ ヘラミガキ	両面 灰白	1~1.5mmの長石の砂 粒を全体に含む
68	土師器	甕形土器	24		35	内外 上ハケメ後横ナデミガキ 下横方向ナデ 上ヘ横ナデ ハケメ	内面 5 YR 7 / 6 外面 " 橙	0.5mmの裏母を少し含 む
69	"	壺形土器	18.2		3.7	ヨコナデ	両面 明赤灰	0.5~1mmの砂粒を含 む
70	"	壺形土器	14.2		5.4	強い横ナデ 丹塗り	外面 明赤褐	0.5mm前後の長石、石 英をよく含む
71	"	甕形土器	13.5		16	内外 上ヨコナデ 下ヨコナデ 上ヨコナデ 縦方向ハケメ	内面10YR8/3浅黄橙 外面7.5YR7/3に ぶい橙	1mm未満の長石石英を 多く含む
72	"	小型壺形 土器	11.7		8	内外 上ヨコナデ 下ヘラケズリ後ミガキ 横ナデ?	内面7.5YR7/6橙 (丹塗?) 外面10YR7/6明赤褐	1mm未満の長石石英を 多く含む
73	須恵器	直口壺	7.7		6.4	内外 上横ナデ 下ナデ " 下ヘラケズリ	灰	1~3mmの石英、黒雲 母を含む
74	"	甕形土器				タタキ	灰白	
75	"	" ?				外面にタタキ	内面 灰白 外面 灰	
76	土師 土器	甕形土器	10.2		4.3	ナデ?	灰白	1~2mmの長石、石英 を含む
77	"	"	9		2.7	?	浅黄橙	"
78	"	"	9		2.7	?	"	1mm前後の長石、石英 を含む
79	"	"		4.1		?	"	1~2mmの長石、石英 を含む
80	"	灯明皿	6.2	4.4	1.1	ヨコナデ 底窪切り	にぶい橙	0.5mm未満の砂粒を含 む
81	"	"	6.4	3.6	1.3	ナデ	"	1mm前後の長石、石英 を含む
82	"	小皿	6.9		1.4	外ナデ 底ヘラトリ?	"	
83	"	"	7		1.4	ナデ?	淡赤橙	0.5mm未満の砂粒を含 む
84	"	碗形土器	10.2		3.6	上ヨコナデ	灰白	2mmをこえる石英をま れに混存
85	"	碗形土器	10.7		3.3	内外 上ヨコナデ 下ミガキ? " 下ナデ	10YR 7 / 3 にぶい黄 橙	1mm未満の長石石英を 含む
86	"	小皿	9.4			ナデ?		0.5mm未満の長石石英 含む
87	"	碗形土器	9.2		3.2	ヨコナデ?		1mm未満の長石、石英 を含む
88	"	碗形土器				内外 ナデ ヨコナデ		1mm未満の長石、石英 を含む
89	"	碗形土器	15		3.2	内外 上横ナデ 下ナデ " "	内面2.5Y 8 / 4 外面 " 淡黄	2~4mmぐらゐの石英 と石粒
90	"	碗形土器	5.2		0.9	?		1mmぐらゐの石英を含 む
91	"	碗形土器	6			外 ヨコナデ		0.5~1mmの長石、石 英を含む
92	"	高台付碗	5		4.5	ナデ		0.5mm未満の長石、石 英粒を含むまれに2mm をこえる砂粒を含む
93	"	碗形土器	5.2		3.2	ナデ		1mm内の長石、石英を 含む
94	"	碗形土器	8.8	4.2	2.7	ナデ	にぶ橙	1mm以上の長石、石英 を含む
95	"	碗形土器	9		3	指オサエ	灰白	1mm前後の長石、石英 を含む
96	"	碗	9.9	4.0	4.0	上ヨコナデ 指ナデ	にぶい橙	1mm前後の砂粒含む

や べ おく だ  
4. 矢部奥田遺跡

目 次

第1章 発掘調査の経過と概要	149
第1節 発掘調査の契機と経過	149
第2節 貝塚調査の経緯と名称について	152
第3節 日誌抄	154
第2章 発掘調査の概要	157
第1節 縄文時代の遺構と遺物	157
第2節 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物	205
第3節 古墳時代後期から中世の遺構と遺物	240
第4節 その他の遺構と遺物	259
第3章 まとめ	274

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/5,000)	150	出土遺物	165
第2図 発掘調査位置図 (1/2,000)	151	第17図 貝層中出土遺物	166
第3図 調査区図 (1/1,500)	152	第18図 貝層中出土遺物	167
第4図 貝塚位置図 (1/1,000)	153	第19図 T-18貝層上面出土遺物	168
第5図 遺構全体図 (1/600)	156	第20図 第1調査区西・東出土遺物(1)	
第6図 縄文時代の遺構配置図 (1/600)	157	第21図 第1調査区西・東出土遺物(2)	169
第7図 土壙2 (1/30)	158	第22図 第1調査区西・東出土遺物(3)	170
第8図 土壙1 (1/30)	158	第23図 第1調査区西・東出土遺物(4)	171
第9図 土壙21 (1/30)	159	第24図 第1調査区西・東出土遺物(5)	172
第10図 土壙12 (1/30)	159	第25図 第1調査区西・東出土遺物(6)	173
第11図 矢部貝塚 (1/60)	160	第26図 第1調査区西・東出土遺物(7)	174
第12図 矢部貝塚旧地形図 (1/60)	161		
第13図 矢部貝塚遺物取り上げ地区図 (1/80)	162		
第14図 矢部貝塚出土骨器 (1/1)	162		
第15図 縄文包含層付近図 (1/100)	164		
第16図 第2調査区西土壙12・周辺			175

矢部奥田遺跡

第 27 図	第 1 調査区西出土遺物(8) ……	176	第 49 図	縄文土器分類(3) ……	198
第 28 図	第 1 調査区西・東出土遺物(9) ……………	177	第 50 図	縄文土器分類(4) ……	199
第 29 図	第 1 調査区西出土遺物(10) ……	178	第 51 図	縄文土器分類(5) ……	200
第 30 図	第 1 調査区西・東出土遺物(11) ……………	179	第 52 図	弥生時代中期～古墳時代前期の遺 構図 (1/400) ……	204
第 31 図	第 1 調査区西・東出土遺物(12) ……………	180	第 53 図	竪穴住居図 (1/80) ……	205
第 32 図	第 1 調査区西出土遺物(13) ……	181	第 54 図	粘土採掘場 断面図 (1/100) ……………	207
第 33 図	第 1 調査区西・東出土遺物(14) ……………	182	第 55 図	粘土採掘場出土遺物(1) ……	209
第 34 図	第 2 調査区西・東出土遺物(1) ……………	183	第 56 図	粘土採掘場出土遺物(2) ……	210
第 35 図	第 2 調査区西・東出土遺物(2) ……………	184	第 57 図	粘土採掘場出土遺物(3) ……	211
第 36 図	第 2 調査区西・東出土遺物(3) ……………	185	第 58 図	粘土採掘場出土遺物(4) ……	212
第 37 図	第 2 調査区西・東出土遺物(4) ……………	186	第 59 図	粘土採掘場出土遺物(5) ……	213
第 38 図	第 3 調査区東縄文包含層出土遺 物(1) ……	187	第 60 図	粘土採掘場出土遺物(6) ……	214
第 39 図	第 3 調査区東出土遺物(2) ……	188	第 61 図	粘土採掘場出土遺物(7) ……	215
第 40 図	第 3 調査区東出土遺物(3) ……	189	第 62 図	粘土採掘場出土遺物(8) ……	216
第 41 図	第 3 調査区東出土遺物(4) ……	190	第 63 図	粘土採掘場出土遺物(9) ……	217
第 42 図	第 3 調査区東出土遺物(5) ……	191	第 64 図	採掘粘土胎土分析(1) ……	218
第 43 図	第 3 調査区東出土遺物(6) ……	192	第 65 図	採掘粘土胎土分析(2) ……	219
第 44 図	第 4・5 調査区出土遺物(1) ……	193	第 66 図	土壙22 (1/40) ……	220
第 45 図	第 1 調査区西出土遺物・地区不明 ……………	194	第 67 図	土壙29 (1/40) ……	221
第 46 図	耳飾り (1/1) ……	195	第 68 図	土壙13 (1/40) ……	221
第 47 図	縄文土器分類(1) ……	196	第 69 図	土壙 6 (1/40) ……	222
第 48 図	縄文土器分類(2) ……	197	第 70 図	土壙 6 出土遺物 ……	223
			第 71 図	土壙 7 (1/40) ……	224
			第 72 図	土壙 8 (1/40) ……	225
			第 73 図	土壙 9 (1/40) ……	226
			第 74 図	土壙10 (1/40) ……	227
			第 75 図	土壙 7・10・15・16出土遺物 ……………	228
			第 76 図	土壙 9 出土遺物 ……	228
			第 77 図	土壙15・16 (1/40) ……	229

矢部奥田遺跡

第 78 図	土壙17 (1/40)	230			246
第 79 図	土壙18 (1/40)	230	第 108 図	土壙38 (1/30)	247
第 80 図	土壙54 (1/40)	231	第 109 図	土壙52 (1/30)	247
第 81 図	土壙54出土遺物	231	第 110 図	土壙53 (1/30)	248
第 82 図	土壙2 B (1/40)	232	第 111 図	土壙14 (1/30)	248
第 83 図	土壙3 B (1/40)	232	第 112 図	土壙51 (1/30)	249
第 84 図	土壙3 B・4 B出土遺物	233	第 113 図	土壙41・51出土遺物	250
第 85 図	土壙4 B (1/40)	234	第 114 図	土壙53出土遺物(1)	250
第 86 図	土壙6 B (1/40)	235	第 115 図	土壙53出土遺物(2)	251
第 87 図	土壙8 B (1/40)	235	第 116 図	中世落ち込み・柱穴列1 図	
第 88 図	土壙5 B・8 B出土遺物	236		(1/80)	252
第 89 図	土壙5 B (1/40)	237	第 117 図	柱穴列1 断面図 (1/80)	252
第 90 図	土壙7 B (1/40)	237	第 118 図	柱穴列2 (1/100)	253
第 91 図	土壙1 B (1/30)	237	第 119 図	溝1 (1/60)	254
第 92 図	土壙7 B・1 B出土遺物	238	第 120 図	溝1 出土遺物	254
第 93 図	古墳時代後期～中世全体図		第 121 図	溝2・6及び周辺平面図 (1/250)	
	(1/400)	239			255
第 94 図	土壙31・34及び周辺図 (1/150)		第 122 図	溝2・6 断面図 (1/80)	255
		240	第 123 図	溝5 (1/60)	256
第 95 図	土壙31・34断面図 (1/80)	241	第 124 図	溝5 出土遺物	256
第 96 図	土壙31・34出土遺物	242	第 125 図	柱穴出土遺物	258
第 97 図	土壙56 (1/30)	242	第 126 図	第5調査区谷断面図 (1/120)	
第 98 図	土壙58 (1/30)	242			259
第 99 図	土壙40 (1/30)	243	第 127 図	出土銅銭 (1/2)	260
第 100 図	土壙39 (1/30)	243	第 128 図	石鏃・石剣・楔形石器・石庖丁	
第 101 図	土壙43 (1/30)	243		(1/2)	264
第 102 図	土壙27 (1/30)	244	第 129 図	石庖丁・スクレイパー I 類・石核	
第 103 図	土壙41 (1/30)	244		(1/2)	265
第 104 図	土壙36 (1/30)	245	第 130 図	スクレイパー II 類・石核 (1/2)	
第 105 図	土壙19 (1/30)	245			266
第 106 図	土壙33 (1/30)	246	第 131 図	磨製石斧 (1/2)	267
第 107 図	土壙33出土遺物 (1/2・1/4)		第 132 図	砥石・石錘 (1/2)	268

矢部奥田遺跡

第 133 図 敲石・凹石 (1/2) ……………	269	第 136 図 包含層出土遺物(3) ……………	272
第 134 図 包含層出土遺物(1) ……………	270	第 137 図 包含層出土遺物(4) ……………	273
第 135 図 包含層出土遺物(2) ……………	271		

表 目 次

表 1 銅銭一覧表 ……………	260	表 3 出土土器観察表 ……………	276
表 2 出土石器一覧表 ……………	261	表 4 出土石器観察表 ……………	314

図 版 目 次

図版47—1 調査前全景 (北から)	土状況 (東から)
— 2 調査後遠景 (東から)	— 3 第1調査区西半部採掘内遺物出土状況 (北東から)
図版48—1 一次調査T16貝塚検出状況 (南から)	図版53—1 第1調査区土壇41 (北東から)
— 2 一次調査T16獣骨出土状況 (南から)	— 2 第1調査区土壇53 (南から)
— 3 一次調査T8土層断面 (南から)	図版54—1 第1調査区矢部貝塚上面検出状況 (西から)
図版49—1 第1調査区南端中世遺構全景 (西から)	— 2 第1調査区矢部貝塚堆積状況 (西から)
— 2 第1調査区南端下層遺構全景 (西から)	図版55—1 第1調査区矢部貝塚獣骨出土状況 (南東から)
図版50—1 第1調査区西半部上層遺構全景 (西から)	— 2 第1調査区矢部貝塚獣骨出土状況 (南から)
— 2 第1調査区東半部上層遺構全景 (北東から)	— 3 第1調査区矢部貝塚調査風景 (北から)
図版51—1 第1調査区東半部粘土採掘跡全景 (南から)	図版56—1 第1調査区矢部貝塚堆積状況 (北から)
— 2 第1調査区西半部粘土採掘跡 (北西から)	— 2 第1調査区矢部貝塚土層断面 (西から)
図版52—1 第1調査区西半部採掘内遺物出土状況 (南から)	図版57—1 第1調査区黒色粘土堆積状況 (北東から)
— 2 第1調査区西半部採掘内遺物出	— 2 第1調査区黒色粘土堆積断面 (北東から)

矢部奥田遺跡

- |        |                                   |        |                           |
|--------|-----------------------------------|--------|---------------------------|
| 図版58—1 | 第2調査区東半部全景<br>(北東から)              | —3     | 第3調査区調査風景<br>(南西から)       |
| —2     | 第2調査区溝1周辺(東から)                    | 図版67—1 | 第4調査区土壌3B土層断面<br>(南東から)   |
| 図版59—1 | 第2調査区溝1遺物出土状況<br>(南西から)           | —2     | 第4調査区土壌3B<br>(南東から)       |
| —2     | 第2調査区溝1遺物出土状況<br>(南西から)           | 図版68—1 | 第4調査区土壌2B土層断面<br>(北から)    |
| —3     | 第2調査区溝1遺物出土状況<br>(南西から)           | —2     | 第4調査区土壌5B土層断面<br>(南東から)   |
| 図版60—1 | 第2調査区竪穴住居(西から)                    | —3     | 第4調査区土壌7B土層断面<br>(南東から)   |
| —2     | 第2調査区竪穴住居下土壌12<br>(左)土壌13(右)(北から) | 図版69—1 | 第4調査区土壌3B遺物出土状<br>況(北西から) |
| 図版61—1 | 第3調査区西半部土壌群上面検<br>出状況(西から)        | —2     | 第4調査区土壌5B遺物出土状<br>況(北から)  |
| —2     | 第3調査区西半部土壌群<br>(西から)              | —3     | 第4調査区土壌7B遺物出土状<br>況(北から)  |
| 図版62—1 | 第3調査区土壌6(東から)                     | 図版70—1 | 第5調査区全景(北から)              |
| —2     | 第3調査区土壌6上部土層断面<br>(西から)           | —2     | 第5調査区南半土層断面<br>(北東から)     |
| —3     | 第3調査区土壌6下部土層断面<br>(東から)           | 図版71—1 | 第5調査区土壌54(北から)            |
| 図版63—1 | 第3調査区土壌8(南東から)                    | —2     | 第5調査区北半土層断面<br>(東から)      |
| —2     | 第3調査区土壌8土層断面<br>(東から)             | 図版72—1 | 縄文中期Ⅰ・Ⅱ類                  |
| 図版64—1 | 第3調査区土壌7(南東から)                    | —2     | 縄文中期Ⅰ類                    |
| —2     | 第3調査区土壌10(北から)                    | 図版73—1 | 縄文中期Ⅰ類                    |
| 図版65—1 | 第3調査区土壌9(南から)                     | —2     | 縄文中期Ⅲ類                    |
| —2     | 第3調査区土壌9上部土層断面<br>(北から)           | 図版74—1 | 縄文中期Ⅲ・Ⅳ類                  |
| 図版66—1 | 第3調査区土壌17(西から)                    | —2     | 縄文中期Ⅳc類                   |
| —2     | 第3調査区土壌15、16<br>(北西から)            | 図版75—1 | 縄文中期Ⅳa・g類                 |
|        |                                   | —2     | 縄文中期Ⅲ・Ⅳ類                  |

矢部奥田遺跡

- |        |              |        |                 |
|--------|--------------|--------|-----------------|
| 図版76—1 | 土壙—12周辺出土遺物  | 図版84—1 | 縄文中・後期底部        |
| —2     | 縄文中期Ⅳh類      | —2     | 早期Ⅰ類            |
| 図版77—1 | 縄文中期Ⅳe類      | —3     | 耳飾り             |
| —2     | 縄文中期Ⅳ類       | 図版85—1 | 出土土器1（弥生土器）     |
| 図版78—1 | 縄文中期Ⅴ類       | —2     | 出土土器2（弥生土器）     |
| —2     | 縄文後期Ⅰ類       | 図版86   | 出土土器3（弥生土器）     |
| 図版79—1 | T—16貝層上面出土遺物 | 図版87   | 出土土器4（土師器）      |
| —2     | 縄文後期Ⅱ類       | 図版88   | 出土土器5（土師器）      |
| 図版80—1 | 縄文後期Ⅱ類       | 図版89   | 出土土器6（須恵器・中世土器） |
| —2     | 縄文後期Ⅱ類       | 図版90—1 | 出土土器7（中世土器）     |
| 図版81—1 | 縄文後期Ⅱ類       | —2     | 出土銅錢            |
| —2     | 縄文後期Ⅱ類       | 図版91   | 出土石器1           |
| 図版82—1 | 縄文後期Ⅱ類       | 図版92   | 出土石器2           |
| —2     | 縄文後期Ⅳ類       | 図版93   | 出土石器3           |
| 図版83—1 | 縄文後期Ⅲ類（表）    | 図版94   | 出土石器4           |
| —2     | 縄文後期Ⅲ類（裏）    |        |                 |



## 第1章 発掘調査の経過と概要

### 第1節 発掘調査の契機と経過

昭和59年11月から昭和60年1月に行われた第1次調査（確認調査）の結果、縄文時代の矢部貝塚の確認と、縄文時代から中世にかけての遺構や遺物を確認した。ただ貝塚については、その後の保存協議（前項）により、現状保存となり、発掘調査は、南端の貝塚を除く、延長110m、面積約3,300㎡あまりの段丘から、一部谷にかけての弥生時代から中世の遺構を調査対象とすることとなった。

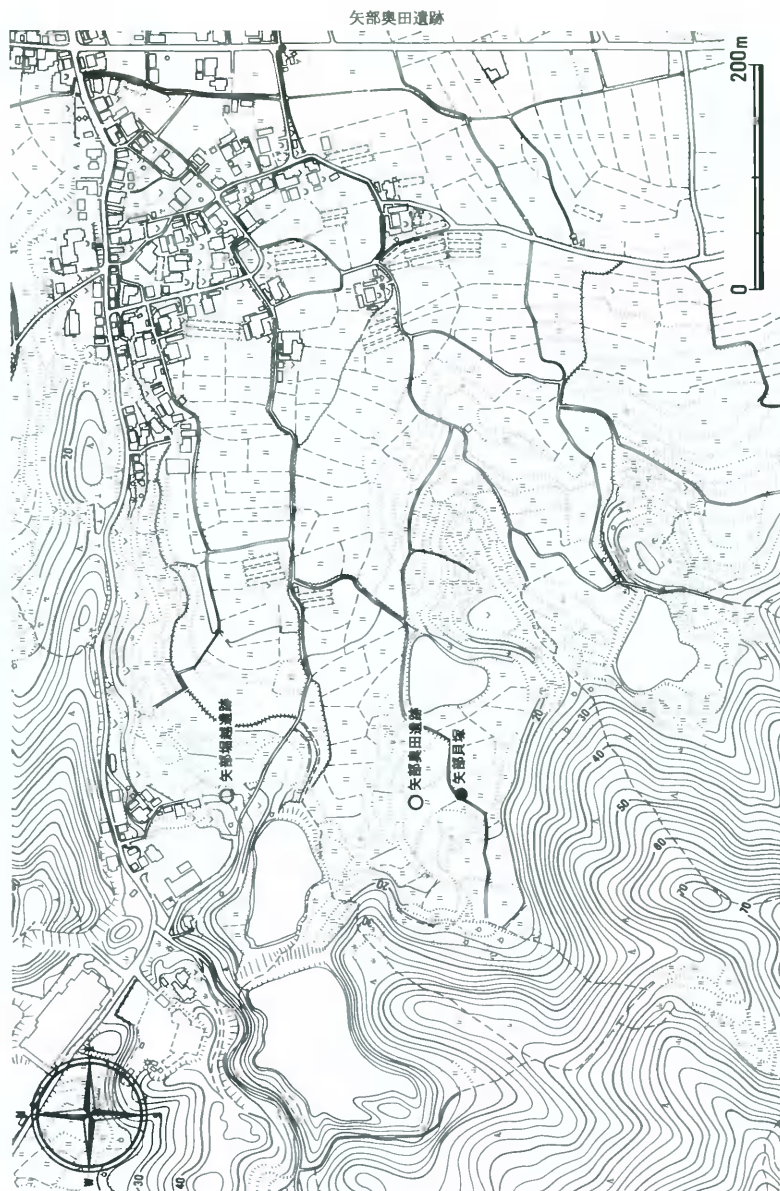
昭和62年4月から調査担当者2名により、同年10月末までの7カ月の調査予定で、本調査（全面調査）を開始した。当初第1調査区東から順次第2・3調査区に調査を進める予定であったが、遺跡周辺で行われていた圃場整備の関連農道が第2・3調査区を横断する計画を調査開始後に知らされたため、第2・3調査区の調査を優先して行うこととなった。この調査区は、中世の柱穴はまれで、古墳時代前半期を中心とする大型の土壌群や堅穴住居、粘土採掘場、縄文時代の包含層を検出した。ただこの地区の調査時点では、最終的に調査区内の大半に検出した粘土採掘場が掘削されている認識は無く、混り土の埋土の状況から、大規模な造成面が形成されている程度の認識であった。

その後、第2調査区東の調査から良質な黒色粘土層の存在が確認され、掘削が黒色粘土層の下部までで終わっていることなどが認識されたことから黒色粘土の採集を目的とする広範な掘削が大規模に行われている様子が把握された。さらに、この時期に県立博物館の高橋護氏の適切な御指導をいただき、粘土採掘跡との認識を深めた。

粘土採掘跡は、7月下旬より再開した第1調査区で良好な遺存をなし、大規模な採掘場が連続していることや、一回の採掘の状況を把握できる採掘場も確認された。また採掘時期については、埋土上面に中世の柱穴群が広がっていることと、採掘土壌上面の浅い土壌や、溝状の遺構の埋土中に、古墳時代後半期の須恵器を含む状況や、採掘後の埋土中に下田所期の遺物を含むこと等の確認から、古墳時代前半期の採掘場であろうと想定された。

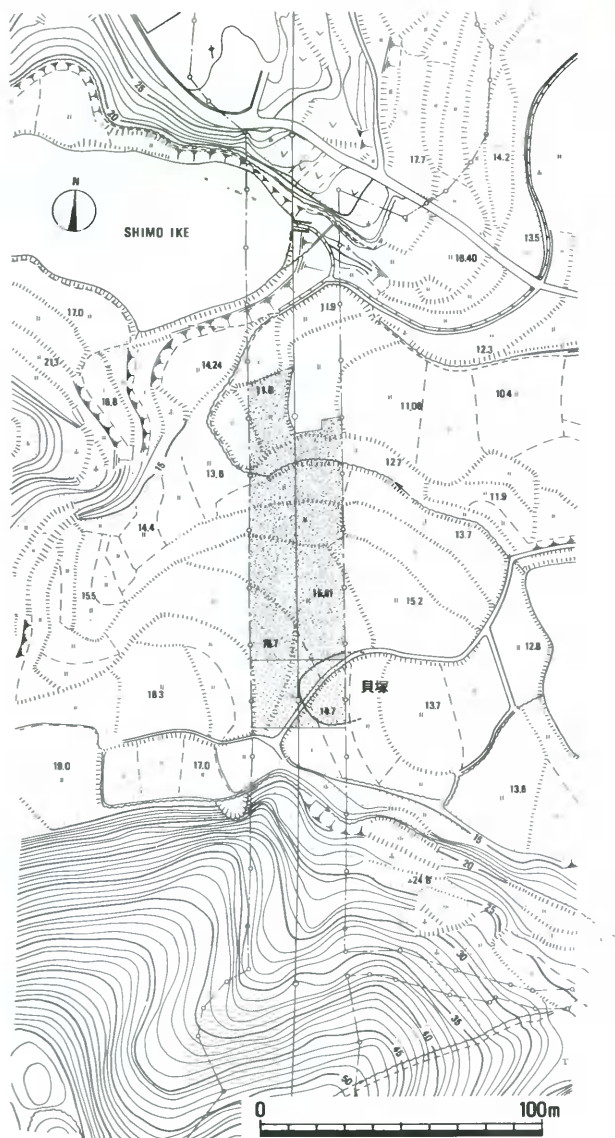
なお、この時期備前焼作家松井興之氏には採掘粘土等について現地指導を受け、さらに多忙ななか、黒色粘土による製作も試みていただいた。同時に備前陶芸センターによる粘土の胎土分析もしていただいた。（第64・65図）

10月以後の調査工程は、第1調査区西と並行し、圃場整備の工事用道路として使用されていたため残っていた南端部の第1調査区南の調査も開始した。上層面の検出遺構は、中世の多数



第1図 遺跡位置図 (1/5,000)

矢部奥田遺跡



第2図 発掘調査位置図 (1/2,000)

の柱穴と土壌であり、下層には、粘土の採掘跡が第1調査区西より連続している状況であった。ただ、南東隅において、貝塚の一部が保存地区より若干北側にも広がることが確認されたため、新たに矢部貝塚についても、その一部を調査対象とすることとなった。

予想外の大規模な粘土採掘場の広がり、新たに貝塚の調査も加わり、調査工程に遅れを生じてきたため、未調査の第4調査区については応援体制を組むこととなり、11月下旬より新たに一班、この調査区の調査に入ることとなった。第4調査区の主な検出遺構は、第2・3調査区に多数検出したものと同様の大型の土壌群であった。また、第5調査区については、トレンチ調査の結果から遺構の存在は薄いとみられたため重機による掘削を行い谷地形を確認したにとどまった。

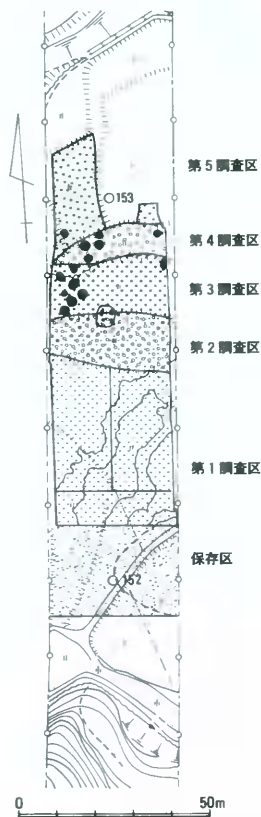
なお、調査の後半には、立命館大学の日下雅義氏に矢部奥田遺跡の地形の形成過程や、黒色粘土の堆積状況等の地理的なご指導を現地を受け、さらに付編の報告文をいただいた。

報告書の作成については、遺物の整理の全般を高畑知功、古市秀治が中心になって行い、このうち石器に関しては、平井典子があたった。執筆は第2章第1節の縄文時代の遺物の項を高畑、同第2節の第4調査区の項を内藤、同第4節の石器の項を平井その他と編集を山磨が行った。また、ボーリングデータや地形図等の作成に関しては、岡山市・倉敷市両教育委員会にご援助をいただいた。

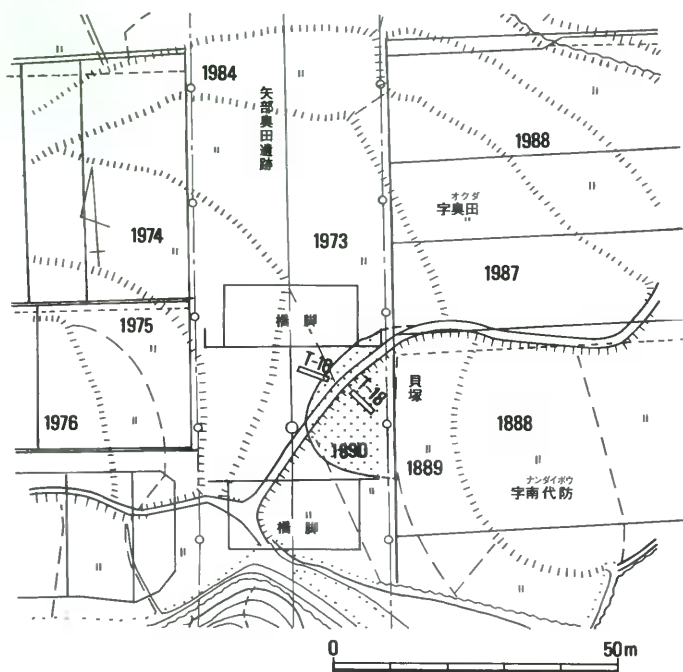
## 第2節 貝塚調査の経緯と名称について

事前の分布調査からは、今回調査対象とした舌状段丘に、須恵器、土師器の土器片の散布が確認されていたのみで、周知の縄文貝塚は現況では水田下に埋没し、位置が不明であるものの、おそらく用地外であろうと想定されていた。しかし、前述の如く昭和59年度に行った第一次の確認調査では、舌状段丘に縄文～中世の土器片の出土や一部遺構を検出するとともに、予想外にも貝塚本体をも用地内に存在することが確認された。

その後、貝塚については、道路公団との保存協議がな



第3図 調査区図 (1/1,500)



第4図 貝塚位置図 (1/1,000) (実線は新水田区画)

され、設計変更により現状保存されることとなった。ただその一部については、保存区域外にも広がり認められたため、貝層の一部の面的な発掘調査を行った。わずかな範囲の貝塚の調査ではあったが、足守川流域では最深部に位置する縄文貝塚の実態が初めて明らかにされるとともに、多くの動物遺存体、貝類、縄文土器の資料をえることができた。これらの遺物のうち、動物遺存体、貝類については、早稲田大学の金子浩昌氏に鑑定をあおぎ、報告文をいただいた。縄文土器については、県立博物館の高橋護氏にたびたびご指導、ご教示をいただき多くの成果を上げることが出来た。

ただ、その名称については、種々文献や分布地図等に記載されているものの統一された名称が無く、しかもその実態については、本調査がなされるまで位置も不明確となっている状況であった。さらに今回の道路建設と合い前後して行われた周辺の圃場整備により、地形も大幅に改変されているのが現状である。

よって、今回の発掘調査を契機として、改めて、文献等の検討から名称、所在地等の再確認

## 矢部奥田遺跡

を行い、再び位置不明となるような混乱をさけるために一項をもうけた。

まず、圃場整備が行われる以前の貝塚の所在地については、倉敷市矢部1,973、1,888、1,890番地の各々の一部が該当する。地籍図によると、貝塚直上を東西に通る農道を境に北側が字奥田、南側が字南大坊にあたっている。遺跡の名称については、昭和13年に刊行された吉備考古第36集に水原韶泉「岡山県下の貝塚の概説」に集成されている大字矢部の「中須賀貝塚」の名称が当該貝塚の初見のようである。ただ「中須賀」の名称については、地籍図には記載が無く、地元の人々の聞き取りによれば、貝塚位置より若干東付近を呼称していたようである。この集成には、この他に「矢部堀越貝塚」と呼称する別個の貝塚の存在も記載されているが、発掘調査時の付近の聞き取りによると路線内には入らないが大字堀越の鯉喰神社に至る旧道沿いの南斜面に位置していたようで、現在ではほぼ消滅しているとみられる。

その後、貝塚の名称については、「中須賀」を踏襲したものと、貝塚の所在する字名の一つ奥田を使用し、「矢部奥田貝塚」としたもの、大字名の矢部のみを使用し、「矢部貝塚」と呼称したもの等がみられ、現在に至っている。

本報告書では、倉敷市文化財分布図にみられる大字名のみを付した「矢部貝塚」を使用し、貝塚に続く調査対象となった遺跡を矢部奥田遺跡と呼称する。

道路及び圃場整備の完成後の1992年時点の現状では、谷部に設置された橋脚の南から1、2本目の間（北から数えて5、6本目の間）に貝塚が盛土保存されている。また、路線の東側の水田でも貝塚の形成された谷部が盛土され、新水田区画の1,844、1,845番地の一部に貝塚が路線内と同様に盛土保存されている。したがって、現状では、用地内外ともに大幅な盛土造成により貝塚の形成された谷状の地形が消滅し、南側が高く北側に向って傾斜する形状に改変されている。

## 第3節 日誌抄

### 第1次調査（確認調査）

昭和59年

11月16日 器材運搬、テント設営。

17日 T-1よりトレンチ調査を開始。

12月3日 T-16、18にて貝塚を確認。

4日 調査終了トレンチから埋戻し。

18日 T-16貝塚の掘り下げ調査。

昭和60年

1月16日～17日 貝塚周辺トレンチの埋戻し

し。

### 第2次調査（全面調査）

昭和62年

4月1日～5日 調査準備

6日 調査開始。

15日 1区東、上面掘り下げ検出。

16日 新たに、2区の開始（西半）、竪穴住居、土壌の掘り下げ。

矢部奥田遺跡

- |          |  |        |                                      |
|----------|--|--------|--------------------------------------|
| 24日      | 3区西の調査開始。  | 16日    | 1区南の掘り下げ開始。                          |
| 5月8日     | 3区東の掘り下げ開始。3区西の大型土壌の掘り下げ、土層断面実測等。                | 21日    | 1区東の遺構レベル記入を行い調査を終了。                 |
| 12日      | 2、3区西半部、全景写真撮影。                                  | 10月2日  | 1区南、貝塚上面の検出と写真撮影。                    |
| 27日      | 対策委員会を開催。  | 6日     | 1区西の調査に入り、上面の検出作業。                   |
| 6月10日    | 3区西の縄文包含層の掘り下げ、大型土壌群の写真撮影。                       | 8日～23日 | 貝塚の掘り下げ。                             |
| 13日      | 2区東半の掘り下げを開始。                                    | 11月6日  | 1区南半の粘土採掘跡の写真撮影。                     |
| 24日      | 2、3区西半を終了。東半の遺構の検出、掘り下げを続行。                      | 10日    | 5区の掘り下げを開始。断面の清掃。                    |
| 29日      | 2区東、中世の区画溝の掘り下げ実測、写真撮影を実施。                       | 14日    | 5区、谷部のトレンチ補足掘り下げ。                    |
| 7月1日～15日 | 2、3区東の上層遺構の掘り下げ実測に続き、下層粘土採掘跡の掘り下げ。               | 26日    | 4区の調査に新たに班を増員し、開始する。12月21日まで。        |
| 20日      | 2、3区東の調査を終了し、1区東の調査を再開。                          | 12月1日  | 1区南、貝塚実測レベル記入、1区西粘土採掘遺構掘り下げ。         |
| 25日      | 1区東、上面遺構の検出に続き、下部採掘跡の掘り下げ開始。                     | 4日     | 1区南、貝塚、地形測量、4区土壌1、2の掘り下げ。            |
| 8月1日～31日 | 主に1区東の上面遺構に続き、下部の採掘跡の掘り下げ、断面実測を続行し、掘り下げる。        | 18日    | 4区写真撮影、一部埋戻し。                        |
| 21日      | 1区東、南半部の掘り下げ開始、上面遺構の検出と掘り下げ。                     | 21日    | 2、3区、補足断面実測、1区西掘り下げ、貝塚埋戻し作業、4区の調査終了。 |
| 9月1日～31日 | 1区東、北半部は主に採掘跡の土層断面、遺構実測、写真撮影、南半部は採掘跡の主に掘り下げを続行中。 | 25日    | 1区西、遺構掘り下げ補足。写真撮影、レベル記入、2、3区の補足調査。   |
|          |  | 昭和63年  |                                      |
|          |  | 1月6日   | 津寺遺跡への移動作業終了。                        |



第5図 遺構全体図 (1/600)

(縄文時代～古墳時代前期(右), 古墳時代後期～中世以降(左))



## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

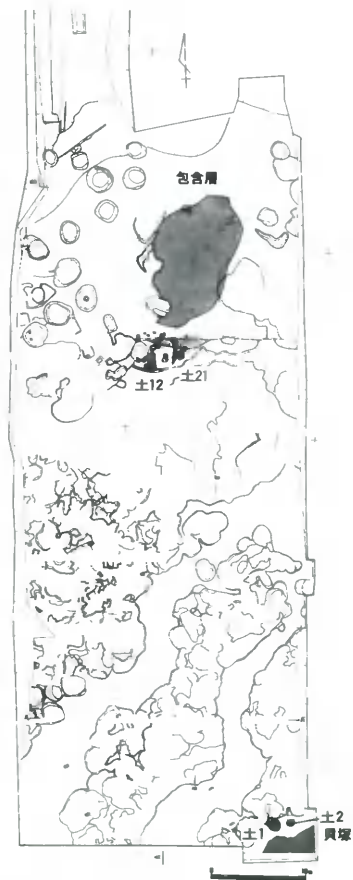
舌状台地の南側斜面に矢部貝塚を確認し、北側の緩斜面にあたる第2、3調査区からは、縄文時代の遺物包含層や土壌を確認している。矢部貝塚は、第一次確認調査によるトレンチと矢部奥田遺跡の調査区南端で、貝塚の斜面堆積の一部の調査を行った。第2、3調査区の中央付近に確認した縄文包含層は、北側斜面の一面で粘土採掘が及んでいなかった場所である。包含層上面に貝が薄く堆積している場所も一部に見受けられた。包含層除去後の遺構は確認していない。第2調査区中央の土壌は、埋土中に炭片を含み、土器の出土もかなりあり、貝塚形成期の唯一の明瞭な遺構である。

台地の中央部分は、古墳時代前半期の大規模な粘土採掘と後世の水田造成による削平や攪乱を受けており、遺構は確認していない。ただ、多くの縄文土器片や石器類が粘土採掘場の埋土中や中世以降の遺構中に混入していることから、この台地中央に縄文集落が存在していたことが十分に窺われる。

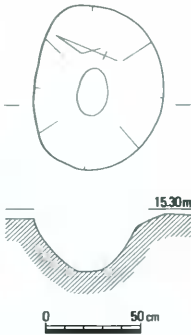
#### 土壌

##### 土壌1（第8図）

第1調査区南東端の貝塚と粘土採掘場の



第6図 縄文時代の遺構配置図 (1/600)  
(色塗り部分)



第7図 土壌2 (1/30)

間に位置する。土壌中央に中世の柱穴と北側に粘土採掘坑が切り込んでいる。規模は、推定長径1.4m、短径1.25mの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。埋土は、炭を含む暗茶褐色の粘質微砂土である。

出土遺物がなく時期決定に乏しいが、埋土の状況等から縄文時代の遺構と想定される。

#### 土壌2 (第7図)

土壌1と同様に第1調査区南東端の貝塚と粘土採掘坑の間に位置する。規模は、長径90cm、短径70cmの楕円形の形状をなし、深さ30cmを測る。

土壌と同様に出土遺物がなく時期の特定は難しいが、埋土や遺構の位置などから縄文時代の可能性が高い。

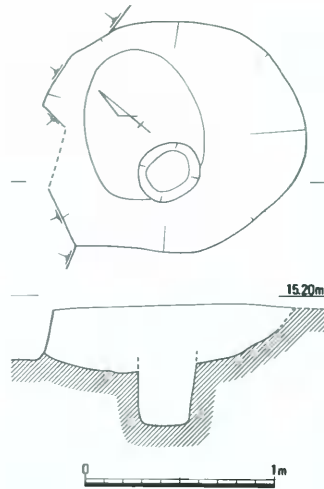
#### 土壌21 (第9図)

第2調査区中央の堅穴住居の東端の下部に位置する。規模は、長径1.5m、短径1.14mの不定形な形状をなし、深さ23cmである。埋土は、淡黄褐色の粘質微砂土が堆積している。

出土遺物は、一部上部遺構からの混入と思われる土師器片もあるが大半は縄文土器片が占める。時期は、明確には確定し難いが出土遺物や埋土の状況等から当該土壌の西側に位置する土壌12と同様に縄文時代の遺構と見られる。

#### 土壌12 (第10図、図版60-2)

第2次調査区中央で堅穴住居の床面下部に検出した。規模は、長径1.95m、短径1.3mの不整形をなし、底面かなりの凹凸があるものの大きく三段に掘り込まれている。深さは、最深



第8図 土壌1 (1/30)

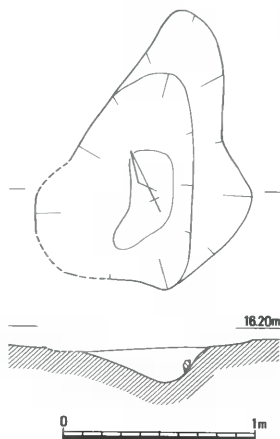
部で40cmである。埋土は、茶褐色の粘質微砂土が大半を占め炭を含んでいる。後の粘土採掘による破壊を免れた縄文時代唯一の明確な遺構である。

## 貝塚

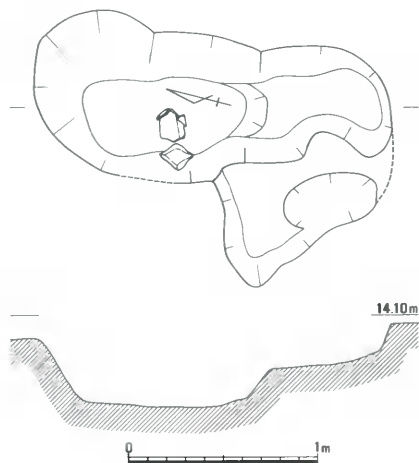
### 1. 立地と層位（第11図、図版54・56）

足守川流域の最深部に所在する当貝塚は、標高14~15m程度の舌状台地の南東から南方向の斜面に位置している。貝塚の規模は、第一次確認調査の結果も合わせて検討すると、現在の農道に沿うように南西から北東方向に広がっており、路線内で幅20m程と想定される。今回の矢部奥田遺跡の発掘調査では、第1調査区の南東隅において貝の堆積の始まりの一部を面的に確認した。

貝層を検出するまでの土層は、第11図に示した東壁断面を基準とする。南壁の東西断面は貝塚の堆積方向に沿わず、しかも、保存区に接するために法面を多く取っており十分に把握していない。ただ、東壁断面も第一層は、工事用道路による盛土とダンプカーの轍による攪乱を受けている。第3、5層は、近世以降の水田土層を示す。第6層は貝塚の傾斜にそって斜面堆積をなしており、おそらく古墳時代全般にわたる包含層であろう。この第6層上面には、中世の遺構を確認している。第7層は暗灰褐色を呈し貝塚を覆うように厚さ10cm程で堆積している。



第9図 土壌21 (1/30)

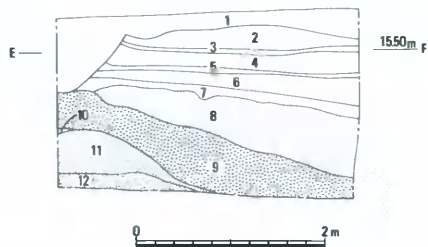
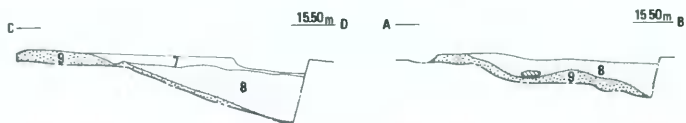


第10図 土壌12 (1/30)

矢部奥田遺跡



□ 貝      • 獣骨



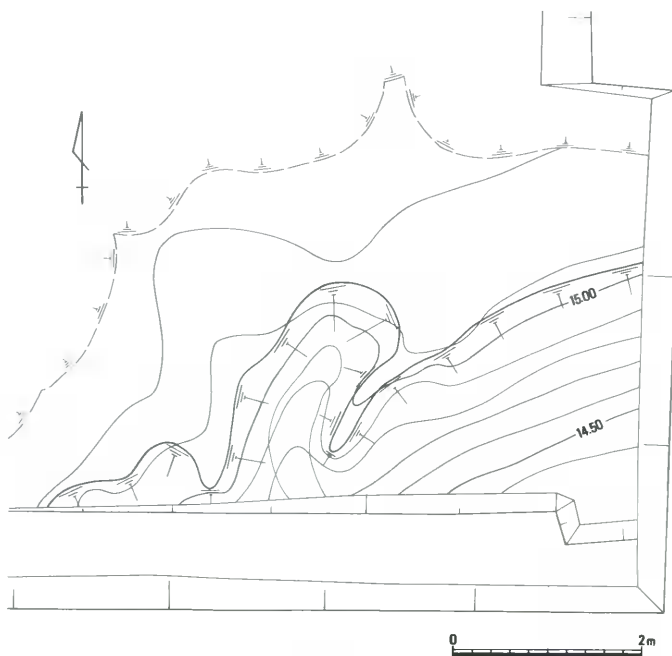
1. 工事用埋土及びかく乱土
2. 明灰色表土
3. 灰白色砂質土
4. 明灰褐色土・灰白色砂質土・茶灰色ブロック土(水田造成土)
5. 灰白色砂質土
6. 灰褐色砂質土(マンガン含)
7. 暗灰褐色粘質微砂土
8. 貝層(シジミ主・カキ・ハイガイ含)
9. 淡黄褐色粘質微砂土
10. 漆黒色粘土(採掘粘土)
11. 淡黄茶褐色粘質微砂土
12. 黄灰色粘土

第11図 矢部貝塚 (1/60)

## 2. 遺物の出土状況と貝層

貝塚の存在は、調査区南端の周囲に掘削した側溝により確認した。その後、貝の全面露出と清掃を行い貝塚の広がりや追求した。第11図に記載した石材や大形の土器片、獣骨等の出土状況はこの時点のものである。ただ、貝塚の始まりの肩口付近については、貝層を若干除去した後斜面に広がっていた大形の土器片についても記載している。貝の掘り下げは、東西二本の土層観察用の畦に沿うトレンチにより、先ず、堆積状況の確認を行った。

貝塚の堆積は、地形の状態から北西から南西方向へ貝類を投棄した様で、最大幅6m、長さ3m、面積10.5㎡程を調査区内で検出した。貝層は、調査区の南東隅が最も深く厚さ80cm程の堆積を確認した。貝の種類は、ヤマトシジミが大半を占め、カキ、ハイガイ、カワアイがこれに続く量である。貝塚断面の観察からは、調査区内では間層は含まず貝を主体とする混土貝層のみである。ただ東壁断面の詳細な観察によると、間層は含まないものの、同一種の貝の一定



第12図 矢部貝塚 旧地形図 (1/60)

方向の堆積が認められる層も見受けられた。

### 3. 旧地形（第12図、図版56）

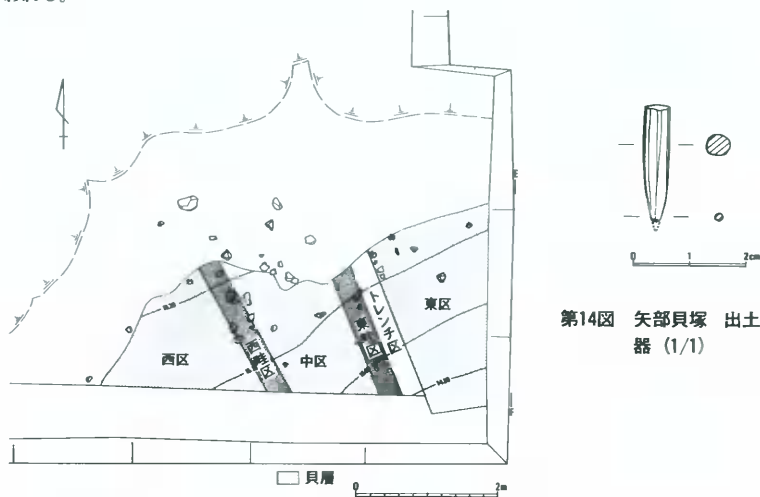
貝塚に埋没していた旧地形は、基本的には北西方向から南東に傾斜する谷の肩口にあたっている。谷の傾斜角度は、20度程をなし、調査区の東壁断面では、肩口から1 m、図のC-Dの断面で80cm低下している。ただ、A-Bの断面付近には、幅1 m、深さ15cmの浅い溝が北東から南西方向に、緩くカーブしながら谷に向かっている。この溝内からは、良好な猪の頭骨が出土している。

貝塚の直上に設けられていた農道は、確認調査時のT16、18の結果を合わせて検討してみると、旧地形の傾斜変換点よりやや谷側に沿うように位置しているようである。

### 4. 動物遺存体の選別（第13図）

貝層の掘下げは、間層が認められなかったことや、狭い調査範囲であったために二本の畦を境に東、中、西と三分割し、下部まで一括して掘り下げ全面採取を行った。

水洗選別は、十分に乾燥した後がよいものの、時間的な制約と11～12月の乾燥に不向きな時期に調査が当たったために不十分な乾燥のまま水洗を行った。しかし、混入土が比較的砂質に富む土質であったために、不十分な乾燥にもかかわらず選別は容易であった。ただ、選別には、4 mmの網目のふるいを使用したため、網目に掛からず通過した資料もかなりあるものと思われる。



第14図 矢部貝塚 出土骨器 (1/1)

第13図 矢部貝塚 遺物取り上げ地区図 (1/80)

選別した獣、魚骨等の遺存体については、さらに魚骨類と獣骨に大きく分離し、復元を行った後に同定を依頼した。貝類については、総数が整理箱（長54cm×幅34cm×深15cm）に80箱にのぼった。これらのうち貝種の分類は全て完了したものの、統計処理については、総量の約10%にあたる8箱を選び集計を行った。

動物遺存体の同定等については、早稲田大学の金子浩昌氏に御指導を仰ぎ、報告文をいただいた。

### 遺物包含層（第15図）

第2調査区と第3調査区の中央に縄文時代の包含層を確認した。水田造成や粘土採掘場により削平を受けているが南北17m、東西幅9mにわたっている。ただ西側については、粘土採掘により削平を受けているものの東西土層断面の観察では西端で包含層が薄く不明瞭となり、西側の広がり採掘場付近までのようである。包含層付近の現地形は、二段の水田造成がなされており第3調査区のカット部分では表土直下で縄文包含層が露出している。上方の水田造成面にあたる第2調査区では、縄文包含層の上面に古墳時代前半期の竪穴住居が位置する。

当該包含層は、淡茶褐色の粘質微砂土で形成され厚さは平均して40cm程である。土層断面や地形の観察によると低台地の北側緩斜面の浅くくぼんだ場所に堆積した包含層が残存したものと考えられる。

遺物は、第2調査区の包含層の始まり付近や第3調査区の南端で大形の土器片の出土が認められた。また第3調査区の一部では、上層に貝の堆積した場所も認められた。

包含層除去後の遺構については、明瞭なものは認められず第3調査区中央付近で浅い落ち込み程度のピットが認められたにすぎない。

### 縄文時代の遺物

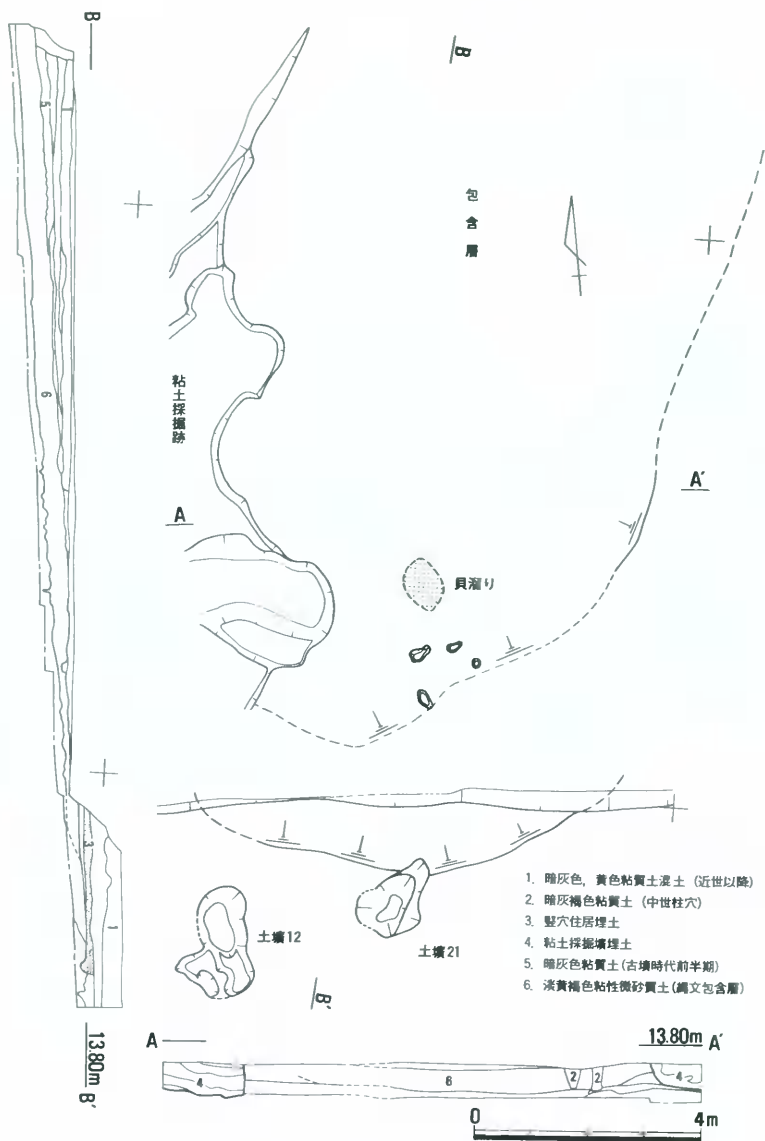
縄文時代の遺物は調査区のはほぼ全域に認められた。なかでも貝塚本体とそれに近い第1調査区、そして、包含層の所在する第2調査区中央部東端から第3調査区中央部全体に多く、それらの大半が土器片である。

これらのうち出土状況の明確なもの、文様構成および、口縁・胴・底部等の形態の特徴的なものを選び、899点を掲載した。掲載順位は遺構に伴うと考えられるもの、貝層中、貝層上面出土のもの、そして第1調査区から第5調査区までの各調査区別に古いものより新しいと考えられるものへと羅列した。

#### 土壇12・周辺出土の土器（第16図、図版76—1）

第2調査区西部の東南隅の土壇から出土したものである。1は口縁部に段をもつキャリパー

矢部奥田遺跡



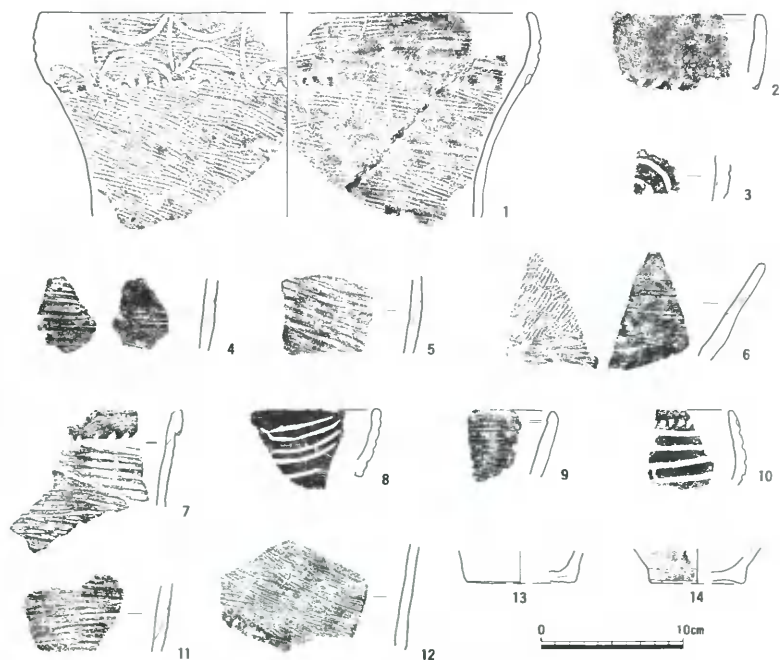
第15図 縄文包含層付近図 (1/100)



状の形態にて、口径約35cmをはかる。器内外面は右下りの二枚貝条痕が施され、段をもつ口縁部上位に沈線文および同一工具によると考えられる刺突文が一巡する。沈線の幅0.5cm、深さ0.2cmをはかる。2・6・7・8等にも口縁部に段があり、2・7・8の段部分では内傾接合の剝離面が認められる。6は外面LRの縄文を施す。8は巻貝による擬縄文地に幅0.3cm、深さ0.15~0.2cmの沈線文が施されており、10に類似する沈線文様である。4・5・7・11は外面に幅広の二枚貝条痕、12は巻貝条痕が認められる。13・14は少し凸底風の底部である。胎土中に約0.3cm以下の石英、長石粒を含み、橙色、褐色系統の色調を呈するものが多い。

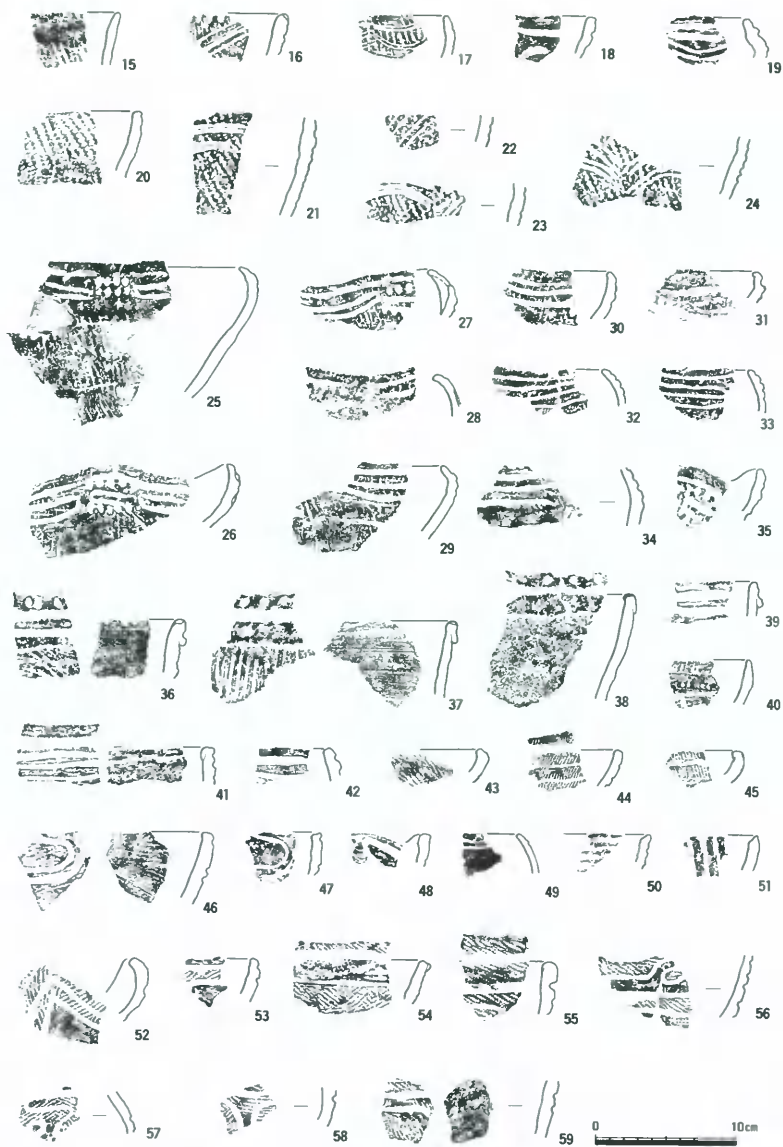
貝層出土の土器（第17・18図）

西・中・東区の貝層中を中心にし、一部貝層下のものをふくんでいる。16・17は燃米文地に細目の半截竹管、21~24は粗いRL縄文地に太目の半截竹管による直・曲線文が描かれている。なお、24は貝層下より出土したものである。25~31・34・35は二枚貝による縦の条痕後に口縁部沈線と列点文を配し、沈線間に細い刻目が施されている。1・37等にも縦位の二枚貝条



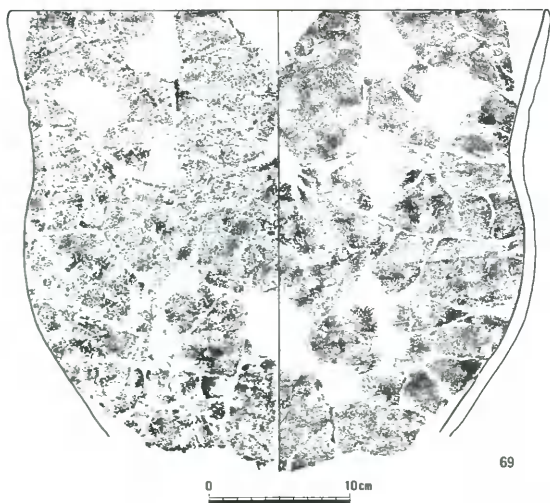
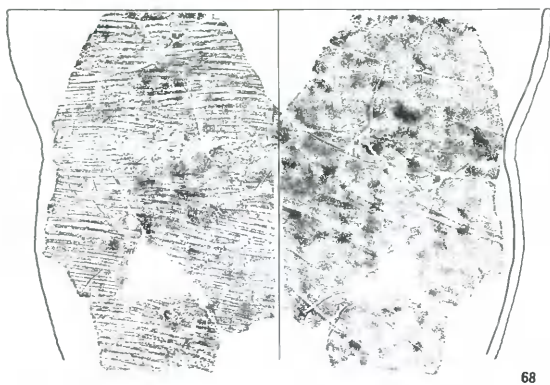
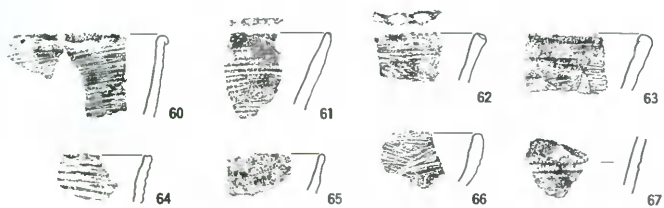
第16図 第2調査区西 土壌12・周辺出土遺物 (1/4)

矢部奥田遺跡



第17図 貝層中出土遺物 (1/4)

矢部奥田遺跡



第18図 貝層中出土遺物 (1/4)

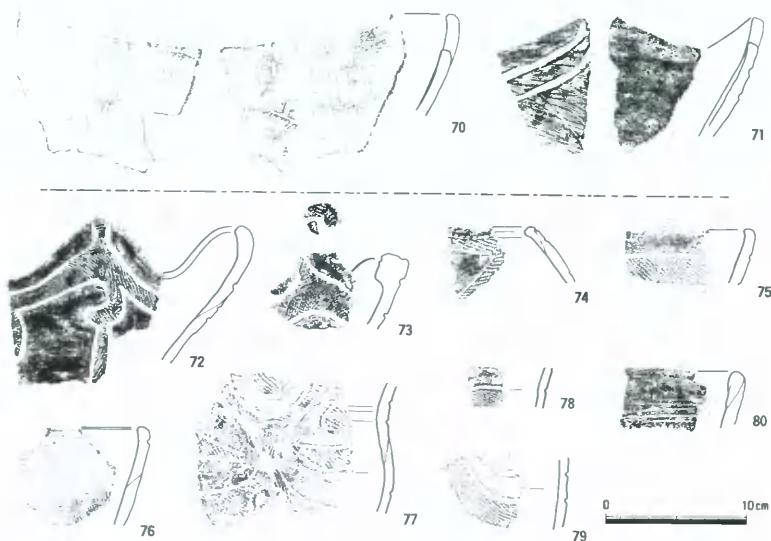
痕が認められる。32・33は薄手にて外面に幅0.2cm、深さ0.15cmの細い沈線文が3～4条みられる。36～39は口縁部を折り曲げて肥厚させ、口縁上端に巻貝等による刻目が施されている。36・39のように肥厚部分中央に沈線が巡るものがある。

40は肥厚部分に二段の押しき状の半截竹管が巡る。41・42・46～48等は比較的角張った口縁端をもち、沈線による直・曲線が描かれている。

41の口縁部には巻貝による回転押圧痕が認められる。52～59は縄文が中心となっており、52は沈線後に縄文、53はLRの縄文地に沈線と異なる施文方法の磨消縄文である。他は沈線後にRLの縄文が施されている。60～64は外面横位の二枚貝条痕にて、内面も平滑な仕上げが施されており、60・63等は口縁部端が若干内側に折返され丸みをもった痕跡をとどめる。61・62は口縁端に刻目、押圧がみられる。66は外面に巻貝による粗い条痕が残り、内面には指頭圧痕をとどめる。68は横位の二枚貝条痕が外面全体に施されており、ハイガイの腹縁によると考えられる波状の単位は幅約0.3cmをはかる。内面は幅広の工具にてヘラミガキ状に平滑な仕上げが行われている。

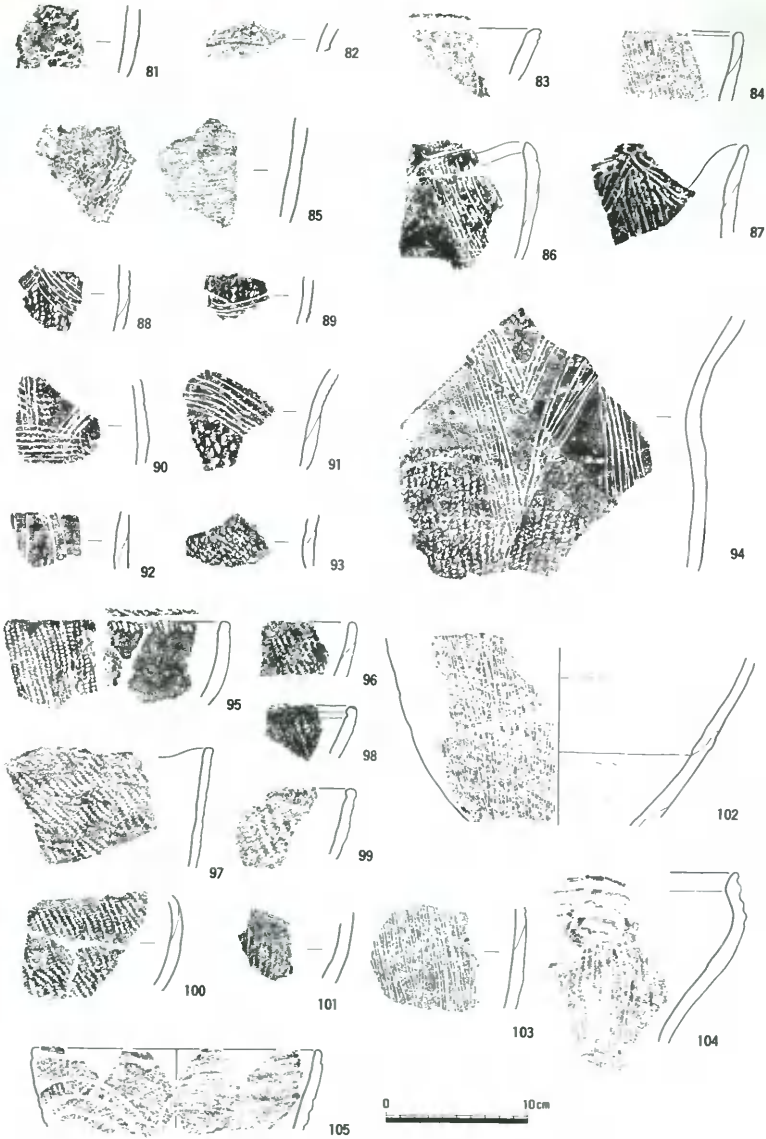
貝層上面出土の土器 (第19図、図版79-1)

ここでは確認調査時のT-18内貝層上面より出土した72～79に説明を加える。76・80を除いた7点が磨消縄文土器であり、すべてRLの縄文が施されている。72は波状口縁にて口縁端

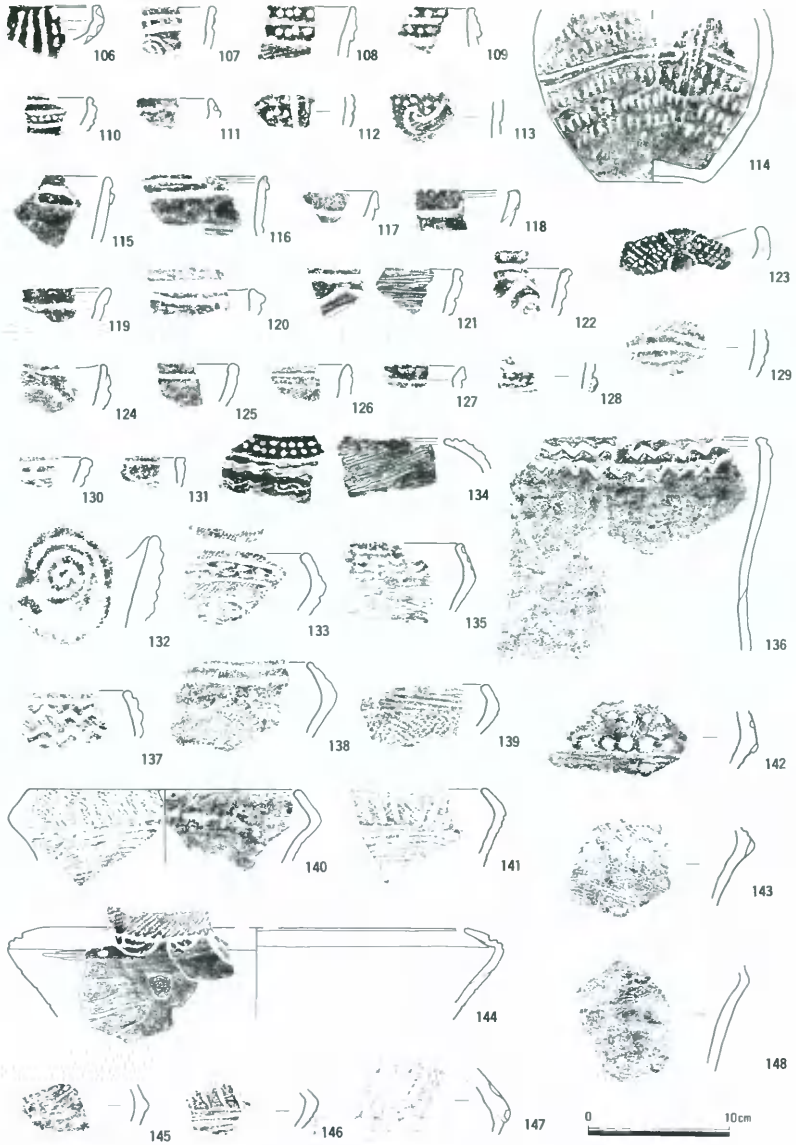


第19図 T-18貝層上面出土遺物 (1/4)

矢部奥田遺跡

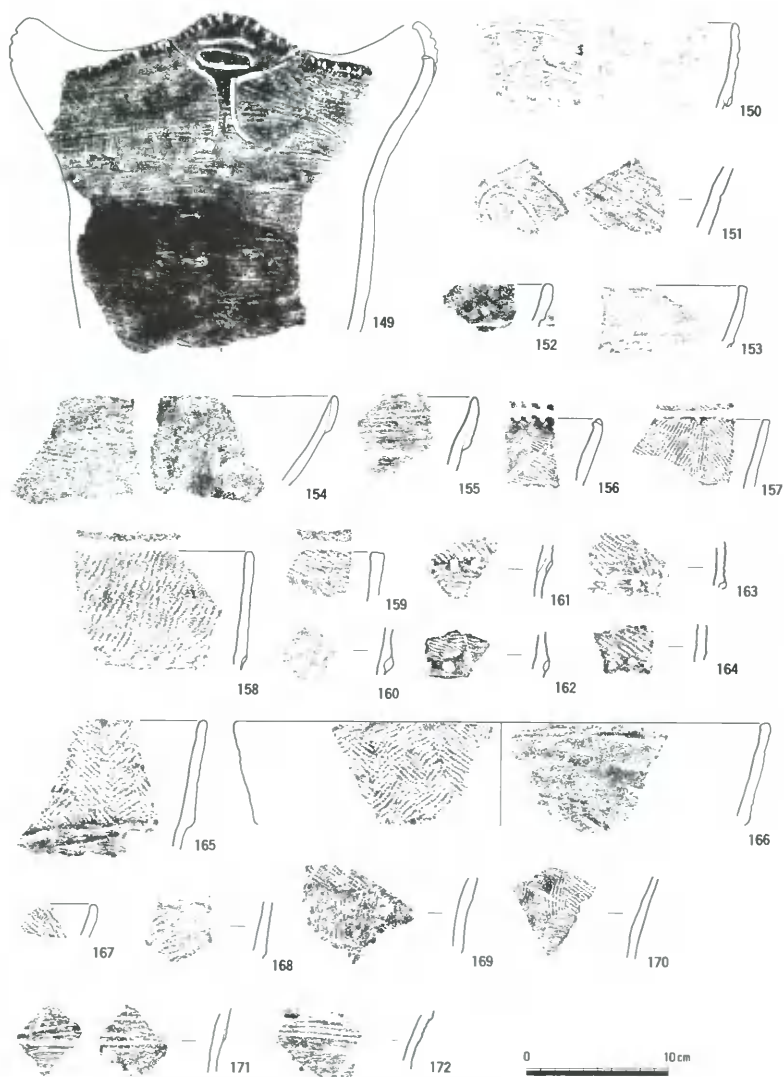


第20図 第1調査区西・東出土遺物(1)(1/4)



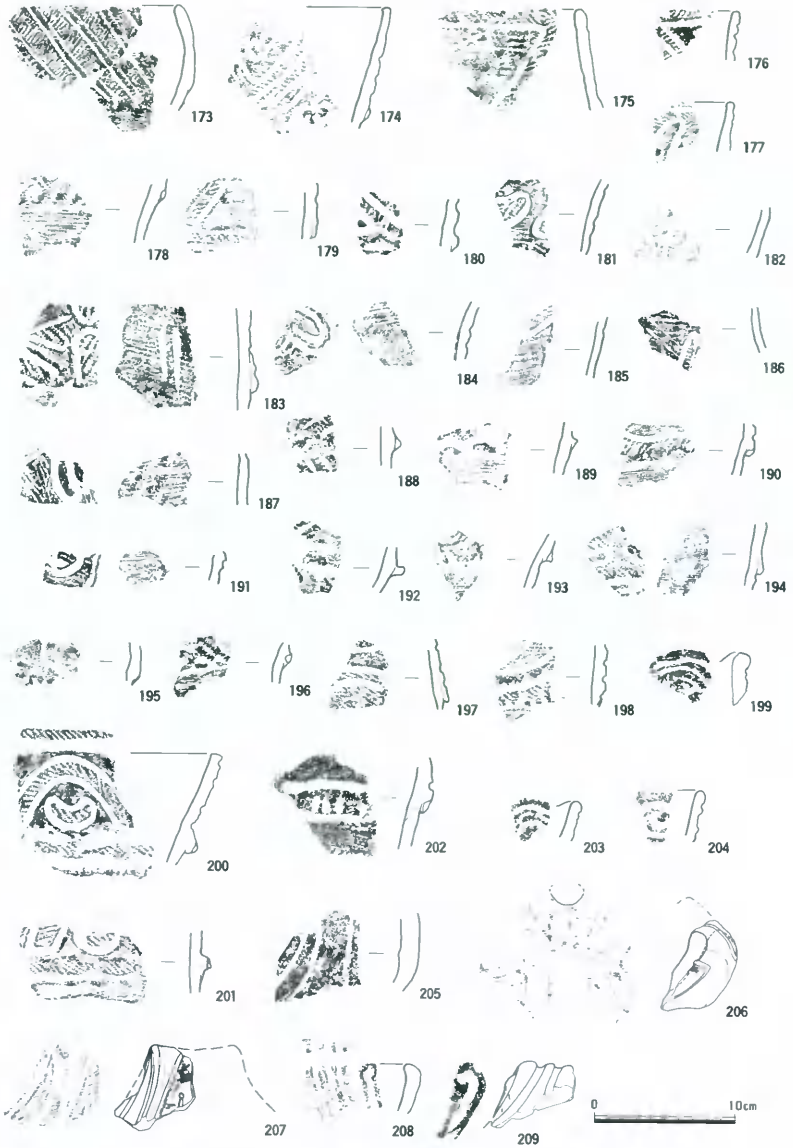
第21図 第1調査区西・東出土遺物(2)(1/4)





第22図 第1調査区西・東出土遺物(3)(1/4)

矢部奥田遺跡



第23図 第1調査区西・東出土遺物(4)(14)





第24図 第1調査区西・東出土遺物(5)(1/4)

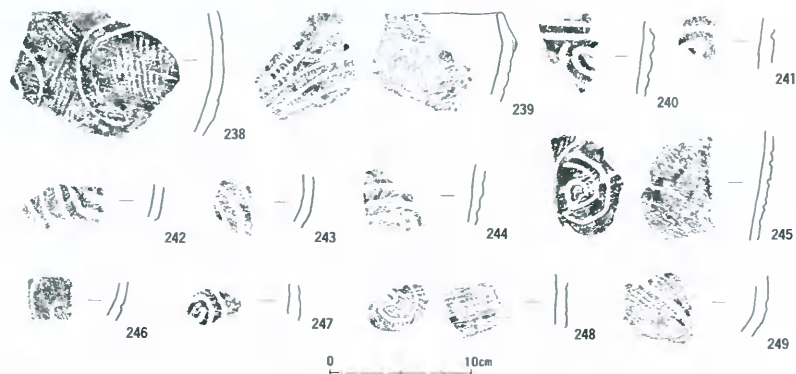
部は肥厚し丸みを有する深鉢である。内外面ともヘラミガキ状のナデにより平滑に仕上げ、平均幅0.4cm、深さ0.25cmのとぎれることのない沈線にて波状口縁の突出部からJ字を中心とした懸垂渦文を描き、そのベルト内に燃りの硬質な縄文を施文し、磨消縄文を完成させている。縄文帯の幅は0.7~1.8cmをはかり、平均幅は1.0cm前後である。沈線内の細部において充填した縄目痕跡をとどめる個所が看取できる。73は波状口縁の突出部であり、磨消縄文帯が先端部までおよび、その形状はJ字文を形成している。72と胎土、焼成、色調ともに類似する土器であるが、73の縄文原体の縄目の単位が若干大粒である。沈線の幅の比較では75・79等がこれらに近く、74・76~78が幅0.2cm、深さ0.15cmと狭く、浅いものである。また、74・77においては変曲部分等で沈線のとぎれる個所が認められる。76はこれらのうち最も細かい縄目が施文されたものである。

同図中にある70・71は貝層の上面出土でなく、貝層中上部に位置したものであり、口縁部が丸みをもっておさまらず、角ばって面をもつ特徴を有している。70は内外面ともに丁寧にヘラミガキされた無文土器である。71は巻貝条痕地に幅0.5cm、深さ0.25cmをはかる沈線文が施されている。80は外面横位の巻貝条痕、内面に指頭圧痕がみられ、口縁部に丸みをもつ。

#### 第1調査区出土の土器（第20~33図）

当調査区は調査総面積の約半分弱を占めており、また一次調査において貝塚を再確認する切掛けとなったT-16・18が南東部に隣接する場所である。遺物は調査区低所の東側よりも貝塚の北西に位置する西側高所に多く認められる。なお、T-16を第1調査区としてあつかったが、本来貝塚に直接関連するものであり、貝層下、貝層中、貝層上面のものが含まれる。

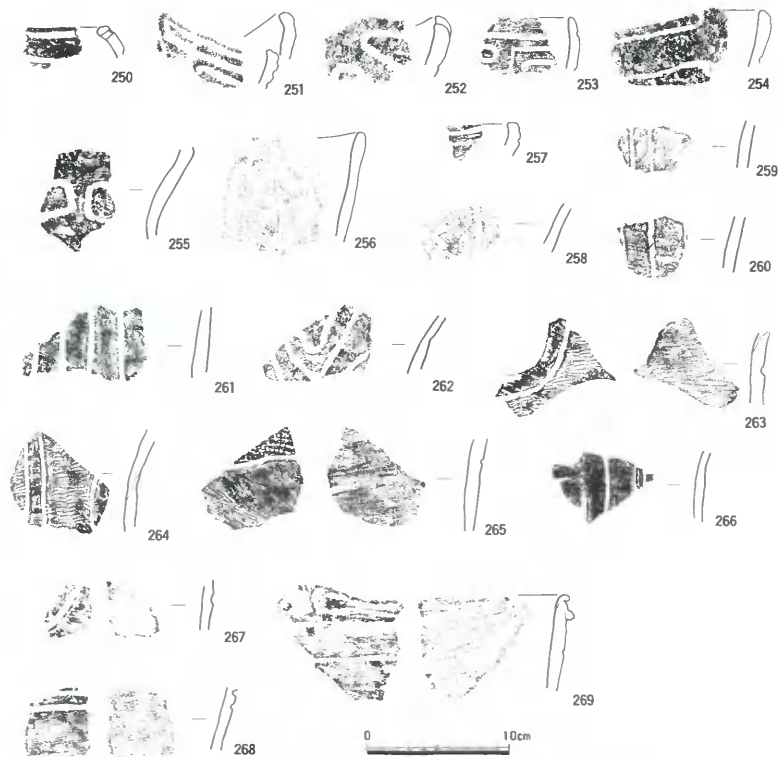
81は楕円押型文の土器であり、第1調査区の西側、古墳時代初頭の粘土採掘域内よりの出土



第25図 第1調査区西・東出土遺物（6）（1/4）

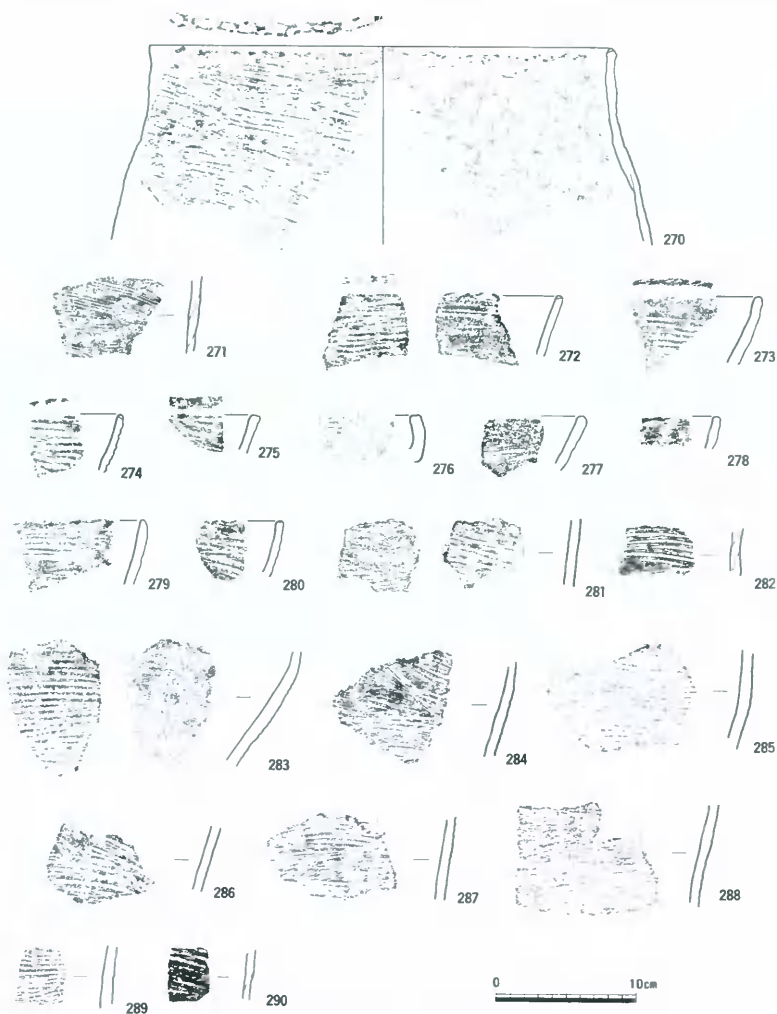
である。楕円単位は大形にて1.3×0.65cmをはかる。82～92・94・102～104は沈線文が中心に施されており、そのうち、82・87～92に半截竹管および竹管状の沈線が認められる。縄文地に沈線文が入る82・88～92・94があり、91の縄文は非常に粗い。103を除く他はすべてT-16出土のものである。95～100はRLの縄文が施されており、なかでも95は口縁端および内面上位にも認められる。96・100がT-16の出土である。101は縦位の燃糸が施文されている。

106～148は幅の広い沈線文、刺突文を主な文様にもつものである。これらのうち、113・117・133・135・137・139・141～145・147の12点が口縁部文様に縄文が使用されており、その燃りはRLがやや多い程度である。133～148は「く」字形に内湾する口縁部をもつ鉢の類であり、140・141の胴部に引きの強い横位の二枚貝条痕が認められる。第1調査区西半より出土したものが中心を占める。149はキャリパー状の波状口縁をもつ深鉢である。器外面は横位の



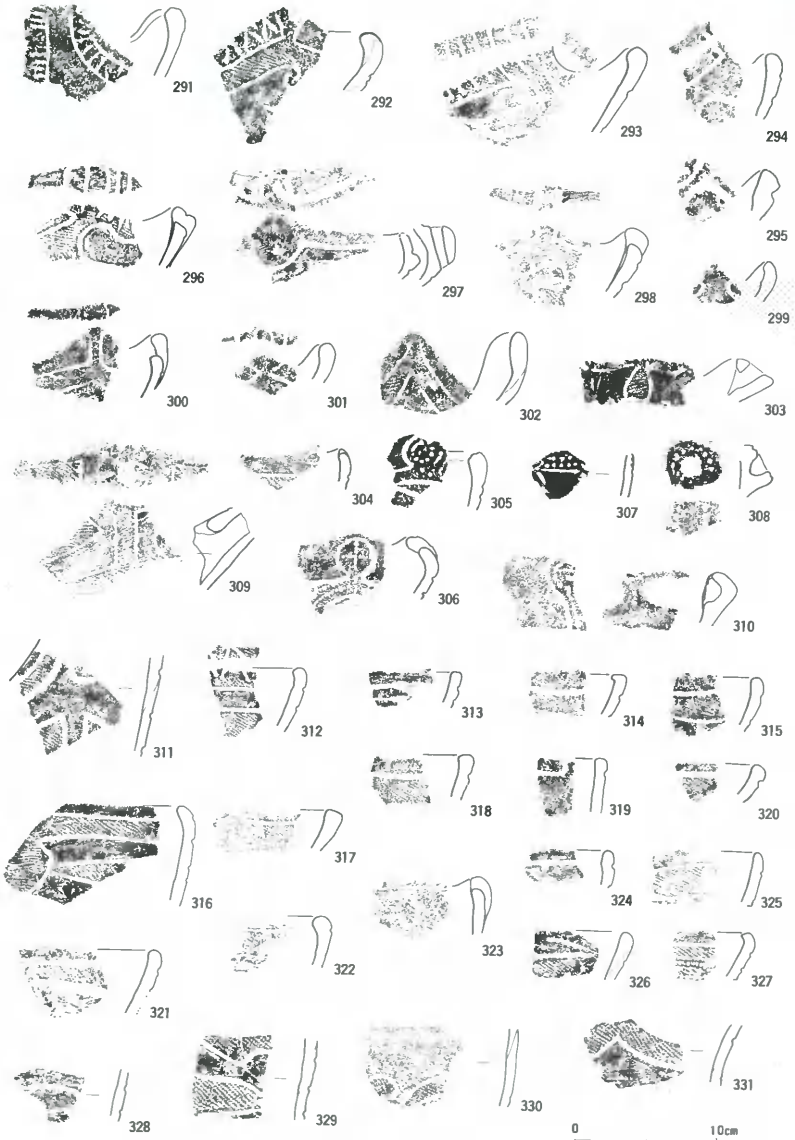
第26図 第1調査区西・東出土遺物(7)(1/4)

二枚貝条痕が全てにおよび、内面は平滑なナデにより仕上げられている。外面波状突部には沈線により人間を描いたような文様が見られる。150・151も二枚貝条痕地に沈線文が施されている。150～172は口縁部が肥厚し、段を有する一群である。152・154・155のように肥厚する短



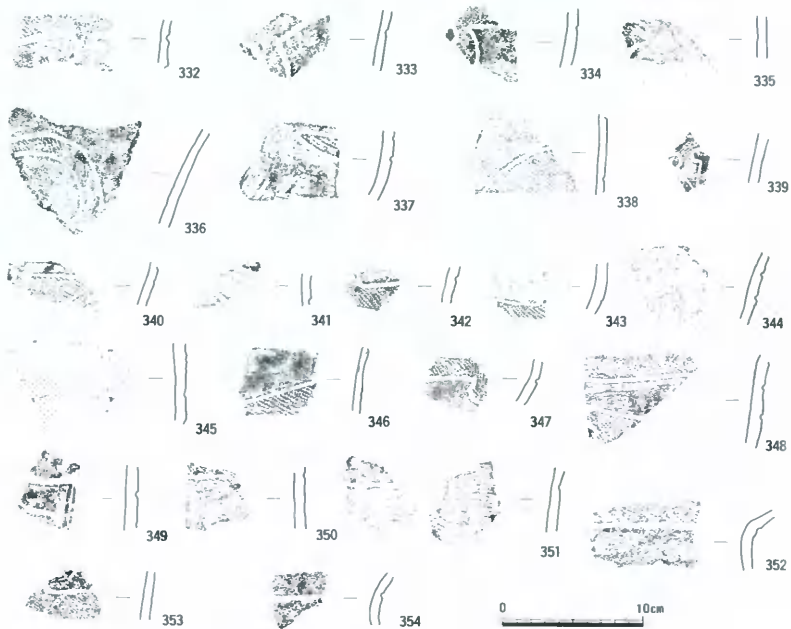
第27図 第1調査区西出土遺物(8)(1/4)

矢部奥田遺跡



第28図 第1調査区西・東出土遺物(9)(1/4)

い口縁のものは無文であり、幅広の長い口縁部を持つものには縄文がみられ、165・166のように羽状風になるものが含まれている。R Lの縄文がほとんどのなかで、158・166・168の3点がL Rの縄文である。173～202は肥厚した幅広、および段をもつ口縁部に縄文、沈線文による文様が描かれたものである。これらは縄文と沈線文の組合せが中心になっているが、沈線、刺突文だけのものに184・189・191・193・195・199・202がある。いわゆる磨消縄文の呼称に匹敵するものに200・201がみとめられ、二点ともR Lの縄文後に幅0.55cm、深さ0.3cmのしっかりした沈線により囲い込み、および幅1.5cmの縄文帯が形成されている。173・178は縄文地に半截竹管による沈線文と押しき状の刺突文が施されている。磨消縄文と異り、沈線を先に入れ、その中に縄文を充填する技法を持つものに174～176・179～183・185・190・194・197・198等があげられる。結果的には磨消縄文の形状を呈しており、両者ともR Lの縄文が多く、L Rの縄文が約1/2である。205～209は富士山型の波状突起をもつものと考えられる。205・206・208は沈線文のみであるが、207の沈線文間にL Rの磨消縄文が認められる。202・205以外はすべて第1調査区西側出土である。



第29図 第1調査区西出土遺物 (10) (1/4)

210～237は口辺部に縄文と波状曲線を描く沈線文との組合せからなるものが多い。口縁形態はキャリパー状の波状口縁と平縁が認められ、口縁端部は少し肥厚して丸くおさまるものと、平坦面を持つものなどがある。また210～212・218・219・222・235等は端面に縄文がみられる。口辺部に施文される沈線は幅0.4cm未満が多いが、219・221等が若干太目である。深さは0.25cm未満である。

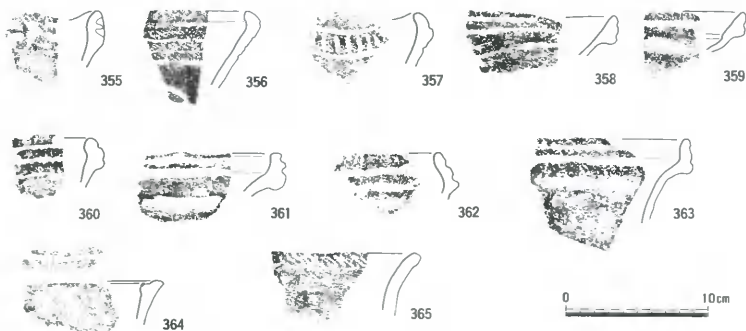
縄文の燃りはR LがL Rより若干多く、228を除く210～212・215・218・222・225～227・229・235は沈線後に縄文が充填されている。

238～249は沈線による渦巻状の施文がみられ、なかでも238・245・248にみられる沈線文は均一した幅、深さをもたず、ぎこちない描き方である。内面は二枚貝条痕が多い。

250～269は沈線文を中心にし、沈線が口縁部にて方、円形に完結する251～253・255・256、胴部に2～4条の懸垂文のみられる258～261・264等がある。沈線文はぎこちない描き方であり、256のように途中でとぎれて接続しないものもみられる。沈線幅では252・258のように0.5cmをはかる広いものがある。263～265は胎土、焼成、施文方法ともに近似しており、巻貝条痕地に深く(0.3cm)、鋭い沈線を描き、二枚貝の方射肋による擬縄文を充填している。3点とも内面は巻貝による横位の条痕がみられる。266は沈線後に巻貝による擬縄文を充填している。

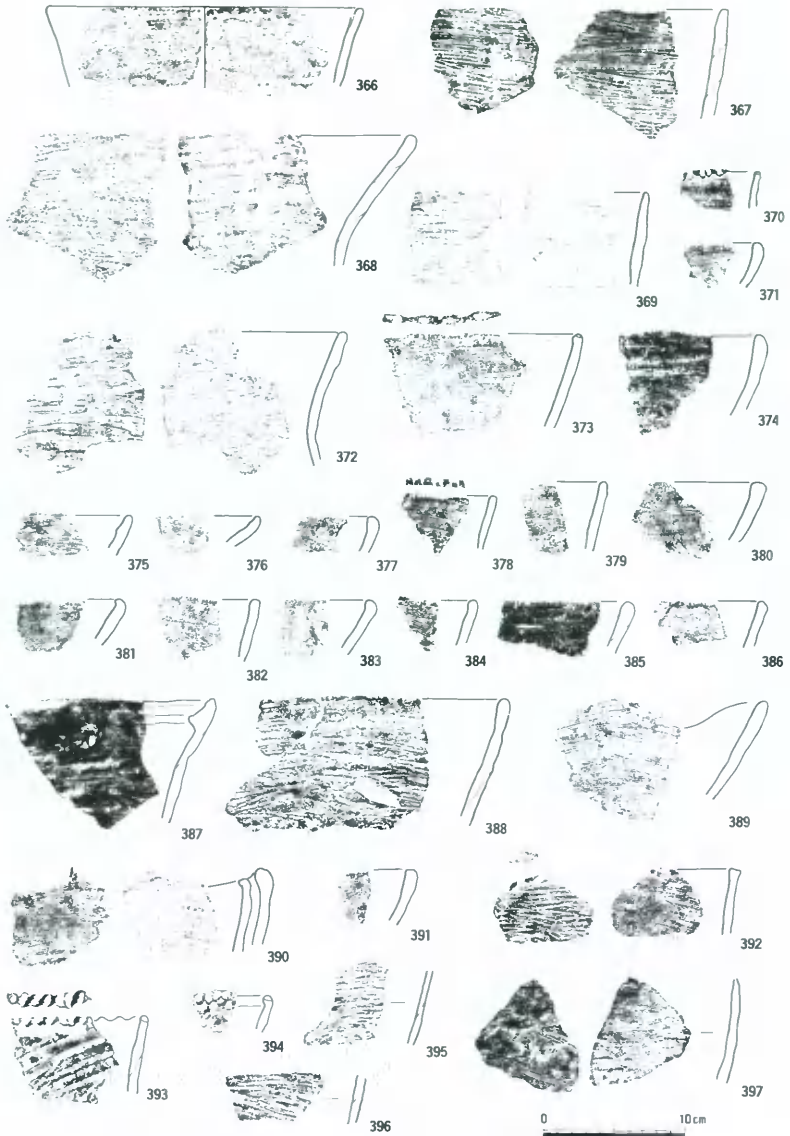
270～290は無文土器である。器外面を二枚貝による横位の条痕、内面は横位の平滑なナデ、条痕等により仕上げられている。口縁部端に刻目をもつものと、そうでないものもみられ、刻目をもつ270の口縁部には二枚貝の押圧痕がみとめられる。271の条痕文は他と比較して施文単位の間隔が狭く、密である。T-16から出土している。

291～327は沈線文、縄文等の組合せを中心にしたものである。口縁は波状口縁と平縁からな



第30図 第1調査区西・東出土遺物 (11) (1/4)

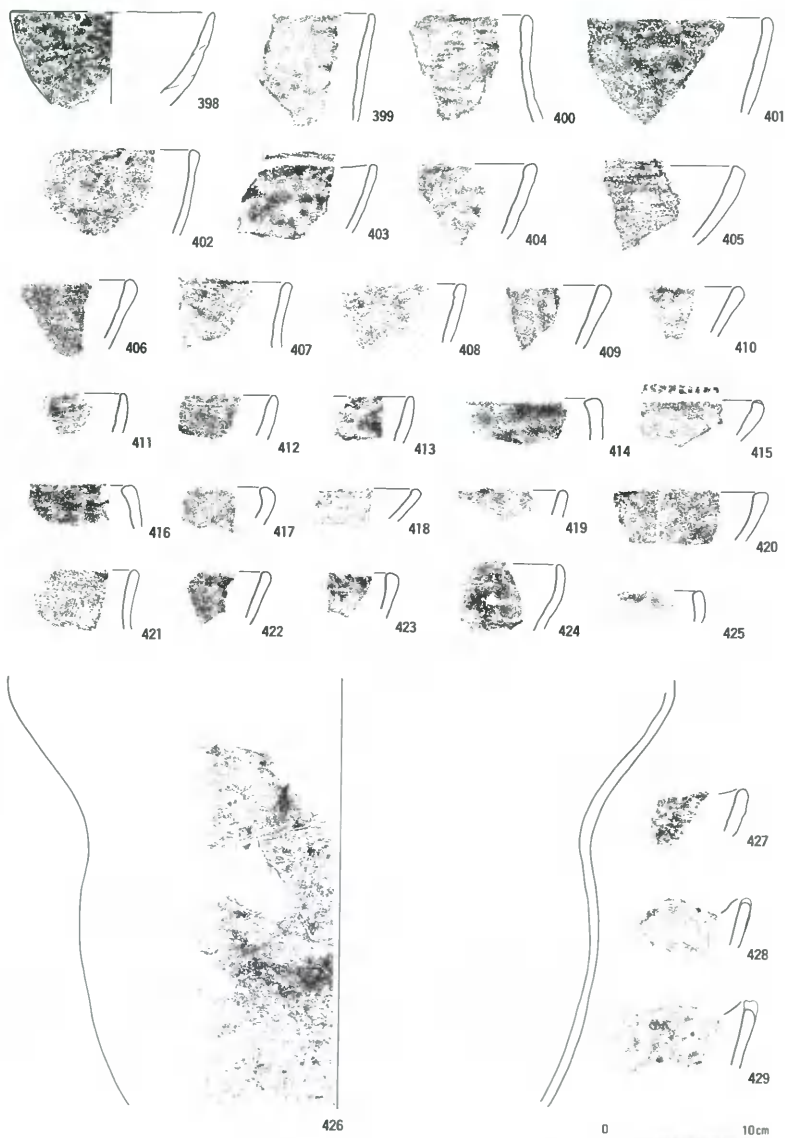
矢部奥田遺跡



第31図 第1調査区西・東出土遺物 (12) (1/4)



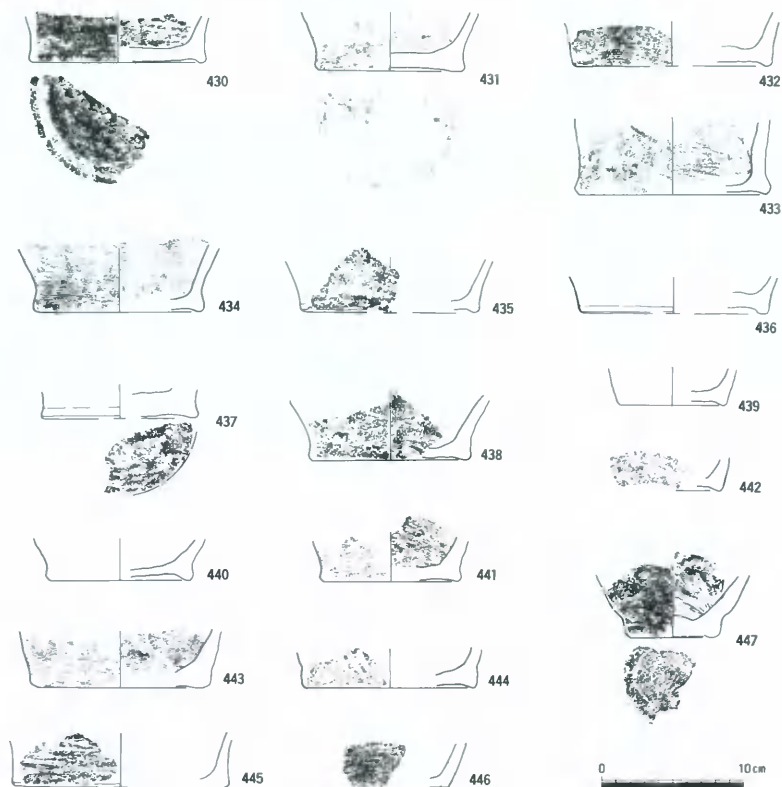
矢部奥田遺跡



第32図 第1調査区西出土遺物 (13) (1, 4)

り、口縁端部が肥厚する傾向が認められる。口縁部端に沈線文を施し、口辺部は磨消縄文が主流である。すべて2本沈線間に縄文の施されたものであり、縄文の燃りはRLが9割以上を占め、302のみがLRの縄文である。磨消には縄文後に沈線を入れたものと、沈線文後に縄文を充填した両者がみられ、293・297・309・312・326が前者であり、296・304・327が後者にあたる。沈線の幅、深さは広いものから狭く、深いものから浅くなる傾向が認められ、幅0.3cm、深さ0.2cm以下のものが多数である。292は「J」字形の磨消縄文帯を形成する沈線の先端部が「引っ掛け」状の鉤形を呈する。

沈線文主体のものは波状口縁突起部に円形を意識し、そこに沈線、あるいは刺突による文様を構成している。該当するものに305～307・310等がある。



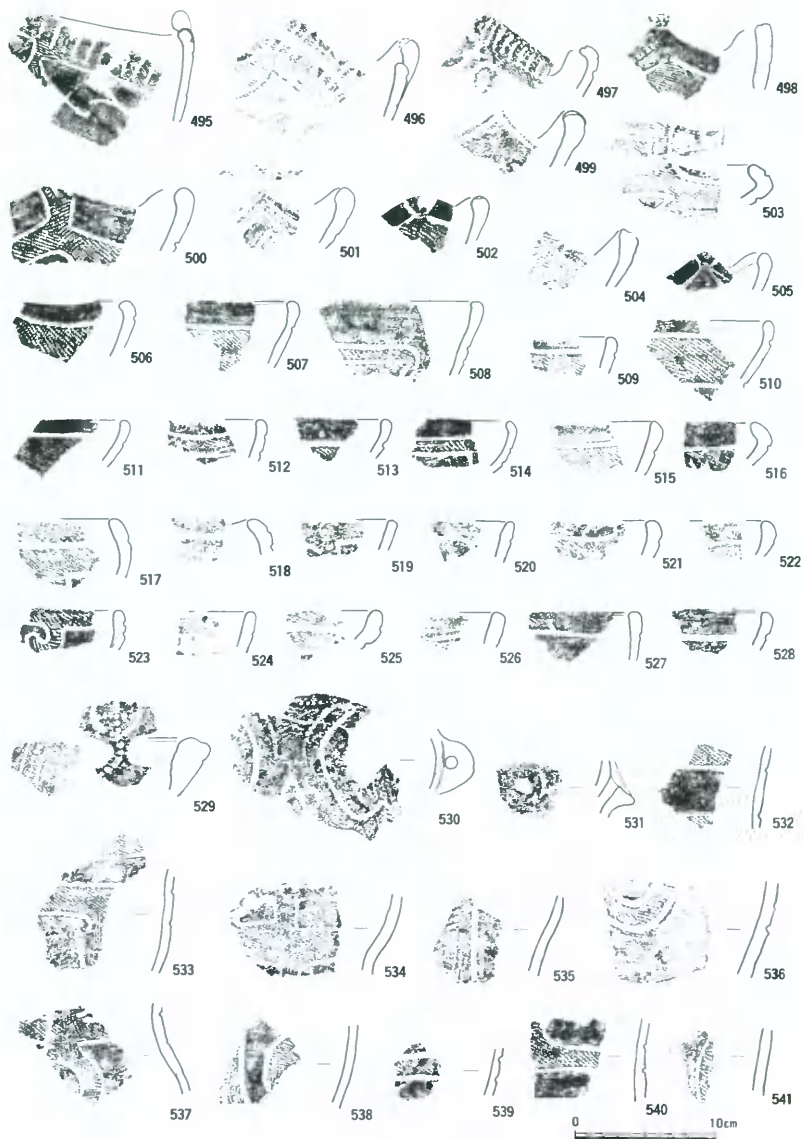
第33図 第1調査区西・東出土遺物 (14) (14)

矢部奥田遺跡



第34図 第2調査区西・東出土遺物(1)(1/4)

矢部奥田遺跡



第35図 第2調査区西・東出土遺物(2)(1/4)

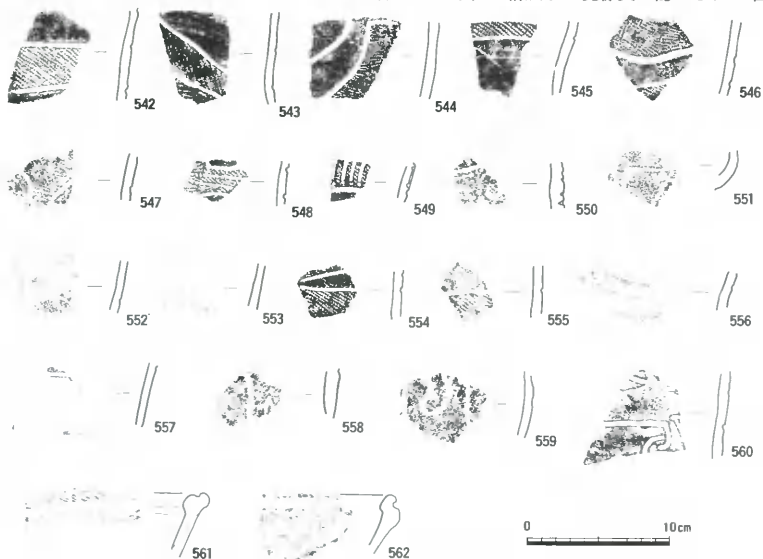
328～354は胴部における磨消縄文帯であり、前述したものと同様のものである。332の「J」字、339の菱形、335・341・347のような沈線による囲込みのまとまりをもつ雲形の文様等が目立ち、また、沈線の屈曲部をもつ文様の接続部分はスムーズに繋がらないものが多い。352・354は同じ器形の鉢と考えられるが、天地逆になっている。口縁部無文帯にて肩部下位よりR Lの縄文が施されている。

355～364は口縁部が肥厚あるいは、段を持ち上方に屈曲するものである。364は肥厚した口縁平端面に一条の沈線が巡るが縄文は認められない。肥厚部分は内側に粘土紐を貼付けたものである。他は段をもって立上がる口縁であり、358・359・362・363の外凹線幅は0.5cmの広いものである。

366～397は主に巻貝条痕により調整が施されており、施文単位幅の広いものと狭いものが存在する。口縁端部に370・373・393・394等は刻目を有する。

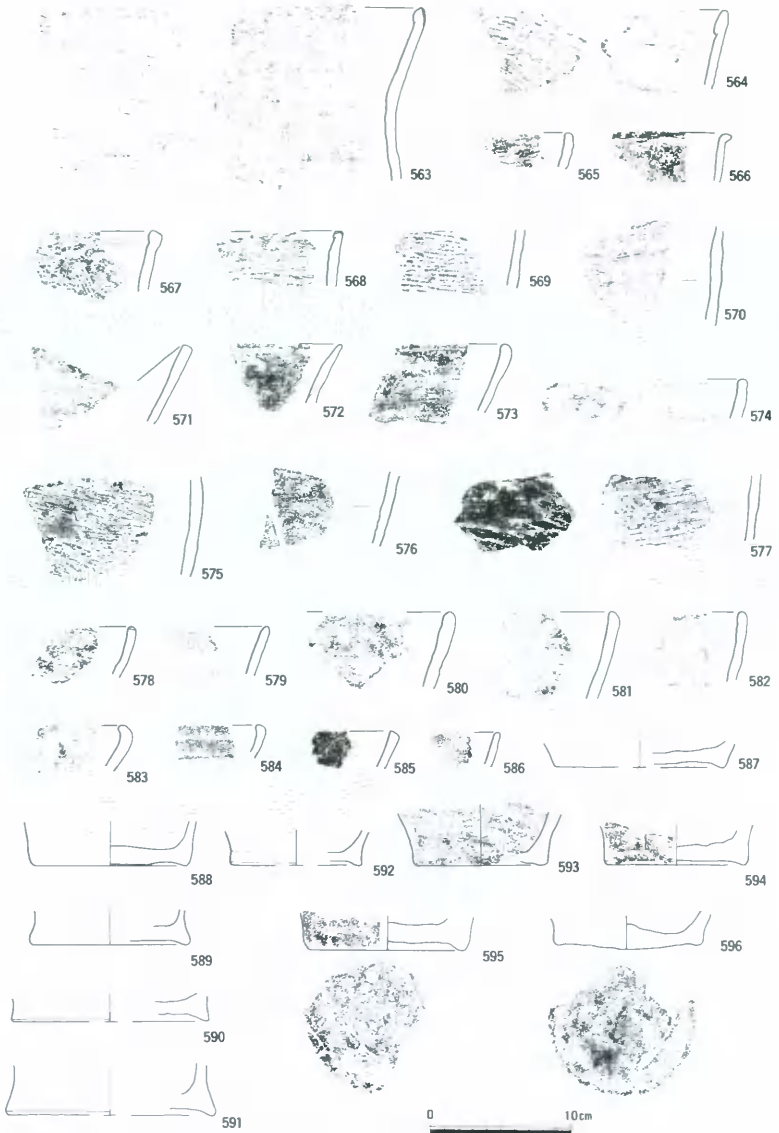
398～429は調整工具の不明なものであり、器内外面に浅い横位のナデ、条痕、ケズリ状の痕跡をとどめる。403の口縁端部はR Lの縄文、415は刻目が施されている。

430～447は直径6～15cmをはかる底部であり、なかでも10cm以上のものが多い傾向を示す。内外面の調整は細かい横位の条痕、ナデなどが施されており、明らかなものでは432・434・437等の巻貝による条痕が看取できる。444は三条にて1単位を構成する沈線文が認められる唯

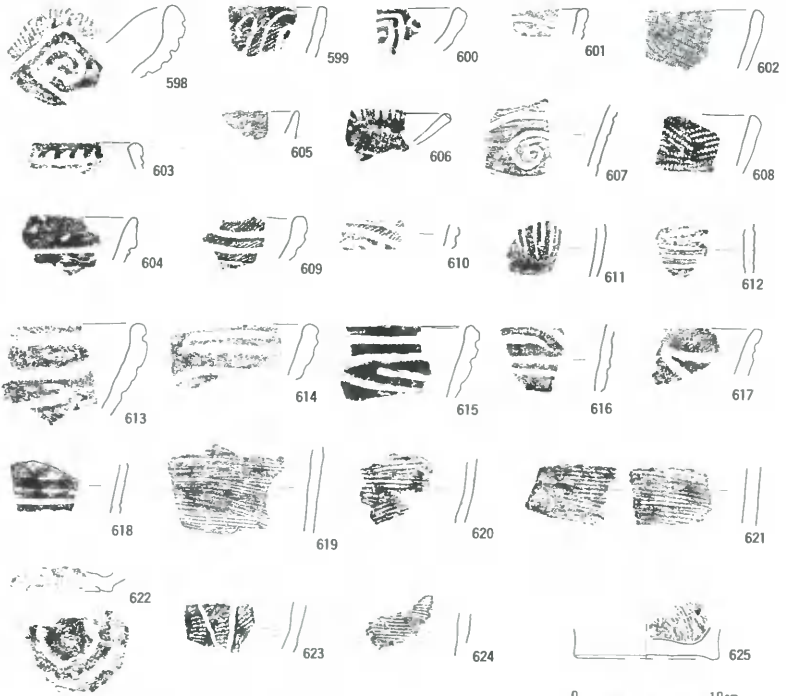


第36図 第2調査区西・東出土遺物(3)(1/4)

矢部奥田遺跡



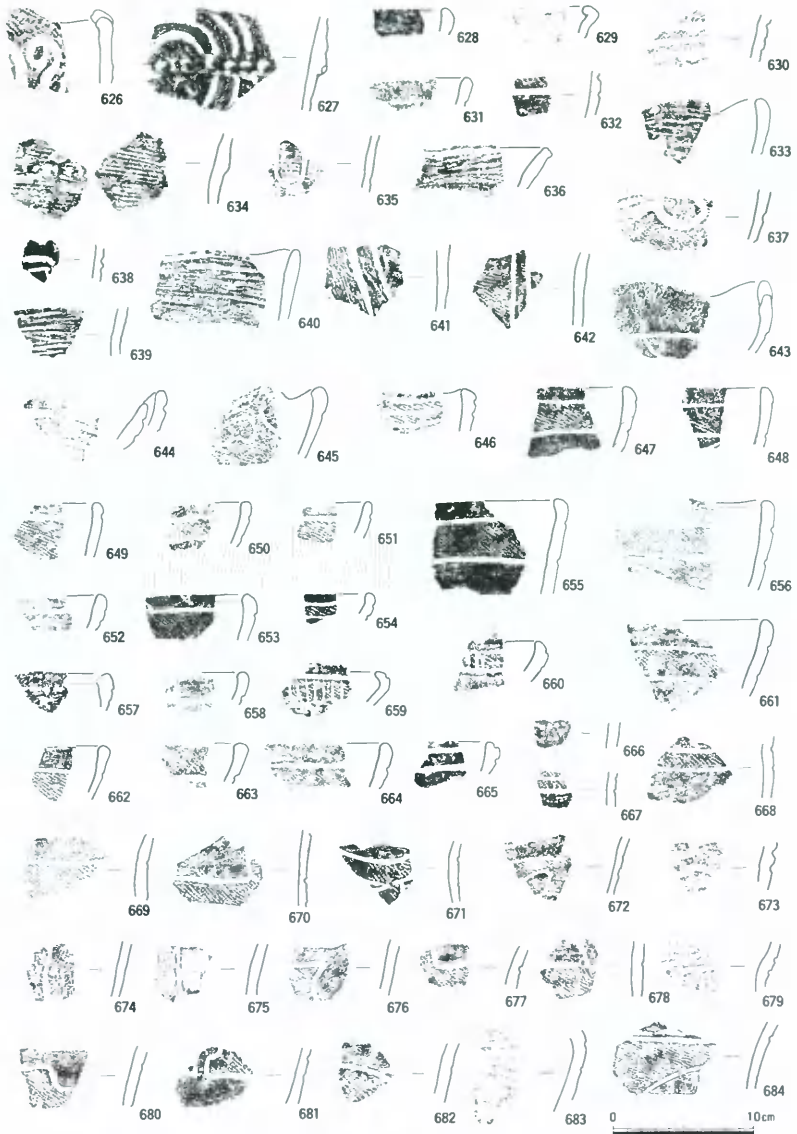
第37図 第2調査区西・東出土遺物(4)(1/4)



0 10cm

第38図 第3調査区東 縄文包含層出土遺物 (1) (1/4)

矢部奥田遺跡



第39図 第3調査区東出土遺物(2)(1/4)

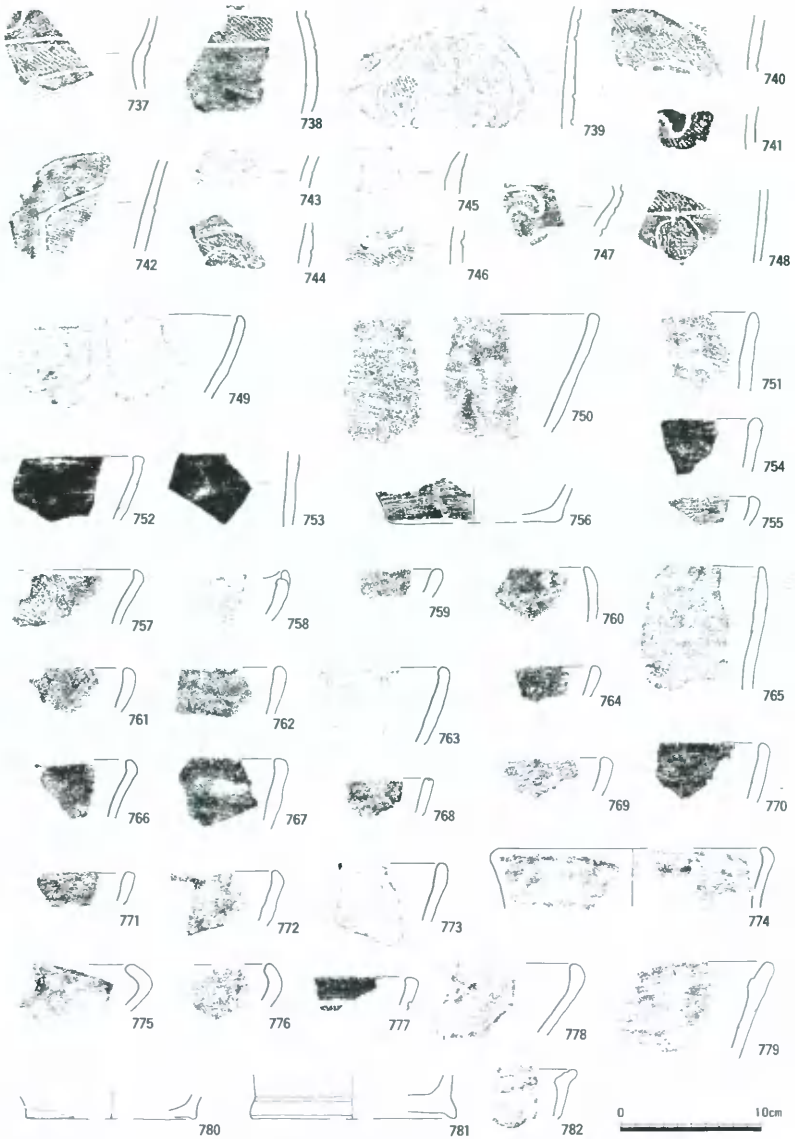


矢部奥田遺跡



第40図 第3調査区東出土遺物(3)(14)

矢部奥田遺跡

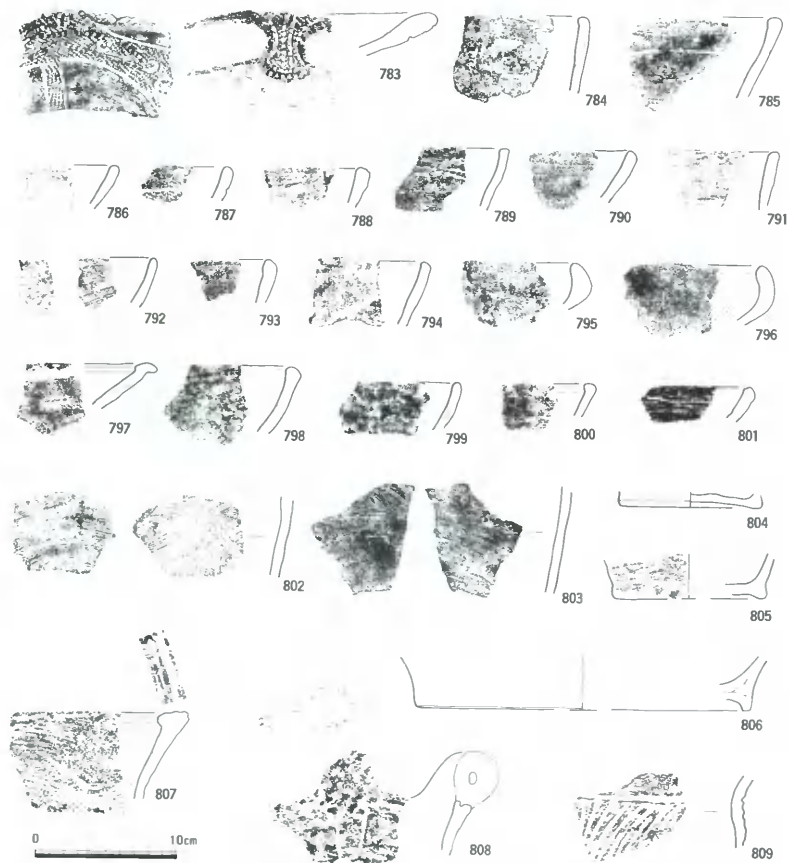


第41図 第3調査区東出土遺物(4)(14)

一の資料であり、植木鉢状の形態をもつ土器の底部である。平底は少なく、凹底となるものが多く看取できる。

以上が第1調査区から出土した土器である。縄文早期を一点、他はおおむね中期後半から後期前半までを含み、なかでも中期末と後期前半が中心を占め、前期および晩期を含んでいない。

なお、第2～5調査区では船元式土器はみられないが、中期末以後は第1調査区とはほぼ同様の内容をもつ土器片が出土している。よって、大半を観察表にゆだね、一部の土器について説



第42図 第3調査区東出土遺物(5)(1/4)

明を行う。

第2調査区出土の土器（第34～36図）

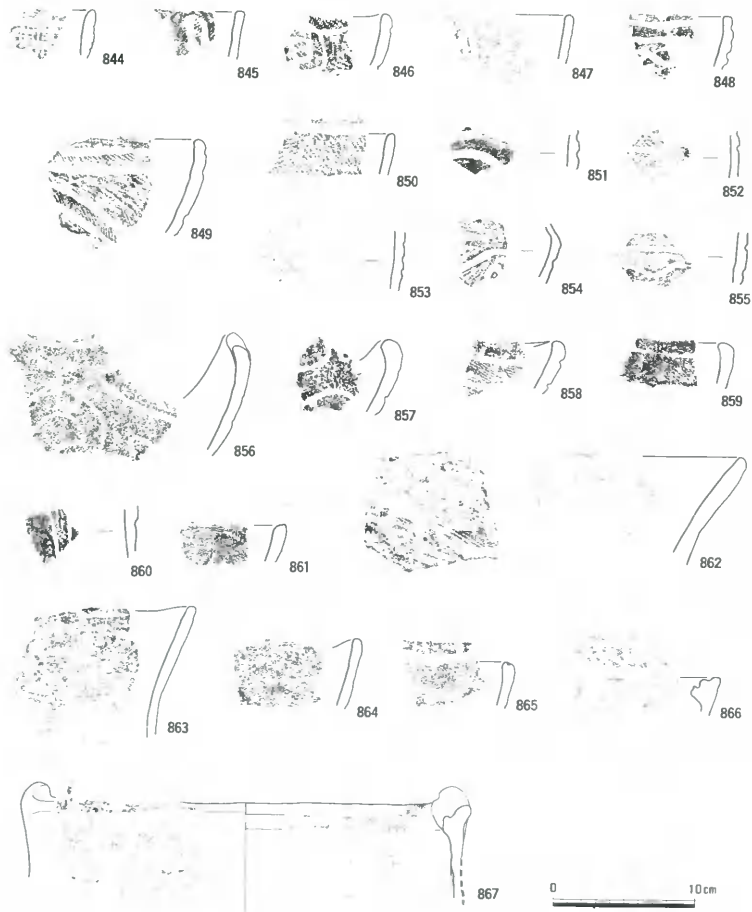
460は内外面ともに横位の二枚貝条痕が施されており、外面に波状の沈線文が描かれている。463は段を有する広い口縁部に沈線後のRL縄文が充填されており、内外面は二枚貝による横位の条痕が認められる。473は口縁部突帯上を幅0.5cm、深さ0.3cmの沈線文が描かれ、外面に横位の巻貝条痕、内面に極細のナデが認められる。486は狭くて浅い沈線間に二枚貝の放射肋によるRL方向の擬縄文がみられる。

495～521・523は磨消縄文であり、495～505が波状口縁、506～521・523が平縁である。すべ



第43図 第3調査区西出土遺物（6）（1/4）

てRLの縄文からなり、RL後に沈線が入られるものが多い。495～497の口縁端部は縄文後に口縁に直文する多条の短い沈線が認められ500等とは異なる施文方法が見られる。平縁の口縁端においては、無文帯のものも多く、その帯幅は1～3.5cmと狭いものから広いものまでみられる。523は無文帯をもたず、口縁端より小形の「J」字文がみられるものである。532～549・552～558は磨消縄文の胴部文様帯であり、533の「引っ掛け」状に近い鉤形、534の方形を画する沈線に切り合いの存在するもの、537のような沈線間がとぎれる「O」字文等がみられ



第44図 第4・5調査区出土遺物(1)(1/4)

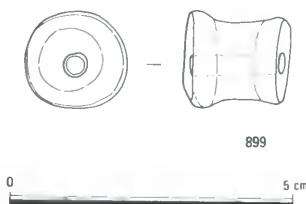
る。557は色調明褐色を呈する精製土器に近く、器壁の均一した薄いものである。他の土器に類似するものがみあたらない。560は巻貝条痕地に沈線文のみが描かれたものである。角をもつ沈線文と「引っ掛け」状の鈎形がみられる。561・562は口縁部内外に肥厚、縁帯化するものであり、上位にRLの縄文が施されている。

第3調査区出土の土器（第38～43図）

第3調査区の東側出土遺物量は西側出土遺物の7倍以上と圧倒的に多い。とりわけ第2～4調査区にまたがり、東西約20m、南北約8m、厚さ0.4mの縄文包含層中のものが中心であり、中期土器片は後期の1/2以下の出土量である。602は器外面全体に巻貝によるRL方向の擬縄



第45図 第1調査区西出土遺物・地区不明(1)(14)



第46図 耳飾り (1/1)

文が施されている。613～616は第1、2調査区において確認できなかったものである。口縁部に向かって肥厚し、端部を比較的丸くおさめる形態であり、外面は幅広(0.5cm以上)の沈線にて雲形を中心としたモチーフが描かれている。内面は横位の細かい条痕が認められる。613・614は同一固体である。626はおそらく段をもつ波状口縁部分と考えられる。

#### 第4、5調査区出土の土器(第44図)

出土遺物の量が最も少ない地区である。844は燃糸地に横位の半截竹管状の沈線がみられる。847はLRの縄文後に渦巻状の沈線が描かれたものであり、縄文は一条おきに深淺となる特徴的なものである。849は二枚貝条痕地にベルト状の磨消縄文がみられる。沈線の幅0.5cm、深さ0.2cmをはかり、縄文帯の幅0.8cmの狭いものである。866・867は縁帯文の土器である。

899は第3調査区整地層中より出土したものであり、糸巻状の形態を呈する。従来耳飾りと言われているものである。ほぼ円柱形にて長さ1.85cm、中央部がすぼまり、両端が若干広がりそれぞれ直径が異なる(1.3～1.69cm)。そして、長軸方向に径0.31cmの円孔が貫通している土製品である。重量は4.7gである。

#### 分類(第47～第51図)

縄文土器観察表に示した分類基準を説明しておきたい。

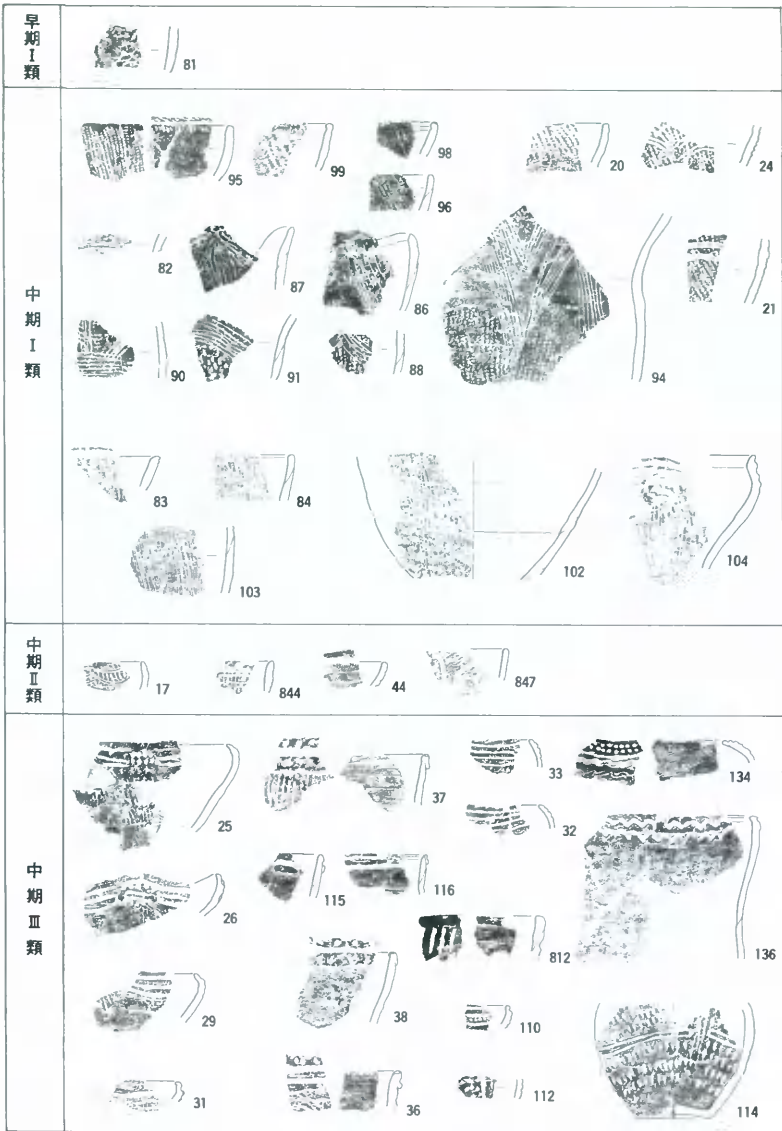
まず、早期Ⅰ類は高山寺式の押型文一点のみである。

中期Ⅰ類は縄文原体の繊維が粗く、その施文方向がおおよそ縦に走るもの、それに半截竹管による沈線文、多条沈線文の施されたものなどとし、広義の船元式土器(註a)に比定させた。これらは貝層中および貝層下位の土層から出土している。

中期Ⅱ類は縄文が一条おきに深淺となる押捺が施されたもの、さらに燃糸の地文に半截竹管等による沈線のみられるものをとりあげ、里木Ⅱ式土器(註b)に比定させた。これらも貝層中に含まれている。

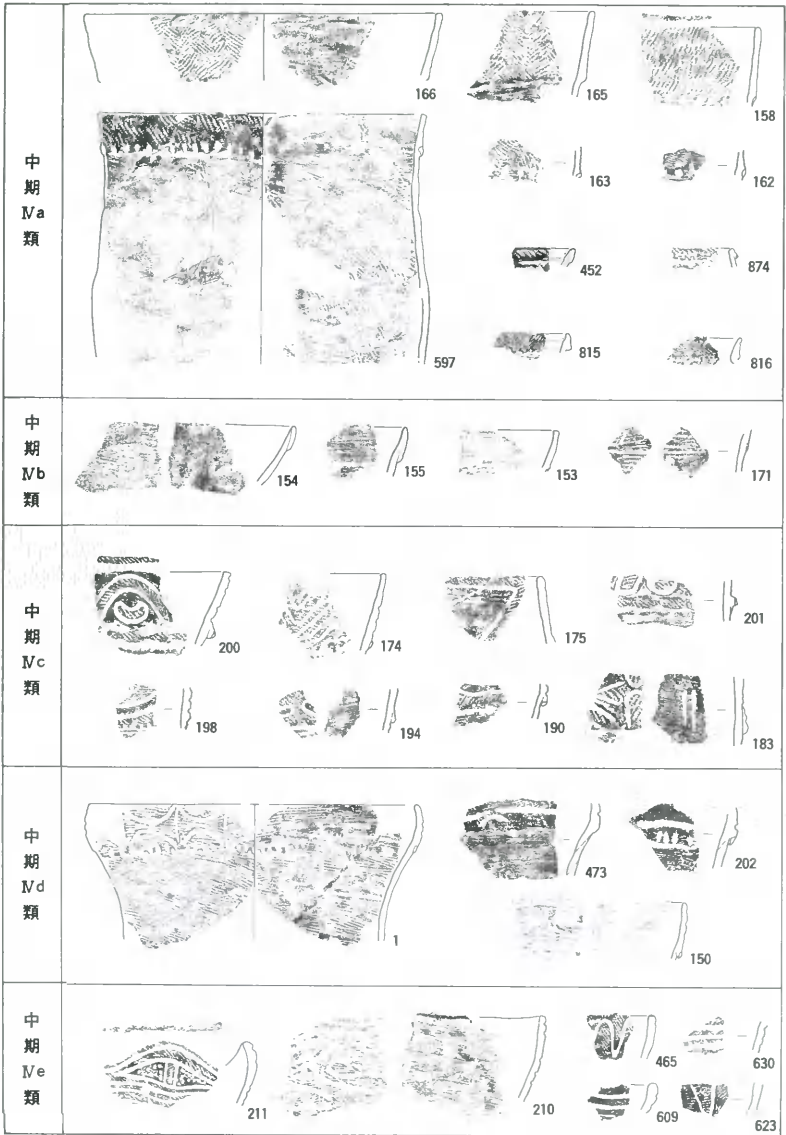
中期Ⅲ類は地文が縦に走る条痕、おそらくアルカ属貝殻による施文、そして、沈線文、刺突文等を取りあげ、里木Ⅲ式土器(註c)に対応させた。これらは貝層中より最も多く出土している。

中期Ⅳ類は未命名の型式(註d)にあたるものとしてとりあげた。Ⅳ<sup>a</sup>類～Ⅳ<sup>d</sup>は口縁部付近

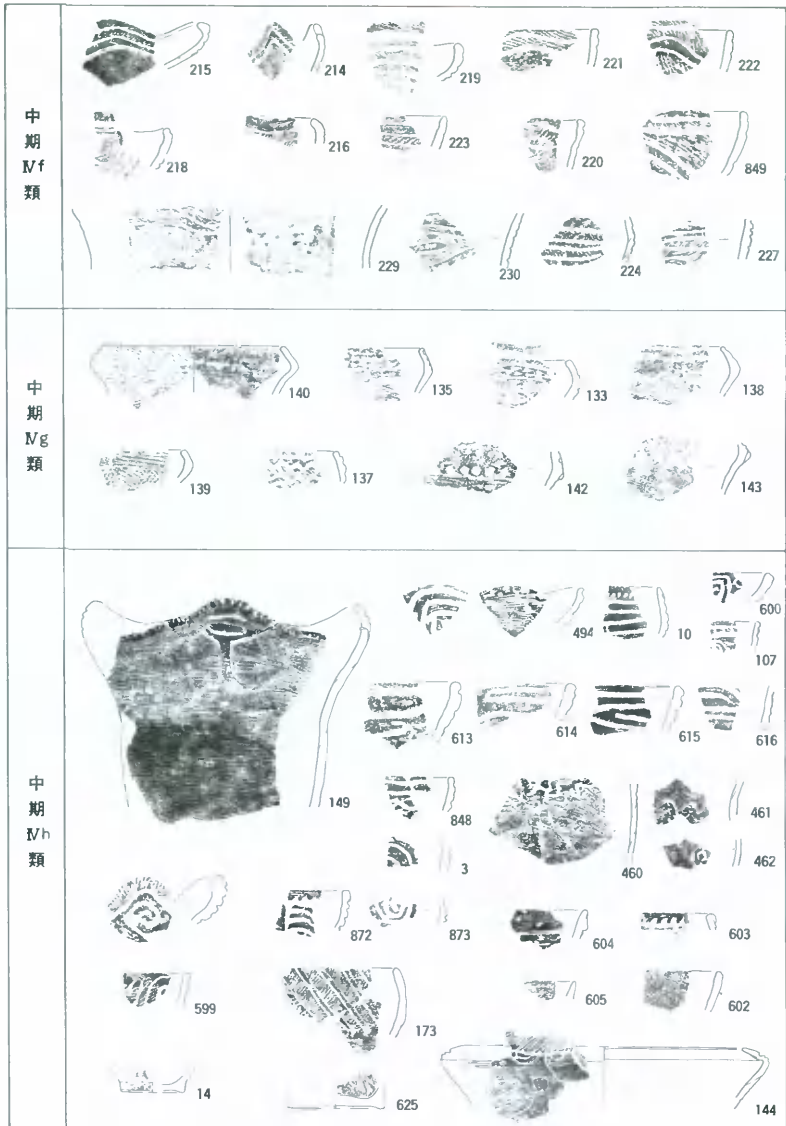


第47図 縄文土器分類 (1)

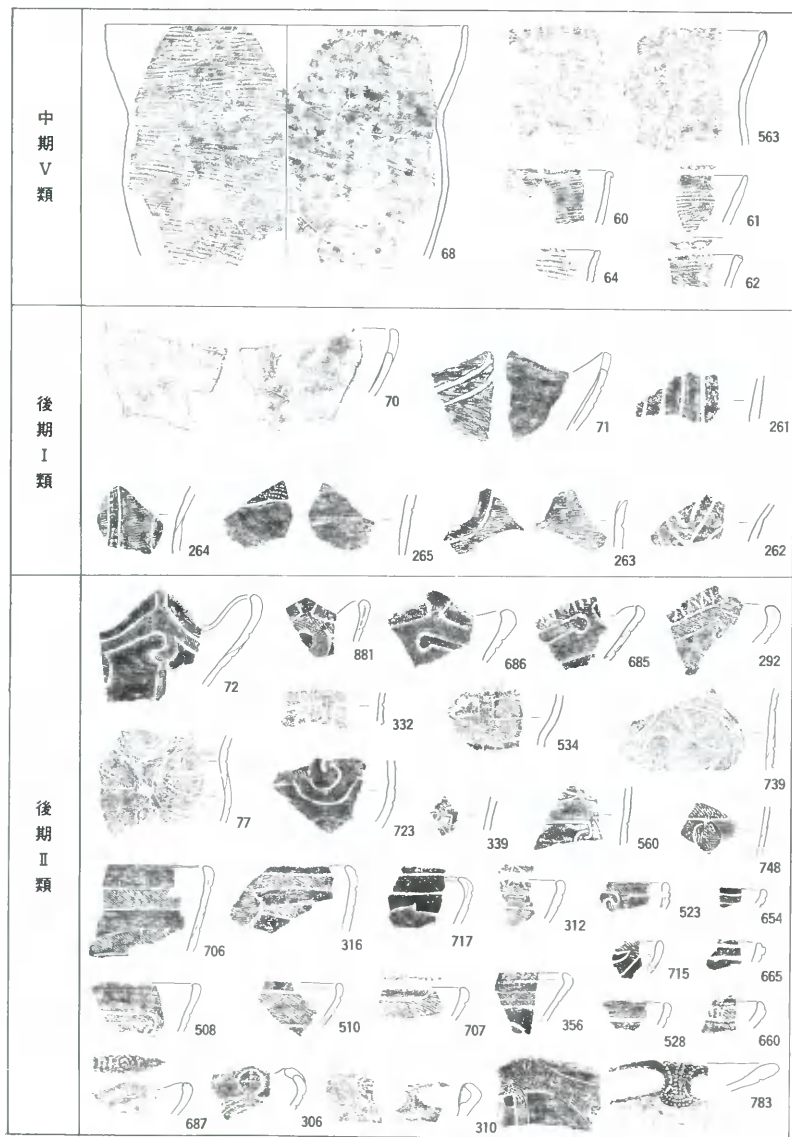




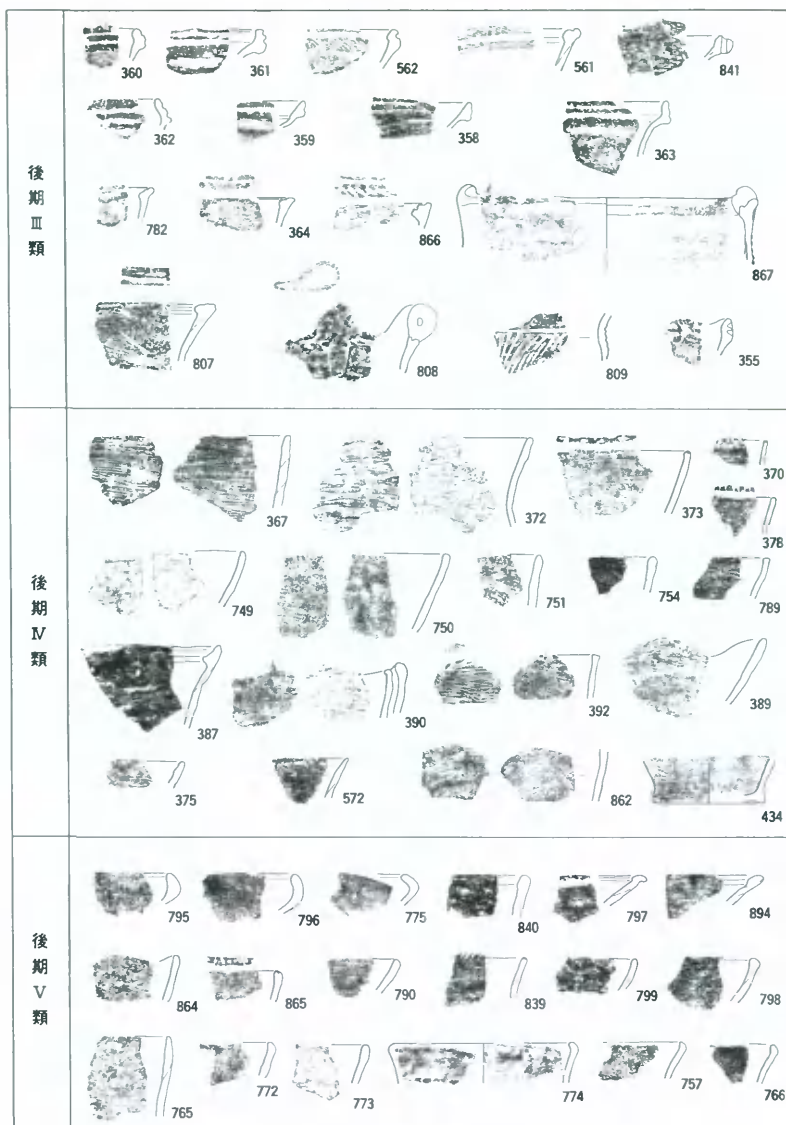
第48図 縄文土器分類 (2)



第49図 縄文土器分類 (3)



第50図 縄文土器分類 (4)



第51図 縄文土器分類(5)

に段を有し、その段より上に縄文、刺突文等が施されるものをⅣ<sub>a</sub>類、横位の条痕文のみのもをⅣ<sub>b</sub>類、磨消縄文帯となるものをⅣ<sub>c</sub>類、沈線文の施されたものをⅣ<sub>d</sub>類とした。Ⅳ<sub>e</sub>類～Ⅳ<sub>g</sub>類は無段であり、縄文地に沈線の施されたⅣ<sub>e</sub>類、磨消縄文をⅣ<sub>f</sub>類、口縁屈曲のものをⅣ<sub>g</sub>類とし、その他をⅣ<sub>h</sub>類とした。これらは貝層中にはあまり見られず、貝塚以外からの出土が多い。

中期Ⅴ類はアルカ属貝殻による条痕をもつ無文土器をあてた。口縁端部に刻目を有するものとそうでないものが存在する。貝層中から出土したものが多い。

後期Ⅰ類は太く深い沈線が使用され、口縁部端が肥厚せず角ばっているものを中津式土器（註e）に比定した。量的には非常に少ない数であり、貝層の上面に近いところより出土している。

後期Ⅱ類は磨消縄文が中心であり、いわゆる中津式土器よりは新しい様相をもつと考えられるものを取りあげた。形態的には口縁部の丸みと肥厚および内湾が顕著であり、文様面では「引っ掛け」条の鉤形、沈線間の切合い、断続が増加傾向を示す。貝層近くからの出土は一点のみである。

後期Ⅲ類は口縁部内外への肥厚、拡張が後期Ⅱ類より一段と進み、縄文がほとんど認められないものを取りあげた。福田Ⅱ式土器（註f）の新しいと考えられるところから彦崎Ⅰ式土器、津雲Ⅰ式土器までを含むものとした。これらは貝層中からは出土していないものである。

後期Ⅳ類は巻貝条痕の施文されたものを取りあげた。口縁端部に刻目の施されるもの、口縁部内側を拡張させるもの等がいくらか認められる。

後期Ⅴ類は条痕等と異なり、器面が平滑に仕上げられている無文土器を取りあげた。

さて、このようにみえてくると、早期Ⅰ類は従来から他の遺跡でもよくみられる単独出土のケースであり、生活址に関連する遺構が存在した可能性は低い。また、部分発掘した貝塚の遺物から貝塚の形成、衰退を推測すると、矢部の地に人が住み、貝塚が造られ始めた時期は中期Ⅰ類の頃からであり、後期Ⅱ類ではすでに使用された痕跡をほとんど留めていない。中期Ⅱ・Ⅲ類、なかでも中期Ⅲ類の遺物は貝層中より比較的多く出土しており、周辺に居住域が存在していたものと思われる。中期Ⅳ類ではさらに多くの遺物が認められ、中期末のピークに達しているが、貝層中にはその関連遺物をほとんど見い出していない。しかし、遺物の量、そのバリエーション等から比較的安定した生活時間帯が想定できるものと考えられる。中期Ⅴ類は中期Ⅲ類に伴う可能性が高い。後期Ⅰ類の出土量は少なく貝塚自体も衰退傾向を示している。全体的に多くの出土量をもつのは後期Ⅱ類の磨消縄文であり、中期末のピーク以上に安定度を増した居住域と考えられる。しかし、中期Ⅳ類と同様、それ以上に貝層中における遺物はほとんどみら

れない状況である。後期Ⅲ類は後期Ⅰ類よりも出土量が多いが20点ほどである。これらも貝層中には認められない。後期Ⅳ・Ⅴ類は後期Ⅱ・Ⅲ類に伴うものが大半を占めるのではなからうか。

以上が矢部奥田遺跡の縄文土器に関連する概略である。(高畑)

註

- 註 a (イ)間壁忠彦、間壁葎子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』 第7号 倉敷考古館 1971年  
矢部奥田遺跡の中期Ⅰ類は船元Ⅰ式土器G・F類(95~99)、船元Ⅲ式土器A類(82)、船元Ⅲ式土器B類(86~91・93・94)、船元Ⅲ式土器C類(102~104)に近いと考えられる。
- (ロ)高橋 護「船元貝塚」『岡山県史』 第18巻 1986年  
型式の設定にあたり、主要な指標とされたのは、「縄文原体を構成する繊維が極めて粗剛な特有の繊維を用いていることである。」こと、その他の諸条件にあてはまるものは21~24、82・83・85~94等である。
- 註 b 前掲註 a (イ)の中で里木Ⅱ式土器されたものは、地文に原則として捺系文がつけられることがあげられている。矢部奥田遺跡の中期Ⅱ類では17・44・844がそれらに匹敵するものである。
- (イ)高橋 護「里木貝塚」『岡山県史』 第18巻 1986年  
地文として、特殊な捺りを示す縄文、捺系文、条線文、条痕文がみられる。縄文は例外なく、一条おきに深く押されるもので、口辺端部など例外的に間の条の圧痕をみることができ、通常の場合、一条おきの条のみが印されている。また、加曾利Ⅱ式前半の段階に対応すると考えている。本遺跡で深淺の縄文が確認できたのは847の一点のみである。
- 註 c 前掲註 a (イ)での里木Ⅲ式土器は地文が捺系ではなく、縦に走る条痕であり、おそらくアルカ属貝殻の背による条痕であろうとされている。本遺跡では25~31・36・37等が近いものである。
- 前掲註 b (イ)の中で間壁氏の船元Ⅳ式土器から里木Ⅲ式土器までを抽出し、里木Ⅱ式土器として掲載している。
- 註 d 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』 第1部 1960年  
中期末の未命名の型式として、福田C式に近い土器と福田C式と後期中津式の間当たる二つの型式をあげている。本遺跡では後者の図版中に類似するものが認められる。それらが中期Ⅳa、Ⅳc類であり、Ⅳ類としたものの中にはこれらと共通する特徴をもつものが多くみられ、中期末の一型式が認められる。縄文はRLが約65%を占める。また、岡山市津島東に所在した朝寝鼻貝塚の出土遺物中に、中期Ⅳ類のa、c、f、gが認められる。
- (イ)前掲註 a (イ)で形式不明の縄文ある土器とされている7・10等は中期Ⅳa類に近いものと思われる。
- 註 e 岡山県立博物館に所蔵されている宗澤節雄氏採集の中津貝塚資料を高橋護氏より見せて頂き、ご教

示願った。土器の口縁端部は小さな平坦面を持つものが多く、器面に施された沈線文ははっきりと深く、太く描かれたものが多い。さらに、口縁端部直下に縄文が施文されたものが目についた。縄文の撚りはRLがLRより少し多い。RLが96%を占める今回多量に出土している後期Ⅱ類とは若干異なる感じを受けた。

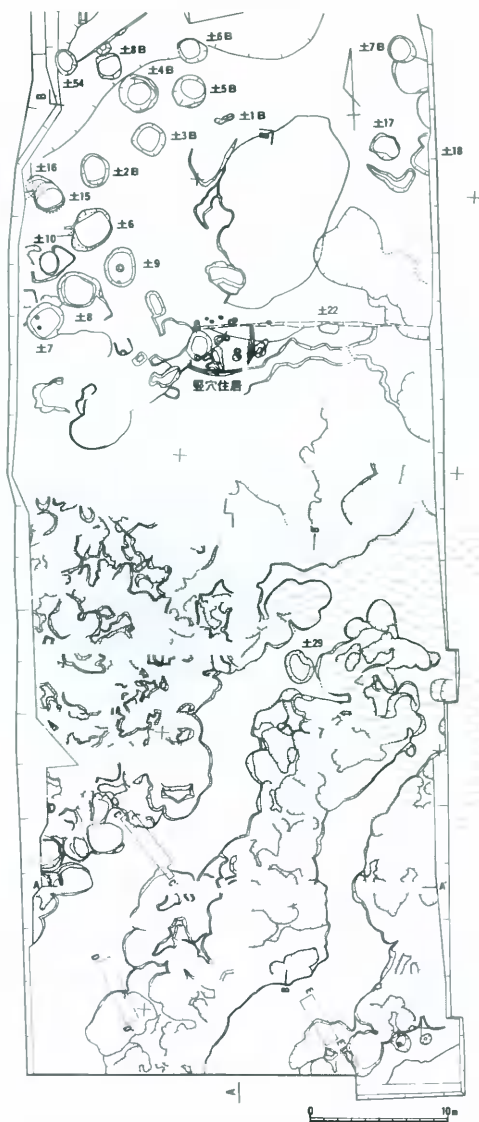
註 f (イ)福田貝塚資料山内清男考古資料2『奈良国立文化財研究所史料』第32冊 1989年

帯状の二本磨消縄文帯をもつ第15類bと第16類aを層序ならびに、第16類bにみられる鉤形入組文や、磨消縄文帯の交差する部分で沈線が他の沈線を切る特徴等から第15類bと福田KⅠ式とし、第16類aと福田KⅡ式に含める見解を出されている。本遺跡でみられる後期Ⅱ類では二本磨消縄文帯をもつものがほとんどである。しかし、前述の分類に従えば、第16類aの鉤形入組文等の特徴をもつものが含まれるが、第15類bに近いものをも含んでいるようである。後期Ⅱ類についても今後の資料の増加を待って改めて考えてみたい。

(ロ)山本悦世ほか「津島岡大遺跡3」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1992年報告の中でおおよそ後期Ⅱ類、Ⅲ類を含めた格好で福田KⅡ式の新しい段階が表示されている。

その他 縄文土器分類については古市秀治、高畑知功が協議し、掲載したものである。実測図作製中に451・534・626の3点の土器片に靱圧痕状の凹部が認められた。その後、県立博物館の高橋護氏による顕微鏡観察の結果、そのうちの626につき現時点では確定はできないが靱痕の可能性を教示された。

矢部奥田遺跡



第52図 弥生時代中期～古墳時代前期の遺構図 (1/400)  
(網目部分良好な粘土探掘跡)



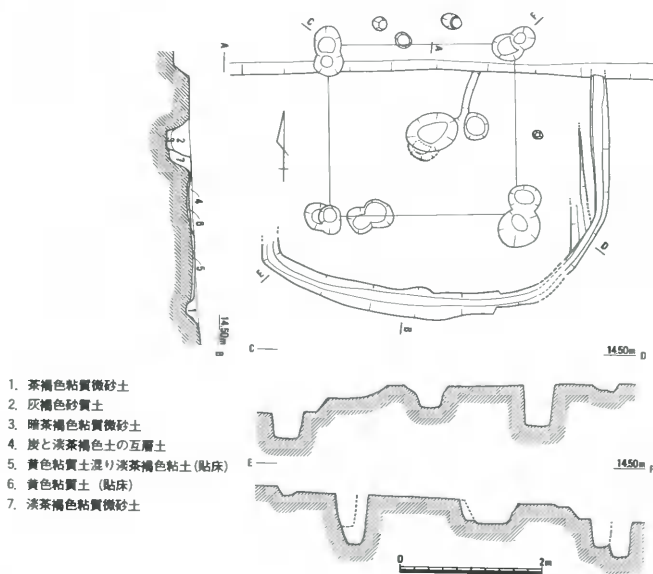
## 第2節 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物

この時期が下層の中心となる遺構である。もっとも広範囲に検出した遺構は、第1調査区から第3調査区のはぼ全面にわたり掘削されていた古墳時代前半期とみられる粘土採掘場である。特に第1調査区の一部では、粘土採掘の一回の単位がほぼ読み取れる土壌も確認している。同じく古墳時代前半の遺構として、第2調査区から第3調査区の西半に集中している大型の土壌がある。これらの遺構の性格については、不明瞭な点もあるが採掘場の時期と並行することから粘土採掘に何等かの関連がある遺構の可能性も考えられる。第2調査区中央では、この遺跡で唯一の竪穴住居を確認している。

その他、採掘場の埋土中から、弥生時代中期の土器片がかなり出土している。土壌33がこの時期の可能性がある。弥生時代後期前半の土器片も少量出土している。

### 竪穴住居（第53図、図版60—1）

第2調査区と第3調査区のはぼ中央付近に検出した竪穴住居である。当住居は、削平を著し



第53図 竪穴住居 (1/80)

く受けておりわずかに南端で床面まで10cm程壁面が残っているのみであった。北半部は床面も若干削平を受け、さらに北端は、水田造成により大幅に削平され、柱穴のみを確認している。規模は推定復元すると一辺4.9m程の方形もしくは隅丸方形をなし、4本の支柱穴を有している。掘り方内の東辺に別の周溝が認められることや、いずれの柱穴も重複していること、中央ピットも新旧の切り合いがあることから建替えを行っている。

図示していないが当住居は西側の南北柱穴の間から中央ピット付近にかけて粘土採掘坑と思われる土坑13と重複している。南側の支柱穴の断面観察では、この土坑の埋土を切り込んで柱穴が掘られていることから、住居が新しく設けられている。ただ西辺の掘り方内の周溝については確認できなかった。

出土遺物は、ほとんど細片で時期を決定するには乏しいが住居の形状や周辺の出土遺物、切り合い等から古墳時代前半期の遺構と思われる。

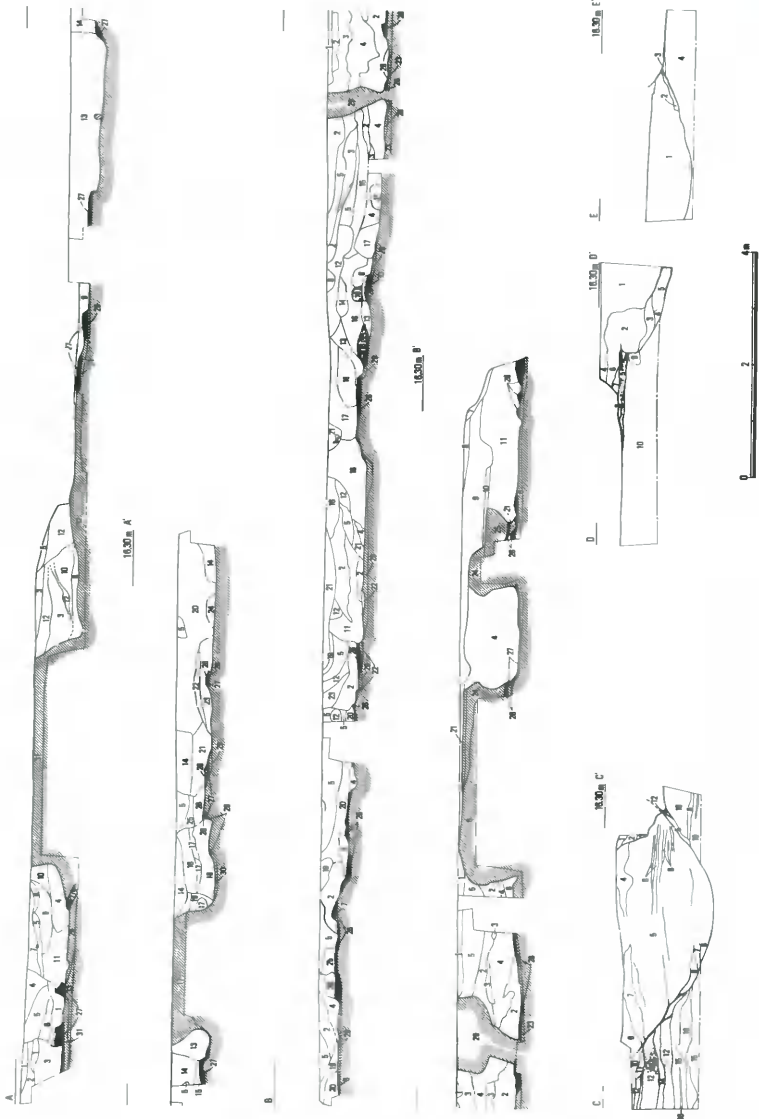
### 粘土採掘坑

当初、第2調査区の調査中には、削平により遺構の残りが良くなかったことも加わり採掘坑との認識はなく埋土の状況から広範囲に大規模な造成が行われている程度にとらえていた。その後、第2調査区の東側に調査を進めてから、黒色粘土の堆積層まで掘削が行われていることや大規模な造成土と考えていたものが採掘坑内の埋土であること等が把握された。加えて、この時期に県立博物館の高橋護氏の適切なご指導をえて粘土採掘を目的とした遺構が大規模に広がっている様子が徐々に明らかになってきた。

#### 採掘粘土（第54図、図版57）

採掘粘土は、黒色もしくは漆黒色を呈す非常にきめの細かい粘りの強い良質の粘土である。粘土の広がり、第1調査区から第2、3調査区の西半にかけて広がっており、第54図C-C'第12層、D-D'の第5層の如く、間層（砂）を含み、数次にわたった堆積をなし、厚いところで30cm程であった。A-A'、B-B'の土層断面に見られる粘土の取り残し部分や掘り方下部のレベルから判断すると遺跡の立地する舌状台地の先端部、すなわち南西から北東方向に低下する台地の傾斜に沿うように黒色土が堆積している。粘土層までは、水田造成等による地形の削平から一様ではないが掘り方の下部まで最も深いところで、表土から1.3mにも達し、浅いところでは、表土直下に黒色土が露出していた。

粘土採取は、黒色粘土が堆積している場所については、これを中心として行われているものの第3調査区西端の土層断面の観察の結果では、黒色粘土以外の黄灰色の粘土についても掘削が認められた。特に第2調査区の西半から第3調査区の西半に限って認められた不整形な掘り方は、おそらく、黒色粘土下部の黄灰色土を中心とする粘土を採取した跡と考えられる。



第54図 粘土採掘場 断面図 (1/100)

矢部奥田遺跡

A-A' 断面図

- |                                       |                             |                           |
|---------------------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| 1. 清灰灰色粘質土(黒褐色土層)                     | 14. 黄色・灰褐色土<br>(暗灰色粘土ブロック)  | 23. 橙黄色粘性機砂質土(主)<br>暗灰色粘土 |
| 2. 暗灰色土(清茶褐色粘質土層)                     | 15. 清灰茶褐色粘性機砂質土             | 24. 橙黄色粘性機砂質土             |
| 3. 清黄褐色(主)・暗灰色粘質土                     | 16. 暗灰色粘質土<br>(清黄褐色粘性機砂質土層) | 25. 暗灰色土・清黄褐色土(濃)         |
| 4. 清黄褐色粘質土                            | 17. 清茶褐色機砂                  | 26. 灰黄色粘土                 |
| 5. 暗灰色粘質土                             | 18. 清黄褐色粘性機砂質土<br>(茶褐色粘質土層) | 27. 濃黒色粘土                 |
| 6. 暗灰色粘質土・清灰灰色粘土(濃)                   | 19. 清黄褐色粘性機砂質土              | 28. 灰白色粘質土                |
| 7. 清黄褐色(主)・清茶褐色粘質土                    | 20. 黄色・暗灰色土<br>(灰色粘土ブロック)   | 29. 灰色粘土                  |
| 8. 清褐色粘質土                             | 21. 黄色・暗灰色土・暗灰色粘土<br>(黄色土層) | 30. 清黄灰色粘土                |
| 9. 清灰灰色粘質土・清黄褐色・清黄褐色粘質土<br>濃褐色粘土ブロック) | 22. 清褐色粘性機砂質土<br>(黄色土層)     | 31. 茶褐色粘土                 |
| 10. 清黄灰色粘性機砂質土                        |                             | 32. 灰白色粘土・清黄褐色粘質土<br>(互層) |
| 11. 清黄灰色粘土・清黄褐色・清黄褐色粘質土               |                             | 33. 清黄褐色粘質土               |
| 12. 暗灰色土(主)・清黄褐色粘質土                   |                             |                           |
| 13. 黄色・暗灰色・茶褐色粘質土(暗灰色粘土ブロック)          |                             |                           |

B-B' 断面図

- |                     |                |
|---------------------|----------------|
| 1. 黄灰色粘性機砂質土        | 16. 清黄灰色粘土     |
| 2. 黄色・暗灰色土(黄色主)     | 17. 橙黄色粘性機砂質土  |
| 3. 暗灰色粘性機砂質土        | 18. 濃茶褐色土ブロック  |
| 4. 黄褐色・暗灰色土・暗灰色粘土   | 19. 灰褐色粘性機砂質土  |
| 5. 黄色・暗灰色土(暗灰色主)    | 20. 濃灰色粘性機砂質土  |
| 6. 茶褐色粘質土           | 21. 黄灰色粘性機砂質土  |
| 7. 灰白色粘質土           | 22. 濃茶褐色粘土     |
| 8. 清黄灰色粘質土          | 23. 清黄灰色粘質土    |
| 9. 黄灰色粘質土           | 24. 清茶褐色粘性機砂質土 |
| 10. 黄灰色粘質土・黄灰色粘土(濃) | 25. 茶褐色粘性機砂質土  |
| 11. 暗灰色・黄灰色粘性機砂質土   | 26. 濃黒色粘土      |
| 12. 暗黄褐色粘質土         | 27. 黄褐色粘質土     |
| 13. 黄色・暗灰色土・橙黄色土    | 28. 暗茶褐色粘質土    |
| 14. 橙黄色・暗灰色土        | 29. 黄灰色粘質土     |
| 15. 黄色土             | 30. 暗灰色粘土      |

C-C' 断面図

- |                      |
|----------------------|
| 1. 灰黄色粘性機砂質土         |
| 2. 清黄白色粘性機砂質土        |
| 3. 黄灰色土(ブロック状)       |
| 4. 清黄褐色機砂            |
| 5. 淡灰白・清茶褐色機砂・機砂(互層) |
| 6. 灰黄白色粘質土(砂漠)       |
| 7. 細砂                |
| 8. 機砂                |
| 9. 灰褐色粘性機砂質土         |
| 10. 灰白色粘土            |
| 11. 黒色・灰白色混り土(粘土)    |
| 12. 黄灰色粘土            |
| 13. 灰褐色粘性機砂質土        |
| 14. 灰色機砂・黄灰色粘土(濃)    |
| 15. 灰黄色粘土            |
| 16. 灰黄白色機砂           |
| 17. 清黄褐色粘質土(黒色土層)    |
| 18. 黄灰白色機砂・粘質土(互層)   |
| 19. 黄灰色粘質土(一部機砂互層)   |

D-D' 断面図

- |                    |
|--------------------|
| 1. 機砂              |
| 2. 細砂・機砂混          |
| 3. 黄褐色粘質土(黒色土層)    |
| 4. 明黄褐色粘質土(黒色土層)   |
| 5. 黒色粘土            |
| 6. 黄褐色機砂           |
| 7. 茶褐色土            |
| 8. 灰色機砂            |
| 9. 灰褐色粘質土          |
| 10. 明黄褐色粘土(粘土と砂互層) |

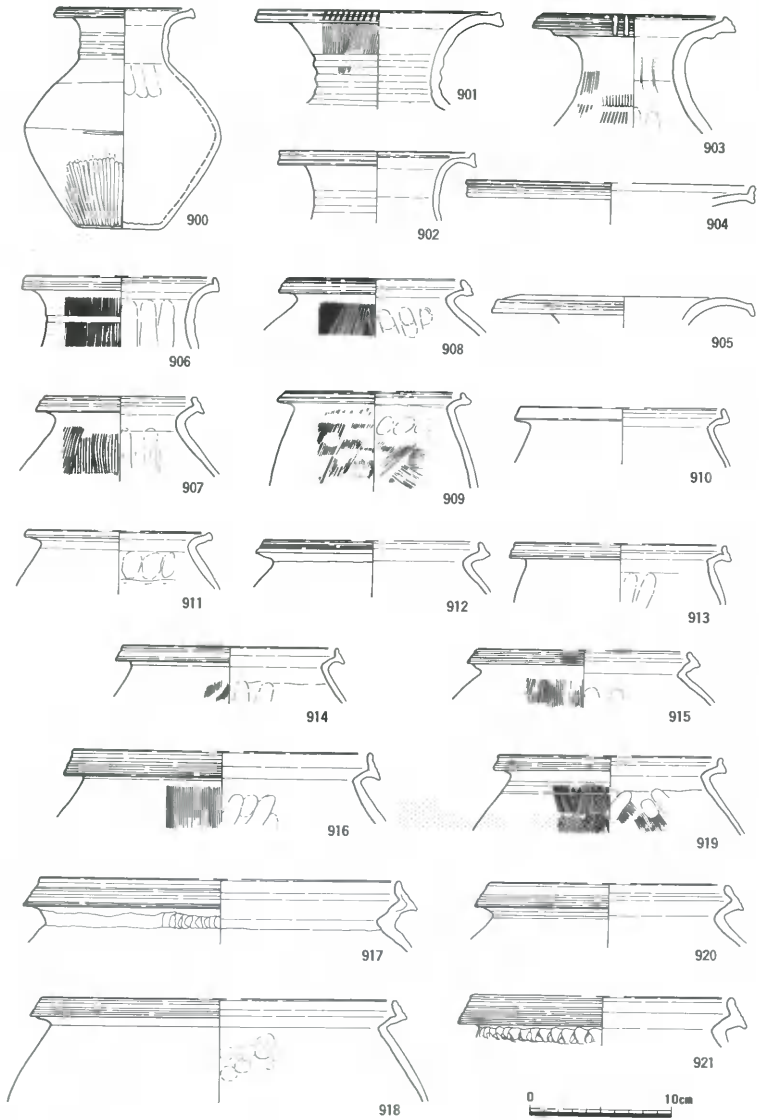
ただこの地区から一部第3、4調査区の西半には、直径2.0m前後、最大深さ2.3mの大型の土壌群が集中して設けられている。これらの土壌は、No.7、9の如く底部に柱穴を有すものも認められるが、大半は、ほぼ垂直に近い掘り方を呈し、採掘坑と同様の埋土をなしている。これらの大型の土壌群は、さらに下層の粘土の採掘を目的として掘削された単独の採掘坑の可能性も考えられる。ただし、底部に柱穴を有す土壌については、性格を異にするとと思われる。

採掘坑掘り方(図版51)

採掘は、遺跡のほぼ全面に及んでおり、採掘以前の旧地形が残っていた場所は、ほんのわずかである。このうち採掘跡が良好に残っていた第1調査区には、調査区を斜めに横断する二本の溝状の未発掘の部分が残っていた。これは、第54図のC-C'、D-D'の土層断面にみられるように、この舌状台地に黒色粘土が堆積した後に、南西から北東に流れた二本の自然流路により黒色粘土が流失した場所である。したがって、採掘の対象とならず残った部分である。この状況からみられるように第1調査区では、黒色粘土が堆積していた場所は全て採掘の対象になっている。

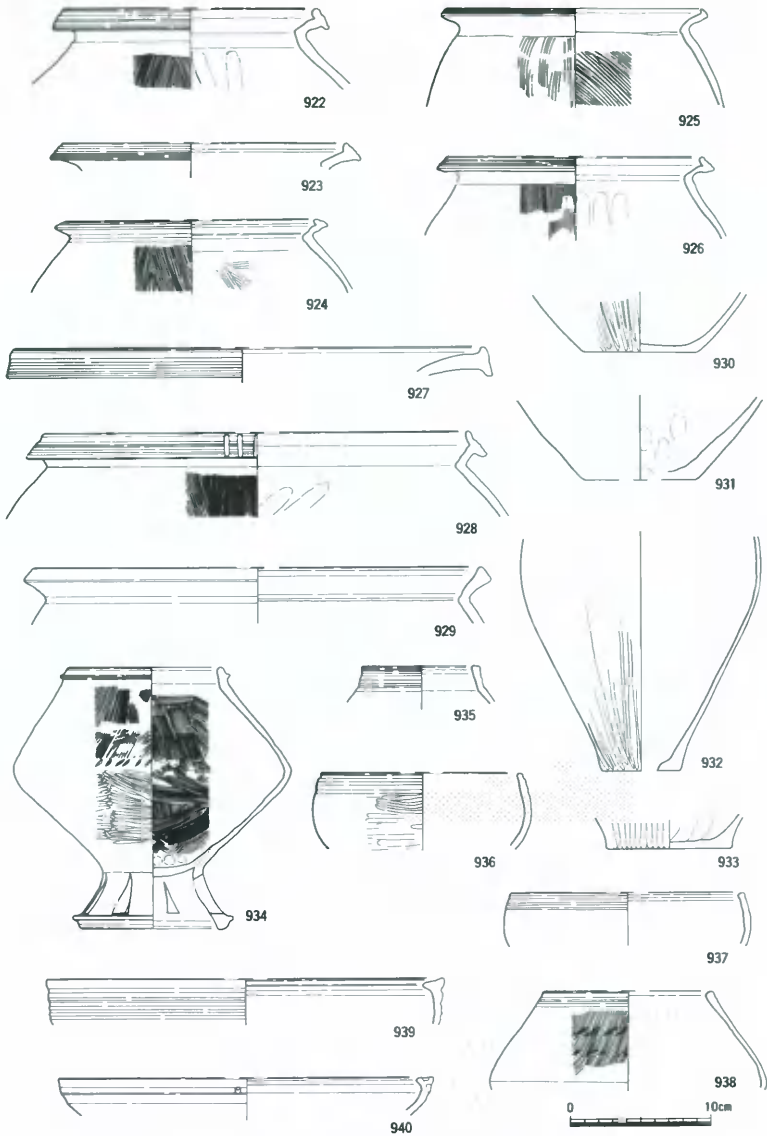
採掘跡は平面ではほとんどが重複し最終的に連続した大規模な掘り方を呈している。ただ詳細に土層断面や平面形を検討してみると、ある一定規模の採掘単位が把握できた。採掘の一回の単位は、第54図のB-B'の土層断面に見られる掘り方の下部の様子やわずかに残った黒色粘土の未採掘部分の状況から、上面直径1～2mで下部粘土層付近が袋状に広がった形のものである。平面では、第1調査区の南西付近で直径2.0m程の採掘土壌がわずかであるが連続し

矢部奥田遺跡



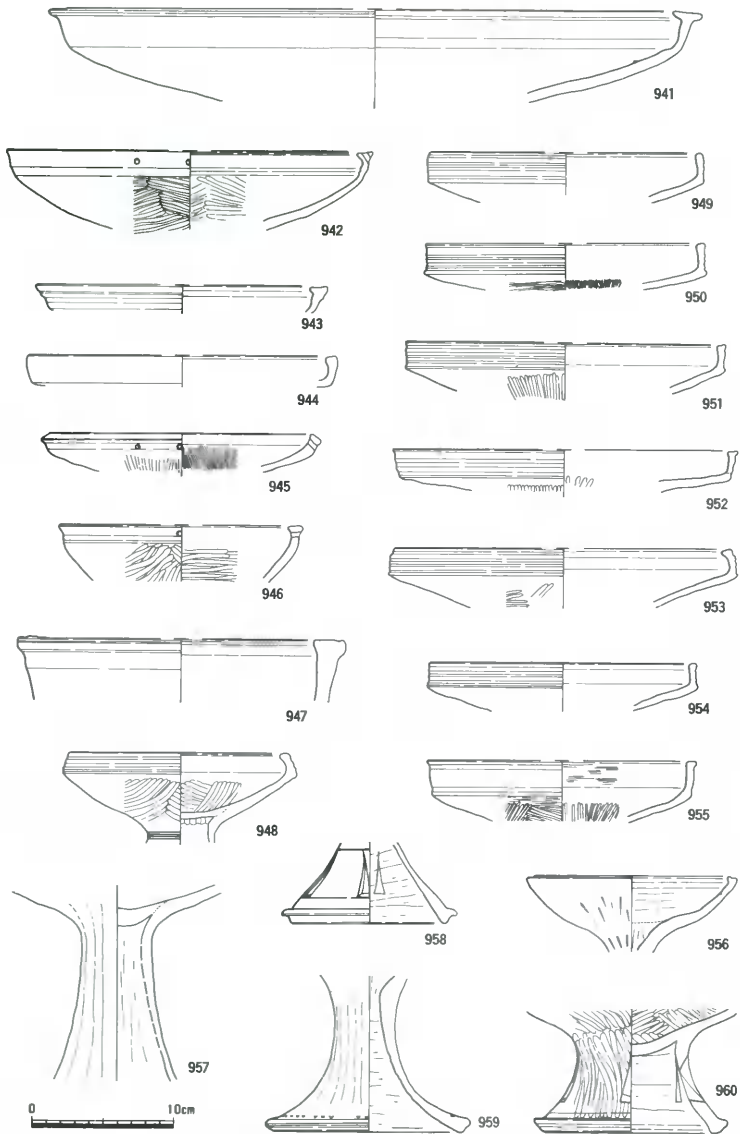
第55図 粘土採掘場 出土遺物 (1)

矢部奥田遺跡



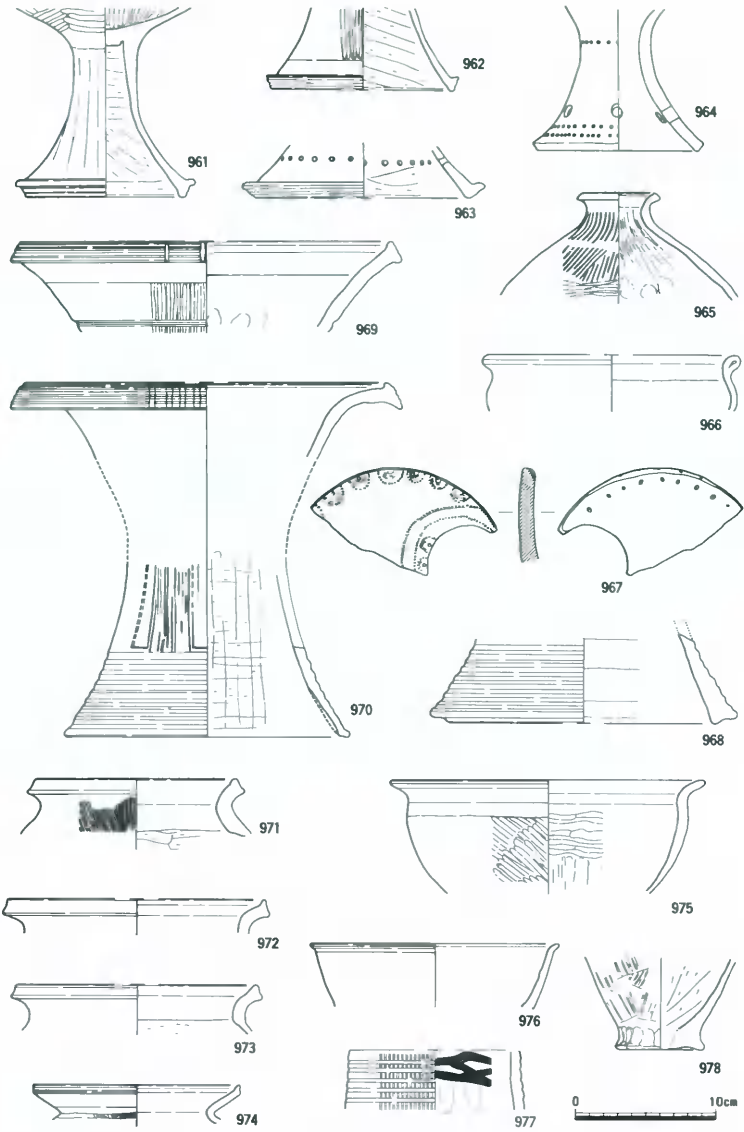
第56図 粘土採掘場 出土遺物 (2)

矢部奥田遺跡



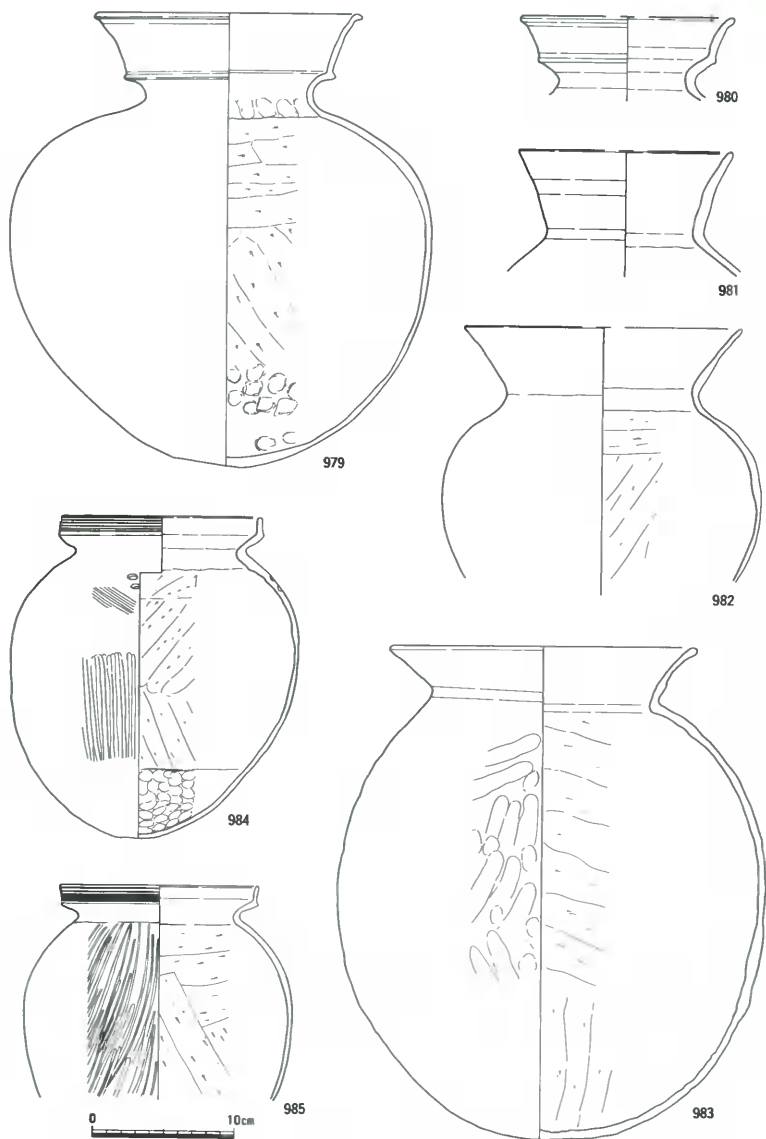
第57図 粘土採掘場 出土遺物 (3)

矢部奥田遺跡

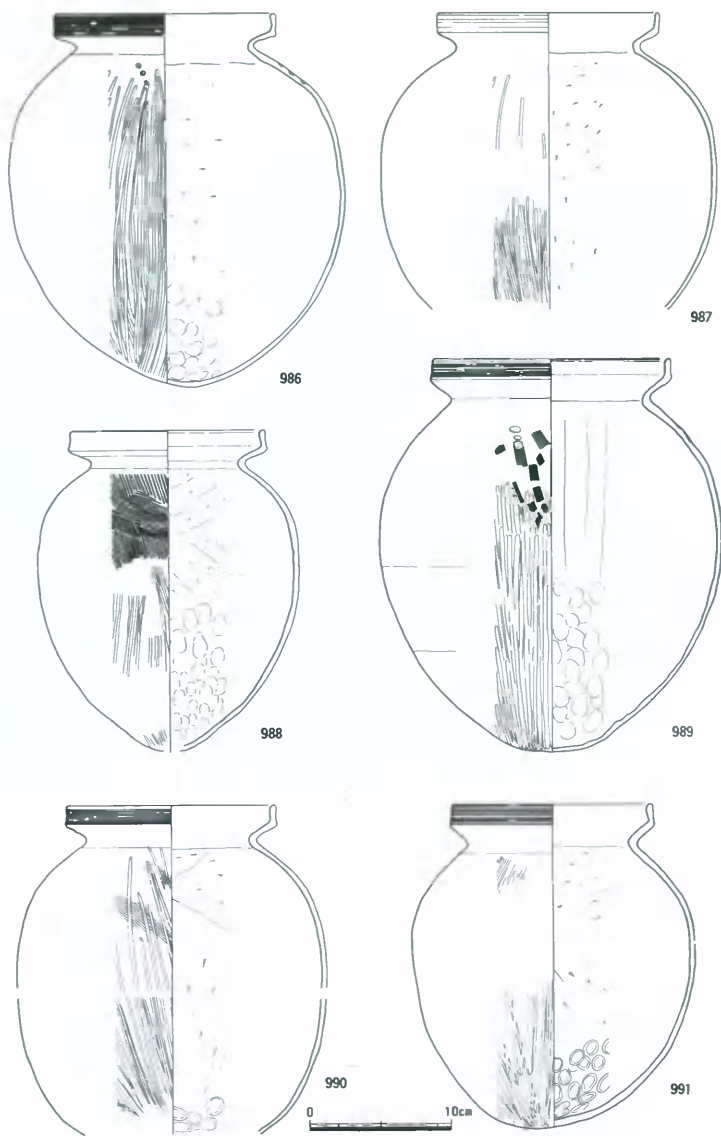


第58図 粘土採掘場 出土遺物(4)

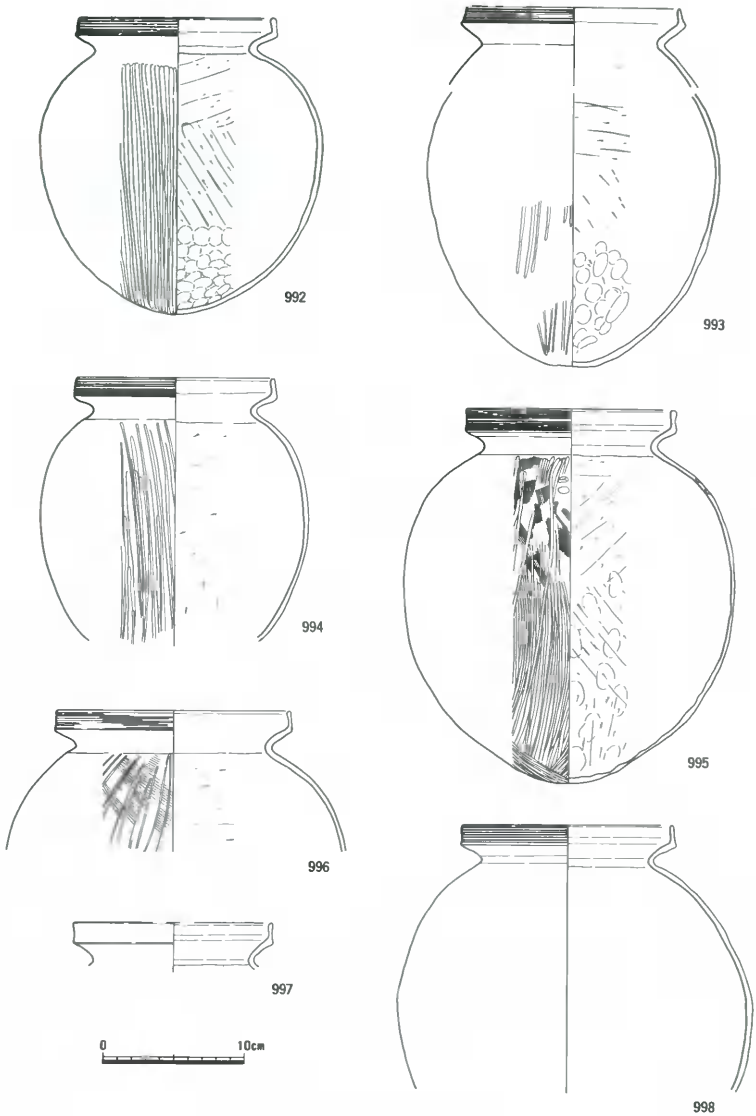




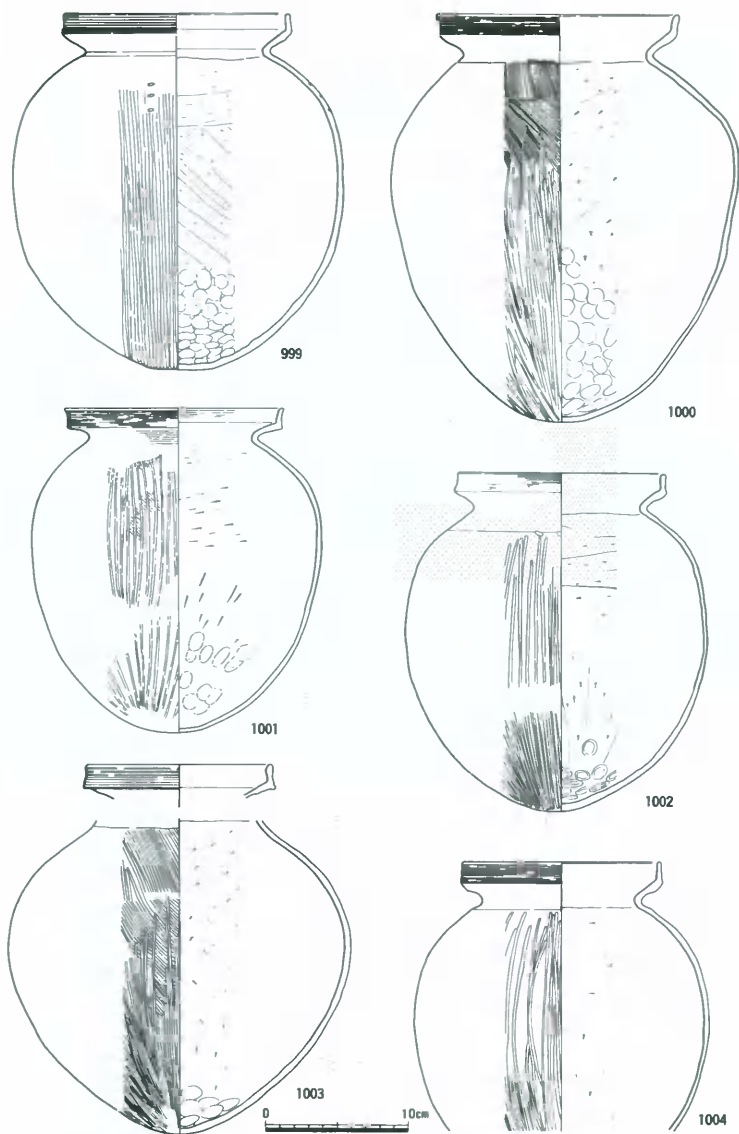
第59図 粘土採掘場 出土遺物 (5)



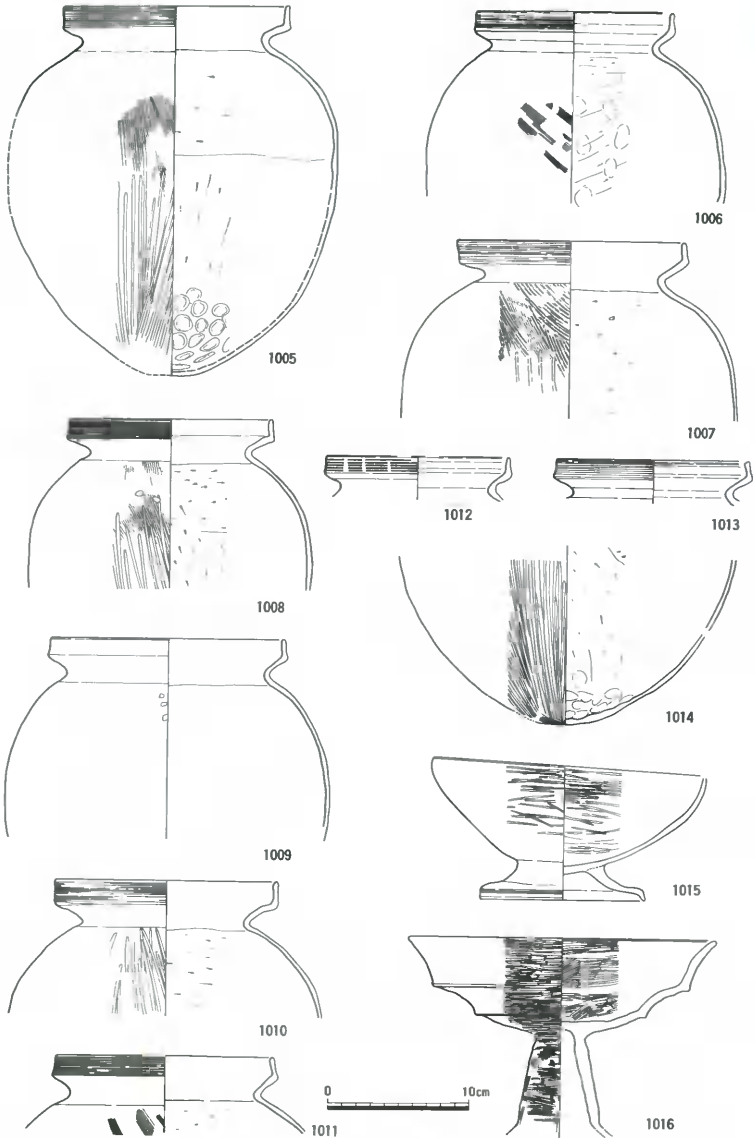
第60図 粘土採掘場 出土遺物(6)



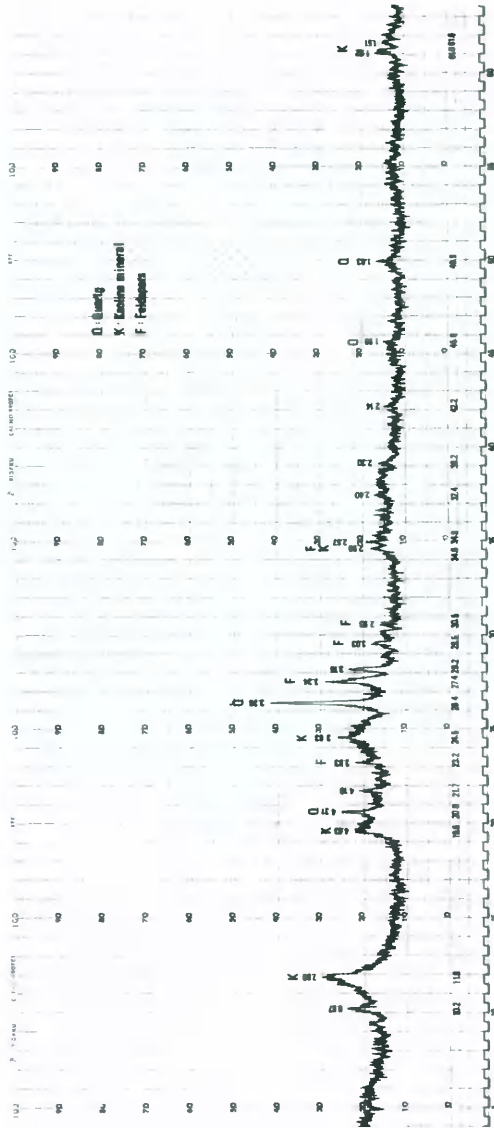
第61図 粘土採掘場 出土遺物 (7)



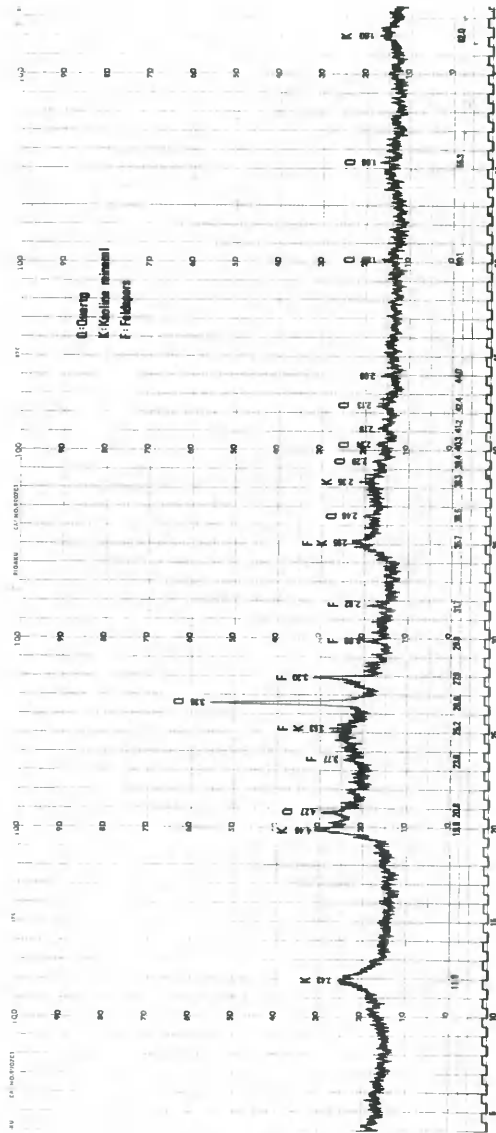
第62図 粘土探掘壙 出土遺物 (8)



第63図 粘土採掘場 出土遺物 (9)



第64図 探掘粘土 胎土分析 (1)



第65図 採掘粘土 胎土分析 (2)

ている状況も認められた。このように採掘は、直径1～2m前後の円形に近い形状で、断面が垂直もしくは袋状を呈す土壌を一回の単位とし、これらの土壌が接しもしくは重複するように連続して掘削された状況が第1調査区の採掘跡である。

出土遺物（第55～63図）

遺物は、採掘壕の埋土中から縄文土器、弥生土器、土師器、石器等が混在して出土している。採掘壕の上面では、浅くくぼんだ場所から古墳時代後半期の須恵器が出土している。これらの浅いくぼみ状の遺構は、採掘土壌の埋設後のものである。また、中世の遺物も見られるが、これらは採掘壕上面が中世遺構面となっており、これらの混じり込みである。

縄文土器については、前項で記述した如く、矢部貝塚の北側の台地に位置していることから採掘壕により削平を受けた集落跡からの混入であろう。この他、弥生時代中期後半（第55図～第58図中段）と弥生時代後期（第58図下段）の遺物が出土しているものの明確な遺構は残存していない。埋土中の出土遺物のうち最も新しいものは、第59～63図の古墳時代前半期（下田所期）のもので量的にも多く遺構全面から出土している。

採掘の時期は、土壌埋土の分層的な発掘を行ってなく、また平面的にも採掘土壌の切り合いが十分に把握できなかったこともあり、土壌の新旧についてはとらえられていない。したがって採掘の開始時期や採掘の期間等は、明瞭につかめないもの他遺構との切り合いや出土遺物等から判断して古墳時代前半期を中心とした採掘壕と想定される。ただ良質な黒色粘土の存在は、縄文時代中期の貝塚の存続時期においても粘土の露頭等から周知され採掘を行っていた可能性は否定できない。

土壌

土壌22（第66図）

第2、3調査区境の東半に位置する。北半は、水田造成により削平を受けており全容は不明である。残存部分の形状から方形もしくは長方形の平面が想定される。残存最大幅1.4m、深さ18cmで平坦な底面をなす。埋土は上下二層に分かれ、上層が灰茶褐色、下層が茶褐色のいずれも粘質微砂土である。

時期は、出土遺物が少なく確定し難いが、埋土や出土遺物等から古墳時代前半期の遺構と考えられる。

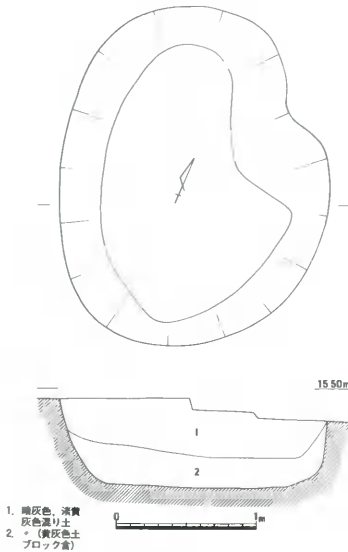
土壌29（第67図）

第1調査区の北東付近に位置する。規模は、長径2.4

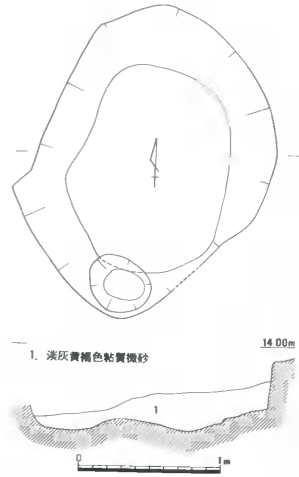


第66図 土壌 22 (1/40)





第67図 土壌29 (1/40)



第68図 土壌13 (1/40)

m、短径1.95m、深さ60cmの楕円形に近い形状を呈す。埋土は、上下2層とも混じり土の粘質微砂土である。粘土採掘坑の可能性も考えられるが土壌の位置には採掘粘土層が広がって無く性格については不明瞭である。

時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが古墳時代前半期の可能性がある。

土壌13（第68図、図版60-2）

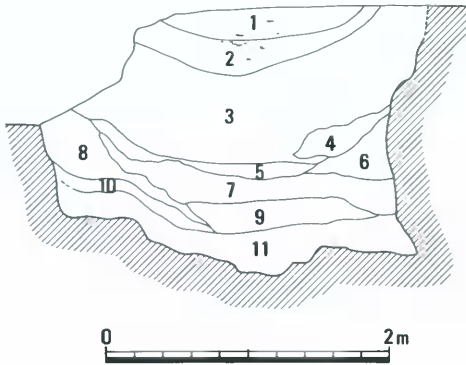
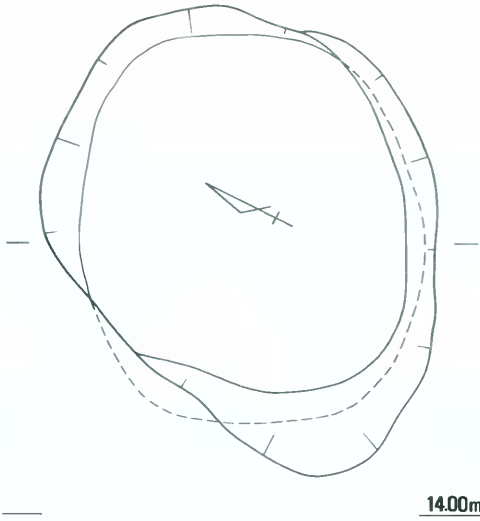
第2調査区の中央に堅穴住居と重複して検出した遺構である。規模は、長径2.25m、短径1.65m、深さ55cmの楕円形を呈し、若干凹凸のある底面をなす。土壌内埋土は、上層に黒褐色土、下層に採掘坑と同様に混じり土が堆積している。

土壌内の遺物が少なく時期の決定に乏しいが、堅穴住居が土壌を切って掘られていることや埋土の状況等から古墳時代前半期の遺構であろう。

なお、当遺構は、第2、3調査区の西半に認められた粘土採取の掘り方の一画に位置していることや埋土の状況などから黒色粘土下部の黄灰色粘土の採掘土壌と考えられる。

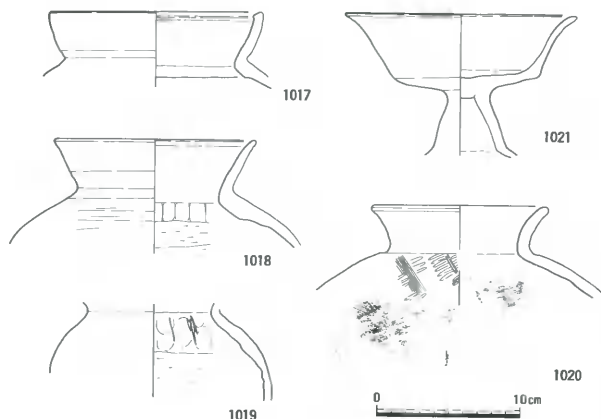
土壌6（第69・70図、図版62）

第3調査区西半の大型土壌群中に確認した土壌である。規模は、上面で長径3.5m、短径



1. 暗黒茶褐色粘性微砂質土(土器片混)
2. 黒色粘性微砂質土(土器片混)
3. 黄・黒灰・茶褐色混粘性微砂質土
4. 黄褐色粘性微砂質土
5. 淡灰青・黄褐色混砂質土
6. 淡灰青色砂質土
7. 灰褐色粘性微砂質土
8. 茶灰褐色粘性微砂質土
9. 明黄褐色粘質微砂質土
10. 黄・灰・黒灰色混粘性微砂質土
11. 黄色粘性微砂質土(黒灰・灰色土混)

第69図 土層 6 (1/40)



第70図 土壌 6 出土遺物

2.7mの長楕円形をなすが、底面では、長辺2.7m、短辺2.4mの隅丸長方形に近い形状を呈し深さ1.8mである。掘り方は、若干袋状を呈すものの垂直に近く凹凸のある床面をなす。

埋土は、1、2層と3層以下に大別できる。2層は、黒色の粘性微砂質土でかなりの土器片を含んでいる。3層以下は、粘土採掘壊と同様の混じり土が主体である。

遺物は、上層の1、2層から古墳時代前半期の土師器が出土しているものの、上層の黒色土を中心とした堆積には土壌7、9に認められた如く古墳時代後半期の遺物も包含しており後半期までの堆積層と思われる。土壌の時期は、下層の遺物が少なく不明瞭であるが埋土の状況等から古墳時代前半期であろう。

#### 土壌 7 (第71・75図、図版64-1)

第3調査区西半の大型土壌群のうちの一基である。規模は、長径2.65m、短径2.3m、深さ1.1mを測り、上面でやや楕円形、底部で隅丸方形に近い平面形をなす。底面は、ほぼ水平で二箇所に直径25cmほどの浅いピットを有し、逆台形に近い断面を呈す。

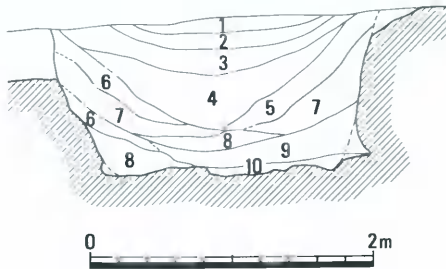
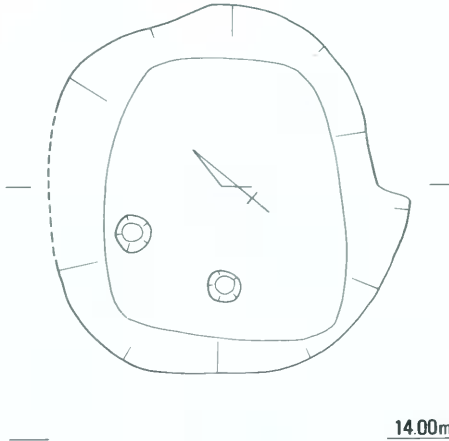
埋土は、1～3層、4層、5層以下に大別できる。3層までは、土壌8、9と同様の埋土をなしており古墳時代後半期の堆積であろう。4層は、淡黒灰色の粘性土でどちらかと言えば上層の埋土に含まれるであろう。5層以下は、粘土採掘壊の埋土と同様の混じり土が堆積している。

出土遺物は、1022、1023が上層から1024が下層から出土している。時期は、出土遺物や遺構の埋土状況等から古墳時代前半期の遺構であろう。

土壇 8 (第72図、図版63)

第3調査区西岸の大型土壇群中の一基で、土壇7の北側に接するように検出した。規模は、上面で長径3.0m、短径2.5m、下部で長径2.25m、短径1.9mの楕円形に近い形状を呈し、深さ2.35mである。断面は、垂直もしくは若干袋状を呈しほぼ水平な底面である。

埋土は、断面観察から大きく1～5層と6層以下に大別できる。上層は、黒色もしくは黒褐色を呈し、下層は粘土採掘壇と同様の混じり土である。



- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1. 暗茶灰色粘性微砂質土 | 6. 茶褐色粘性微砂質土  |
| 2. 黄茶色粘性微砂質土  | 7. 暗茶褐色粘性微砂質土 |
| 3. 黒茶褐色粘性微砂質土 | 8. 淡黄灰色粘質土    |
| 4. 淡黒灰色粘性微砂質土 | 9. 灰黄色粘性微砂質土  |
| 5. 明茶褐色粘性微砂質土 | 10. 黄色粘質土     |

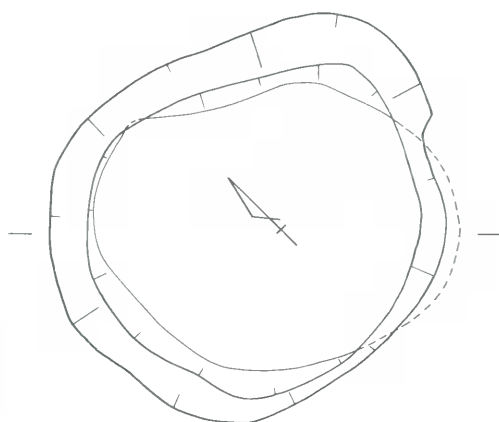
第71図 土壇7 (1/40)

出土遺物は、細片が多く時期決定に乏しいが埋土の状況や掘り方等から、他の土壇と同様に古墳時代前半期であろう。

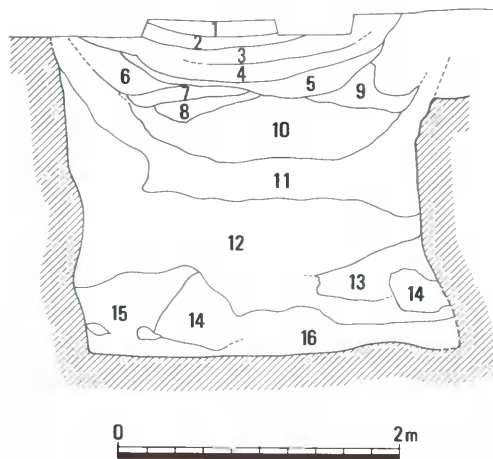
土壇 9 (第73・76図)

第3調査区西に検出した長径2.9m、短径2.2m、深さ90cmの楕円形を呈す大型の土壇である。断面は、逆台形に近い形状を呈す。底面は、ほぼ水平で中央には、他の土壇と異なり直径50cm、深さ75cmの柱穴状のピットを設けている。埋土は、断面観察から土壇の廃棄後に掘り方内に自然に堆積した状況を示しており、大きく1、2層と3～5層、6、7層に大別できる。2層は黒褐色を呈し比較的多くの遺物が出土している。6層は、粘土採掘壇の埋土と同様のブロックの混じり土である。

出土遺物は、上層の1、2層が主で時期差のある須恵器と土師器が混在して出土している。上層の黒褐色土は、古式の土師

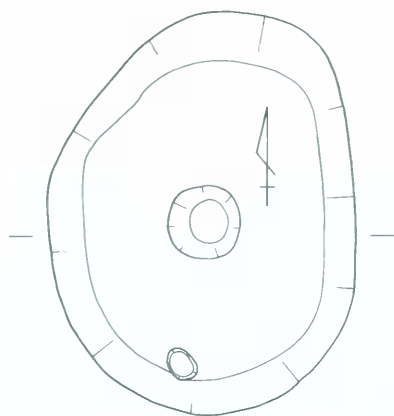


14.00m

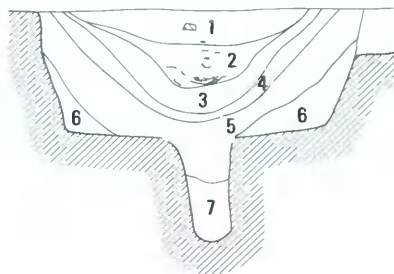


1. 暗茶褐色粘性微砂質土
2. 黒灰色粘質土(黄灰色土ブロック含)
3. 黒茶褐色土
4. 黒色土
5. 淡黒灰色粘性微砂質土
6. 淡茶灰色粘性微砂質土
7. 暗灰褐色粘性微砂質土
8. 灰褐色土
9. 淡黄灰褐色土
10. 明灰黄褐色土(混土)
11. 茶・黒灰・黄褐色粘性微砂質土(混土)
12. 黄・黒灰・茶褐色粘性微砂質土(混土)
13. 青灰色粘性微砂質土
14. 黄褐色砂質土(地山ブロック)
15. 黄色砂質土・灰色砂混土(黒色粘土ブロック含)
16. 青灰色(粘質土・砂質土混)

第72図 土坑 8 (1/40)



14.00 m



- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1. 暗灰褐色粘質土         | 6. 黄灰色粘質土・茶褐色砂質土(互層)  |
| 2. 黒褐色粘質土          | 7. 青灰色砂質土(黄灰色粘土ブロック含) |
| 3. 暗灰色粘質土          |                       |
| 4. 茶褐色粘性微砂質土(若干黄色) |                       |
| 5. 茶褐色粘性微砂質土(若干灰色) |                       |

第73図 土壌 9 (1/40)

器を含んでいるものの第1調査区の採掘跡上面でも同様に須恵器を含んだ堆積をなしており古墳時代後半期まで下る堆積土であろう。下層からは、古墳時代初頭の1030、1032が出土している。土壌の時期は採掘土壌と同様か若干下る時期が考えられる。

土壌10 (第74図)

第3調査区西半の大型土壌群の一基である。規模は、長径1.7m、短径1.3m、深さ1.9mで楕円形の平面を呈す。掘り方は、ほぼ垂直に近く一部で若干袋状を呈している。

埋土は、10層に分層を行ったがいずれも混じり土で、上面には黒褐色のレンズ状の堆積はなく人為的に埋め戻した状況であった。

出土遺物は、柳描き沈線を施した甕508がある。古墳時代前半期の遺構であろう。

土壌15、16 (第75・77図)

第3調査区の土壌群の西端に重複して検出した大型の土壌で、一部は調査区外である。土壌群の新旧は、土層断面から見ると土壌16の埋没後に土壌15が掘られている状況である。ただ土壌15も重複が認められ南側の掘り方が最も新しい。土壌15の規模は、直径2.1m、深さ1.1mの円形に近い形

状で、底面は、平坦でなく凹凸がある。

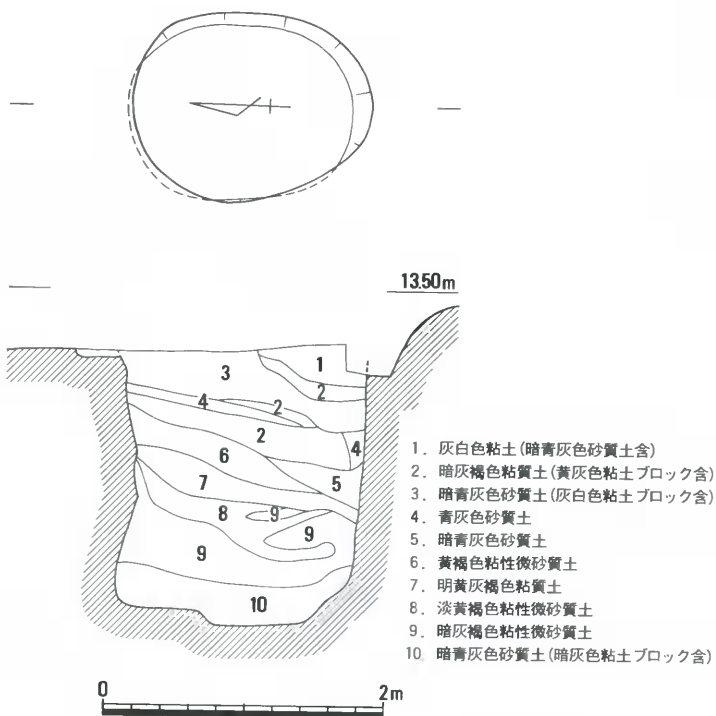
埋土は、いずれも粘土採掘坑と同様の混じり土である。

時期は埋土の状況や出土遺物等から他の土坑と同様に古墳時代前半期であろう。

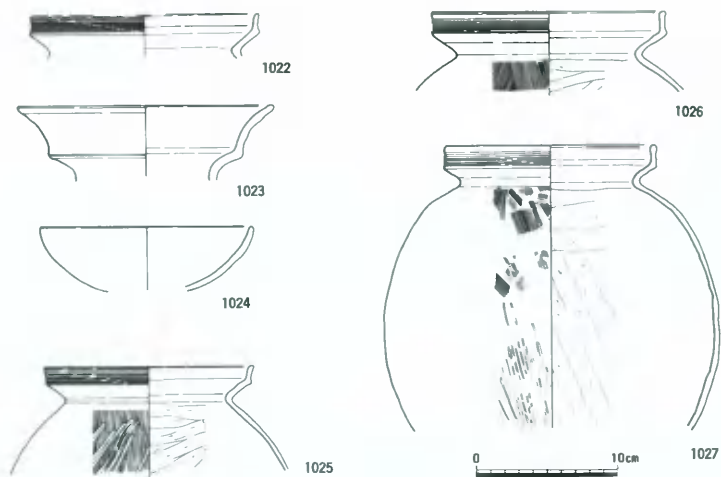
土坑17 (第78図、図版66-1)

第3調査区の東端に検出した大型の土坑である。規模は長径2.2m、短径1.75mの不整形な形状である。深さは、50cmを測りほぼ平坦な底面をなす。土坑内の埋土は、粘土採掘坑の埋土と同様の混じり土である。

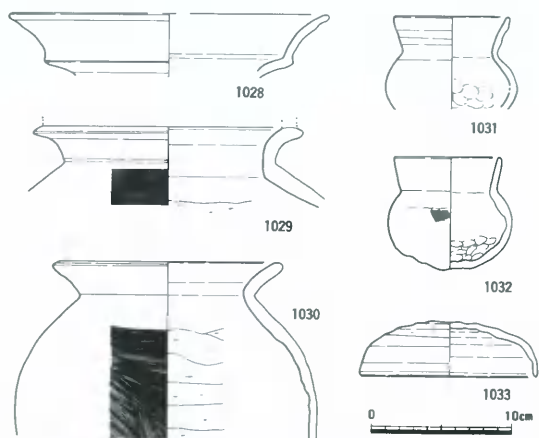
出土遺物が少量で図化できるものがなく不明瞭であるが、埋土の状況や形状から古墳時代前半期であろう。



第74図 土坑10 (1/40)



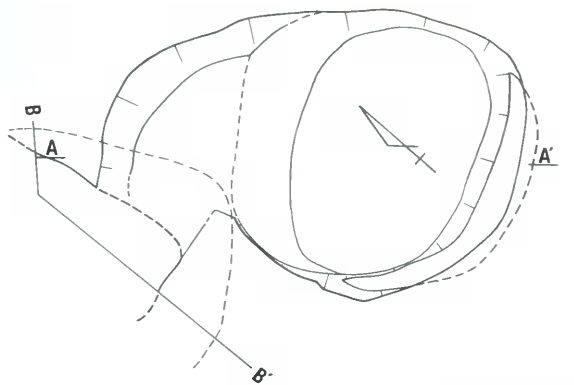
第75図 土壙 7 (1022~1024)・10(1025) 15, 16(1026・1027) 出土遺物



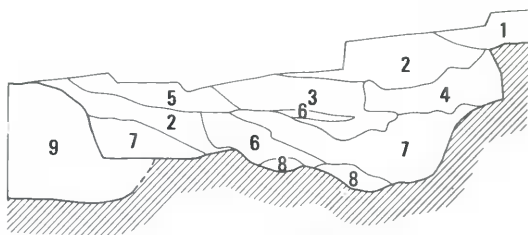
第76図 土壙 9 出土遺物



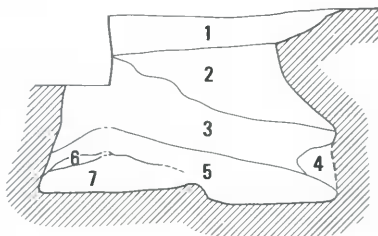
矢部奥田遺跡



A ————— 13.00m A'

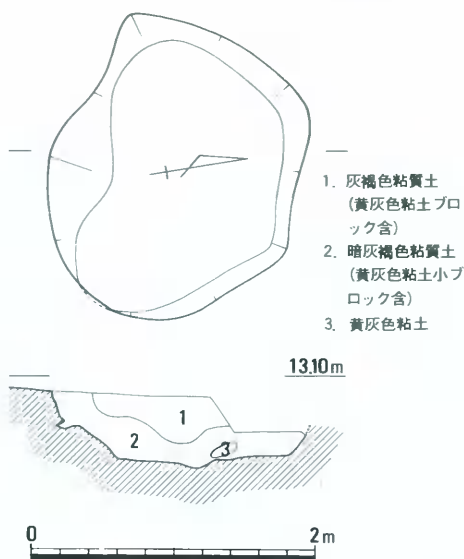


B ————— 13.00m B'



1. 淡青灰色粘質土
2. 淡灰褐色粘性微砂質土
3. 暗灰色粘性微砂質土(黄灰色粘土含)
4. 黄灰色粘性微砂質土
5. 淡青灰色粘性微砂質土
6. 淡黄灰色砂質土
7. 淡黄灰色粘性微砂質土
8. 暗灰褐色粘性微砂
9. 青灰・灰黑色混粘質土

第77図 土壌15, 16 (1/40)

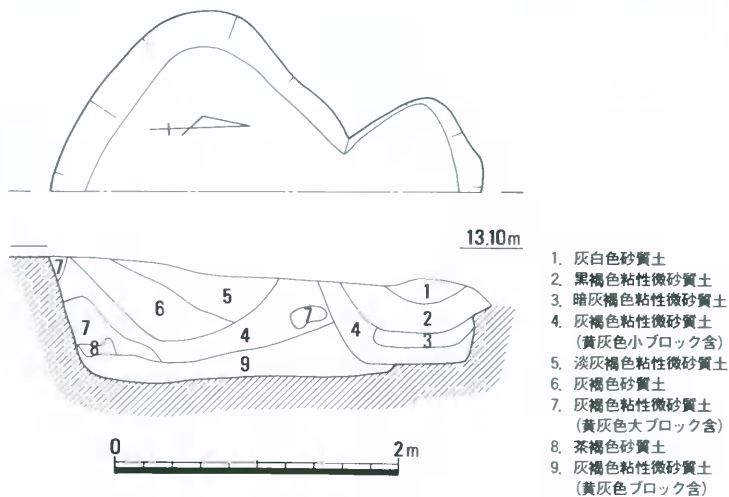


第78図 土壌 17 (1/40)

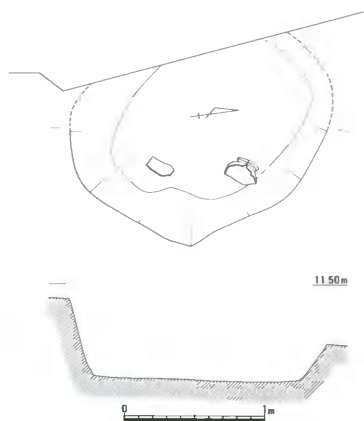
土壌18 (第79図)

第3調査区の東端で遺構の半分ほどが調査対象となった重複した土壌である。土壌の新旧は、土層断面の観察によると北側の土壌が新しく切り込んでいる。規模は、南側が直径2.2m、北側がやや小さく直径1.0m程と推察される。深さは、新土壌が60cm、旧土壌が85cmと若干異なるが、底面はいずれも平坦である。

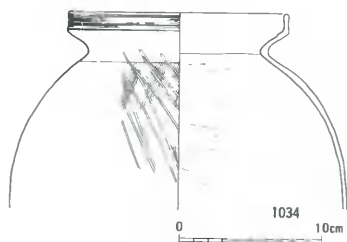
埋土は、新土壌の上面に位置する第二層の黒褐色土がレンズ状の自然堆積を示しているのみで、それ以下の土層は



第79図 土壌 18 (1/40)



第80図 土壌54 (1/40)



第81図 土壌54 出土遺物

新旧ともに粘土採掘土壌と同様に混じり土である。

時期は、遺物が少なく決め難いがおそらく古墳時代前半期の粘土採掘坑の重複したものであろう。

#### 土壌54 (第80・81図)

第5調査区南側の谷の肩口に検出した土壌である。規模は、長径推定1.8m、短径推定1.5m、深さ60cmの円形に近い形状を呈し平坦な底面をなす。埋土は、グライ化しているものの基本的には粘土採掘坑と同様の混じり土である。

土壌の時期は、埋土の状況や出土遺物から古墳時代前半期であろう。(山磨)

#### 土壌2B (第82図、図版68-1)

第4調査区の北西部において検出された土壌で、検出面での平面形は楕円形を呈する。規模は南北に長く、240cmを測る。東西195cmで、検出面からの深さは100cmである。素掘りの井戸状を呈しているが、浅いもので、底面はほぼ平坦である。埋土は、下層(第7～8層)に粘質土が堆積しているが、上層(第1～5層)は砂質土である。最上層の中央部に溜り状に堆積している第1層の黒色土中には図示していないが若干の土器片が含まれている。

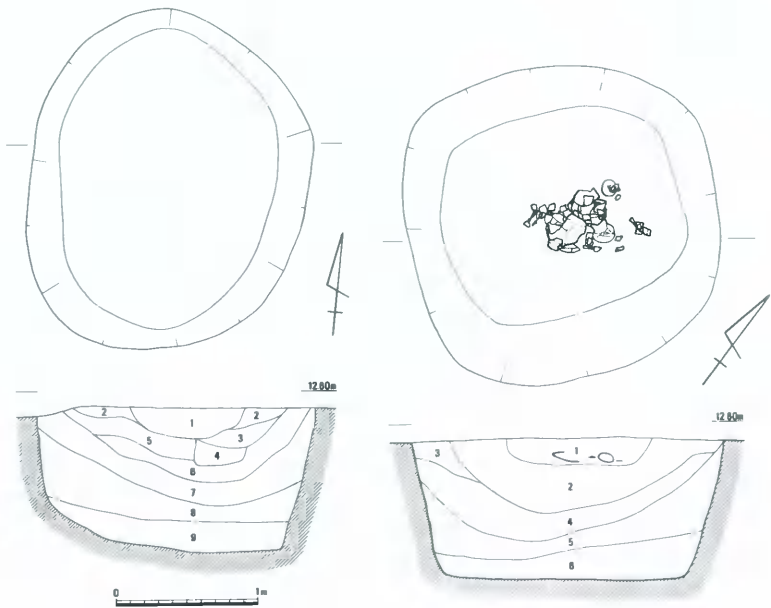
時期は、土器を含んでいる上層の土が、2次堆積土とみられるものの、いずれも古墳時代前半のものであり、それ程時期差のないものとみられる。

#### 土壌3B (第83・84図、図版67)

第4調査区の北西部、土壌2Bの北東2m程のところに検出された土壌である。検出面での

平面形は、多少歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、一辺220cm程で検出面からの深さ100cm程を測る。浅い素掘りの井戸状を呈する土壌で、底面は平坦である。埋土はいずれも砂質土で、最上層の中央部に溜り状に堆積している第1層の黒色土中から土器がまとも出土している。1035は土器の上半が残存している壺形土器で、胴部の一部に黒斑が認められる。1036・1037も壺型土器で、1037は口縁部の3/4が欠損しているものの、ほぼ完形に図上復元できたものである。1038・1039は小形丸底壺で、1038はほぼ完形に復元できた土器である。胴部に黒斑が一部認められる。1040は高杯形土器で口縁部および、脚裾部が欠損している。

土壌の時期は、土器の出土している黒色土が窪みに堆積している2次堆積土とみられるものの、古墳時代前半から大きく差のないものとみられる。



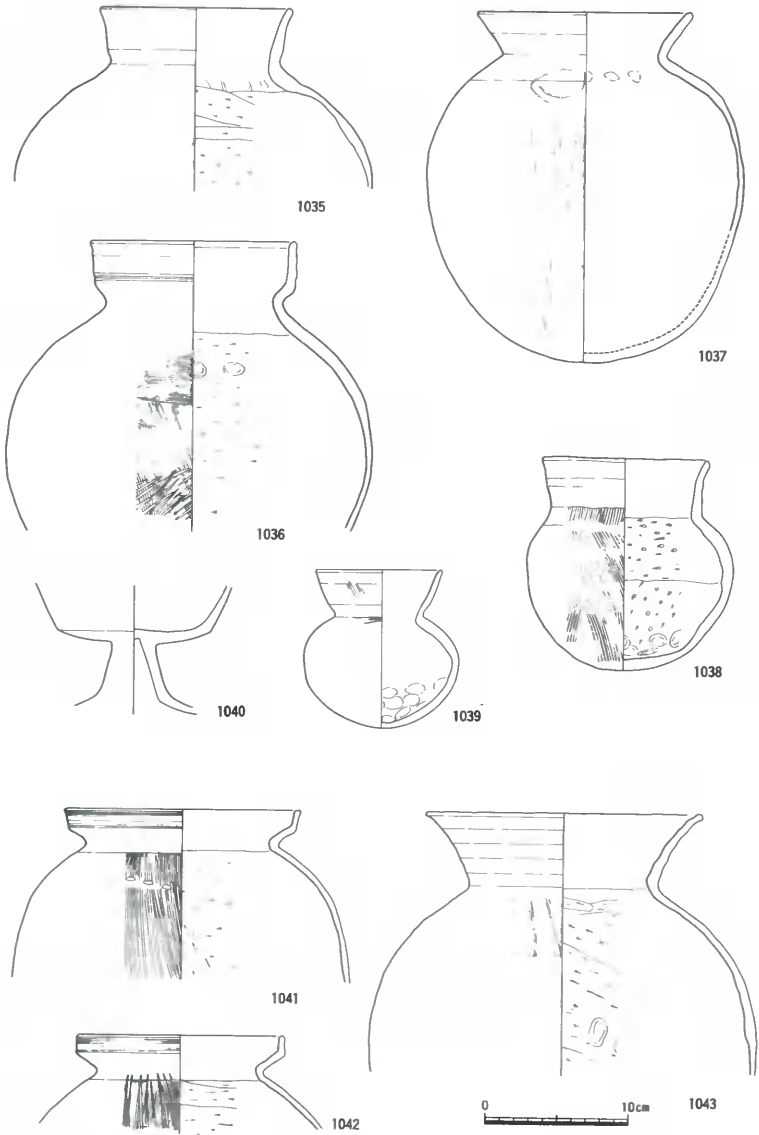
- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 1. 黒色土               | 7. 青灰色粘質土          |
| 2. 暗褐色砂質土            | 8. 青灰色粘質土<br>(砂粒含) |
| 3. 黒灰色砂質土            | 9. 明青灰色粘質土         |
| 4. 暗褐色粘質土            | (ブロック状に砂)          |
| 5. 暗青灰褐色砂質土          |                    |
| 6. 暗青灰色土<br>(砂粒含粘質土) |                    |

第82図 土壌2B (1/40)

- |             |
|-------------|
| 1. 黒色土      |
| 2. 暗灰褐色砂質土  |
| 3. 暗青灰色砂質土  |
| 4. 暗黄青灰色シルト |
| 5. 黄青灰色砂質土  |
| 6. 暗青灰色砂質土  |

第83図 土壌3B (1/40)

矢部奥田遺跡



第84図 土壙3B(1035~1040)・4B(1041~1043) 出土遺物

土壌 4 B (第84・85図)

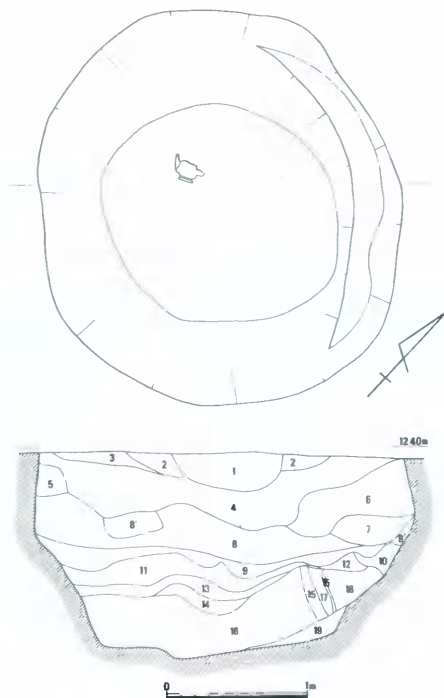
第4調査区の北西部、土壌3Bの北1m程のところに検出された土壌である。検出面での平面形は楕円形を呈する。規模は北西—南東方向に長く、280cmを測る。北東—南西方向は250cmで、検出面からの深さは140cmである。素掘りの井戸状を呈する土壌で、底面は少し凹凸がみられる。埋土は粘質土、砂質土が混在し、ブロック状の土も多くみられる。中間の第9層等には砂層が堆積している。また、最上層の中央部には、溜り状に黒色土が堆積している。土器は、いずれも下層から出土したもので、1041は底面に接して出土した甍形土器である。

時期は、埋土や出土している土器等から、古墳時代前半とみられる。

土壌 6 B (第86・88図)

第4調査区の北西部、土壌4Bの北東3m程のところに検出された土壌である。検出面での平面形は不定形であるが、底面形状はほぼ方形である。規模は、検出面で東西200cm、南北180cmを測り、検出面からの深さは110cmで、底面は平坦である。埋土は最下層の第5層は粘質土である。

時期は、出土遺物等から古墳時



- |                              |                  |
|------------------------------|------------------|
| 1. 黒色土                       | 10. 青灰色粘質土       |
| 2. 暗褐色土                      | 11. 黄青灰色砂質土      |
| 3. 暗黄褐色土                     | 12. 暗青灰褐色砂質土     |
| 4. 暗黄褐色砂質土                   | 13. 黒灰色粘質土(砂粒含)  |
| 5. 明黄褐色土                     | 14. 黄青灰色粘質土(砂粒含) |
| 6. 黄褐色砂質土                    | 15. 明青灰色粘質土      |
| 7. 黄青灰色粘質土                   | 16. 暗青灰色砂        |
| 8. 黄青灰色砂質土<br>(ブロック状に黒色粘質土含) | 17. 褐色砂          |
| 8'. 黒色粘質土(ブロック)              | 18. 暗灰褐色砂        |
| 9. 暗灰色砂                      | 19. 暗灰色砂質土       |
| 9'. 褐色砂                      | (ブロック状に黒青灰色粘質土含) |

第85図 土壌 4 B (1/40)

代前半とみられる。

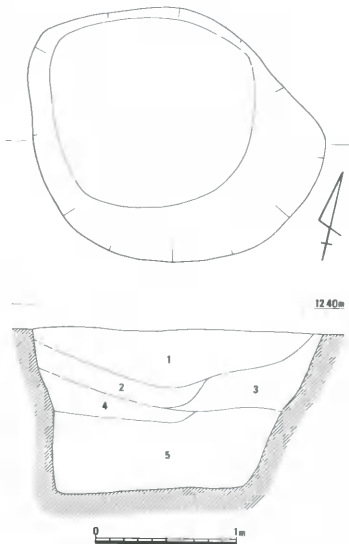
土壌 8 B (第87・88図)

第4調査区の北西部、土壌4Bの北西0.5m程のところに検出された土壌である。検出面での平面形は、多少歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、南北180cm前後、東西170cmで検出面からの深さ60cmを測る浅い土壌で底面はほぼ平坦である。埋土は下層の第2層が砂質土、上層の第1層は粘質土である。1051は第1層から出土した甕形土器で、焼き歪みがみられる。

時期は出土遺物等から古墳時代前半とみられる。

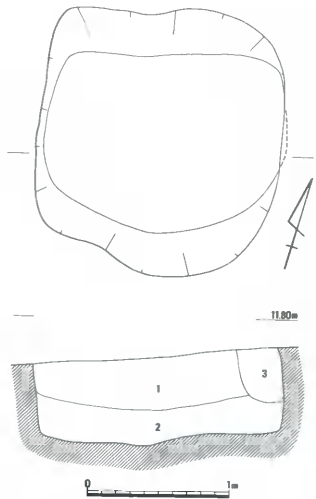
土壌 5 B (第88・89図)

第4調査区の北西部、土壌4Bの東2m程のところに検出された土壌である。検出面での平面形は、やや歪んだ円形を呈する。規模は径240cm程で、検出面からの深さ130cm前後を測る土壌で、底面は若干凹凸がみられる。埋土は最下層の第19層と、中間の第7層に粘質土がみられるが全体に砂質土が堆積している。最上層の中央部に溜り状に堆積している第1層の黒色土中



- |                  |            |
|------------------|------------|
| 1. 暗黄褐色土         | 4. 暗黄褐色砂質土 |
| 2. 黄褐色土          | 5. 暗青灰色粘質土 |
| 3. 明黄褐色粘質土 (粗砂含) |            |

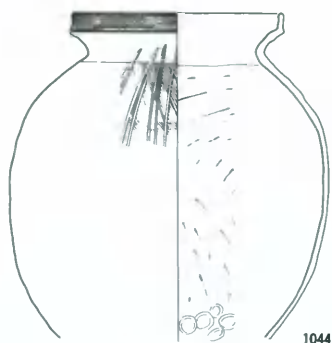
第86図 土壌 6 B (1/40)



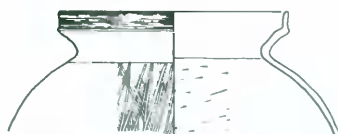
- |                               |
|-------------------------------|
| 1. 黒色粘質土                      |
| 2. 暗青灰色砂質土                    |
| 3. 暗灰色砂<br>(暗青灰色・黒色粘質土のブロック含) |

第87図 土壌 8 B (1/40)

矢部奥田遺跡



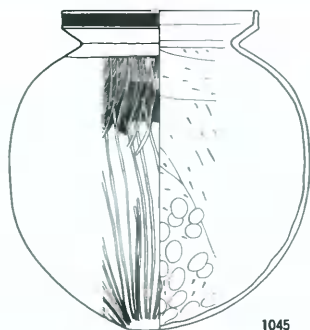
1044



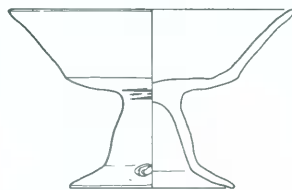
1047



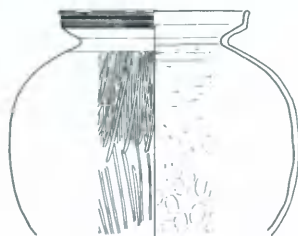
1048



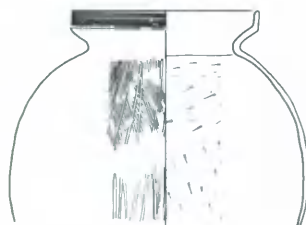
1045



1050



1046



1051

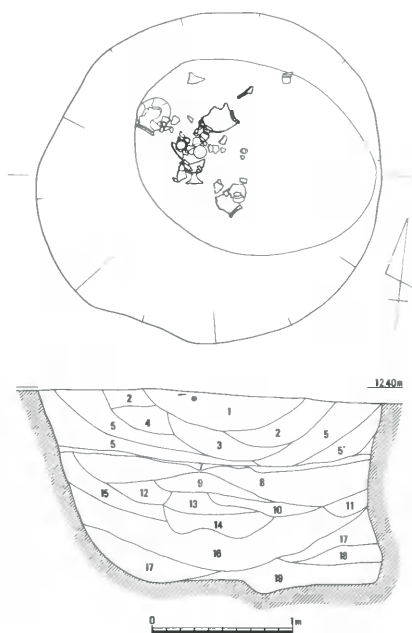


1049



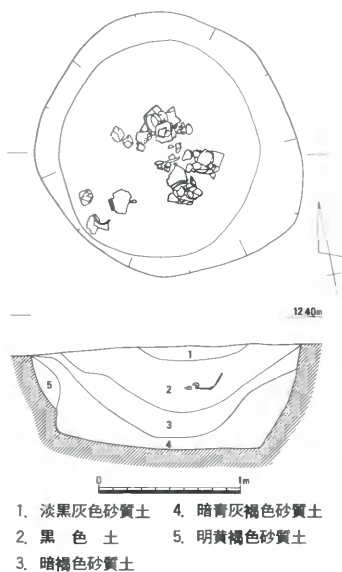
第88図 土壙 5B(1044~1050)・8B(1051) 出土遺物





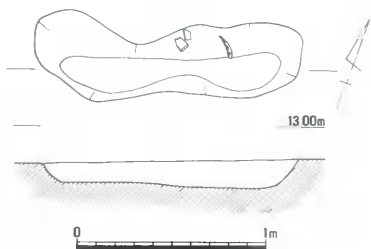
- |            |                      |
|------------|----------------------|
| 1. 黑色土     | 11. 暗灰色砂質土           |
| 2. 暗黃褐色土   | 12. 暗黃青灰色粘質土         |
| 3. 暗褐色土    | 13. 黃青灰色砂質土          |
| 4. 黃褐色土    | 14. 暗青黃灰色砂質土         |
| 5. 暗黃褐色土   | 15. 黃青灰色砂質土          |
| 5'. 暗黃褐色土  | 16. 暗青灰褐色砂質土         |
| 6. 黃褐色土    | 17. 暗灰色粘質土<br>(粗砂含)  |
| 7. 淡灰褐色粘質土 | 18. 暗青灰色砂質土          |
| 8. 灰褐色砂質土  | 19. 暗青灰色粘質土<br>(微砂含) |
| 9. 暗灰褐色砂質土 |                      |
| 10. 黑褐色土   |                      |

第89図 土壤5B (1/40)

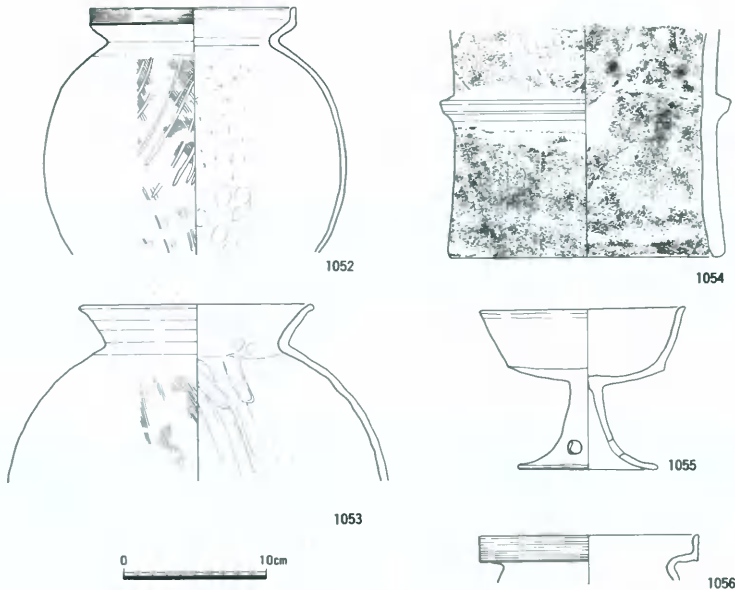


- |            |             |
|------------|-------------|
| 1. 淡黑灰色砂質土 | 4. 暗青灰褐色砂質土 |
| 2. 黑色土     | 5. 明黃褐色砂質土  |
| 3. 暗褐色砂質土  |             |

第90図 土壤7B (1/40)



第91図 土壤1B (1/30)



第92図 土壙7B(1052~1055)・1B(1056) 出土遺物

にまとまって土器が出土している。

時期は出土遺物等から、古墳時代前半とみられる。

土壙7B(第90・92図、図版68-3)

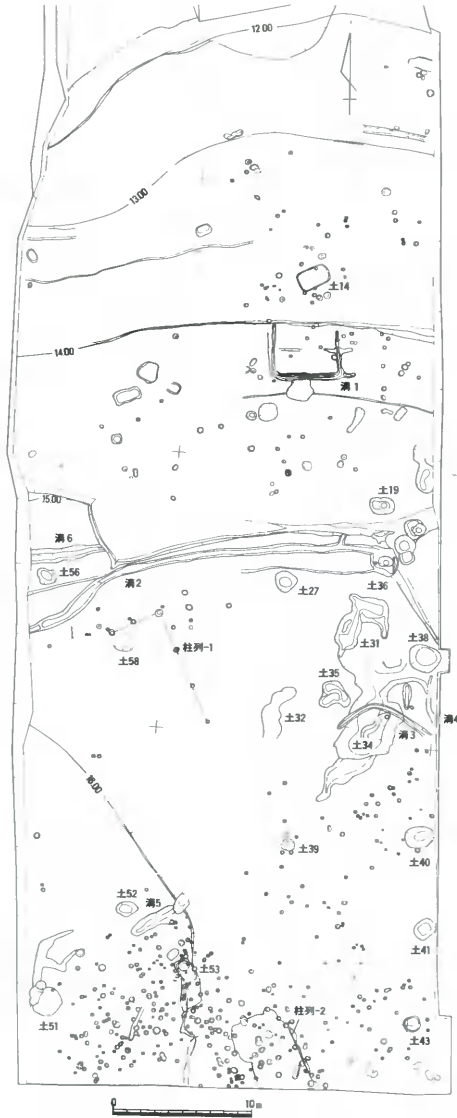
第4調査区の北東部において検出された土壙で、検出面での平面形は歪んだ円形を呈する。規模は径180cmを測り、検出面からの深さ70cmで底面は平坦である。埋土は下層に砂質土が堆積し、上層の第2層黒色土中に土器がまとまって出土している。1052は下層から出土した甕形土器である。1053は第2層から出土した甕形土器である。1054は第2層から出土した円筒埴輪の下半4分の1程の破片である。1055は第2層から出土した高杯形土器で、完形に復元できたものである。

時期は出土遺物等から古墳時代前半とみられる。

土壙1B(第91・92図)

第4調査区の北部において検出された不定形の土壙である。規模は東西180cm、南北50cm前後で、検出面からの深さ15cm前後の浅い土壙である。埋土は暗褐色砂質土1層が堆積している。壁面に沿って若干の土器が出土している。1056は甕形土器の口縁部片である。(内藤)

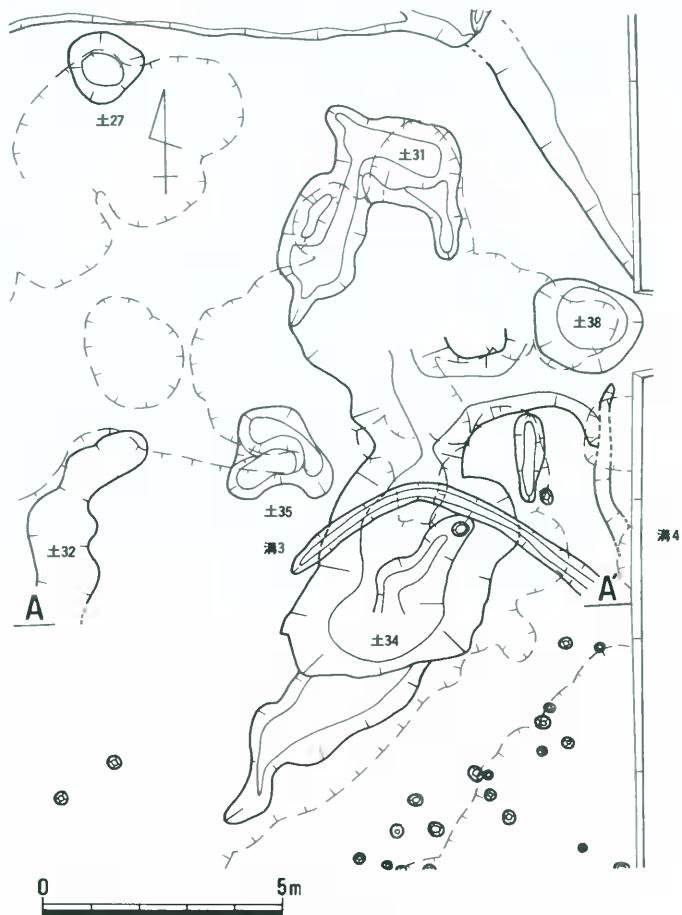
矢部奥田遺跡



第93図 古墳時代後期~中世 全体図 (1/400)

### 第3節 古墳時代後期から中世の遺構と遺物

この期は、中世の柱穴、土塙等の遺構が中心となる。特に調査区の南端では建物のまともりを確認できなかったが、柱穴が集中して認められた。また、第2調査区東半ではコ字に巡る溝を確認しており、溝内から土鍋、小皿等がまともって出土している。古墳時代後半期の明瞭な



第94図 土塙31・34及び周辺図 (1/150)

遺構はつかめていないが、第1調査区北東端の粘土採掘場上面の浅い土壌から後半期の須恵器が出土している。第2、3調査区北西の大型土壌の土層からも須恵器が出土しており同様の堆積土と思われる。

その他、遺構は認められなかったが奈良時代の瓦片が出土している。

土壌

土壌31、34、53 (第94・96図)

第1調査区東半に検出した不整形な土壌群である。明瞭な掘り方を示さずいずれも浅くぼんだ状況である。A-A'の土層断面の観察の結果では、土壌32、34のいずれも粘土採掘場の上面に位置する状況を示している。その他の土壌も破線で示した粘土採掘場の中にはぼ納まりいずれも採掘場の埋設後に浅くぼんだところと見られる。

出土遺物は、弥生時代中期後半の土器から古墳時代後半の須恵器まで含んでいる。時期は、土壌内の埋土の状況や出土須恵器から粘土採掘場上面や第3、4調査区の大型土壌の上面にも認められた黒色を主とする堆積層と同様に古墳時代後半期を最終とするものであろう。

土壌56 (第97図)

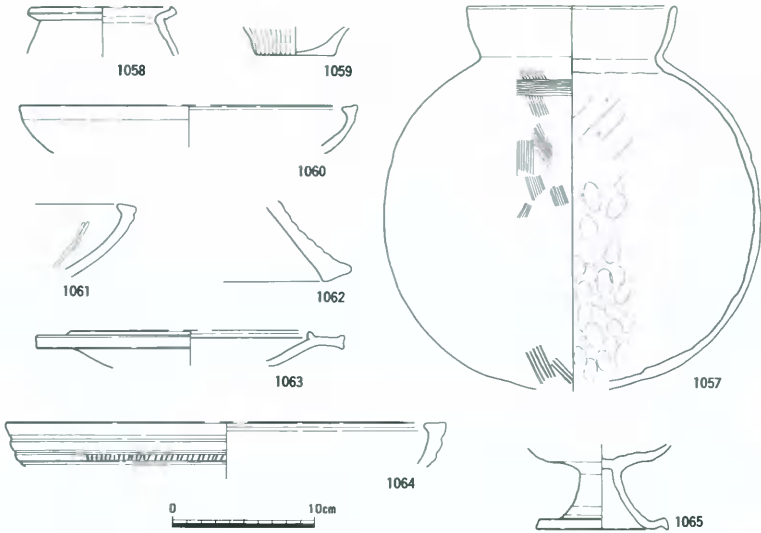
第1調査区北西隅の溝2、6の間に位置する。規模は検出面が異なるため長径1.55m、短径1.35mの不整形な形状を呈すが、復元すれば楕円形に近い形と推察される。断面は血状を呈し、深さ27cmを測る。

出土遺物が少なく時期は確定し難いが土壌が粘土採掘場の上面に位置していることや黒色土の埋土等から古墳時代後半期の遺構であろう。

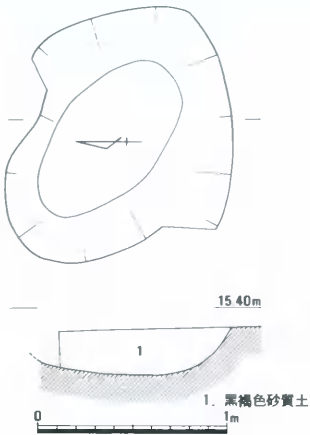


第95図 土壌31・34 断面図 (1/80)

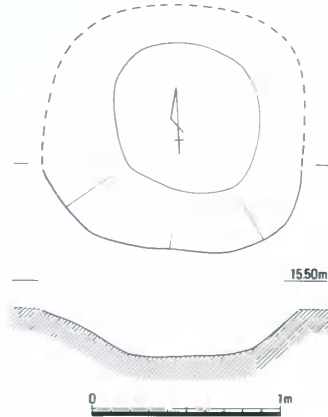
矢部奥田遺跡



第96図 土壙31 (1057, 1063)・34 (1058~1062, 1064, 1065) 出土遺物



第97図 土壙56 (1/30)

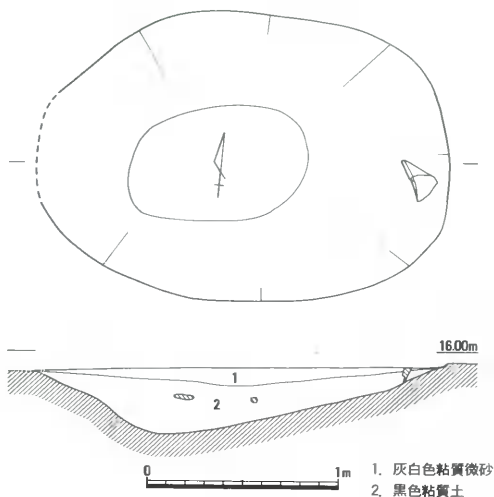


第98図 土壙58 (1/30)

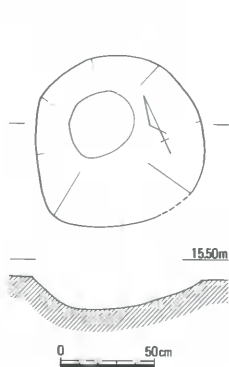
土壙58 (第98図)

第1調査区の北西に位置する。遺構上面にトレンチが設定されたため、遺構検出面が南北で若干異なり一部平面形が不明瞭である。推定規模は、長径1.4m、短径1.3m、深さ30cmの円形に近い形状で、すり鉢状の断面を呈す。埋土は黒褐色の粘質微砂土である。

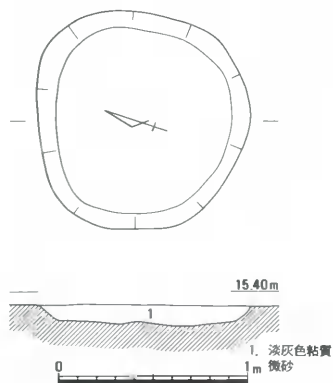
時期は、出土遺物が細片のため確定し難いが、埋土や検出位置等から古墳時代後半期の可能性が考えられる。



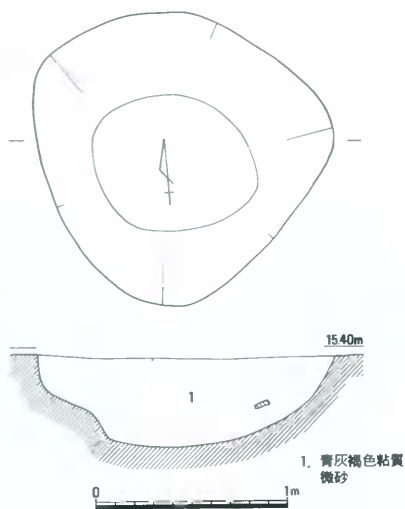
第99図 土壙40 (1/30)



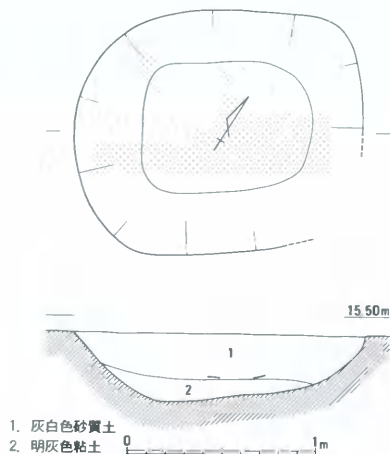
第100図 土壙39 (1/30)



第101図 土壙43 (1/30)



第102図 土坑27 (1/30)



第103図 土坑41 (1/30)

土坑40 (第99図)

第1調査区中央の西端に位置する。規模は、推定長径2.15m、短径1.6mの楕円形を呈し深さ35cmである。断面は、皿状をなし上層に灰白色粘質微砂土、下層に黒色粘質土が堆積している。

時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが、下層の黒色粘質土の埋土や位置から古墳時代後半の時期が考えられる。

土坑39 (第100図)

第1調査区東半の中央付近に位置する。規模は、直径90cmのはほぼ円形に近い形状を呈す。断面は、すり鉢状を呈し深さ14cmである。

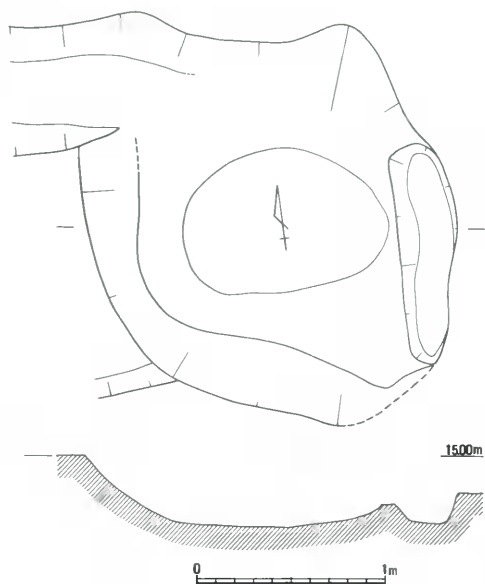
時期は、出土遺物が少なく確定し難いが、埋土や検出位置から中世であろう。

土坑43 (第101図)

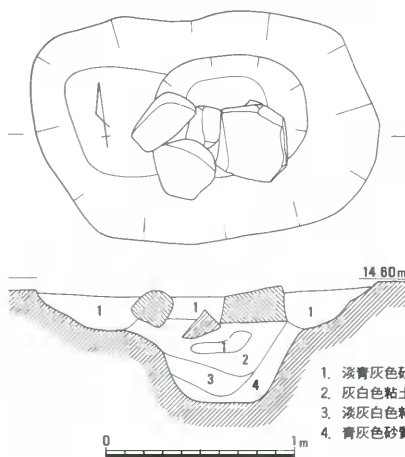
第1調査区の南西端に位置する。規模は長径1.24m、短径1.1mのはほぼ円形を呈し、深さ11cmである。底面は、若干凹凸があるもののはほぼ平坦で、皿状の断面を呈す。埋土は、淡灰色の粘質微砂土である。

出土遺物は、少量のため時期は確定し難いが埋土等から中世であろう。





第104 土壌36 (1/30)



第105図 土壌19 (1/30)

1. 淡青灰色砂質土
2. 灰白色粘土
3. 淡灰白色粘質微砂
4. 青灰色砂質土

土壌27 (第102図)

第1調査区北西端に位置する。規模は、直径1.6m、深さ50cmの不整形な形状を呈す。埋土は、青灰褐色の粘質微砂土である。

時期は、出土遺物が少なく確定し難いが埋土等から中世と考えられる。

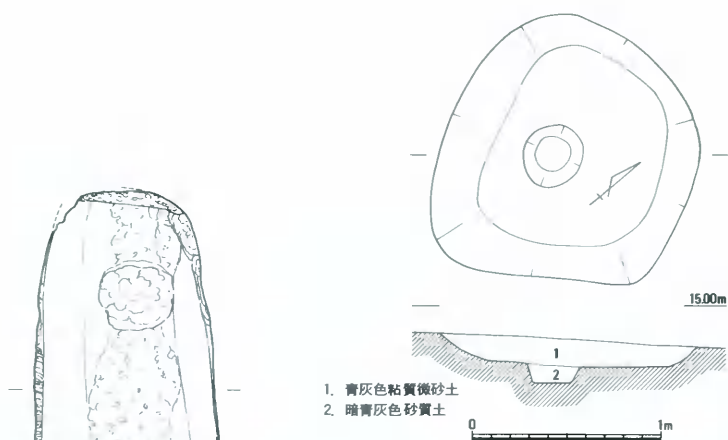
土壌41 (第103図)

第1調査区の東端の粘土採掘坑上面に検出した土壌である。規模は、長辺1.55m、短辺1.3mの隅丸長方形を呈す。掘り方は、皿状を呈し深さ40cmを測る。埋土は、上下二層に分かれ、上層に灰白色砂質土、下層に明灰色粘土が堆積している。

時期は、埋土や出土の土鍋等から中世と考えられる。

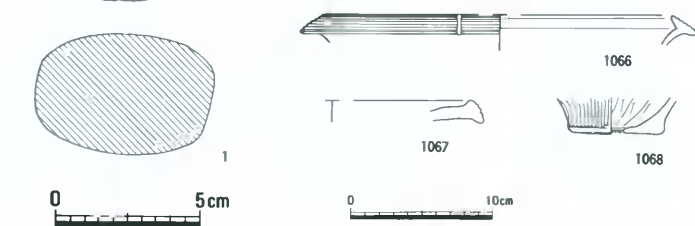
土壌36 (第104図)

第1調査区北東端に溝2と接合して検出した。規模は、直径2.0mの不整形な形状を呈す。断面は、すり鉢状を呈し深さ70cmを測る。掘り方の東



1. 青灰色粘質微砂土  
2. 暗青灰色砂質土

第106図 土壌33 (1/30)



第107図 土壌33 出土遺物 (1/2・1/4)

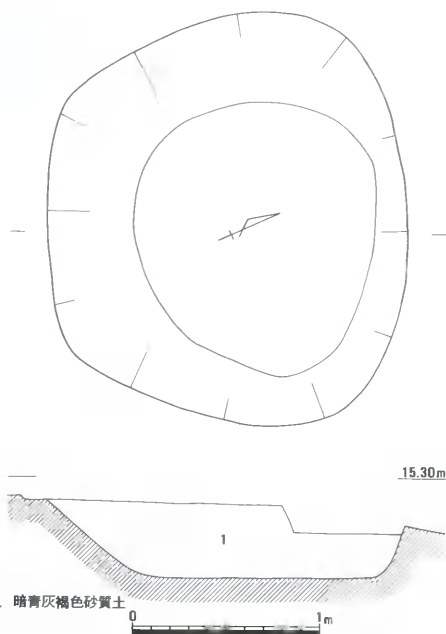
側の肩口に長径1.2m、短径35cm、深さ26cmの長楕円形のピットが掘られている。

出土遺物は細片が多く時期の確定に乏しいが、埋土や掘り方の位置から中世以降であろう。

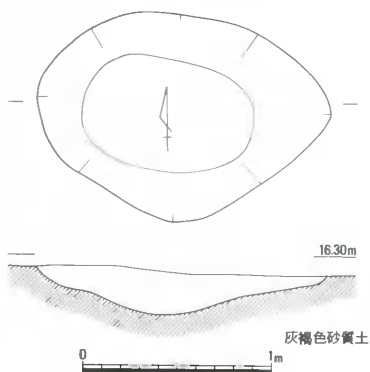
土壌19 (第105図)

第3調査区東端の粘土採掘場の上部に検出した。規模は、長径1.7m、短径1.2mの楕円形に近い形状を呈す。底面は、二段掘りとなっており西側の浅い場所で深さ20cm、中心部で深さ67cmを測る。二基の土壌が重複しているとも見受けられるが不明瞭である。土壌上面には、人頭大の礫が埋設していた。

時期については、位置や埋土の状況から中世以降と想定される。



第108図 土壌38 (1/30)



第109図 土壌52 (1/30)

土壌33 (第107図)

第2調査区東端に検出した長径1.4m、短径1.3m、深さ20cmの土壌である。底面のほぼ中央に直径35cm、深さ15cmのピットを有す。埋土は青灰色の粘質微砂土で柱穴内は暗青灰色の砂質土である。遺物は、弥生時代中期後半の土器567・568・569と磨製石斧が出土している。古手の遺物を出土しているものの埋土の状況や付近の土壌のあり方からいずれも混入とみられ、土壌の時期は中世以降であろう。

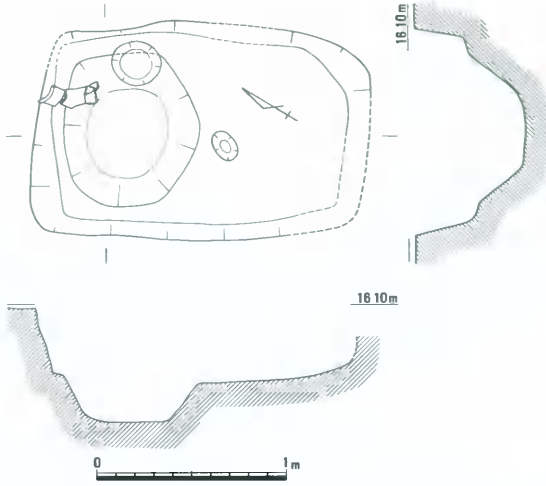
土壌38 (第108図)

第1調査区北東端に検出した長径2.25m、短径1.91m、深さ44cmの円形に近い形状をなす土壌である。底面は、ほぼ水平である。埋土は、暗青灰褐色の砂質土が堆積している。出土遺物は少量で時期は確定し難いが、位置や埋土の状況から中世と想定される。

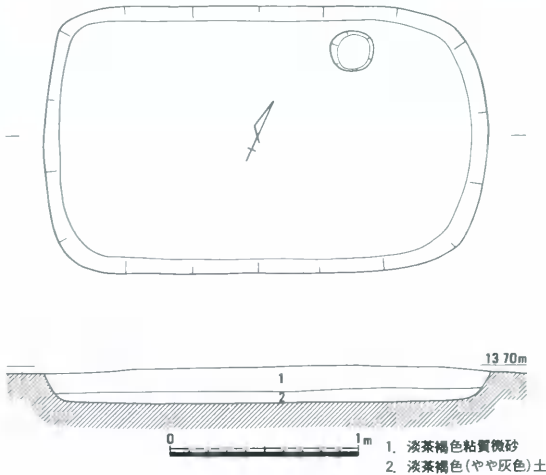
土壌52 (第109図)

第1調査区南西部の溝5の北端に位置する。規模は、長径1.6m、短径1.07mの楕円形の形状を呈し、深さ25cmである。掘り方断面は、レンズ状を呈し灰褐色の砂質土が堆

矢部奥田遺跡



第110図 土壙53 (1/30)



第111図 土壙14 (1/30)

1. 淡茶褐色粘質微砂
2. 淡茶褐色(やや灰色)土

積している。出土遺物に細片が多く図化できなかったが、埋土や検出位置等から中世の時期であろう。

土壌53 (第110図)

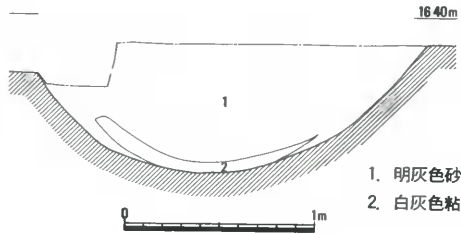
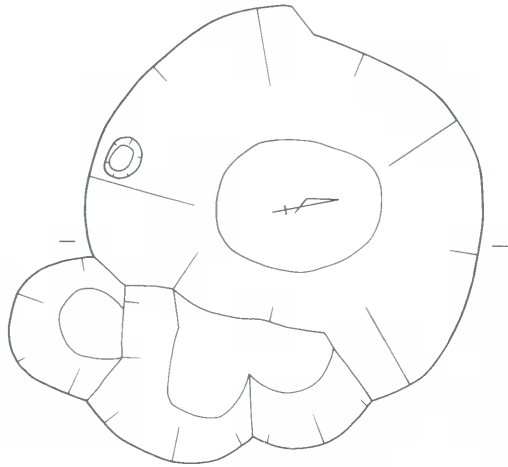
第1調査区南西に一部柱穴と重複して確認した土壌である。規模は、長辺1.8m、短辺1.2mの長方形を呈し、底面に長径80cm、短径70cmの楕円形の掘り方が北側にもう一段掘削されている。深さは、北側の最も深いところで60cm、南側の平坦部で40cmを測る。埋土は、黄色と黒色の粘土混じりの灰褐色粘質微砂土である。

出土遺物は、土壌内のやや上層より銅銭が6枚、北側の掘り方斜面から備前焼の甕と砥石が出土している。時期は、これらの出土遺物から判断すれば室町時代であろう。

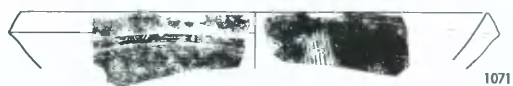
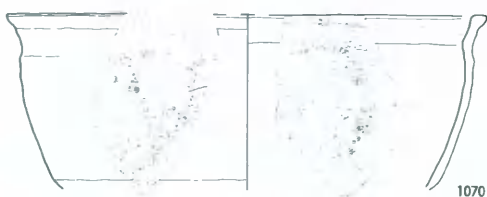
土壌14 (第111図)

第3調査区東半に検出した長辺2.35m、短辺1.46mの長方形の土壌で深さ20cmを測る。底面は、平坦で北端に上面からの掘り込みとみられる直径40cm、深さ25cmの柱穴を検出した。埋土は、上層が淡茶褐色の粘質微砂土、下層もほぼ同様で若干灰色が強い程度の土層である。

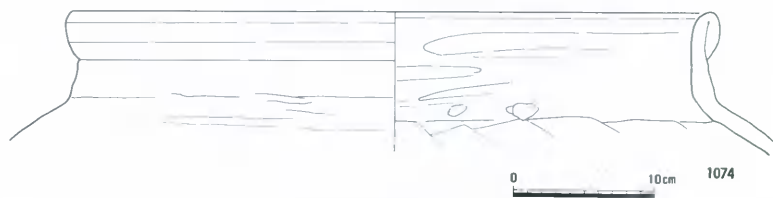
出土遺物が少量で時期は確定し難いが、埋土等から中世と考えられる。



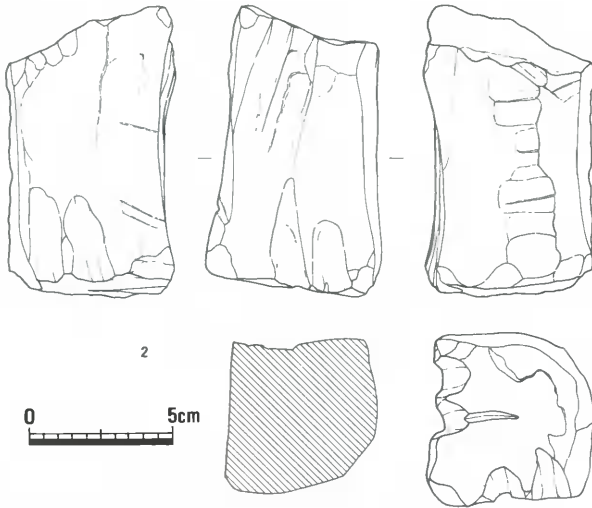
第112図 土壌51 (1/30)



第113図 土壙41 (1069・1070)・51 (1071~1073) 出土遺物



第114図 土壙53 出土遺物 (1)



第115図 土壙53 出土遺物（2）

土壙51（第112・113図）

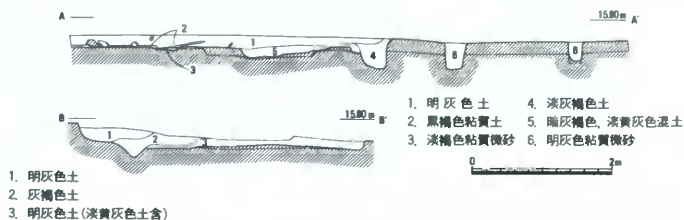
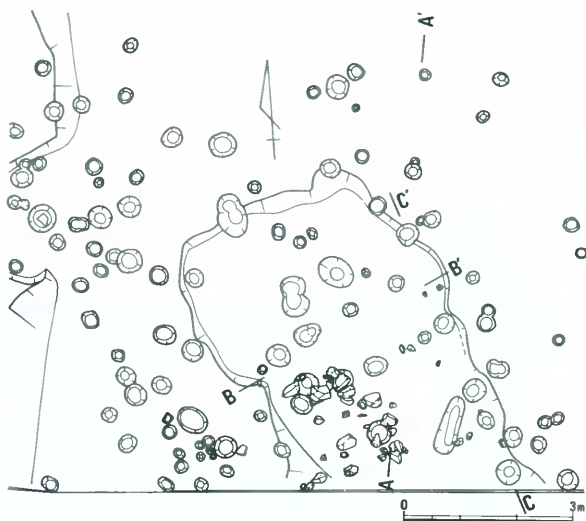
第1調査区の南西隅に他の土壙と一部重複して検出した土壙である。規模は、直径2.2m程の円形を呈す。掘り方は、摺り鉢状を呈し深さ70cmを測る。埋土は、主に明灰色の砂質土が占め、一部下層に白灰色の粘土が堆積している。

出土遺物は、土鍋と備前焼の摺り鉢片がある。時期は、古手の備前焼が出土しているが埋土の状況等から中世以降のものと見られる。

中世落ち込み（第116図、図版49-1）

第1調査区の南端に位置し、一部調査区外（保存区）に広がる。規模は現存長6.5m、最大幅4.4mを測り、調査区内では、長方形に近い不整形な形状を呈す。落ち込みの深さは、最も深い場所では45cm、平均20cm程である。埋土は、明灰色の粘質微砂土が大半を占める。当該遺構は、調査区南端の最も中世の柱穴が密集した地区に位置し、柱穴との重複や落ち込み内の埋土除去

矢部奥田遺跡



第116図 中世落ち込み・柱穴列1図 (1/80)



第117図 柱穴列1断面図 (1/80)



後に検出した柱穴も認められるが、落ち込みの長辺の方向が柱列1、2と同一方向であることなどから柱穴群と一時期共存していたものと見られる。時期は、出土遺物に細片が多く凶化できるものは無いものの埋土や切り合い等から中世のものと思われる。

### 柱穴列

#### 柱穴列1（第116・117図）

第1調査区南端の中世落ち込みの東側に沿って検出した。柱穴は、直径40cm前後、深さ最大91cmの大きさのものを計4本確認した。規模は、全長4.6m、柱間は北より1.7m、1.3m、1.6mを測る。方位は、N-20°-Wである。

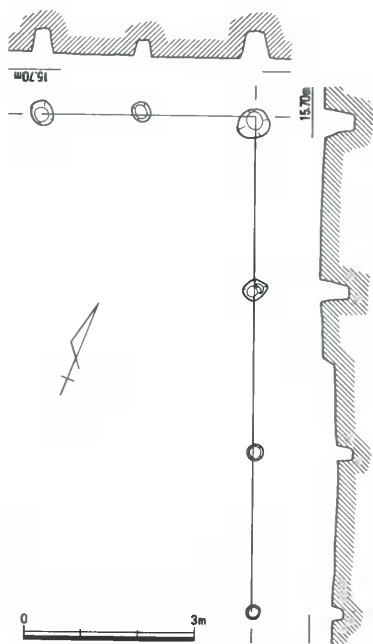
ただ南端は、調査区外の貝塚保存区にあたることと柱穴列付近が最も柱穴密度が高いことも加わり掘立柱建物のまともには確認できなかった。

柱穴内の遺物は、細片が多く時期の決定に乏しいが埋土や遺物などから中世の遺構であろう。

#### 柱穴列2（第118図）

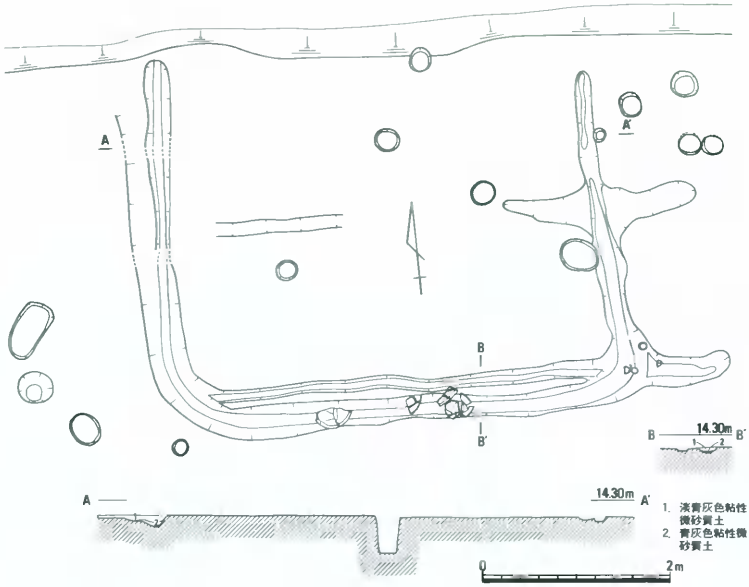
第1調査区の北西部にL字状に検出した柱列である。柱穴は、直径30～50cm、深さ17～48cmの大きさのものを計6本確認した。規模は、南北長8.6m、東西長3.8mである。柱間は、南北方向が3.0m、東西方向の東側が2.0m、西側がやや狭く1.8mである。掘立柱建物の可能性があるが他の柱穴については確認できなかった。南北の柱穴列方向は、N-20°-Wと柱穴列1と同一方向である。

柱穴内出土遺物は、細片が多く時期の決定には乏しいが埋土や検出位置から中世の遺構であろう。

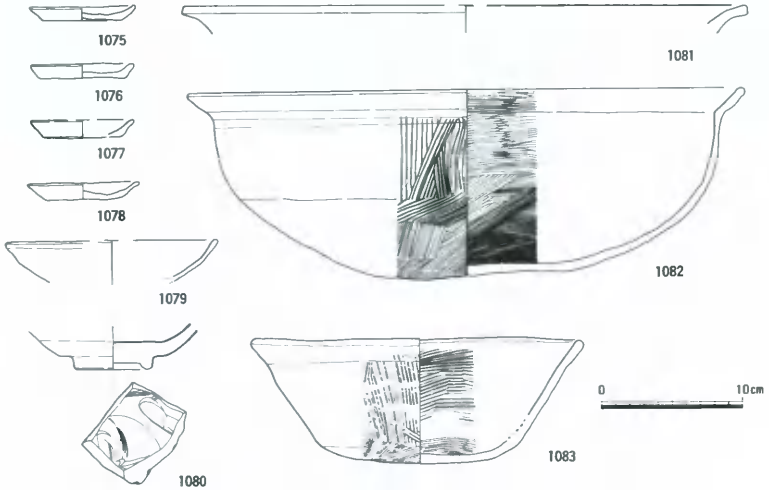


第118図 柱穴列2 (1/100)

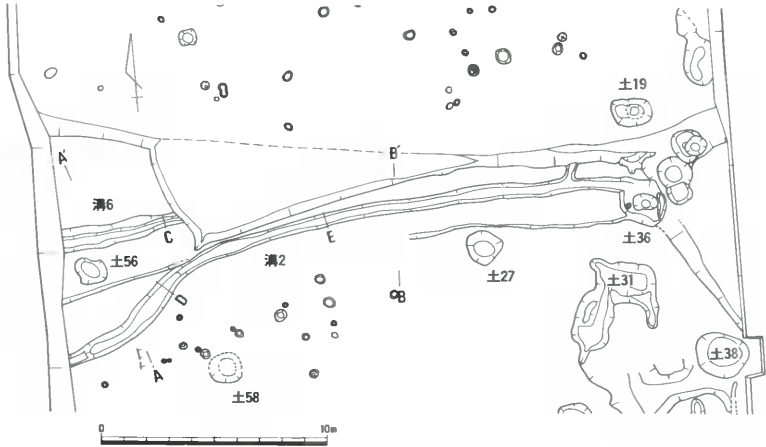
矢部奥田遺跡



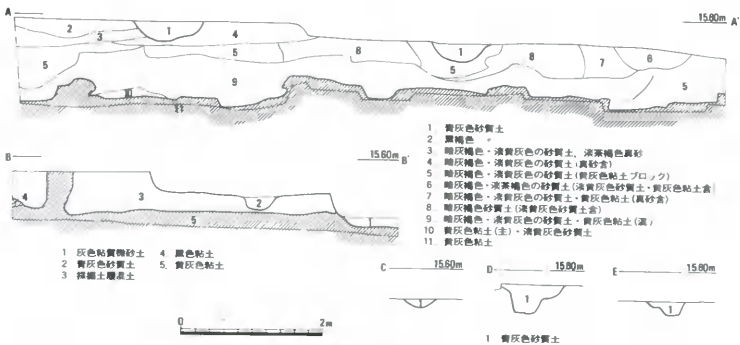
第119図 溝1 (1/60)



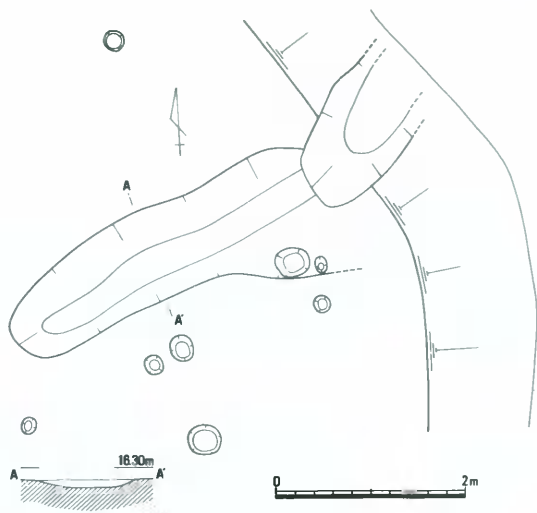
第120図 溝1 出土遺物



第121図 溝2・6及び周辺 平面図 (1/250)



第122図 溝2・6 断面図 (1/80)

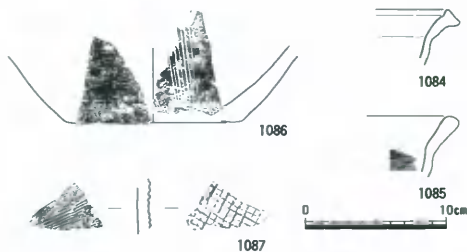


第123図 溝5 (1/60)

溝

溝1 (第119・120図、図版58-2)

第2調査区の東半に三本の溝が重複したものである。北端は水田造成により削平を受け不明瞭である。中心となる溝は、東西5m、南北4mを測るコ字形に巡るものである。溝幅は、平均して30cm、深さは最大12cm程と浅い。南辺には内側にはほぼ平行して現存長5.6m、幅1.5cm、



第124図 溝5 出土遺物

深さ5cm程の溝が掘削されている。この溝も、南西隅で同様に北側に屈曲して西側の幅がやや広く二段掘り、もしくはテラス状を呈している場所に重複しながら続くものと見られる。さらに東端も若干北側に曲がり気味であることから、おそらく東西幅6.2m程、

南北現存長3.6mのコ字に巡る溝がもう一区画重複していたものと考えられる。

これらの区画溝を横断する東西溝をほぼ中央で検出している。この溝は、途切れ残りが悪いが現存長3.4m、幅15～30cm、深さ1～2cm程の浅いものである。

いずれの溝も埋土は、上層が淡青灰色、下層が青灰色の粘質微砂土が堆積している。各々の溝の新旧については確認できていない。

出土遺物は、コ字形溝の南辺から土鍋、小皿、青磁片等が出土している。時期は、埋土や出土遺物から中世前半期と考えられる。

#### 溝2（第121・122図）

第1調査区の東端に調査区を横断するように検出した。西端は、用地外に続き、東端は直進し土壌36と接合し終了するものと途中で北側に枝分かれしたものとがある。規模は、現存長27m、最大幅1mを測る。断面は、U字形の形状を呈し、一部で二段掘りのところも見られる。底部は、東端で長さ5.5mにわたり一段深く掘り下げられているが、全体では東に向かって下がっており東端で48cm低下している。埋土は、灰茶褐色の粘質微砂土である。

時期は、出土遺物に細片が多く不明瞭であるが埋土や検出位置などから中世以降であろう。

#### 溝3（第94図）

第1調査区の北東に検出した。規模は、現存長8.1m、最大幅45cmでL字状に屈折し東端は用地外である。断面はレンズ状を呈し、最大深さ9cmである。埋土は、暗青灰色の粘質微砂土が堆積している。溝は東に向かって傾斜し東端で10cm低下している。

出土遺物は、細片が多く時期決定に乏しいが遺物や古墳時代後半の土壌34を切っていること等から中世以降であろう。

#### 溝4（第94図）

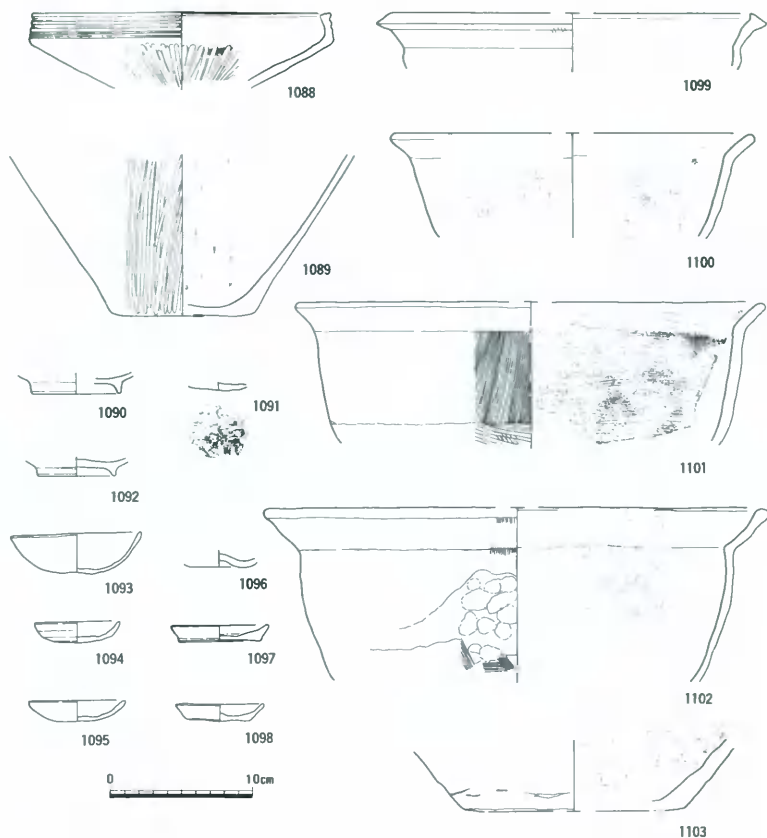
第1調査区北東端の土壌34の上面に位置する。規模は、現存長3.7m、最大幅35cmで緩くカーブしながら用地外に向かっている。掘り方断面は、U字形を呈し最大深さ8cmである。埋土は、明灰色の粘質微砂土である。

時期は、出土遺物が少量のため決め難いが埋土や遺構の切り合いから中世以降であろう。

#### 溝5（第123・124図）

第1調査区の西半に位置し、東端は水田造成により削平を受けている。規模は、現存長4.8m、平均幅1mを測る。当該溝は、東端でやや向きを変え、底部レベルも大きく変わっており二本の溝の重複の可能性も考えられるが、東端が削平を受けていることもあり不明瞭である。掘り方断面は、レンズ状を呈し西端から東端までで50cmレベルが低下している。埋土は、灰褐色の砂質土である。出土遺物は、備前焼のすり鉢、亀山焼、土鍋等であり、室町時代前半の時期であろう。

矢部奥田遺跡



第125図 柱穴出土遺物

溝6 (第121・122図)

第1調査区北西隅に検出した。溝は、西端が用地外に、東端が近世水田の造成により削平を受けている。規模は、現存長5.5m、最大幅1.0mを測る。掘り方断面は、レンズ状をなしており、最大深さ20cmである。埋土は、灰茶褐色の粘質微砂土である。

出土遺物は、細片が多く時期決定に乏しいが埋土や遺物から中世であろう。

## 第4節 その他の遺構と遺物

### 谷（第5調査区）の層序

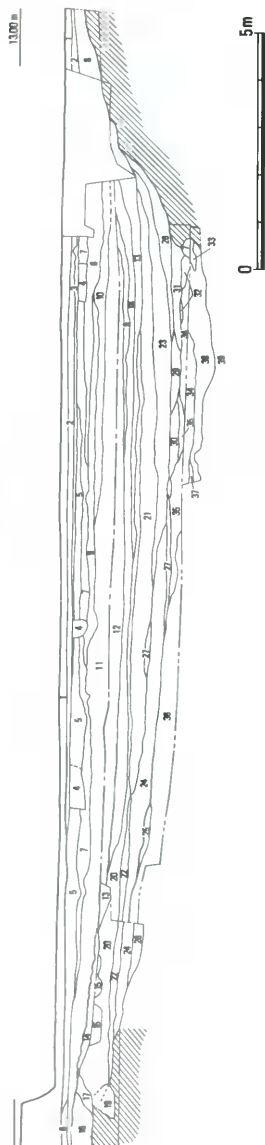
調査対象区の北端に位置する。第一次の確認調査の結果からは、当該区は遺構の存在は薄いものの南側の台地上から流入した遺物の包含層の堆積が一部に認められる谷の状況が把握されていた。

当調査区の第二次調査着手時には圃場整備により周辺に盛り土がなされており、この調査区のみが旧地形で残り谷底の状況を呈し常時滞水状態をなし、さらに降雨となれば周田より流入し池を呈していた。

このような状況から早急な調査が必要であったことや排土がかなりの量にのぼることが予想されたため、調査区の西半部を重機を使用した掘削を行い、土層断面観察による堆積状況の把握に主眼を置く調査方法をとった。

第126図の土層断面図は、調査区の西壁を図示したもので最大幅19m程の谷の中央部であることが認められた。西壁断面を基に地形図や周辺の踏査の結果から検討を加えてみると、第5調査区の地形は当該遺跡の立地する舌状の台地の西端を巡る谷と上池、下池の所在する谷の合流地点に当たっており、当断面位置は北側に谷の肩口が認められることから合流地点の若干西側の谷の入口付近の堆積状況を示している。

谷の堆積層は、南北の肩口に当たる第6、8層に中世土器を包含しており、谷の中心部の第7、9層付近までが中世の堆積層と考えられる。以下、谷の中央部では堆積層中に土器がほとんど認められず、出土遺物は大半が南側の調査区からの斜面への堆積である。第20層は、古墳時代初頭の遺物包含層である。第24、28層からは、弥生時代中期後半から後期の土器が出土し



第126図 第5調査区谷断面図 (1/120)

- |               |                   |                          |
|---------------|-------------------|--------------------------|
| 1. 黄土         | 14. 黒茶褐色・黒色混土粘質微砂 | 27. 灰褐色砂混粘質土(木質)         |
| 2. 灰青色砂質土     | 15. 灰茶褐色砂質土       | 28. 濃灰色粘質土(木質)           |
| 3. 灰白色土       | 16. 黒褐色粘質微砂(土塊)   | 29. 白灰色粗砂(木質)            |
| 4. 暗黄         | 17. 黄色・灰色・青灰色混土   | 30. 灰青色粗砂・微砂混(木質)        |
| 5. 暗灰色粘質微砂    | 18. 黒灰褐色粘質微砂      | 31. 濃灰色粘質土(木質)           |
| 6. 灰褐色砂質土     | 19. 濃灰色・灰白色混土(土塊) | 32. 粗砂                   |
| 7. 灰色粘質微砂     | 20. 灰黒色・青灰色粘質混土   | 33. 暗茶褐色粘質微砂(木質)         |
| 8. 青灰～暗灰色粘質微砂 | 21. 黒灰色粘質土        | 34. 青灰色粘質微砂              |
| 9. 黒灰色粘質微砂    | 22. 淡灰茶白色砂質土      | 35. 灰色粗砂(木質)             |
| 10. 黒褐色粘質微砂   | 23. 黒褐色粘質土(木質)    | 36. 淡青灰色粘質微砂(グライ化)       |
| 11. 黒茶褐色粘質土   | 24. 濃灰色粘質土        | 37. 砂と灰褐色粘土混土            |
| 12. 黒褐色粘質土    | 25. 濃灰褐色粘質微砂土     | 38. 灰褐色細砂・粗砂(互層)(種子・植物質) |
| 13. 黒色粘質微砂    | 26. 茶褐色粘質微砂土(木質)  | 39. 黒灰色粘土層(木質)           |

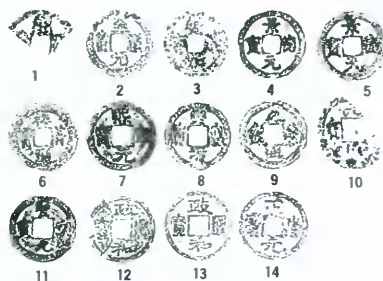
ている。これらの堆積層から下層は、谷の中心部が北端に寄って形成され、木質や植物質を含む粘質土と砂層の互層の堆積が続き、さらに下部に木質を含む黒灰色の粘土層が認められたが縄文土器の出土は認められなかった。

### その他の出土遺物

#### 銅銭 (第127図、図版90-2)

総数14点が出土し、そのうち判読可能であったものは13点であった。出土場所は1区南半区に検出した中世の土壌53から6枚まとまっており、その他では第1調査区に集中して検出した中世の柱穴と包含層からのものである。

種類は北宋銭が大半を占め、他に土壌53中の1点に金の正隆元寶(初铸1158年)が出土



第127図 出土銅銭 (1/2)

表1 銅 銭 一 覧 表

番号	出土地区	遺構	重量(g)	種類	初 铸	番号	出土地区	遺構	重量(g)	種類	初 铸
YBO-26	1区、西南端	Pit 180	1.3			YBO-31	1区西、南	±53	2.8	熙寧元寶	西暦1,068年
YBO-35	1区西、南	±53	3.2	至道元寶	西暦 995年	YBO-32	1区西、南	±53	3.3	元豊通寶	西暦1,078年
YBO-25	1区、西南端	Pit 180	2.7	咸平元寶	西暦 999年	YBO-28	1区、西(南端)	Pit 208	2.3	元豊通寶 元祐通寶	西暦1,078年 西暦1,093年
YBO-27	1区、東南端	Pit 193	3.3	景徳元寶	西暦1,005年	YBO-24	1区、西南端	Pit 184	3.4	聖宋元寶	西暦1,101年
YBO-21	1区、西南端	Pit 131	2.5	景徳元寶	西暦1,005年	YBO-23	1区、西南端	Pit 171	2.1	政和通寶	西暦1,111年
YBO-33	1区西、南	±53	3.3	祥符通寶	西暦1,009年	YBO-30	1区、西	±53	2.9	政和通寶	西暦1,111年
YBO-22	1区、西南端	Pit 144	3.1	熙寧元寶	西暦1,068年	YBO-34	1区西、南	±53	3.7	正隆元寶	西暦1,158年



している。

## 石器

矢部奥田遺跡からは、総数542点の石器が出土しており、その内訳は表2に示す通りである。すべてを図示し得なかったが、図示したものについて若干の説明を加えていきたい。

### 石鏃 (第128図3～7)

3と7は三角形を呈し、基部が直線的なⅠ<sup>a</sup>類<sup>(註1)</sup>で、7は大型のものである。4～6は三角形で基部が内湾するⅡ類である。4は基部が僅かに内湾するⅡ<sup>a</sup>類、5、6は基部が大きく内湾するⅡ<sup>b</sup>類にあたる。6はやや大型で風化が進んでいる。

3、4、5は調整がほぼ全面に及ぶが、5と7は周縁にのみ加工を施す。7の裏面には基部調整が見られない。

### 石槍状石器 (第128図8)

基部のみ残存し、基端は敲打によって潰している。表裏共に、周縁加工を施したものと思われる。

### 磨製石剣 (第128図9)

9はサヌカイト製の磨製石剣と思われる。表裏面中央部には、研磨が及ばず剝離面が残存する部分も多い。先端は丸く仕上げしており、全面に研磨時の粗い擦痕が残る。

### 楔形石器 (第128図10)

平坦面を打面とするⅡ類に属し、自然面を打面としている。相対する一辺には、階段状の剝離痕が見られる。縦断面はやや凸レンズ状を呈し、Ⅰ類に類似する。

### 磨製石庖丁 (第128図11)

本遺跡からは1点のみ出土している。緑色片岩製で、1/2弱欠損している。長さ比べ身幅の比率が小さく、また刃部がやや内湾することから、刃部を再生し、そのため幅も狭くなったものと思われる。現存部では2孔が確認できる。

### 打製石庖丁 (第128図12～14、第129図15～18)

すべてサヌカイト製で、側縁が残存するものについてはすべて抉りが施されている。

12、15は小型ではあるが、背部の敲き潰しが

表2 出土石器一覧表

石 鏃	76(7?)	U. F.	81
石鏃未製品	10(3?)	石器片	78
石 錐	6(2?)	不明石器	33
石槍状石器	4(2?)	磨製石斧	9
磨製石庖丁	1	砥 石	8
打製石庖丁	19	石 錘	5
スクレイパー	94	凹 石	2
楔形石器	22(7?)	敲 石	12
石 核	24(5?)	敲石&磨石	5
磨製石剣	1	打製石鏃	1
R. F.	51		

顕著である。16、18には使用による磨耗痕がみられ、特に18には刃部付近に光沢が認められる。

スクレイパー（第129図19～22、第130図23～26）

19～22は両面加工の刃部を持つⅠ類に属する。20は背部に調整を施さないⅠa類で、残核を転用したものと思われる。19、21は背部を加工するⅠb類にあたるが、21は両側縁に抉りを施し、つまみ状の頭部を作出している。近年、百間川遺跡群沢田遺跡で、縄文時代後期の土器に伴って類似品が出土しており<sup>(註2)</sup>、石匙、あるいは他の定形化した石器として分類できる可能性がある。

23～26は、刃部を片面加工し背部調整を施さないⅡa類である。片面加工のため刃部の角度は比較的急斜であり、とりわけ23は刃部角が大きい。

石核（第130図27）

剥片剥離が全面に及び、石核素材の主要剥離面は残存していない。右側縁には自然面が残置され、自然面を打面とした剥片剥離痕もみとめられる。剥片剥離は一定方向からのみの連続的なものではなく、やや不定方向から行なっている。

磨製石斧（第131図28～34）

28は定角式石斧である。石斧主面に対する基端面と側面の稜は共に明瞭である。表面はやや丸味を持つが、裏面は直線的で、研磨が及ばず凹部が部分的に残る。

乳棒状石斧29、30は、基部が小さく収束し、やや面を持つ。27は側面の稜が比較的明瞭である。

31は太型蛤刃石斧である。基部片で裏面も大きく欠くが、基端は明瞭な面を持ち、残存部から推定して厚手の石斧と思われ、弥生時代に属するものと考えられる。

32は磨製石斧の基部片で、やや薄手である。

33は蛤刃石斧と思われる。刃部は欠損後、敲打により潰れている。裏面は入念に研磨され、偏平な面が形成されており、裏面以外には、敲打痕が部分的に残存する。弥生時代の太型蛤刃石斧とは異なり偏平で、縄文時代に属する可能性が高いのではないかとと思われる。

34は裏面が平坦で、中央付近に着柄のための凹部を作出している。風化が進んでおり調整は不明瞭ではあるが、凹部は敲打により形成されているものと思われる。凹部の断面は裏面が平坦で側縁がややふくらんだカマボコ形に近い形態を呈するが、凹部から刃部よりの断面は三角形に近い。裏面は、刃縁付近で僅かに刃面を作出している。包含層出土のため時期は限定できないが、形態的には丸ノミ形石斧に近いものではないかと思われる。

砥石（第132図35～39）

35、36、39は小、中型のもので、キメが細かく、各面はよく使用されている。37はキメの粗

い砂岩製で、粗砥と思われる。38は、側面は全く使用されていないが、表裏面の使用頻度は高い。

石錘（第132図40～42）

すべて打ち欠きの石錘で、40、41は長軸方向に打ち欠くⅠ類、42は短軸方向に打ち欠くⅡ類であり、いずれも薄手の河原石を利用しており、縄文時代に属するものと考えられる。

凹石（第133図43、44）

43は凹部が表裏でややズレているが、一対存在する。表裏面は磨石としても使用され、面が形成されている。周囲には部分的に敲打痕がみられる。44は、平面の大きさに比べ、厚みのあるもので、表裏に一対の凹みを持つが、裏面の凹みは浅く敲打痕跡が残る程度である。左側縁と上端に敲打痕がみられる。

敲石（第133図45～47）

すべて円形や楕円形の河原石を利用したⅠ類である。45は敲石に通常みられる細かい敲打痕ではなく、粗い敲打痕が残り、敲打する対称物の違いを感じさせる。46は円礫の一部を打ち欠き、残存する周縁部を敲打に使用したものである。47は、磨石を転用して敲石としたものである。裏面と側面は、磨痕により若干面を持つ。表面の敲打痕には、線状のものが認められる。

（平井典子）

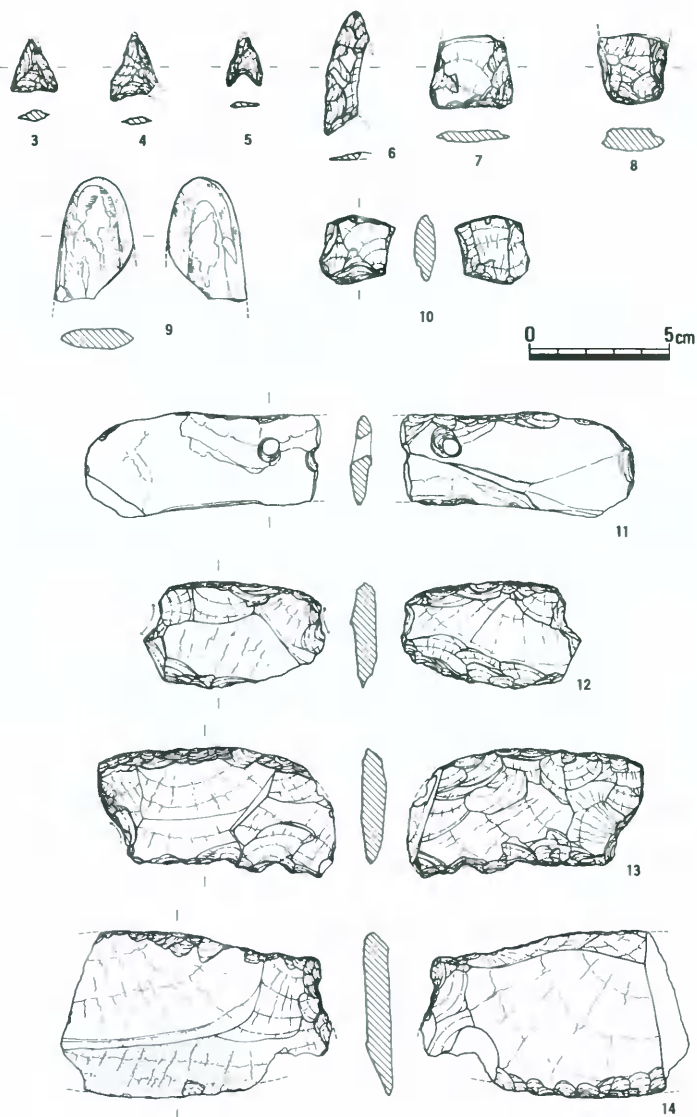
註

註1 各石器の形態分類は、「山陽自動車道建設に伴う発掘調査5」の分類基準に準ずる。

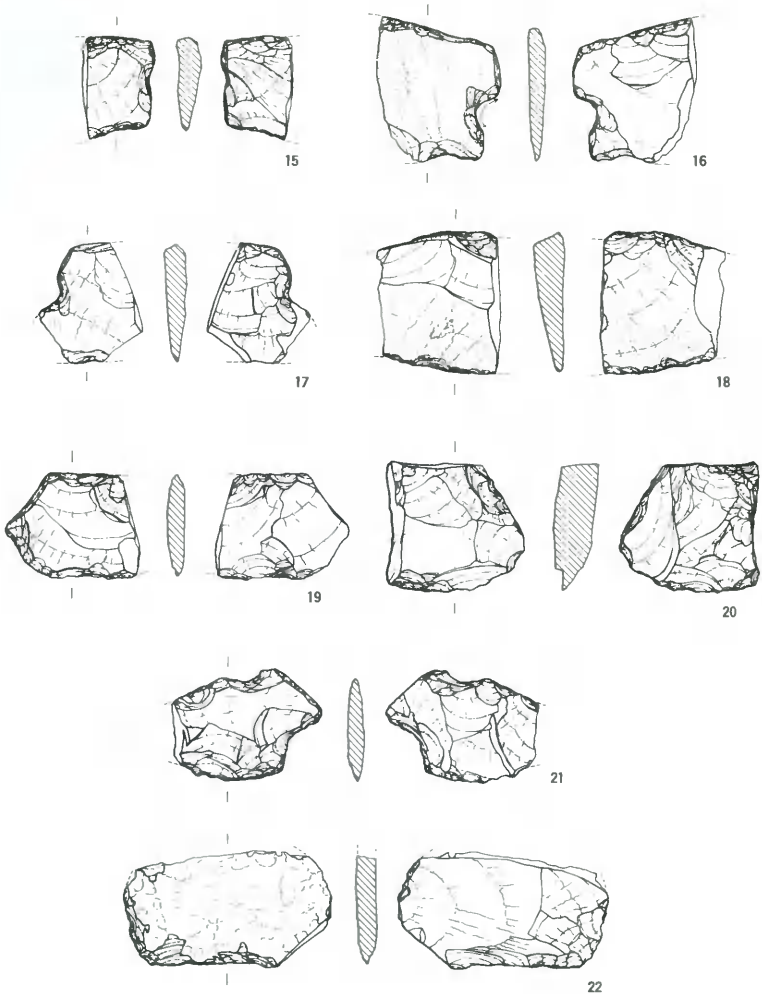
註2 本報告書とはほぼ同時期に刊行予定の「百間川遺跡群沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』

84に収録

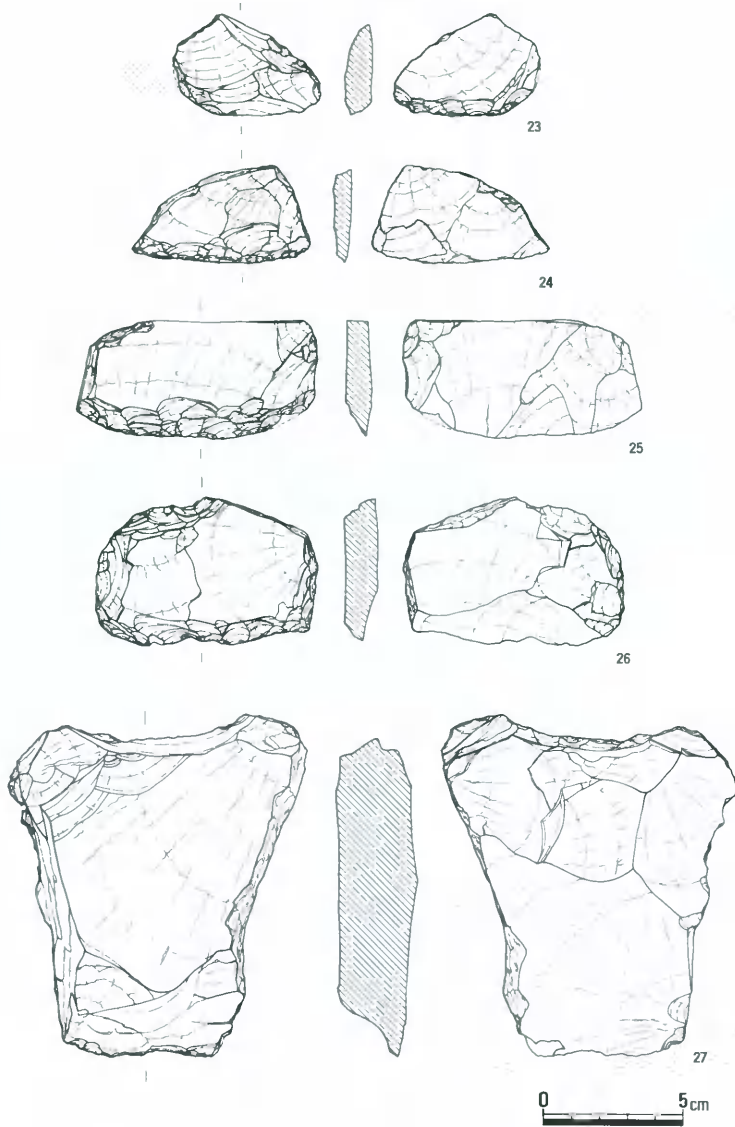
矢部奥田遺跡



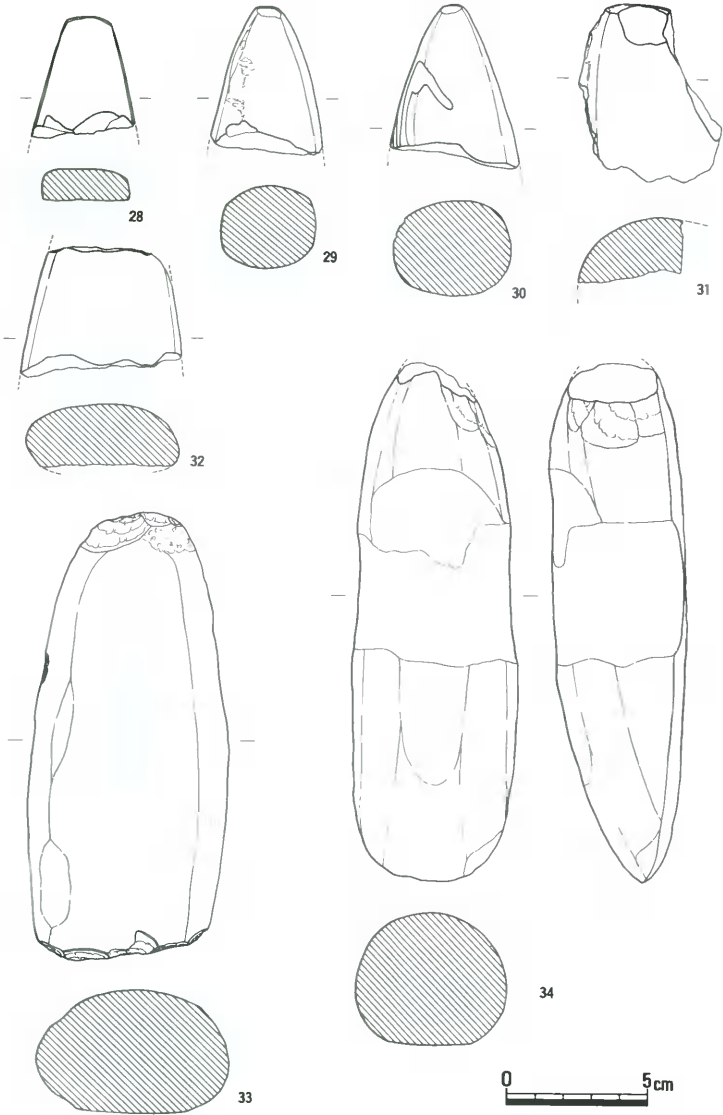
第128図 石鏃・石剣・楔形石器・石庖丁 (1/2)



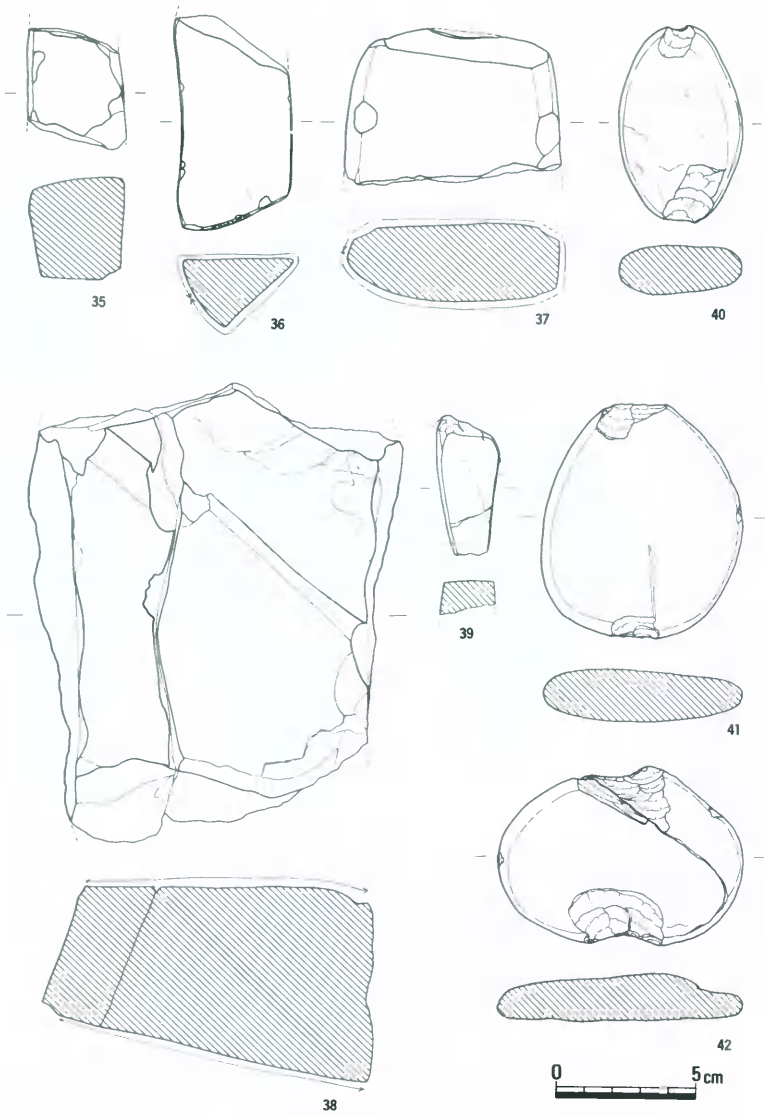
第129図 石庖丁・スクレイパーI類・石核 (1/2)



第130図 スクレイパーⅡ類・石核 (1/2)

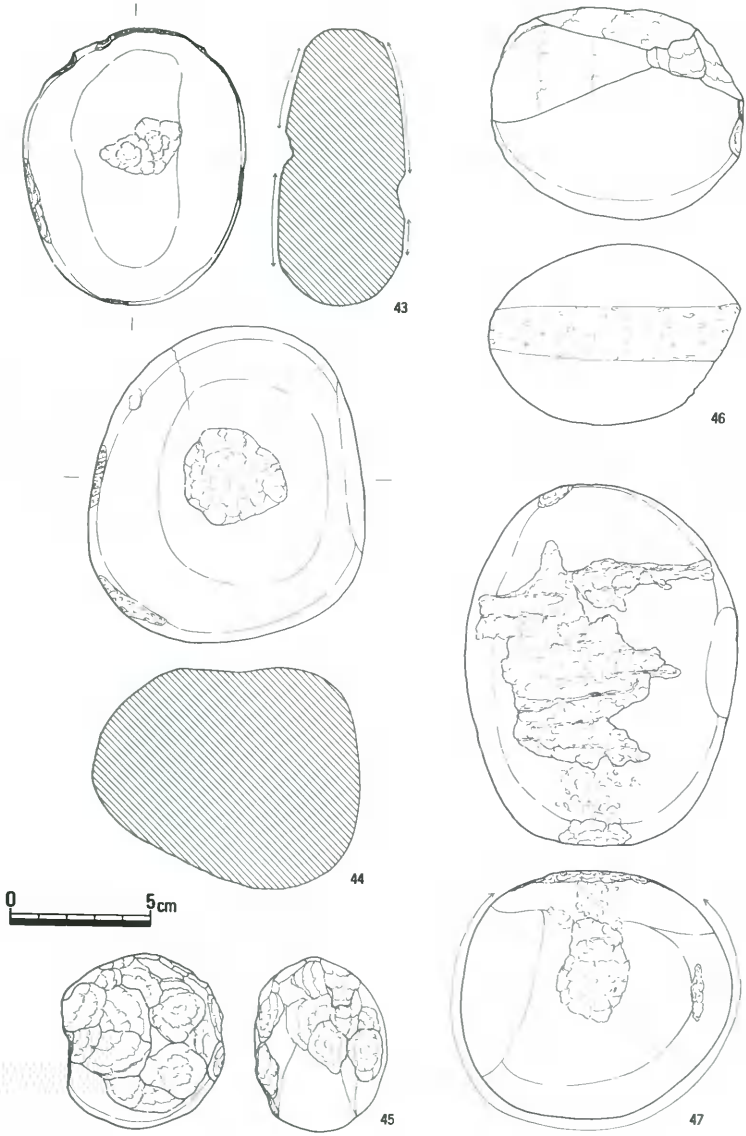


第131図 磨製石斧 (1/2)



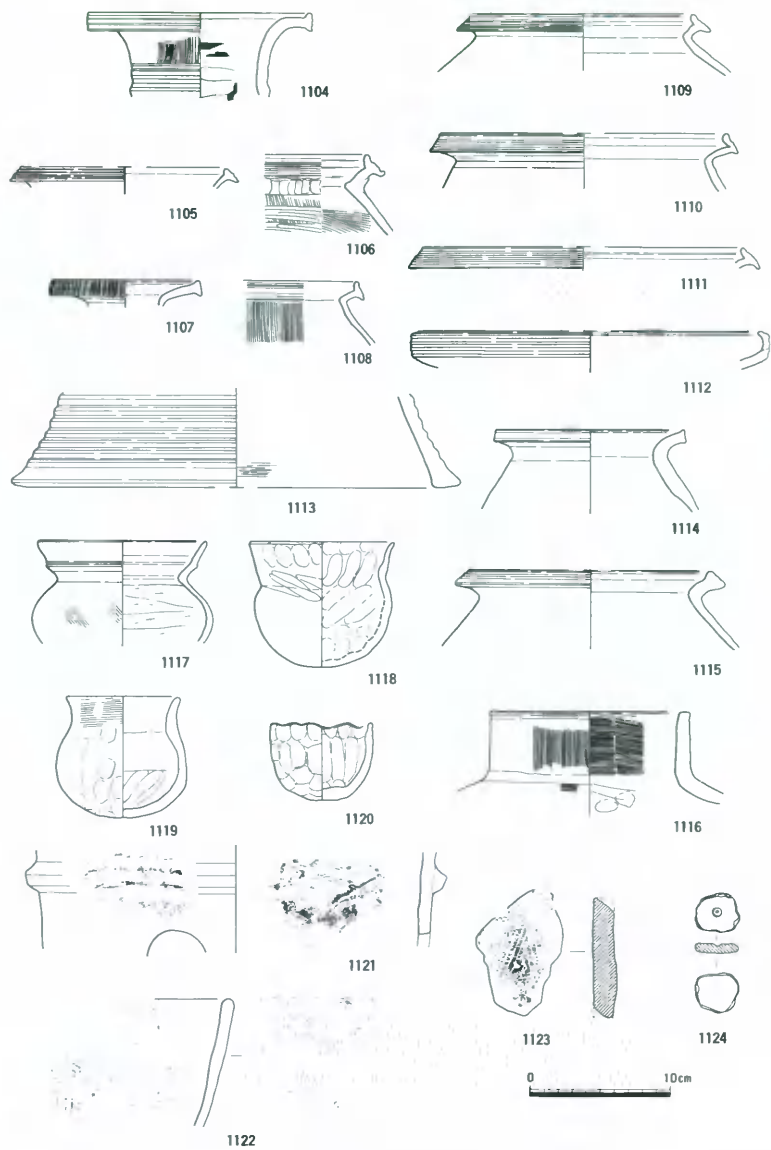
第132図 砥石・石錘 (1/2)



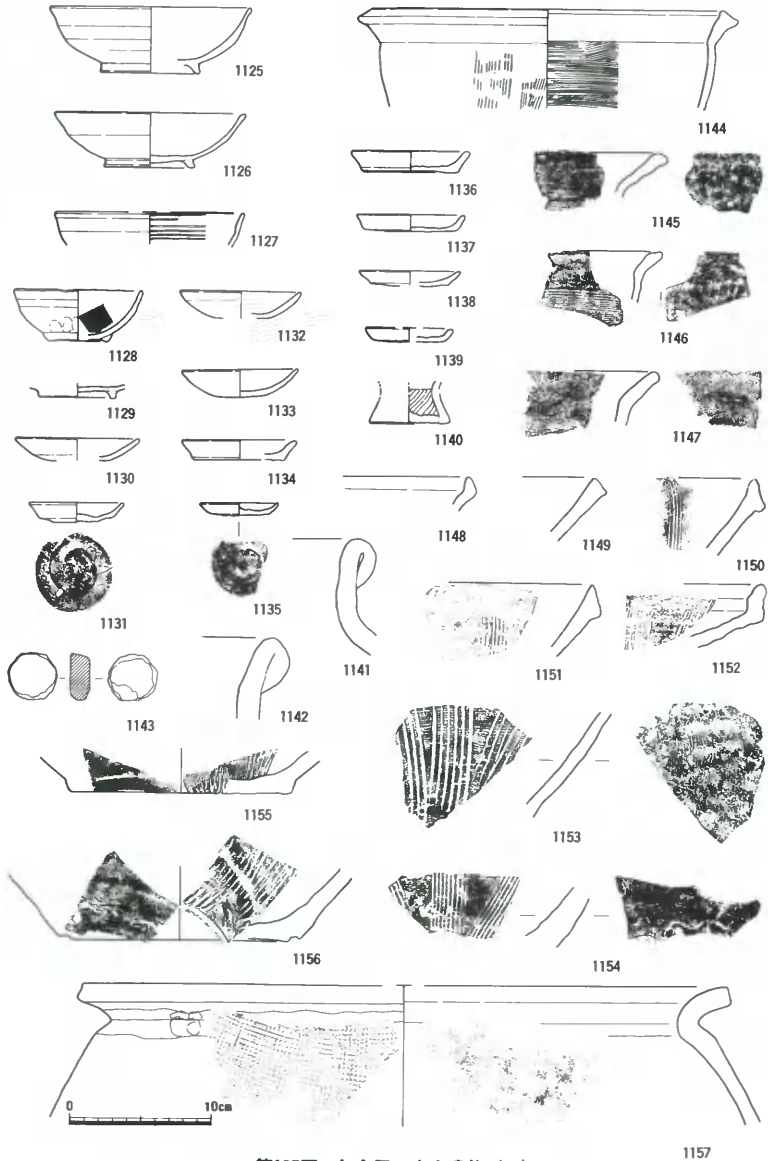


第133図 敲石・凹石 (1/2)

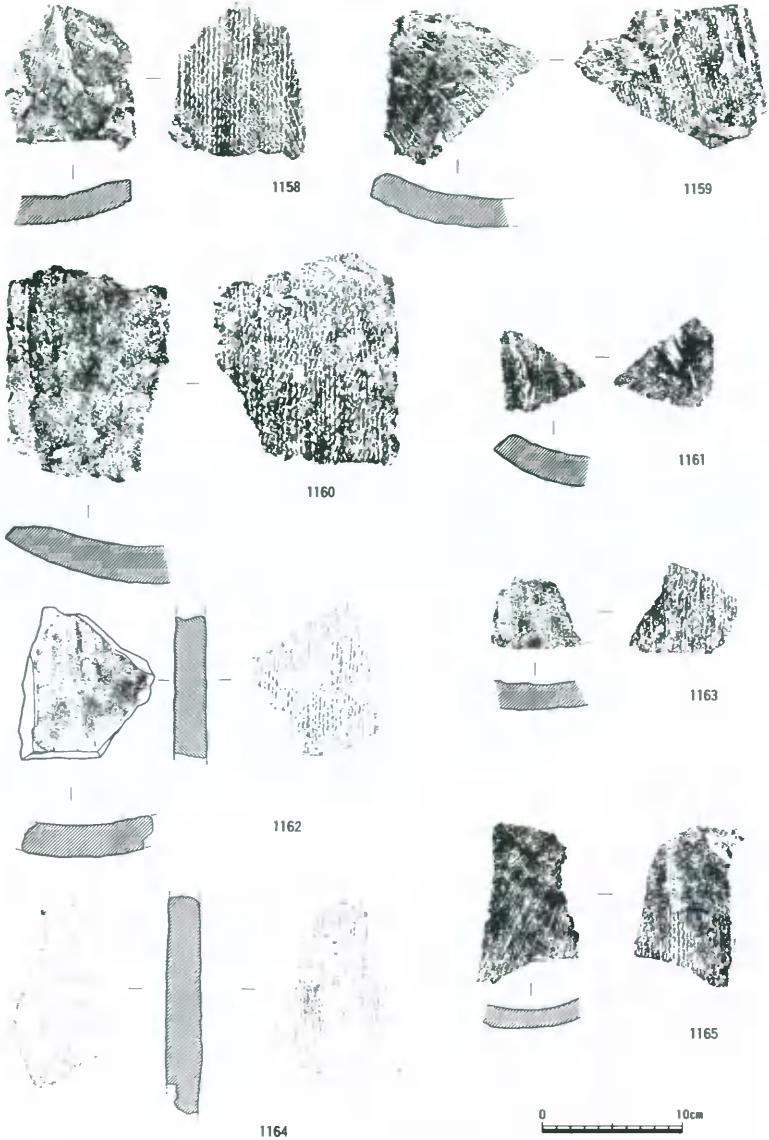
矢部奥田遺跡



第134図 包含層 出土遺物(1)

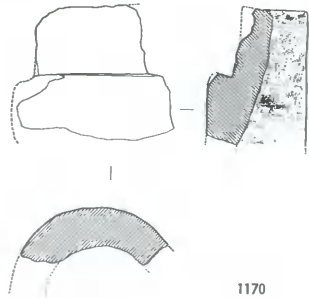
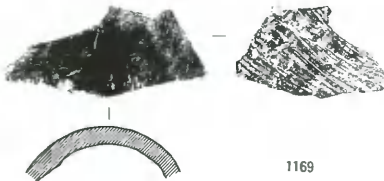
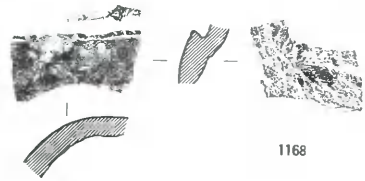
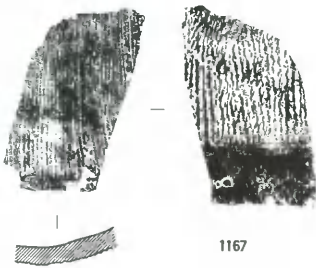
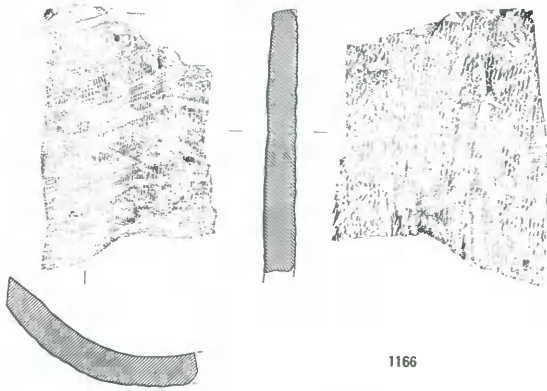


第135図 包含層 出土遺物(2)



第136図 包含層 出土遺物 (3)

矢部奥田遺跡



第137図 包含層 出土遺物 (4)

### 第3章 まとめ

矢部奥田遺跡（矢部貝塚の一部を含む）は、総面積2,800㎡の発掘調査を行った結果、縄文時代から中世及び近世にかけての複合遺跡であることが判明した。このうち当遺跡を構成する主要遺構である縄文時代と古墳時代前半の遺構について概要を記述してまとめに代えたい。

#### 縄文時代の遺構について

この期の主要遺構は、矢部貝塚である。当貝塚は、足守川流域の縄文時代の貝塚としては最深部に位置し、古くからその存在が周知されていたものである。ただ貝塚本体が水田下に埋没していたため、長期間にわたり正確な位置が不明瞭であったものが、この度の第一次の確認調査により路線内にその主要部が所在していることが確認された。その後、貝塚本体については、保存協議により設計変更がなされ現状保存となったため、第一次の確認調査によるトレンチと全面調査時に保存区域外に若干広がりが見られた部分の調査を行ったにすぎない。

調査の結果貝塚は、海拔15m程度の舌状台地の南側斜面に形成されており、路線内で南北最大幅30m程の広がりが見られる。東西長は15mを測り、さらに東側の路線外の水田の下に広がっていくものと見られる。

貝塚の堆積は、調査が行えた肩口から3m付近までは間層は認められず、貝を主体とする粘土層で形成されており、最大で厚さ1mの貝層を確認している。貝は、ヤマトシジミが90%以上の数量を占め、そのほかではマガキ、ハイガイ、カワアイ等の種類で構成されていることから淡水域のせい息のあり方を示している。魚類ではスズキが大半を占めて、大型獣では鹿と猪、中型獣ではタヌキ、アナグマ等の動物捕獲が行われている。なお、人骨片も採集されていることから埋葬遺構も考えられる。

このような貝塚出土の多くの動物遺存体の本格的な分析は、県下では始めてであり当時の狩猟採集の実態が把握されるとともに、貝塚遺跡の重要性が改めて認識されたものと考えられる。

その他の縄文時代の遺構は、調査区中央付近で2基の不定形な土壙と舌状台地の北側の斜面に遺物包含層を確認している。さらに貝塚近くの土壙1、2も出土遺物は無かったもののこの時代の可能性がある。ただ貝塚形成期の居住区域と考えられる台地中央部が後世の大規模な粘土採掘によって掘削されているため、住居の遺構は確認できず、貝塚以外の大半の出土遺物も採掘土壌中の二次的な埋土中からのものであったことが惜しまれる。

縄文土器の時期については、遺物整理中に一点早期の土器片を確認している以外は縄文時代中期後半から後期前半に相当し、この間に貝塚も形成されている。

#### 古墳時代前半期の遺構について

この時期の遺構が当遺跡で最も大規模でしかも密度の高いものである。その大半を占めるものが粘土の採掘跡の遺構である。採取粘土は、主に漆黒色の良質なものを選んでいる。遺構の残りが良好であった調査区南半では、粘土採掘の一回の単位が直径1～2mの不整形な掘り方を基準としていることが判明し、このような土壌が間隔を置かず連続して掘削された結果がほぼ全面に及んだ採掘跡の状態である。なお、この調査区を斜めに横断する2本の溝状の未採掘部分は、採掘以前に台地上を流れた自然流路により粘土層が流失していたため、採掘されなかった場所である。このように調査区南半では、漆黒色の粘土の広がり認められた場所は余すところなく採取してしまった状況である。

調査区北半部では、遺構の残りが悪く不明瞭な部分が多いものの南半部と同様に漆黒色の粘土を目的とした採掘が行われていたようである。ただ、北西部については、漆黒色粘土層直下の黄灰色の粘土についても一部採取を行っている。また、これらの採掘跡と重複するように直径2m程度の大型の土壌が集中して認められる。大型の土壌は、一見すると粘土採掘の一回の採掘坑の状況を呈しているが掘り込みが採取目的の粘土層よりかなり深く、やや性格を異にする土壌と考えられる。しかし、土壌内の埋土の状況や出土遺物等は、採掘坑と同様のあり方を示しており粘土採掘に何らかの関連のある土壌群と考えられる。

県下では、このように大規模な粘土採掘の遺構の調査例は無く、遺跡の地理的な考察を始め、粘土の胎土分析、放射性炭素年代測定、土器の試作、粘土の採取保存等の広範囲な対応を行い基礎資料の充実に努めたつもりである。今後の資料の増加に期待したい。

矢部奥田遺跡

表3 出土土器観察表

挿図 番号	器種	文 様	形 態 ・ 手 法	胎 土	色 調	時 代	備 考 1
1	深鉢	沈線・刺突	2枚貝条痕地に沈線・刺突。内面は2枚貝条痕	2ミリ以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	明褐色	中期Ⅳd類	
2	深鉢	突帯・刻目	円滑ナデ、刻目。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	浅黄褐色	中期Ⅳd類	外面は丁寧なナデ
3	深鉢	沈線	沈線による渦文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅳh類	
4	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅴ類	
5	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅴ類	
6	深鉢	縄文	LR縄文、条痕。内面は2枚貝条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	中期Ⅴa類	
7	深鉢	突帯	突帯に刻目、2枚貝条痕。内面はナデ	3-4ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Ⅳd類	
8	鉢	擬縄文・沈線	擬縄文地に多条沈線。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅳd類	
9	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面はナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅴ類	
10	鉢	刺突・沈線	ヘラミガキ、沈線と刺突。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅳh類	
11	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期Ⅴ類	
12	深鉢	無文	巻貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色		内面磨耗
13	鉢	無文	条痕・ナデ	2ミリ以下の長石・石英粒を多く含む	にぶい褐色	中期Ⅳ類	
14	鉢	無文	条痕。内面はナデ	6ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色	中期Ⅳ類	
15	深鉢	無文	縦2枚貝条痕、口縁付近ヨコナデ	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	褐色		
16	深鉢	縄文	口縁端部刻目文、左下がり沈線文	1ミリ前後の石英を多く含む	灰白色		
17	深鉢	沈線文	タテ上痕のち半截竹管の半弧文。内面はヨコナデ	0.5-1ミリの砂粒を含む	褐灰色		
18	深鉢	沈線文	ヨコナデ。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	褐灰色		
19	深鉢	沈線文	ヨコナデ	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい褐色	中期Ⅰ類	
20	深鉢	縄文	荒いRL後ヨコナデ部分的。内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
21	深鉢	縄文	荒いRL後半截竹管による押し引文。内面は指オサエ	1-2ミリの砂粒を多く含む	黒褐色	中期Ⅰ類	
22	深鉢	縄文	荒いRL、半截竹管による押し引き沈線文	1-2ミリの石英を多く含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
23	深鉢	縄文	荒いRL後半截竹管による押し引の半弧文。内面は指オサエ	1-2ミリの砂粒を多く含む	黒褐色	中期Ⅰ類	
24	深鉢	縄文	荒いRL後半截竹管による弧状沈線文。内面は指オサエ	1-2ミリの砂粒を多く含む	褐色	中期Ⅰ類	
25	深鉢	沈線文	口縁部沈線と列点文、下半タテ2枚貝条痕。内面ヨコナデ	1-数ミリの砂粒を多く含む	黒色	中期Ⅲ類	
26	深鉢	沈線文	2枚貝タテ条痕、沈線後列点文。内面はヨコナデ	1-数ミリの石英を多く含む	褐色	中期Ⅲ類	
27	深鉢	沈線	口縁部沈線文と列点文、下部2枚貝タテ条痕。内面横ナデ	1ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶ褐色	中期Ⅲ類	
28	深鉢	沈線文	沈線文。内面はヨコナデ	1-数ミリの砂粒を多く含む		中期Ⅲ類	
29	深鉢	沈線	口縁沈線タテ条痕。内面はヨコナデ	1-数ミリの石英を多く含む	黒褐色	中期Ⅲ類	
30	深鉢	沈線文	ナデと縦条痕。内面ヨコナデ	0.5-1ミリの砂粒を含む	黒色	中期Ⅲ類	
31	深鉢	沈線文	内外面ともナデ	1-数ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	中期Ⅲ類	
32	深鉢	沈線文	内外面ともヨコナデ	1-数ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色	中期Ⅲ類	
33	鉢	沈線文	内外面ともヨコナデ	1-数ミリの砂粒を多く含む	黒褐色	中期Ⅲ類	
34	鉢	沈線文	内外面ともナデ	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色		



矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文 様	形 態 ・ 手 法	胎 土	色 調	時 代	備 考 1
35	深鉢	沈線文	沈線後列点文、刺突文。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を含む	にぶい赤褐色		
36	深鉢	無文	肥厚する口縁に太い沈線、下半・内面は条痕	1ミリ前後の砂粒を多く含む	暗褐色	中期Ⅲ類	
37	深鉢	無文	突帯、縦2枚貝条痕、端部2枚貝押圧刻目文。内面横条痕	1-数ミリの砂粒を多く含む	褐灰色	中期Ⅲ類	
38	深鉢	無文	上部肥厚、胴部ヨコ削り?内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	灰黄褐色	中期Ⅲ類	
39	深鉢	沈線文	口縁端部刻目文。内面はヨコナデ	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰褐色	中期Ⅲ類	
40	深鉢	無文	肥厚気味の口縁は半裁竹管状工具の押し文。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色		
41	深鉢	沈線文	口縁端部巻貝による施文。内面は荒いナデ	1-2ミリの石英を含む	にぶい黄褐色		
42	深鉢	沈線文	内外面ともヨコナデ	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色		
43	深鉢	縄文	R.L一部ヨコナデ。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい褐色		
44	深鉢	縄文	沈線後LR	1-2ミリの砂粒を含む	橙色		
45	深鉢	縄文	タテ条痕後沈線。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	橙色		
46	深鉢	沈線文	ヨコ条痕後ヨコナデ。内面ヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	黒色		
47	深鉢	沈線文	指ナデ。内面はヨコナデ	1-2ミリの砂粒を含む	浅黄褐色		
48	深鉢	沈線文	内外面ともナデ	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色		
49	浅鉢	沈線文	内外面ともヨコミガキ?	0.5-1ミリの石英を含む	にぶい橙色		
50	深鉢	無文	内外面とも2枚貝ヨコ条痕	1-数ミリの砂粒を多く含む			
51	深鉢	沈線文	タテ沈線文	0.5ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色		
52	深鉢	磨消	沈線後LR。内面はナデ	1-数ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色		
53	深鉢	磨消	LR後沈線。内面は平滑	1-数ミリの石英を含む	にぶい橙色		
54	深鉢	縄文	口縁突帯、下半羽状縄文的なRLの施文、口縁端部RL	0.5ミリ前後の砂粒を含む	橙色		
55	深鉢	縄文	沈線後RL	1-数ミリの砂粒を含む	灰白色		
56	深鉢	磨消	沈線後RL。内面は平滑	0.5-2ミリの石英を多く含む	黒褐色		
57	深鉢	縄文	沈線後RL。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を含む	褐色		
58	深鉢	縄文	沈線後RL。内面は平滑	数ミリの石英を含む	にぶい橙色		
59	深鉢	縄文	沈線後RL。内面は平滑	1-数ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色		
60	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。内面は平滑	1-数ミリ前後の石英を含む	褐色	中期Ⅴ類	
61	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。内面は平滑	1-数ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色	中期Ⅴ類	
62	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕、端部刻目文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅴ類	
63	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕のち強いナデ。内面もナデ	0.5-1ミリの砂粒を含む	褐灰色	中期Ⅴ類	
64	深鉢	無文	内外面とも2枚貝ヨコ条痕、端部貝の押し文?	1-数ミリの砂粒を多く含む	褐色	中期Ⅴ類	
65	深鉢	無文	ナデ?内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	灰黄褐色	中期Ⅴ類	
66	深鉢	無文	巻貝?条痕。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅴ類	
67	深鉢	沈線文	沈線内刺突文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅴ類	
68	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Ⅴ類	
69	深鉢	無文	細かい条痕をケズリ	1-2ミリの石英を含む	褐灰色		

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文 様	形 態 ・ 手 法	胎 土	色 調	時 代	備 考 1
70	深鉢	無文	内外面ともヘラミガキ	1ミリ前後の砂粒を多く含む	褐灰色	後期Ⅰ類	
71	深鉢	沈線文	巻貝細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅰ類	
72	深鉢	磨消	外面はRL、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
73	深鉢		外面は上痕、内面は押圧ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色	後期Ⅱ類	
74	鉢	磨消	外面はRL、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色	後期Ⅱ類	
75	鉢	磨消	外面はRL、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色	後期Ⅱ類	
76	鉢	縄文	外面はRL、内面はヘラミガキ	2ミリ以下の石英・長石粒が目立つ	灰白色	後期Ⅱ類	
77	深鉢	磨消	外面はRL、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
78	鉢	磨消	外面はRL、内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
79	深鉢	磨消	外面はRL、外面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄色	後期Ⅱ類	
80	深鉢	無文	外面は条痕、内面は押圧ナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	暗灰色	後期Ⅱ類	
81	深鉢	押型文	楕円押型文	1-2ミリの長石・石英を含む	橙色	早期Ⅰ類	
82	深鉢	沈線・刺突	細文地半截竹管による沈線文、内面は平滑ナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期Ⅰ類	
83	深鉢	沈線文?	口縁上部内外面に半截竹管の刺突、上部2枚貝押圧	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期Ⅰ類	
84	深鉢	多条沈線	外面は多条沈線、内面は円滑ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色	中期Ⅰ類	
85	深鉢	縄文	荒い縞糸文	0.5-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期Ⅰ類	
86	深鉢	沈線・縄文	多条沈線、内面は円滑ナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む	灰褐色	中期Ⅰ類	
87	深鉢	沈線文	半截竹管による沈線文、内面は荒いナデ(擦痕)	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	明褐灰色	中期Ⅰ類	波状口縁
88	深鉢	縄文・沈線	細文地に多条沈線・平滑ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
89	深鉢	縄文・沈線	細文地に多条沈線、内面は平滑ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
90	深鉢	縄文・沈線	細文地に多条沈線、内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	中期Ⅰ類	
91	深鉢	縄文	外面は細文地に沈線	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色	中期Ⅰ類	内面摩耗
92	深鉢	擬縄文・沈線	2枚貝による擬縄文。内面は条痕(巻貝?)	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅰ類	
93	深鉢	縄文	RL、荒い縄文。内面はナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
94	深鉢	縄文・沈線	外面は縦位の縄文地に多条沈線、内面は平滑なナデ	2ミリ以下の長石・石英粒を多く含む	褐色	中期Ⅰ類	
95	鉢	縄文	縦位の縄文。内面は口縁端縄文	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅰ類	基盤面掘り下げ貝層下
96	深鉢	縄文	RL縄文、平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	中期Ⅰ類	
97	深鉢	縄文	荒い縦方向RL。内面はヨコ条痕?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Ⅰ類	
98	深鉢	縄文	RL縄文と条痕、内面は条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
99	深鉢	縄文	荒いRL。内面は指押さえ	1-数ミリの石英を含む		中期Ⅰ類	
100	深鉢	縄文	RL縄文、内面は平滑ナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅰ類	
101	深鉢	縄文	縦方向RL押圧?	1-1.5ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期Ⅰ類	
102	深鉢	沈線	多条沈線、下から上に線引き。内面は平滑ナデ、擦痕	3ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい褐色	中期Ⅰ類	
103	深鉢	多条沈線	外面は多条沈線、内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色	中期Ⅰ類	あげ土
104	深鉢	沈線	半截竹管による沈線文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の長石・石英粒を含む	にぶい褐色	中期Ⅰ類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
105	鉢	縄文	弧状沈線文、沈線後LR。内面はヨコ条痕	0.5-1ミリの石英を多く含む	橙色	中期I類	
106	深鉢	沈線・刺突	沈線・刺突、内面は凹凸が著しい	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡橙色	中期II類?	
107	深鉢	沈線・刺突	沈線・刺突	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	中期IV類?	
108	深鉢	貼付突帯	外面は貼付突帯上に沈線と刺突、内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期I類	
109	深鉢	突帯・沈線・刺突	貼付突帯の上に沈線・刺突を加える	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期II類?	
110	深鉢	沈線文	沈線間刺突文	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい橙色	中期III類	
111	鉢	刺突	刺突。内面はナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	明灰色	中期?	
112	鉢	刺突・沈線	刺突・沈線。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む	青灰色	中期III類	
113	深鉢	刺突・磨消	刺突・LR縄文	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期III類?	内面剝離
114	鉢	沈線・刺突	沈線により4分割その内に刺突文・上底、内面は凹凸著し	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期III類	復元可
115	深鉢	突帯・沈線	突帯文の上に沈線。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	中期III類	
116	深鉢	突帯	外面は貼付突帯・条痕、内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	黒褐色	中期III類	
117	深鉢	縄文	口縁肥厚。内外面ともナデ	0.5-1ミリの砂粒を含む	褐灰色		
118	深鉢	多条沈線	外面は多条沈線、内面は円滑ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色	中期I類	
119	深鉢	無文	内外面ナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	明褐灰色	中期III類	
120	深鉢	沈線文	沈線。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色		
121	深鉢	沈線	沈線文、内面は巻貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	中期II類	
122	深鉢	沈線文	端部刺突文	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい橙色		
123	深鉢	沈線・刺突	沈線・刺突。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期III類?	
124	深鉢	沈線文	突帯部沈線文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色		
125	深鉢	沈線文	内外面ともヨコナデ	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰色		
126	深鉢	沈線文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色		
127	深鉢	突帯	突帯。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期III類	
128	深鉢	沈線文	突帯下端上部刺突文	1-2ミリの石英を多く含む	褐色		
129	鉢	沈線		1.5ミリ以下の長石・石英粒を含む	褐灰色	中期II類	内外面摩耗
130	深鉢	沈線文	調整不明	1ミリ前後の石英を多く含む	明赤褐色		
131	深鉢	沈線文	沈線によるゆるやかな弧状文	1ミリ前後の石英を含む	にぶい橙色		
132	深鉢	沈線文	調整不明、渦巻文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	橙色		
133	深鉢	磨消	棒状の工具による刺突文、沈線後LR?	1-2ミリの砂粒を多く含む	浅黄褐色	中期Vg類	
134	深鉢	沈線	外面は波状文・刺突文、内面は2枚貝条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	黄灰色	中期III類	器器摩耗 -40cm
135	深鉢	縄文	竹管文による刺突文と半裁竹管に似せた列点文。内面平滑	0.5-1.5ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期Vg類	
136	深鉢	波状文	外面は擦痕・状痕、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の長石・石英・全雲母を含む	暗褐色	中期III類	
137	深鉢	磨消	沈線後RL	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期Vg類	
138	深鉢	沈線	口縁部に沈線文。内面は平滑	数ミリに及ぶ石英を多く含む	にぶい橙色	中期Vg類	
139	深鉢	無文	上半2枚貝ヨコ条痕、下半LR。内面はヨコナデ	1-数ミリの砂粒を含む	橙色	中期Vg類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
140	深鉢	沈線文	口縁部RL後、縦沈線。内面は屈曲部指オサエ	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	浅黄褐色	中期N <sub>g</sub> 類	
141	深鉢	縄文	上部RL後縦の列線文、下部2枚貝のヨコ条痕。内面平滑	1ミリ前後の石英を含む	浅黄褐色	中期N <sub>g</sub> 類	
142	深鉢	縄文	突帯部RL、円形刺突文、下端列点文。内面はヨコナデ	数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>g</sub> 類	
143	深鉢	沈線文	口縁RL、波状文。内面は屈曲部指オサエ、他平滑	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>g</sub> 類	
144	浅鉢	沈線	沈線文、内面はヘラミガキ	1ミリ以下の長石・石英粒を含む	灰褐色	中期	144接合
145	深鉢	縄文	LR縄文地。内面は平滑	1ミリ前後の石英を含む	橙色	中期N <sub>g</sub> 類	
146	深鉢	沈線文	燃文地に縦沈線文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>g</sub> 類	
147	深鉢	磨消	突帯部沈線後RL、半截竹管文による列点文。内面ケズリ	数ミリに及ぶ石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>g</sub> 類	
148	深鉢	無文	内外面ともヨコ条痕	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>g</sub> 類	
149	深鉢	沈線文	2枚貝条痕後に沈線文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期N <sub>h</sub> 類	口縁部刻目
150	深鉢	沈線文	2枚貝ヨコ条痕。内面は細かいヨコ条痕		にぶい褐色	中期N <sub>d</sub> 類	
151	深鉢	沈線文	内外面ともヨコ条痕	1-1.5ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>f</sub> 類?	
152	深鉢	無文	調整不明	0.5-1ミリの石英を多く含む	浅黄褐色	中期N <sub>b</sub> 類	
153	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	1-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>b</sub> 類	
154	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>b</sub> 類	
155	深鉢	沈線文	突帯部ヨコ条痕。内面は平滑	1-1.5ミリ前後の石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>b</sub> 類	
156	深鉢	縄文	2枚貝ヨコ条痕、端部大きな刻目。内面はヨコ条痕	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	黄褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
157	深鉢	羽状縄文	RL、口縁端RL	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
158	深鉢	縄文	縦LR、突帯端、押しき状の刻目文	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>a</sub> 類	
159	深鉢	縄文	RL、口縁端部RL。内面は平滑	0.5-1.5ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>a</sub> 類	
160	深鉢	縄文	突帯部RL、下端に列点文。内面は平滑	0.5-数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>a</sub> 類	
161	深鉢	磨消	突帯部RL	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
162	深鉢	縄文	RL。内面は平滑	1ミリ前後の石英を含む	にぶい橙色	中期N <sub>a</sub> 類	
163	深鉢	縄文	RL後刺突。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
164	深鉢	縄文	RL縄文地に刺突文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>a</sub> 類	
165	深鉢	羽状縄文	突帯部RLの羽状縄文。内面は平滑	0.5-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
166	深鉢	縄文	LRによる羽状的施文。内面は平滑。	0.5ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
167	深鉢	縄文	RL	1-数ミリの石英を含む	にぶい褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
168	深鉢	縄文	LR	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>a</sub> 類	
169	深鉢	縄文地	上半RL、下半縦条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
170	深鉢	羽状縄文	RL地不規則。内面は指ナデ?	0.5-数ミリの石英を含む	にぶい黄褐色	中期N <sub>a</sub> 類	
171	深鉢	無文	突帯から胴部内面2枚貝ヨコ条痕、内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	橙色	中期N <sub>b</sub> 類	
172	深鉢	無文	ヨコ条痕	1-2ミリの石英を含む	灰黄褐色	中期N <sub>b</sub> 類	
173	深鉢	縄文	LR後半截竹管による斜線文、下端は刺突文。内面はナデ	0.5-2ミリの砂粒を多く含む	黒色	中期N <sub>l</sub> 類?	
174	深鉢	磨消	沈線後RL。内面は平滑	1-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期N <sub>c</sub> 類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
175	深鉢	磨消	2枚貝ヨコ条痕、沈線間RL	1-3ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
176	深鉢	磨消	沈線後LR。内面は平滑	1ミリの石英を含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
177	深鉢	磨消	沈線内LR	1ミリ前後の石英を多く含む	淡褐色	中期Nc類	
178	深鉢	縄文	LR後半裁竹管による斜線文、下端は刺突文	1-数ミリの石英を多く含む	黒色	中期Nc類	
179	深鉢	磨消	沈線後RL	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	中期Nc類	
180	深鉢	磨消	沈線間RL	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
181	深鉢	磨消	沈線後LR。内面は平滑	1-2ミリの石英を含む	浅黄色	中期Nc類	
182	深鉢	磨消	沈線後LR。内面は平滑	1ミリ前後の石英も含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
183	深鉢	磨消	突帯部沈線後、部分的にRL。内面は荒いヨコ条痕	1-2ミリの長石を多く含む	橙色	中期Nc類	
184	深鉢	沈線文	内面は2枚貝ヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい赤褐色	中期Nc類	
185	深鉢	磨消	沈線後RL	1ミリ前後の石英を含む	浅黄褐色	中期Nc類	
186	深鉢	磨消	沈線間RL?内面はヨコ条痕	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
187	深鉢	沈線文	2枚貝ヨコ条痕と沈線文。内面は細かいヨコ条痕	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
188	深鉢	沈線文	沈線間RL	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期Nc類	
189	深鉢	沈線	波状沈線	1ミリ前後の石英を含む	淡橙色	中期Nc類	
190	深鉢	磨消	突帯部沈線後LR、下端2枚貝押圧の列点文。内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	明黄褐色	中期Nc類	
191	深鉢	磨消	渦巻文。内面はヨコ条痕	1-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
192	深鉢	無文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
193	深鉢	沈線文	突帯部沈線文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	中期Nc類	
194	深鉢	磨消	突帯部沈線後RL。内面は細かいヨコ条痕	1-1.5ミリの石英を多く含む	明褐色	中期Nc類	
195	深鉢	沈線文	突帯下部円形刺突文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
196	深鉢	磨消	突帯部RL、列点文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
197	深鉢	磨消	突帯部によるやかな波状沈線後RL。内面はケズリ?	0.5ミリの砂粒を多く含む	明黄褐色	中期Nc類	
198	深鉢	磨消	突帯部沈線間RL、下部半裁竹管の刺突文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	橙色	中期Nc類	
199	深鉢	沈線文	渦巻文	1ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色	中期Nc類	
200	深鉢	磨消	RL後沈線、突帯RL、口縁部RL。内面は平滑	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
201	深鉢	磨消	突帯部RL、RL後沈線。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Nc類	
202	深鉢	沈線刺突	外面は貝殻条痕地に沈線と刺突、内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	黒褐色	中期Nd類	
203	深鉢	沈線文	渦巻文	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい橙色		
204	深鉢	磨消	渦巻文、上部捺糸文?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色		
205	深鉢	沈線	沈線。内面はナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色		口縁風?
206	深鉢	無文	沈線文				
207	深鉢	磨消	沈線間LR	1-2ミリの長石・石英を多く含む	にぶい褐色		
208	深鉢	沈線文	縦沈線	1ミリ前後の砂粒を含む	灰白色		
209	深鉢	不明	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	灰白色		

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
210	深鉢	磨消	沈線後LR、口縁端部LR、内面はヨコ条痕。	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	中期Ne類	
211	深鉢	磨消	沈線後RL、波状頂部の沈線間に刺突文。内面はミガキ?	0.5-数ミリの石英を多く含む	黒色	中期Ne類	
212	深鉢	磨消	沈線間RL、波状頂部には沈線間に刺突文。内面は平滑	数ミリに及ぶ石英を若干含む	浅黄橙色	中期Ne類	
213	深鉢	磨消	沈線後LR。内面は指オサエとナデ	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	中期Nf類	
214	深鉢	磨消	沈線間燃糸文か?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	中期Nf類	
215	深鉢	磨消	沈線後LR縄文。内面はナデ	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	中期Nf類	
216	深鉢	磨消	沈線後LR	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄橙色	中期Nf類	
217	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	淡黄色	中期Nf類	
218	深鉢	沈線文	弧状沈線後LR、口縁端部LR	1-2ミリの石英を含む	にぶい黄橙色	中期Nf類	
219	深鉢	縄文・沈線	RLの縄文地に沈線文、端部RL。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	橙色	中期Nf類	
220	深鉢	沈線文	LR地に沈線文。内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	橙色	中期Nf類	
221	深鉢	磨消	ゆるやかな波状沈線間にRL	数ミリの石英を多く含む	浅黄色	中期Nf類	
222	深鉢	磨消	沈線後RL、上端部RL。内面は平滑	1ミリ前後の石英を多く含む	浅黄色	中期Nf類	
223	深鉢	磨消	沈線後荒いLR。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	暗褐色	中期Nf類	
224	鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	浅黄橙色	中期Nf類	内外面剝離
225	深鉢	磨消	沈線後LR	0.5-1ミリの石英粒を多く含む	橙色	中期Nf類	
226	深鉢	磨消	沈線後RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	明黄褐色	中期Nf類	
227	深鉢	磨消	沈線後LR。内面はヨコ条痕	1ミリ前後の石英を多く含む	灰褐色	中期Nf類	
228	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期Nf類	
229	深鉢	磨消	沈線後RL。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	オリーブ褐色	中期Nf類	
230	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1.5ミリの石英を含む	褐色	中期Nf類	
231	深鉢	磨消	LR地文にゆるやかな波状沈線文。内面は細かいヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期Nf類	
232	深鉢	磨消	RL	1-1.5ミリ前後の石英を多く含む	灰褐色	中期Nf類	
233	鉢	磨消	LR縄文	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	明黄褐色	中期Nf類	器内外面磨耗
234	深鉢	磨消	LR縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	中期Nf類	器内外面磨耗
235	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色	中期Nf類	
236	鉢	沈線	沈線・RL縄文?	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Nf類	
237	深鉢	磨消	外面はLR縄文、沈線後に縄文。内面平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期Nf類	
238	深鉢		RL・LR縄文。	5ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色	中期Nf類	内面磨耗
239	深鉢	磨消	突帯部指ナデ、胴部沈線後RL。内面は条痕?	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
240	深鉢	沈線文	不規則なRL	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	浅黄褐色		
241	深鉢	沈線文	沈線文。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄橙色		
242	深鉢	縄文	RL縄文地?に沈線。内面はヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	橙色	中期末	
243	深鉢	磨消?	沈線後LR	1ミリ前後の砂粒を多く含む	橙色	中期末	
244	深鉢	磨消	沈線間LR	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期中?	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
245	深鉢	磨消	渦巻文、沈線後燃糸文。内面は条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期末	
246	深鉢	磨消?	沈線後LR	1ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期末	
247	深鉢	磨消	渦巻文	0.5-2ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色	中期末	
248	深鉢	磨消	渦巻沈線後LR。内面は荒いヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	明黄褐色	中期末	
249	深鉢	縄文	RL縄文地に沈線?	1-2ミリの石英他を多く含む	浅黄褐色	中期末?	
250	浅鉢	沈線	沈線、内面は平滑ナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色		口縁直下に2穿孔あり
251	深鉢	沈線文	沈線文	0.5-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色		
252	深鉢	沈線文	内外面とも調整不明	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色		
253	鉢	沈線	巻貝縄文地に沈線。内面は巻貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む	にぶい黄褐色		
254	深鉢	沈線	沈線	2ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む	浅黄褐色		
255	深鉢	沈線	2枚貝条痕、沈線。内面は2枚貝条痕	6ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	浅黄褐色		
256	深鉢	磨消?	右下がり条痕	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色		
257	鉢	擬縄文、沈線	沈線後に巻貝による擬縄文、平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰褐色		
258	深鉢	沈線文	縦方向の波状沈線文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	橙色		
259	深鉢	磨消	沈線間に燃糸文か?	0.5ミリ前後の砂粒	にぶい黄褐色		
260	深鉢	無文	ナデと燃糸文?内面は平滑	0.5-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色		
261	深鉢	磨消	縦沈線。内面はヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい橙色		
262	深鉢	磨消	V状沈線。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を含む	橙色		
263	鉢	擬縄文	外面は巻貝縄文地に2枚貝、外面は巻貝条痕	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期I類	アルカ擬縄文
264	深鉢	擬縄文・沈線	沈線後に放射肋による擬縄文	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期I類	ハイガイ
265	深鉢	擬縄文	巻貝条痕後に放射肋による擬縄文、内面は巻貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期I類	ハイガイ
266	深鉢	磨消	擬縄文(巻貝)沈線後に施文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期I類	
267	深鉢	磨消	沈線後LR	1-2ミリの石英を含む	にぶい黄褐色		
268	深鉢	沈線文	内外面とも巻貝、細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色		
269	深鉢	不明	突帯下、荒いヨコミガキか?内面はヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい橙色		
270	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕、口縁端部刻目	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄色		
271	深鉢	無文	ユビオサエ、2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期V類	
272	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕、口縁端部刻目	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい橙色		
273	深鉢	無文	荒い2枚貝条痕。内面もヨコ条痕?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい赤褐色		
274	深鉢	無文	口縁端部刻目、荒いヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい赤褐色		
275	深鉢	無文	端部2枚貝押圧、2枚貝ヨコ条痕。内面はヨコナデ	数ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色		
276	深鉢	無文	ヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい赤褐色		
277	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。内面はヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色		
278	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	1-2ミリの石英を含む	褐灰色		
279	深鉢	無文	2枚貝?ヨコ条痕	1-1.5ミリの石英を含む	褐色		

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
280	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕、口唇部刻目文	0.5-2ミリの砂粒を多く含む	褐灰色		
281	深鉢	無文	2枚貝?ヨコ条痕。内面もヨコ条痕	0.5-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色		
282	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期V類	
283	深鉢	無文	荒い2枚貝ヨコ条痕。内面は細かいヨコ条痕	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色		
284	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	明赤褐色		
285	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕	0.5-2ミリの石英を多く含む	褐灰色		
286	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕	数ミリの石英を含む	橙色		
287	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色		
288	深鉢	無文	内外面ともヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい赤褐色		
289	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は極細のナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期V類	
290	深鉢	無文	2枚貝条痕?内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期V類	
291	深鉢	沈線	沈線。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	明オリブ灰	後期II類	
292	深鉢	磨消	RL縄文。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期II類	内外面磨耗
293	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期II類	
294	深鉢	磨消?	調整不明	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期II類	
295	深鉢	磨消?	調整不明	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期II類	
296	深鉢	磨消	沈線後RL、口縁端部沈線後RL。内面は平滑	0.5-1ミリの長石・石英を多く含む	橙色	後期II類	
297	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	浅黄褐色	後期II類	
298	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期II類	
299	深鉢	磨消?	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期II類	
300	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	1ミリ内の石英を多く含む	にぶい橙色	後期II類	
301	深鉢	磨消	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期II類	
302	深鉢	磨消	LR縄文。内面は円滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期II類	
303	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期II類	
304	深鉢	磨消	沈線後RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	黒褐色	後期II類	
305	深鉢	刺突・沈線	刺突・沈線。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期II類	
306	深鉢	沈線	沈線間縄文?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期II類	
307	鉢	沈線・刺突	沈線上を刺突が走る。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期II類	
308	深鉢	不明	管状部上端刺突文	0.5-1ミリの長石・石英を多く含む	にぶい褐色	後期II類	
309	深鉢	磨消	RL後沈線?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい赤褐色	後期II類	
310	鉢	沈線	沈線内刺突文	1ミリ前後の石英を多く含む	黄褐色	後期II類	
311	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	明オリブ灰	後期II類	
312	深鉢	磨消	口縁端RL後沈線、沈線内刺突文。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期II類	
313	深鉢	沈線文	沈線文。内面は平滑	0.5-1.5ミリの石英粒を多く含む	橙色	後期II類	
314	深鉢	沈線文?	調整不明	1-2ミリの長石を多く含む	にぶい橙色	後期II類	



矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文 様	形 態 ・ 手 法	胎 土	色 調	時 代	備 考 1
315	深鉢	磨消	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
316	深鉢	磨消	RL縄文。内面はヘラミガキ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色	後期Ⅱ類	
317	深鉢	磨消	沈線間RL、口縁端部RL。内面は平滑	1ミリ前後の長石・石英を多く含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
318	深鉢	磨消	沈線内RL?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
319	深鉢	沈線文	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	
320	深鉢	縄文	RL?、口縁上部RL?	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰白色	後期Ⅱ類	
321	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
322	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
323	深鉢	磨消	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を含む	浅黄色	後期Ⅱ類	
324	深鉢	沈線文	ヨコナデ。内面はナデ	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
325	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	0.5ミリ前後の白色粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
326	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
327	深鉢	磨消	沈線後RL、沈線内に刺突文。内面は平滑。	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
328	鉢	磨消	外面は擬縄文(巻貝)・沈線、内面は巻貝上痕	1.5ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	暗灰黄色	後期Ⅱ類	
329	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
330	深鉢	磨消	外面はRL、内面は巻貝条痕	1ミリ以下の長石・石英粒を含む	明褐色	後期Ⅱ類	
331	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
332	深鉢	磨消	沈線後RL	1ミリ前後の石英を多く含む	暗褐色	後期Ⅱ類	
333	深鉢	磨消	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
334	深鉢	磨消	沈線間断糸文?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	浅黄橙色	後期Ⅱ類	
335	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
336	深鉢	磨消	沈線間RL?	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
337	深鉢	磨消	沈線間RL。内面はヨコミガキ?	0.5ミリ前後の石英を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	
338	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
339	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
340	深鉢	磨消	沈線後RL。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
341	深鉢	磨消	沈線間RL、内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
342	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	浅黄橙色	後期Ⅱ類	
343	深鉢	磨消	沈線間RL、内面はヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	
344	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリ前後の砂粒を含む	にぶい赤褐色	後期Ⅱ類	
345	深鉢	磨消	RL後沈線?	1ミリ前後の石英を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
346	深鉢	磨消	RL縄文。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
347	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	
348	深鉢	磨消	RL後沈線。内面はヨコミガキ?	0.5ミリ前後の石英を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
349	深鉢	磨消	沈線間RL	1-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
350	深鉢	磨消	沈線間RL?	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
351	深鉢	沈線文	調整不明、内面はヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	
352	深鉢	磨消	沈線間RL?内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む		後期Ⅱ類	
353	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
354	深鉢	磨消	燃糸文の地に沈線か?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	浅黄色	後期Ⅱ類	
355	深鉢	沈線文	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅲ類	
356	鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	後期Ⅲ類	
357	深鉢	沈線文	ヨコナデ?内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅲ類	
358	鉢	沈線	沈線。内面は円滑ナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅲ類	
359	浅鉢	沈線	沈線	1ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む	褐灰色	後期Ⅲ類	器内外面ともに磨耗
360	深鉢	沈線文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい赤褐色	後期Ⅲ類	
361	深鉢	沈線	沈線、円滑ナデ。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅲ類	
362	深鉢	沈線文	調整不明	0.5ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅲ類	
363	深鉢	沈線	沈線。内面は平滑なナデ	5ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	浅黄褐色	後期Ⅲ類	
364	深鉢	沈線文	調整不明	1ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅲ類	
365	深鉢	無文	内面はRL縄文、条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	Caが付着
366	深鉢	無文	巻貝?細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	橙色	後期Ⅳ類	
367	深鉢	無文	内外面とも2枚貝条痕	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅳ類	
368	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は条痕	5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅳ類	
369	深鉢	無文	巻貝、細かいヨコ条痕。内面も細かいヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅳ類	
370	深鉢	無文	口縁端部に刻目。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	オリーブ黒	後期Ⅳ類	
371	深鉢	無文	巻貝?細かい横条痕。内面はヨコナデ?	0.5ミリの砂粒を含む	橙色	後期Ⅳ類	
372	深鉢	条痕	内外面とも細かいヨコ条痕	0.5-数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅳ類	
373	深鉢	無文	巻貝?細かいヨコ条痕、端部緩やかな刻目文。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅳ類	
374	深鉢	無文	凹凸著しいナデ。内面はナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	後期Ⅳ類	
375	深鉢	無文	巻貝?細かいヨコ条痕文。内面端部拡張気味、平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅳ類	
376	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅳ類	
377	深鉢	無文	巻貝?細かいヨコ条痕後ナデか?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅳ類	
378	深鉢	無文	細かいヨコの条痕、口縁上端部刻目文	0.5-1ミリ前後の砂粒を多く含む	灰褐色	後期Ⅳ類	
379	深鉢	無文	細かいヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅳ類	
380	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	1ミリ前後の砂粒を多く含む	灰黄色	後期Ⅳ類	
381	深鉢	無文	細かいヨコ条痕?内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅳ類	
382	深鉢	無文	巻貝?ヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	褐色	後期Ⅳ類	
383	浅鉢?	無文	巻貝?浅いヨコ条痕。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰白色	後期Ⅳ類	
384	深鉢	無文	巻貝?浅く細かいヨコ条痕文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅳ類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
385	深鉢	無文	沈線、内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	褐灰色		内外面剝離
386	深鉢	無文	巻貝?細かいヨコ条痕。内面は平滑	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
387	深鉢	条痕	巻貝による条痕凹凸著しい、内面は平滑なナデ突帯がつく	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅳ類	
388	深鉢		巻貝条痕地。内面は平滑なナデ	6ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	褐灰色	後期Ⅳ類	
389	深鉢	無文		1-2ミリの石英を多く含む		後期Ⅳ類	内傾接合
390	深鉢	巻貝	内外面とも巻貝、細かいヨコ条痕	1ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
391	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅳ類	
392	深鉢	無文	横条痕、端部貝背部による押圧文。内面は細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
393	深鉢	刻目	外面は幅広の押圧ナデ、内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	褐灰色	後期Ⅳ類	
394	鉢	無文	内面は平滑なナデ	3ミリ以下の長石・石英粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
395	深鉢	無文	2枚貝条痕?内面は2枚貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅴ類	
396	深鉢	無文	2枚貝条痕?内面は2枚貝条痕とナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰褐色	中期Ⅴ類	
397	深鉢	無文	巻貝条痕?。内面は条痕	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅴ類	
398	鉢	無文	内外面ナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		
399	深鉢	無文	浅いヨコ条痕か?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色		
400	深鉢	無文	内外面ともヨコ条痕の後ナデ消しか?	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅴ類	
401	深鉢	無文	ヨコ条痕文?	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰黄色		
402	深鉢	無文	細かい条痕か?	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
403	深鉢	無文	口縁端部RL、ヨコケズリ?内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	橙色		
404	深鉢	無文	ヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい褐色		
405	深鉢	無文	内外面ヨコ条痕	1ミリ前後の砂粒を多く含む	灰白色		
406	深鉢	無文	細かいヨコ条痕後ヨコナデ。内面も細かいヨコ条痕後ナデ	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
407	深鉢	無文	調整不明	1-2ミリの石英を含む	にぶい橙色		
408	深鉢	無文	ヨコケズリ。内面は平滑	0.5-1.5ミリの砂粒を含む	明褐灰色		
409	深鉢	無文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色		
410	深鉢	無文	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色		
411	深鉢	無文	ヨコ条痕。内面は荒いケズリ?	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色		
412	深鉢	無文	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色		
413	深鉢	無文	ヨコナデ	1ミリ前後の石英を多く含む	明赤褐色		
414	深鉢	無文	ヨコミガキ?内面は平滑	0.5-1ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色		
415	深鉢	無文	口縁端部、刻目	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	橙色		
416	深鉢	無文	ヨコミガキ?内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	黒色		
417	深鉢	無文	調整不明。内面はナデ	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい褐色		
418	浅鉢?	無文	ヨコナデ	0.5ミリ前後の白色粒	にぶい黄橙色		
419	深鉢	羽状縄文	RL	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰黄褐色		

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
420	深鉢	無文	調整不明。内面は平滑	1ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい橙色		
421	深鉢	無文	内外面ヨコナデ。内面は平滑?	数ミリの長石・石英を多く含む	灰褐色		
422	深鉢	無文	ヨコナデ?	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい橙色		
423	深鉢	無文	ミガキ?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色		
424	深鉢	無文	内外面ヨコナデ。内面は平滑	数ミリの長石・石英を含む	橙色		
425	浅鉢?	無文	調整不明。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	浅黄橙色		
426	深鉢	無文	縦中心の条痕。内面は上位ミガキ、ハケ	3-5ミリ以下の石英・長石粒が目立つ	にぶい黄橙色	中期V類	
427	深鉢	無文	ヨコナデ?	数ミリの石英を多く含む	にぶい褐色		
428	深鉢	無文	ヨコミガキ?	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色		
429	深鉢	無文	ミガキ?内面は平滑	0.5-1ミリ前後の石英を多く含む	橙色		
430	深鉢	無文	細かいヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
431	深鉢	不明	巻貝?細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい褐色	後期N類	
432	深鉢	無文	条痕。内面はナデ。	3ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む。	にぶい黄橙色	中期V類	
433	深鉢	不明	調整不明。内面はヨコ条痕	数ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
434	深鉢	不明	巻貝?細かいヨコ条痕、底ナデ	1-数ミリの石英を多く含む	褐色	後期N類	
435	深鉢	無文	条痕。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	黄橙色	後期N類	
436	深鉢	無文	条痕。内面はナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色	中期V類	
437	深鉢	無文	条痕	6ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	灰白色		内面磨耗
438	深鉢	不明	ヨコ条痕	1-数ミリの砂粒を多く含む	褐色		
439	深鉢	不明	調整不明。内面は平滑	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄橙色		
440	深鉢	不明	調整不明。内面は平滑	1ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄橙色		
441	深鉢	不明	内外面とも2枚貝?ヨコ条痕	数ミリの石英を多く含む	にぶい褐色		
442	鉢	無文	無記入	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色		内外面磨耗
443	深鉢	不明	2枚貝ヨコ条痕。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	褐色		
444	深鉢	不明	縦3条の沈線文。内面は平滑	数ミリの石英を多く含む	灰褐色		
445	深鉢	無文	幅広の条痕。内面はナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	黄橙色		
446	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	中期V類	
447	深鉢	不明	調整不明。内面は条痕	1ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄褐色		
448	深鉢	沈線	2枚貝条痕地。内面は極細のナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色	中期III類?	
449	深鉢	無文	タテ2枚貝条痕。内面は2枚貝ヨコ条痕	1-数ミリの長石を多く含む	明褐色		
450	深鉢	無文	タテ2枚貝条痕。内面は細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの長石を多く含む	灰褐色		
451	深鉢	突帯	突帯。内面は条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色	中期Nd類	粗丘痕か?
452	深鉢	突帯・沈線・縄文	突帯上にRL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Na類	
453	深鉢	沈線文	沈線内刺突。内面は平滑	1-数ミリの砂粒を多く含む			
454	深鉢	沈線文	緩やかな弧状沈線。内面は指ナデ	1-数ミリの石英を多く含む	褐色		

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
455	深鉢	突帯・刺突	突帯上押しき風の刺突	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期M-d類	内面磨耗
456	深鉢	無文	口縁突帯にヨコ条痕	0.5ミリ前後の石英粒を多く含む	橙色		
457	深鉢	無文	口縁部肥厚	1-2ミリの石英を多く含む	淡橙色		
458	深鉢	縄文	端部LR?内面はヨコナデ	1ミリ前後の砂粒を含む	淡橙色		
459	深鉢	無文	ヨコ条痕。内面はナデ	1-2ミリの石英を多く含む	橙色		
460	深鉢	沈線	内外面とも2枚貝条痕	5ミリ以下の石英・長石粒(茶色)を多く含む	灰白色	中期Mh類	
461	深鉢	沈線	巻き貝条痕地に沈線文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Mh類	
462	鉢	沈線	沈線。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	浅黄色	中期Mh類	
463	深鉢	磨消	突帯部沈線後RL。内外面のヨコ条痕は2枚貝か?	数ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
464	深鉢	磨消	突帯部沈線間LR、下端半裁竹管による刺突文	0.5-1ミリの石英を多く含む	橙色		
465	深鉢	縄文・沈線	縄文地に沈線、口縁上に刻目。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Me類	内面磨耗
466	深鉢	縄文	突帯部RL、下端部、荒い列点文。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	灰黄色		
467	深鉢	縄文	波条沈線とRL	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい橙色		
468	深鉢	磨消	沈線後RL	1-数ミリの長石を多く含む	浅黄褐色		
469	深鉢	縄文	RL後半裁竹管による押し引文。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色		
470	深鉢	磨消	突帯部沈線内RL?	数ミリの石英を多く含む	浅黄褐色		
471	深鉢	磨消	タテ沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	褐灰色		
472	深鉢	縄文・沈線	RL縄文、沈線。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む		中期Md類?	
473	深鉢	突帯・沈線	突帯上に沈線、巻き貝条痕。内面は巻き貝条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	灰色	中期Md類	
474	深鉢	沈線・刺突	2枚貝条痕上に沈線と刺突を行う。内面は2枚貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		
475	深鉢	磨消	緩やかな波状沈線後LR。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色		
476	深鉢	縄文	浅い列点文。内面はヨコ条痕後ナデ?	1-数ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色		
477	深鉢	磨消	沈線間RL。内面はヨコミガキ?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	褐色		
478	深鉢	磨消	沈線間RL。内面はヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む			
479	深鉢	沈線文	ヨコ条痕	1ミリ前後の石英を含む	にぶい黄褐色		
480	深鉢	沈線文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色黄		
481	深鉢	磨消	沈線間LR	1-2ミリの石英を含む	にぶい黄褐色		
482	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	橙色		
483	深鉢	磨消	LR縄文地に沈線間ヨコナデ?内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色		
484	深鉢	縄文	沈線後LR	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色		
485	深鉢	磨消	LR縄文、内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期I類?	
486	深鉢	磨消	2枚貝放射肋による擬縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色	後期I類	
487	深鉢	磨消	沈線間RL	1-数ミリの長石を多く含む	にぶい赤褐色		
488	深鉢	磨消	RL縄文。	4ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	灰白色	中期Mf類	内面磨耗
489	深鉢	縄文・沈線	巻き貝による条痕。内面は平滑なナデ	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Mf類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
490	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5ミリの砂粒を中心に数ミリ長石を含む	明褐色		
491	鉢	沈線	貼付け突帯上に刻目。内面は2枚貝条痕?	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期	
492	深鉢	沈線	巻貝条痕地に沈線。内面は巻貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期	
493	深鉢	沈線	沈線。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色	?	
494	深鉢	沈線	口縁端刻目、沈線による渦文。内面は2枚貝条痕	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色	中期Mh類	
495	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐色	後期Ⅱ類	
496	深鉢	磨消	RL後沈線。内面はヨコミガキ	0.5-1ミリの石英を多く含む	黄灰色	後期Ⅱ類	
497	深鉢	磨消・刺突	RL縄文。口縁端に沈線・刺突。内面は平滑なナデ	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
498	深鉢	磨消	RL縄文・刺突。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	灰白色	後期Ⅱ類	
499	深鉢	磨消?	調整不明	数ミリの石英を多く含む	明赤褐色	後期Ⅱ類	
500	深鉢	磨消	RL縄文。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	中津式?
501	深鉢	磨消	RL後沈線。内面はヨコミガキ?	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅱ類	
502	深鉢	磨消	RL縄文。内面は円滑なナデ	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	明褐色	後期Ⅱ類	
503	深鉢	磨消	RL後沈線文、一部沈線内刺突文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
504	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
505	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
506	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英	褐色	後期Ⅱ類	
507	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
508	深鉢	磨消	RL後沈線。内面はヨコミガキ?	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
509	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
510	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英	明褐色	後期Ⅱ類	
511	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
512	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	褐色	後期Ⅱ類	
513	深鉢	磨消	RL縄文	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	内面剝離
514	鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
515	深鉢	磨消	RL後沈線。内面はヨコミガキ?	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰白色	後期Ⅱ類	
516	深鉢	磨消	RL縄文。平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
517	深鉢	磨消	沈線間RL	1-数ミリの石英を多く含む	明赤褐色	後期Ⅱ類	
518	深鉢	磨消	沈線間RL?	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
519	深鉢	磨消?	調整不明	1-2ミリの砂粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
520	深鉢	磨消	沈線間RL、他細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅱ類	
521	深鉢	磨消	調整不明	1-2ミリの砂粒を含む	褐色	後期Ⅱ類	
522	深鉢	無文	調整不明	0.5-1ミリの石英を多く含む		後期Ⅱ類	
523	鉢	磨消	RL縄文、J地文。内面はユビオサエ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
524	深鉢	磨消	沈線間LR	1-数ミリの石英を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文 様	形 態 ・ 手 法	胎 土	色 調	時 代	備 考 1
525	深鉢	縄文	R L縄文地に沈線?	数ミリの石英を多く含む	にぶい黄 橙色	後期Ⅱ類	
526	深鉢	無文	ヨコ条真文	数ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
527	深鉢	沈線	沈線文	1ミリ以下の石英・長 石粒を多く含む	にぶい黄 橙色	後期Ⅱ類	内面磨耗
528	深鉢	沈線	巻き貝条真地に沈線。内面は 平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
529	鉢	沈線・刺突	沈線間に刺突。内面は沈線上 を刺突、凹部2か所	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
530	浅鉢	磨消・刺突	L R縄文、沈線内に刺突を行 う。内面は平滑なナデ	5ミリ以下の石英・長 石粒を含む	にぶい色	後期Ⅱ類	
531	深鉢	無文	外面からの穿孔	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
532	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
533	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長 石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
534	深鉢	磨消	沈線間R L。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多 く含む	にぶい黄 橙色	後期Ⅱ類	粗圧痕か?
535	深鉢	磨消	沈線後R L、内面は平滑	1-2ミリの石英を多 く含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
536	深鉢	磨消	沈線後R L?内面は平滑	0.5-1ミリの石英 を多く含む	にぶい黄 橙色	後期Ⅱ類	
537	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・ 長石・雲母粒を含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
538	深鉢	磨消	R L後、他ヨコミガキ。内面 は平滑	1-数ミリの石英を多 く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
539	深鉢	磨消	沈線間R L	0.5-1ミリの砂粒 を含む	橙色	後期Ⅱ類	
540	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	明褐色	後期Ⅱ類	
541	深鉢	磨消	R L後沈線。内面は平滑	0.5ミリ前後の長石 を多く含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
542	深鉢	磨消	R L縄文。円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長 石粒を含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
543	深鉢	磨消	R L縄文。内面は円滑なナデ	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	にぶい黄 橙色	後期Ⅱ類	
544	深鉢	磨消	L R縄文、内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
545	深鉢	磨消	R L縄文、ヘラミガキ。内面 はヘラミガキ	1ミリ以下の石英・長 石粒を含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	
546	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	2.5ミリ以下の石 英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
547	深鉢	磨消	R L後沈線文	0.5-1ミリの砂粒 を多く含む	黄褐色	後期Ⅱ類	
548	深鉢	磨消	縄文地に沈線と刺突。内面は 円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長 石粒を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	精製土器風
549	鉢	磨消	R L縄文。内面は円滑なナデ	2ミリ以下の石英・長 石粒を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
550	深鉢	沈線文	沈線内に刺突文	0.5-1ミリの砂粒 を含む	にぶい黄 褐色	後期Ⅱ類	
551	深鉢	沈線文	沈線内に刺突文	0.5ミリ前後の砂粒 を多く含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
552	深鉢	磨消	沈線間R L。内面は平滑	0.5ミリ前後の石英 を多く含む	灰白色	後期Ⅱ類	
553	深鉢	磨消	沈線間R L。内面は平滑	0.5-1ミリの長石 粒を多く含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
554	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長 石粒を含む	にぶい黄 橙色	後期Ⅱ類	
555	深鉢	磨消	沈線間R L	0.5ミリ前後の長石 粒を多く含む	赤褐色	後期Ⅱ類	
556	深鉢	磨消	沈線間R L?内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒 を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
557	深鉢	磨消	沈線間R L。内面は平滑	0.5-1ミリの長石 粒を多く含む	明褐色	後期Ⅱ類	
558	深鉢	磨消	沈線間燃糸?	0.5-1ミリの長石 粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
559	深鉢	沈線	渦文	1.5ミリ以下の石 英・長石粒を含む	にぶい橙 色	後期Ⅱ類	内外面剝落

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
560	深鉢	沈線	巻き貝条痕地に沈線。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
561	深鉢	縄文・沈線	巻き貝条痕? R L縄文。内面は沈線、平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅲ類	
562	深鉢	不明	縁部部(?) 沈線とR L	数ミリの長石・石英を多く含む	浅黄橙色	後期Ⅲ類	
563	深鉢	無文	内外面とも2枚貝ヨコ条痕、口縁部刻目文	数ミリの石英を多く含む	暗褐色	中期Ⅴ類	
564	深鉢	無文	右下がり2枚貝?ヨコ条痕。内面は肥厚、ヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期Ⅴ類	
565	深鉢	無文	2枚貝?ヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	中期Ⅴ類	
566	深鉢	無文	内面は2枚貝条痕	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅴ類	内外面磨耗
567	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面はナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅴ類	
568	深鉢	無文	ヨコ条痕、端部刻目	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	中期Ⅴ類	
569	深鉢	無文	2枚貝条痕地。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅴ類	
570	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	1ミリ前後の砂粒を多く含む	灰褐色	中期Ⅴ類	
571	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は指ナデ?	0.5ミリ前後の石英を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅳ類	
572	深鉢	沈線	内外面とも貝殻条痕の上を細いナデ(内面2枚貝?)	1ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
573	深鉢	無文	巻貝による条痕。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅳ類	
574	深鉢	無文	内外面とも細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰白色	後期Ⅳ類	
575	深鉢		巻き貝条痕、砂粒の動きが左へ。内面は条痕	5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
576	深鉢	沈線文	巻貝、細かいヨコ条痕。内面ヨコナデ	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅳ類	
577	深鉢	沈線	巻き貝条痕上を細いナデ。内面は巻き貝条痕	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅳ類	
578	深鉢	無文	ヨコ条痕、上方ヨコ削り口縁端部刻目文。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	褐灰色		
579	深鉢	無文	ヨコ条痕?	1-2ミリの砂粒を含む	にぶい橙色		
580	深鉢	無文	部分的ヨコケズリ	1-2ミリの砂粒を多く含む	橙色		
581	深鉢	無文	細かいヨコ条痕?	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	橙色		
582	深鉢	無文	細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を含む	灰黄褐色		
583	深鉢	無文	内外面ともヨコミガキ?	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰黄褐色		
584	深鉢	無文	調整不明。内面はヨコミガキ?	0.5-1ミリの砂粒を含む	褐灰色		
585	鉢	沈線	多条沈線。内面は円滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色		
586	深鉢	無文	内外面ともナデ?	0.5ミリ前後の石英を多く含む	灰白色		
587	深鉢	無文	条痕。内面はナデ、ユビオサエ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色		
588	深鉢	不明	調整不明	1-数ミリの石英を多く含む	明赤褐色		
589	深鉢	不明	2枚貝条痕のち強いナデか?	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい橙色		
590	深鉢	無文	上底、貼付の痕跡をもつ。内面はユビオサエ。	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色		磨耗
591	深鉢	無文	上底、ナデ。内面はナデ。	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色		
592	深鉢	無文	ナデ、上底。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		
593	深鉢	不明	2枚貝ヨコ条痕?	0.5-1ミリの石英を多く含む	明赤褐色		
594	深鉢	無文	内外面ともナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色		



矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
595	深鉢	無文	調整不明	数ミリの石英を多く含む	橙色		
596	深鉢	不明	ヨコ条痕	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色		
597	深鉢	縄文・刺突		3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	中期Ⅳa類	復元可
598	深鉢	縄文・渦文	R L?沈線	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	中期Ⅳ類	内外面磨耗
599	深鉢	磨消	L R縄文。内面は平滑なナデ	3.5ミリ以下の長石・石英を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅳ類	
600	深鉢	沈線	太い沈線	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅳ類	
601	深鉢	磨消?	沈線間列点文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	.	中期Ⅳ類	
602	深鉢	擬縄文	巻貝による擬縄文。内面はユビオサエ、平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	中期Ⅳ類	
603	鉢	沈線・刺突	貼付突帯上に刺突。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅳ類	
604	深鉢	沈線	突帯の下に沈線。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅳ類	
605	深鉢	無文	内外面とも細かいヨコ条痕	数ミリの砂粒を多く含む	灰褐色	中期Ⅳ類	
606	鉢	無文	口縁端部刻目	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色		
607	深鉢	磨消	沈線間L R?内面は平滑	1-2ミリの長石を含む	灰白色		
608	深鉢	縄文	縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色		
609	深鉢	沈線・縄文	L R縄文地に沈線	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期Ⅳe類	
610	深鉢	磨消	ゆるやかな波条沈線間L R	数ミリの長石・石英を多く含む	にぶい黄橙色		
611	鉢	沈線	多条沈線。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		
612	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面はナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色		
613	深鉢	沈線	太い沈線。内面は2枚貝条痕?	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	中期Ⅳ類	865と接合
614	深鉢	沈線	太い沈線。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	中期Ⅳ類	
615	深鉢	沈線	太い沈線。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色	中期Ⅳ類	
616	深鉢	沈線	太い沈線。内面は2枚貝条痕?	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅳ類	
617	深鉢	磨消	L R縄文。	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	明褐灰色	中期Ⅳ類	内外面磨耗
618	深鉢	沈線	沈線。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色		
619	深鉢	無文	2枚貝条痕内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	中期Ⅴ類	
620	深鉢	無文	2枚貝?条痕。内面は平滑なナデ、内側に突帯	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	中期Ⅴ類	
621	深鉢	無文	内外面とも2枚貝条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅴ類	
622	深鉢	不明	ヨコ条痕	1-2ミリの石英を含む	橙色		
623	深鉢	縄文・沈線	L R縄文。内面は2枚貝条痕	2ミリ以下の石英・長石・黒色粒を含む	にぶい褐色	中期Ⅴe類	
624	深鉢	無文	ナデ。内面は2枚貝条痕	3-4ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅴ類	
625	深鉢	無文	条痕	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ⅳ類	
626	深鉢	縄文地沈線	縄文地沈線、沈線後に縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を多量に含む	灰褐色	中期Ⅳd類	加曾利E 榎庄痕か?
627	深鉢	磨消	外面は縄文地に太い沈線、半菰竹管押	1ミリ以下の石英・長石粒が目立つ	橙色	中期Ⅳd類	器面磨耗
628	鉢			1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色		内外面は磨耗
629	深鉢	無文	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい橙色		

矢部奥田遺跡

押図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
630	深鉢	磨消	沈線間LR?内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期Ⅴe類	
631	深鉢	無文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色		
632	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色		
633	深鉢		沈線?内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色		
634	深鉢	沈線文	肥厚部2枚貝ヨコ条痕、下端刺突文。内面も2枚貝横条痕	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい褐色	中期Ⅴe類	
635	深鉢	磨消	条痕後沈線、部分的にRL	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色		
636	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。口縁端部RL?内面もヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色		
637	深鉢	磨消	RL、沈線間ヨコナデ	1-2ミリの石英を含む	にぶい黄褐色		
638	鉢	沈線	沈線。内面は条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色		
639	深鉢	条痕	2枚貝条痕。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	中期Ⅴ類	
640	深鉢	磨消	2枚貝条痕? 内面は条痕	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色		
641	深鉢	擦糸・沈線	沈線・擦糸 2枚貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	後期Ⅰ類	
642	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅰ類	
643	深鉢	磨消	LR縄文	3.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色		
644	深鉢	磨消	沈線間LR?	0.5-1ミリの砂粒を含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
645	深鉢	磨消	沈線間RL、上部沈線内に刺突文	1ミリ前後の石英を多く含む	灰白色	後期Ⅱ類	
646	深鉢	縄文	RL後沈線、沈線内円形刺突文。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	褐色	後期Ⅱ類	
647	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	黄褐色	後期Ⅱ類	648と接合
648	深鉢	磨消	RL縄文、内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
649	深鉢	磨消	RL縄文。	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡褐色	後期Ⅱ類	内外面剝落
650	深鉢	磨消	沈線間RL?	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
651	深鉢	磨消	沈線間RL、内面は平滑	1-数ミリの砂粒を多く含む	暗灰色	後期Ⅱ類	
652	深鉢	磨消?	調整不明	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅱ類	
653	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
654	鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色	後期Ⅱ類	
655	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
656	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石・黒色粒を含む	浅黄色	後期Ⅱ類	
657	深鉢	沈線	沈線。	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
658	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリ前後の砂粒を多く含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
659	深鉢	磨消	RL後タテ沈線文、沈線内円形刺突文。内面はヨコナデ	0.5ミリ前後の石英を多く含む	明赤褐色	後期Ⅱ類	
660	深鉢	磨消	沈線間、タテの区画文とRL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	褐色	後期Ⅱ類	
661	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1ミリの石英を多く含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
662	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	1ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
663	深鉢	磨消	沈線間RL	1-2ミリの石英を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
664	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1ミリの石英を多く含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
665	深鉢	沈線	口縁上面に沈線。内面は平滑なナデ。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む。	灰褐色	後期Ⅱ類	
666	深鉢	刺突	刺突	1ミリ以下の石英・長石粒を含む。	にぶい橙色	後期Ⅱ類	器内外面剥落
667	鉢	沈線・刺突	沈線、刺突	1ミリ以下の石英・長石粒を含む。	褐灰色	後期Ⅱ類	
668	深鉢	磨消	R.L縄文、内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む。	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
669	深鉢	磨消	R.L縄文、内面は条痕ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む。	浅黄橙色	後期Ⅱ類	
670	深鉢	磨消	R.L縄文。内面は平滑なナデ。	3ミリ以下の石英・長石粒を含む。	灰黄橙色	後期Ⅱ類	
671	深鉢	磨消	R.L縄文。内面は平滑なナデ。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む。	鈍い黄橙色	後期Ⅱ類	
672	深鉢	磨消	沈線後R.L。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む。	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
673	深鉢	沈線文?	調整不明	数ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
674	深鉢	磨消	縄文地に沈線?内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
675	深鉢	磨消	R.L後沈線文。内面は平滑	0.5ミリ前後の石英を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
676	深鉢	磨消	沈線間R.L。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	橙色	後期Ⅱ類	
677	深鉢	磨消	沈線間R.L。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
678	深鉢	磨消	R.L縄文。内面は平滑なナデ。	1ミリ以下の石英・長石粒を含む。	浅黄橙色	後期Ⅱ類	
679	深鉢	磨消	R.L後沈線。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
680	深鉢	磨消	沈線間R.L。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
681	深鉢	磨消	沈線間R.L。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
682	深鉢	磨消	沈線間R.L	0.5ミリ前後の砂粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
683	深鉢	磨消	沈線間R.L。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
684	深鉢	磨消	R.L後沈線。内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
685	深鉢	磨消	R.L縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
686	深鉢	磨消	R.L縄文。内面はヘラミガキ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
687	深鉢	沈線文	列線文と刺突文。内面の口縁部付近ヨコナデ	0.5-1ミリの石英を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	
688	深鉢	磨消?	調整不明。口縁上部LR	数ミリの長石・石英を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅱ類	
689	深鉢	磨消?	調整不明	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
690	深鉢	擬縄文	2枚貝放射肋による押圧。内面はユビオサエ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
691	深鉢	磨消	R.L縄文	1.5ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい褐色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
692	深鉢	磨消	R.L縄文。内面は円滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
693	深鉢	無文	沈線	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
694	深鉢	沈線	沈線	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	明黄褐色	後期Ⅱ類	
695	深鉢	沈線・刺突	沈線・刺突	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
696	深鉢	磨消	R.L縄文	無記入	淡黄橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
697	深鉢	無文		1ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
698	深鉢	磨消	R.L縄文	1.5ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
699	深鉢	磨消	R.L縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の長石・石英を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	

矢部奥田遺跡

押図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
700	深鉢	磨消	沈線(縄文痕跡)	5ミリ以下の石英・石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
701	深鉢	磨消	沈線間RL	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
702	鉢	磨消	RL条文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
703	深鉢	磨消	RL縄文。内面は円滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
704	深鉢	磨消	RL縄文。内面は円滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
705	深鉢	磨消	RL縄文	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
706	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
707	深鉢	磨消	沈線後RL	0.5-1.5ミリの砂粒を含む	浅黄橙色	後期Ⅱ類	
708	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・石英を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
709	深鉢	磨消	RL条文。内面は平滑なナデ	3-4ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
710	深鉢	磨消	RL縄文	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
711	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
712	深鉢	磨消	RL条文。内面は円滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
713	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	5.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
714	深鉢	沈線	沈線・刺突	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
715	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	4ミリ以下の長石・石英粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
716	深鉢	無文?磨消	巻貝条痕。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
717	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の長石・石英を含む	浅黄橙色	後期Ⅱ類	
718	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
719	深鉢	磨消	擬縄文。内面は平滑なナデ	2-3ミリ以下の長石・石英粒を多く含む	灰白色	後期Ⅱ類	
720	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2-3ミリ前後の石英・長石粒が多い	褐灰色	後期Ⅱ類	
721	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
722	深鉢	磨消	RL縄文。	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	暗紫灰色	後期Ⅱ類	
723	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
724	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	黄灰色	後期Ⅱ類	
725	深鉢	磨消	RL縄文	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
726	深鉢	磨消	RL縄文。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
727	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2-3ミリ以下の石英・長石粒を含む	暗紫灰色	後期Ⅱ類	
728	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの長石を多く含む	明褐色	後期Ⅱ類	
729	深鉢	磨消	RL縄文。内面は円滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	暗紫灰色	後期Ⅱ類	
730	深鉢	磨消	RL条文。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
731	深鉢	磨消	沈線間RL?	0.5-1ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
732	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
733	深鉢	磨消	RL後沈線か?内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期Ⅱ類	
734	深鉢	磨消	沈線間燃糸文。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	黒色	後期Ⅱ類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
735	深鉢	磨消	沈線間RL?	1ミリ前後の砂粒を含む	黄灰色	後期Ⅱ類	
736	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
737	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5ミリ前後の石英を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
738	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
739	深鉢	磨消	RL縄文、内面は条痕ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
740	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅱ類	
741	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡橙色	後期Ⅱ類	
742	深鉢	磨消	RL後沈線。内面は平滑	1-数ミリの石英を多く含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
743	深鉢	磨消	緩やかな波状沈線内RL?内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
744	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい褐色	後期Ⅱ類	
745	深鉢	磨消	沈線間RL?	0.5ミリ前後の石英を多く含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
746	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
747	深鉢	磨消	沈線内刺突文。内面は平滑	1-数ミリの砂粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
748	深鉢	磨消	RL縄文、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
749	深鉢	無文	内外面とも巻貝、細かいヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	明黄褐色	後期Ⅳ類	
750	深鉢	無文	内外面とも細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅳ類	
751	深鉢	無文	巻貝条痕、内面はナデ。	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅳ類	
752	深鉢	無文	巻貝条痕、内面は平滑なナデ	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅳ類	
753	深鉢	無文	巻貝条痕、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅳ類	
754	深鉢	無文	巻貝条痕、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅳ類	
755	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	1-2ミリの石英を多く含む	灰白色	後期Ⅴ類	
756	深鉢	無文	内・外面は巻貝条痕	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅴ類	583、578等と類似
757	深鉢	無文	調整不明。内面は平滑	1ミリ前後の石英を多く含む	灰白色	後期Ⅴ類	
758	深鉢	磨消?	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅴ類	
759	深鉢	無文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい橙色	後期Ⅴ類	
760	深鉢		内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅴ類	器内外面剝落
761	深鉢	無文	内面は平滑なナデ。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅴ類	
762	深鉢	無文	巻貝条痕。内面は平滑なナデ。	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期Ⅴ類	
763	深鉢	無文	ヨコ条痕?内面はヨコナデ	0.5ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅴ類	
764	鉢	無文	内面は平滑なナデ。	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色	後期Ⅴ類	
765	深鉢	無文	ニビオサエ、ナデ。内面は条痕	2ミリ以下の石英粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅴ類	
766	深鉢	無文	ヨコミガキ?内面はヨコミガキ	0.5ミリ前後の石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅴ類	
767	深鉢	無文	巻貝条痕、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅴ類	
768	深鉢	無文	口縁部刺突文	1ミリ前後の石英を多く含む	橙色	後期Ⅴ類	
769	深鉢	無文	細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を含む	灰白色	後期Ⅴ類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
770	深鉢	無文	条痕、内面は平滑なナデ	5ミリ以下の石英・長石・黒色粒を含む	灰白色	後期V類	
771	鉢	無文	内面は平滑なナデ。	1ミリ以下の石英・長石粒を含む。	にぶい黄橙色	後期V類	
772	深鉢	無文	ヨコ条痕か？内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	黒色	後期V類	
773	深鉢	無文	細かいヨコ条痕	1-2ミリの石英を多く含む	灰黄褐色	後期V類	
774	深鉢	無文	内外面ともヨコナデ？	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期V類	
775	深鉢	刺突	沈線・刺突、内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期V類	
776	深鉢	無文	調整不明。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を含む	褐灰色	後期V類	
777	深鉢	磨消	R L縄文、ヘラミガキ。内面はヘラミガキ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期II類	
778	深鉢	無文	ヨコミガキ？内面はヨコナデ？	0.5ミリ前後の石英を多く含む	褐灰色	後期III類？	
779	深鉢	無文	内外面はナデ	7ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		
780	深鉢	無文	条痕、内面はユビオサエ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		
781	鉢	無文	内外面ナデ	4ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色		
782	深鉢	無文	調整不明。内面端部列点文	0.5ミリ前後の砂粒を含む	にぶい黄橙色	後期III類	
783	皿	磨消	R L縄文、刺突。内面は円滑なナデ、刺突	2ミリ以下の長石・石英を多く含む	にぶい黄橙色	後期II類	
784	深鉢	無文	巻き貝条痕。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	後期IV類	
785	浅鉢	沈線	沈線	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期IV類	内外面磨耗
786	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	黒色	後期V類	
787	深鉢	沈線		1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期II類	内外面磨耗
788	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期IV類	
789	深鉢	無文	内外面とも巻き貝条痕	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄橙色	後期IV類	
790	深鉢	無文		1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期V類	内外面磨耗
791	深鉢	無文	細かいヨコ条痕。内面は平滑	0.5-1ミリの石英を多く含む	灰白色	後期IV類	
792	深鉢	無文	内外面とも細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	褐灰色	後期V類	
793	深鉢	沈線文	細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	後期IV類	
794	深鉢	無文	ナデ。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期IV類	
795	鉢	無文		1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡黄色	後期V類	内外面磨耗
796	鉢	無文	巻き貝条痕上をナデ。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期V類	
797	浅鉢	無文	ナデ。内面は口縁端突帯、平滑なナデ	1.5ミリ以下の長石・石英を含む	にぶい橙色	後期V類	
798	深鉢	無文	ナデ。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期V類	
799	深鉢	無文	ナデ。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の長石・石英を含む	浅黄橙色	後期V類	
800	鉢	無文		1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期V類	内外面磨耗
801	深鉢	無文	巻き貝条痕。平滑なナデ	1.5ミリ以下の長石・石英を含む	暗紫灰色	後期IV類	
802	深鉢	無文	縄文。内面は2枚貝条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	暗黄灰色	後期IV類	
803	深鉢	無文	縄文？内面は2枚貝条痕？	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	明黄褐色	後期IV類	
804	鉢	無文	内面はユビオサエ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色		内外面磨耗

矢部奥田遺跡

挿図 番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
805	深鉢	無文	2枚貝条痕?内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色		
806	鉢	無文	ナデ。内面は平滑なナデ	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色		
807	深鉢	無文	2枚貝条痕。内面はナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅲ類	
808	深鉢	沈線	口縁刻目、沈線		にぶい黄褐色	後期Ⅲ類	器内外面剝落
809	深鉢	沈線文	左下がり沈線文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	黄褐色	後期Ⅲ類	
810	深鉢	縄文	R L縄文。内面は平褐なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期Ⅰ類	
811	深鉢	沈線	太い沈線、口縁部に面をもつ。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期Ⅲ類	
812	深鉢	沈線	内面は巻貝条痕?	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅲ類	
813	深鉢	沈線	口縁部刻目。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色		
814	深鉢	磨消	R L縄文、沈線後に縄文施文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	中期Ⅳc類	
815	深鉢	縄文・刺突	貼付突帯上にLR縄文、下位に刺突	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅳa類	
816	鉢	刺突・縄文	R L縄文その上下に刺突	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅳa類	内外面磨耗
817	深鉢	磨消	R L縄文。内面はヘラミガキ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅳc類	加曾利風?
818	深鉢	沈線	沈線	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
819		沈線		1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
820	注口	沈線・刺突	沈線後に刺突。内面は円滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡橙色	後期Ⅱ類	
821	深鉢	沈線	沈線	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	黄色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
822	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
823	深鉢	磨消	LR縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
824	注口	刺突	刺突による渦文、上下に穿孔。内面はユビオサニ、ナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
825	鉢	磨消	R L縄文、ヘラミガキ。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	後期Ⅱ類	
826	鉢	磨消	R L縄文	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
827	深鉢	磨消	R L縄文	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
828	深鉢	磨消	R L縄文。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
829	深鉢	磨消	R L縄文、ヘラミガキ。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	
830	深鉢	磨消	R L縄文。	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	内外面剝離
831	深鉢	磨消	R L縄文。	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
832	深鉢	磨消	R L縄文、ヘラミガキ。内面は円滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
833	浅鉢	磨消	R L縄文。内面は平褐なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
834	深鉢	磨消	LR縄文。	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	内面磨耗
835	深鉢	磨消	R L縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
836	深鉢	磨消	R L縄文。	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	内面剝離
837	深鉢	無文		1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
838	深鉢	無文	巻貝条痕。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色	後期Ⅳ類	
839	深鉢	無文	口縁端刻目	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅴ類	

矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
840	深鉢	無文	内外面ともナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期V類	
841	深鉢	縄文・沈線	口縁部RL縄文、巻貝条痕、沈線。内面は条痕	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色	後期III類	
842	注口	無文	内面は凹凸の著しいナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色		外面磨耗
843	鉢	無文	巻貝条痕	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄橙色		内面剝離
844	深鉢	沈線文	縦の押圧捺糸文後、横沈線文。内面は平滑	0.5-1.5ミリの砂粒を含む	橙色	中期II類?	
845	深鉢	磨消	沈線後部分的にLR。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄橙色	中期Ma類	
846	深鉢	磨消	渦巻文、沈線後RLか?内面は平滑	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	橙色	中期M類	
847	深鉢	磨消	渦巻文?LR後沈線。内面は平滑	0.5-2ミリの石英を多く含む	褐色	中期M類	
848	深鉢	沈線文	捺糸文地に波状沈線文。内外面は平滑	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期M類	
849	深鉢	磨消	2枚貝条痕、沈線間RL。内面は平滑	0.5-1.5ミリのこえる石英を多く含む	にぶい橙色	中期Mf類	
850	深鉢	縄文	羽状文のようなRL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	中期Ma類	
851	深鉢	磨消	調整不明	0.5-1ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	中期	
852	深鉢	磨消	沈線後LR。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい褐色		
853	深鉢	沈線文	弧状沈線文。内面は細かいヨコ条痕	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄橙色		
854	深鉢	磨消	沈線間LR。内面は平滑	1-数ミリの石英を含む	明黄褐色		
855	深鉢	沈線文	ゆるい波状沈線	0.5-1ミリの砂粒を含む	灰白色		
856	深鉢	磨消?	調整不明	1ミリ前後の石英を多く含む	褐灰色	後期II類	
857	深鉢	磨消	外面沈線文	0.5-数ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期II類	
858	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	明黄色	後期II類	
859	深鉢	磨消	沈線間RL。内面は平滑	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色	後期II類	
860	深鉢	磨消	沈線間LRか?	0.5-1ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色	後期II類	
861	深鉢	無文	細かいヨコ条痕	1-1.5ミリの石英を多く含む		後期M類	
862	深鉢	無文	ヨコ条痕。内面も条痕	1-2ミリのこえる石英を含む	褐色	後期M類	
863	深鉢	無文	横条痕後ナデ消しか?内面は平滑	0.5-2ミリの石英を多く含む	浅黄橙色	後期M類	
864	深鉢	無文	調整不明	1-数ミリの石英を多く含む	浅黄褐色	後期V類	
865	深鉢	無文	調整不明、端部刺突文。内面は平滑	1ミリ前後の石英を多く含む		後期V類	
866	深鉢	不明	調整不明。内面は平滑	口唇部列線文と沈線文	橙色	後期III類	
867	深鉢	不明	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	後期III類	
868	深鉢	無文	2枚貝ヨコ条痕。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	灰褐色	中期I類	
869	深鉢	縄文	LR縄文。内面は平滑なナデ	4ミリ以下の石英・長石粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期I類	
870	深鉢	縄文	タテ条痕後押し引き文。内面は平滑	1-数ミリの砂粒を含む	にぶい黄褐色	中期II・III?	
871	鉢	沈線	沈線。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい橙色	中期	
872	深鉢	沈線・刺突	沈線・刺突。内面は2枚貝条痕	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期N類	
873	鉢	渦文	沈線。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色	中期N類	
874	深鉢	縄文	肥厚部RL後列点文。内面は平滑	1-2ミリの砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	中期Na類	



矢部奥田遺跡

挿図番号	器種	文様	形態・手法	胎土	色調	時代	備考1
875	深鉢	無文	ナデ	1-数ミリの石英を多く含む	にぶい橙色	中期	
876	鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	中期Ⅱc類	
877	深鉢	縄文	RL。内面は細かいヨコ条痕	0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	灰白色		
878	深鉢	縄文	LR、透孔	0.5-1.5ミリの石英を多く含む	灰黄褐色		
879	深鉢	縄文	RL後沈線。内面はヨコナデ	1-2ミリの石英を多く含む			
880	深鉢	縄文・沈線	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色		内外面磨耗
881	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
882	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	褐灰色	後期Ⅱ類	
883	鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	淡橙色	後期Ⅱ類	
884	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰白色	後期Ⅱ類	内外面磨耗
885	深鉢	磨消	RL縄文。内面は平滑なナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰褐色	後期Ⅱ類	
886	深鉢	磨消?	調整不明	1-2ミリの石英を多く含む	にぶい黄褐色	後期Ⅱ類	
887	深鉢	沈線文	調整不明	1-2ミリの砂粒を含む		後期Ⅱ類	
888	深鉢	沈線文	調整不明	0.5-1ミリの砂粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅱ類	
889	深鉢	沈線文?	沈線間縹糸文か?	0.5-1ミリ前後の砂粒を多く含む	黄橙色	後期Ⅱ類	
890	深鉢	沈線文	ナデか?	1ミリの石英を含む	にぶい赤褐色	後期Ⅱ類	
891	深鉢	無文	調整不明	0.5ミリ前後の白色粒を多く含む	暗灰黄色	後期Ⅱ類	
892		無文	ナデ。内面は平滑なナデ	2ミリ以下の石英・長石粒を含む	橙色	後期Ⅱ類	
893	深鉢	無文	巻貝条痕(下位に2枚貝)。内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰黄褐色	後期Ⅳ類	
894	鉢	無文	ナデ	1.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	橙色	後期Ⅲ類	内外面磨耗
895	鉢	無文	ナデ。内面は平滑なナデ	2.5ミリ以下の石英・長石粒を含む	灰色		
896	深鉢	無文	内面は平滑なナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄褐色		外面磨耗
897	鉢	無文	内面は平滑なナデ	1ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色		外面磨耗
898	深鉢	無文	巻貝条痕。内面はナデ	3ミリ以下の石英・長石粒を含む	浅黄色	後期Ⅳ類	
899	耳栓	無文					

種号 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	高さ	形態	手法	胎土	備考
900	1 EN	粘土採掘溝	弥生土器	壺	9.3	15.7		外面上部ハケメ。下部ヘラミガキ。頸部に3朱の凹線		微砂(やや多)	口縁凹線中に赤色顔料
901	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	壺	16.9	6.5		口縁に列目。頸に凹線。		微砂(多)	凹縁は4条残存
902	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	壺	13.7	4.8		頸部に凹線		微砂(少)	内外面剝落
903	1 E	粘土採掘溝	弥生土器	壺	12.8	8		2本組の棒状浮文が3カ所有る。外面ハケメ。		微砂(少) 砂礫(極少)	
904	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	20.2	1.5		外面ヘラミガキ		微砂(やや多)	
905	1 WS	粘土採掘溝	弥生土器	壺	15.6			口縁端部に数条の凹線か?		0.5-1ミリの長石、黒雲母を含む	
906	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	13.3	5		頸部に凹線、外面ハケメ		微砂(中)	
907	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	壺	10.3	5.4		外面ハケメ		微砂(少)	
908	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	12.2	3.9		外面ハケメ		微砂(ごく少)	
909	1 ES	粘土採掘溝	弥生土器	壺	12.5	6.7		内外面共ハケメ。		微砂(少)	
910	1	粘土採掘溝	弥生土器	壺	14.3	4				細砂(少)	表面剝落
911	1 ES	粘土採掘溝	弥生土器	壺	12.7	4				微砂(稀)	外面剝落
912	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	15.2	3.6				砂粒めだつ	表面磨耗
913	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	14.8	4.2		内面指ナデ		微砂(極少)	外面剝落
914	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	15.2	3.7		外面ハケメ		微砂(少)	
915	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	14.8	3.7		外面ハケメ		微砂(極少)	
916	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	20.9	4.7				微砂(やや多)	
917	1 EN	粘土採掘溝	弥生土器	壺	25.4	4.7		頸部に粘土継はりつけ		砂粒ほとんどなし。赤・黒色土粒多し。	表面かなり風化
918	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	24.8	7.8				微砂(少)、赤色土粒混	表面剝落
919	1 N	粘土採掘溝	弥生土器	壺		7.1	1.9	内面指ナデ、外面ハケメ		砂粒(中)	
920	1	粘土採掘溝	弥生土器	壺	16.7	4.1				細砂(多)	内外面剝落
921	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	18.2	3.5				微砂(やや多)	
922	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	壺	17.7	5.3		内面は指ナデ、外面はハケメ		微砂(少)	

標図 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形態	手法	胎土	備考
923	1 EN	粘土採掘溝	弥生土器	甕	21.8		1.8			微砂(少)砂礫(めだつ)、赤色土粒粗	
924	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	甕	17.6		4.6	外面ハケメ。内面は円滑なナデ。		石英砂多い	
925	1 WS	粘土採掘溝	弥生土器	甕	18			口縁部に3条の沈線		0.5-1ミリの長石・長石・赤色粒を含む	
926	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	甕	18.0		5.8	口縁部に3条の沈線		細砂	
927	1	粘土採掘溝	弥生土器	甕	33.9		2.1			細砂(多)赤色土粒	内外面剝落
928	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	甕	29.7		5.9	口縁部に棒状浮文、外面ハケメ		微砂(中)	表面剝落
929	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	甕	31.3		3.7			微砂(中)	表面剝落
930	1 WS	粘土採掘溝	弥生土器	甕	8			底ナデ		0.5-1ミリの長石・石英・赤色粒を含む	
931	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	甕(甕?)	7.8		5.8	内面指オサエ		砂粒、砂礫ともに多い	外面剝落
932	2 EW	粘土採掘溝	弥生土器	甕	5.5					0.2-1ミリの長石・石英・雲母・赤色土	
933	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	甕(甕?)	8.6		2.4	内面ヘラケズリ		微砂(少)、赤色土粒含	
934	1 E	粘土採掘溝	弥生土器	脚付き甕	9.3		18.5	内面ハケメ、外面上部ハケメ下部ヘラミガキ 2列の刺突文		微砂(やや多)、赤色土粒粗	
935	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	無頸甕	7.4		2.9			砂粒ほとんど無し	
936	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	碗(高杯?)	14.1		5.4			微砂(やや多)、赤色土粒混	表面剝落
937	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	碗(高杯)	16.4		3.8			微砂(極少)	表面剝落
938	3 W	粘土採掘溝	弥生土器	無頸甕	11.8		6.9	外面ハケメ。2列のヘラ先による刺突文。内面は円滑ナデ		細砂(多)砂礫目立つ	
939	1 EN	粘土採掘溝	弥生土器	高杯	27.7		3.2			微砂(少)	
940	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	高杯?	26.2		2.6	口縁部に貫通の穴1個残存		微砂(極少)、赤色土粒混	
941	1 E	粘土採掘溝	弥生土器	高杯	42.2		6.5			石英砂多い	内外面剝落
942	1 E	粘土採掘溝	弥生土器	高杯	25.7		5.5	内外面ヘラミガキ。口縁部に貫通孔1個残存		微砂(少)、赤色土粒	僅かに赤色顔料が残
943	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	高杯	20.5		1.9			微砂(少)	
944	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	高杯	19.6		2.2			細砂(少)	
945	1 ESE	粘土採掘溝	弥生土器	高杯	18.5		2.6	内面ハケメ。外面ヘラミガキ。口縁部に貫通孔1個残存。		微砂(やや多)	表面剝落

箱図 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形態	手法	胎土	備考
946	3W	粘土探掘溝	弥生土器	鉢(高杯)	17		4	口縁部に3ミリの穿孔あり		砂粒(やや多)	
947	1EN	粘土探掘溝	弥生土器	不明	19		4.4			微砂(やや多) 砂礫(稀) 赤色土粒混	表面剝落
948	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	15.3		6.3	内外面ともにヘラミガキ、頸部に櫛描きの乳線		微砂(極少)	ほぼ真円に近い
949	1EN	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	18.8		3.5			細砂(少)、赤色土粒混	表面剝落
950	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	18.6		3.3	内外面ともにヘラミガキ		微砂(やや多)	
951	2W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	16.2		3.9	外面ヘラミガキ		微砂(少)	
952	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	27.4		2.9	内外面ともにヘラミガキ		微砂(少)	
953	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	23.6		4.1	外面ヘラミガキ		砂粒(やや多)	
954	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	18.2		3.3			微砂、稀に砂礫、赤色土粒混	表面磨耗
955	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	17.8		4.3	内外面ともにヘラミガキ		砂粒(やや多) 橙色土粒含む	
956	2W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯	13.6		5.4	内外面ともに荒いハケメ		細砂(やや多)	
957	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			13.7	外面ヘラケズリ、内面指ナデ		微砂(少)、砂礫(極稀)	脚柱部のみ
958	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			10.7	脚部にすかし有り(5個?)、外面はヘラケズリ		微砂(多)	
959	1E	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			12.9	内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキ		細砂(やや多) 内面に礫が目立つ	表面剝落
960	1ES	粘土探掘溝	弥生土器	高杯?			11.6	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、脚部にスカシ(5穴)		細砂(やや多)。赤色土粒。	
961	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			11	内・外面ともヘラケズリ		砂礫めだつ	外面剝落
962	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			12.7	内面ヘラケズリ		微砂(少)	外面剝落
963	2E	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			1.7	内面はヘラケズリ、裾部に貫通孔		微砂(少)。赤色土粒。	表面剝落
964	1WS	粘土探掘溝	弥生土器	高杯			11	脚部部に2列、上半に1列の刺突文。透かし孔7。		0.5-4ミリの石英を多く含む、赤色粒含	
965	1ESE	粘土探掘溝	弥生土器	壺	5.1		7.3	外面ハケメ、ヘラミガキ、内面指オサエ、ジボリメ		砂礫めだつ	
966	3W	粘土探掘溝	弥生土器	鉢	17.4		3.9			微砂(やや多)	表面剝落
967	3W	粘土探掘溝	土製品	分銅型土製品						3-4ミリ以下の石英粒を含む	13.05×7.6
968	3W	粘土探掘溝	弥生土器	高杯(器台?)			18.6	脚中部に透かし裾部に8条の凹線、内面はヘラケズリ		微砂(中)	

種図 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形 態	手 法	胎 土	備 考
969	1 EN	粘土採掘坑	弥生土器	器台	25.8	6.4	外面ヘラミガキ	外面ヘラミガキ		微砂(少)	口縁凹線中に赤色顔料
970	3 W	粘土採掘坑	弥生土器	器台	25.2	5.5	口縁に4本の棒状浮文			微砂(多)	表面剝落
971	NE	粘土採掘坑	弥生土器	甕	13.4	4	外面ハケメ			微砂(やや多)、砂礫(極稀)	
972	1 E	粘土採掘坑	弥生土器	甕	18	2.3				微砂(少)	
973	1 E	粘土採掘坑	弥生土器	甕	16.8	3.2	内面ヘラケズリ			微砂(少)	
974	1 E S E	粘土採掘坑	土師器	甕	14.4	2.4				微砂(稀)	
975	1	粘土採掘坑	弥生土器	鉢	21.7	8	外面ヘラミガキ、内面上部ヘラミガキ下部ヘラケズリ				
976	1 E	粘土採掘坑	土師器	高杯	17.4	4.4				微砂(少)	
977	3 W	粘土採掘坑	弥生土器	長頸壺		41.5	外面ハケメの後洗線			ほとんど砂粒なし	頸部のみ
978	1	粘土採掘坑	弥生土器	甕	6.3	6.3	内面ヘラケズリ、外面磨痕状			微砂(中)	底部に窪がある
979	2	粘土採掘坑	土師器	壺	18.9	32.0	内面は上側ナデ、下ヘラ削り。外面ヨコナデ 縦ヘラ磨き。			1ミリ前後の砂粒を含む。	
980	2 E	粘土採掘坑	土師器	壺(細)	14.8	5.6				微砂(やや多)、赤色土粒。	表面剝落
981	1 N D	粘土採掘坑	土師器	壺	14.8	8.8				微砂(やや多)	内外面剝落
982	2 E	粘土採掘坑	土師器	甕	19.2	17.8	内面ヘラケズリ。			細砂(多)	表面剝落
983	2	粘土採掘坑	土師器	甕	21.2	34.6	上3分の2指オサエの後ナデ。ヘラケズリ。			細砂(多)	
984	2 E	粘土採掘坑	土師器	甕	14.5	22.6	外ヘラミガキ。内上部ヘラケズリ下部指オサエ ニ米状刺突 <sup>2</sup>			砂礫を含む	非常に歪んである
985	1 W S	粘土採掘坑	土師器	甕	14		口縁部に7-8条の櫛描き洗線文			0.5-3ミリの長石・石英、赤色土粒を含む	
986	1 W N	粘土採掘坑	土師器	甕	15.2	26.5	口縁部に8-10条の櫛描き洗線			0.5-1ミリの長石・石英、赤色土粒含有	
987	1 W S	粘土採掘坑	土師器	甕	15.4					0.5-2ミリの石英、赤色粒を含む	全体に風化が著しい
988	2 E	粘土採掘坑	土師器	甕	13.4	22.6				微砂(やや多)、砂礫(極稀)	
989	2 E	粘土採掘坑	土師器	甕	16.7	27.8	外面上ハケメ下ヘラミガキ。内面上ヘラケズリ 下指オサエ			細砂(多)	表面剝離部分多い
990	1 W S	粘土採掘坑	土師器	甕	14.6		口縁部に8条の櫛描き洗線文			1ミリの長石・石英を多く含む	
991	1 W N	粘土採掘坑	土師器	甕	14.2	22.9	口縁部に8条-9条の櫛描き洗線文			1ミリ以下の長石・石英を多く含む	

掘削 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形態	手法	胎土	備考
992	2W	粘土採掘坑	土師器	甕	13.5	21		外ヘラミダギキ。内上部ヘラケズリ、下部指オサエ。	石英・細砂目立つ		内外面共にかなり磨耗
993	1WS	粘土採掘坑	土師器	甕	14.8			口縁部に6条—7条の櫛描き沈線文	1ミリ以下の長石・石英を多く含む		
994	1WS	粘土採掘坑	土師器	甕	14			口縁部に8条の櫛描き沈線文	0.5—3ミリの黒雲母、長石・石英を含む		
995	2区	粘土採掘坑	土師器	甕	14.2	21.5		外ヘラメ後ヘラミダギキ。ヘラケズリ後ナブア米粒状剥突2個	微砂(やや多)		
996	2EW	粘土採掘坑	土師器	甕	16.4				0.2—1ミリの長石・石英・赤色土粒を含む		
997	2	粘土採掘坑	土師器	甕	14	3.0			微砂(やや多)		内外面剥落
998	2E	粘土採掘坑	土師器	甕	14.8	18.8			微砂(やや多)		内外面とも剥落
999	2W	粘土採掘坑	土師器	甕	15.5	25.2		外ヘラミダギキ。内上部ヘラケズリ下部指オサエ米粒剥突3	細砂		外面かなり磨耗
1000	1WS	粘土採掘坑	土師器	甕	17	29		口縁部に7条の櫛描き沈線文	0.5—1ミリの長石・石英を含む		
1001	1WS	粘土採掘坑	土師器	甕	15.4	22.9		口縁部に8条の櫛描き沈線文	1ミリ以下の長石・石英を多く含む		
1002	1WN	粘土採掘坑	土師器	甕	14.8	24		口縁部に7条の櫛描き沈線	0.5ミリの長石・石英、暗赤褐色粒を含む		
1003	1ES	粘土採掘坑	土師器	甕	13	25		口縁部に5条の櫛描き沈線文	0.5—1ミリの長石・石英・赤色粒を含む		
1004	1WN	粘土採掘坑	土師器	甕	14	19		口縁部に7—8条の櫛描き沈線	0.2—2ミリの長石・石英を含む		
1005	1WN	粘土採掘坑	土師器	甕	15.8	26		口縁部に6条の櫛描き沈線	1ミリの長石・石英、赤褐色粒を多く含む		
1006	2E	粘土採掘坑	土師器	甕	13.6	13.3		外ヘラケメ。指オサエの後ヘラケズリ。	微砂(多)		表面剥落
1007	1WS	粘土採掘坑	土師器	甕	16			口縁部に7条の櫛描き沈線文	0.5—3ミリの長石・石英、赤色粒を含む		
1008	1WN	粘土採掘坑	土師器	甕	14.3			口縁部に10条の櫛描き沈線文	0.5—1ミリの長石・石英を多く含む		
1009	1WN	粘土採掘坑	土師器	甕	15.8			風化のため調整不明	0.5—1ミリの長石・石英を多く含む		
1010	1WS	粘土採掘坑	土師器	甕	15.6			口縁部に9条の櫛描き沈線文	0.5—1ミリの長石・石英を多く含む		
1011	1WN	粘土採掘坑	土師器	甕	15.2				0.2—1ミリの長石・石英・赤色土粒を含む		
1012	2E	粘土採掘坑	土師器	甕	12.7	2.9			微砂(少) 礫(極稀)		
1013	2E	粘土採掘坑	土師器	甕	13.4	2.7			微砂(少)		
1014	1W	粘土採掘坑	土師器	甕					0.5ミリの長石・石英、赤褐色粒子を含む		

矢部奥田遺跡

挿図 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形態	手法	胎土	備考
1015	1WN	粘土採掘溝	土師器	台付椀	19.6					0.5ミリの砂粒と石英を含む	
1016	1NS	粘土採掘溝	土師器	高杯	21.6					0.2-1ミリの長石・石英を含む	
1017	3W	土壇15	土師器	甕	14.8		5.4			微砂(少)	
1018	3W	土壇6	土師器	甕	14		7.3	外面は荒い、ヨコナデ。内面はヘラケズリ。		微砂(多)	
1019	3W	土壇6	土師器	甕			6.4	内面指オサエ・ヘラケズリ。		微砂(多)	表面剥落
1020	3W	土壇6	須恵器	甕	10		6.1	内面タタキ。外面ハケメの後円槽ナデ。		微砂(少)	
1021	3EN・3W	土壇6	土師器	高杯	16.0		10.1			微砂(少)	内外面ともに剥落
1022	3W	土壇7	土師器	甕	15.8		3			微砂(極少)	
1023	3W	土壇7	土師器	甕	17.4		5.3			微砂(多) 砂礫(極稀)	内外面剥落
1024	3W	土壇7下層	土師器	椀	14.8		4.5			微砂(やや多)	内外面剥落
1025	3W	土壇10	土師器	甕	14.6		7.4	外面ハケメの後ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。		細砂内面に多い	
1026	3W拡張区	土壇15	土師器	甕	15.6		5.6	外面ハケメ。内面ヘラケズリの後円槽ナデ。		微砂(やや多)	
1027	3W拡張区	土壇15	土師器	甕	14.6		20.2	外面上ハケメ下ヘラミガキ。内ヘラケズリ。		細砂内面に多い	
1028	3W	土壇9	土師器	甕	22		4.5			微砂(少)	
1029	3W	土壇9	土師器	甕(縄)	17.5		5	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。口縁ひらきに刺突文		微砂(多)	
1030	3W	土壇9下層	土師器	甕(縄)	14.2		12.4	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。		微砂(多)	
1031	3W	土壇9	土師器	小型丸底甕	8.1		6.6			石英細砂(多)	
1032	3W	土壇9下層	土師器	小型甕	7.5		8	外面指オサエ・ハケメ。内面指オサエ。		微砂(多)	
1033	3W	土壇9	須恵器	杯蓋	12.3		3.8	外面ヘラケズリ		細砂(少)	土器の回転左
1034	5	土壇54	土師器	甕	15.2			口縁部に8条の横溝き沈線文		0.5-1ミリの砂粒を含む	
1035	4	土壇3B	土師器	甕	13					0.5-1ミリの長石・石英を多く含む	
1036	4	土壇3B	土師器	甕	14.3					0.5ミリの長石・石英を含み、赤褐色粒含	
1037	4	土壇3B	土師器	甕	14.8		24.7			0.5-1ミリの長石・石英を多く含む	

矢部奥田遺跡

箱号 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	形 態	手 法	胎 土	備 考
1038	4	土壇 3 B	土師器	甕	11.5	15			1ミリの粗なる長石・石英を多く含む	
1039	4	土壇 3 B	土師器	小型壺	8.8	11			0.5-1ミリの長石・石英粒を多く含む	
1040	4	土壇 3 B	土師器	高杯		9			0.5ミリ前後の砂粒を若干含む	
1041	4	土壇 4 B	土師器	甕	16.4			口縁部に5条以上の櫛描き沈線文	0.5-1ミリの砂粒と赤褐色粒を含む	
1042	4	土壇 4 B	土師器	甕	14.4			口縁部に8条の櫛描き沈線文	0.5-1ミリの砂粒を多く含む	
1043	4	土壇 4 B	土師器	甕	19.2	18.3			1-3ミリの石英を含む	
1044	4	土壇 5 B	土師器	甕	14.6	23.1		口縁部に7条の櫛描き沈線文	0.2-1ミリの長石・石英を含む	
1045	4	土壇 5 B	土師器	甕	13.6				微細な砂粒を多く含む	
1046	4	土壇 5 B	土師器	甕	13.4				1ミリ未満の長石等の砂粒を多く含む	
1047	4	土壇 5 B	土師器	甕	16.2			調整不明	1ミリ未満の長石・石英等の砂粒を含む	
1048	4	土壇 5 B	土師器	甕	14.2	19			1ミリ-4ミリの長石を含む	
1049	4	土壇 5 B	土師器	小型丸底甕	7.6	8.1			1ミリ未満長石等を多く含む	
1050	4	土壇 5 B	土師器	高杯	20			調整不明	1-2ミリの長石等を多く含む	
1051	4	土壇 8 B	土師器	甕	13.2			口縁部に7条の櫛描き沈線文	2-3ミリの石英を多く含む	
1052	4	土壇 7 B	土師器	甕	14.2	17.4		調整不明	1ミリ以下の長石等と数ミリの砂粒を多く含む	
1053	4	土壇 7 B	土師器	甕	15.9	12.5			1-3ミリの石英・長石を含む	
1054	4	土壇 7 B	埴輪	円筒埴輪					0.5-1ミリの石英粒を多く含む	
1055	4	土壇 7 B	土師器	高杯	13.6	11.3		調整不明	3-4ミリの砂粒を多く含む	
1056	4	土壇 1 B	土師器	甕	15.4				1ミリ前後の長石・石英を含む	
1057	1 E	土壇 3 1	土師器	甕	15.2	27.1		外ハケメ。内上部へラケズリ、下部指オサエ	微砂(多)	
1058	1 E N	土壇 3 4	弥生土器	甕	9.6	3.3			微砂(多)	表面剝落
1059	1 E N	土壇 3 4	弥生土器	甕(甕)		3.4		外面へラミガキ	微砂(やや多) 赤色土粒	80%表面剝落
1060	1 E N	土壇 3 4	弥生土器	高杯	23.6	3.3			微砂(やや多) 赤色土粒多い	表面剝落



矢部奥田遺跡

地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形態	手法	胎土	備考
1061	1ES 土壇34	弥生土器	高杯				内外面ミガキ		微砂	
1062	1ES 土壇34	弥生土器	器台				外面凹線文		微砂	
1063	1E 土壇31	弥生土器	高杯	21.7		2.5	口縁開きの突起部分に刻目		微砂(少)	胴部竹管文と接合か
1064	1EN 土壇34	弥生土器	高杯	30.8		3.1	口縁下に刻目		微砂(やや多)	
1065	1E 土壇34	須器	高杯		9.5	6			細砂(少)	
1066	1E 土壇33	弥生土器	甕	14.6		2			細砂(少)	
1067	1E 土壇33	弥生土器	甕				口縁ひらきに波状文			
1068	1E 土壇33	弥生土器	甕		6.6	2.3			石英礫を含む。	
1069	1E 土壇41	土師質土器	土鍋	39.6		7.5	蓋受け部に2個の貫通孔。内外面ハケメ。		細砂(少)	
1070	1E 土壇41	土師質土器	土鍋	32		12.4	内外面ハケメ。		砂礫を含む。	
1071	1WS 土壇51	備前焼	すり鉢	32.8			内・外面横ナデ		0.5-1ミリの石英を多く含む	
1072	1WS 土壇51	土師質土器	土鍋				内外面ナデ		1ミリ前後の石英を含む	
1073	1WS 土壇51	早島式土器	碗				ヨコナデ		明瞭な砂粒含まない。	
1074	1WS 土壇53	備前焼	甕	45			横ナデ		1-5ミリの長石・石英を含む	
1075	2E 溝1	土師質土器	小皿	7.3		1.1			石英礫を含む	
1076	2E 溝1	土師質土器	小皿	7		1.1	丁寧な作り			
1077	2E 溝1	土師質土器	小皿	7		1.2			微砂(少)	
1078	2E 溝1	土師質土器	小皿	7.8		1.3			微砂(少)	
1079	2E 溝1	早島式土器	碗	14.7		2.9				
1080	2E 溝1	青磁	碗	4.8		3.1				龍昇窯
1081	2E 溝1	瓦質	鉢(?)	39.6		1.9			微砂(やや多)	
1082	2E 溝1	土師質土器	土鍋	38.6		13.6	内外面ともハケメ。		微砂(稀)	火にかけた痕見られる
1083	2E 溝1	土師質土器	鉢	23.5		8.8	内外面ともハケメ。		微砂	完品

矢部樂田遺跡

種別 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	器高	形態	手法	胎土	備考
1084	1WS	溝5	土師質土器	土鍋					0.5ミリ前後の砂粒を含む	
1085	1WS	溝5	土師質土器	土鍋			口縁部ヨコナデ		1ミリ前後の砂粒を含む	
1086	1WS	溝5	備前焼	すり鉢		12.4	内・外面横ナデ		1-数ミリの砂粒を含む	
1087	1WS	溝5	亀山焼	甕			内面横ハケメ		1ミリ前後の砂粒を微量含む	
1088	3E	P 5 6	弥生土器	高杯	20.8				0.5ミリの砂粒と赤褐色粒を多く含む	
1089	3E	P 5 6	弥生土器	甕	9				0.5ミリ-1ミリの砂粒を多く含む	
1090	2E	P 3 2	土師質土器	高台付き碗	6		内・外面ナデ		1-2ミリの長石・石英を含む	
1091	1E	P 1 2 0	土師質土器							釉がらのあと多数
1092	2E	P 3 2	土師質土器	高台付き碗	5.2		内・外面指ナデ		1ミリの長石・石英を含む	
1093	1WS	P 2 4 8	土師質土器	小皿	9.2	2.8				
1094	1WS	P 1 5 2	土師質土器	小皿	5.8	1.5	底面に板目		精製粘土	
1095	1WS	P 2 2 5	土師質土器	小皿	6.6	1.5			精製粘土	
1096	1WS	P 1 4 4	早島式土器	へそ碗		0.9			細砂(少)	
1097	1WS	P 1 3 1	土師質土器	小皿	5.5	1.2			微砂(少)	
1098	1ES	P 1 2 5	土師質土器	小皿	6	1.3			精製粘土	
1099	1ES	P 2 4 3	土師質土器	鉢	25.4	3.9			微砂(少)	
1100	1WS	P 1 3 1	土師質土器	土鍋	25.3	7.5	内外面ともハケメ。		微砂(少)	
1101	1WS	P 1 3 2	土師質土器	土鍋	33.3	10	内外面ハケメ		細砂(少)	外面スス付着
1102	1WS	P 1 5 6	土師質土器	土鍋	35.8	12.3	外面指オサユ、下ハケメ。内面ハケメ。		微砂(少)	
1103	1WS	P 2 1 0	備前焼	すり鉢		15.7 4.3			微砂(少)	
1104	5	南四口	弥生土器	甕	15.6	6.9			1ミリ未満の長石等を含む	
1105	5	包土	弥生土器	甕	16.2	2.8			微砂(少)	
1106	1ENE	上層	弥生土器	甕	10.2	1.8	口縁に列み目		微砂(やや多)赤色土粒	

箱号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	形態	手法	胎土	備考
1107	5 S	A層	弥生土器	甕			内面は横ナデ、下横ハケ目。外面は横ナデ、横ミガキ。	0・5ミリ前後の砂粒を多く含む。		
1108	5 S	A層	弥生土器	甕			内面横ナデ、外面横ナデ、縦ハケ目。	0・5ミリ前後の砂粒を多く含む。		
1109	3 W	上層	弥生土器	甕	15.5	4.1		細砂目立つ		表面剥落
1110	3 W	上層	弥生土器	甕	20.2	3.9		細砂(多)		表面剥落
1111	3 W	上層	弥生土器	甕	22.6	1.5		ほとんど砂粒なし		表面剥落
1112	3 W	上層	弥生土器	高杯	12	2.6		ほとんど砂粒なし		表面剥落
1113	1 E S	西上層	弥生土器	器台		27.5	脚部部に8条の凹線が残存	微砂(中) 赤色土粒多い		
1114	2 E	上層	弥生土器	甕	13.3	5.6		細砂(やや多)		内外面剥落
1115	2 E	上層	弥生土器	甕	17	5.4	後期的胎土に製法は中期の名残	砂粒・砂礫多い		内外面剥落
1116	1 E	包土	土師質土器	直口壺	12.9	6.5	内外面ハケム。	微砂(極少)		
1117	2 W	包土	土師器	甕	11.7	7.3	外面ハケム。内面ヘラケズリ。	細砂(多)		表面剥落
1118	3 E	側溝及び上層	土師器	小型甕	10	9.6	外面は面を持つ凹凸が激しい。内面は指ナデ指オサエ。	微砂(やや多)		表面剥落
1119	4	水路	土師器	小型丸底壺	7.6	8.6		1ミリ以下の長石・石英を多く含む		
1120	1 W S	包土	土師器	埴	6.9	5.4	外面指オサエ。内面はナデあげ。手コネ。	細砂(少)。		
1121	T 1 7		埴輪	円筒		6.6		細砂(少)		
1122	1 E	上層	須恵器	飯?		9		微砂。角セン石を含む。		
1123	T 1 3		埴輪	器材				石英・微砂目立つ		
1124	1		土製品	紡錘車				細砂(少)		2.9×2.8×0.66 6.6g
1125	1 W N	上層	土師質土器	椀			内外面は調整不明	1-2ミリの石英を含む		
1126	2 E	上層	早島式土器	椀	13.2	3.8		細砂(稀)		全体にかなり歪み
1127	T 1 6		瓦器	椀	13.3	2.3	内面は暗文	砂粒はほとんど無し		
1128	T 1 6		早島式土器	椀	8.8	4.3	内面指ナデの後ハケナデ	石英細砂(稀)		
1129	2 E	下段	土師質土器	皿(碗)		4.9		微砂(極稀)		

挿図 番号	地区	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	形態	手法	胎土	備考
1130	1ES	中世包土	土師質土器	小皿	8.6		1.6	内外面は調整不明		0.5-1ミリの石英を含む	
1131	1W	上層	土師質土器	小皿	6.4		1.4	内面指ナデ		水漉し粘土	
1132	1WS	中世包土	土師質土器	小皿	8.4		1.9	内外面は調整不明		1ミリ前後の砂粒を含む	
1133	1WS	中世包土	土師質土器	小皿	8		2	内外面は調整不明		1-数ミリの石英を少量含む	
1134	2E	下段	土師質土器	小皿	8.8		1.4	底部ヘラオコシ		砂粒ほとんど無し。赤色土粒。	
1135	1WS	中世包土	土師質土器	小皿	5.4		0.9	底部ヘラ切り		0.5ミリ前後の赤褐色粒を若干含む	
1136	2E	下段	土師質土器	小皿	8.2		1.5	底部ヘラオコシ		砂粒ほとんど無し。赤色土粒。	
1137	2E	下段上層	土師質土器	小皿	7.8	6.3	1.2			微砂(少)	
1138	1WS	中世包土	土師質土器	小皿	7		1.1	底部ヘラ切り		0.5-1ミリの砂粒を多く含む	
1139	1ESSNE	包土	土師質土器	小皿	6		1			精製粘土	
1140	1E	上層	土師質土器	底部		5.7	3			精製粘土	土器の回転左
1141	1ES	上層	備前焼	大甕			8.1	玉縁			
1142	1ES	上層	備前焼	大甕			5.8	玉縁			
1143	2E	上層	備前焼	メノコ					後期的胎土に製法は中期の名残		3.28×3.47×1.4 22g
1144	1W	上層	土師質土器	土鍋	24.4			口縁部横ナデ		0.5-1ミリの砂粒を含む	
1145	1WS	中世包土	土師質土器	土鍋				外面は指押さえ後、縦ハケメの横ナデ		1-数ミリの石英を若干含む	
1146	5S肩	用水	土師質土器	土鍋				口径部横ナデ、胴部外面たたきめ		0.5ミリ未満の砂粒を含む	
1147	1WN	上層	土師質土器	土鍋				外面は縦ハケメの、強い横ナデ		0.5ミリ前後の砂粒を多く含む	
1148	T16		真鍮系須恵器	こね鉢						石英微砂(少)	
1149	1E	包土	備前焼	大甕			4.5				
1150	1E	上層	備前焼	すり鉢							
1151	1ESSE	包土	備前焼	すり鉢			5				
1152	1EN	上層	備前焼	すり鉢			4.5				



矢部奥田遺跡

表 4 出土石器観察表

図 番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重 量g	備 考	時期
1	石 鏃	東 3	貝 塚	サマサイト	7.0-	7.5-	2.0	0.08		縄文
2	R. F.	東 4	"	"	26.0	16.5	3.0	1.42	ほぼ完形	"
3	石 鏃	東 6	"	"	13.5-	6.0-	2.5	0.23		"
6	4	"	東 8	"	44.0	16.0-	3.2	1.69	II b、大型	"
5	石器片	"	"	"	17.0-	18.0	3.5	1.07		"
6	石 鏃	東 9	"	"	8.5-	7.0-	2.0	0.12		"
7	石鏃未製品	東 10	"	"	18.5-	12.0	3.0	0.75		"
8	石器片	東 11	"	"	26.5-	17.0-	7.0	2.44		"
4	9	石 鏃	東 13	"	23.0-	16.5-	2.8	0.76	II a	"
10	"	"	"	"	8.0-	15.0-	2.5	0.19		"
11	U. F.	"	"	"	14.0	8.0	3.0	0.26		"
12	石 鏃	東 14	"	"	23.7	13.5-	3.0	0.72	II b	"
13	"	東 17	"	"	27.0-	6.5-	4.0	1.31	II b?	"
14	スクレイパー	"	"	"	37.0	34.0	10.0	16.60	II b、完形、刃部再生	"
15	U. F.	"	"	"	24.0	34.0	5.0	4.12	完形	"
16	石鏃片?	"	"	"	14.5-	14.5-	4.0	0.68		"
17	石器片	"	"	"	20.5-	20.0	6.5	3.02		"
18	"	東 22	"	"	16.5-	10.0	3.0	0.41		"
19	U. F.	"	"	"	20.0	1.9	4.0	1.29		"
3	20	石 鏃	東 23	"	19.0-	16.5	4.0	0.81	I a	"
21	U. F.	東 24	"	"	27.0	24.0	3.5	2.24	完形	"
5	22	石 鏃	西 26	"	17.5-	12.5	2.0	0.38	II b、ほぼ完形	"
23	U. F.	西 27	"	"	21.5-	16.0	3.0	0.79		"
24	"	"	"	"	14.0-	13.0	2.0	0.30		"
25	スクレイパー	西 29	"	"	23.0-	20.0	7.0	2.49	II	"
26	石 鏃	西 32	"	"	18.0-	13.0-	2.5	0.44	II b	"
27	石器片	"	"	"	11.0-	7.5	3.5	0.17	石鏃片か?	"
28	石 鏃	西 33	"	"	20.5	15.5	3.0	0.66	I b、ほぼ完形	"
29	"	"	"	"	13.0-	10.0-	2.0	0.31	II	"
30	石鏃未製品	西 34	"	"	22.5-	17.5	4.5	1.70		"
31	石 鏃	西アゼ35	"	"	22.0	18.0	3.2	0.78	II c、完形	"
32	"	"	"	"	21.5	18.5	3.8	0.93	II b、ほぼ完形	"
33	"	西アゼ36	"	"	12.5	15.0	2.5	0.62	II a	"
34	石器片	"	"	"	31.0-	27.0	7.5	6.69		"
35	"	西アゼ38	"	"	16.0-	32.0	6.5	3.21		"
36	石鏃未製品?	"	"	"	20.5	14.0-	3.0	1.02		"
37	石 鏃	中 40	"	"	20.0	16.5	4.0	0.85	II b、ほぼ完形	"
38	"	"	"	"	23.0	15.0	3.0	0.71	II b	"
39	"	中 45	"	"	17.8	14.6	3.8	0.62	II d、ほぼ完形	"
40	"	"	"	"	15.0	14.5-	2.5	0.40	II c	"
41	石器片	中 46	"	"	9.0-	22.0	4.0	0.89	石鏃片?	"
42	石 鏃	中 47	"	"	18.5-	12.0-	2.5	0.52		"
43	"	中 48	"	"	18.7	17.3	3.5	0.86	II b	"
44	"	中 49	"	"	18.0	17.5	2.7	0.52	II c 完形に近い	"
45	石器片	"	"	"	16.0-	15.0	3.5	0.66	小片	"
46	R. F.	中 54	"	黒曜石	13.5	17.0	3.0	0.87		"

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	47	石鏃	中 56	貝塚	サヌカイト	30.0	17.5-	3.7	1.14	Ⅱ b	縄文
	48	不明石器	中 59	"	"	26.5-	19.3	8.5	4.47	石鏃頭部、完形	"
	49	石鏃未製品	"	"	"	-24.5-	16.8	4.0	1.35		"
	50	石鏃	中 60	"	"	-23.5	17.2	6.5	2.10	I a、ほぼ完形	"
	51	"	"	"	"	-21.0-	-10.5	4.0	0.78		"
	52	"	中 62	"	"	-13.0	15.0	2.0	0.35	Ⅱ b	"
	53	石鏃?	"	"	"	27.0-	19.2	3.7	1.52	未製品?	"
	54	石器片	東アゼ66	"	"	-10.0	-15.0-	3.5	0.55	石鏃? 小片	"
	55	敲石	東アゼ74	"	安山岩	45.5-	-57.0-	26.0	46.63		"
	56	R. F.	"	"	サヌカイト	-34.0	-20.0	3.5	1.68		"
	57	"	東アゼ75	"	"	-20.0	17.0	2.5	1.08		"
	58	敲石	貝層T77	"	流紋岩	32.5-	23.0-	12.5	11.70		"
	59	石鏃	貝層T78	"	サヌカイト	33.5	16.5-	4.0	1.36	Ⅱ b	"
	60	石器片	"	"	"	-13.0	12.0	2.0	0.45	石鏃?	"
	61	石鏃	貝層T81	"	"	-16.0-	-11.0-	3.0	0.47		"
	62	U. F.	貝層T84	"	"	-47.0	20.0	6.0	5.10	ほぼ完形	"
	63	"	貝層上面88	"	"	23.5	18.5	3.0	1.61	完形	"
	64	"	"	"	"	43.5-	25.0	9.0	8.14	完形に近い	"
	65	石器片	"	"	"	-23.0-	22.5	4.0	2.19		"
	66	石鏃	"	"	"	-13.0	15.0-	2.5	0.58		"
	67	"	"	"	"	25.8	18.5	5.0	1.76	I a、ほぼ完形	"
	68	"	貝層上面	"	"	-19.5	-16.3	3.8	0.80	Ⅱ b	"
	69	"	貝層上面88	"	"	25.0	20.0	4.0	1.85	I a? 未製品? ほぼ完形	"
	70	"	"	"	"	-20.0-	-11.5	2.5	0.47		"
	71	"	"	"	"	-17.0	9.5-	2.3	0.26	Ⅱ d	"
	72	"	"	"	"	-17.0	-13.7	2.6	0.39	Ⅵ	"
	73	"	"	"	"	15.0-	10.5	2.5	0.39		"
44	74	凹石	貝塚	貝層(中)肩口	流紋岩	112.0	98.5	81.0	1367.44	完形	"
	75	石鏃	2区西側	土壌1	サヌカイト	-20.5	21.0	5.5	1.95	I a	
	76	石器片	2-西	土壌3西	"	-16.5	17.0	2.0	0.65	石鏃?	
	77	スクレイパー	3区西	土壌8南西区	"	48.0-	53.0	9.0	23.00	I b	
	78	打製石彫丁	1区東(北半)	土壌31	"	51.0	-39.5	15.0	31.09	折り残存	
1	79	大型蛤刃石斧	1区東(北半、南東区)	土壌33	安山岩	-135.0	64.5	43.0	602.62	ほぼ完形	
2	80	砥石	1区西、南半	土壌53	半花崗岩	101.5	61.0	59.5	536.22	U字状の溝あり 完形	
38	81	"	1区西、北半	土壌58	半花崗岩	-162.5-	131.5	69.0	1599.56		
29	82	乳鉢状石斧	3区西	P10	安山岩	52.5-	-39.5-	31.0	75.41	基部	縄文
	83	楔形石器?	3区東(南半)	縄文包土	サヌカイト	39.0	31.5	6.3	8.79	I、ほぼ完形	"
	84	石鏃	"	"	"	-14.0-	19.0-	3.0	0.89	Ⅱ a?	"
	85	石器片	"	"	"	-24.0	-16.0	7.0	1.92		"
	86	石核	"	"	"	16.0	38.0	14.0	14.33	完形	"
	87	R. F.	"	"	"	37.5	37.0	7.0	9.84	ほぼ完形	"
	88	スクレイパー	"	"	"	-27.0	26.5	5.0	4.21	Ⅱ	"
	89	R. F.	"	"	"	23.0	18.5	4.0	2.18	ほぼ完形	"
	90	敲石	"	"	細粒花崗岩	-71.5	-97.0	23.5	185.06		"
	91	"	"	"	花崗岩	-57.5	84.0	33.0	232.22	I	"
	92	砥石	"	"	安山岩	-34.5-	45.0-	15.5-	15.35		"

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 $\square$	最大幅 $\square$	最大厚 $\square$	重量g	備考	時期
	93	石鏃	1区西南半	溝5	サヌカイト	-18.0	21.0	4.0	1.65	Ⅱb	
	94	石鏃?	"	"	"	-18.0	-12.0	3.0	0.78		
	95	スクレイパー	"	"	"	-31.5	22.0	3.0	2.75	Ⅱb?	
	96	石鏃	1区東上層		"	27.5	16.5	3.5	1.32	Ⅱa、ほぼ完形	
20	97	スクレイパー	1区東	上層	"	49.0	46.0	16.5	39.80	Ⅰa、完形	
	98	石鏃	"	"	"	35.5-	22.0	6.8	5.45	頭部	
7	99	石鏃	"	"	"	-26.0	29.0	4.5	4.36	Ⅰa、大型	
	100	石器片	"	"	"	24.2-	24.0-	6.5	3.60		
	101	"	"	"	"	-28.0	26.5	8.5	6.42	尖頭状石器?	
	102	"	"	"	"	-17.5-	20.5	6.0	3.13		
	103	"	"	"	"	-18.0-	-24.0	6.0	3.01		
	104	不明石器	"	"	"	29.0-	30.0	7.5	8.10		
	105	石核	"	"	"	40.0	34.5	19.0	34.34	完形	
	106	スクレイパー	"	"	"	37.0-	54.0	12.5	28.10	Ⅰa	
	107	不明石器	"	"	"	-31.0-	22.5	7.0	4.37	鏃状の突起あり	
	108	スクレイパー	"	"	"	33.0-	37.0	4.0	5.59	Ⅱ	
	109	"	"	"	"	51.0-	39.0	8.5	15.43	Ⅱ	
	110	R. F.	"	"	"	29.0-	28.0	3.0	2.58		
18	111	打製石庖丁	1区東(北半)	"	"	-44.0-	50.0	11.0	30.35	表面面珪酸付着	
39	112	砥石	"	"	細粒砂岩	55.5-	77.0	28.0	205.42		
19	113	スクレイパー	"	"	サヌカイト	47.5-	37.5	6.5	15.95	Ⅰb	
	114	"	"	"	"	32.0-	-27.0	7.0	7.26	Ⅰ	
	115	不明石器	"	"	"	37.0	29.0	6.5	7.58	大型石鏃未製品?	
	116	"	"	"	"	29.0-	33.0	6.0	5.80		
	117	石鏃	1区東(北半東)	"	"	-30.0	21.0	3.3	2.39	Ⅱa、大型	
	118	楔形石器	"	"	"	32.5	29.0	12.0	12.88	Ⅱ	
	119	スクレイパー	"	"	"	26.5	30.0	5.0	3.94	Ⅰ	
	120	"	"	"	"	30.0-	28.0	7.0	7.10	Ⅰb	
	121	"	"	"	"	-41.0	31.0	11.0	11.43	"	
	122	U. F.	"	"	"	38.0	21.0	8.5	6.95	完形	
41	123	石鏃	"	"	安山岩	83.0	71.5	19.0	164.41	Ⅰ、完形	
37	124	砥石	"	"	砂岩	-55.5-	77.0	28.0	205.42		
25	125	スクレイパー	1区東 北半の東	採掘域	サヌカイト	85.0	42.0	9.5	47.58	Ⅱ、ほぼ完形	
	126	不明石器	"	"	"	44.0	27.0	6.5	6.84	完形	
	127	楔形石器片?	"	"	"	25.5-	-26.5	4.5	4.16		
	128	スクレイパー	"	"	"	29.5-	-30.0	5.5	4.62	Ⅰ	
	129	不明石器	"	"	"	34.0-	22.0	3.5	3.55		
	130	R. F.	"	"	"	-21.5-	-27.0	3.5	1.89		
	131	U. F.	"	"	"	36.5-	-27.5	8.0	5.56		
36	132	砥石	1区東(北半) 南西区	"	珪岩	-76.0	41.5	29.5	96.29		
8	133	石槍状石器	"	"	サヌカイト	-25.2	25.1	8.5	7.76		
	134	石鏃	"	"	"	-12.0-	14.0	4.0	0.81	Ⅰa、1/2残存	
	135	スクレイパー	"	"	"	-70.0-	45.0	15.0	48.92	Ⅰa	
	136	"	"	"	"	-70.0-	51.0	14.0	43.48	Ⅰb	
	137	石器片	"	"	"	29.0-	-26.0	8.0	6.02		
	138	R. F.	"	"	"	34.5	22.3	4.5	3.36		
	139	蔽石	"	"	花崗斑岩	108.0-	-93.0	30.0	287.05	Ⅱ、1/2残存	



矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	140	石 鏃	1区東南端	包土上層	サヌカイト	-22.7	15.7	4.5	1.42	I a、ほぼ完形	
	141	石 錐	1 E S	上 層	"	25.0	17.5	4.0	1.49	I、完形	
	142	スクレイパー	"	"	"	58.0-	52.0	16.0	29.52	II a	
	143	石器片	"	"	"	40.6	20.5-	10.0	7.94		
	144	"	"	"	"	17.0-	17.0-	4.5	1.58		
	145	R. F.	"	"	"	-34.5	10.0	6.2	2.55	ノミ的な機能か	
	146	砥石	"	"	流紋岩	-35.0-	25.5	3.5	5.15		
	147	U. F.	"	"	サヌカイト	-19.0	-24.0	5.0	1.74		
21	148	スクレイパー	1区東(南半)	西上層	"	-53.5	39.5	6.5	16.30	I a、抉り有り	
	149	"	"	"	"	-32.0	39.8	8.5	10.76	I	
	150	楔形石器	"	"	"	18.5	24.0	8.0	3.69	I、完形	
	151	R. F.	"	"	"	-37.0	23.0	10.0	5.98		
	152	U. F.	"	"	"	-32.5	17.5	5.5	3.79		
	153	敲石&磨石	"	"	安山岩	-91.0	101.0	63.0	700.55	I	
	154	敲石	"	"	流紋岩	131.0	111.5	65.0	1545.61		
31	155	大型始刃石斧	1区東南端	採掘坑	細粒閃緑岩	63.5-	-50.5-	24.0-	74.85	基部片	
	156	スクレイパー	"	"	サヌカイト	-40.5-	-38.0	13.0	12.70	I b	
	157	"	1 E	"	"	-59.5-	-53.0	7.0	16.66	I	
	158	U. F.	"	"	"	53.0	45.0	25.5	37.24	完形	
12	159	打製石胞丁	1区東・南東区	"	"	64.0	38.0	9.5	26.08	完形、小型	
	160	スクレイパー	1区東(南東部)	"	"	70.5-	-43.0	6.0	14.56	I	
	161	石器片	1区東(南東区)	"	"	-10.0-	-20.3	9.5	1.08	小片、スクレイパー刃部片?	
	162	スクレイパー	"	"	"	37.0-	-21.0	10.5	7.70	I	
	163	R. F.	"	"	"	39.5	26.5	8.0	10.05	ほぼ完形	
	164	U. F.	"	"	"	38.0	-30.5	5.5	5.72		
	165	敲石	"	"	石英安山岩	-134.0	63.0	50.5	622.90	II	
	166	石 鏃	1区東(南半) 南東区	"	サヌカイト	-17.5	15.5	3.8	0.90	I a	
	167	石 錐	"	"	"	23.5-	20.0	4.5	0.93	I	
	168	石槍状石器	"	"	"	-40.5	27.0	10.0	14.32		
	169	不明石器	"	"	"	47.0-	37.5	11.0	15.80	柄装着か? 敲打	
	170	スクレイパー	"	"	"	-40.5-	43.0	9.0	15.44	I b	
	171	楔形石器?	"	"	"	24.5	-22.0-	5.0	3.57		
	172	スクレイパー	"	"	"	44.8	33.0	7.5	12.13	I a、完形に近い	
	173	"	"	"	"	-38.0-	-24.0	5.0	4.73	I	
	174	"	"	"	"	-36.0	-27.5	4.0	4.39	II	
	175	"	"	"	"	50.0-	36.0	10.0	17.52		
	176	"	"	"	"	-20.0-	32.0	5.0	4.53	II b	
	177	"	"	"	"	-22.0-	-23.0	3.5	1.42		
	178	U. F.	"	"	"	53.5	28.0	7.0	9.88	完形	
	179	石 核?	1区西(北端)	本田造成土層中	"	50.0	44.0	10.5	28.79	"	
	180	打製石胞丁	"	"	"	-36.0-	51.0	6.0	9.58		
	181	U. F.	"	"	"	29.0	8.0	8.0	1.79	完形	
	182	スクレイパー	1 W N	採掘坑	"	80.0	-36.0	10.5	38.66	I	
	183	石 核	"	"	"	28.0-	44.5	14.5	22.07		
	184	石器片	"	"	"	-34.5	35.5	7.0	7.54		
	185	"	"	"	"	-47.5	15.0	11.2	5.00		

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	186	石器片	1 W N	採掘場	サヌカイト	-24.0-	8.0-	5.0	0.54		
	187	R. F.	"	"	"	-25.0-	-30.0	2.5	2.21		
	188	U. F.	"	"	"	33.0-	29.0	7.0	5.92		
	189	石器片	"	"	"	-18.0-	-11.0	2.0	0.39		
	190	石核?	1区西北端	"	"	51.5	-39.5	15.0	38.59		
	191	スクレイパー片	"	"	"	-17.5-	49.0-	14.0	14.20	背部片	
	192	敲石	"	"	安山岩	130.0	94.0	15.0	288.47	完形	
	193	石鏃	1区西(北半の南)	"	サヌカイト	23.0-	14.0	4.0	1.18	基部を欠く	
	194	"	"	"	"	16.0-	11.5	3.5	0.59	"	
	195	スクレイパー	"	"	"	31.0	-32.0	15.0	11.93	I a	
	196	石核片	"	"	"	23.0-	-27.0-	12.0	7.58		
	197	R. F.	"	"	"	24.5-	20.5	4.5	2.18		
	198	U. F.	"	"	"	-28.0	-21.0	2.5	1.45		
	199	打製石胞丁	1 W N S	"	"	-46.5-	50.0	15.0	45.05	両端を欠く	
	200	スクレイパー	"	"	"	46.0-	68.0	15.0	44.32	II a	
	201	"	"	"	"	19.0-	35.0	8.0	7.32	I b	
	202	"	"	"	"	-14.5-	-36.0	7.0	4.53	I	
	203	"	"	"	"	-32.0-	-34.5	6.0	6.55	I a	
	204	R. F.	"	"	"	50.0	19.0	7.5	7.25	完形、石鏃の可能性もあり	
	205	"	"	"	"	-57.5-	34.0	7.5	12.91	石鏃IIか?	
	206	U. F.	"	"	"	30.5	17.5-	5.5	3.41		
34	207	磨製石斧	"	"	流紋岩	-183.5	58.5	49.0	793.99	丸ノミ形石斧か? はば完形	
	208	スクレイパー	1区西北半(南部)	"	サヌカイト	50.0-	35.5	13.0	20.25	I b	
	209	U. F.	"	"	"	37.0	25.5	8.0	6.39	完形	
	210	"	1区西北半(北部)	"	黒曜石	39.0	35.0	26.5	27.58	完形	
23	211	スクレイパー	"	"	サヌカイト	51.5	36.0	10.0	19.24	II a、はば完形、掘器	
	212	石鏃	"	"	"	30.5-	34.5	8.0	8.20	頭部	
	213	スクレイパー	"	"	"	-25.0-	-19.0	4.0	2.11	I、小片	
	214	"	"	"	"	29.5-	23.0	8.5	6.31	I a	
	215	石器片	"	"	"	27.5-	24.0	10.0	4.58		
	216	U. F.	"	"	"	-20.0-	16.0	3.0	1.37		
	217	不明石器	1区西(北半の北)	"	"	40.0	22.5	13.0	9.75	はば完形	
	218	スクレイパー	"	"	"	-48.5	48.5	13.0	29.37	I a、打製石胞丁の可能性もあり	
	219	スクレイパー	"	"	"	-39.0	44.0	8.0	15.27	I b	
	220	"	"	"	"	-45.0-	-28.0	7.0	9.29	II	
	221	不明石器	"	"	"	-21.0	22.0	10.0	3.81		
	222	U. F.	"	"	"	-29.5	42.0	5.0	5.77		
	223	打欠石鏃	"	"	流紋岩	69.0	52.0	19.0	89.15	I、完形	
43	224	凹石	"	"	流紋岩	98.0	79.0	46.0	544.03	完形、表裏面に磨痕	
	225	敲石&磨石	1区西(南半の北)	"	閃緑岩	126.0	96.0	53.0	1005.05	I、完形	
	226	石鏃	"	上段採掘場	サヌカイト	-21.5	16.0	3.5	0.81	II b、はば完形	
	227	"	"	"	"	-25.5	14.2	4.5	1.36	IV b、先端を欠く	
	228	"	"	"	"	-37.0-	16.5	5.0	2.86	"	
	229	石鏃未製品	"	"	"	-28.0-	21.0	6.0	3.41	III?	
	230	石鏃未製品?	"	"	"	-27.5	21.0	5.5	3.11	"	

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	231	石鏃?	"	"	"	-21.0-	20.0	5.0	3.02		
	232	打製石庖丁	1区西(南半の北)	採掘坑	サヌカイト	-47.0-	-24.0-	8.5	20.11	扶部残存	
	233	楔形石器	"	"	"	35.0	34.0-	6.0	11.62	Ⅱ	
	234	不明石器	"	"	"	-33.5-	23.5	7.0	6.83		
	235	スクレイパー	"	"	"	-63.3-	29.0	6.0	10.08	I b	
22	236	"	"	"	"	74.0	-41.5	9.0	35.04	I	
	237	"	"	"	"	16.0-	33.5	7.0	3.87	I b、小片	
	238	不明石器	"	"	"	-36.0-	28.0	6.5	7.94		
	239	スクレイパー	"	"	"	35.5-	-28.0	9.0	10.66	I	
	240	"	"	"	"	-22.0-	-19.0	6.0	3.26	I、小片	
	241	石器片	"	"	"	-27.5-	31.0	5.0	5.79		
	242	R. F.	"	"	"	44.5-	-28.0	4.0	4.89		
	243	U. F.	"	"	"	21.0-	30.0	8.5	6.06		
	244	"	"	"	"	45.5	-16.5	7.0	3.91		
	245	R. F.	"	"	"	-15.5	15.5-	2.0	0.57		
40	246	打欠石錘	"	"	石英斑岩?	70.0	44.0	17.5	70.63	I、完形	
	247	敲石&磨石	"	"	半花崗岩	56.0-	74.0	47.0	259.02		
	248	打製石庖丁	1区西南半(東側)	"	サヌカイト	57.0-	55.5-	7.5	31.60		
	249	石鏃	"	"	"	-34.5	21.0	5.0	3.96	Ⅲ、未製品?	
	250	石核	"	"	"	51.0	54.0	22.0	65.43		
	251	スクレイパー	"	"	"	68.5	51.5	6.5	27.30	I b?	
	252	U. F.	"	"	"	-39.2-	21.3	21.0	16.03		
	253	"	"	"	"	-35.2-	-32.0	5.8	5.40		
	254	石鏃	2区東上段	上層	"	18.5-	14.0	3.0	0.61	Ⅱ b、脚端を欠く	
9	255	磨製石剣	"	"	安山岩	44.0-	-28.0-	9.0	12.71		
	256	打製石庖丁片	"	"	"	-25.0-	52.5	9.0	11.09	表裏に磨耗痕	
	257	楔形石器	"	"	サヌカイト	44.5	47.5-	15.2	40.28	Ⅱ	
	258	R. F.	"	"	"	23.5	19.5	7.0	2.01	ほぼ完形	
	259	スクレイパー	"	"	"	53.5	38.5	10.0	23.03	Ⅱ a、ほぼ完形	
	260	U. F.	"	"	"	60.0	-18.5	10.5	9.15		
47	261	敲石&磨石	"	"	細粒花崗岩	128.0	96.0	88.0	1546.95	I、完形	
30	262	乳棒状石斧	2区東上段(の西半)	採掘坑	細粒閃緑岩	58.0-	-45.5-	36.5	98.87	基部	
	263	敲石	"	"	半花崗岩	90.0	84.5	27.0	271.70	Ⅱ、完形	
11	264	磨製石庖丁	"	"	緑色片岩	83.5-	37.0	7.4	32.98	1/2残存	
	265	石鏃	2区東下段	(溝共伴)	サヌカイト	-29.0	19.0	4.0	2.29	I b、ほぼ完形	
	266	石器片	"	"	"	41.0-	23.5-	5.0	5.38		
13	267	打製石庖丁	"	上層	"	83.5-	46.0	12.5	51.95	2/3残存	
	268	石槍状石器	"	"	"	-16.5-	24.5	10.0	4.37	楔形石器Iの可能性もあり	
	269	スクレイパー	"	"	"	52.5	-68.0	19.0	74.89	I a	
	270	"	"	"	"	-29.0-	-57.0	12.0	22.04	I	
	271	不明石器	"	"	"	-27.0-	31.5	6.0	5.35		
	272	スクレイパー	"	"	"	-20.5-	41.5	5.0	5.20	I a	
	273	"	"	"	"	-51.0-	39.0	7.0	15.96	I b	
	274	石器片	"	"	"	-63.0-	42.0-	8.5	26.01		
	275	石核	"	"	"	82.0	62.5	11.5	74.47	ほぼ完形	
	276	楔形石器?	"	"	"	23.5	-23.5	10.0	4.55	Ⅱ	

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	277	不明石器	2区東下段	上層	サヌカイト	79.0	32.0	21.0	61.61	完	
	278	"	"	"	"	30.0	23.0	5.0	3.71	ほぼ完形 石鏃の未製品?	
	279	石器片	"	"	"	26.0	-28.0	5.0	3.33		
	280	石核	"	"	"	54.0	52.0	13.5	50.94	ほぼ完形	
	281	R. F.	"	"	"	59.5	49.5	9.5	22.44	ほぼ完形	
	282	"	"	"	"	21.0	-18.5	5.0	1.71		
	283	石器片	"	"	"	-8.0	28.5	5.0	1.19		
	284	U. F.	"	"	"	59.0	35.0	13.5	22.50		
	285	スクレイパー	"	採掘場	"	61.5	42.0	1.0	21.58	Ⅱ a、ほぼ完形	
	286	不明石器片	"	"	"	-35.0	25.0	6.0	6.42		
	287	敲石&磨石	"	"	花崗斑岩	103.5	77.5	56.0	618.10	Ⅱ、完形	
	288	石鏃片	"	"	サヌカイト	17.0	6.0	2.5	0.28	Ⅱ b、1/2残存	
	289	石鏃?	2区西	"	"	-20.5	19.0	4.0	1.74	未製品?	
	290	石鏃未製品	"	"	"	26.5	19.0	3.0	1.37	I a、完形	
	291	石器片	"	"	"	-20.5	20.5	4.5	1.96	石鏃未製品?	
	292	"	"	"	"	-16.0	16.0	4.5	1.11	"	
10	293	楔形石器	"	"	"	24.5	26.5	8.5	6.49	Ⅱ	
	294	打製石胞丁片	"	"	"	-19.0	46.0	8.5	6.83	表裏面刃部光沢	
	295	"	"	"	"	-16.0	31.0	9.0	3.72	小型 表裏面に光沢	
	296	楔形石器	"	"	"	33.0	49.0	8.0	14.20	Ⅱ	
	297	スクレイパー	"	"	"	-45.0	-36.0	8.5	10.95	I b、刃部殆ど欠	
	298	"	"	"	"	-22.0	-21.0	6.0	1.75	Ⅱ、刃部小片	
	299	"	"	"	"	-15.0	-36.0	7.5	4.15	I、小片	
	300	石核	"	"	"	67.5	36.0	22.5	56.59	完形	
	301	U. F.	"	"	"	42.0	46.0	14.5	37.47	完形	
	302	R. F.	"	"	"	33.5	22.0	11.0	8.51	完形	
	303	"	"	"	"	22.0	9.0	3.5	1.06	小型、ほぼ完形	
	304	"	"	"	"	-48.0	27.0	11.0	15.29		
	305	石器片	"	"	"	-18.0	-14.0	2.5	0.76	小型 石鏃未製品?	
	306	"	"	"	"	-22.0	17.0	3.0	1.41	石鏃未製品	
	307	U. F.	"	"	"	35.0	33.0	7.0	5.99	ほぼ完形	
	308	"	"	"	"	-25.0	-19.0	6.0	2.64		
	309	"	"	"	"	23.0	17.0	3.0	0.96	ほぼ完形	
	310	石鏃	2区西	上層	"	-22.0	18.0	3.0	1.28	I a?先端を欠く	
	311	打製石胞丁	"	"	"	-27.5	40.0	12.0	17.32	表裏面磨耗痕and 光沢	
	312	打製石鏃?	"	"	"	-78.5	38.0	8.5	28.95	磨痕あり、転用	
	313	石器片	"	"	"	-30.5	41.0	11.0	14.00		
	314	"	"	"	"	44.5	34.8	4.5	9.90		
	315	U. F.	"	"	"	59.0	23.0	7.5	6.75		
	316	スクレイパー	"	"	"	-22.0	-29.5	3.5	3.19	I	
	317	U. F.	"	"	"	31.0	23.0	4.0	2.37	完形に近い	
	318	石核	"	"	"	64.0	43.0	10.0	27.35	ほぼ完形	
	319	石鏃	"	包含層	"	34.5	20.5	3.8	1.94	Ⅱ a、ほぼ完形	
	320	スクレイパー	"	"	"	-32.0	38.0	8.5	14.18	小型石胞丁の可能性もあり	
	321	楔形石器	"	"	"	32.0	-22.0	11.5	9.69	I	
	322	スクレイパー	"	"	"	-66.0	35.0	6.5	16.03	I a	

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	323	スクレイパー	2区西	包含層	サスカイト	-20.0-	-37.0	8.5	5.89	Ⅱ b、小片	
	324	石器片	"	"	"	-25.0	32.5	8.0	6.49		
	325	"	"	"	"	-24.5-	-18.5	5.0	2.06	石鏃未製品?	
	326	U. F.	"	"	"	34.5	30.0	10.0	10.62	完形	
	327	"	"	"	"	53.0	54.0	13.5	33.72	"	
	328	R. F.	"	"	"	30.5	19.0	7.0	4.71	ほぼ完形	
	329	石核	"	"	"	26.0	39.0	19.5	25.24	完形	
	330	"	"	"	"	56.0	33.0	13.0	25.36	ほぼ完形	
	331	"	"	"	"	48.0	30.5	15.0	18.89	ほぼ完形	
	332	スクレイパー	"	採掘場	"	-46.0	-39.0	5.0	10.37	I	
	333	石核	"	"	"	42.0	39.0	10.0	13.69		
	334	R. F.	"	"	"	32.0	23.0	7.0	6.09	完形	
	335	石鏃?	"	"	"	-21.5	19.8	5.0	2.43	未製品?	
	336	石器片	"	"	"	28.5	24.5-	9.0	6.15		
	337	R. F.	"	"	"	27.0	19.0	2.0	1.35		
42	338	打欠石鏃	"	"	安山岩	63.5	87.5	17.5	110.93	Ⅱ 完形	
	339	石鏃	"	"	"	-14.4	13.5	2.0	0.34	Ⅱ b?	
	340	石器片	"	"	"	20.0	17.0	5.0	1.40		
	341	石鏃未製品?	"	"	"	-24.0	17.5	4.0	1.55		
	342	R. F.	"	"	"	52.0	-33.0	9.0	12.18		
	343	石器片	"	"	"	-23.0	18.0	6.0	2.18		
	344	R. F.	"	"	"	28.0	24.0	8.0	5.21	ほぼ完形	
	345	スクレイパー	"	"	"	-47.0	20.0	7.0	5.15	I a	
	346	U. F.	"	"	"	-32.0-	15.0	8.5	4.95		
	347	"	"	"	"	36.0	16.0	4.0	1.98	ほぼ完形	
	348	"	"	"	"	30.0	23.5-	4.5	2.48		
	349	"	"	"	"	24.0	-16.0	5.0	2.18		
26	350	スクレイパー	2区東	"	"	78.0	52.5	12.8	63.22	Ⅱ a、ほぼ完形	
	351	楔形石器?	"	"	"	30.0	-15.0-	15.0	5.93	I	
	352	石鏃	3区東	上層	"	-15.0	19.0	3.5	0.95	Ⅱ d	
	353	"	"	側溝及び上層	"	23.0	21.7	5.5	1.70	I a	
	354	"	"	"	"	27.5	11.5-	3.1	0.67	Ⅶ	
	355	敲石	"	"	安山岩	90.0-	-56.5	14.0-	88.04		
	356	スクレイパー	"	"	サスカイト	41.5	42.0	10.0	16.46	I a、打製石胞丁 転用	
	357	"	"	"	"	-15.0-	-24.0	4.5	1.83	I、小片	
	358	R. F.	"	"	"	-26.0-	33.0	8.0	8.67		
	359	不明石器	"	"	"	44.5	28.8	8.5	8.88	完形	
	360	石鏃	"	"	"	33.5-	23.0-	3.2	2.21	Ⅱ a? 大型	
	361	"	"	"	"	18.0-	16.5-	3.0	0.72	Ⅲ?	
	362	"	"	"	"	-32.0-	13.0-	5.0	1.46		
	363	石器片	"	"	"	-36.5-	-34.0	9.0	7.75		
	364	"	"	"	"	-21.0-	-23.0	4.0	2.47		
	365	"	"	"	"	-19.0	-28.5-	7.0	3.80		
	366	"	"	"	"	19.5	-19.5	3.0	1.74		
	367	"	"	"	"	-18.5-	21.5	5.0	1.64		
	368	R. F.	"	"	"	-17.5-	23.0	4.0	1.75		
	369	U. F.	"	"	"	46.0	21.0	6.0	4.50	完形	

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	370	R. F.	3区東	側溝及び上層	サヌカイト	31.5	16.5	4.0	2.23		
	371	"	"	"	"	60.0	29.0	24.5	36.13	ほぼ完形	
	372	U. F.	"	"	"	26.0	27.0	5.0	4.21	完形	
	373	"	"	"	"	39.0	14.0	9.0	4.57	ほぼ完形	
	374	石器片	"	包土	"	38.0-	34.5	5.0	6.15		
	375	スクレイパー	"	"	"	45.0-	32.0	7.0	11.69	I a、石核転用?	
	376	石核?	"	"	"	31.0	25.0-	9.5	7.14		
	377	石器片	"	"	"	16.0-	25.0	7.0	2.80	楔形石器I?	
	378	"	"	"	"	-31.0-	40.0-	12.0	12.68		
	379	"	"	"	"	-20.0	21.5-	5.0-	2.16		
	380	R. F.	"	"	"	37.0	12.0	7.0	3.05	ノミ状	
	381	石器片	"	"	"	39.0-	-22.0	4.0	3.54		
	382	"	"	"	"	-14.0-	-28.0	1.25	3.89		
	383	"	"	"	"	-50.0	40.5	16.0-	24.18		
	384	"	"	"	"	-20.0	19.5-	5.0	1.93		
	385	"	"	"	"	-22.0-	-28.5	13.0	6.72		
	386	R. F.	"	"	"	38.5	20.0	8.0	5.75	完形	
	387	"	"	"	"	41.0	17.0	10.0	5.06	完形	
	388	"	"	"	"	-26.5-	17.0-	4.0	1.78		
	389	"	"	"	"	17.0-	13.0	4.5	1.19		
	390	"	"	"	"	13.0	20.0-	2.0	0.85		
	391	"	"	"	"	23.0-	22.5	5.0	2.00	石錐?	
	392	"	"	"	"	33.0-	24.0	7.0	5.48		
	393	"	"	"	"	-14.0	23.0	3.5	1.61		
	394	"	"	"	"	41.5	28.5	5.5	6.95	ほぼ完形	
	395	U. F.	"	"	"	51.0	24.5	8.0	8.81	完形	
	396	"	"	"	"	-34.0	17.0	5.0	3.00		
	397	"	"	"	"	-28.5	30.5	5.0	3.36		
	398	"	"	"	"	-43.5	32.0	9.0	8.52		
	399	"	"	"	"	34.0	18.0-	5.0	3.27		
	400	"	"	"	"	20.5	22.5-	5.0	2.85		
	401	"	"	"	"	-30.0	26.0	5.5	3.80		
	402	"	"	"	"	29.5	24.0	5.5	3.55	ほぼ完形	
	403	"	"	"	"	28.0	17.0	4.5	2.14	完形	
	404	"	"	"	"	33.0	14.0	5.0	2.17		
	405	"	"	"	"	39.0	17.5	6.0	6.22	完形	
	406	"	"	"	"	-25.0	-15.5	3.0	1.16		
	407	"	"	"	"	-49.0	14.0	12.0	4.24		
15	408	打製石胞丁	3区東	包土	"	-25.5	36.5-	8.8	10.90	残り残存、小型	
	409	スクレイパー	"	"	"	-64.0-	55.0	10.0	33.96	I b	
	410	石器片	"	"	"	-14.0-	-49.0	18.0	12.50		
	411	大型蛤刃石斧	"	"	安山岩	-47.0-	-37.5	39.5	88.67		
	412	U. F.	"	"	サヌカイト	19.5	23.0	4.5	2.46		
	413	スクレイパー	"	縄文包土	"	-51.0	30.0	5.5	9.98	I b	縄文
	414	"	"	"	"	45.0-	38.0	12.0	18.14	I a	"
	415	"	"	"	"	26.0-	29.0	6.0	3.64	I b	"
	416	石核	"	"	"	25.5	48.0	10.0	13.53		"

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	417	石核	3区東	縄文包土	サヌカイト	33.0	48.5	20.0	23.20	完形	縄文
	418	U. F.	"	"	"	49.0	39.0	11.0	15.51	完形	"
	419	石鏃	3区中央	南北T下層	"	24.0	-14.5	3.3	0.77	II a 脚の一端を欠く	
	420	"	"	"	"	-14.5	-15.0	2.0	0.41	II b	
	421	石器片	"	"	"	-25.5-	-24.5	8.0	5.16		
	422	U. F.	"	"	"	24.5	24.0	4.0	2.16	ほぼ完形	
	423	石鏃未製品	3区東	上層	"	-25.5-	17.6	4.0	1.81		
	424	楔形石器	"	"	"	30.5	32.5	13.0	14.75	I、完形	
	425	不明石器片	"	"	"	33.5-	15.5	6.0	3.04		
	426	石器片	"	"	"	-29.0-	-13.0	4.0	1.62	石鏃?	
	427	"	"	"	"	-20.0	19.5	5.0	2.28		
	428	R. F.	"	"	"	31.5	25.5	7.0	4.29	ほぼ完形	
	429	"	"	"	"	-33.0	28.0	7.0	5.16		
	430	U. F.	"	"	"	34.0-	32.0	4.5	3.91		
	431	"	"	"	"	44.5	15.5	5.0	3.81		
	432	"	"	"	"	54.0	14.5	9.0	4.88		
	433	石器片	"	"	"	-17.5-	38.0	7.5	5.98	スクレイパー?	
	434	"	"	"	"	-29.0-	25.5	8.5	4.45		
28	435	定角式石斧	3区西	"	安山岩	43.0-	-36.5-	12.2	28.75	基部	
14	436	打製石胞丁	"	"	サヌカイト	-95.5-	58.5	11.5	78.19	表面光沢あり	
	437	石器片	"	"	"	-42.0-	-65.0	9.0	18.22		
	438	不明石器	"	"	"	-40.0	42.0-	17.0	22.00		
	439	"	"	"	"	77.0-	56.0	32.0	98.32		
	440	"	"	"	"	33.0-	46.0	12.0	21.28		
	441	R. F.	"	"	"	35.5	19.0	5.5	4.04	完形、縦長剝片	
	442	U. F.	"	"	"	56.0	18.0	7.5	6.97	ほぼ完形	
	443	"	"	"	"	44.5	-32.0	11.0	13.62		
	444	石核	"	"	"	41.0	35.0	14.0	14.24		
16	445	打製石胞丁	"	採掘場	"	-43.5	-51.0-	7.8	18.26	表面磨耗痕	
	446	石槍状石器?	"	"	"	-33.0	20.0	7.5	5.86		
	447	石鏃?	"	"	"	-18.0	19.5	4.0	1.83		
	448	楔形石器	"	"	"	23.0	19.0-	6.5	3.79	I	
	449	"	3区西	"	サヌカイト	22.0	21.5	7.0	3.32	I、ほぼ完形	
	450	"	"	"	"	26.0	-23.0	8.0	5.17	I	
	451	スクレイパー	"	"	"	40.5	33.0	8.0	10.58	I b、完形	
	452	不明石器	"	"	"	27.0	31.0-	7.5	5.44		
	453	R. F.	"	"	"	48.0	22.0	8.5	8.85	完形	
	454	石核	"	"	"	41.0	30.0	20.0	23.32		
	455	不明石器	"	"	"	62.0	38.0	17.0	36.14	完形	
	456	U. F.	"	"	"	32.5	17.0	5.0	2.24		
	457	楔形石器?	"	"	"	25.5	54.5	10.0	15.25	II、完形	
	458	不明石器片	"	"	"	31.5-	28.0	7.5	6.33		
	459	U. F.	"	"	"	-28.5	22.0	6.0	3.25		
	460	"	"	"	"	20.0	31.5	4.0	2.46	ほぼ完形	
45	461	蔽石	"	"	流紋岩	58.0	62.0	47.0	210.95	I、完形	
	462	スクレイパー	"	"	サヌカイト	-103.0-	47.5	16.0	66.21	I a	
	463	"	"	"	"	-18.0	66.0	16.0	19.01	I b	

矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備考	時期
	464	不明石器	3区西	採掘壕	サヌカイト	-56.0-	-49.0	8.3	19.77	側縁に敲打	
	465	"	"	"	"	-15.5	-18.5	3.5	1.29	小型	
	466	石核	"	"	"	50.0	43.0	21.5	42.80	完形	
	467	U. F.	"	"	"	35.0-	27.0	8.0	7.08		
	468	"	"	"	"	49.5	30.0	6.0	9.67		
	469	石錐	"	"	石英斑岩	68.0	49.0	16.0	68.27	完形	
	470	打製石庖丁片	"	"	サヌカイト	20.0-	41.5-	11.5	8.71	抉り部残存	
	471	スクレイパー	"	"	"	28.0	29.0	9.0	5.86	Ⅱ a、ほぼ完形	
	472	"	"	"	"	35.0	36.5	6.0	8.59	Ⅱ b、ほぼ完形	
	473	楔形石器	"	"	"	22.0	18.0-	7.0	3.28	Ⅱ	
	474	石器片	"	"	"	-19.0-	25.0	12.0	5.46		
	475	不明石器	"	"	"	32.0-	26.0	7.5	5.16		
	476	R. F.	"	"	"	38.5	28.0	8.0	7.61	ほぼ完形	
	477	"	"	"	"	44.0	30.5	7.0	11.66	ほぼ完形	
	478	石器片	3 E	上層	"	-54.0-	39.5-	6.5-	17.59		
32	479	磨製石斧	5区	?	砂岩?	-46.5-	-57.0-	24.5-	90.26	基部片	
	480	石器片	1WN	土壌57	サヌカイト	-18.0-	-24.2	4.2	2.23	小片	
	481	石核片?		土壌58	"	26.3	-38.0-	7.3	9.79		
	482	スクレイパー	1W(N)		"	25.0	-29.3	8.0	4.15	Ⅱ	
24	483	"	1WN	採掘壕№.8	"	62.5	35.0	6.5	16.98	Ⅱ a、ほぼ完形	
	484	石器片	1区西北半(北部)	土手内	"	24.5-	22.1	4.2	2.35	小型、石錐未製品 or 石錐頭部か?	
	485	U. F.	"	"	"	-29.7-	34.2	5.5	6.34		
	486	スクレイパー	1区西(北端)	採掘壕	"	41.0-	-42.5	6.7	17.64	I	
	487	石器片	"	"	"	-17.0-	20.0	3.3	1.39	石錐未製品?	
	488	楔形石器	"	"	"	28.3	25.0	7.5	4.99	Ⅱ、完形	
	489	石器片	"	"	"	-26.5-	-30.8	8.0	6.68		
	490	U. F.	"	"	"	39.0	17.0-	4.8	2.60		
	491	"	"	"	"	-23.0-	13.5-	4.0	1.00		
	492	スクレイパー	1WN	採掘壕(N)	"	31.5-	30.5	7.0	6.37	I a	
	493	楔形石器	"	"	"	-20.5	29.0	5.5	4.68	Ⅱ	
	494	石錐未製品	"	"	"	28.0	-16.0	4.5	1.31		
	495	不明石器	"	"	"	-19.0	-22.5	4.0	2.44	小型	
	496	石核?	"	"	"	-25.0	27.5	16.8	10.86		
	497	U. F.	"	"	"	-22.0-	21.0	7.5	2.86		
	498	楔形石器	"	採掘壕	"	31.5	21.0-	6.5	4.97	I	
	499	スクレイパー片	"	"	"	-2.8-	58.2	14.0	11.89	I b	
	500	石器片	"	"	"	33.0-	-40.0	9.85	10.35	I	
	501	石錐	1W(N)		"	-18.8	16.5	2.7	0.86	I a	
	502	スクレイパー	"		"	-53.0	34.5	13.2	25.86	I a	
	503	石・核	"		"	32.8	46.8-	19.8	30.00		
	504	石器片	"		"	26.5-	-28.0	9.5	7.77		
	505	不明石器	1区西南半の北	採掘壕		55.3-	36.5	15.5	29.87	大型石錐の基部?	
27	506	スクレイパー	1区西南半	土壌52	"	121.5	105.0	30.0	439.24	Ⅱ a、ほぼ完形、 石核転用	
	507	不明石器	1区西(南端)	採掘壕	"	-40.5-	28.5	11.5	-14.59		
	508	U. F.	"	"	"	68.0	44.5	2.90	89.66	完形	
	509	スクレイパー	"	中世包土	"	-36.0-	32.5	9.3	12.03	I b	
	510	U. F.	1区西(南端)	中世包土	サヌカイト	22.5	-14.7-	3.6	1.39		



矢部奥田遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備考	時期
	511	石 鏃	1区西南半(東側)	探掘壕	"	-18.5-	8.0-	2.3	0.33	約1/2残存	
17	512	打製石庖丁	1W(SN)	"	"	-36.5-	42.5	8.8	14.02	袂り部残存	
	513	スクレイパー	"	"	"	35.0	-28.3-	4.7	6.25	I a	
	514	石器片	"	"	"	-25.3	29.0	8.5	5.15		
	515	"	1区西北半	溝7	"	36.8	-17.0	10.0	6.52		
	516	石 鏃片?	"	"	"	22.0-	12.7-	5.3	1.13	I ?	
	517	石 鏃?	2区西	探掘壕	"	45.5-	26.8	9.5	9.71	II ? 鏃の頭部?	
	518	U. F.	"	"	"	42.7	25.0	11.7	11.71		
	519	石 鏃	2区東	P51	"	25.5	20.4-	4.1	1.95	I a、ほぼ完形	
	520	打製石庖丁	"	"	"	-26.4-	- 8.5	3.3	0.60	刃物小片 表面に光沢	
	521	U. F.	2区東上段(西半)	探掘壕	"	-45.5	34.2-	10.0	13.69		
	522	スクレイパー	2区西	"	"	-49.3	43.6	10.5	18.66	I a	
	523	石器片	"	"	"	26.5-	-17.0	4.0	1.96		
	524	"	"	"	"	-20.0	19.2	4.0	1.82		
	525	R. F.	"	"	"	-40.5	34.2	6.8	9.66		
	526	スクレイパー	"	"	"	-36.0-	-25.5	4.5	4.25	I	
	527	打製石庖丁	"	"	"	-38.7-	48.0	12.8	32.30	表裏に磨耗痕	
	528	U. F.	3区西	P 6	"	42.5	37.5	9.0	87.3	完形	
	529	不明石器	3区東	土壇14	"	23.0	16.7	3.3	1.38	完形、小型 若干ローリング	
	530	"	"	縄文下り (貝の下層)	"	-16.0	20.0	3.2	1.04	石鏃未製品?	縄文
	531	石器片	"	上層	"	21.8	-17.2	7.1	3.11	小型	
	532	スクレイパー	4区	水路	"	49.5	38.7-	12.0	15.81	I b	
	533	"	4E	褐色土	"	50.0	-35.5	8.6	14.32	I	
	534	不明石器	"	"	"	39.5	-27.5	12.5	9.40		
	535	R. F.	"	"	"	29.0	28.6	6.3	5.72		
	536	U. F.	"	"	"	18.0	38.3	5.0	3.18		
	537	スクレイパー	5区南肩口	用水路中	"	-55.3-	40.0-	12.5	26.19	b、背部片?	
	538	楔形石器?	5区	"	"	23.3	21.0-	5.7	3.29	I	
	539	石器片	"	"	"	40.7-	25.2-	8.5	10.24		
35	540	砥石	1ES	中世(NE)	凝灰岩	-45.0-	34.0	37.0	73.36		
46	541	敲石	3区西拡張区	包土	安山岩	75.0	89.0	62.0	581.90	完形	
33	542	蛤刃石斧			"	158.0	71.0	46.0	772.36	ほぼ完形	

※ 計測値の“-”は、計測値を石器の正位置としてみた場合の欠損部の位置を示す。

※ 備考欄のI a、I b等は各石器の形態分類を示す(「山陽自動車道建設に伴う発掘調査5」の石器形態分類を参照)

やべほりこし  
5. 矢部堀越遺跡

矢部堀越遺跡

目 次

第1章 発掘調査の経緯	333
第1節 発掘調査の経緯と概要	333
第2節 日誌抄	334
第2章 発掘調査の概要	337
第1節 発掘調査の概要	337
第2節 旧石器～縄文時代の遺物	346
第3節 弥生時代の遺構・遺物	348
(1) 竪穴住居	348
(2) 建物	366
(3) 土壌	368
(4) 柱穴・溝	375
(5) 包含層	375
第4節 古墳時代の遺構・遺物	384
(1) 箱式石棺・石蓋土壙	385
(2) 横穴式石室	393
(3) 竪穴住居	395
(4) 土壙	405
(5) 溝・包含層	405
第5節 古代～中世の遺構・遺物	407
(1) 建物	407
(2) 土壙	410
(3) 溝	410
(4) 柱穴・包含層	412
第3章 まとめ	416
1. 調査のまとめ	416
2. 特殊器台形埴輪について	418

矢部堀越遺跡

表 目 次

表-1	主要遺構一覽表	338	表-5	溝一覽表	421
表-2	竪穴住居一覽表	419	表-6	土器觀察表	422
表-3	建物一覽表	421	表-7	土製品一覽表	436
表-4	土壌一覽表	421	表-8	石器一覽表	436

図 目 次

第1図	路線図 (1/1,000)	335	第22図	竪穴住居-H108 (1/80)・出土遺物	355
第2図	発掘調査区分図 (1/1,000)	336	第23図	竪穴住居-H109・H110 (1/80)	355
第3図	遺構全体図 (1/1,000)	337	第24図	竪穴住居-H312 (1/80)・出土遺物	356
第4図	1区全体図 (1/400)	340	第25図	竪穴住居-H313・H314 (1/80)・出土遺物	357
第5図	2区全体図 (1/400)	340	第26図	竪穴住居-H315 (1/80)・出土遺物	359
第6図	3・10区全体図 (1/400)	341	第27図	竪穴住居-H616 (1/80)・出土遺物	360
第7図	4区全体図 (1/400)	341	第28図	竪穴住居-H718・H720 (1/80)・H718出土遺物	361
第8図	5区全体図 (1/400)	342	第29図	竪穴住居-H719出土石庖丁 (1/2)	362
第9図	6・7区南全体図 (1/400)	342	第30図	竪穴住居-H817 (1/80)・出土遺物	363
第10図	7・8区全体図 (1/400)	343	第31図	竪穴住居-H501 (1/80)	363
第11図	9区全体図 (1/400)	343	第32図	竪穴住居-H502 (1/80)	364
第12図	1・2・7・8区土層断面図 (1/80)	345	第33図	竪穴住居-H502出土遺物	365
第13図	旧石器～縄文時代の遺物	347	第34図	竪穴住居-H901 (1/80)	366
第14図	弥生時代遺構全体図 (1/1,000)	348	第35図	建物-B101 (1/80)	367
第15図	竪穴住居-H102 (1/80)	349	第36図	建物-B701 (1/80)・出土遺物	
第16図	竪穴住居-H102出土遺物	350			
第17図	竪穴住居-H103 (1/80)	351			
第18図	竪穴住居-H103出土遺物	351			
第19図	竪穴住居-H105 (1/80)	352			
第20図	竪穴住居-H105出土遺物	353			
第21図	竪穴住居-H107 (1/80)・出土遺物	354			

矢部堀越遺跡

.....367	第61図	竪穴住居—H101 (1/80) .....	395
第37図 建物—B702 (1/80) .....	第62図	竪穴住居—H101出土遺物 .....	396
第38図 土壌—K101 (1/30) ・出土遺物 .....369	第63図	竪穴住居—H104・溝—D115 (1/80) .....	397
第39図 土壌—K102 (1/30) ・出土遺物 .....370	第64図	竪穴住居—H106 (1/80) .....	398
第40図 土壌—K204 (1/30) ・出土遺物 .....371	第65図	竪穴住居—H104出土遺物(1) .....	399
第41図 土壌—K205 (1/30) ・出土遺物 .....372	第66図	竪穴住居—H104出土遺物(2) .....	400
第42図 土器棺—X305 (1/20) ・土器.....373	第67図	竪穴住居—H104・溝—D115出土遺 物.....	401
第43図 弥生中期柱穴・溝出土土器.....374	第68図	竪穴住居—H106出土遺物(1) .....	402
第44図 弥生中期包含層出土遺物(1).....376	第69図	竪穴住居—H106出土遺物(2) .....	403
第45図 弥生中期包含層出土遺物(2).....377	第70図	竪穴住居—H211 (1/80) ・出土遺 物.....	404
第46図 弥生中期包含層出土遺物(3).....378	第71図	土壌—K206 (1/30) ・出土遺物 .....	404
第47図 弥生中期石器(1).....380	第72図	古墳後期溝・包含層出土遺物.....	406
第48図 弥生中期石器(2).....381	第73図	古代～中世遺構全体図 (1/1,000) .....	407
第49図 弥生中期石器(3).....382	第74図	建物—B102 (1/80) .....	408
第50図 弥生中期石器(4).....383	第75図	建物—B103 (1/80) .....	408
第51図 古墳時代遺構全体図 (1/1,000) .....384	第76図	建物—B402 (1/80) .....	408
第52図 箱式石棺—X301 (1/20) .....	第77図	建物—B401 (1/80) ・出土遺物 .....	409
第53図 特殊器台形埴輪一号 (1/6) .....	第78図	土壌—K403 (1/30) ・出土遺物 .....	410
第54図 特殊器台形埴輪一号' (1/6) .....388	第79図	溝—D601断面図 (1/80) ・出土遺 物.....	411
第55図 特殊器台形埴輪二号 (1/6) .....	第80図	中世溝断面図 (1/60) .....	412
第56図 埴輪片(1).....390	第81図	古代～中世遺構・包含層出土遺物(1) .....	413
第57図 埴輪片(2).....391	第82図	中世包含層出土遺物(2) .....	414
第58図 石蓋土壌—X302 (1/30) .....			
第59図 横穴式石室—X303 (1/80) .....			
第60図 横穴式石室—X303 (1/30) ・出土 遺物.....			394

図 版 目 次

- |          |                |          |                       |
|----------|----------------|----------|-----------------------|
| 図版 95—1  | 発掘前全景（北から）     | — 2      | 横穴式石室—X303（西から）       |
| — 2      | 1区全景（南から）      | 図版 106—1 | 建物—B102（南から）          |
| 図版 96—1  | 2区全景（北から）      | — 2      | 建物—B401（南から）          |
| — 2      | 3区南全景（北から）     | 図版 107—1 | 土壙—K102（西から）          |
| 図版 97—1  | 5区全景（西から）      | — 2      | 土壙—K204（東から）          |
| — 2      | 6区全景（西から）      | 図版 108—1 | 土壙—K206（北から）          |
| 図版 98—1  | 竪穴住居—H102（北から） | — 2      | 土壙—K403（南から）          |
| — 2      | 竪穴住居—H105（南から） | 図版 109   | 弥生中期土器（壺・甕）           |
| 図版 99—1  | 竪穴住居—H312（北から） | 図版 110   | 弥生中期土器（甕・鉢・高<br>杯・器台） |
| — 2      | 竪穴住居—H315（東から） | 図版 111   | 特殊器台形埴輪               |
| 図版 100—1 | 竪穴住居—H616（東から） | 図版 112   | 須恵器（杯・蓋・高杯・鉢・<br>甕）   |
| — 2      | 竪穴住居—H502（南から） | 図版 113   | 須恵器（飯・横瓶・鍋・蓋）         |
| 図版 101—1 | 建物—B101（南から）   | 図版 114   | 土師器・古代瓦・中世土器・<br>陶磁器  |
| — 2      | 建物—B702（南から）   | 図版 115   | 土製品各種                 |
| 図版 102—1 | 竪穴住居—H101（北から） | 図版 116   | 石器(1)                 |
| — 2      | 竪穴住居—H104（北から） | 図版 117   | 石器(2)                 |
| 図版 103—1 | 竪穴住居—H106（南から） | 図版 118   | 石器(3)                 |
| — 2      | 竪穴住居—H211（西から） |          |                       |
| 図版 104—1 | 土器棺—X305（南から）  |          |                       |
| — 2      | 箱式石棺—X301（南から） |          |                       |
| 図版 105—1 | 石蓋土壙—X302（西から） |          |                       |

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査の経緯と概要

#### 調査目的

矢部堀越散布地は弥生時代から中世に至る複合した集落跡と見られ、東が低い棚田に所在する。この遺跡をほぼ南北に山陽自動車が貫通することになり、盛り土工法のため、工事に先立ち用地内の遺跡全容を記録保存する。

#### 調査の方法

昭和47年（1972）の500m幅の遺跡分布調査は不十分なところもあったので、用地境が確定し、幅杭が打たれた後昭和59年（1984）の4月に調査員2名で分布調査を実施した。これにより、矢部堀越散布地が確認調査の対象地とされたので、同年12月矢部散布地に続いて調査員2名と発掘作業員10数名でトレンチによる一次調査を行った。結果、7,000㎡の全面調査が必要と判断された。そして昭和62年（1987）年4月から調査員2名と発掘作業員10数名の一調査班で全面発掘調査に入った。まず土木業者に水田耕作土を重機で除去し、測量業者によって地形測量用の基準杭を20m間隔で設置した。発掘は東下方から始め、排土の関係で調査区を10区に分割した。1区～4区・6区～10区を当初の調査班で担当し、別の調査班に5区と9区を担当してもらった。遺構全体図は各区ごとに1/100で実測し、各遺構は1/20と1/10で実測した。写真撮影は6×9と35mmのカメラによりモノクロ・スライド・カラープリントで適宜行った。調査は昭和62年（1987）11月25日に完了した。

#### 調査体制

一次調査	古代吉備文化財センター	文化財保護主査	浅倉秀昭
		文化財保護主事	中野雅美
全面調査	同	文化財保護主査 (7月1日付け文化財保護主任)	浅倉秀昭
			主 事
		文化財保護主任	内藤善史
			主 事

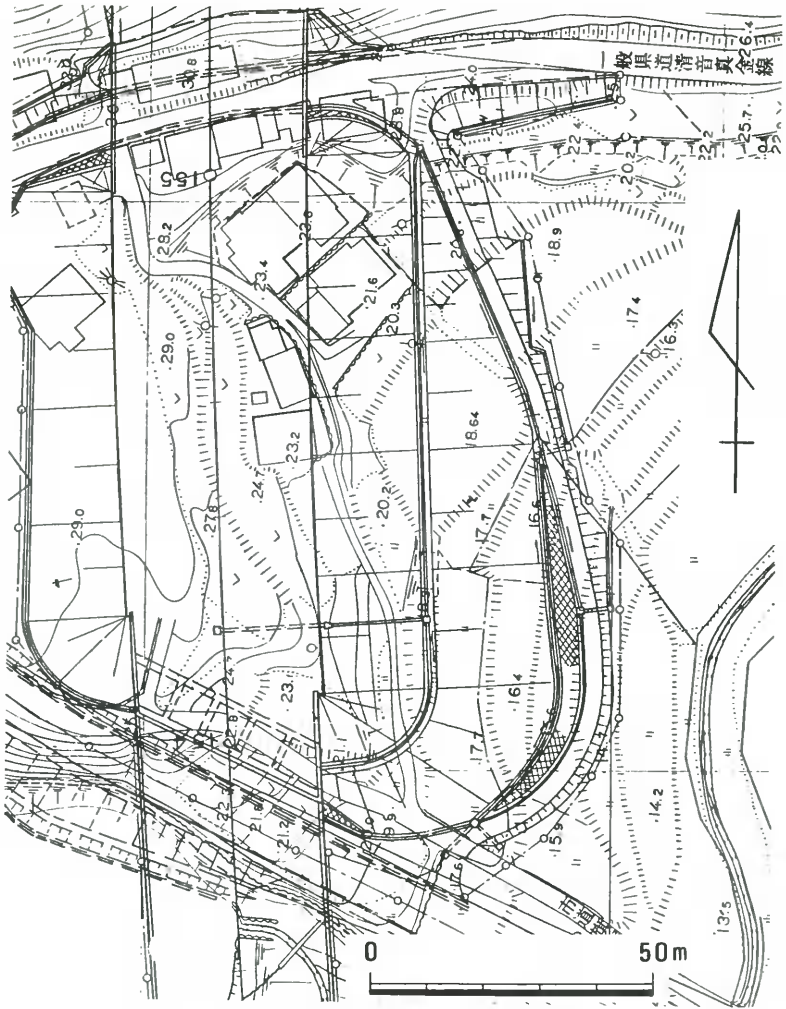
#### 報告書作成

平成3年（1991）岡山市津寺事務所にてセンターの調査第二課第二係長浅倉秀昭が遺構のトレース・遺物実測・遺物トレース・原稿執筆等を行い、政田孝が遺物写真の撮影をした。土器実測では原田美佐子・石器実測では三垣佐知子他にお世話になった。

第2節 日誌抄

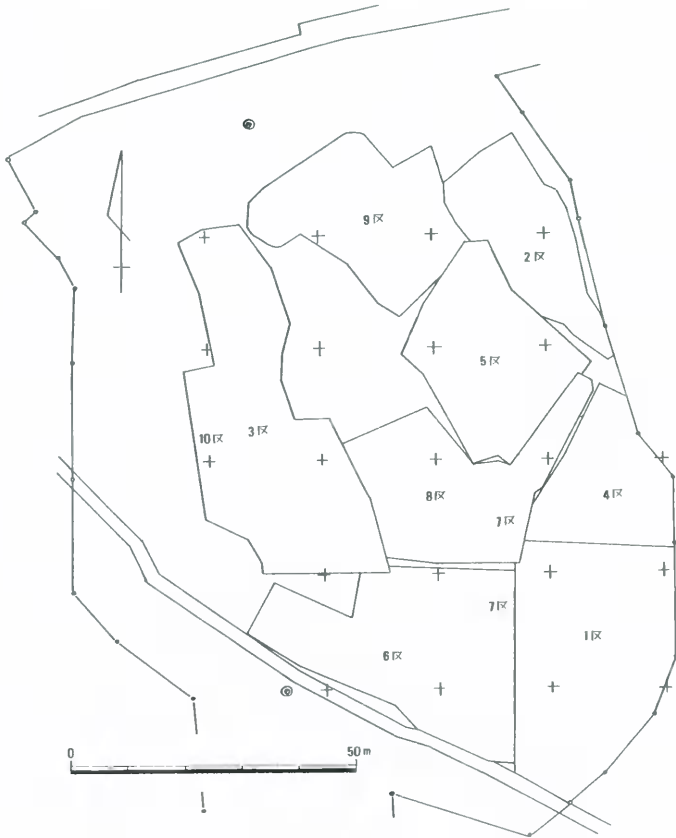
一次調査	10月1日	9区発掘開始
昭和59年度	10月14日	6区調査終了・8区発掘開始
昭和59年(1984)	11月1日	7区発掘開始
11月6日	文化財保護法第98条の2(埋蔵文化財発掘の通知)提出	11月25日 矢部堀越遺跡調査終了
11月16日	矢部散布地へ器材運搬・調査開始	12月9日 埋蔵文化財保護対策委員会開催 報告書作成
12月5日	矢部堀越散布地調査開始	平成3年度
12月26日	矢部堀越散布地調査終了	平成3年(1991)
昭和60年(1985)		4月1日 辞令公布式
3月20日	昭和59年度山陽自動車道埋文実績報告提出	4月2日 津寺事務所の配置替え
全面調査		4月4日 矢部堀越遺跡整理事業開始
昭和62年度		4月24日 遺物実測開始
昭和62年(1987)		8月21日 遺物写真撮影開始
4月1日	センター新任式	8月27日 遺物写真貼付
4月2日	発掘通知起案	9月20日 割り付け完了
4月3日	所内会議	10月14日 原稿執筆開始
4月6日	矢部堀越遺跡器材搬入	12月27日 矢部堀越遺跡原稿執筆完了
4月7日	1区発掘開始	平成4年(1992)
5月27日	埋蔵文化財保護対策委員会開催	1月5日 第6分冊編集作業開始
6月1日	2区発掘開始	第5分冊原稿執筆開始
6月10日	1区調査終了	3月31日 第5分冊・第6分冊編集完了
6月30日	2区調査終了	
7月1日	3区発掘開始	
8月1日	4区発掘開始	
8月11日	5区発掘開始	
8月31日	3区・4区調査終了	
9月1日	6区発掘開始	
9月30日	5区調査終了	





第1図 路線図 (1/1,000) 設計図転載

矢部堀越遺跡

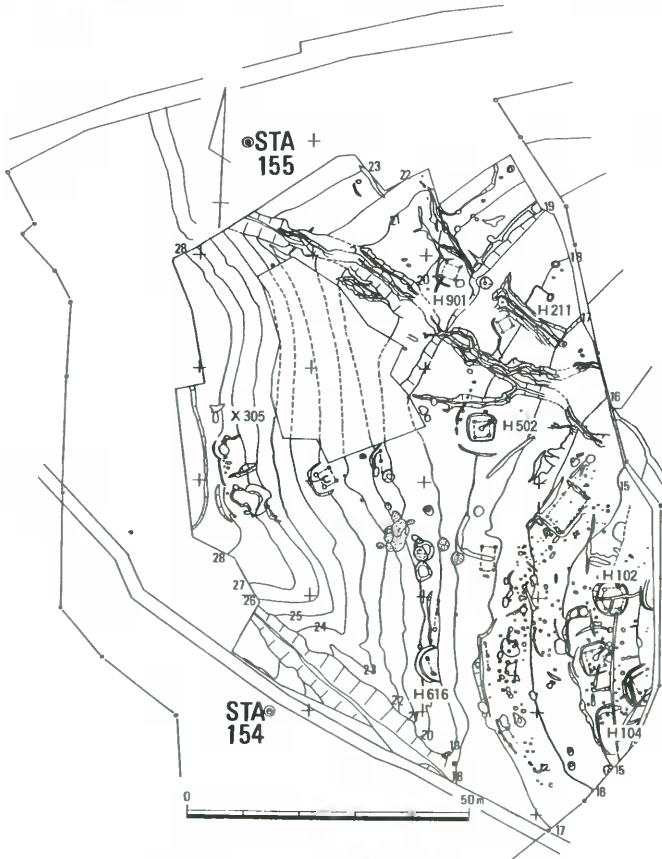


第2図 発掘調査区分図 (1/1,000)

## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 発掘調査の概要

矢部堀越遺跡の全面発掘区域は、海拔14m～29mの東向き斜面にあり、倉敷市矢部に属して、小字名が堀越である。調査の進行上および報告書の都合上10区に分割して本遺跡の概要を説明する。調査の順序は1区⇒2区⇒3区・10区⇒4区⇒5区・6区⇒7区⇒8区・9



第3図 遺構全体図 (1/1,000)

矢部堀越遺跡

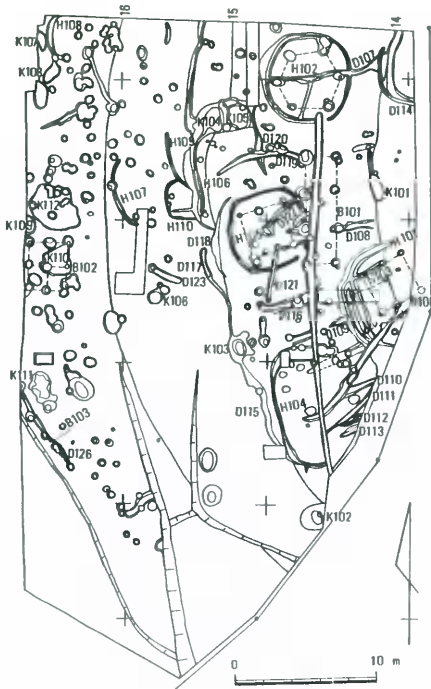
表-1 主要遺構一覽表

番号	遺構名	地区	図	図版	時期	旧名
1	竪穴住居 - H102	1区	15. 16	5	弥生中期Ⅲ	1区H-2
2	竪穴住居 - H103	1区	17. 18		弥生中期Ⅲ	1区H-3
3	竪穴住居 - H105	1区	19. 20	5	弥生中期Ⅲ	1区H-5
4	竪穴住居 - H107	1区	21		弥生中期Ⅲ	1区H-7
5	竪穴住居 - H108	1区	22		弥生中期Ⅲ	1区H-8
6	竪穴住居 - H109	1区	23		弥生中期Ⅲ	1区H-9
7	竪穴住居 - H110	1区	23		弥生中期Ⅲ	1区H-10
8	竪穴住居 - H312	3区	24	6	弥生中期Ⅲ	3区H-12
9	竪穴住居 - H313	3区	25		弥生中期Ⅲ	3区H-13
10	竪穴住居 - H314	3区	25		弥生中期Ⅲ	3区H-14
11	竪穴住居 - H315	3区	26	6	弥生中期Ⅲ	3区H-15
12	竪穴住居 - H616	6区	27	7	弥生中期Ⅲ	6区H-16
13	竪穴住居 - H817	8区	30		弥生中期Ⅲ	8区H-17
14	竪穴住居 - H718	7区	28		弥生中期Ⅲ	7区H-18
15	竪穴住居 - H719	7区	29		弥生中期Ⅲ	7区H-19
16	竪穴住居 - H720	7区	28		弥生中期Ⅲ	7区H-20
17	竪穴住居 - H501	5区	31		弥生中期Ⅲ	5区H-1
18	竪穴住居 - H502	5区	32. 33	7	弥生中期Ⅲ	5区H-2
19	竪穴住居 - H901	9区	34		弥生中期Ⅲ	9区H-1
20	竪穴住居 - H101	1区	61. 62	9	6世紀後半	1区H-1
21	竪穴住居 - H104	1区	63. 66	9	6世紀後半	1区H-4
22	竪穴住居 - H106	1区	67. 69	10	6世紀後半	1区H-6
23	竪穴住居 - H211	2区	70	10	6世紀後半	2区H-11
24	建物 - B101	1区	35	8	弥生中期Ⅲ	1区B-1
25	建物 - B701	7区	36		弥生中期Ⅲ	7区B-1
26	建物 - B702	7区	37	8	弥生中期Ⅲ	7区B-2
27	建物 - B102	1区	74	13	古代	1区B-2
28	建物 - B103	1区	75	13	中世	1区B-3
29	建物 - B401	4区	77	13	中世	4区B-1
30	建物 - B402	4区	76	13	中世	4区B-1

矢部堀越遺跡

31	土壙 - K101	1区	38		弥生中期Ⅲ	1区K-1
32	土壙 - K102	1区	39	14	弥生中期Ⅲ	1区K-2
33	土壙 - K204	2区	40		弥生中期Ⅲ	2区K-4
34	土壙 - K205	2区	41		弥生中期Ⅲ	2区K-5
35	土壙 - K801	8区	30		弥生中期Ⅲ	8区K-1
36	土壙 - K206	2区	71	15	6世紀後半	2区K-6
37	土壙 - K403	4区	78	15	中世	4区K-3
38	土壙 - K404	4区			中世	4区K-4
39	土壙 - K405	4区			中世	4区K-5
40	土壙 - K406	4区			中世	4区K-6
41	土器棺 - X305	3区	42	11	弥生中期Ⅲ	3区5号墓
42	箱式石棺 - X301	3区	52~57	11	古墳前半期	3区1号墓
43	石蓋土壙 - X302	3区	58	12	古墳前半期	3区2号墓
44	横穴式石室 X303	3区	59. 60	12	6世紀後半	3区3号墓
45	溝 - D115	1区	63. 66	9	6世紀後半	1区D-15
46	溝 - D208	2区			中世	2区D-8
47	溝 - D402	4区			中世	4区D-2
48	溝 - D411	4区	77	13	中世	4区D-11
49	溝 - D412	4区	77	13	中世	4区D-12
50	溝 - D413	4区	77	13	中世	4区D-13
51	溝 - D501	5区			中世	5区D-1
52	溝 - D505	5区	80		中世	5区D-5
53	溝 - D601	6区	79	3	中世	6区古道
54	溝 - D903	9区			中世	9区D-3
55	溝 - D904	9区	80		中世	9区D-4
56	溝 - D905	9区	80		中世	9区D-5
57	溝 - D906	9区			中世	9区D-6

区であった。5区・9区は別の班が調査した。調査に当たって困難な点は、排土問題であった。その解決策として下方の一部分から発掘を始め周りから攻めて最後に中央の調査を完了する方法を取った。遺構の密度は東下方が濃く、西上方が薄い。表-1のように遺構総数は57以上を数える。竪穴住居22軒・建物7棟・土壙10基以上・溝13本以上あり、その他土器棺・箱式石棺・石蓋土壙・横穴式石室もある。土器はコンテナに100箱出土し、石器が4箱ある。



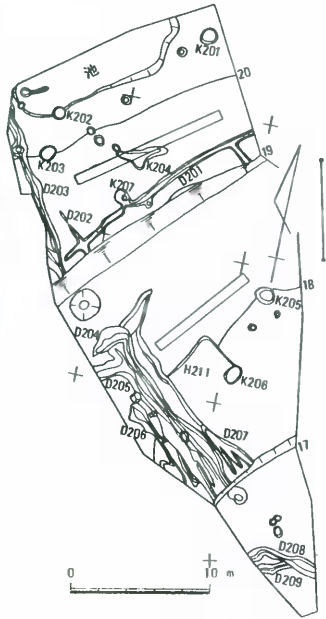
第4図 1区全体図 (1/400)

1区 (第4図)

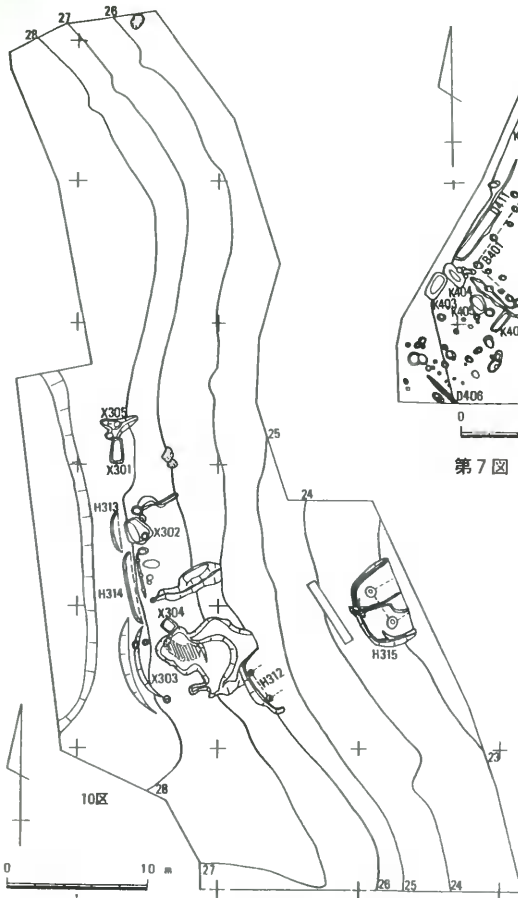
1区は本遺跡の最下段にあり、棚田4段分ある。南北46m・東西30mの不正五角形をした調査区で面積約1,000㎡ある。海拔14m～17mのところであり、一次調査で弥生土器包含層と中世の柱穴が検出できた。この区では遺構は竪穴住居10軒・建物3棟・溝30本弱・土壇10基以上・柱穴200本弱を検出した。遺物は弥生中期土器・土師器・須恵器・中世土器・近世陶磁器・古代瓦・石器・鉄滓が出土している。

2区 (第5図)

2区は遺跡の北東端にあり、棚田3段分ある。南北43m・東西18mの不整二等辺三角形をした調査区で面積約600㎡ある。海拔16m～21mのところであり、一次調査で弥生中期土器包含層を検出した。全面調査での遺構は次の通りである。竪穴住居1軒・溝10本弱・土壇10基弱・柱穴10本弱を検出した。出土遺物は1区とはほぼ同様である。



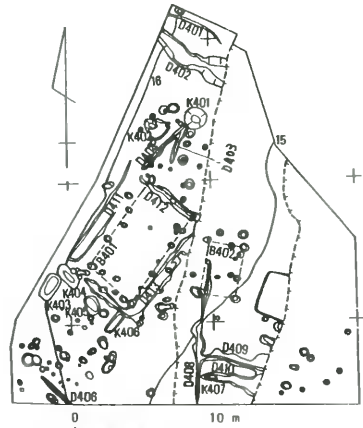
第5図 2区全体図 (1/400)



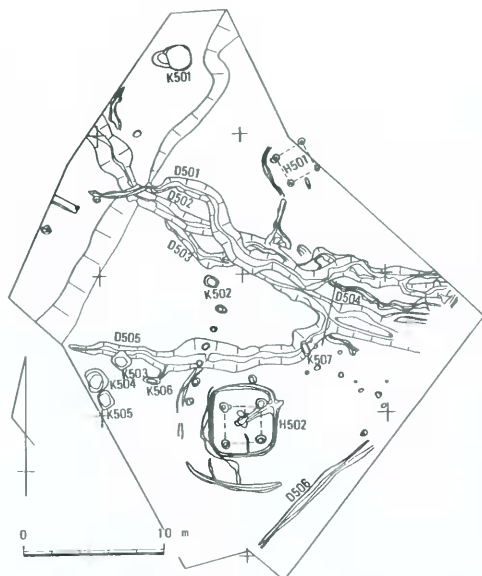
第6図 3・10区全体図 (1/400)

3区・10区 (第6図)

3区・10区は不定形な細長い調査区で本遺跡の西北端にある。南北60・東西10m～30mで面積約1,400㎡ある。僅かに平坦部あるがほとんど急斜面である。海拔23m～29mのところであり、確認調査で弥生中期土器包含層と石籬を検出した。全面調査での遺構は堅穴住居4軒・溝5本・箱式土棺1基・石蓋土墳1基・土器棺1基・横穴式石室1基・柱穴10本強である。出土遺物は弥生中期土器・特殊器台形埴輪・大型石庖丁・柱状片刃石斧などがある。



第7図 4区全体図 (1/400)



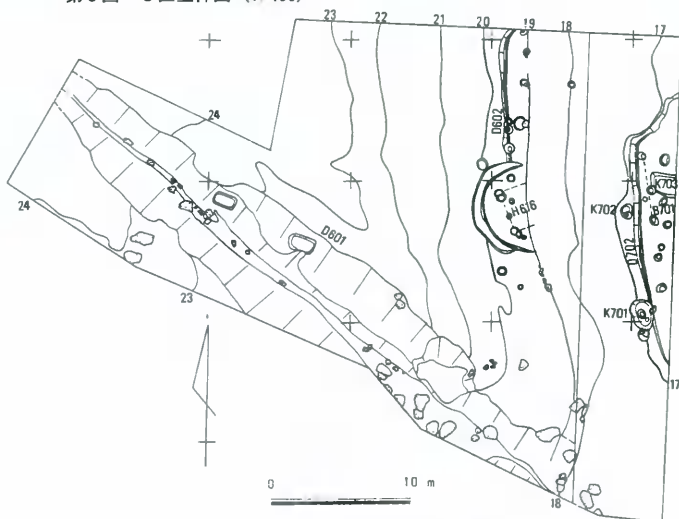
第8図 5区全体図 (1/400)

4区 (第7図)

4区は1区と2区の間にある不整五角形の調査区で南北28m・東西25mで面積約400㎡ある。海拔14m~17mのところであり、検出できた遺構は次の通りである。建物2棟・溝10本強・土壇7基・柱穴120本強ある。遺物は中世土器が多い。

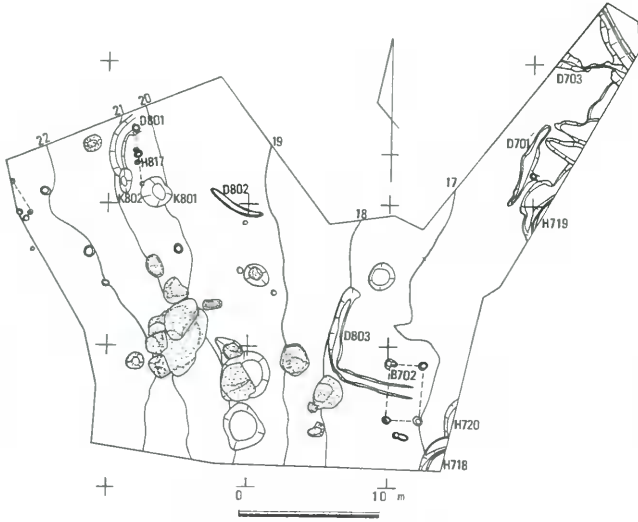
5区 (第8図)

5区は2区の西にある不整ひし形の調査区で南北40m・東西35mで面積約800㎡ある。海拔17m~20mのところであり、堅穴住居2軒・溝6本・土壇7基・柱穴20本弱ある。遺物は大型始刃石斧などがある。

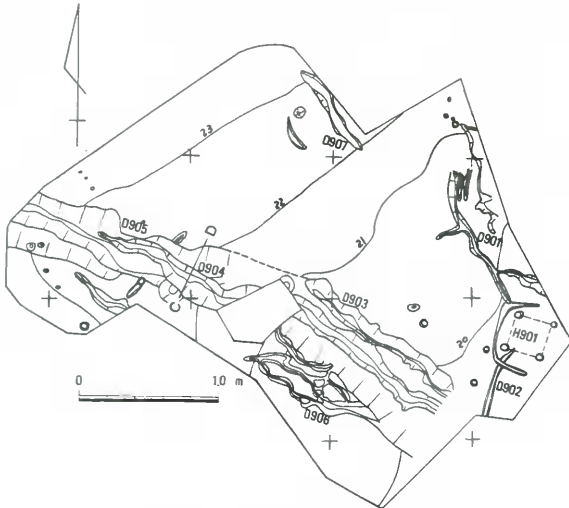


第9図 6・7区南全体図 (1/400)





第10図 7・8区全体図 (1/400)



第11図 9区全体図 (1/400)

## 矢部堀越遺跡

### 6区・7区南（第9図）

6区・7区南は本遺跡の南西端にあり、不整鍵形の調査区で南北35m・東西47mで面積約950㎡ある。海拔17m～25mのところであり、検出できた遺構は次の通りである。竪穴住居1軒・建物1棟・溝3本・土壇3基・柱穴20本弱ある。遺物は弥生中期土器・古代須恵器・古代瓦・扁平片刃石斧・石鏃・石庖丁などがある。

### 7区北・8区（第10図）

7区北・8区は3区と5区の間であり、不整鍵形の調査区で南北33m・東西45mで面積約1050㎡ある。海拔17m～23mのところであり、検出できた遺構は次の通りである。竪穴住居4軒・建物1棟・溝4本・土壇3基・柱穴20本弱ある。遺物は弥生中期土器・古墳時代須恵器などがある。南西部に巨大な自然石の露岩がある。閃緑岩である。

### 9区（第11図）

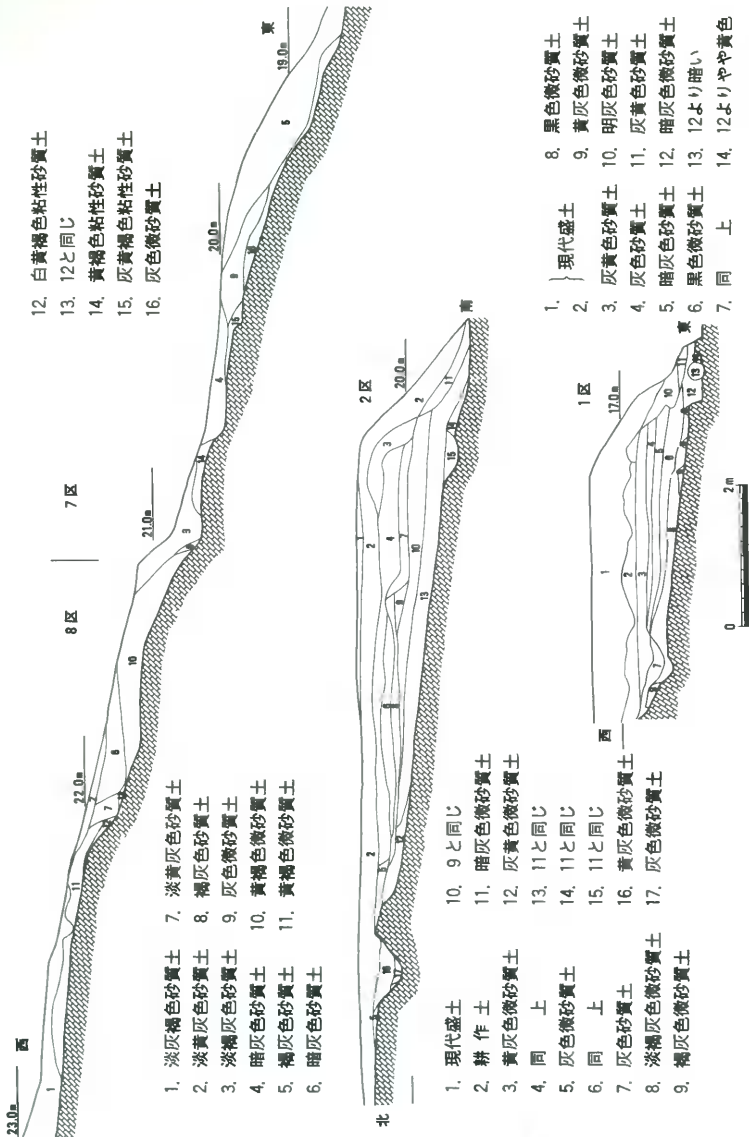
9区は本遺跡の北端にあり、不整山形の調査区で南北33m・東西40mで面積約800㎡ある。海拔19m～24mのところであり、検出できた遺構は次の通りである。竪穴住居1軒・溝7本・土壇2基・柱穴10本強ある。溝は数本が同じところを東になって流れて、5区に繋がる。遺物は弥生中期土器・中世土器がある。

### 基準土層（第12図）

矢部堀越遺跡の基準土層は第12図に示した。土層断面図は各区毎に2～3カ所実測しているが、ここに示した3本の土層図が一番この遺跡の基準土層として相応しい。上段の図は8区から7区にかけてのもので、海拔19m～23mの部分である。地山の傾斜がよく現れている。図中の6・7層は6区で検出した溝（段状遺構）—D602の埋積土である。中段の図は2区のもので、海拔20m前後の部分である。図中の15層は溝—D201である。下段の図は1区のもので、海拔17m前後の部分である。図中の8層は竪穴住居—H108である。

### 時期別遺構の概要

遺構一覧表を少し細かく見ると、時期が3期に片寄っていることが分かるだろう。すなわち弥生中期Ⅲ・6世紀後半・中世である。少数であるが、古墳前半期と古代も見える。弥生中期Ⅲとは弥生時代中期後葉の前山Ⅱ式～仁吾式期のことで、中世とは鎌倉時代～室町時代をいう。弥生中期Ⅲの遺構数が一番多く、竪穴住居18軒・建物3棟・土壇5基・土器棺1基がある。古墳前半期は箱式石棺1基・石蓋土壇1基がある。古墳時代後半期つまり6世紀後半の遺構は竪穴住居4・土壇1基・溝1本・古墳1基がある。古代の遺構は建物1棟と溝（古道）がある。中世の遺構は建物3棟・溝11本・土壇4基がある。遺構一覧表に載せた遺構は時期が確認できたもので、本報告書に掲載したものである。これ以外にも土壇・溝・多数の柱穴があるが、省略した。



第12図 1・2・7・8区土層断面図(1/80)

## 第2節 旧石器～縄文時代の遺物

### 旧石器時代（第13図）

旧石器時代の石器と考えられるサヌカイト製品は5点出土した。角錐状石器1点・尖頭器3点・不明石器1点である。S1は4区上段南側で出土した角錐状石器である。最大現存長948mm、最大幅23.0mm、最大厚15.6mmを測る。断面上下から調整している。順序は一定していない。S2は1区の中央部で出土した。先端部の破片である。現存長22.6mm、最大幅22.9mm、最大厚7.5mmを測る。S3も1区の中央部で出土し、有舌尖頭器の可能性がある。先端部と基部を欠いている。最大現存長56.7mm、最大幅24.8mm、最大厚10.2mmを測る。S4は9区の溝-D904下層から出土した有舌尖頭器。ほぼ表裏共に全面を調整している。最大現存長60.0mm、最大幅26.8mm、最大厚10.4mmを測る。基部を欠いている。S5は1区1段目の南黒色土から出土した不明石器である。三稜尖頭器の未製品か。最大現存長51.5mm、最大幅17.0mm、最大厚10.0mmを測る。

### 縄文時代（第13図）

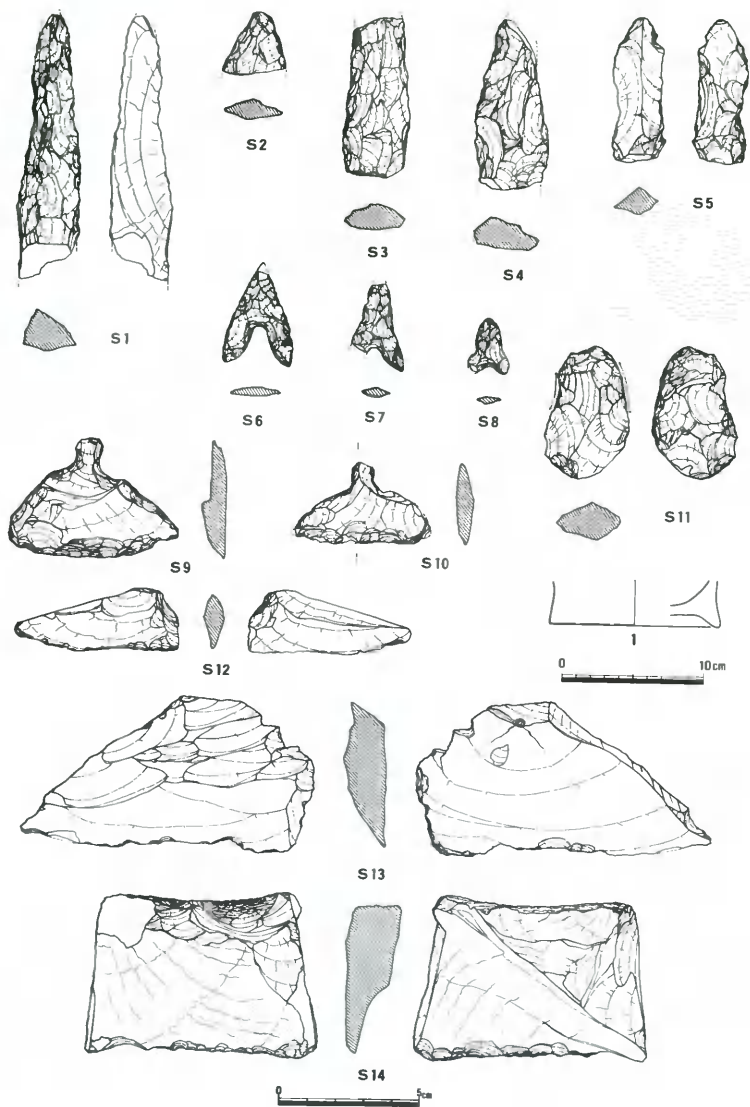
1は唯一出土した縄文土器である。1区の包含層に混入していた。深鉢形土器の底部細片で、かなりな上げ底を呈する。時期は後期に属するか。

当遺跡では数十点のサヌカイト製石鏃が出土しているが、この中に縄文時代に属すると考えられる物が3点ある。S6は最大長32mm、最大幅25mm、最大厚3mmを測る。逆刺は大きく長い。5区の溝-D526から出土した。先端部の一部を欠いている。S7は最大長30mm、最大幅20mm、最大厚3mmを測る。逆刺は大きく長い。1区一段目P-22から出土した。先端部と逆刺の一部を欠いている。S8は最大長18mm、最大幅15mm、最大厚3mmを測る。逆刺が小さく短い。1区4段目P-110から出土した。

サヌカイト製石匙は2点出土している。どちらもほぼ完形品である。S9は最大長61mm、最大高32mm、最大厚5mmを測る。長さ10mm、幅10mm、厚5mmの突起が体部中央に付いている。2区の溝-D204から出土した。左石の尖りの程度が少し異なる。S10は最大長49mm、最大高28mm、最大厚6mmを測る。長さ10mm、幅8mm、厚5mmの突起が体部中央に付いている。4区から出土した。重量は6.98gある。体部の一方は尖り、他方はやや丸みを帯びている。

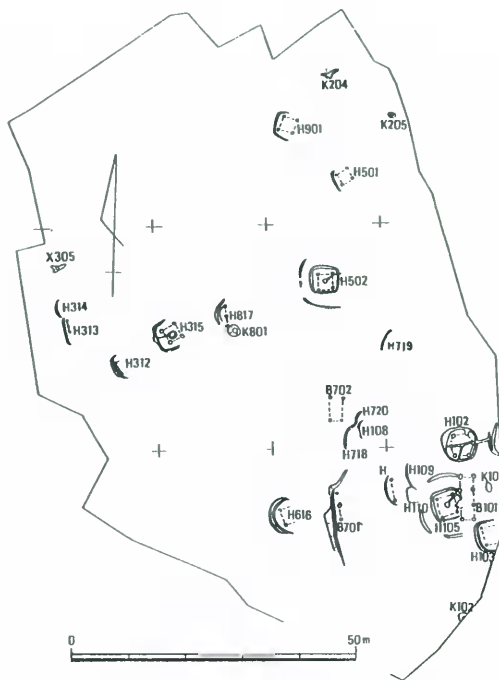
S11は1区2段目のP-20から出土したサヌカイト製の楕円形を呈する不明石器で最大長48mm、最大幅30mm、最大厚13mmを測る。

その他サヌカイト製のスクレーパーで縄文時代に属すると考えられるものが3点ある。S12は1区1段目から出土した。最大長58mm、最大幅33mm、最大厚7mmを測る。S13は1区4段目P-134から出土した。最大長103mm、最大幅55mm、最大厚15mmを測る。S14は5区T-2から出土した。最大長83mm、最大幅58mm、最大厚18mmを測る。



第13図 旧石器～縄文時代の遺物

## 第3節 弥生時代の遺構・遺物



第14図 弥生時代遺構全体図 (1/1,000)

本遺跡の弥生時代の遺構の種類と数量については既に第1節で述べたので、ここでは遺物の概要について説明しよう。

弥生土器の時期は中期後葉に限定される。土器出土総量がコンテナ100箱ある内弥生土器は40箱である。土器の種類は壺・甕・高杯・器台・鉢があり、甕が一番多い。

石器の点数は300を越える。石斧・石槍・石庖丁・削器・石鏃・石錐などがある。ほとんどサスカイト製であるが、変成岩や火山岩もある。

土製品は分銅形土製品と土玉と土錘が出ている。

## (1) 竪穴住居

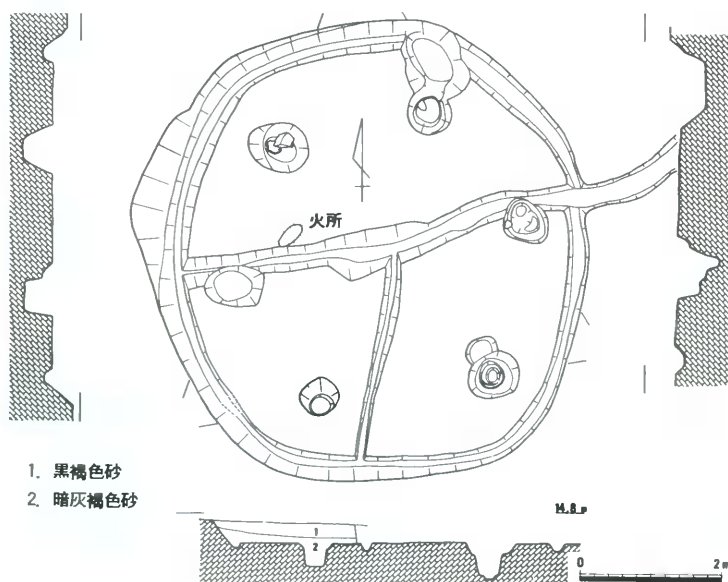
## 竪穴住居一H102 (第15・16区・図版98)

1区の本端で検出した竪穴住居である。他の住居との重複は考えられない。平面形は隅の丸い六角形を呈す。北西の高い所が少し崩れている。規模は東西640cm・南北640cm・対角線の長さ640cm・床の対角線の長さ600cm・床面積約30㎡を測る。検出面から床面の深さは残りのよい西側で30cm、残りの悪い東側で0cmである。床面の海拔は14.4mである。柱穴は6本あり、柱間は平均200cm、平面形は円形か楕円形、長径80cm・短径70cm・深さ40cmのものから直径50cm・深さ30cmのものまでである。床は平坦であるが、あまり固くなく、貼り床もない。壁体溝は壁際を一周し、幅20cm以上・深さ平均10cmを測り、断面形はU字形を呈する。間仕切りの溝

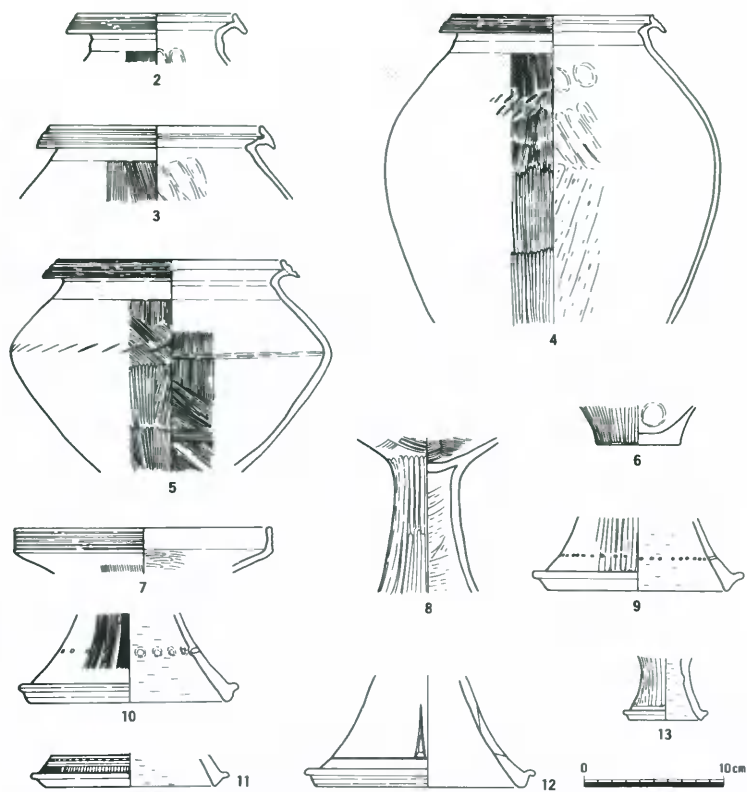
がT字形に検出できた。東西の溝は幅も広くしかも住居の外部まで伸びているが、南北の溝は細くて浅い。中央部で溝が少し膨らんでいるが、中央穴になるかもしれない。中央から西に火所が一所あった。床面から少し盛り上がって赤く焼けている。貯蔵穴らしき穴が北東隅で検出された。不定形な楕円形を呈している。深さ40cmある。土砂の堆積状況は西の山側からの堆積を示している。土器は柱穴の中から大きい破片が出土し、埋土から小破片が出土している。

2は口径の小さい器壁の薄い壺で、口縁端外面に4条の凹線文を施し、短い頸部に凸帯文の名残りを1本もっている。3は4か5のような壺か鉢の口縁である。4は壺で、肩部にハケ状工具による連続刺突文を二段にもつ。体部内面の下半部は下から上にヘラケズリしている。5は柱穴から出土した鉢で、ソロバン玉のような体部の最大径の位置にハケ状工具による連続刺突文をもつ。体部内面は、ハケメ調整である。6は壺か甕の底部片である。7は高杯の杯部で、口縁が垂直に立ち上がり、その外面に5条の凹線文を施す。8は高杯の脚柱部。9～13は高杯の脚裾部である。いずれも端部は外方につまみ出している。9は小さな円孔を3mm間隔で、一列に貫通させている。10は竹管文である。11は櫛歯文、12は三角形透しが施されている。

これらの土器からこの住居の時期は弥生中期後葉に比定できる。



第15図 竪穴住居—H102 (1/80)



第16図 竪穴住居-H102出土遺物

竪穴住居-H103 (第17・18図)

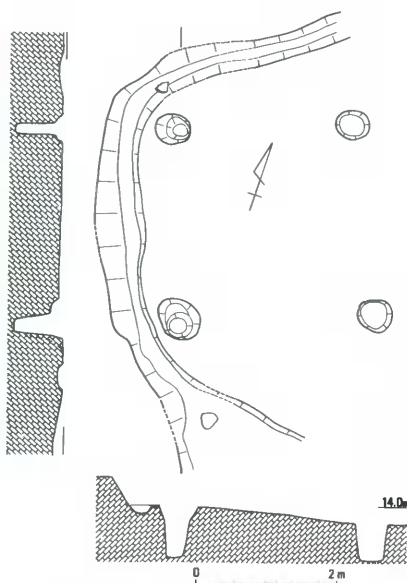
1区の南東部で検出した。竪穴住居-H101と重複している。平面形は多角形か。全体が残っていないので何とも言えない。幅38cm・深さ10cmを測る壁体溝が逆コの字形にのこる。柱穴は4本あって、柱間は平均260cm、平面形は円形か楕円形、長径63cm・短径50cm・深さ70cmのものから直径50cm・深さ50cmのものまである。検出面から床面の深さは38cmもある所もある。土器は埋土中からと壁体溝中から少量出土している。14は壺で、頸部に3条の凹線文をもつ。15の壺は短い頸部に1条の凸帯文をもつ。16は甕で、17は甕か壺の底部である。18は高杯の杯部で、端部が僅かに肥厚している。19は鉢で、高杯と同様の脚がつくものと思われる。外面上方に6条の凹線文が施され、上端面には2条の凹線文が施されている。



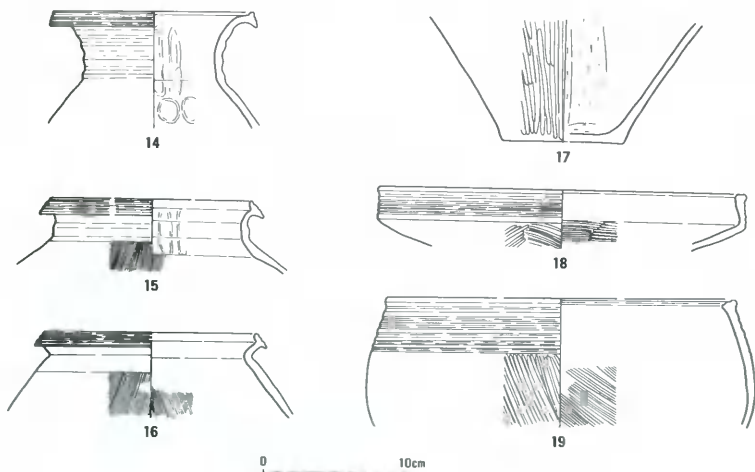
これらの土器からこの住居の時期は弥生中期後葉になる。

竪穴住居-H105 (第19・20図)

1区のはぼ中央部で検出した竪穴住居である。建物-B101と一部分重複している。平面形は隅の丸い四角形を呈す。南東隅が削平されている。規模は外径で東西540cm・南北560cm・対角線の長さ640cm、内径で東西490cm・南北510cm・対角線の長さ580cm、床面積約24㎡を測る。検出面で壁体溝だけの残り方であった。柱穴は4本あって、柱間は平均320cm、平面形は円形か楕円形で、長径62cm・短径58cm・深さ50cmのものから直径24cm・深さ70cmのものまでである。中央穴は瓢箪形をし、長軸が北西から南東に向き、長



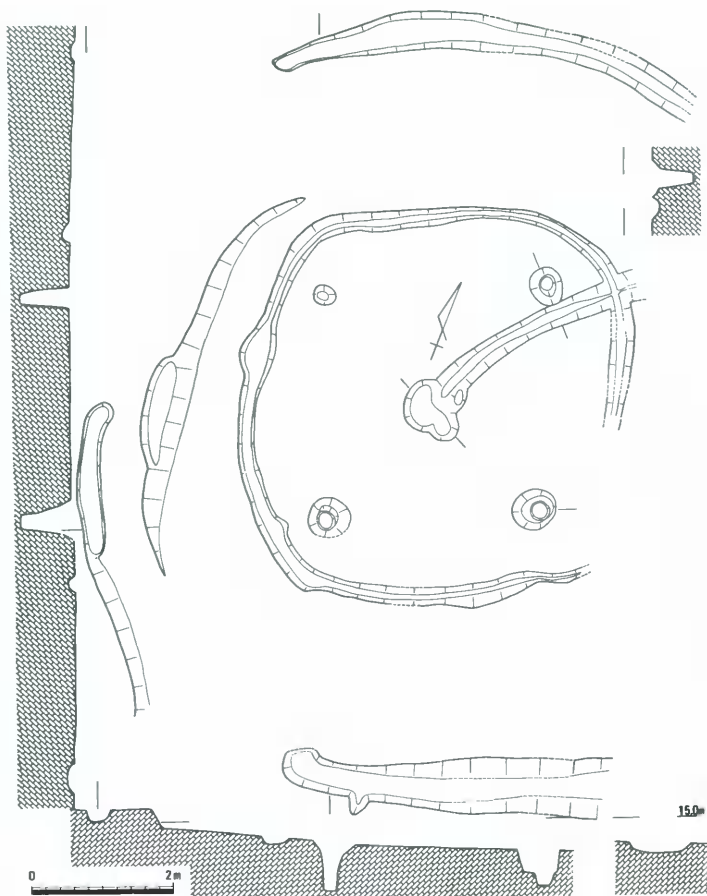
第17図 竪穴住居-H103 (1/80)



第18図 竪穴住居-H103出土遺物

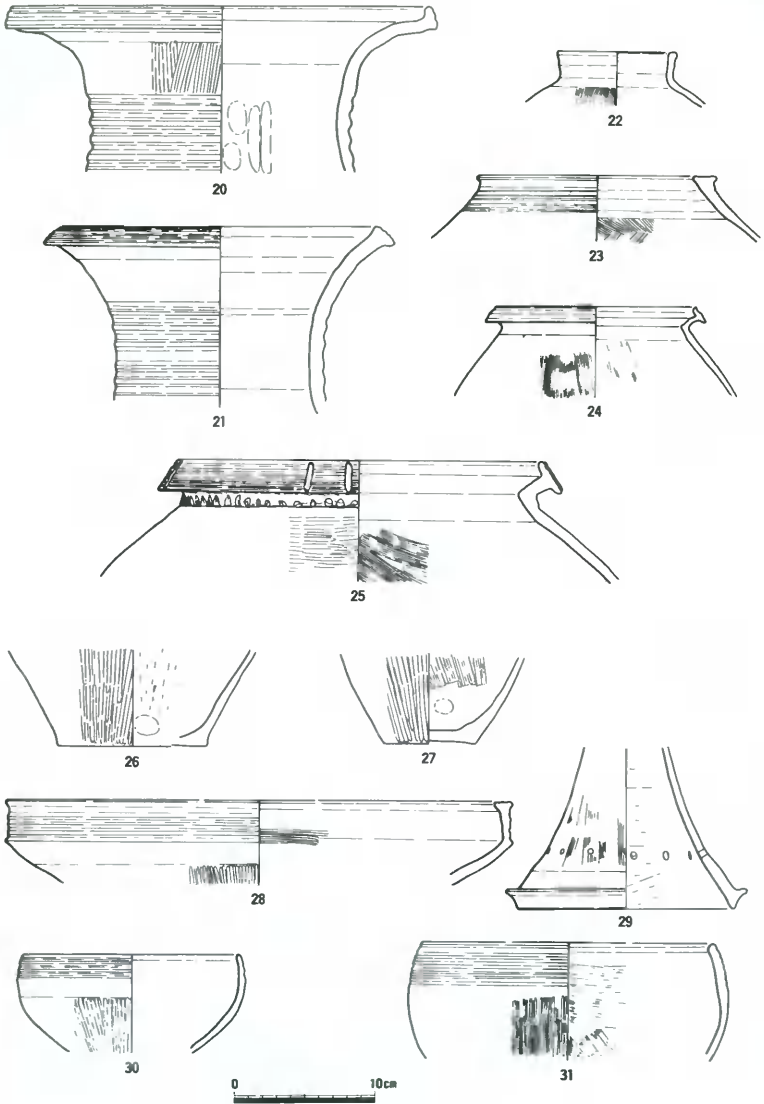
矢部堀越遺跡

径90cm・短径70cm・深さ12cmを測る。この穴から北東の隅に向けて排水溝が伸びている。住居外へ伸びる。その幅30cm・深さ10cmを測る。その他この住居には外溝（周堤帯の外溝）がある。壁体溝の外210cmの位置に溝を3本検出した。北のものは長さ600cm・幅50cm・深さ10cm、南のものは長さ460cm・幅80cm・深さ10cm、西のものは長さ220cm幅30cm・深さ16cmを測る。3本が繋がっていたものと考えられる。土器はこの住居検出前に包含層として取り上げたものの



第19図 竪穴住居-H105 (1/80)

矢部掘越遺跡



第20図 竪穴住居—H105出土遺物

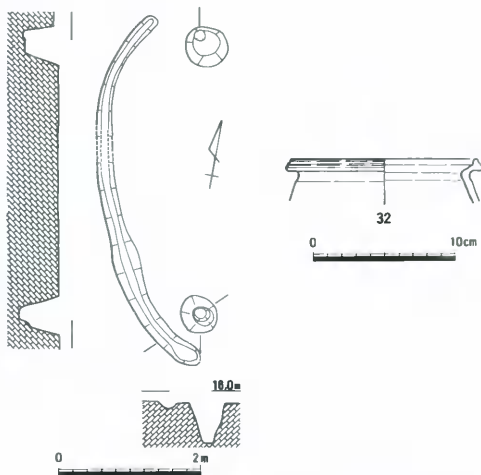
中からこの範囲から出土したものを抽出した。

20は壺で、口縁端部を上方に拡張している。21の壺は上下に拡張する。いずれも長い頸部に数条の凹線文を施す。22は直口壺、23は広口壺である。24は甕。25も甕だが棒状浮文と指頭圧痕文凸帯をもつ。26・27は壺か甕の底部である。28は口径36cmもある大型の高杯である。29は高杯の脚部で、円孔を12個もつ。30・31は台付鉢である。

これらの土器からこの住居の時期は弥生中期後葉になる。

#### 竪穴住居—H107 (第21図)

1区の北西部にある。壁体溝の一部と柱穴が2本残存していた。東の方は削平されている。壁体溝は長さ520cm・幅22cm・深さ10cm、柱穴は直径60cm・深さ40cm、柱間は400cmもある。32は壁体溝から出土した甕で、これからこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。



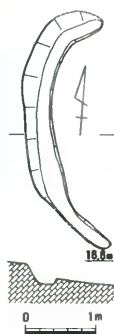
第21図 竪穴住居—H107(1/80)・出土遺物

#### 竪穴住居—H108(第22図)

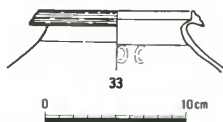
1区の北西端で検出した。壁体溝の一部が残存していた。長さ400cm・幅40cm・深さ10cmを測る。検出面から床面まで21cmある。床面の海拔高は16.4mである。この地区では多数の柱穴を検出できたがこの住居のものは見つからなかった。33の甕は壁体溝から出土した。これからこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。

#### 竪穴住居—H109 (第23図)

1区の北西部で、竪穴住居—H107の東に位置する。壁体溝の一部が残存していた。長さ440cm・幅16cm・深さ5cmを測る。柱穴は検出できなかった。床面の海拔高は15.6mである。土器は小片があるが、実測できるものではない。しかしこれによりこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。



第22図 竪穴住居—H108(1/80)  
・出土遺物



### 竪穴住居—H110 (第23図)

1区の北西部で、竪穴住居—H109に切られている。壁体溝の一部が逆コの字形に残っていた。方形か又は多角形の平面形をもつ非常に小さな住居である。壁体溝の長さ420cm・幅16cm・深さ5cmを測る。床面の海拔高は15.6mである。柱穴は検出できなかった。土器は小片があるが、実測できるものではない。しかしこれによりこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。

### 竪穴住居—H312 (第24・図版99)

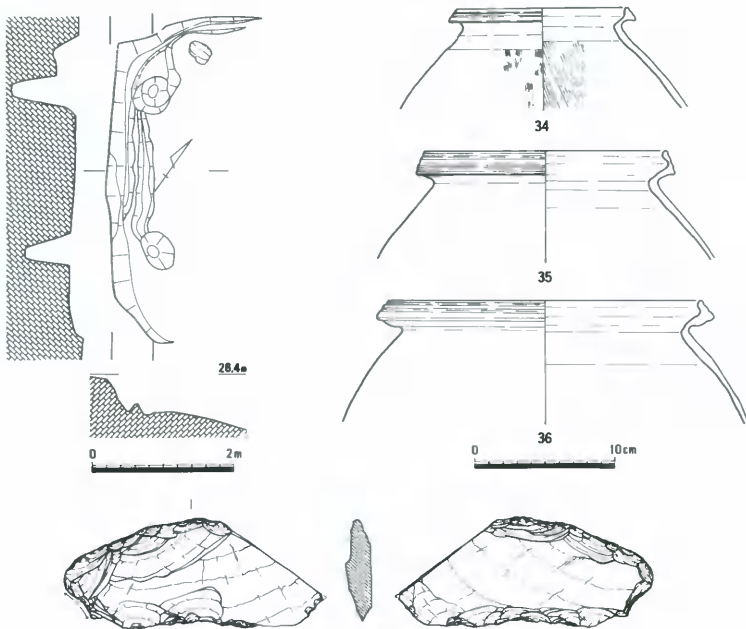
3区の南部で、横穴式石室の下層で検出した。東向き急斜面を切り盛りして建築している。したがって後に造成した東側半分が流出している。壁体溝の一部と柱穴が2本残存している。平面形は方形であったらしい。一辺約440cmある。壁体溝は北から西にかけて逆L字状に残り、長さ200cm・幅22cm・深さ5cmを測る。床面の海拔高は26.2mである。柱穴と壁体溝は接している。柱穴2本は溝で結ばれている。この溝は長さ180cm・幅22cm・深さ5cmを測る。柱間は中心で230cmある。西の壁の高さは床面から20cmを測る。床面の北の端に一辺約30cmの角礫が残っていたが、作業台として使用していたものと考えられる。土器は数点出土している。実測可能なものは3点ある。34は甕で、口唇部を上下に拡張し、外面に2～3条の凹線文を施す。体部両面共ハケメ調整である。35・36も甕だが、口唇部を上にも拡張している。いずれも外面に2～3条の凹線文を施す。S15はサヌカイト製のスクレーパーで最大長89mm、最大幅37mm、最大厚8.5mmを測る。これによりこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。

### 竪穴住居—H313 (第25図)

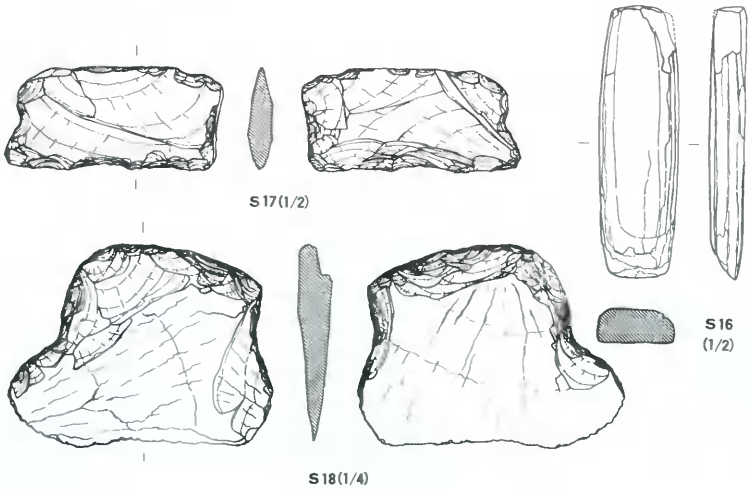
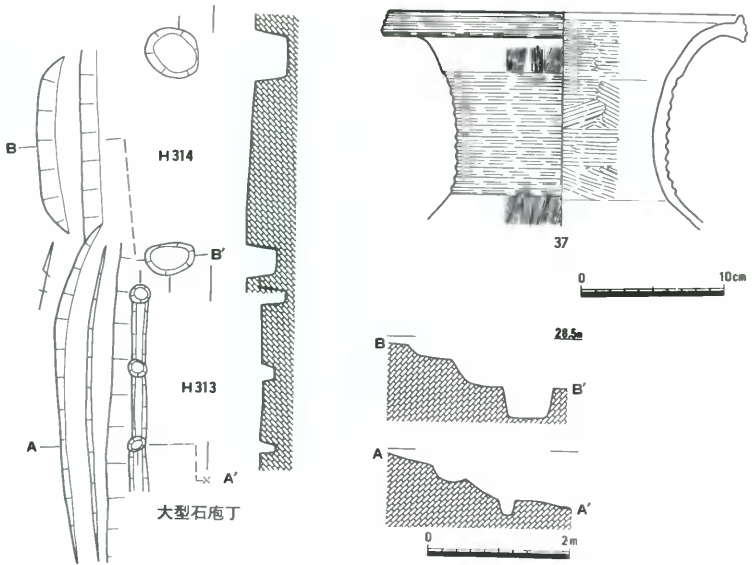
3区の中央部、10区の境目で検出された。溝と柱穴が残存している。溝はわずかに曲がっている。溝の長さ480cm・幅50cm・深さ20cmを測る。床面は西にかなり下がり、住居の床としては不適

第23図 竪穴住居—  
H109・H110  
(1/80)

当である。かなりの後世の削平を受けているのであろう。元の床面の海拔高は28.1mである。柱穴検出面の海拔高は27.8mである。元の床面から30cmも下がっている。柱穴は3本一直線上に並んでいる。溝で結ばれてもいる。この溝は長さ270cm・幅20cm・深さ5cmを測る。柱穴は円形か楕円形で、直径22cm・深さ20cmを測る。遺物は土器が若干とサヌカイト製の大型石庖丁と緑色変岩製の柱状片刃石斧が出土している。37は壺で、長い頸部と口唇部に凹線文を施す。S18は大型石庖丁で最大長187mm・最大幅140mm・最大厚25mmを測る。鋸かあるいは鋤として使用していたものと考えられ、県下でも出土例が少ない。S16は緑色片岩製の片刃石斧で最大長96mm・最大幅28.6mm・最大厚28.9mmを測る。磨きがほぼ全面になされている。木材を切るのではなく削るのに適している。S17の石庖丁は通常の大きさで最大長76mm・最大幅35mm・最大厚9mmを測る。これによりこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。



第24図 竪穴住居-H312 (1/80)・出土遺物



第25図 竪穴住居—H313・H314 (1/80)・出土遺物

竪穴住居—H314 (第25図)

3区の中央部、10区の境目で検出された。竪穴住居—H313に切られている。壁体溝と考えられる段と柱穴が2本残存している。段は長さ240cm・幅35cm・高さ20cmを測る。段の底の海拔高は28.2mである。ここから更に一段下って海拔28.0mの所で柱穴を検出した。柱穴は楕円形で、長径80cm・短径42cm・深さ40cmを測る。土器は細片だがこの住居の時期は弥生中期後葉と言える。

竪穴住居—H315 (第26図・図版99)

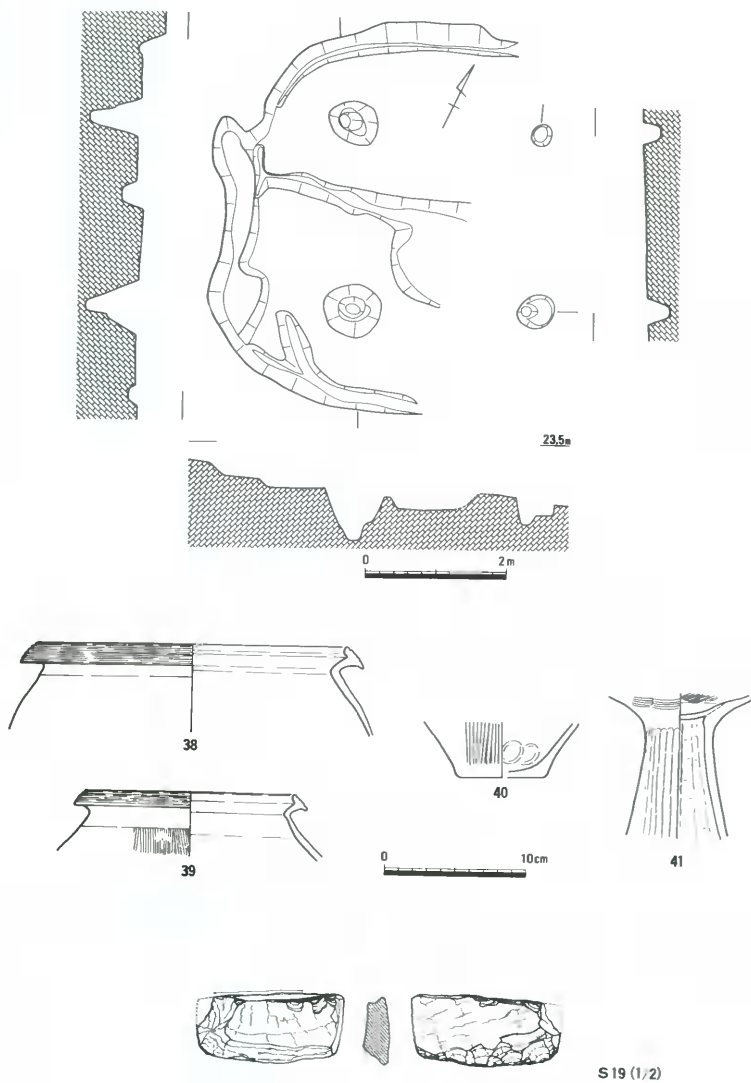
3区の南東部、竪穴住居—H312の東下方で検出された。東向きの緩斜面を切り盛りして建築している。したがって後に造成した東側の一部分が流出している。調査は3区と8区が2～3カ月離れて実施したため、実測図や写真が統一できていなかった。柱穴は2本しか残存していないと考えていたが、8区の調査で他の2本を検出し、4本になった。柱穴の西の2本は直径70cm～80cmと大きく、東の2本は直径30cm～50cmと小さい。柱穴の深さは30cm～70cmを測る。柱間は250cm～280cmある。床面の海拔高は22.9mである。壁の最も良く残っている西側で、床面から40cmある。壁体溝は北側と南側と西の一部に残っている。西の壁は崩れている。この住居の平面形は隅丸の方形と見える。外径で一辺550cmを測る。中央穴は東側が削平されているが、現存で長さ150cm・幅100cm・深さ20cmを測り、ほぼ長方形を呈する。また中央穴から西に向かって溝が掘られている。間仕切りと考えられる。長さ120cm・幅30cm・深さ30cmを測り、西から東に太く深くなる。遺物は土器少量とサヌカイト片70片以上が出土している。石器製作を盛んに行っていたものであろう。38・39は甕、40は底部、41高杯の脚部である。S19はサヌカイト製の不明石器で最大長52.1mm・最大幅25.8mm・最大厚9.8mmを測る。土器から見て時期は弥生中期後葉である。

竪穴住居—H616 (第27図・図版100)

6区の北東部で検出された。東向きの緩斜面を切り盛りして建築されている。したがって後に造成した東側半分が流出している。二段に掘り込まれている。上段は検出面から深さ20cmで平坦面の幅は40cmある。住居の床面はこれから30cm下がる。海拔高は19.4mである。壁体溝は長さ940cm・幅22cm・深さ15cmを測り、北から西を経て南西まで連続して三日月状に残存している。したがって住居の平面形は円形である。間仕切りと考えられる溝が2本壁体溝から中央穴に向けて検出できた。長さ220cm・幅30cm・深さ15cmを測り、北の溝が少し長くて狭い。柱穴は2本残っていた。不整円形で、直径60cm・深さ60cmを測り、南のものがやや小さい。柱間は300cmある。中央穴らしき凹みが見えるが確認できない。火所が1カ所ある。径30cmの範囲が赤く焼けている。遺物は土器と石器がある。42は甕、43は口径40cmもある大型の高杯である。どちらも口唇部に凹線文を施す。石器は5点あって、石錐、石槍・石鏃・扁平片刃石斧および

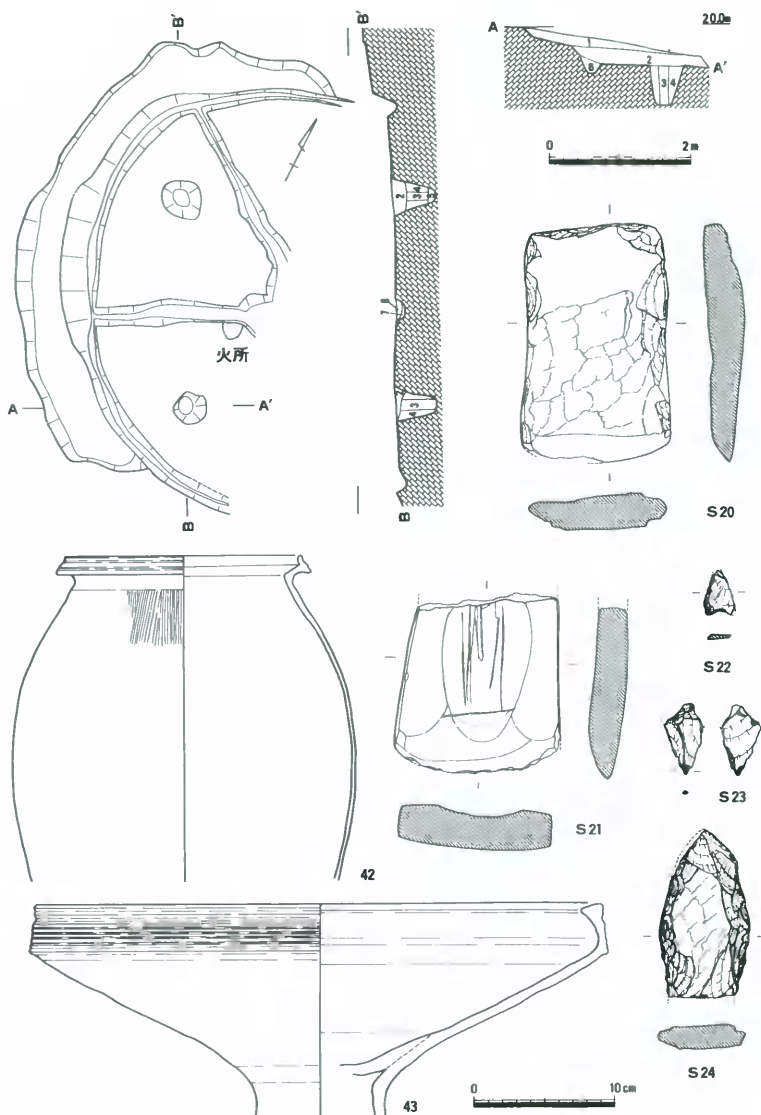


矢部堀越遺跡



第26図 竪穴住居-H315 (1/80)・出土遺物

矢部堀越遺跡



第27図 竪穴住居—H616 (1/80)・出土遺物…石器 1/2

石斧形をした砥石である。S20は緑色片岩製の扁平片刃石斧で最大長85mm・最大幅54mm・最大厚12mm。S21は凝灰岩製の砥石で全面使用している。最大長60mm・最大幅58mm・最大厚14mm。S22はサヌカイト製の石鎌で最大長15mm・最大幅11mm・最大厚2mm。S23はサヌカイト製石錐で最大長25mm・最大幅14mm・最大厚3mm。S24はサヌカイト製石槍で石庖丁の転用かもしれない。最大長59mm・最大幅33mm・最大厚9mmを測る。土器から見てこの住居の時期は弥生中期後葉である。

竪穴住居—H718（第28図）

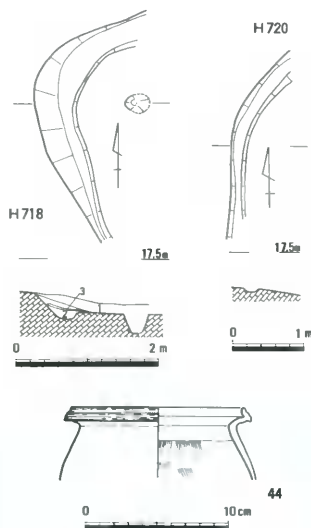
7区北の南端、1区北西端で検出した。壁体溝の一部と柱穴が1本残存している。壁体溝は逆L字状を呈し、長さ400cm・幅20cm～60cm・深さ10cmを測る。コーナー部分は幅広い。壁体溝が逆L字状を呈している事からこの住居の平面形は方形と考えられる。床面の海拔高は16.7mある。最も残りの良いコーナー部分の壁の高さは床面から30cmもある。柱穴はコーナーから60cm離れ、楕円形を呈し、長径38cm・短径24cm・深さ30cmを測る。埋積土は一番に壁体溝を暗灰色砂質土が埋め、その上に全体に黒褐色砂質土が埋まっている。土器は若干出土している。44は甕で、口唇部に凹線文、体部内面にハケメ調整している。これから時期は弥生中期後葉である。

竪穴住居—H719（第29図）

7区北の中央部で検出した。第10図を参照されたい。壁体溝の西側の一部だけがやっとなっていた。カーブの具合から見てこの住居の平面形は円形を呈するようになると思われる。溝の長さ400cm・幅50cm・深さ15cmを測る。床面の海拔高は16.4mである。サヌカイト製の石庖丁S25が1点出土している。S25は最大長128mm・最大幅56mm・最大厚12mmを測る。時期は弥生中期後葉か。

竪穴住居—H720（第28図）

7区北の南端、竪穴住居—H718に切られている。壁体溝の西北側の一部だけがやっとなっていた。この部分だけでは住居の平面形は円形か隅丸方形か不明である。溝の長さ240cm・幅30cm・深さ5cmを測る。土器はないが時期は弥生中期後葉か。



第28図 竪穴住居—H718-H720 (1/80)  
・H718出土遺物

竪穴住居一H817（第30図）

8区の北端で検出した。壁体溝の西北側の一部と柱穴が3本残っていた。壁体溝は緩やかな左カーブを描いている。住居の平面形は円形と考えられる。溝の長さ240cm・幅100cm・深さ12cmを測る。床はかなり削平を受けて東に傾いているが床面の海拔高は21.2mであろう。柱穴は3本が1列に並んでいる。柱間は北が180cm、南が200cmを測る。柱穴の大きさは33cm～53cm、深さは50cm～70cmを測る。壁体溝の底は拳大以上の大きさの角礫が大量に入っていた。この中から45の台付き鉢が出土している。ほぼ完形に復元できた。口唇部に凹線文を施し、外面へラミガキ調整している。その他遺物として石器が3点出土している。S26はサヌカイト製石鏃でK801から出土したが住居内として掲載した。最大長27mm・最大幅17mm・最大厚4.5mm。S27はサヌカイト製石鏃で五角形を呈する。最大長23mm・最大幅15mm・最大厚3mm。S28は扁平片刃石斧で現存長34mm・最大幅55mm・最大厚19mmを測る。この土器から時期は弥生中期後葉に比定できる。

竪穴住居一H501（第31図）

5区の北東、2区の西側で検出した。比較的緩斜面に位置する。壁体溝の西北側の一部と柱穴が4本残っていた。壁体溝は直線で南から北に伸び、緩やかに東に曲がる。住居の平面形は隅丸方形と考えられる。柱穴4本は方形に位置する。柱間は北東から時計回りに230cm・230cm・220cmを測る。ほぼ正方形である。西の2本が5区に、東の2本は2区で検出した。床面の海拔高は18.2mである。土器はないが時期は弥生中期後葉と考えられる。

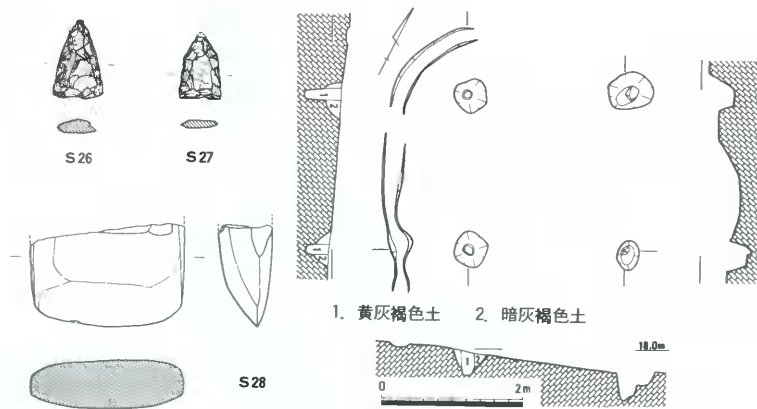
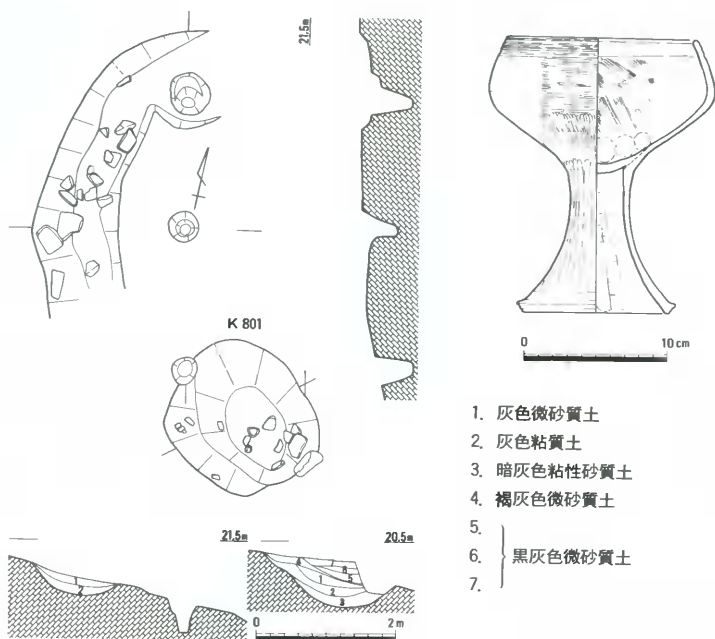
竪穴住居一H502（第32・33図・図版100）

5区の南部で検出した竪穴住居である。比較的平坦な地形に立地している。平面形は隅丸方形を呈す。北の高い所が少し崩れている。規模は外径で東西550cm・南北490cm・内径で東西460cm・南北440cm・床面積約20㎡を測る。検出面は既に床面になっており、床面の海拔は17.9mである。柱穴は4本検出できた。平面形は円形か楕円形を呈し、長径60cm～80cm・短径60cm・深さ60cm～80cmある。柱間は北東から時計回りで270cm・270cm・260cm・270cmを測る。



第29図 竪穴住居一H719 出土石砲丁

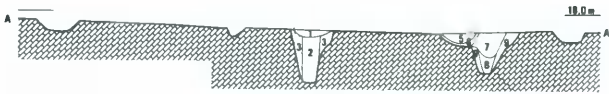
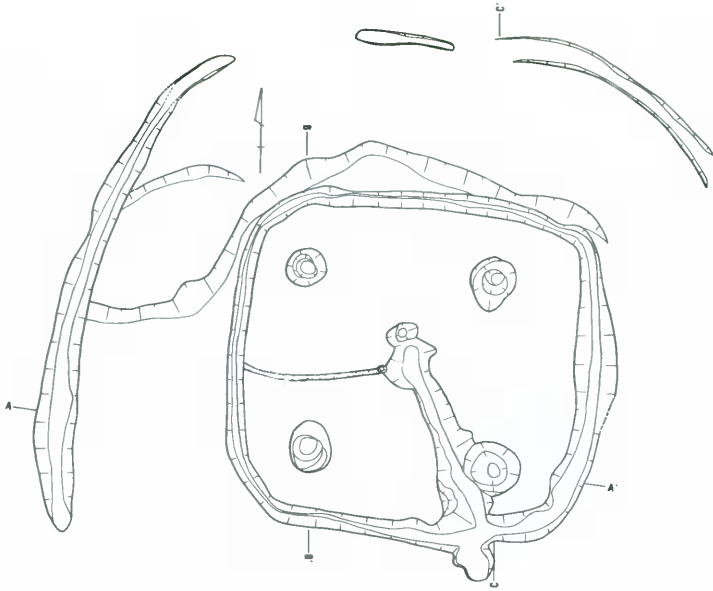
矢部堀越遺跡



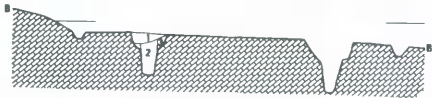
第30図 竪穴住居-H817 (1/80)・出土遺物

第31図 竪穴住居-H501 (1/80)

矢部堀越遺跡



- |            |           |            |
|------------|-----------|------------|
| 1. 黄灰褐色砂質土 | 4. 灰色砂    | 7. 暗灰褐色土   |
| 2. 暗灰色土    | 5. 暗黄灰褐色土 | 8. 淡暗黄灰褐色土 |
| 3. 暗灰褐色土   | 6. 淡暗灰褐色土 | 9. 明黄褐色土   |



- |          |
|----------|
| 1. 黄灰褐色土 |
| 2. 暗灰褐色土 |
| 3. 灰褐色土  |



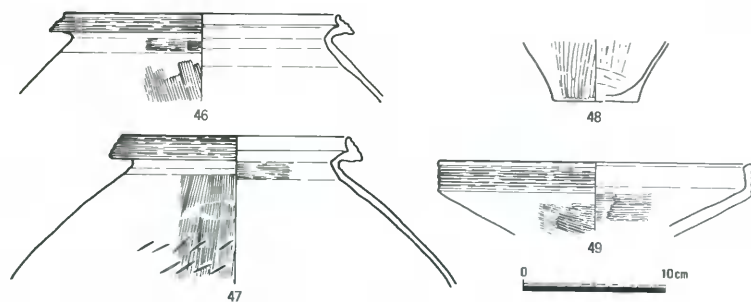
- |           |
|-----------|
| 1. 黄灰褐色土  |
| 2. 暗灰色土   |
| 3. 暗黄灰褐色土 |

第32図 竪穴住居—H502 (1/80)

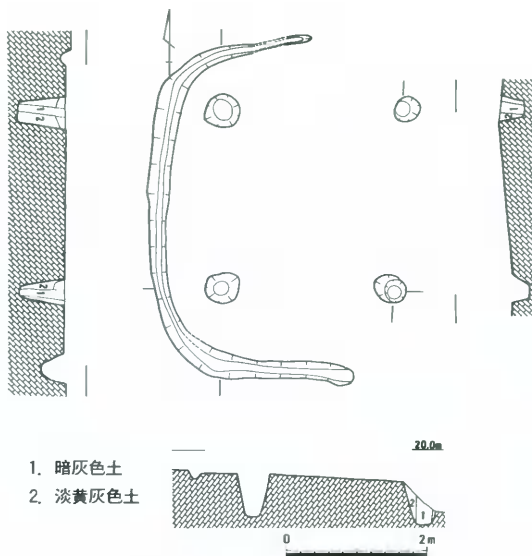
床は平坦で固く、貼り床はしていない。壁体溝は一周完全に残存している。幅22cm・深さ10cm～20cmを測り、断面形はU字形を呈する。排水溝が中央穴から南東方向に検出できた。この溝は幅が広く住居の外部まで伸びている。長さ290cm・幅30cm～70cm・深さ20cmを測り、断面形はU字形を呈する。間仕切りの溝も検出している。中央穴から西にわずかにカーブしながら壁体溝に至る。長さ200cm・幅10cm・深さ10cmを測り、断面形はU字形を呈する。中央穴は長方形を呈し、北北東から南南西に長辺を向け、長辺70cm・短辺15cmある。火所は見つからなかった。この住居には壁体溝の外側200cm離れて半円形に囲む溝が検出された。切れ切れに続いている。長さ1,400cm・最大幅60cm・深さ15cmを測り、断面形はU字形を呈する。土器は住居検出中に取り上げたもので埋積土に少量含まれていたものである。46は甕で、口縁端外面に4条の凹線文を施し、体部外面は縦方向のハケメ調整している。47は甕で、肩部にハケ状工具による連続刺突文を二段にもつ。48は壺か甕の底部片で体部外面はヘラミガキ、内面は下から上にヘラケズリしている。49は高杯の杯部で、口縁が垂直に立ち上がり、その外面に4条の凹線文を施し、両面とも横方向にヘラミガキしている。これらの土器からこの住居の時期は弥生中期後葉に比定できる。

#### 竪穴住居-H901（第34図）

9区の東端で検出した。壁体溝と柱穴を検出している。壁体溝が逆コの字形に残る。長さ820cm・幅30cm・深さ10cm～30cmを測る。この住居の平面形は隅丸方形か。柱穴は4本あって、平面形は円形、直径28cm～44cm・深さ22cm～64cmを測り、柱間は平均250cmある。土器は小片しか出ていないが、時期は弥生中期後葉に比定できる。



第33図 竪穴住居-H502 出土遺物



第34図 竪穴住居-H901 (1/80)

(2) 建物

建物-B101 (第35・図版101)

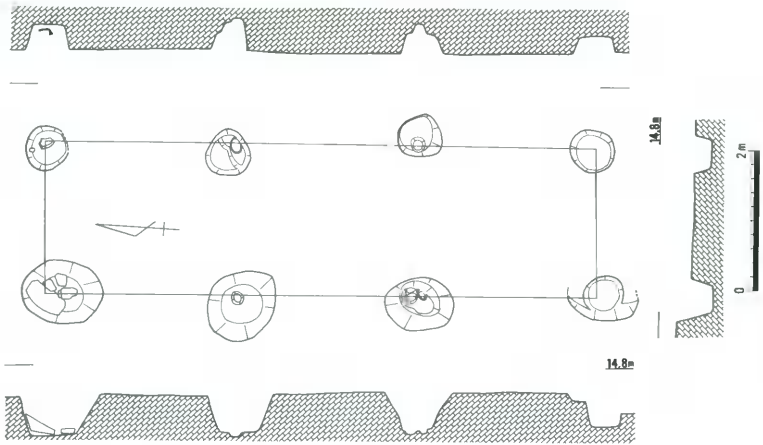
1区の中央からやや東寄りで検出した。周辺に沢山の柱穴があるが比較的大きかったため纏めることができた。竪穴住居-H105と一部重複している。平面形は長方形である。棟の方向はほぼ南北である。梁間1間で210cm、桁行3間で780cm、床面積約16㎡を測る。柱穴の平面形は円形か楕円形を呈し、直径110cm～60cm・深さ60cm～15cmを測る。桁行1間は平均260cmである。柱痕と考えられる一段深く掘り込まれているものが4本あり、北西隅の柱穴には角礫3個で柱押さえしている。北東隅の柱穴より出土した高杯の破片から弥生中期後葉に比定できる。

建物-B701 (第36図)

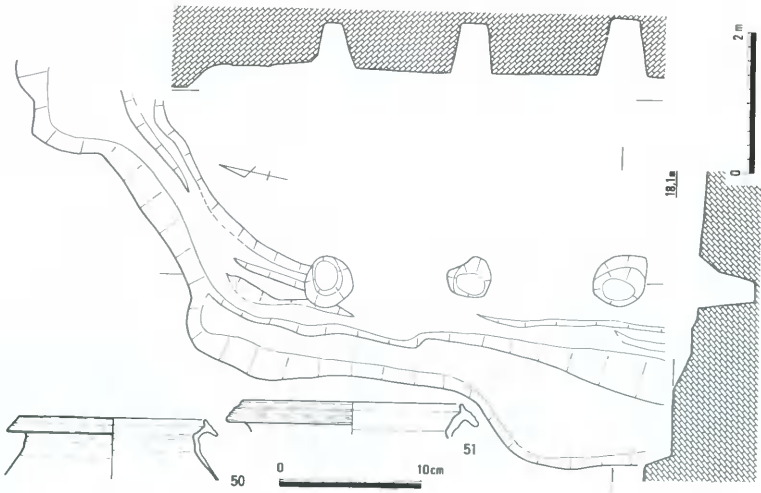
7区南の中央部で検出した。3本一列に並んだ柱穴列である。柱穴の平面形は円形・不整形・不整楕円形とさまざまである。柱穴の大きさは直径80cm～60cmを測る。柱間は南北2つ共200cmである。西側から北側にかけて溝を検出している。竪穴住居-H817に似ている。遺物としては土器が2点出土している。50は頸部に凸帯風のくせを持つ。50も51も口縁端面に数条の凹線文を施している。口径は50が13cm、51が15cmを測る。50・51の土器からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。



矢部堀越遺跡



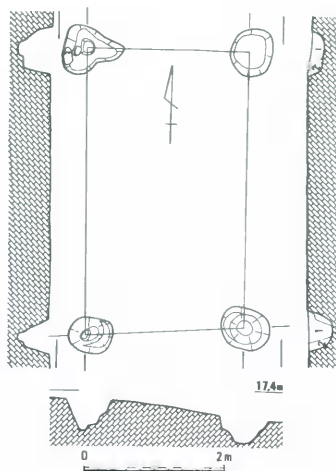
第35図 建物-B101 (1/80)



第36図 建物-B701 (1/80)・出土遺物

## 建物一B702 (第37図)

7区北の南中央部で検出した。竪穴住居—H718の西北に位置する。4本の柱穴を検出でき、その平面形は円形・不整形・不整形円形とさまざまである。柱穴の大きさは直径65cm～50cm・深さ50cm～20cmを測る。柱間は北西隅から時計回りに225cm・388cm・225cm・400cmである。梁間1間225cm・桁行1間394cm・床面積約8.8㎡を測る。床の平面形は東の狭い台形を呈し、検出面の海拔高は17.3mである。柱穴の西の2本には柱痕と考えられる一段低い部分が残っている。土器は甕の体部小片が柱穴から出土し、この柱穴検出前に弥生中期土器しか見られない事からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。



第37図 建物一B702 (1/80)

## (3) 土壌

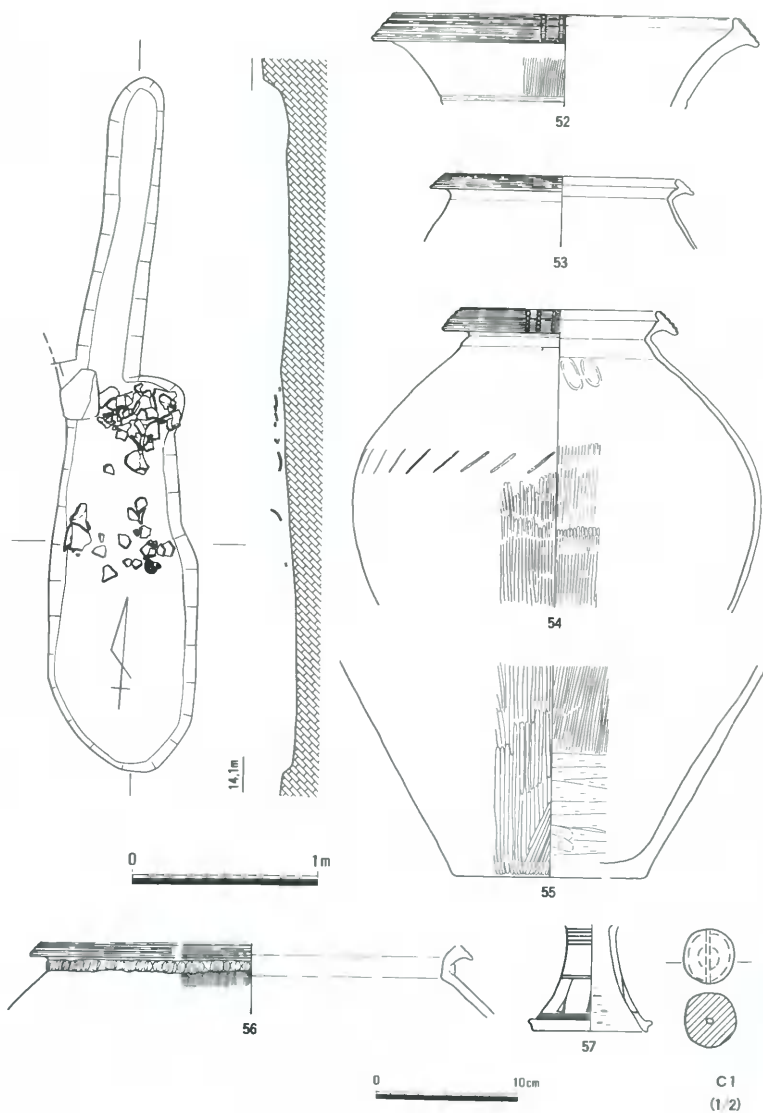
## 土壌一K101 (第38図)

1区北東部で検出した土壌で、平面形はおたまじゃくしの様である。土壌の北の部分に溝が引付いたもの。溝を除いた土壌の平面形は不整形長楕円形で、長さ210cm・幅80cm・深さ15cmを測る。検出面の海拔高は14.0mである。弥生中期後葉土器が土壌の北半部に図のような出土状況を示した。それらを復元して、実測したのが52～57であり、他に土製品が出土している。土壌の北西端に一辺30cm位の角礫が落ち込んでいる。土器と一緒に流れこんだものだろう。土壌の用途・性格は不明である。52は長頸壺で、口縁外面に4条の凹線文があり、その上から棒状浮文を張り付けている。頸部には縦方向のハケメ調整の後、凹線文を施している。53は甕の口縁部。54は甕で、棒状浮文と体部の刺突文が特徴である。55は壺か甕の底部。56は大型の甕で、頸部に指頭瓦痕文凸帯を張り付けている。57は高杯脚部で、沈線文と三角形透かしを施す。C1は玉形土製品で、小さな穴が貫通している。これらの遺物からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。

## 土壌一K102 (第39図)

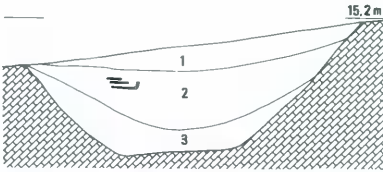
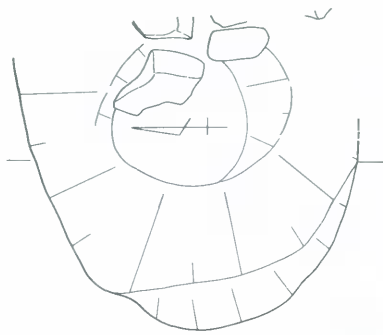
1区南東端部で検出した土壌で、平面形は楕円形と考えられる。東1/3が用地外のため調査できなかった。長さ165cm以上・幅165cm・深さ55cmを測る。検出面の海拔高は15.2mである。埋積土は上から第1層黒褐色土・第2層暗褐色土・第3層黄褐色土である。土器は第2層

矢部掘越遺跡

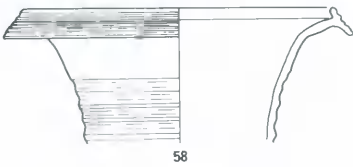


第38図 土壙-K101 (1/30)・出土遺物

から出土した。平面図の角礫は床直上のものである。土器は廃棄されたものであろう。58は長頸壺で、口唇部を上下に拡張し、59は上に拡張している。60は直口壺で、円形浮文と円孔が施されている。61は大型の飾られた台付き鉢と考えられ、円形浮文・斜格子文・鋸歯文で飾っている。62は高杯脚部で、円孔が20個開けられている。これらの土器からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。



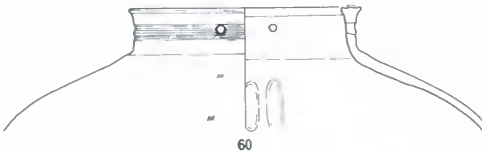
1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土



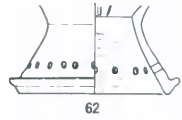
58



59



60



62

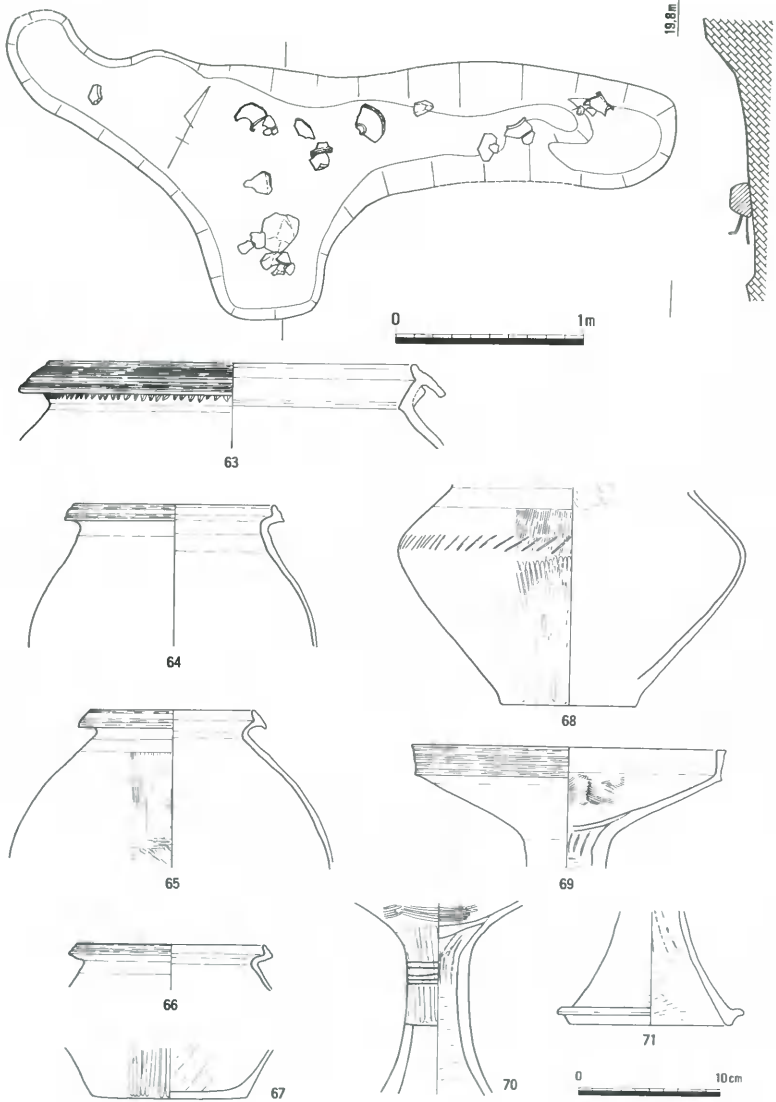


61



第39図 土 塚-K102 (1.30)・出土遺物

矢部堀越遺跡



第40図 土 塚-K 204 (1/30)・出土遺物

土壌-K204 (第40図)

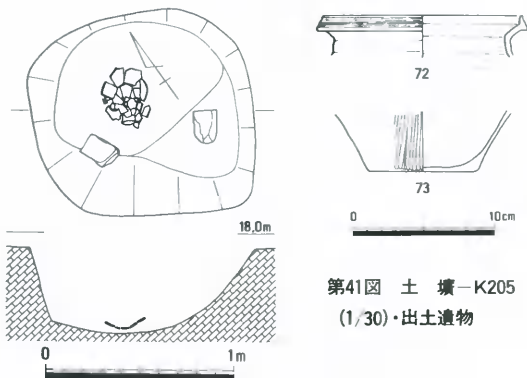
2区北部で検出した土壌で、平面形は山刀形を呈している。東西に長いT字形というべきか。東西の長さ360cm・南北の長さ135cm・幅65cm・深さ20cmを測る。検出面の海拔高は19.7mである。弥生中期後葉土器が土壌の中央から東寄りに図のような出土状況を示した。一辺20cm以下の角礫も混じっている。63は大型の甕の口縁部を上下に拡張し、凹線文の上に横ハケを施し、くの字形に折れ曲がった頸部に指頭瓦痕文の凸帯を張り付けている。64は甕で、口唇部を上にも拡張している。65は甕で、口唇部を拡張。66は64と同じ。67は甕の底部で、内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキ調整している。68は鉢で、体部最大径のある位置にヘラによる刺突文が施されている。69は高杯で、口縁部は直立し、外面には4条の凹線文が施されている。70は高杯脚柱部で、ヘラ描きの沈線文がある。71は高杯脚部で、端部を外に摘み出す特徴の他は無文である。これらの土器からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。

土壌-K205 (第41図)

2区中央東部で検出した土壌で、平面形は隅丸方形を呈している。長さ116cm・幅106cm・深さ45cmを測る。検出面の海拔高は17.9mである。人頭大の角礫2個と壺が床直上に図の様に出土している。72と73は同一個体であるが、体部が復元できなかった。頸部に凸帯文風の盛り上がりをもつ。この土壌の性格は不明である。土器からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。

土壌-K801 (第30図)

8区中央部で検出した土壌で、平面形は不整形円形を呈している。竪穴住居-H817と切り合いの関係にある。角礫が沢山はいつていることは竪穴住居-H817の壁体溝の状態と良く似るから、或いは竪穴住居-H817の貯蔵穴の可能性もある。長さ220cm・幅200cm・深さ80cmを測る。検出面の海拔高は20.5mである。土器は細片しか出土していないが、土器からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。

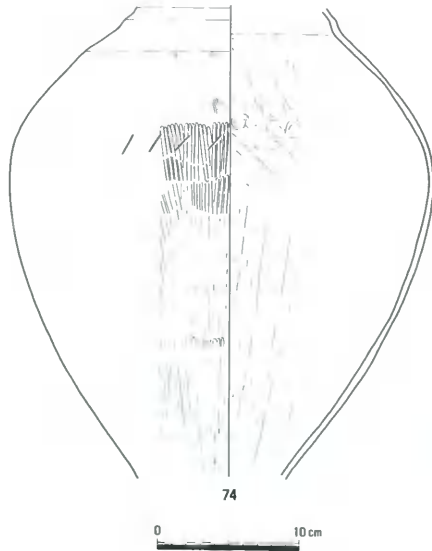
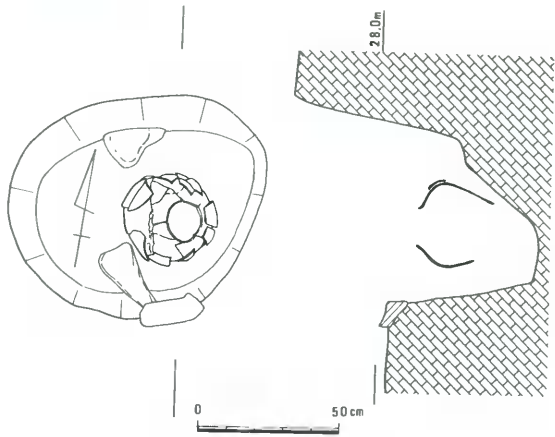


第41図 土壌-K205  
(1/30)・出土遺物

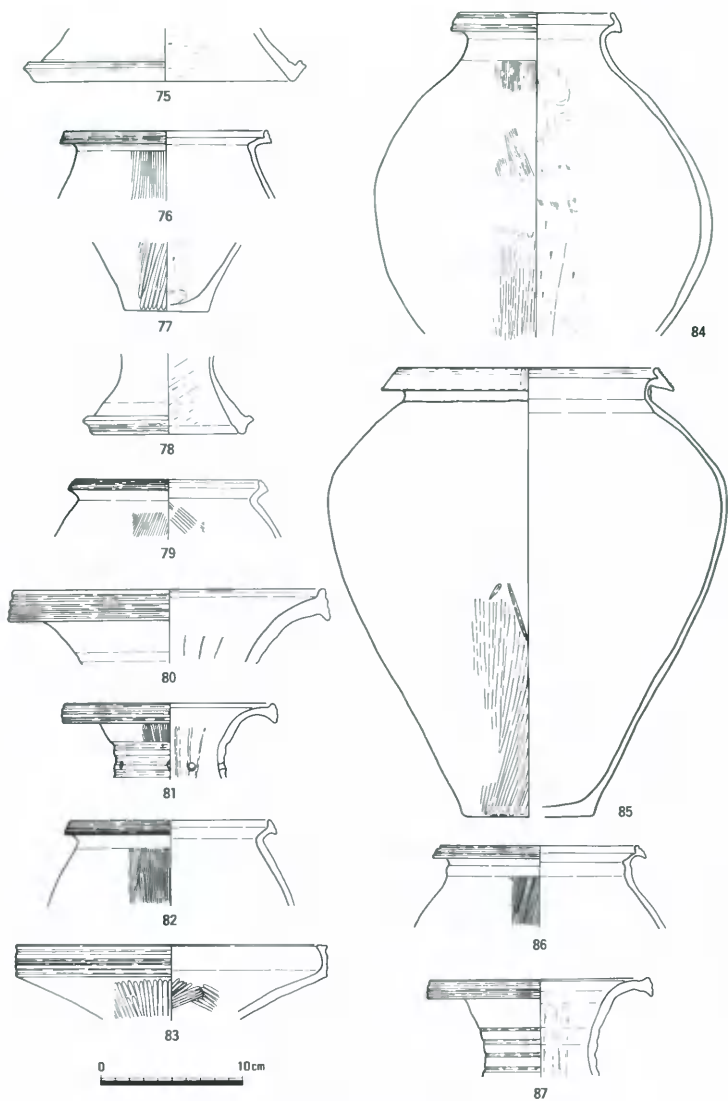
土器棺-X305(第42

図)

3区の中央やや北の西端、一番高いところで検出した土壌で、上面を谷状に抉りとられているので平面形は不整楕円形を呈している。長さ90cm・幅80cm・深さ53cmを測る。検出面の海拔高は28.5mである。土器は正常位に据えられていた。しかし口縁部は溝により削平されていて、底部も粗く欠いている。74がその土器で、頸部に凸帯文風の盛り上がりをもつ壺である。体部内面は下から2/3までヘラケズリし、外面はヘラミガキしている。棺の蓋としては壺の体部破片を使用していた。土器からこの遺構の時期は弥生中期後葉に比定できる。



第42図 土器棺-X305 (1/20)・土器



第43図 弥生中期柱穴・溝出土土器



(4) 柱穴・溝 (第43図)

弥生中期後葉に比定できる土器を出土した柱穴は全区に亘って数百本ある。建物に纏められない柱穴である。この柱穴群から実測に耐えられる土器が十点以上出ている。75～85がそれである。壺・甕・高杯などがある。81は1区の柱穴から出土した長頸壺で、頸部に珍しく円孔をもつ。85は7区南の柱穴から出土した甕で、復元してほぼ完形になった。頸部に扁平の凸帯文を張り付け、本部中央よりやや下にヘラによる線刻がなされている。鹿かと思われたが不明である。

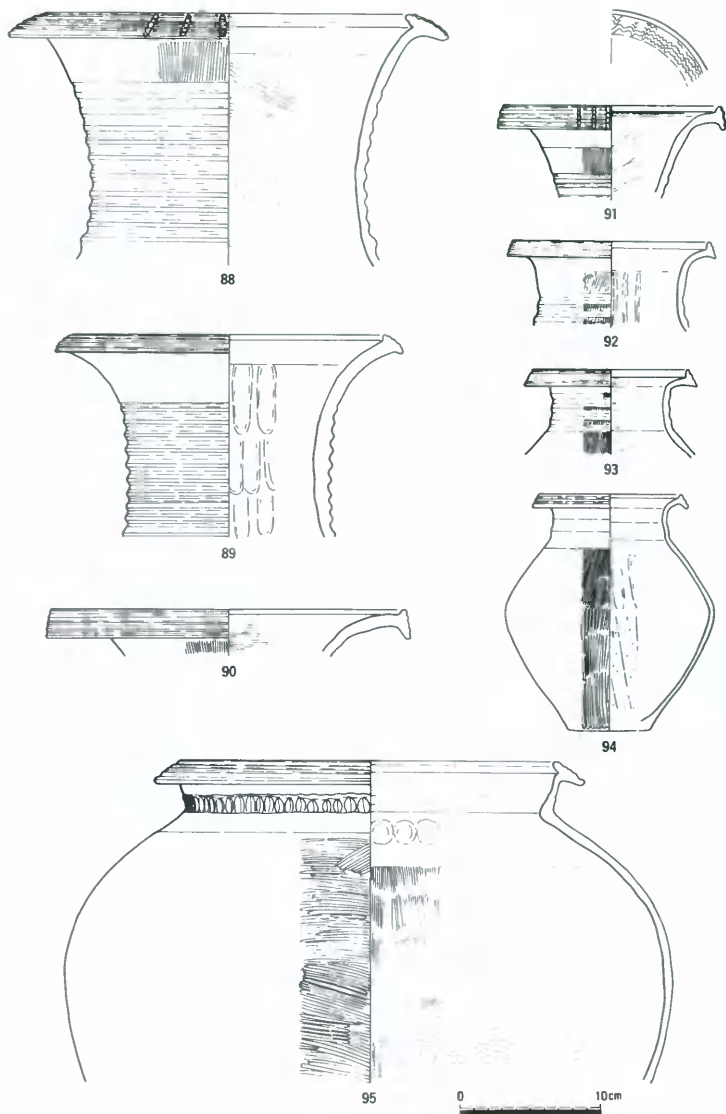
弥生中期後葉に比定できる土器を出土した溝は全区に亘って数十本ある。主要遺構一覧表に掲載していない溝のほうが多い。この溝群から実測に耐えられるほどの大きさの土器は少ない。86・87の壺は1区の溝から出土している。第47図の石器S29～S38は遺構内出土であるが、包含層の項で説明する。

(5) 包含層 (第44～50図)

遺構検出の直前迄に出土した土器は包含層出土土器として取り上げた。その内容になってはっきり遺構に伴うことがわかったものは、各々その遺構に入れて、復元し、実測もしている。ここでは遺構からもれたものを包含層出土土器として第44図～第46図に掲載した。第44図は主として長頸壺を集めた。第45図は主として甕と鉢を集めた。第46図は主として高杯と石器と土製品を集めた。石器は多数ある中から厳選して第47図～第50図に掲載した。

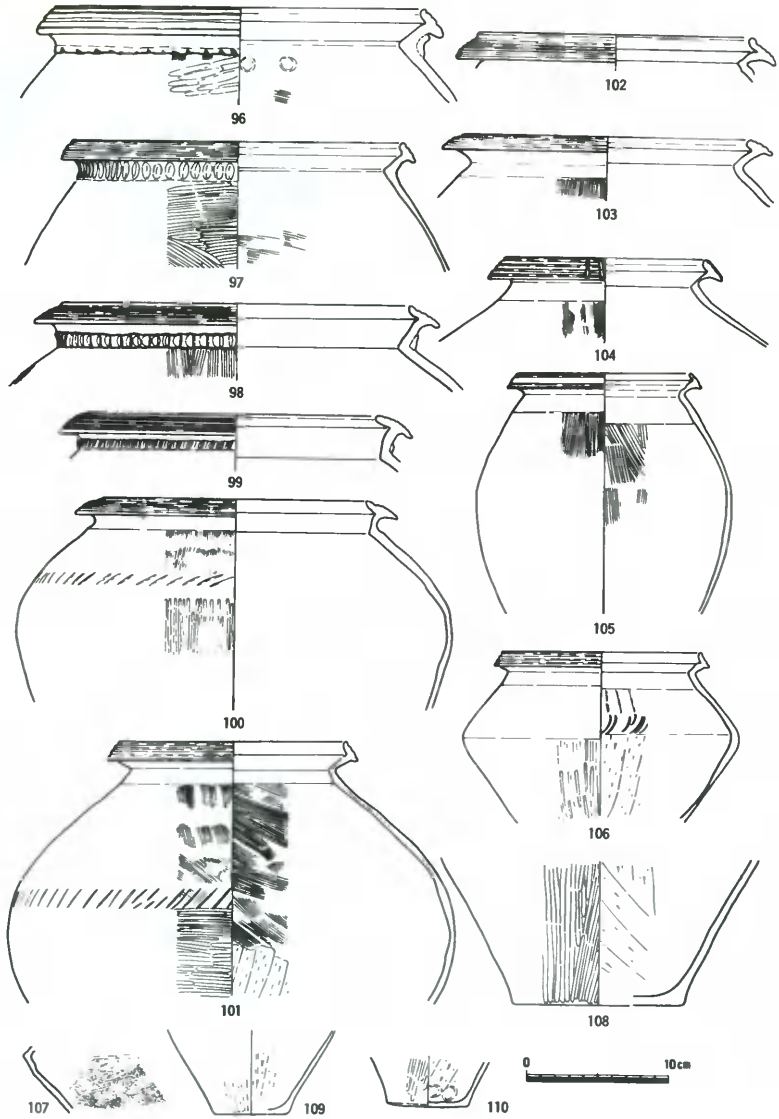
88は5区から出土し、口唇部に棒状浮文を3本一単位で6カ所張り付け、頸部には10条の凹線文を施す。89は1区から出土し、口唇部に4条の凹線文、頸部には10条の凹線文を施す。90は1区から出土し、口唇部に4条の凹線文を施す。91は1区から出土し、口唇部に3条の凹線文と棒状浮文、口縁部内面(上面)にきめ細かい波状文を施す。92は1区から出土し、口唇部に3条の凹線文、頸部にも凹線文を施す。93は口唇部・頸部にも3条の凹線文を施す。94は1区から出土し、ほぼ完形で、口径10.0cm・底径16.0cm・器高16.8cmをはかり、口唇部に2条の凹線文、頸部には1本の凸帯文風の癖をもつ。95は1区から出土し、壺とも甕とも言える大型の土器で、頸部に指頭圧痕文凸帯を張り付けている。96～99は頸部に指頭圧痕文凸帯を張り付けている甕か鉢である。口唇部外面は斜め上方を向いていて、3～5条の凹線文を施す。97・98は5区から出土。100は5区から出土した鉢か甕で、口唇部外面はほとんど上方を向いていて、6条の凹線文を施し、肩部にハケ状工具による刺突文を施す。101は1区から出土した甕で、口唇部に6条の凹線文、体部最大径の位置にハケ状工具による刺突文を施す。102は1区、103は2区から出土した甕で、口唇部に4条の凹線文を施す。104は2区から出土した甕で、4条の凹線文の上に棒状浮文を張り付けている。105は5区から出土した甕で、体部の形がスマートである。106は3区から出土した鉢で、ソロバン玉状の体部をもち、その内面は下から

矢部堀越遺跡

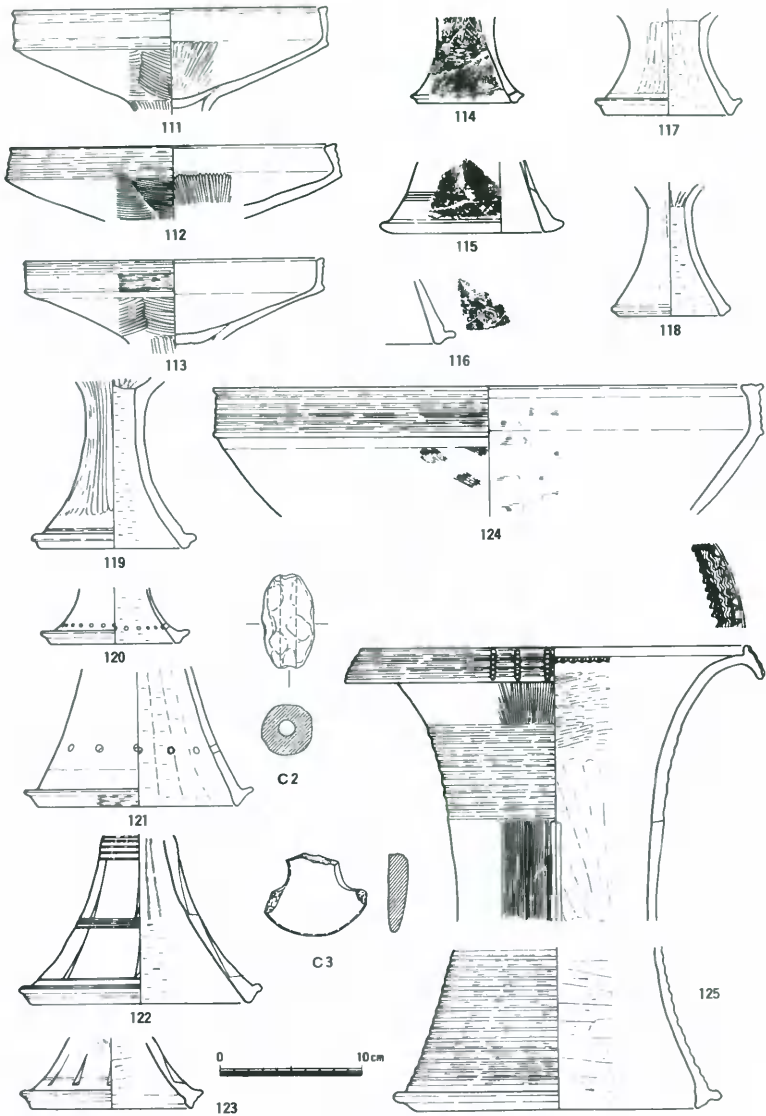


第44図 弥生中期包含層出土遺物(1)

矢部掘越遺跡



第45図 弥生中期包含層出土遺物 (2)



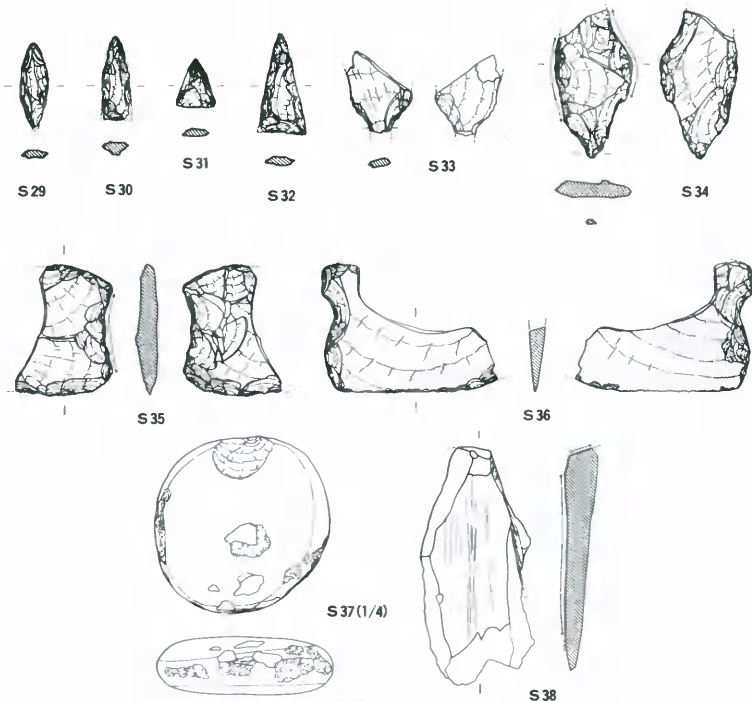
第46図 弥生中期包含層出土遺物（3）

最大径の位置までヘラケズリし、その上方に爪跡がくっきり残っている。外面はヘラミガキ調整である。107は堅穴住居—H102周辺で出土した甕か鉢の肩部の小破片で、連続した3本線による渦巻文が描かれている。この渦巻文は特殊器台のもの原形であろうか。珍しい例である。108は2区出土の大型の壺か甕の底部で、底径12.0cmを測る。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキである。109・110は壺か甕の底部である。111は高杯の杯部で、直立した口縁部の外面には凹線文がなく、ヨコナデしている。体部内外面ともヘラミガキしている。杯底部は円盤充填である。112は高杯の杯部で、口縁部はやや内傾し、外面には4条の凹線文を施す。113は高杯の杯部で、口縁部外面には2条の凹線文とハケメを施す。114は7区出土の高杯の脚部で、ヘラ描きの4条の沈線文とそれを挟んで上下に鋸歯文を施し、その下に小円孔を多数横一列に開けている。115は高杯の脚部で、ヘラ描きの4条の沈線文とその下にヘラ描きの斜格子文を描く。116は高杯の脚部小破片で、107のような渦巻文をもつ。両者の違いは上下に1本沈線で境界していることと渦巻を結ぶ線が短くかつ1本であることである。三重丸を繋いだ形である。117は高杯の脚部で、短くて太くて無文である。118は高杯の脚部で、細長くて無文である。119は高杯の脚部で、さらに細くて無文である。120は高杯の脚部で、多数の小円孔を持つ。121は高杯の脚部で、120よりも少数の若干大きい円孔を持つ。122は高杯の脚部で、上から5本・3本・1本のヘラ描き沈線文を施し、三角形の刻みを二段に6カ所持っている。深い刻みであり、透かしてはしない。123高杯の脚部で、三角形の深い刻みを8カ所持っている。124は大型高杯の杯部で、口径36.0cmを測る。口縁端上面と外面に凹線文とハケメを施す。125は5区出土の器台で、上半部と下半部が直接接合できなかつた。したがって器高は計測できないが口径27.2cm・底部20.2cmを測る。口縁部と体部に凹線文が見られ、口縁部外面には棒状浮文、内面には波状文を施す。体部中央部に長方形の透かしが4カ所開けられている。脚端部は高杯と同様に外に摘み出している。

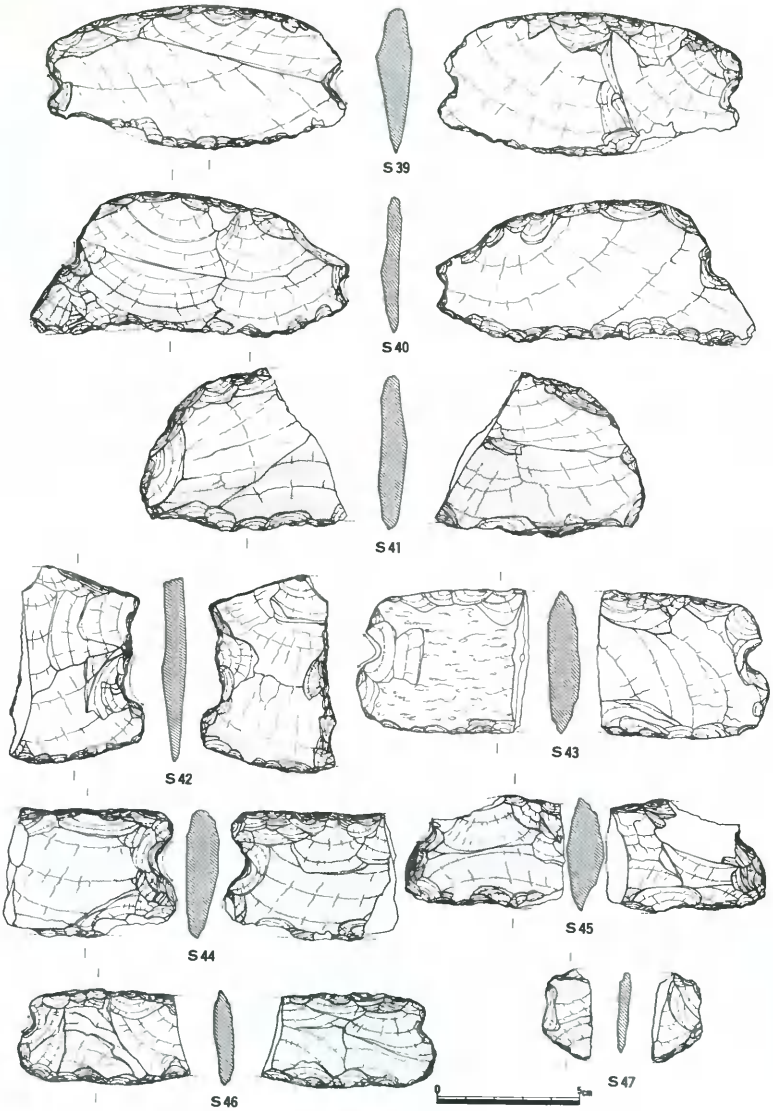
C2は5区出土の完形品の土錘で、長さ65mm・直径35mm・穴の直径10mm・重さ73.6gを計測する。C3は5区出土の分銅形土製品で、下半部と考えられる。分銅形土製品はしばしば破壊されて出土する。残存部の大きさは長さ58mm・幅72mm・厚さ13mm・重さ52.1gを計測する。復元の長さ90mm位であろう。大きさとしては並みかやや小さい部類に属す。

S29は1区K7出土のサヌカイト製石鎌で、柳葉凸基式に属す。S30は1区P5柱穴出土のサヌカイト製石鎌で、柳葉平基式に属す。S31は2区D4出土のサヌカイト製石鎌で、平基式に属す。S32は1区D11出土のサヌカイト製石鎌で、平基式に属す。S33は6区柱穴出土のサヌカイト製石錐と考えられる。S34は4区P119出土のサヌカイト製不明石器で、錐の可能性はある。S35は6区D—1出土のサヌカイト製石庖丁で、欠損したものである。S36は1区P59出土のサヌカイト製石庖丁で、欠損したものである。S37は5区D21出土の火山岩製磨石・

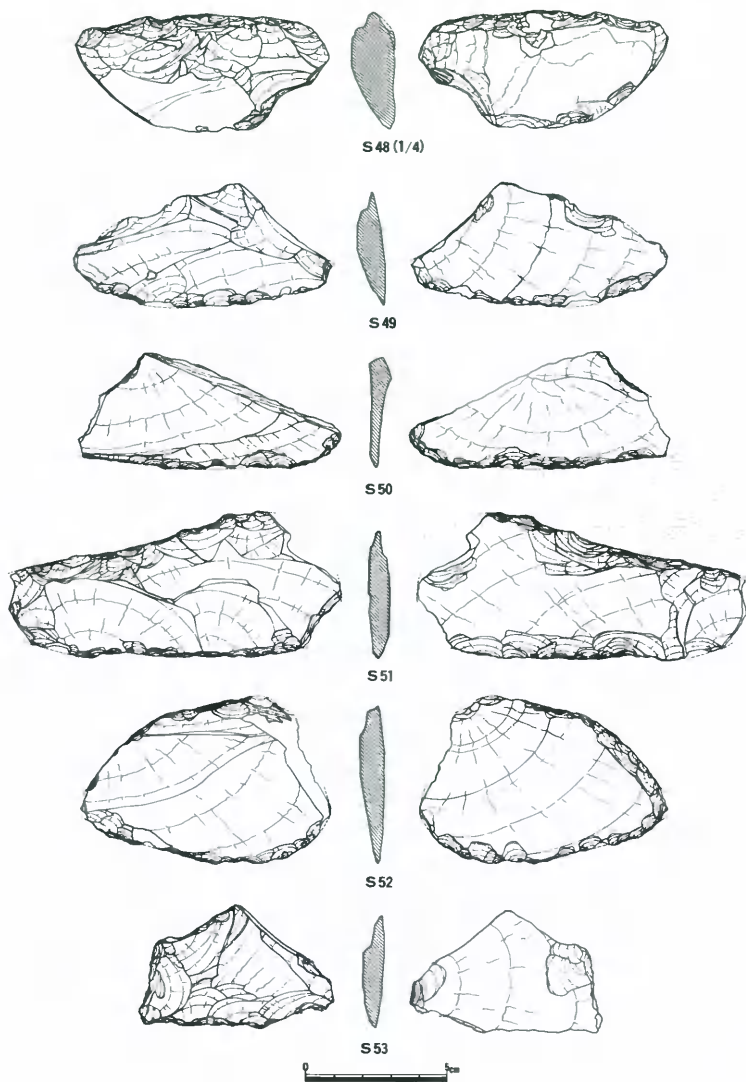
叩石である。S38は5区K8出土の頁岩製砥石である。S39は7区南出土のサヌカイト製石庖丁である。S40は1区2段目南黒色土出土のサヌカイト製石庖丁。S41は4区上段南出土のサヌカイト製石庖丁。S42は1区3段目黒色土出土のサヌカイト製石庖丁。S43は5区暗灰褐色砂出土の凝灰岩製石庖丁。S44は2区上段褐色土出土のサヌカイト製石庖丁。S45は4区上段南出土のサヌカイト製石庖丁。S46は5区黄灰褐色土出土のサヌカイト製小型石庖丁。S47は5区T-3出土のサヌカイト製石庖丁。S48は8区出土の凝灰岩製石庖丁未成品である。これは縮尺1/4である。S49は3区4AグリッドつまりH3I3周辺から出土したサヌカイト製スクレーパー。S50は1区2段目出土のサヌカイト製スクレーパー。S51は6区東北端出土のサヌカイト製スクレーパー。S52は6区東斜面出土のサヌカイト製スクレーパー。S53は1区2段目出土のサヌカイト製スクレーパーである。S54は5区東南の黒褐色土出土の細粒閃緑岩製大型蛤刃石斧である。重くて大きいので木を切り倒すのに適している。1/4に縮尺した。S55は



第47図 弥生中期石器 (1) 1/2・1/4



第48図 弥生中期石器 (2) 1/2

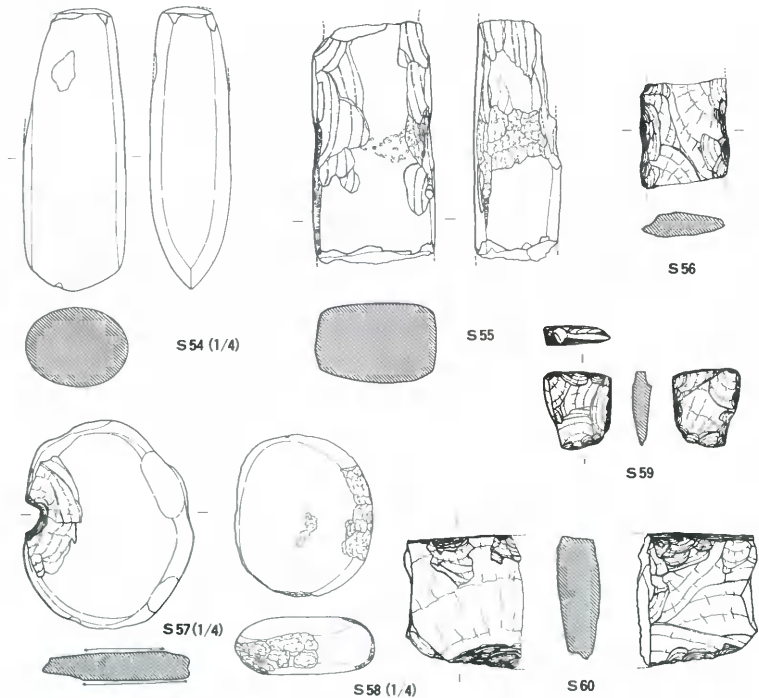


第49図 弥生中期石器(3) 1/2



結晶片岩製柱状片刃石斧の破片である。7区北から出土している。H718～720に伴うか。S56は1区2段目出土のサヌカイト製の石槍と考えられる。S57は粘板岩製の挟り入り扁平・磨石である。8区3Bグリッドから出土した。1/4の縮尺である。S58は安山岩製の敲石で5区出土。1/4の縮尺である。S59は7区土手2～3層から出土したサヌカイト製のくさび形石器である。S60は5区T-2出土のサヌカイト残核である。

この他にも沢山の石器が出土しているが、ほとんど大半がサヌカイト製品である。石鏃は数十点あるが、ここには代表を載せた。石庖丁は磨製の物は1点もない。スクレーパーの数も多い。不明石器は省いた。大きさ等詳しくは石器一覧表を参照されたい。



第50図 弥生中期石器 (4) 1/2・1/4

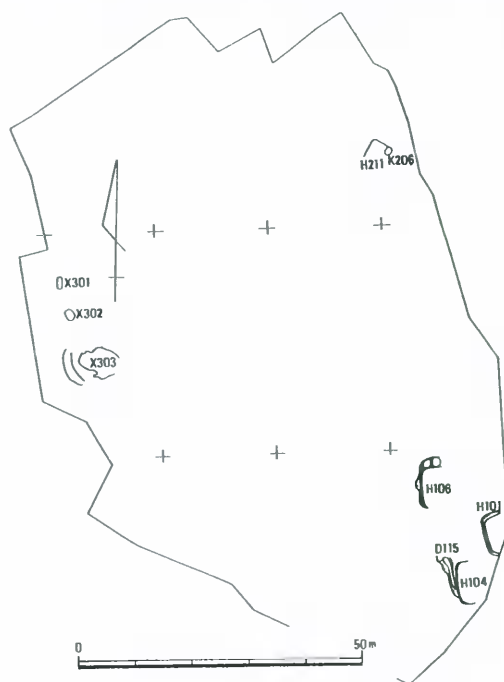
## 第4節 古墳時代の遺構・遺物

本遺跡の古墳時代の遺構について、種類と数量の概要は既に第1節で述べている。しかしここでもう一度詳しく述べたいと思う。古墳時代を前半期と後半期の二期に大きく分けた。前半期の遺構は前に述べたように箱式石棺1基と石蓋土壙1基しかないで、残りは全部後半期とすることになる。本遺跡の古墳時代の遺構は弥生時代のそれに比べて全体図を見れば明らかに数が少ない。しかも東端1区・2区と西端3区に綺麗に分かれている。東のものは竪穴住居とその関連の土壙か溝であり、集落に関係する。西のものは墓である。墓の中でも前半期と後半期の二期に大きく分ける事ができる。現状では3区の西方は大きく削平土取りされ、平坦に造成され、工場用地となっていたが、かつては現状より10~20mの高さの丘陵が北から伸びて来ていたので、この上に古墳がいくつか連なっていたものと考えられる。

古墳時代の遺物は本遺跡中央部分でも少量出土しているが、やはり竪穴住居からが圧倒的に

多い。土器では土師器と須恵器が1:10の割合である。器種としては、杯身・杯蓋・高杯・こしき・皿・鉢・鍋・壺・甕などがある。珍しいものには特殊器台形埴輪・壺形埴輪があり、その他製塩土器・鳥形土製品・ふいごの羽口・鉄滓・砥石がある。

以下各々の遺構・遺物について説明を加えていきたい。

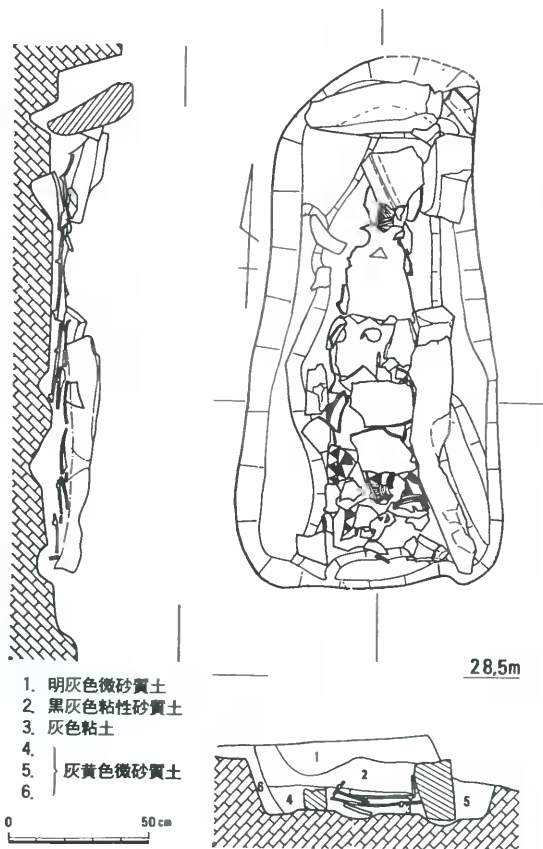


第51図 古墳時代遺構全体図 (1/1,000)

(1) 箱式石棺・石蓋土墳

箱式石棺—X301 (第52～57図・巻頭カラー図版3)

3区の西端で検出した箱式石棺である。土器棺—X305のすぐ南に位置する。検出面の海拔高は28.2mである。検出時にはすでに蓋石はなく、側石の大半と南小口石が抜き取られていた。畑開墾時における抜き取りであろう。残っている側石は3個で、どれも東側のものである。長さ30cm～50cm・高さ10cm～15cm・幅10cm～15cmを測る。北の小口石は側石よりやや背が高く、長さ50cm・高さ35cm・幅10cmを測る。石抜き取りの痕跡から東側石は4個、西側石は3個

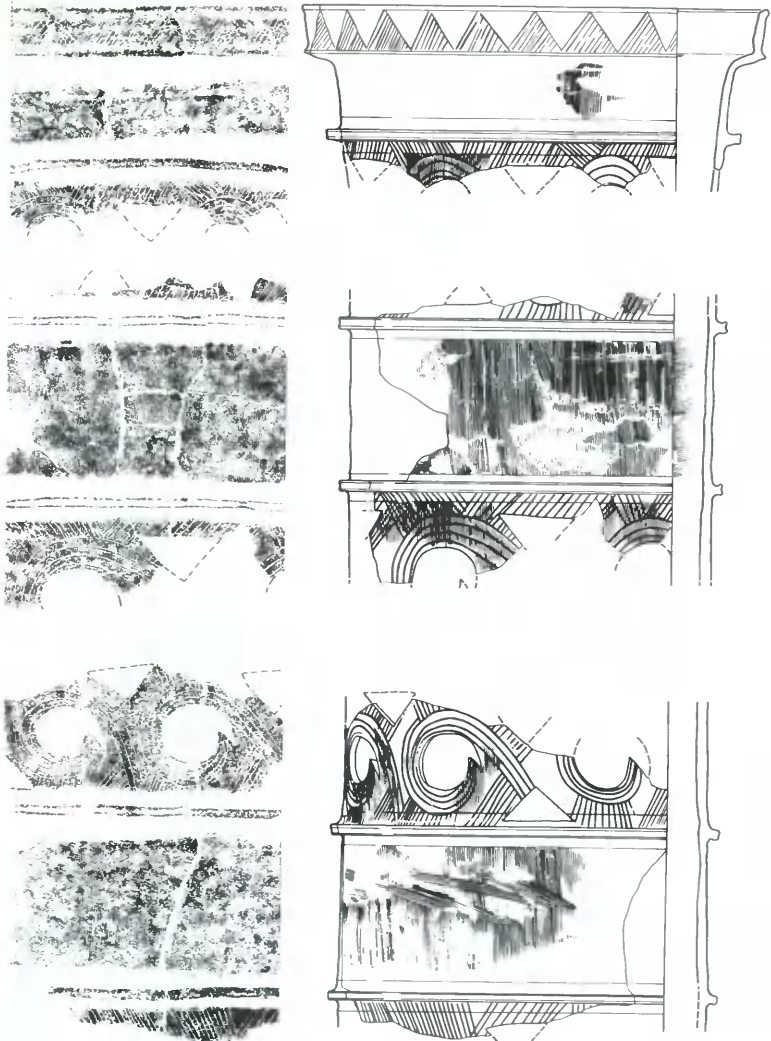


第52図 箱式石棺—X301 (1/20)

あったものと想像できる。石の組方はまず南小口石を据えつけ、それを挟むように東西の側石をおく。続けて側石を並べ、北の小口石を閉じる。北の小口石の高さから見ると、側石はもう一段重ねていたものであろう。使用している石材はこの遺跡周辺にある閃緑岩と流紋岩である。箱式石棺の内法は南側の幅45cm、北側の幅35cm、全長は150cmである。箱式石棺の掘り方の平面形は長台形を呈する。広い南側は95cm、狭い北側は70cm、全長は185cmである。この形態から考えて南側が頭位であろう。埋積土については、第1層明灰色微砂質土・第2層黒灰色粘性砂質土・第3層灰色粘土・第4～6層灰黄色微砂質土になっている。第3層灰色粘土はわざわざ墓の目張りのために選んで運び込んだ物であろう。第4～6層灰黄色微砂質土は石棺の埋め土である。第2層黒灰色粘性砂質土は後世の流入土であろう。第1層明灰色微砂質土は畑の耕作土である。第3層灰色粘土は全面に堆積していた訳ではない。中央部から南部にかけて次第に厚くなっていた。南の一部に粘土の上にはほんの微かに朱が認められた。このことから南が頭位と考える。第2層を取り除いた時点で埴輪片が石棺の床全面に敷きつめていることが分かった。埴輪片の敷き方は、南（頭部）に壺形埴輪の口縁部片を文様を下にして敷き、中央部に器台形埴輪の口縁部片と体部片を文様を下にして敷き、北（足部）に別の器台形埴輪の口縁部片を文様を下にして敷いている。中央部から頭部にかけては体部片を文様を下にして二重に敷かれている。さらに中央部から頭部にかけては側石に持たせかけるように小破片を立てている。それも文様は外に向いている。2～3片文様が上向きの物が見える。これらは遺骸の上に乗っていた物であろう。この石棺検出前に周辺や下方からこの石棺から流出したと思われる埴輪片が30片余り出土している。つまり埴輪は石棺の床に敷いていただけでなく、遺骸を全部ではないかもしれないが、半分くらいは覆っていたのであろう。

遺物については、腰に当たる部分に長さ10cm・幅8cm・厚さ1mmの刀子状の鉄器が出土したが、腐食が激しく取り上げに失敗して、実測不能となった。特殊器台形埴輪は口縁部が2種類あって、体部片は大小数十片ある。同一個体と考えられるものを接合し復元したのが、特殊器台形埴輪一号と特殊器台形埴輪二号である。実測図ではありのまま分離して描いた。

126は一号の口縁部と同一個体と考えられる体部片である。一番上は口縁部で、二重口縁を呈し、垂直に立ち上がる口縁の外面には鋸歯文が描かれている。この口径は外法で49cmあり、第一無文帯の直径は外法で41cmあり、その幅7.0cmを測り、凸帯の高さは1.5cm・厚さ1.0cmあり、第一文様帯の上半部まで残っている。二番目は無文帯を挟んで上下に文様帯を持つ大型の破片で、無文帯の直径は外法で38.5cmあり、その幅15.0cmを測り、凸帯の高さは1.0cm・厚さ1.0cmある。無文帯にはタテハケしている。文様帯には三角形と半円形の透かし穴が見え、ヘラ描きの斜線と孤線が見える。一番下は無文帯を挟んで上下に文様帯を持つ大型の破片で、文様帯の文様の全体像が分かる破片である。無文帯と文様帯の直径は外法で38.5cmあり、その幅



126

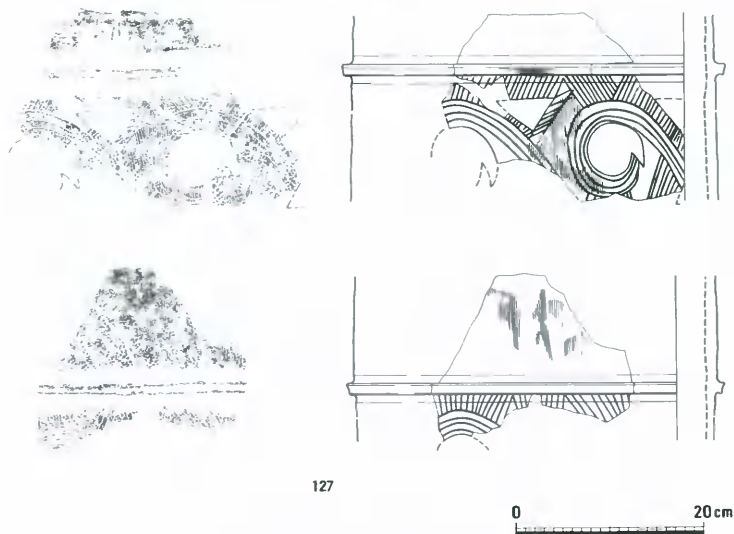
0 20cm

第53図 特殊器台形埴輪一号 (1/6)

16.0cmを測り、凸帯の高さは1.0cm・厚さ1.0cmある。透かし穴は勾玉形と三角形を使い、勾玉形が中心となりそれを巡る4条の沈線が三角形の一辺に到達している。この文様をわらび手文と呼ぶ。三角形透かし穴は上下に一对ある。斜線は全面にあるのではない。勾玉形透かし穴の間隔は一定していない。三角形透かし穴も下にないこともある。規則正しい文様ではないようである。胎土中に赤い粘土が含まれている。この物質に対して各説がある。

128は二号の口縁部と同一固体と考えられる体部片である。一番上は口縁部で、二重口縁を呈し、垂直に立ち上がる口縁の外面には鋸歯文が描かれている。口唇部は外に曲げて面取りしている。この口径は外法で49cmある。一号と違うのは口縁直下の帯が鋸歯文と曲線文で飾られている事である。体部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケである。この帯の直径は外法で41cmあり、その幅7.5cmを測る。この破片は第一文様帯の上端部まで残っている。二番目は無文帯を挟んで上下に文様帯を持つ大型の破片で、無文帯の直径は外法で39.5cmあり、その幅13.5cmを測る。凸帯の高さは上が0.5cm・下が1.0cm・厚さ1.0cmある。文様はわらび手と斜線文である。透かし穴も三角形と勾玉形である。一番下は無文帯と文様帯を持つ小型の破片で、文様帯の直径は外法で40cmある。器壁の厚さは平均1.0cmある。

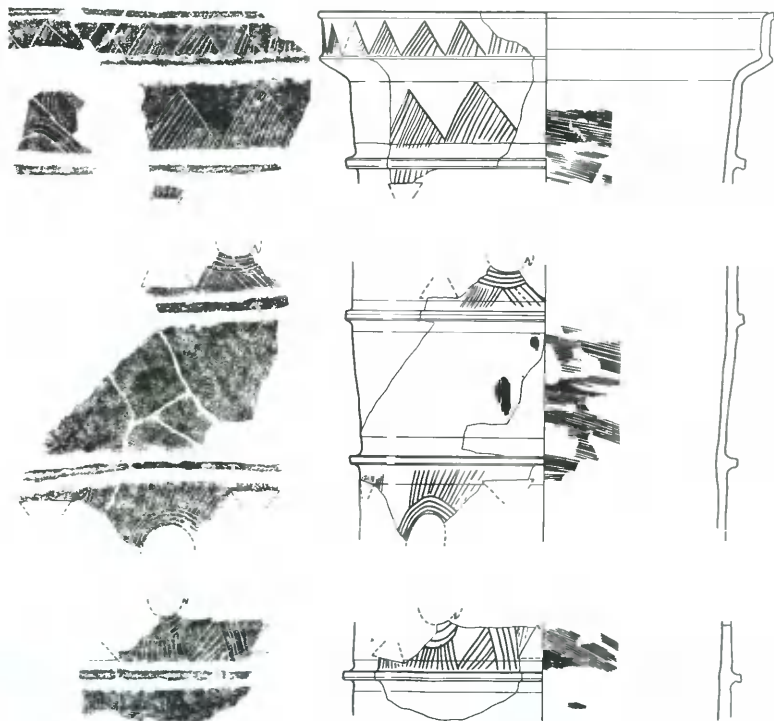
129～143は一号・二号とは別個体と思われる小型の破片である。129と130は凸帯の部分が内



第54図 特殊器台形埴輪一号' (1/6)

側に大きく器壁が凹んでいる。139は無文帯の破片で、体部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケのよく見える資料である。140はrと呼ばれる文様である。これは文様を描いていって円筒を一周した最後の部分と考えられる。均等に割り付けしていないために起こる文様であろうか。今後の研究課題である。

144は壺形埴輪の口縁部である。体部の破片は1点もなかった。大きく外反する二重口縁を持ち、屈曲部外部に高さ1.5cmの凸帯を張り付けている。口縁部外面にはヘラ描きの鋸歯文を二重に施している。

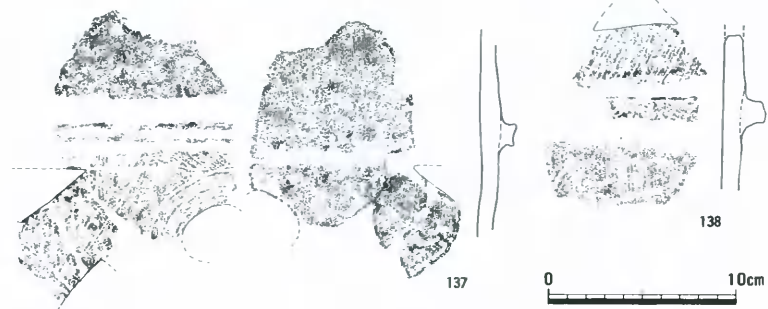
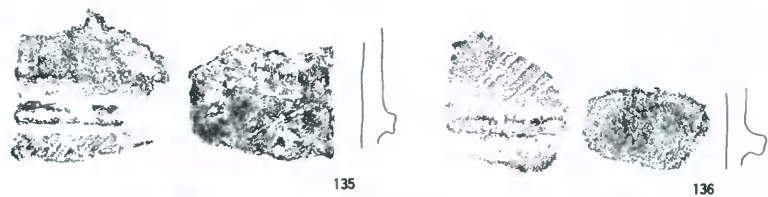
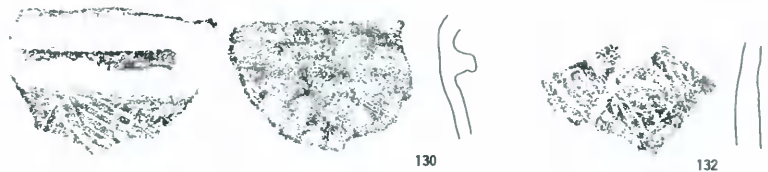


128

0 20cm

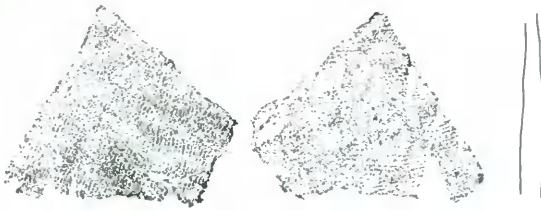
第55図 特殊器台形埴輪二号 (1/6)

矢部堀越遺跡



第56図 埴輪片(1) 1/3





139



140



141



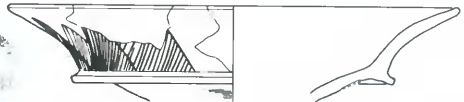
142



143



1/3



144

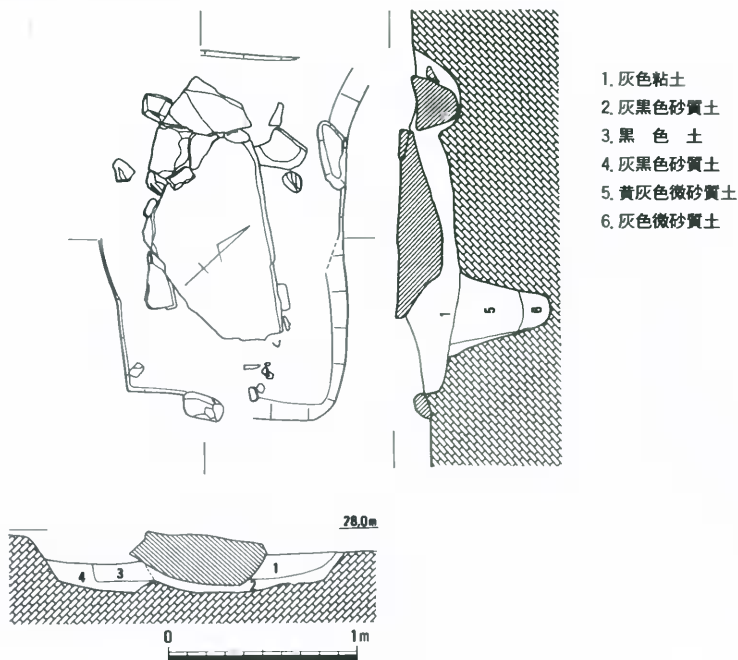


1/6

第57図 埴輪片(2) 1/3・1/6

石蓋土壇-X302 (第58図・図版105)

3区の箱式石棺-X301から南へ約4m離れて検出した石蓋土壇である。掘り方は長方形を呈する。長さ195cm・幅130cm・深さ30cmある。主軸は北西から南東に向いている。蓋石は一枚の大石で、不整五角形をしている。その長さ110cm・幅66cm・厚さ25cmある。上面は平坦だが、下面は船底状になっていた。石蓋土壇と呼んでいるがこの蓋石を支えていたと考えられる立石が北西隅に1個ある。縦25cm・横15cm・高さ30cmを測る。北西小口に当たるところには長さ45cm・幅30cm・高さ23cmの石がある。南隅には長さ25cm・幅15cm・高さ25cmの石もある。蓋石の北側には灰色粘土で目張りをしてた。蓋石と北側の灰色粘土を取り除くと、灰黒色砂質土が数cm埋積していただけで遺物は出土しなかった。断面図に載せている穴は弥生中期の柱穴である。周辺から須恵器の細片が出ているが、横穴式石室-X303の遺物が畑の耕作によって混入したものであろう。この石蓋土壇の時期は遺物が無いので確定できないが、古墳時代前半期に属していると考えたい。



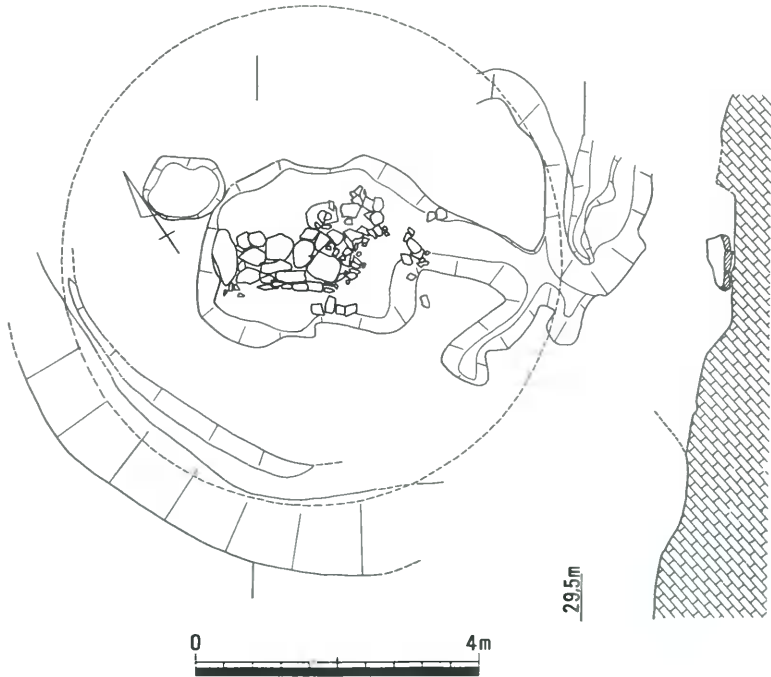
1. 灰色粘土
2. 灰黒色砂質土
3. 黒色土
4. 灰黒色砂質土
5. 黄灰色微砂質土
6. 灰色微砂質土

第58図 石蓋土壇-X302 (1/30)

(2) 横穴式石室

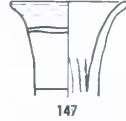
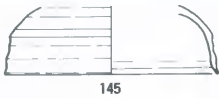
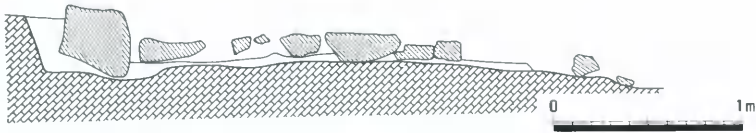
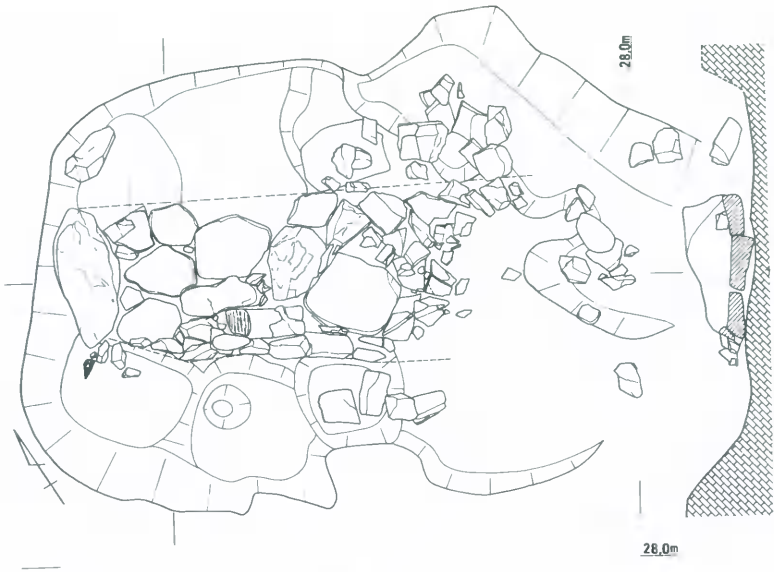
横穴式石室—X303 (第59・60図・図版105)

3区に石蓋土壇—X302から南へ約4m離れて検出した横穴式石室の残骸である。箱式石棺などと同じ畑にあって、開墾されたものである。10区に円形周溝の一部分が残存していた。延長7m・幅160cm・深さ40cmあり、石室中心から溝底部までの半径は3.5mを測る。横穴式石室は長方形の掘り方の中に納まっている。掘り方の大きさは長さ300cm・幅250cmで、主軸は西北から南東に向いている。南東から長さ200cm・幅80cmの溝が出ている。この端はL字状に曲がって谷となる。掘り方とこの溝を加えた500cmが横穴式石室の全長と推定できる。石室の残りは極めて悪い。奥壁は一枚石で、上方を割り取られている。側石は全部抜き取られている。奥壁のすぐ西の側石抜き取り穴の中から古代の平瓦片が出土したことから側石抜き取りは古代以降とすることができる。奥壁を挟むように側石を据えていたことが抜き取り穴の形状から察



第59図 横穴式石室—X303 (1/80)

矢部堀越遺跡



第60図 横穴式石室-X 303 (1/30)・出土遺物

せられる。床は奥壁から180cmあたりまで扁平な石を全面に敷いている。床の幅は90cmある。

遺物は敷石の直上と隙間に落ち込む形で須恵器片が少量出土した。145は杯蓋で、天井部と口縁部の境がシャープな稜線を持っている。146は高杯の脚柱上半部で、透かしはない。147は長頸壺の口縁部で、沈線を持つ。148は平瓶の口縁部で、沈線を持つ。149は壺の口縁部で、カキメを施す。150は壺の体部で、肩部に沈線に挟まれて櫛状工具による刺突文を持つ。この遺物から横穴式石室の築造の時期は6世紀中葉から後半であろう。

### (3) 竪穴住居

#### 竪穴住居—H101 (第61・62図・図版102)

1区の南東部で検出した竪穴住居である。竪穴住居—H103の上層に重複している。逆L字状の壁体溝と柱穴3本を検出した。住居の平面形は一辺約5mの方形であろう。壁溝は長さ840cm・幅平均70cm・床面からの深さ10cmを測る。壁の高さは最も残りのよい北西部で床面から40cmを測る。柱穴は北西の2本が残りがよく、直径60cm・深さ50cmある。柱間は300cmある。床は黄褐色粘質土で貼り床にしている。

遺物は特に壁体溝から大量に出土している。須恵器が多く、土師器は少ない。鉄滓が少量出土している。151~165は須恵器で、166~171は土師器である。151~156は杯蓋で、天井部と口縁部の境が明瞭でない。

157~159は杯身で、口縁部の立ち上がりが内傾している。

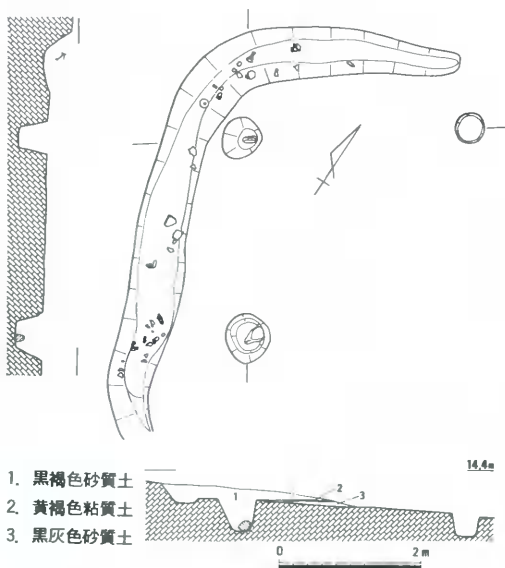
160~162は有蓋高杯の蓋で、中央の凹んだつまみを持ち、天井部にはカキメが施されている。163は有蓋高杯で、杯部は杯身の形態と同じで、脚柱には透かし穴がある。

164・165は無蓋高杯である。

166は高杯脚部である。

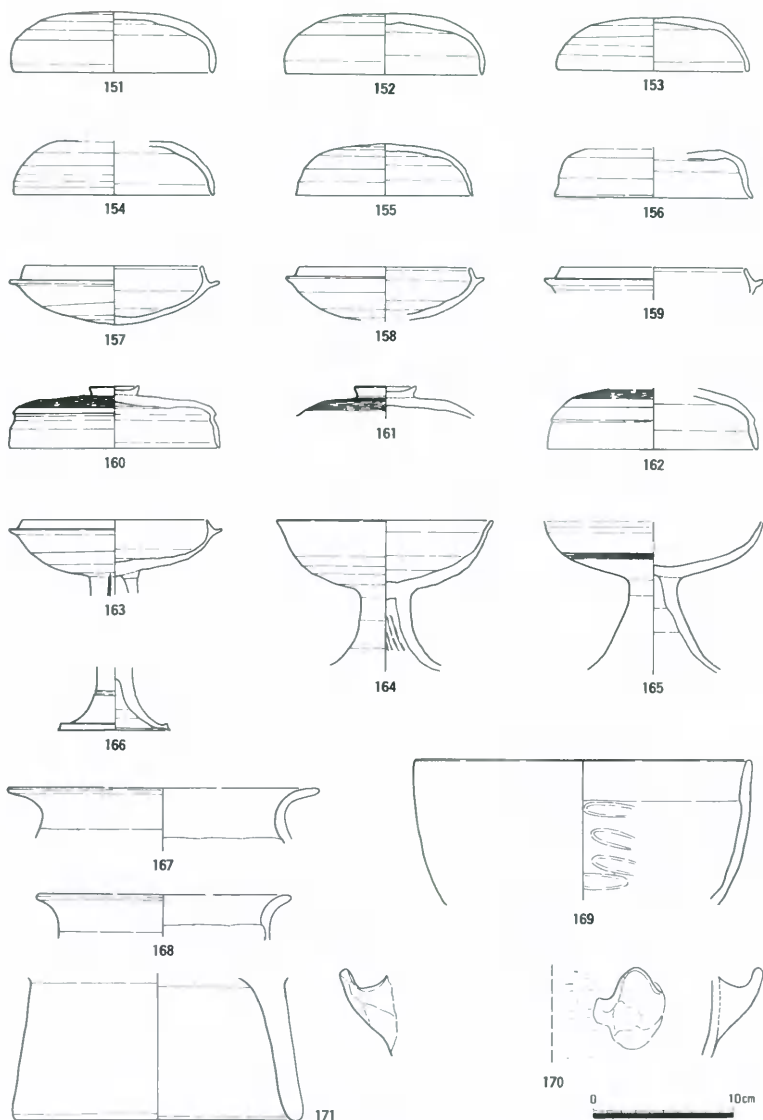
167・168は甕の外反する口縁部である。169は鉢、170は土鍋かこしきの把手である。

171はかまど関連の台脚である。これらの土器からこの住居の廃棄された時期は6世紀

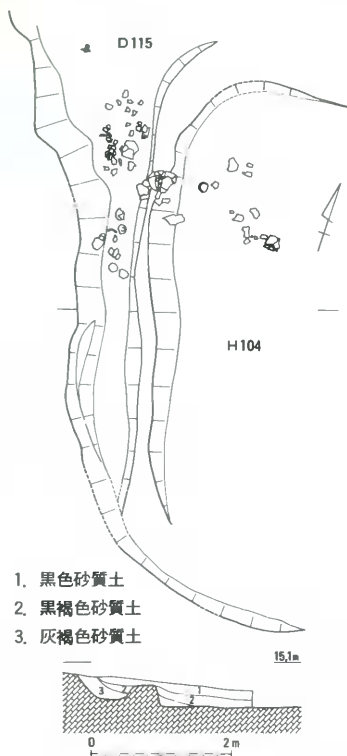


第61図 竪穴住居—H101 (1/80)

矢部堀越遺跡



第62図 竪穴住居-H101 出土遺物



1. 黒色砂質土
2. 黒褐色砂質土
3. 灰褐色砂質土

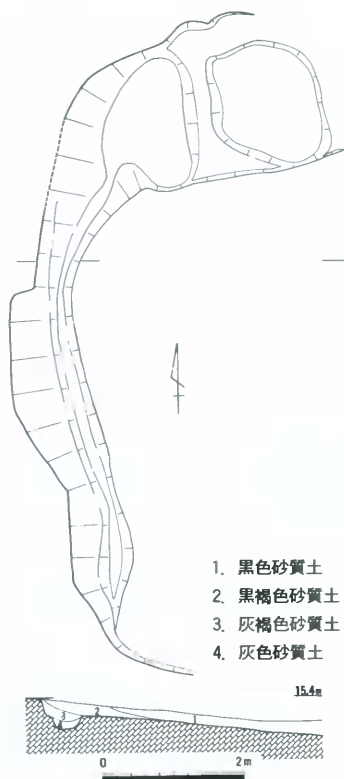
第63図 竪穴住居-H104・溝-D115 (1/80) 199は横瓶とも俵壺とも呼ばれている。口径は10cm、器高は推定28cm、胴体長径推定33cm、胴体短径推定24cmを測る。内面は同心円のタタキメ、外面は平行のタタキメである。200は大型の蓋である。つまみの部分が欠けている。口径は30cm、現存の器高は4cmある。201か202の蓋として使用されたものであろうか。201はこしきで、口縁部と体部の区別がつかない。底部は全部底抜けである。体部中央に一对の牛の角状の把手が付いている。底部近くに一对の小さい円孔も開いている。体部内面は同心円のタタキメ、外面は平行のタタキメでその上からカキメを施している。ほとんど復元できた。202~206は鍋で、203は口径・器高も分かる大きさで残存している。204は他の鍋の口縁部と形態が異なる。207は壺の体部で、2本の沈線を持つ。208は小型の鉢である。209は平瓶の口縁部である。210は高杯か杯である。211は鉢で、製塩土器である。器壁が極めて薄くばらばらに砕けていたのを根気よく復元したのである。指頭圧痕と平行のタタキメが認められる。212は甕で、外

後半に比定できる。

#### 竪穴住居-H104・溝-D115 (第63・65・67図)

1区の南東部、竪穴住居-H102の南西ではぼ接して検出した。溝と平坦面を検出し、柱穴はない。溝は南から北に向かってラップ状に広がる。高さ20cm・天幅20cmの土手を挟んで、平坦面が東にある。平坦面の床から土手の天場までの高さは30cmある。平坦面の床は南北720cm、東西220cmある。住居であるという断定はできない。

遺物は溝と平坦面に亘って同一個体の物が出土している。172~209は須恵器で、210~212は土師器である。213~215は溝-D115出土の須恵器である。172~184は杯蓋で、天井と口縁の境目が凹線になっている。185は杯身か有蓋高杯であろう。186・187は有蓋高杯の蓋。188・189は有蓋高杯で、189の脚には透かし穴がない。190~192は無蓋高杯。193~198は高杯の脚部である。193はカキメから見て有蓋高杯であろう。194は無蓋高杯。196は長脚だが透かし穴がない。197・198は長脚二段透かしである。



1. 黒色砂質土
2. 黒褐色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 灰色砂質土

第64図 竪穴住居—H106 (1/80)

遺物は溝と土壌から大量に出土している。216～235は須恵器で、236・237は土師器である。216～219は杯蓋で、219は焼き歪みで扁平になったもの。220～222は杯身で、立ち上がりが内傾している。223～225は有蓋高杯の蓋で、つまみとカキメが見える。226～230は有蓋高杯で、杯底部にカキメ、脚部の三角透かし穴があるものとなないもの、あっても上下が同列のものとなっているものがある。231・232は甕で、口唇部を丸くするものと少し垂らすものがある。233は器形が良くわからない。蓋になるか。234も器形が不明。171の土師器に似ている。235はこしきで、底部に棒を持つもの。把手は残っていないが、沈線を持つ。236・237は甕で、内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整している。

これらの土器からこの遺構の廃棄された時期は6世紀後半であろう。

反する口縁を持つ。213は大型の甕の体部下半部で、体部内面は同心円のタタキメ、外面は平行のタタキメしている。214はこしきの底部で、棒状の棒が一本付いている。外面は平行のタタキメでその上からカキメを施している。215は杯身である。C4はふいごの羽口で、鉄滓と伴に出土した。S61は砂岩製の砥石で、4面も使用している。

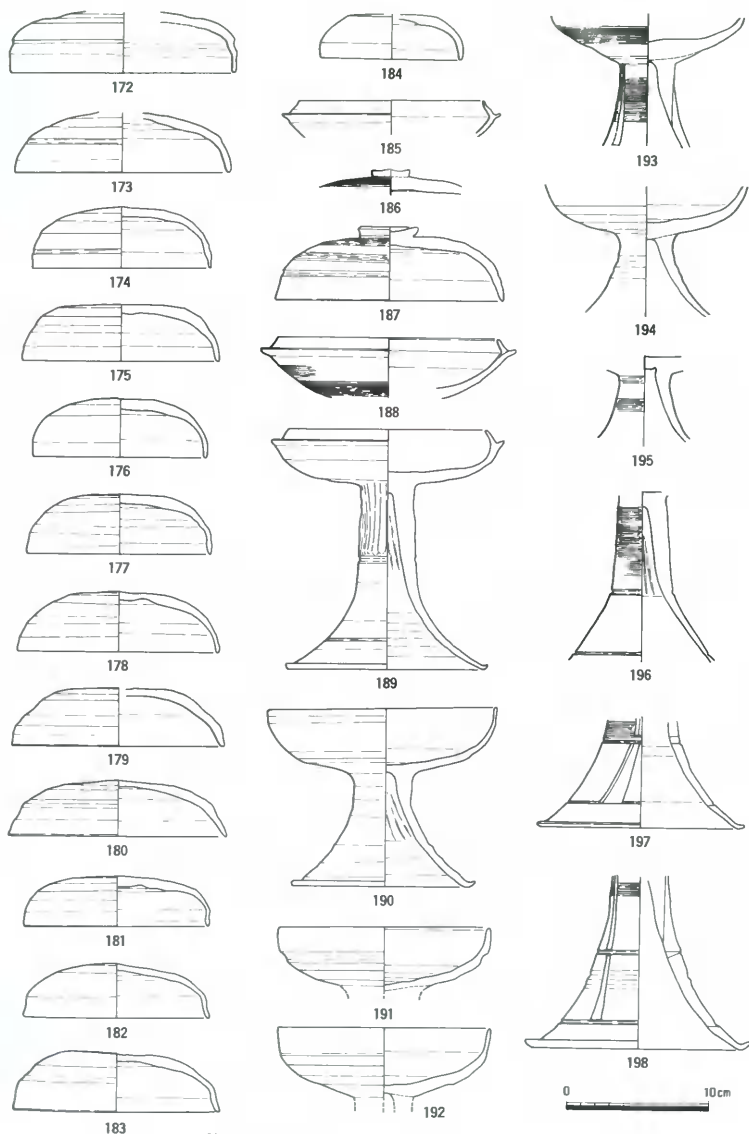
このような遺物からこの遺構は鍛冶に関係した物といえる。廃棄された時期は6世紀後半であろう。

#### 竪穴住居—H106 (第64・68・69図)

1区の中央部、竪穴住居—H102の北西でやや離れて検出した。溝と土壌と平坦面を検出し、柱穴は検出できなかった。溝は南から北に向かってラバ状に広がる。竪穴住居—H104の溝と良く似ている。しかしこの溝は北で東に直角に折れ曲がり、土壌を2個作って終わる。溝と東にある平坦面の間には土手はない。溝の長さ南北700cm、東西300cm、検出面からの深さ44cm、床からの深さ20cmを測る。平坦面の南北700cm、東西400cmある。竪穴住居—H104と同様に住居であるという断定はできない。

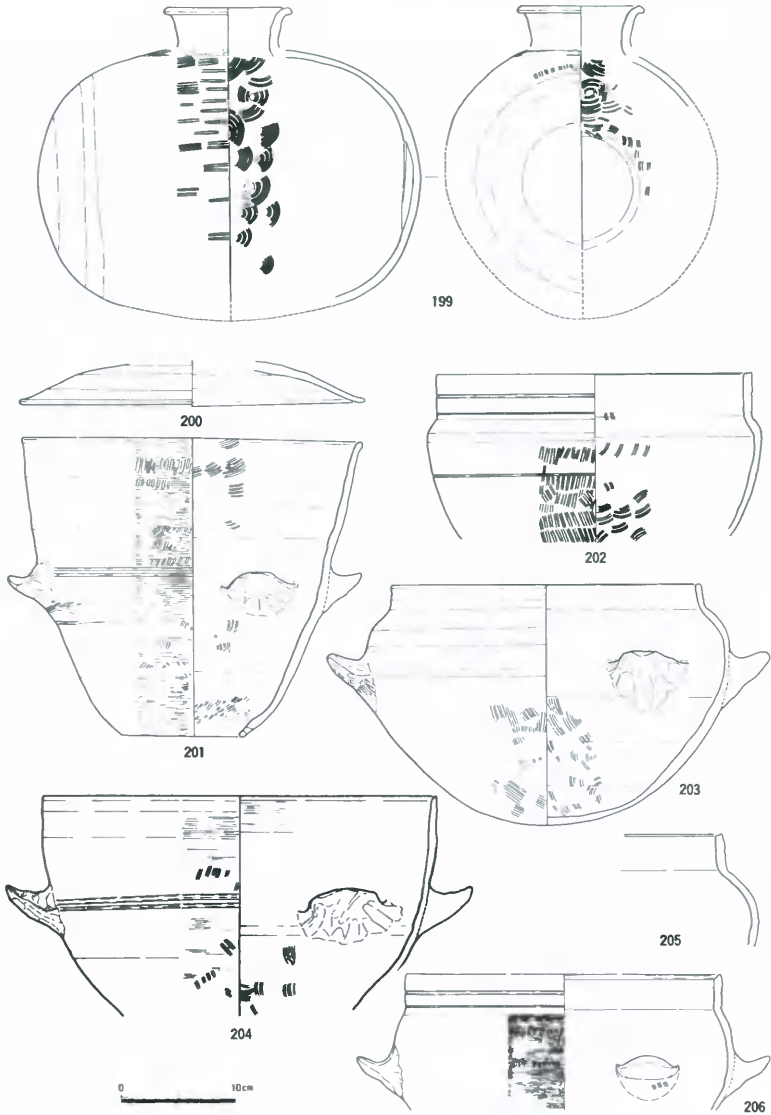


矢部掘越遺跡



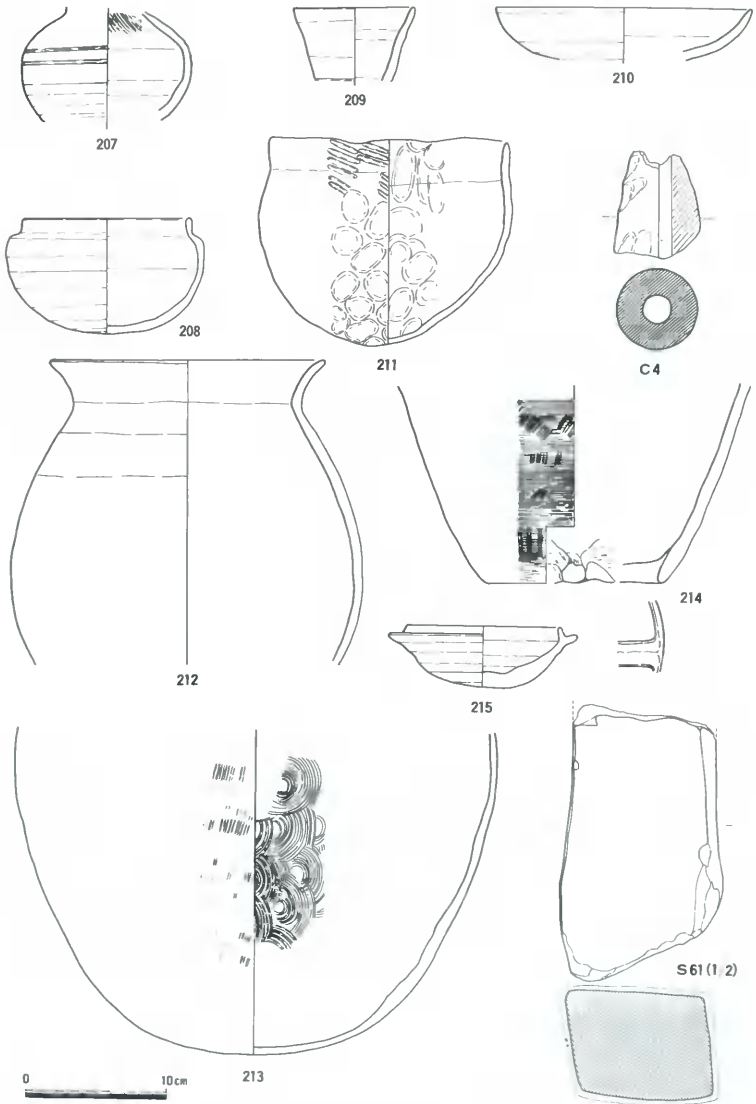
第65図 竪穴住居-H104 出土遺物(1)

矢部掘越遺跡



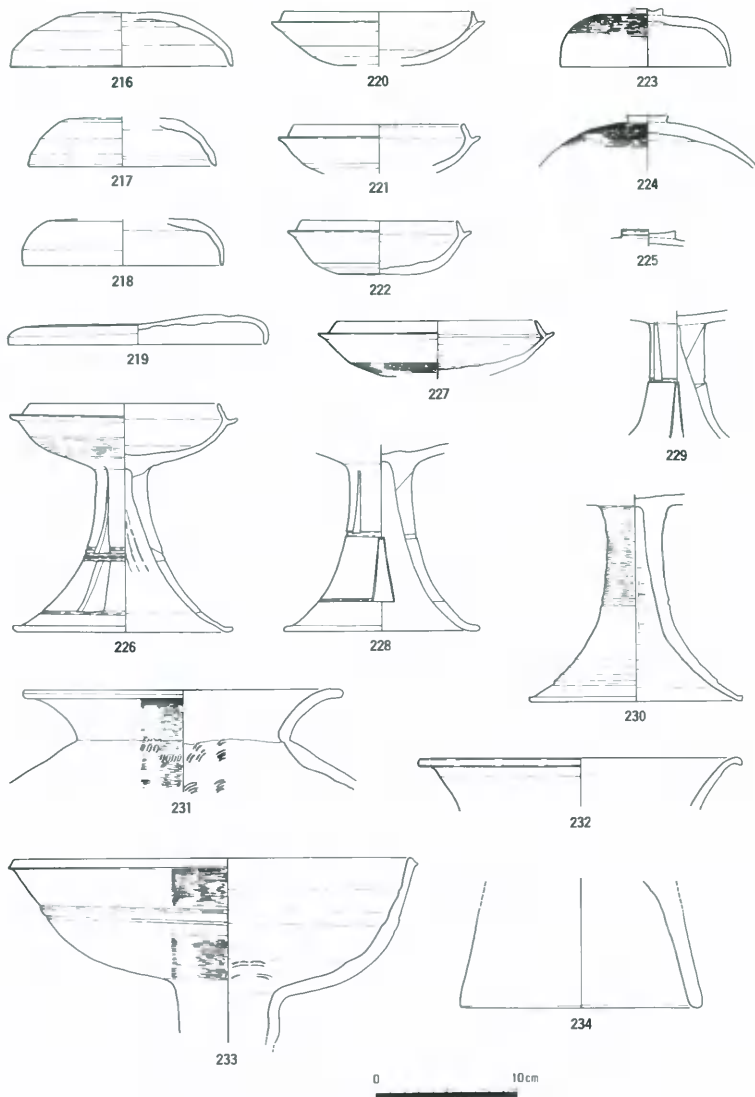
第66図 竪穴住居-H104 出土遺物(2) 1/5

矢部堀越遺跡

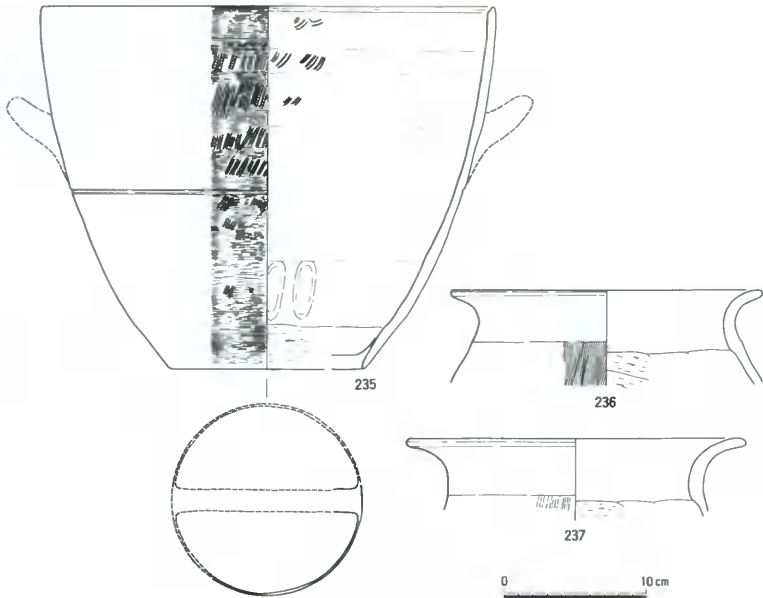


第67図 竪穴住居-H104・溝-D115出土遺物

矢部掘越遺跡



第68図 竪穴住居-H106 出土遺物(1)



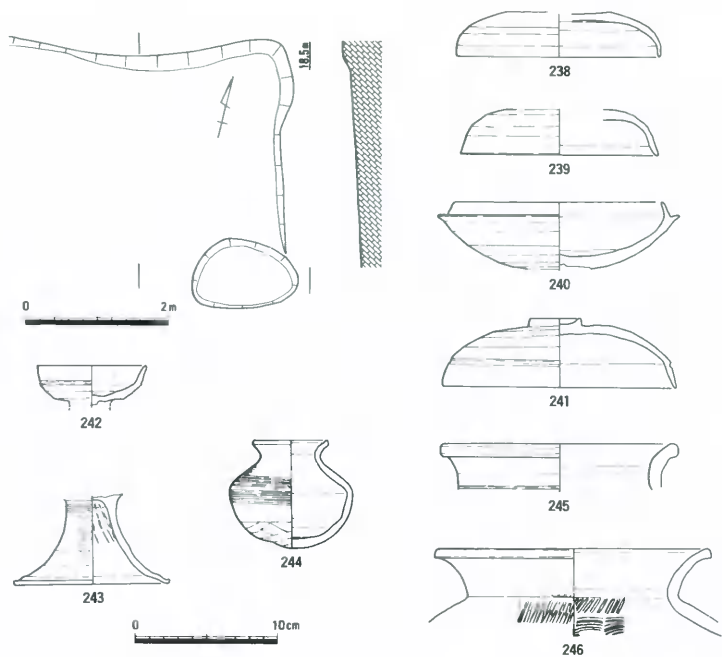
第69図 竪穴住居—H106 出土遺物（2）

竪穴住居—H211（第70図）

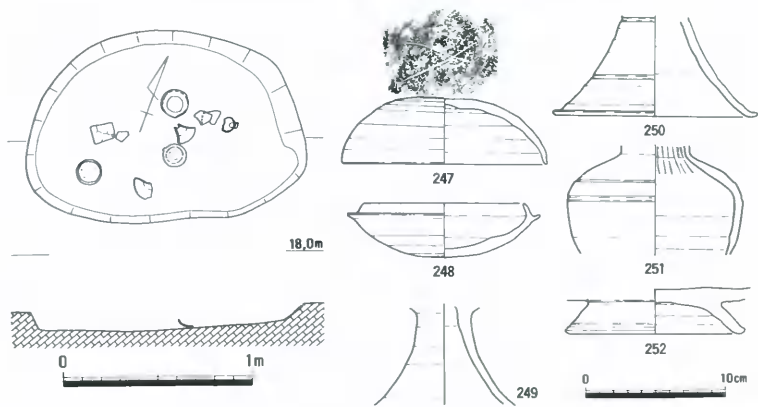
2区の中央部で検出した。鉤形を呈す掘り方で、平坦面がある。埋積土は黒褐色砂質土である。掘り方の上場では北側は長さ400cm、東側は長さ300cm、最も残りの良い北側で壁の高さ10cmを測る。平坦面は水平ではない。南方に僅かに下がっている。検出面の海拔高は18.1mで、平坦面の南端は17.8mである。壁体溝も柱もないが、住居と考えたい。

遺物は埋積土中から少量出土している。全て須恵器である。238・239は杯蓋で、口唇部が直立するものと外に出るものがある。240は有蓋高杯の杯部で、脚の剝がれた跡が残っている。241は有蓋高杯の蓋で、天井部にカキメが見えない。242は小型の高杯の杯部で、脚の剝がれた跡が残っている。243は高杯の脚部で、短脚で透かしがない。244は小型の壺で、完形品である。体部にはカキメが施されている。245は壺の口頸部で、口唇部を玉縁風にしている。246は甕の口縁部と体部の一部である。体部内面は同心円のタタキメ、外面は平行のタタキメを行っている。

この土器群からこの遺構の廃棄された時期は6世紀後半と言える。



第70図 竪穴住居-H211 (1/80)・出土遺物



第71図 土坑-K206 (1/30)・出土遺物

(4) 土壙

土壙-K206 (第71図)

竪穴住居-H211の南東に接して検出した。ほぼ東西に長軸を持つ楕円形の土壙で、長径145cm・短径100cm・深さ10cmを測る。浅い皿状の土壙である。土器は図のように完形品も含んで須恵器だけが出土している。竪穴住居-H211の貯蔵穴の可能性もある。247は完形品の杯蓋で、天井部にヘラ描きのX字が見える。248は完形品の杯身で、口径11.3cmある。249は高杯の脚部で、短脚で透かしがない。250は高杯の脚部で、長脚で透かしがない。251は壺で、沈線を2条持つ。252は台付き壺の台である。

この土器群からこの遺構の廃棄された時期は6世紀後半と言える。

その他の土壙

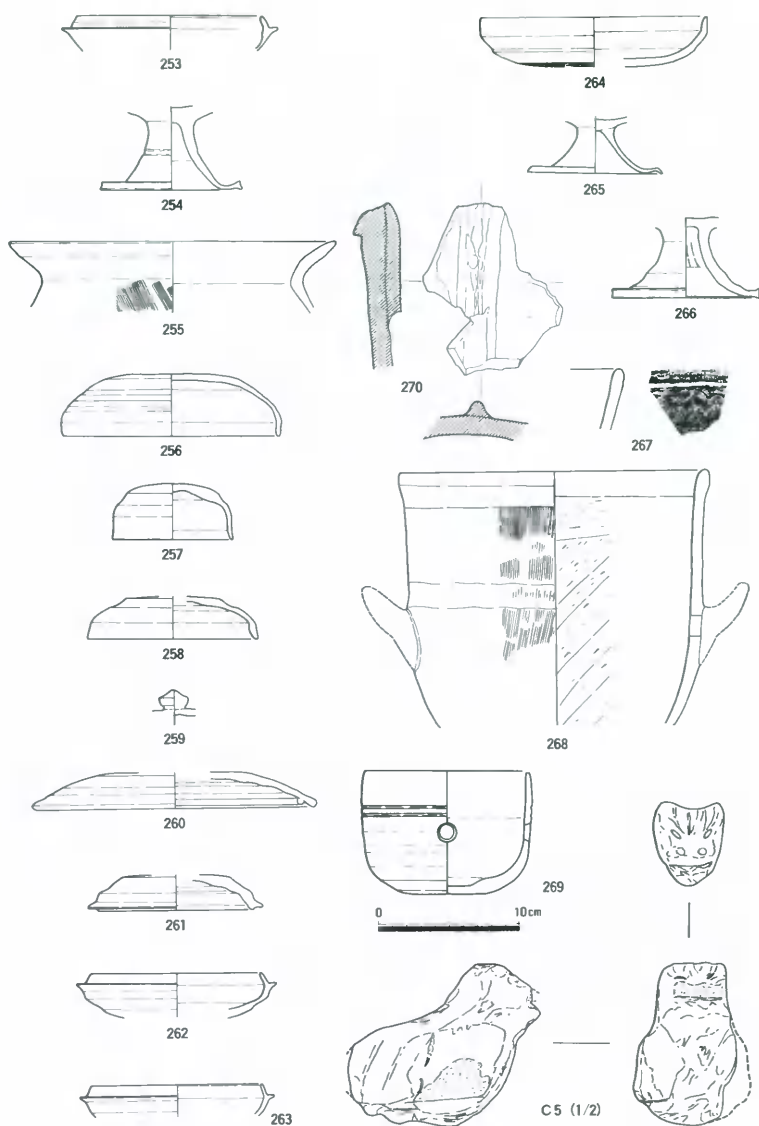
6世紀後半の土器片を出土した土壙は他に8区の竪穴住居-H817の壁体溝を切って土壙-K802がある。第10図に掲載している。

(5) 溝・包含層 (第72図)

6世紀後半の土器片を出土した溝は1区の南東部に集中している。253は溝-D105出土の須恵器の杯身である。254は溝-D111出土の須恵器の高杯である。255は溝-D106出土の土師器の甕である。4区の溝-D403から269が出土している。焼成不良で灰褐色を呈している須恵器の鉢で、面白いことに体部中央に直径10mmの円孔が一個開けられている。沈線も2本ある。碌に似たような珍しい土器である。

6世紀後半以後古墳時代後半期の土器片を出土した包含層はほとんど1区で、6区と8区に若干ある。256~268は1区包含層出土の土器で、268は土師器で、それ以外は須恵器である。256は杯蓋で、口径は15.0cmもある。257は小壺の蓋と考えられ、口径は8.4cmしかない。258は杯蓋で、口径は12.0cmある。259は杯蓋の宝珠形つまみである。260は杯蓋で、口縁部内面にかえりを持つ。口径は20.0cmもある。扁平なつまみが付くのであろう。261は杯蓋で、口縁部内面にかえりを持つ。口径は11.0cmしかない。262・263は杯身で、極細片である。264は高杯の杯部で、焼きが悪く、赤色を呈しているが、須恵器の作り方をしている。265は高杯の脚部で、短くて器壁も薄い。266は少し器壁が厚い。端部もしっかりしている。267は沈線と波状文を持つ口縁部小片で、器形は甕になるのだろうか。268はこしきで、把手の剝がれた痕跡がある。270は8区の自然巨石周辺で出土した須恵質の陶棺の小破片で、凸帯の部分が残存していた。C5は6区で出土した土製品で、鳥あるいはきつねに見えたりする。時期も確定的でない。正面から見て左側は残りが良く、羽を畳んだこまどりの様に見える。しかし、頭頂部はきつねである。口か嘴の部分は欠けている。なお、腹に当たる所に長さ10mmの刺し穴が認められる。この穴に木の棒を付けたものか。

矢部堀越遺跡



第72圖 古墳後期溝・包含層出土遺物



## 第5節 古代～中世の遺構・遺物

古代～中世の遺構としては、建物・土壇・溝・柱穴・包含層がある。建物は柱穴群の中で方形か長方形に結ぶことができたものを言う。柱穴の大きさとか深さ或いは埋積土の土質を観案しての結果である。時期は出土土器がほとんどないため、不明のものが多いが、ほぼ古代～中世に属していると思う3棟を説明する。土壇は中世土器を出土した1基とその他の2～3基を説明する。溝は多数検出しているが、遺物が古代～中世の時期の物を主として出土している数本に付いて説明したい。最後に柱穴と包含層の中から出土した古代～中世の出土遺物について説明を加える。

## (1) 建物

## 建物-B102 (第74図・図版106)

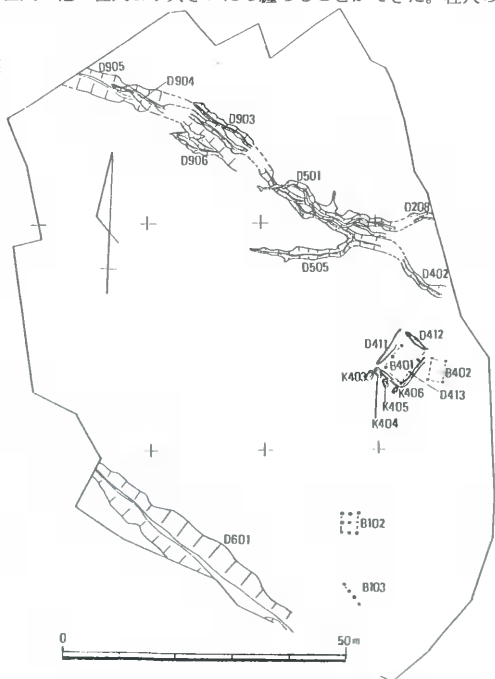
1区の西端で検出した2間×2間の総柱の建物である。周囲には多数の柱穴や土壇が検出でき、重複もしている。この建物の柱穴は他の柱穴より大きいため纏めることができた。柱穴の平面形は不整形円で、大きさは東の1本を除いて60cm～80cm・深さ20cm～50cmを測る。柱痕の認められるものが9本中3本ある。主軸は南北で、梁間330cm～345cm・桁行250cm～260cmのやや北と東に広い長方形建物である。遺物は須恵器細片のみで、時期不確定である。

## 建物-B103 (第75図)

1区の南西端で検出した柱穴列である。3間あって、柱間は150cmを測る。主軸は北西から南東を指す。柱穴の2本は方形で、一辺約50cmある。深さ約20cmある。無遺物。時期不明。

## 建物-B402 (第76図)

4区の中央部で検出した1間×1間の長方形の建物である。主軸

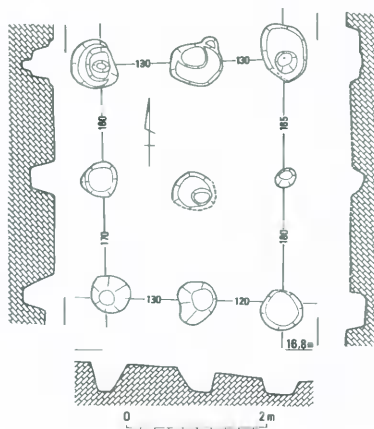


第73図 古代～中世遺構全体図 (1/1,000)

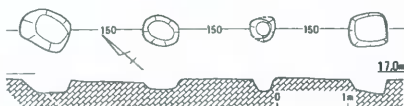
は南北で、梁間390cm～40cm・桁行240cmで、やや東に広く、床面積は約9.5㎡を測る。柱穴の平面形は不整形円で、大きさは西南の1本を除いて約60cm・深さ20cm～60cmを測る。検出面の海拔高は16.7mである。柱穴の埋積土は黒褐色砂質土か暗灰褐色質土で、周辺の他の柱穴と区別できないが、間隔で纏めた。時期不明。

#### 建物-B401 (第77図・図版106)

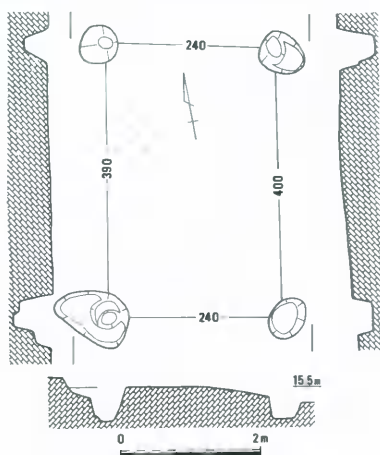
4区の西部で検出した3間×2間の建物である。主軸は北東から南西向き、梁間720cm～730cm・桁行390cmのはほぼ長方形の建物である。床面積は約28.3㎡を測る。柱穴は10本あって、その平面形はほぼ円形で、大きさは中央の1本を除いて直径40cm～60cm・深さ30cm～50cmを測る。建物は3本の溝によって囲まれている。溝-D413である。溝-D411は西北の長辺に柱の中心から約70cm離れて平行に掘られ、溝-D412は北東の短辺に柱の中心を通り、溝-D413は南西の短辺から東南の長辺に逆L字状にはほぼ平行に掘られている。遺物は柱穴からは土師器の碗の細片が出土するだけで、図の土器は全て溝から出た物である。271～273は早島式土器の碗で、口径は14.0cmある。274は瓦質の土鍋である。275は青磁の碗で、花の模様が描かれている。これらから建物の時期は中世と言える。



第74図 建物-B102 (1/80)

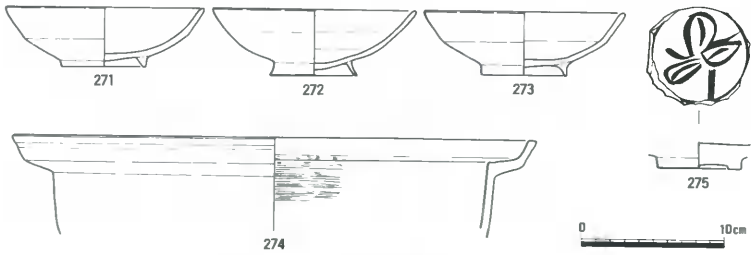
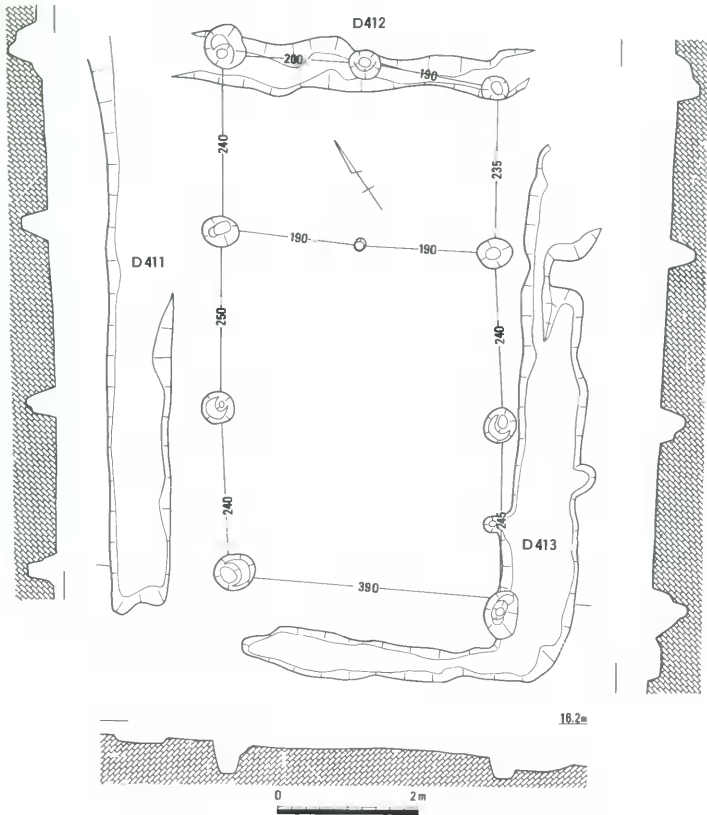


第75図 建物-B103 (1/80)



第76図 建物-B402 (1/80)

矢部堀越遺跡



第77図 建物-B401 (1/80)・出土遺物

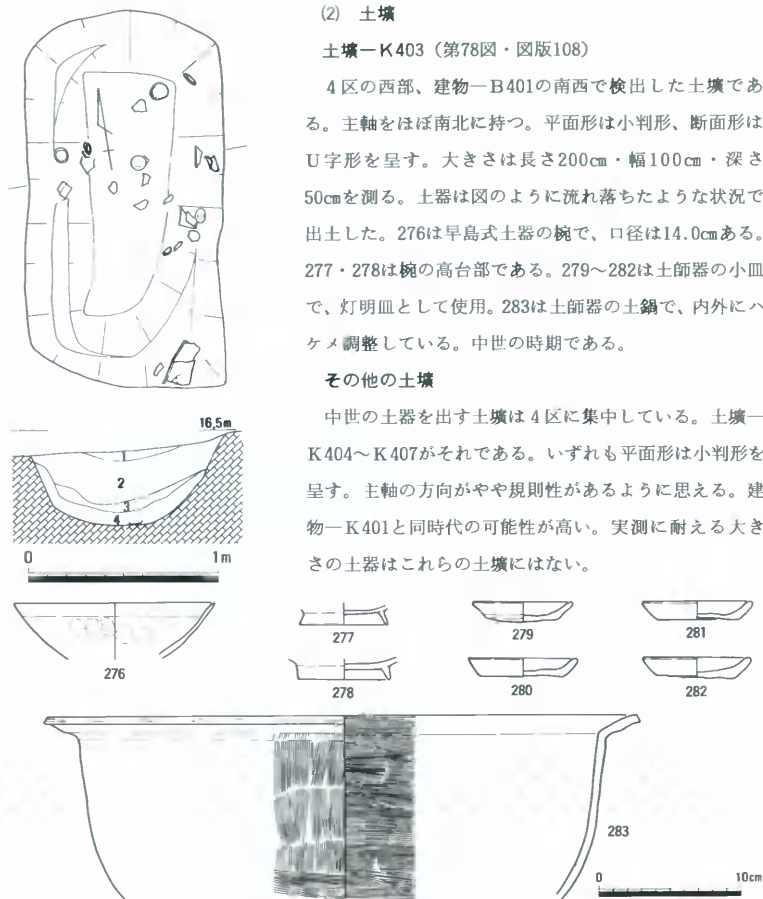
(2) 土壌

土壌-K403 (第78図・図版108)

4区の西部、建物-B401の南西で検出した土壌である。主軸をほぼ南北に持つ。平面形は小判形、断面形はU字形を呈す。大きさは長さ200cm・幅100cm・深さ50cmを測る。土器は図のように流れ落ちたような状況で出土した。276は早島式土器の碗で、口径は14.0cmある。277・278は碗の高台部である。279～282は土師器の小皿で、灯明皿として使用。283は土師器の土鍋で、内外にハケメ調整している。中世の時期である。

その他の土壌

中世の土器を出す土壌は4区に集中している。土壌-K404～K407がそれである。いずれも平面形は小判形を呈す。主軸の方向がやや規則性があるように思える。建物-K401と同時代の可能性が高い。実測に耐える大きさの土器はこれらの土壌にはない。



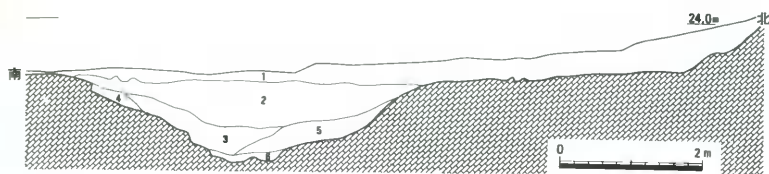
第78図 土壌-K403 (1/30)・出土遺物

(3) 溝

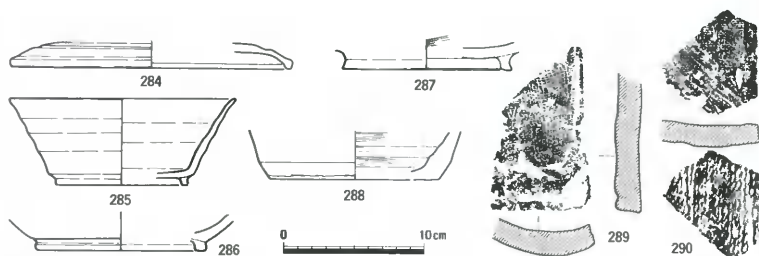
溝-D601 (第79図)

6区の南部で検出した大型の溝である。北西から南東に向かって直線的に流れる。もともとは人工的な道であろう。底部は蛇行してV字状の谷を形成している。溝の幅は北西で300cm、中央で500cm、南東では推定700cmになるであろう。深さは120cm以上ある。図示した遺物は第3層から出た古代の須恵器と平瓦である。第2層からは中世土器が若干出ている。

矢部堀越遺跡



1. 表土 3. 黄黒色砂質土 5. 桃褐色砂質土  
2. 黄褐色砂質土 4. 桃褐色砂質土 6. 暗桃褐色砂質土



第79図 溝-D601断面図(1/80)・出土遺物

溝-D501～D505 (第80図)

5区で検出した溝群である。北西から南東に向かって蛇行して組紐の如くに流れる。溝-D505は西から東に向けて流れ、他の溝に合流する。溝-D501は最も上層を流れ、途中から東に流路を変えて2区の溝-D208になる。この溝群の最下層に当たる溝が溝-D905であり、溝-D402になる。遺物は旧石器から中世土器まで出ているので、溝の時期は中世とした。

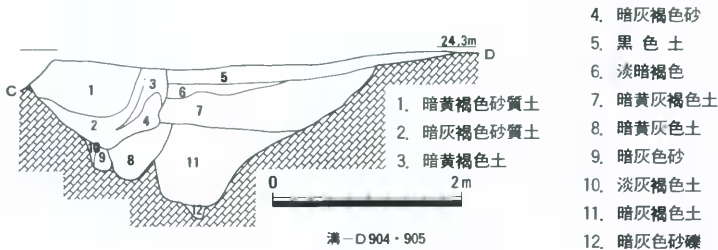
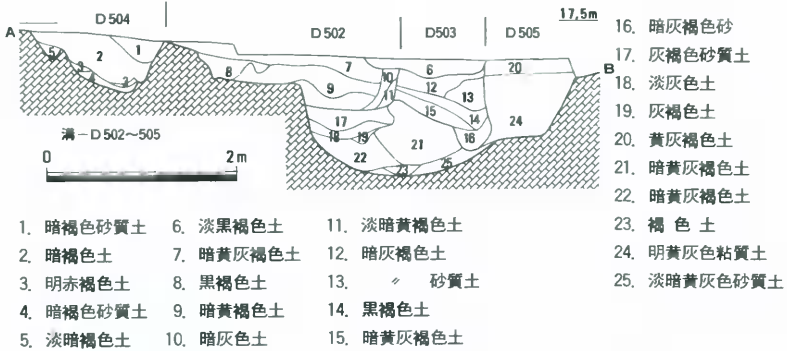
溝-D903～D906 (第80図)

9区で検出した溝群である。北西から南東に向かって蛇行して組紐の如くに流れる。溝-D905が最下層の溝で、溝-D904が最上層の溝である。溝-D905が溝-D505と合流し溝-D402になる。第11図を見て、第77図を比べてみると、平面で検出できていない溝がまだ2～3本或ることが分かる。遺物は旧石器から中世土器まで出ているので、溝の時期は中世とした。

その他の溝

1区には水田・畑の段毎に溝が検出できた。中世後期から近世の物と思われる。2区では西の端で現在の用水路と平行な溝群と直行する溝を検出している。近世の遺物を出す。近世からある池も掘り出した。4区では溝-D402の他2本の中世溝がある。7区の溝-D703は溝-D402と同じものである。溝の遺物は纏めて柱穴・包含層と一緒に後述する。

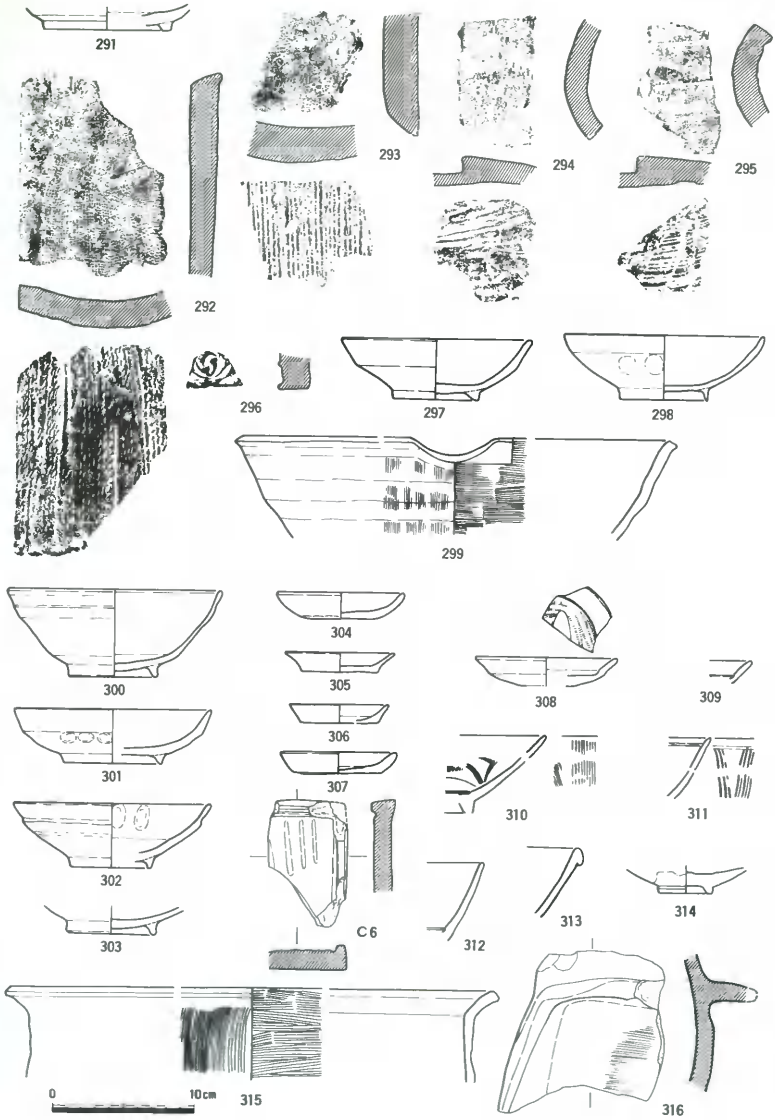
矢部堀越遺跡



第80図 中世溝断面図 (1/60)

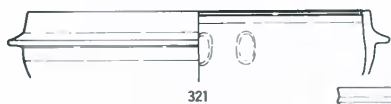
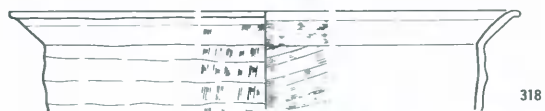
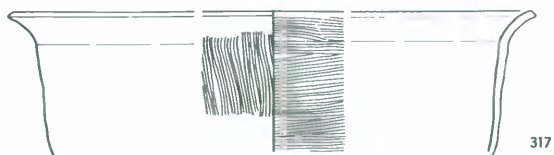
(4) 柱穴・包含層 (第81・82図)

古代～中世の柱穴・包含層および溝から出土した遺物について図の順に従って説明を加えたい。291は1区の包含層から出た須恵器の高台付きである。292は溝-D904の表面布目・裏面縄目タタキの平瓦で、コーナーの部分である。293は溝-D601の表面布目・裏面縄目タタキの平瓦で、292より厚みがある。294は4区包含層の丸瓦で、表面ヘラケズリ・裏面布目である。295は6区包含層の丸瓦で、表面ヘラケズリ・裏面布目である。ここまで古代瓦と思われる。296は5区包含層の軒平瓦で、三巴の文が見える。中世のものであろう。297は柱穴-P4106の早島式土器碗で、口縁部と体部の境が段を成す。口径は13.6cm・底径5.8cm・器高4.2cmを測る。298は柱穴-P430の早島式土器碗で、段をもたない。口径は14.0cm・底径5.8cm・器高4.6cmを測る。299は柱穴-P430の土器器こね鉢で、片口を持つ。内面はヨコハケ・外面はタテハケする。300は1区包含層の土器器碗で、口径が大きく15.0cm、器高も6.2cmと高い。やや



第81図 古代～中世遺構・包含層出土遺物(1)

矢部掘越遺跡



第82図 中世包含層出土遺物(2)



古手で古代末か。301は4区包含層の早島式土器碗で、二次的に焼成を受けて、桃色を呈す。302は4区包含層の早島式土器碗。303は1区包含層の土師器碗で、重ね焼き跡が残る。304は1区包含層の瓦器小皿。305・306は1区包含層の土師器小皿。307は4区包含層のほぼ完形の土師器小皿で、底部に回転糸切りの跡がある。308・309は4区包含層の青磁小皿で、見込み部分に櫛描きの模様が描かれる。南宋時代龍泉窯の物か。310は4区包含層の青磁碗で、体部内外面に櫛描きの模様が描かれる。311は9区の溝一D906から出土した白磁碗で、外面に櫛描きの模様が描かれる。312も溝一D906の白磁碗で、見込みにヘラ描きの圏線がある。313は3区包含層の白磁碗で、玉縁を成す。314は1区包含層の白磁碗で、削り出し高台である。近世伊万里焼か。315は1区包含層の土師器甕か土鍋で、内面はヨコハケし、外面はタテハケしている。316は4区包含層の移動式竈の一部である。煤が付着している。罫の幅は3cmもある。内外面とも粗いハケメが施されている。C6は4区包含層の陶製の硯である。焼きが甘く赤褐色を呈す。陸の一部が残存している。317・318は1区包含層の土師器甕か土鍋で、内面はヨコハケし、外面はタテハケしている。319は4区包含層の土師器土鍋で、前者と違う所は口縁部が丸く納めている事である。同一個体と考えられる棒状の脚があり、三足の鍋になる。320は1区包含層の土師器甕で、中世より古い物と思われる。321は1区包含層の土師器羽釜で、罫の幅は1cmある。中世よりも近世に近い。322は4区包含層の須恵器鉢で、口径約30cmを測る細片である。器壁が薄く、口唇部を上方にたち上がらせている。東播磨系の中世須恵器であろう。12世紀後半か。323は2区包含層の備前焼すり鉢で、中世後半の物である。

以上見てきたように中世の遺物はほとんど4区を中心として出土している事が分かる。4区には建物一B401と土壌一K403などがあり、生活の場であるから当然であろう。

## 第3章 まとめ

### 1. 調査のまとめ

矢部堀越遺跡の調査により判明したいくつかの点について若干考察してみたい。

#### 弥生時代中期後葉の堅穴住居（第14図）

概要で説明したように矢部堀越遺跡の調査により検出できた弥生時代の堅穴住居は全て中期に比定でき、その直前も直後もない。遺物も土器としては、弥生後期の物も弥生前期の物もない。極めて限定された期間に集約している。遺跡の立地は急斜面から緩斜面に亘っているが、東向きで日当たりがよい。北側と西側を山で囲まれ、冬の北風を遮っている。南には小さな谷川が流れていただろう。この谷川はかつて縄文時代には矢部貝塚を形成した。中期後葉には谷川周辺で谷水田を営んでいたと考えられる。集落の立地として申し分のない所であるが、なぜか弥生時代ではこの時期だけが選ばれた。この時期の検出できた堅穴住居は18軒もある。重複しているものもあるので同時に存在したのは10軒位であろうか。調査した範囲だけでこれだけあるのだから、東下方の用地外にはどれくらい多数の堅穴住居が隠れていることか。

さて堅穴住居の形態について見てみよう。H105とH502を見ると隅丸方形住居の外に溝が断続して検出できた。この溝は住居に伴う周提帯の外溝であろう。内部に目を移すと中央穴から北西隅に向けて溝が検出できた。この溝は壁体溝をつき抜けている。排水溝と考えられる。H102を見ると、東西に伸びる溝がやはり東の壁体溝をつき抜けて外部に出ている。また間仕切り溝をもつのがH102とH317である。平面形は隅丸方形の物の方が円形・六角形の物よりも多い。

土器が大量に出土するのはどの時期でも同じことだが、この時期には石器の量が非常に多い。包含層から出ていることになった石器もほとんどこれらの住居に伴うものである。床面に近いところから出土した物だけが各住居に属して報告している。石器の種類も豊富である。石鏃・石包丁・石槍・扁平石斧・太型蛤刃石斧・磨石など、武器類・木工具類・収穫具類などがある。石材の種類も様々で、石の流通の範囲は広い。サヌカイトの量は飛びぬけて多く、H315ではサヌカイトの剥片が実に70片以上出土している。この住居で石器を製作していたとしか考えられない。特殊な石器として大型石庖丁がある。新聞にも掲載されたことがあるが、使用目的が判明していないし、数少ない珍品である。岡山市津寺遺跡と岡山市百間川遺跡群で出土している。

古墳時代後期の竪穴住居（第51図）

弥生時代中期後葉の竪穴住居は遺構一覧表に載せていない溝のみ残存しているような物まで含めると20軒を越える。それに比べると古墳時代の竪穴住居と考えられる物はたったの4軒しかない。竪穴住居と考えられる物と言う言い方をしたのは確実に竪穴住居と言う自信が無いからである。確かに6世紀後半の土器がかなり大量に出るし、床は平坦であり、幅は広いが壁体溝を持つ物もある。しかもH101は柱穴まで適当な位置に検出できた。H104は幅の広い外溝はあっても床が平坦だが、焼けた所もなく、壁体溝も柱穴も無い。H106は壁体溝らしき溝と平坦面と北部に土壌が2個付くが、焼けた所はない。H211は壁体溝らしき溝も焼けた所もなく、ただ平坦面と西辺に土壌が1個付く。つまり火所が竈が欲しいのである。出土遺物には須恵器が圧倒的で土師器がわずかと鉄滓が少量ある。須恵器の中で目立つのが把手付きの鍋とこしきである。製塩土器・砥石・羽口も珍しい。鍛冶に関係する工人の集落と考えても良いのかも知れない。今一つの考えとしては西上方に同時期の横穴式石室墳が発見できたがほとんど破壊され床の敷石の一部が残存しているに過ぎぬことから、この石室の遺物が混入している可能性が非常に高い。特にH104に関してはその可能性が大いにある。H211は普通の住居として良いかもしれぬ。後年調査したの高塚遺跡・津寺遺跡・政所遺跡など沖積地の遺跡で続々とこの時期の住居を発掘していったがほとんどすべて作り付けの竈を持っていた。したがって堀越遺跡のものは竪穴住居と言うには説得力に欠けるのである。たまたま作り付けの竈を持たず移動式の竈を使用していたと考えることもできるが。

古代の遺構（第73図）

特別古代の遺構として積極的に取り上げるものは数少ない。古代と考えられそうなものとしては建物B102と溝D601である。B102は本文でも説明したように2間×2間の総柱の堀立柱建物であり、柱穴の掘り方は方形である。当遺跡では唯一の形態である。但しこの建物の南側には柱穴の掘り方が方形の柱穴列を2～3列検出している。その一つを建物B103とした。本文の説明ではB102もB103も遺物の出土が須恵器小片のために時期不明としているが、周辺の縄目叩きの瓦や須恵器高台付き杯の破片の出土から古代と考えたい。また、溝D601については自然の解析された谷ではなく堀越と言う地名の由来とおりに人工的に掘り切した道である。そしてその底部が雨水により侵食されて岩盤まで露出したものと考えられる。使用された時期についても本文の説明のごとく出土遺物から見て古代から中世までとしたい。

中世の遺構（第73図）

この時期の遺構としては建物B401・B402・溝D411～413・土壌K403～406など4区に集中している。また北西から南東に蛇行しつつ伸びる溝群と古代溝D601も属す。柱穴は遺跡の東で数百本検出している内のはば5分の1が中世であろう。

## 2. 特殊器台形埴輪について

本遺跡の3区中央部から箱式石棺が1基検出できた。その石棺の底部に大小の破片にされた特殊器台形埴輪と壺形埴輪が本文の説明の様に敷くがごとくに出土した。ここでは石棺についてではなく、器台形埴輪について若干の考察をしてみたい。

名称についても二説ある。特殊器台形埴輪と特殊器台である。埴輪の起源の研究者において弥生終末期の特殊器台から古墳時代の埴輪に漸次移行していくことにはほぼ異論はないように思える。しかしどこから古墳時代に入れるのかと言う問題でこの土器も二説別れた。私は特殊器台形埴輪とする。

また胎土中に大量に含まれる赤色の小粒子（シャモットと呼ばれている）が焼土塊と言う説とこの足守川付近の土壌に含まれる赤色に発色する粘土塊であると言う二説がある。これは後者を支持したい。

本遺跡から特殊器台形埴輪が出土したのは昭和61年7月で復元は8月。県下初と言うものでもなくすでに岡山市の都月坂1号墳からも出土しており、前年には矢部古墳群42号墳からも土器棺として検出していたので、都月坂1号墳をモデルに復元に励んだ。しかし都月坂1号墳のものより倍程の大きさとなり、しかも巴穴の数が都月は4、奈良県の箸墓は8個と聞かされていたため、8個にこだわった。しかし、どう復元しても8個にはならないことが判明した。都月では基底部は垂直に終わっている。堀越のは基底部が全く発見できなかった。

文様については巴穴のしっぽから4本のへら描き沈線がほぼ並行して穴を巡り、三角穴の左辺上方に達している。いわゆるわらび手文が中心で、その外郭線に7~15本の斜線文を取りつけている。また二重口縁外面にはへら描きの裾歯文が描かれ、上から第一無文帯になる一号埴輪とそこに裾歯文と曲線文を持つ二号埴輪があることも判明した。

時期については作られた時期と棺に納められた時期とは当然ずれることは承知しているが、都月坂1号墳・箸墓古墳・矢部古墳群42号墳・伝矢部大塚出土の埴輪と同時期と考えて良い。最近岡大考古学研究室が相次いで報告書を出した兵庫県の権現山51号墳（註1）・岡山市の浦間茶臼山古墳（註2）とも同時期と考えている。いずれも矢部古墳群42号墳を除いて前方後円墳である。

最後に本報告書を執筆・出版するに当たり、多数の方々の助力・教示を得た。あえて名前は挙げないが、感謝の意を表したい。（浅倉）

### 註

註1 近藤義郎「権現山51号墳」権現山51号墳刊行会1991年

註2 近藤義郎・新納泉「岡山市浦間茶臼山古墳」浦間茶臼山古墳発掘調査団1991年

表2 竪穴住居一覧表

番号	遺構	形	長軸	短軸	床面積	柱	北辺	東辺	南辺	西辺	中央穴・貯蔵穴	炉	溝	特徴	遺物
1	H102	多角	500	500	19.6㎡	6	240	240	240	200	貯・円・60-30	1	○	間仕切り溝	壺・甕・鉢・高杯
2	H103	方	500	—	—	2	—	—	—	300	—	—	○	—	壺・甕・鉢・高杯
3	H105	方	500	500	25.0㎡	4	300	300	300	320	中・円・60-15	—	○	排水溝・外溝	壺・甕・鉢・高杯
4	H107	円	500	—	—	2	—	—	—	400	—	—	○	—	甕
5	H108	円	350	—	—	0	—	—	—	—	—	—	○	—	甕
6	H109	円	450	—	—	0	—	—	—	—	—	—	○	—	—
7	H110	方	250	—	—	0	—	—	—	—	—	—	○	—	—
8	H312	方	450	—	—	2	—	—	—	220	—	—	○	—	甕
9	H313	方	550	—	—	3	—	—	—	100	—	—	○	柱穴連結溝	壺・大型石庖丁
10	H314	方	250	—	—	2	—	—	—	300	—	—	—	—	—
11	H315	方	500	—	—	4	250	250	250	250	中・方・100-20	—	○	間仕切り溝	甕・高杯・サスカイト片多数
12	H616	円	600	—	—	2	—	—	—	300	中・方・60-10	1	○	区仕切り溝	甕・高杯
13	H817	円	600	—	—	3	—	—	—	200	—	—	○	—	高杯

(単位 cm)



矢部堀越遺跡

表-3 建物一覧表

(単位 cm)

No.	建物	規模	桁行	梁間	面積	棟向	柱穴	地区	時期	遺物
1	B101	3×1	750	240	18.0㎡	南北	円形	1区	弥・中・Ⅲ	甕
2	B701	2×?	480	—	—	南北	円形	7区	弥・中・Ⅲ	甕
3	B702	1×1	400	250	10.0㎡	南北	円形	7区	弥・中・Ⅲ	甕
4	B102	2×2	330	300	9.9㎡	南北	方形	1区	古代	—
5	B103	3×?	450	—	—	南北	円形	1区	中世	—
6	B401	3×2	720	390	28.1㎡	南北	円形	4区	中世	椀・鍋
7	B402	1×1	390	360	14.0㎡	南北	円形	4区	中世	—

表-4 土壇一覧表

(単位 cm)

No.	土壇	地区	長さ	幅	深さ	平面形	断面形	遺物	時期
1	K101	1区	370	80	25	瓢箪形	皿形	壺・甕・高杯	弥・中・Ⅲ
2	K102	1区	—	180	75	楕円形	椀形	壺・高杯・鉢	弥・中・Ⅲ
3	K204	2区	360	135	30	T字形	皿形	甕・高杯・鉢	弥・中・Ⅲ
4	K205	2区	120	110	45	隅丸方形	椀形	甕	弥・中・Ⅲ
5	K801	8区	220	190	80	隅丸方形	椀形	甕	弥・中・Ⅲ
6	K206	2区	145	100	10	楕円形	皿形	杯・高杯・壺	6C後半
7	K403	4区	200	100	40	長方形	皿形	椀・小皿・甕	中世
8	K404	4区	200	100	34	楕円形	皿形	—	中世
9	K405	4区	150	90	50	楕円形	皿形	—	中世
10	K406	4区	180	60	15	長方形	皿形	—	中世

表-5 溝一覧表

(単位 cm)

No.	溝	地区	長さ	幅	深さ	断面形	方向	遺物	時期
1	D115	1区	800	200	30	U字形	南-北	杯身・高杯	6C後半
2	D208	2区	450	150	10	U字形	西-東	—	中世
3	D402	4区	900	200	25	U字形	北西-南東	—	中世

矢部堀越遺跡

4	D411	4区	800	100	10	U字形	南西—北東	小皿	中世
5	D412	4区	450	100	10	U字形	北東—南西	—	中世
6	D413	2区	1,100	80	10	U字形	北西—北東	小皿	中世
7	D501	5区	2,400	120	30	V字形	西—東	—	中世
8	D505	5区	2,300	150	50	V字形	西—東	—	中世
9	D601	6区	4,500	700	120	V字形	北東—南西	杯・瓦	古代
10	D903	9区	1,300	150	30	V字形	北東—南西	—	中世
11	D904	9区	1,200	180	50	V字形	西—東	—	中世
12	D905	9区	1,500	350	120	V字形	西—東	—	中世
13	D906	9区	1,000	150	50	V字形	西—東	—	中世

表-6 土器観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1	縄文土器	深鉢	—	12.0	—	上げ底	黒褐色	砂 礫	底部1/4
2	弥生土器	甕	11.0	—	—	口唇部に4条の沈線	浅黄橙色	砂 礫	口縁部1/8
3	弥生土器	甕	14.8	—	—	口唇部に4条の沈線	浅黄橙色	微 砂	口縁部1/4
4	弥生土器	甕	14.2	—	—	櫛状の連続刺突文・10~11個	灰赤色	礫	口縁部1/3
5	弥生土器	鉢	16.0	—	—	刺突文・凹線文	茶褐色	微 砂	1/2
6	弥生土器	甕	—	5.8	—	ヘラミガキ・ユビオサエ	淡橙色	砂 粒	底部2/3
7	弥生土器	高杯	17.3	—	—	口唇部に5条の沈線	淡黄橙色	微 砂	杯部1/8
8	弥生土器	高杯	—	—	—	ヘラミガキ・ユビオサエ	浅黄橙色	微 砂	杯部1/2
9	弥生土器	高杯	—	12.6	—	円形の透かし穴	浅黄橙色	砂 粒	脚部1/5
10	弥生土器	高杯	—	15.4	—	深い円形の刺突文	浅黄橙色	砂 粒	脚部1/7
11	弥生土器	高杯	—	13.9	—	櫛描文様と竹管文	浅黄橙色	砂 粒	脚部1/8
12	弥生土器	高杯	—	16.3	—	三角形の透かし穴	灰白色	微 砂	脚部1/8



矢部掘越遺跡

13	弥生土器	高杯	—	6.1	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	浅黄橙色	砂粒	脚部1/3
14	弥生土器	壺	14.0	—	—	口唇部・頸部に3条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部2/3
15	弥生土器	壺	14.0	—	—	口唇部に3条の沈線	淡黄色	砂粒	口頸部1/6
16	弥生土器	甕	15.0	—	—	口唇部に3条の凹線文	灰白色	微砂	口縁部1/7
17	弥生土器	甕	—	8.4	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	浅黄橙色	砂礫	底部1/4
18	弥生土器	高杯	24.8	—	—	口縁部に4条の凹線文	明褐灰色	砂粒	杯部1/8
19	弥生土器	鉢	24.4	—	—	口縁部に5条の凹線文	灰白色	微砂	口縁部1/8
20	弥生土器	壺	30.5	—	—	頸部に凹線文 ハケメ	灰白色	砂粒	口頸部1/6
21	弥生土器	壺	22.3	—	—	頸部に凹線文	灰白色	砂礫	口縁部1/3
22	弥生土器	直口壺	8.2	—	—	外面 ハケメ	橙 色	砂粒	口縁部2/5
23	弥生土器	無頸壺	18.6	—	—	口縁部に浅い7条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/6
24	弥生土器	甕	14.0	—	—	外面 ハケメ	淡黄橙色	微砂	口縁部1/4
25	弥生土器	甕	25.5	—	—	凸帯文(指頭圧痕付き)	明褐灰色	砂粒	口縁部1/4
26	弥生土器	甕	—	10.2	11.4	外面 ヘラミガキ	灰 色	砂粒	底部1/5
27	弥生土器	壺	—	6.4	—	ヘラミガキ・ハケメ	浅黄橙色	砂粒	底部
28	弥生土器	高杯	35.6	—	—	口縁部に4条の凹線文	淡黄色	砂粒	杯部1/10
29	弥生土器	高杯	—	15.0	11.4	透かし穴	淡黄色	砂粒	脚部1/5
30	弥生土器	高杯	15.2	—	—	口縁部に3条の凹線文	淡黄色	砂粒	杯部1/5
31	弥生土器	鉢	—	—	—	口縁部に7条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/10
32	弥生土器	甕	13.0	—	—	口縁部に2条の凹線文	浅黄橙色	微砂	口縁部1/12
33	弥生土器	甕	11.0	—	—	ヨコハケ	黄褐色	微砂	1/6
34	弥生土器	甕	12.1	—	—	口唇部に2条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/8
35	弥生土器	甕	17.1	—	—	口唇部に3条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/7
36	弥生土器	甕	22.2	—	—	口縁に2条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/5

矢部堀越遺跡

37	弥生土器	壺	24.8	—	—	頸部に12本の凹線文	淡橙色	微砂	口縁部1/4
38	弥生土器	甕	22.0	—	—		明褐灰色	砂粒	口縁部1/8
39	弥生土器	甕	14.8	—	—	口唇部に4条の凹線文	灰褐灰	砂粒	口縁部1/8
40	弥生土器	甕	—	5.8	—	ヘラミガキ	明褐灰色	砂粒	底部1/3
41	弥生土器	高杯	—	—	—	ハヘラミガキ・ヘラケズリ	灰白色	砂粒	脚柱部1/2
42	弥生土器	甕	16.4	—	—	口唇部に2～3条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/4
43	弥生土器	高杯	39.6	—	—	口唇部に7条の凹線文	灰白色	砂粒	杯部2/5
44	弥生土器	甕	11.9	—	—	口唇部に3条の凹線文	淡黄色	砂粒	口縁部1/6
45	弥生土器	高杯	13.0	—	—	口唇部に4条の凹線文	灰白色	砂粒	脚裾部1/7 欠
46	弥生土器	甕	19.4	—	—	口唇部に4条の沈線	灰白色	砂粒	口縁部1/5
47	弥生土器	甕	16.0	—	—	刺突文2列	浅黄橙色	砂粒	口縁部1/5
48	弥生土器	甕	—	5.8	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	浅褐色	砂粒	底部1/3
49	弥生土器	高杯	21.8	—	—	口縁部に4条の沈線	明褐灰色	砂粒	口縁部1/8
50	弥生土器	甕	13.1	—	—	口唇部に2～3条凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/4
51	弥生土器	甕	15.4	—	—	口唇部に2～3条凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/6
52	弥生土器	壺	24.0	—	—	口唇部に4条の沈線	灰白色	砂粒	口縁部1/4
53	弥生土器	甕	16.2	—	—	口唇部に4条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/4
54	弥生土器	甕	13.8	—	—	胴部に櫛状工具による刺突文	灰白色	砂粒	口縁部1/3
55	弥生土器	甕	29.2	—	—	頸部に粘土紐貼りつけ	浅黄橙色	微砂	口縁部1/12
56	弥生土器	甕	13.0	—	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	黄橙色	砂粒	底部2/5
57	弥生土器	高杯	—	8.0	—	9個の三角透かし	灰白色	砂粒	脚部のみ完
58	弥生土器	壺	22.0	—	—	凹線文・長頸	黄白色	砂礫	1/6残
59	弥生土器	壺	26.0	—	—	凹線文・長頸	赤白色	微砂	1/4残
60	弥生土器	壺	13.6	—	—	直口・円形浮文・円孔	茶褐色	砂礫	1/3残

矢部堀越遺跡

61	弥生土器	鉢	34.0	—	—	無頸・浮文・裾歯文	淡茶褐色	砂 礫	1/5残
62	弥生土器	高杯	—	10.0	—	円孔20個	淡褐色	微砂	脚全
63	弥生土器	甕	25.8	—	—	頸部に粘土紐貼りつけ	淡黄橙色	微砂	口縁部1/4
64	弥生土器	甕	14.0	20.4	—	口唇部に2条の凹線文	浅黄橙色	砂粒	口縁部4/5
65	弥生土器	甕	11.4	—	—	口唇部に2～3条の凹線文	浅黄橙色	砂 礫	口縁部1/4
66	弥生土器	甕	13.1	—	3.2	内外面 ヨコナデ	淡橙色	砂粒	口縁部1/4
67	弥生土器	甕	—	11.0	4.5	ヘラケズリ・ヘラミガキ	淡橙色	砂粒	底部1/5
68	弥生土器	鉢	—	24.6	—	工具による刺突文	浅黄橙色	砂 礫	胴部1/4
69	弥生土器	高杯	20.9	—	—	口縁部に4条の凹線文	淡黄色	砂 礫	杯部1/3
70	弥生土器	高杯	—	—	—	櫛描文様	淡黄色	砂粒	脚柱部1/2
71	弥生土器	高杯	—	11.0	—	脚裾部に横方向のハケメ	浅黄橙色	砂粒	脚柱部1/5
72	弥生土器	壺	14.0	—	3.0	内外面 ヨコナデ	灰白色	砂粒	口縁部1/6
73	弥生土器	壺	—	7.4	4.4	ヘラミガキ・ヘラケズリ	浅黄橙色	砂粒	同一個体 底部ほぼ 完形
74	弥生土器	壺	—	30.1	—	胴部に刺突文	灰白色	砂 礫	口縁部を欠く
75	弥生土器	高杯	—	20.2	—	脚裾部の立ち上がりに1条の沈線	明赤灰色	砂粒	脚裾部1/10
76	弥生土器	甕	14.2	—	—	口唇部に3条の凹線文	浅黄橙色	微砂	口縁部1/14
77	弥生土器	壺	—	5.8	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	黄灰色	微砂	底部1/3
78	弥生土器	高杯	—	10.1	—	脚の立ち上がりに3本の沈線	灰白色	砂粒	脚部1/3
79	弥生土器	甕	13.0	—	—	口唇部に3条の沈線	淡赤褐色	砂粒	口縁部1/14
80	弥生土器	壺	21.6	—	—	口唇部に3条凹線文	浅黄橙色	砂粒	口縁部1/5
81	弥生土器	壺	14.6	—	—	口唇部に3条の凹線文・頸部に円孔	淡黄色	砂粒	口縁部1/4
82	弥生土器	甕	14.0	—	—	口唇部に3条の凹線文	黒褐色	砂粒	口頸部1/8
83	弥生土器	高杯	20.9	—	—	口縁に4条の凹線文	赤灰色	砂粒	杯部1/18
84	弥生土器	甕	10.9	—	—	2条の凹線文	灰白色	砂粒	口縁部1/14

矢部堀越遺跡

85	弥生土器	甕	18.2	28.2	9.3	頸に突帯・胴部に線刻	灰白色	砂	粒	口縁部1/2
86	弥生土器	甕	14.0	—	—	凹線文・頸部に突帯風	黄褐色	砂	粒	口縁部1/4
87	弥生土器	壺	15.5	—	—	口唇部・頸部に4条の凹線文	灰白色	砂	粒	口縁部1/5
88	弥生土器	長頸壺	25.2	—	—	頸部に10条の凹線文	灰白色	砂	礫	口頸部1/6
89	弥生土器	壺	20.8	—	—	頸部に10条の凹線文	灰白色	砂	粒	口頸部1/2
90	弥生土器	壺	26.9	—	—	口唇部に4条の凹線文	灰白色	砂	粒	口縁部1/6
91	弥生土器	壺	15.4	—	—	口唇部・頸部に3条の凹線文	淡橙色	砂	粒	口縁部1/5
92	弥生土器	壺	14.0	—	—	口唇部・頸部に3条の凹線文	淡橙色	砂	礫	口縁部1/6
93	弥生土器	壺	11.0	—	—	口唇部・頸部に凹線文	淡茶褐色	砂	礫	口縁部1/4
94	弥生土器	壺	10.0	16.0	16.8	口唇部に2条の凹線文	灰白色	砂	礫	口縁部1/2
95	弥生土器	甕	26.4	—	—	頸部に指頭圧痕文凸帯	浅黄橙色	微	砂	口縁部1/8
96	弥生土器	甕	26.0	—	—	口唇部に凹線文・頸部凸帯文	浅黄橙色	微	砂	口縁部1/4
97	弥生土器	甕	23.4	—	—	頸部に指頭圧痕文凸帯	淡黄色	砂	粒	口縁部9/10
98	弥生土器	甕	26.4	33.0	—	頸部に指頭圧痕文凸帯	灰白色	砂	粒	口縁部1/2
99	弥生土器	甕	20.1	—	—	頸部に指頭圧痕文凸帯	浅黄橙色	微	砂	口縁部1/6
100	弥生土器	甕	18.6	31.0	—	櫛状工具による刺突文	褐灰色	砂	粒	口縁部1/12
101	弥生土器	甕	16.0	—	—	櫛状工具による刺突文	褐灰色	砂	粒	口縁部1/3
102	弥生土器	甕	19.0	—	—	口唇部に4条凹線文	浅黄橙色	砂	粒	口縁部1/6
103	弥生土器	甕	20.2	—	—	口唇部に4条凹線文	茶褐色	砂	粒	口縁部1/6
104	弥生土器	甕	14.0	—	—	口唇部に4条の凹線文・棒状浮文	黄白色	砂	粒	口縁部1/6
105	弥生土器	甕	11.9	17.9	—	口唇部に2条の凹線文	灰白色	砂	粒	口縁部2/3
106	弥生土器	鉢	14.0	—	—	内面にツメ跡	淡茶褐色	砂	粒	口縁部1/4
107	弥生土器	甕	—	—	—	肩部に渦巻き文	黄褐色	砂	粒	細片
108	弥生土器	壺	—	12.0	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	灰黄色	砂	粒	底部

矢部堀越遺跡

109	弥生土器	壺	—	4.8	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	橙 色	砂 礫	底部1/4
110	弥生土器	壺	—	5.8	—	ヘラミガキ・ヘラケズリ	にぶい 橙 色	砂 礫	底部1/3
111	弥生土器	高 杯	21.0	—	—	垂直に立ち上がる	にぶい 橙 色	砂 礫	口縁部1/3
112	弥生土器	高 杯	22.7	—	—	ヨコナデ・ヘラミガキ	淡黄色	砂 礫	杯部1/4
113	弥生土器	高 杯	20.2	—	—	退化した凹線文	丹塗り	砂粒礫	1/3
114	弥生土器	高 杯	—	6.0	—	鋸歯文	黄褐色	砂 礫	脚片1/4
115	弥生土器	高 杯	—	10.0	—	斜格子文	褐 色	砂 粒	脚片1/5
116	弥生土器	高 杯	—	—	—	渦巻き文	茶褐色	砂 粒	細片
117	弥生土器	高 杯	—	9.0	—	八の字脚	淡褐色	砂 礫	脚一部欠
118	弥生土器	高 杯	—	7.0	—	長八の字脚	黄白色	砂 礫	脚
119	弥生土器	高 杯	—	10.1	—	脚裾部に2条の沈線	浅黄橙 色	砂 粒	脚完
120	弥生土器	高 杯	—	9.0	—	22個の円孔	褐 色	砂 粒	脚下端
121	弥生土器	高 杯	—	14.0	—	円孔	褐 色	砂 粒	脚1/4
122	弥生土器	高 杯	—	15.0	—	未貫通の透かし	灰白色	砂 粒	脚1/3
123	弥生土器	高 杯	—	11.1	—	脚裾部に三角形の切り込み	黒褐色	砂 粒	脚裾部1/5
124	弥生土器	鉢	36.0	—	—	凹線文	黒褐色	砂 粒	口縁部1/6
125	弥生土器	器 台	27.2	20.2	—	凹線文・波状文	黄白色	砂 粒	1/2
126	埴 輪	特殊器台 形埴輪	48.0	—	—	鋸歯文・わらび手文	赤褐色	砂 礫	口縁部1/2
127	埴 輪	特殊器台 形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
128	埴 輪	特殊器台 形埴輪	48.0	—	—	鋸歯文・わらび手文	赤褐色	砂 礫	口縁部2/3
129	埴 輪	特殊器台 形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
130	埴 輪	特殊器台 形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
131	埴 輪	特殊器台 形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
132	埴 輪	特殊器台 形埴輪	—	—	—	斜線文	赤褐色	砂 礫	

矢部堀越遺跡

133	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	ハケメ	赤褐色	砂 礫	
134	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
135	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	斜線文・ハケメ	赤褐色	砂 礫	
136	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	斜線文・ハケメ	赤褐色	砂 礫	
137	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	斜線文・わらび手文	赤褐色	砂 礫	
138	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	三角透かし	赤褐色	砂 礫	
139	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	ハケメ	赤褐色	砂 礫	
140	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
141	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
142	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	三角透かし	赤褐色	砂 礫	
143	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	わらび手文	赤褐色	砂 礫	
144	埴輪	特殊器台形埴輪	—	—	—	鋸歯文	赤褐色	砂 礫	
145	須恵器	杯 蓋	14.8	—	—	外面ヘラケズリ、ヨコナデ	灰 色	砂 粒	口縁部1/8
146	須恵器	高 杯	—	—	—	自然釉	明灰色	砂 粒	脚柱上部
147	須恵器	壺	4.0	—	—	3本の櫛描沈線	灰 色	砂 礫	口縁部2/3
148	須恵器	平 瓶	4.4	—	—	自然釉	灰 色	砂 礫	口頸部1/2
149	須恵器	壺	15.2	—	—	カキメ	青灰色	砂 礫	口頸部1/12
150	須恵器	長頸壺	—	—	—	肩部に櫛状工具による刺突文	灰白色	砂 礫	肩部1/5
151	須恵器	杯 蓋	14.0	—	4.3	かえりなし	灰 色	砂 粒	1/2
152	須恵器	杯 蓋	14.0	—	4.3	ヘラケズリ	灰 色	砂 礫	3/4
153	須恵器	杯 蓋	13.7	—	3.85	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰 色	砂 粒	完形
154	須恵器	杯 蓋	13.8	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	明青灰色	砂 粒	口縁部1/4
155	須恵器	杯 蓋	12.4	—	3.7	ヘラケズリ・ヨコナデ	白 色	砂 粒	口縁部1/3
156	須恵器	杯 蓋	14.1	—	3.4	ヘラケズリ・ヨコナデ	明青灰色	砂 粒	口縁部1/4

矢部堀越遺跡

157	須恵器	杯身	12.3	—	4.2	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰白色	砂粒	口縁部1/2
158	須恵器	杯身	12.1	—	3.8	ヘラケズリ・ヨコナデ	淡黄橙色	砂粒	口縁部1/4
159	須恵器	杯身	13.1	—	—	内外面ヨコナデ	灰白色	微砂	口縁部1/6
160	須恵器	杯蓋	14.6	—	4.4	つまみ付き	灰色	砂粒	2/5欠
161	須恵器	杯蓋	12.6	—	—	つまみ付き	灰色	微砂	天井部1/4
162	須恵器	杯蓋	15.0	—	4.3	口縁の境あり・カキメ	灰褐色	砂粒	1/4
163	須恵器	高杯	13.0	—	—	長脚二段すかし	灰褐色	砂粒	杯部全
164	須恵器	高杯	15.2	—	—	ナデ・ヨコナデ	灰白色	砂粒	杯部1/2
165	須恵器	高杯	—	—	—	碗形杯・八の字脚	灰黒色	砂粒	端部欠
166	須恵器	高杯	—	7.9	—	脚柱に1本の沈線	灰色	砂粒	脚部1/2
167	土師器	甕	22.0	—	—	外反口縁	黄褐色	砂礫	口縁部細片
168	土師器	甕	18.0	—	—	外反口縁	赤褐色	砂礫	口縁部細片
169	土師器	甗	24.0	—	—	直立口縁	赤茶色	砂礫	口縁部1/6
170	土師器	甕	—	—	—	牛角把手	赤褐色	砂礫	把手
171	土師器	器台	—	—	—	肉厚・内面黒色	赤褐色	砂礫	台細片
172	須恵器	杯蓋	16.0	—	4.3	口縁、体部の境明瞭	灰黒色	砂礫	1/3
173	須恵器	杯蓋	15.1	—	—	肩に1条の沈線	灰色	砂粒	口縁部1/3
174	須恵器	杯蓋	—	—	4.3	肩に1条の沈線	灰色	砂粒	1/5欠
175	須恵器	杯蓋	14.0	—	4.0	肩に1条の沈線	灰色	砂礫	2/3残
176	須恵器	杯蓋	12.0	—	4.2	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰白色	砂粒	口縁部2/3
177	須恵器	杯蓋	12.9	—	4.3	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰白色	砂粒	口縁部1/2欠
178	須恵器	杯蓋	12.1	—	4.3	ヘラケズリ・ヨコナデ	明青灰色	砂粒	口縁部1/2欠
179	須恵器	杯蓋	14.8	—	4.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	明青灰色	砂粒	1/3
180	須恵器	杯蓋	15.4	—	4.0	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰色	砂粒	口縁部1/4

矢部堀越遺跡

181	須恵器	杯蓋	12.9	—	3.6	ヘラケズリ・ヨコナデ	明灰色	砂粒	完形
182	須恵器	杯蓋	13.0	—	3.9	工具による刺突文	明青灰色	砂礫	1/2欠
183	須恵器	杯蓋	14.4	—	4.3	ヘラケズリ・ヨコナデ	明灰色	砂粒	口縁部1/4
184	須恵器	杯蓋	10.0	—	3.1	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰褐色	砂粒	1/2残
185	須恵器	杯身	13.0	—	—	ヨコナデ	明青灰色	微砂	口縁部1/12
186	須恵器	杯蓋	—	—	—	宝珠扁平つまみ・カキメ	灰黒色	微砂	つまみ部
187	須恵器	有高杯蓋	16.0	—	5.2	つまみ・カキメ	明オリ グ灰色	砂粒	完形
188	須恵器	有高杯蓋	15.5	—	—	有蓋	灰色	砂粒	杯部1/4
189	須恵器	有高杯蓋	14.0	13.6	17.0	脚柱部・裾部に1条の沈線	灰白色	微砂	口縁部1/5
190	須恵器	高杯	16.1	12.3	12.7	ヨコナデ	灰白色	砂粒	口縁部2/3
191	須恵器	高杯	15.0	—	—	無蓋	赤褐色	砂粒	口縁部
192	須恵器	高杯	15.0	—	—	無蓋	灰白色	砂粒	灰部1/3
193	須恵器	高杯	—	—	—	長脚二段透かし・カキメ	灰褐色	砂礫	脚柱部片
194	須恵器	高杯	—	—	—	透かし無	灰褐色	砂礫	端部欠
195	須恵器	高杯	—	—	—	短脚透かし無・カキメ	灰褐色	砂礫	脚柱部2/3
196	須恵器	高杯	—	—	—	長脚透かし無・カキメ	灰褐色	砂礫	胴柱部片
197	須恵器	高杯	—	14.0	—	長脚・透かし同列	灰褐色	砂礫	脚部1/3
198	須恵器	高杯	—	15.0	—	長脚・透かし同列・カキメ	灰褐色	砂礫	脚部1/3
199	須恵器	横瓶	—	—	—	俵形・タタキ	灰褐色	砂礫	口縁部欠
200	須恵器	蓋	29.6	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰色	砂粒	口縁部1/6
201	須恵器	甌	29.6	31.3	26.6	底部は直径9.7cmの穴	青灰色	微砂	口縁部3/5
202	須恵器	甌	34.4	41.0	24.6	内外面ともタタキメの上にカキメ	灰色	砂粒	口縁部1/3
203	須恵器	鍋	—	—	—	沈線・タタキ	灰白色	砂粒	1/5残
204	須恵器	鍋	27.0 31.2	39.1	21.5	口唇部に1条の沈線	灰白色	微砂	胴部1/10欠



矢部堀越遺跡

205	須恵器	鍋	—	—	—	沈線	灰 色	微 砂	細片
206	須恵器	鍋	—	—	—	牛角形把手 1 対	灰褐色	砂 礫	1/10
207	須恵器	壺	—	12.0	8.2	体部に 2 条の沈線	灰白色	砂 粒	口頸部欠
208	須恵器	鉢	11.5	14.0	8.2	ヘラケズリ、ヨコナデ	灰白色	礫	口縁部2/3
209	須恵器	平 瓶	8.4	—	—	ヨコナデ	灰 色	微 砂	口頸部2/3
210	土師器	高 杯	17.9	—	—	体部の下方に 1 本の沈線	橙 色	砂 粒	底部と脚欠
211	土師器	製塩土器	16.6	—	14.8	表面凸凹全体に粗い作り	淡橙色	砂 粒	口縁部1/2
212	土師器	甕	19.1	—	—	形が滑らかでない	浅黄橙色	砂 粒	口縁部3/5
213	須恵器	甕	—	—	—	外面に平行・内面に同心円	青灰色	微 砂	底部1/2
214	須恵器	甌	—	12.0	—	棒状底・タタキ	灰白色	砂 粒	1/6
215	須恵器	杯 身	10.8	—	4.3	立ち上がり短い	灰褐色	砂 礫	一部欠
216	須恵器	杯 蓋	15.4	—	3.8	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰白色	砂 粒	口縁部1/5
217	須恵器	杯 蓋	13.0	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰 色	砂 礫	口縁部1/8
218	須恵器	杯 蓋	14.0	—	3.3	ヘラケズリ	灰 色	砂 粒	1/4
219	須恵器	杯 蓋	18.0	—	2.1	扁平	暗灰色	砂 粒	1/2
220	須恵器	杯 身	13.4	—	3.8	立ち上がり 7mm	灰白色	砂 粒	1/4
221	須恵器	杯 身	11.9	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰白色	微 砂	口縁部1/8
222	須恵器	杯 身	11.0	—	3.8	ヘラケズリ	灰白色	微 砂	口縁部1/2
223	須恵器	杯 蓋	12.0	—	4.0	つまみ・カキメ	灰 色	砂 礫	完形
224	須恵器	杯 蓋	—	—	—	扁平つまみ・カキメ	灰褐色	砂 礫	端部欠
225	須恵器	杯 蓋	—	—	—	扁平つまみ・カキメ	灰 色	砂 粒	つまみ
226	須恵器	有蓋高杯	13.5	14.7	16.2	脚柱部に 2 個 1 単位の透かし 3 対	灰白色	微 砂	杯部2/3
227	須恵器	高 杯	14.0	—	—	立ち上がり 10mm・カキメ	灰 色	微 砂	杯部1/2
228	須恵器	高 杯	—	14.0	—	長脚二段透かし・交互	暗灰色	微 砂	胴部

矢部堀越遺跡

229	須恵器	高杯	—	—	—	長脚二段透かし・交互	灰色	微砂	脚部1/2
230	須恵器	高杯	—	15.2	—	脚柱部にカキメと1条の沈線	灰白色	砂粒	脚裾部1/9欠
231	須恵器	甕	20.0	—	—	タタキ・カキメ	灰白色	砂粒	1/4残
232	須恵器	甕	22.2	—	—	内外面ヨコナデ	灰色	微砂	口縁部1/8
233	須恵器	蓋?	—	—	—	カキメ・タタキ・ひずみ大	灰色	微砂	1/3
234	須恵器	器台	—	17.0	—	ヨコナデ・ヨコハケ	灰白色	砂礫	台部1/3
235	須恵器	甕	32.0	13.6	25.5	タタキ・棒状の底	灰色	砂礫	1/3
236	土師器	甕	24.0	—	—	ハケメ	灰色	砂礫	口縁部1/6
237	土師器	甕	22.0	—	—	ハケメ・ヘラケズリ	茶褐色	砂礫	口縁部1/3
238	須恵器	杯蓋	14.2	—	3.2	ヘラケズリ・ヨコハケ	灰白色	砂粒	口縁部1/6
239	須恵器	杯蓋	14.0	—	3.2	ヨコナデ	緑灰色	微砂	口縁部1/8
240	須恵器	有蓋高杯	14.6	—	4.8	ヘラケズリ・ヨコナデ	橙灰白色	砂粒	杯部1/3
241	須恵器	杯蓋	16.4	—	5	つまみ付	灰色	砂粒	完形
242	須恵器	高杯	7.6	—	2.8	ヨコナデ	灰白色	砂粒	杯部
243	須恵器	高杯	—	11.0	6.4	カキメ・ハケメ	灰色	微砂	脚部
244	須恵器	壺	5.1	—	7.7	ヘラケズリ・カキメ	青灰色	砂粒	完形
245	須恵器	壺	16.2	—	3.3	ヨコナデ	灰色	砂粒	口頸部1/6
246	須恵器	甕	19.2	—	6.2	胴部内外面タタキ	灰色	砂礫	口頸部1/4
247	須恵器	杯蓋	14.3	—	4.6	天井部に線刻	灰白色	微砂	完形
248	須恵器	杯身	11.3	—	5.8	底部ヘラケズリ 内外面ヨコナデ	明青灰色	砂粒	完形
249	須恵器	高杯	—	10.0	7.2	全面ヨコナデ	明青灰色	砂粒	脚柱部
250	須恵器	高杯	—	14.6	7.1	内外面ヨコナデ	灰色	砂粒	脚部
251	須恵器	壺	12.6	—	7.7	内外面ヨコナデ	明灰色	石粒	頸部1/6
252	須恵器	台付き壺	—	12.8	3.4	ヨコナデ・カキメ	明青灰色	砂粒	台部

矢部堀越遺跡

253	須恵器	杯身	13.0	—	—	内外面ヨコナデ	灰白色	微砂	口縁部1/10
254	須恵器	高杯	—	9.9	—	脚柱部に1条の沈線	浅黄色	砂粒	脚部
255	土師器	甕	22.6	—	—	外面ヨコナデ、ハケメ 内面ヨコナデ	浅黄橙色	砂粒	口縁部1/8
256	須恵器	杯蓋	15.0	—	4.4	外面ヘラオコン、ヘラケズリ、 ヨコナデ 内面ヨコナデ、ナデ	灰色	砂粒	口縁部1/6
257	須恵器	杯蓋	8.4	—	4.0	ヘラオコン、ヨコナデ	灰色	砂粒少	1/2
258	須恵器	杯蓋	12.0	—	3.0	ヘラケズリ・ヨコナデ	灰褐色	砂礫	1/3
259	須恵器	杯蓋	—	—	—	宝珠つまみ	灰褐色	砂礫	つまみ
260	須恵器	杯蓋	20.0	—	—	かえり	灰白色	砂礫	1/4
261	須恵器	杯蓋	11.0	—	—	かえり	灰白色	砂礫	1/4
262	須恵器	杯身	12.0	—	—	立ち上がり内傾	暗灰色	砂粒	細片
263	須恵器	杯身	12.0	—	—	立ち上がり内傾	赤色	砂礫	細片
264	須恵器	高杯	16.0	—	—	カキメ	赤色	砂粒	細片
265	須恵器	高杯	—	9.6	—	八の字脚	黄白色	粘土	脚部1/4
266	須恵器	高杯	—	10.2	—	ヨコナデ・シボリメ	灰白色	砂粒	脚部
267	須恵器	甕	—	—	—	波状文	灰褐色	砂粒	口縁部細片
268	土師器	甑	22.0	—	—	把手さし込み孔	茶褐色	砂粒	1/6
269	須恵器	鉢	11.6	—	8.7	中央に円孔1・沈線2本	灰褐色	砂礫	1/2
270	須恵器	家型陶棺	—	—	—	ナデ	灰白色	砂礫	細片
271	土師器	碗	14.0	5.6	4.2	体部に段有・高台有	黄白色	砂礫	復元完形
272	土師器	碗	14.4	6.0	4.7	段無・高台有	褐色	砂礫	復元完形
273	土師器	碗	14.0	5.6	4.5	段有・高台有	淡褐色	砂礫	2/3完
274	瓦器	鍋	36.0	—	—	蓋受け部有	黒灰色	砂礫	1/10以下
275	青磁	碗	—	4.2	—	見込みに蓮花文	緑色	磁粉	高台部のみ
276	土師器	碗	14.0	—	—	指オサエ	褐色	砂粒	口縁部1/6

矢部堀越遺跡

277	土師器	碗	—	6.0	—	薄い高台	淡褐色	砂粒	高台全
278	土師器	碗	—	6.4	—	やや厚い高台	暗褐色	砂粒	高台全
279	土師器	小皿	7.0	4.6	1.4	ヘラオコシ	淡褐色	砂礫	完形
280	土師器	小皿	7.8	4.7	1.3	回転糸切り	白色	砂礫	完形
281	土師器	小皿	8.0	4.8	1.4	回転糸切り	赤色	砂礫	完形
282	土師器	小皿	7.8	4.8	1.4	回転糸切り	桃色	砂礫	完形
283	土師器	鍋	42.0	—	—	内外ともハケメ	暗褐色	砂礫	口縁部1/5
284	須恵器	杯蓋	19.4	—	—	かえりなし	灰白色	砂礫	1/10
285	須恵器	杯身	16.0	8.6	6.2	高台	灰白色	砂礫	1/5
286	須恵器	高台付壺	—	10.6	—	高台	灰色	砂礫	細片
287	須恵器	高台付壺	—	10.6	—	高台	灰色	砂礫	細片
288	須恵器	壺	—	12.0	—	平底	灰色	砂礫	細片
289		平瓦	—	—	—	布目	灰色	砂礫	1/10
290		平瓦	—	—	—	布目・縄目	灰黒色	砂礫	細片
291	須恵器	杯	—	8.0	—	高台付	灰黒色	砂礫	口縁部1/5
292		平瓦	—	—	—	縄目叩き	灰褐色	砂礫	隅部片
293		平瓦	—	—	—	縄目叩き	暗灰色	砂礫	隅部片
294		丸瓦	—	—	—	裏面布目	黒褐色	砂礫	段部片
295		丸瓦	—	—	—	裏面布目	淡灰色	砂礫	段部片
296		軒平瓦	—	—	—	三つ巴文	黒褐色	砂礫	細片
297	土師器	碗	13.6	5.8	4.2	段無・高台有	淡褐色	砂礫	1/2残
298	土師器	碗	14.0	5.8	4.6	段有・高台有・ひずみ大	黄白色	砂礫	復元完形
299	土師器	こね鉢	—	—	—	片口有	褐色	砂礫	1/10
300	土師器	碗	15.0	6.1	6.2	ヨコナデ・ヘラオコシ	灰白色	微砂	高台部完

矢部堀越遺跡

301	土師器	碗	14.0	6.8	3.8	高台有・体部に段	桃色	砂	礫	1/3
302	土師器	碗	14.0	5.2	4.5	高台有・体部に段	暗褐色	砂	礫	1/3
303	土師器	碗	—	5.8	—	高台重ね焼きの跡	黄白色	砂	礫	1/5
304	瓦器	小皿	8.8	5.8	1.9	ヨコナデ・ユビオサエ	灰色	微砂		1/4
305	土師器	小皿	7.4	5.2	1.4	ヨコナデ・ヘラケズリ	灰白色	微砂		1/2
306	土師器	小皿	7.0	5.5	1.4	ヨコナデ	黄白色	砂	礫	口縁部1/4
307	土師器	小皿	8.2	6.4	1.5	糸切り・板状圧痕	黄褐色	砂	粒	ほぼ完形
308	青磁	小皿	10.0	4.0	2.0	見込みに文様・口はげ	緑色	磁粉		1/6
309	青磁	小皿	—	—	—	見込みに圏線	緑色	灰褐色		細片
310	青磁	碗	—	—	5.5	内外面にクシ文様	緑色	灰色		細片
311	白磁	碗	—	—	—	外面にクシ文様	白色	白色		細片
312	白磁	碗	—	—	—	見込みに圏線	白色	白色		細片
313	白磁	碗	—	—	—	玉縁	白色	白色		細片
314	白磁	碗	—	3.9	—	削り出し高台	白色	白色		細片
315	土師器	甕	—	—	—	内外面ハケメ	褐灰色	砂	粒	口頸部1/8
316	土師器	竈	—	—	—	つば幅2cm以上	茶褐色	砂	礫	細片 1/8
317	土師器	鍋	—	—	—	内外面ハケメ	明褐灰色	砂	粒	口頸部1/8
318	土師器	鍋	36.0	—	—	ハケメ	黒褐色	砂	粒	口縁部1/6
319	土師器	鍋	37.0	—	—	内外ともハケメ	褐色	砂	礫	1/10
320	土師器	甕	32.0	—	—	ユビオサエ・ハケメ	茶褐色	砂	礫	1/1
321	土師器	羽釜	22.0	—	—	羽幅1cm	淡褐色	砂	礫	口縁部細片
322	須恵器	鉢	30.0	—	—	口縁端上方に立ち上がる	灰色	砂	礫	細片
323	備前焼	摺り鉢	29.2	—	6.1	内面に5条1単位のタテハケ	淡赤色	砂	粒	細片

矢部堀越遺跡

表-7 土製品一覧表

図	番号	遺物	出土区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備考	時期
38	C 1	球形	1区	K 101	土器	20	20	20	7.4	完形	弥生中
46	C 2	土錘	5区	T-1	"	65	35	13	73.6	完形	弥生中
46	C 3	分銅形	5区	包含層	"	58	72	13	52.1	下半部	弥生中
64	C 4	羽口	1区	H 104	"	78	59	25	205.4	先端部片	古墳後
69	C 5	鳥形	6区	包含層	"	72	39	31	92.4	一部欠	古墳?
78	C 6	硯	4区	包含層	"	90	66	17	79.7	陸の一部残	中世

表-8 石器一覧表

図	実測 番号	遺物	出土区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備考	写真
	1	スクレイパー	1-1	H 101	サヌカイト	-43.0	-43.0	5.0	13.00	II	
	2	不明石器	"	H 102	"	31.0	-23.0	7.0	5.81		
	3	スクレイパー片?	"	H 103	"	-31.5-	-22.5	5.5	4.32	I	
	4	石器片	"	"	"	-15.0-	-27.0	7.5	2.90		
	5	不明石器	1-2	H 104	"	34.0-	-23.0	8.0	5.06		
	6	石鏃	1-3	H 106	"	-23.5-	21.0	6.0	3.06		
	7	不明石器	"	"	"	44.0	-22.0	5.0	4.34		
	8	スクレイパー	1-4	H 108	"	-42.0-	39.0	12.0	23.18	I b	
	9	スクレイパー片	1-2	K 102	"	-32.0-	-29.0	5.5	4.87	I	
	10	スクレイパー	"	"	"	92.0	76.5	9.0	72.11	II	
	11	R. F.	"	"	"	45.0	36.0	11.0	16.11		
S29	12	石鏃	1-4	K 107	"	30.0-	10.0	3.0	0.94	IV b	○
	13	石鏃片	"	K 108	"	19.0-	-8.0	2.0	0.43		

矢部堀越遺跡

	14	スクレイパー片	1-4	K 108	サヌカイト	-25.0-	-27.0	7.0	3.38	I	
	15	不明石器	1-4	K 111	"	-26.0	29.5	7.0	6.36		
S 30	16	石 鏃	1-2	P 105	"	30.0	10.5	5.0	1.46	I ほぼ完	○
	17	打製石胞丁	1-1	P 117	"	27.0-	42.0	7.0	10.56	袂部残	
S 11	18	不明石器	1-2	P 120	"	47.0	31.0	15.0	19.24	ほぼ完 側縁に敲き潰し	○
S 7	19	石 鏃	1-1	P 122	"	-30.5	-19.0	4.3	1.36	II c	×
S 36	20	打製石胞丁	1-2	P 159	"	62.5-	-47.0	9.0	17.41	表裏面に使用痕 I b	×
	21	スクレイパー	1-3	P 197、P 194	"	-25.0-	-33.0	7.5	7.75	I 小片	
S 8	22	石 鏃	1-4	P 1110	"	19.5	15.0	2.7	0.61	I b ほぼ完	○
	23	R. F.	"	P 1122	"	42.0	28.0	6.0	7.82		
S 13	24	スクレイパー	"	P 1134	"	104.0	56.5	16.5	75.99	I a	○
S 32	25	石 鏃	1-1	D 111	"	-35.5	-17.0	5.0	2.28	II a	○
	26	スクレイパー	1-2	D 116	"	-54.0	-32.0	7.0	11.95	I	
	27	石器片	"	"	"	-30.0	31.0	6.0	6.82	I	
	28	石 鏃	1-3	D 124	"	-19.5-	16.0	2.0	0.55		
S 61	29	砥 石	1-2	H 104	半花崗岩	-97.0	59.0	39.0	388.02		×
	30	石器片	1-1N	黒色土	サヌカイト	-21.5	-33.5	4.5	3.74		
	31	打製石胞丁	"	"	"	-32.5-	49.0	8.0	19.39	表裏面に磨耗痕 I ?	
	32	楔	"	"	"	36.0	23.0	6.0	6.48	II 完に近い	
	33	スクレイパー	"	黒色土	"	-53.0-	-35.5	6.0	8.72	II	
	34	スクレイパー	"	"	"	-31.0-	-33.0	6.0	7.10	背部?	
	35	U. F.	1-1S	黒色土	"	-34.5-	25.0	4.5	4.01		
S 5	36	不明石器	"	"	"	52.5	19.0	12.5	10.85	完 角錐状石器未製品?	○
	37	石器片	"	"	"	-18.5	34.0	7.0	4.90		

矢部堀越遺跡

	38	石 鏃	1-1	黒色土	サヌカ イト	32.0	19.0	5.0	2.64	I a	ほぼ完	
	39	スクレイパ ー or 打製 石庖丁	"	側 溝	"	-17.0	31.0	6.0	3.42	I b		
	40	不明石器	"	"	"	-31.0	33.0	6.5	6.02			
	41	"	"	"	"	37.0	13.0	10.0	5.28	完		
	42	残 核	"	"	"	31.0	37.0	7.0	10.58	ほぼ完		
	43	石 鏃	"	"	"	-23.5	19.0	3.0	1.78	I a	先端を欠く	
	44	"	"	"	"	27.0	16.0	4.0	1.93	Ⅲ、未製品か やや欠		
	45	石 器 片	"	"	"	-24.0-	22.5	5.5	3.06			
	46	スクレイ パー片	"	"	"	-32.0-	-35.5	10.5	10.17	I、背自然面		
	47	石 器 片	"	"	"	-21.0	15.0	3.5	1.24	鏃未製品?		
	48	U. F.	"	"	"	-35.0	41.0	5.0	7.80			
S 12	49	"	"	"	"	58.0	23.3	7.5	8.91	ほぼ完		×
	50	石 鏃	1-2N	黒色土	"	28.5	20.0-	5.0	2.49	ほぼ完		
	51	不明石器	"	"	"	-24.0	15.5	7.0	2.30			
	52	スクレイ パー	"	"	"	60.0-	51.0	12.5	37.64	Ⅱ a		
	53	残 核	"	"	"	27.0	30.0	14.0	16.56	ほぼ完		
	54	打製石庖 丁片	"	"	"	-30.0-	-27.0	9.0	3.66	表裏面に磨耗 痕刃部小片		
	55	R. F.	"	"	"	23.0-	30.0	6.0	4.55			
	56	石 器 片	1-2S	"	"	-14.0-	-43.0	8.0	5.98	小片、スクレ イパー背部?		
	57	不明石器 片	"	"	"	-21.0-	34.0	7.0	5.45			
	58	残 核	"	"	"	26.0-	-65.0	11.0	12.93			
S 40	59	打製石庖 丁	"	"	"	112.0	52.5	7.0	49.83	表面に光沢 ほぼ完		×
	60	スクレイ パー	"	"	"	-52.0-	-32.5	10.0	15.12	I a		
	61	U. F.	1-2	"	"	56.5	15.0	6.0	5.89	ほぼ完		



矢部堀越遺跡

	62	石 鏃	1-2	黒色土	サヌカ イト	26.5	11.0	4.0	0.98	Ⅱ a ほぼ完 未製品かも?	
S 53	63	スクレイ パー	"		"	68.0	44.5	8.4	24.72	Ⅱ a ほぼ完	○
	64	石 庖 丁	"		"	-38.0-	60.0	11.0	29.73	表裏面磨耗	
	65	石 器 片	"		"	-45.0-	27.0-	13.0	11.21		
	66	不明石器	"		"	25.0-	23.5	6.0	4.20		
	67	石 器 片	"		"	-19.0-	-14.0	5.0	2.01		
	68	不明石器	"		"	84.5	77.0	16.0	127.81	スクレイパーの 刃部欠損か、背部 潰し	
	69	スクレイ パー	"		"	30.5	-20.5	6.5	3.51	Ⅱ	
	70	U. F.	"		"	-54.0	34.5-	12.0	14.71		
	71	"	"		"	24.0	17.0-	4.0	1.73		
	72	スクレイ パー	"		"	53.0-	-30.0	4.0	6.43	Ⅱ	
	73	石 鏃	"		"	-20.0	17.5	5.5	1.80	I a	
	74	U. F.	"		"	57.5	33.0	7.0	11.53	ほぼ完	
	75	スクレイ パー	"		"	-50.5	30.5	6.0	11.00	I b	
S 50	76	スクレイ パー	"		"	-92.0	42.5	11.0	26.69	I a	○
S 3	77	尖 頭 器	"		"	-56.7	24.8	10.2	16.57		○
S 2	78	"	"		"	22.6-	-22.9-	7.5	3.15	先端のみ	○
	79	尖頭器 or 石槍状石器	"		"	41.5	29.0	10.0	10.16		
S 56	80	石槍状石 器	"		"	-38.5-	32.0	9.0	14.55		×
	81	"	"		"	-26.0-	27.0	5.5	5.15		
	82	"	"		"	-29.0-	27.0	8.5	9.18		
	83	不明石器	"		"	-18.0-	34.0	8.0	6.85		
S 42	84	石 庖 丁	1-3N	黒色土	"	47.5	72.0	9.0	35.69	折損面を敲打、表 裏やき磨耗、スク レイパーに転用	×
	85	U. F.	"	"	"	-25.5-	33.0	4.5	4.06		

矢部畑越遺跡

	86	U. F.	1-3N	黒色土	サヌカ イト	-21.0	31.0	6.0	3.73		
	87	スクレイ パー	"	"	"	32.0-	-34.0	7.0	8.12	II	
	88	"	"	"	"						
	89	U. F.	"	"	"	44.0	40.0-	5.0	7.05		
	90	石 鏃 ?	"	"	"	-24.0-	-15.0	4.0	1.00		
	91	スクレイ パー	"	"	"	-54.0	50.0	11.0	27.69	I b	
	92	R. F.	"		"	54.0	32.0	9.5	16.72	ほぼ完	
	93	石 器 片	"		"	-28.0-	30.0	6.0	6.27		
	94	"	"		"	-27.0-	47.0	6.0	8.03		
	95	スクレイ パー	1-3		"	-50.0-	45.5	9.0	21.72	I b	
	96	石 器 片	"		"	-17.5	25.5	5.0	2.78		
	97	石 鏃	"		"	-22.0	17.0-	4.50	1.34	II a	
	98	石 器 片	"		"	25.0-	32.0	10.0	8.87		
	99	U. F.	"		"	-47.5	31.0	5.0	7.47		
	100	"	"		"	-26.5	22.5	3.5	2.23		
	101	打製石庖 丁背部	1-3N	排 土	"	-43.0-	-43.5	14.5	25.85		
	102	砥石小片	1-4	pit内出土 かP-110、 122、118、 124、125 の袋の中 にあった	?	-28.0-	-13.0-	0.2	1.19		
	103	U. F.	1-4N		サヌカ イト	19.0	19.0	0.2	0.73	完	
	104	石 器 片	"		"	-24.0-	17.0	4.5	1.98	小片	
	105	砥 石 ?	"		?	-47.0	-44.0	-4.0-	8.18		
	106	スクレイ パー	"		サヌカ イト	-37.0-	57.0	6.5	16.06	I b	
	107	石 器 片	"		"	-28.0-	34.0	6.5	5.31		
	108	不明石器	1-4中		"	32.0-	24.0	5.5	4.81		

矢部堀越遺跡

	109	石 鏃	1-4S	黒色土	サヌカ イト	18.0-	10.5	3.0	0.40	I ほぼ完	
	110	スクレイパ ー or 石庖 丁	"		"	-44.0	50.0	7.5	23.00	I b	
	111	尖頭器?	"		"	-44.0	31.0	10.0	11.00		
	112	不明石器	"		"	-31.0	33.0	6.5	6.63		
	113	打製石庖 丁片	"		"	-36.0-	-30.5	4.0-	3.93	表面のみ 光沢あり	
	114	U. F.	"		"	32.0	24.5	4.0	3.48	完	
	115	スクレイ パー	"		"	-56.5	52.0	9.0	29.94	I a	
	116	不明石器	"		"	-27.0-	26.0	4.5	3.68		
	117	石 器 片	"		"	-28.5	20.0	4.5	2.08	鏃未製品?	
	118	U. F.	"		"	30.5	25.5	4.0	2.62	完	
	119	打製石庖 丁	"		"	-44.0-	56.0	9.5	22.72	表面刃部磨耗	
	120	スクレイ パー?	"		"	-33.5-	37.0	8.0	10.28	I a	
	121	R. F.	"		"	-21.5-	19.5	3.0	1.08		
	122	打製石庖 丁片	"		"	-25.5-	-15.5	2.5-	1.31	表面のみ光沢 あり	
	123	石 鏃	"		"	-30.5-	14.5	6.5	2.28	IV b	
	124	槍	"		"	-24.0	24.5	6.0	3.56		
	125	打製石庖 丁片	1-4		"	-25.0	23.5	4.0-	2.05	表面のみ、光 沢あり	
	126	石 器 片	1区北		"	-21.0-	15.5	2.0	0.88	鏃未製品?	
S 31	127	鏃	2 区 中 段	D 204	"	17.5	14.0	3.2	0.65	I ほぼ完	
S 9	128	石 匙	"	"	"	43.0	59.5	9.0	16.70	II ほぼ完	
S 44	129	打製石庖 丁	"	"	"	-61.0	47.0	13.0	51.93	使用痕有	×
	130	石 鏃	"	"	"	-33.0	18.0	3.5	2.24	II a 完に近い	
	131	"	"		"	42.5	13.5	5.0	3.00	III 完	
	132	"	2 区	包含層	"	-12.0	15.0	3.5	0.59	II a ?	

矢部堀越遺跡

	133	石 鏃	2 区		サヌカ イト	-15.5	13.5	2.5	0.32	Ⅱ d 先端をや や欠く	
	134	スクレイ パー	3 区	H 312	"	90.0-	40.0	9.0	36.34	I b ほぼ完	
S15	135	スクレイ パー片	"	"	"	-22.5-	-18.5	5.0	1.51	I	○
	136	不明石器	"	H 315	"	-48.0	32.0	8.0	13.90		
	137	石 器 片	"	"	"	-20.5	21.0	5.5	2.17		
	138	R. F.	"	"	"	-33.5-	27.0	6.5	5.23		
	139	スクレイ パー	"	"	"	-20.5-	26.0	6.5	3.90	I b	
	140	不明石器	"	"	"	26.5	18.0	4.0	2.00	小型	
	141	"	"	"	"	-28.5	29.0	4.5	4.66		
	142	石 器 片	"	"	"	-31.5-	14.5-	5.0	2.85	スクレイパー の背部か小片	
	143	"	"	"	"	-22.0-	-22.5	4.5	1.67		
	144	石 器 片	"	"	"	-13.5	12.5	3.0	0.63	鏃?	
	145	"	"	"	"	-11.5	17.0	3.0	0.55	鏃未製品片?	
	146	R. F.	"	"	"	-35.0-	-27.5	5.0	5.33		
	147	石 器 片	"	"	"	-13.5-	-12.5	2.0	0.35	鏃? 小片	
S19	148	不明石器	"	"	"	52.1	25.8	9.8	17.26	ほぼ完	○
	149	U. F.	"	"	"	33.5	20.5	4.0	2.46		
	150	"	"	"	"	14.0-	22.0	2.5	0.74		
	151	石 器 片	3 区 3 A		"	-22.0-	-11.5	3.0	0.76	小片	
	152	石 鏃	3 区 4 A		"	33.5	-16.5	3.0	1.75	I ほぼ完	
	153	R. F.	"		"	-32.5	-52.0	9.0	13.61		
S16	154	扁平片刃 石斧	"		緑色片 岩	96.0	28.6	12.9	63.41	ほぼ完	○
S49	155	スクレイ パー	"		サヌカ イト	90.0	45.5	10.0	35.86	I a 使用痕あ り光沢	×
	156	石器片 or 残核	"		"	37.0-	39.0-	7.5	10.53		

矢部堀越遺跡

S18	157	大型打製石庖丁	3区 4 A		サヌカイト	187.5	145.5	25.0	610.37	ほぼ完	○
S17	158	打製石庖丁	"		"	77.0	37.5	10.0	40.41	完表裏若干の磨耗痕	○
	159	U. F.	"		"	64.0-	43.5	6.0	15.51		
	160	石器片	"		"	-22.5-	23.0	4.0	2.35		
	161	石器片or 残核	"		"	49.0	22.0	6.0	7.34		
	162	U. F.	"		"	-38.0	-27.0	4.0	4.30		
	163	砥石	3区	P 303	粘板岩	-48.0-	-39.0-	4.0	10.28		
	164	石 鏃	"	排土	サヌカイト	17.00-	-12.5-	3.5	0.55	II	
	165	スクレイパー	4区	K 407	"	-27.5-	57.5	11.5	18.05	I b	
	166	石器片	"	P 4101	"	-17.5	-12.5	2.5	0.42	鏃未製品?	
	167	石庖丁片	"	P 4102	"	33.5-	-30.0	5.5	6.17	袂部残	
S34	168	石 錐	"	P 4119	"	-52.5	28.2	7.3	10.19		○
	169	不明石器	"	D 402	"	31.5	28.0-	6.0	5.40		
	170	U. F.	"	"	"	-53.0	28.0	4.5	6.53		
	171	石器片	"	D 409	"	32.5	19.5-	7.5	4.23		
	172	打製石庖丁	"	D 411	"	-30.0	-37.0	6.5	6.45	袂部残	
	173	"	"	D 412	"	-20.5	-34.5	5.0	5.01	"	
	174	石器片	"	凹-1	"	-21.5	-21.5	2.5	1.66		
S 1	175	角錐状石器	4区上 段 南		"	-94.8-	23.0	15.6	28.83		○
S41	176	打製石庖丁	"		"	73.0-	-60.0	10.0	47.50	使用痕有	×
	177	スクレイパー	"		"	82.0-	74.5	15.5	108.64	I a	
	178	"	"		"	-51.5-	51.0	13.0	33.19		
	179	不明石器	"		"	-51.5-	38.5	9.0	26.22	残核の可能性もあり	
	180	石器片	"		"	-34.0	-28.0	4.0	4.59		

矢部堀越遺跡

	181	不明石器片	4区上段南		サヌカイト	-25.0	25.5	18.0	5.03		
	182	石器片	"		"	-10.5-	-23.0	5.5	1.38	小片	
	183	"	"		"	-17.0-	19.5	8.0	2.73	"	
	184	スクレイパー	"		"	72.5	54.0	8.0	25.03	I a	
	185	スクレイパー	"		"	-19.5-	31.0	6.0	5.49	欠、楔の可能性あり	
	186	U. F.	"		"	-13.0-	34.0	5.0	1.85		
S 45	187	打製石庖丁	"		"	-56.0	42.0-	13.4	37.03	使用痕有	×
	188	スクレイパー	"		"	53.5	-36.0	8.0	15.28	II	
	189	スクレイパー	"		"	18.0-	-44.0	5.5	4.07	I 小片	
	190	石器片	"		"	-16.0-	-27.5	3.5	1.87		
	191	"	"		"	-19.0-	11.0-	3.0	0.58	鍛未製品か?	
	192	スクレイパー?	"		"	-41.5-	41.0	6.0	11.99	I b?	
	193	U. F.	"		"	23.5	15.5	5.5	1.44	ほぼ完	
	194	スクレイパー	"		"	-35.5	38.0	8.0	14.11	I a	
	195	スクレイパー	"		"	48.5-	37.5-	8.0	18.17		
	196	石器片	"		"	36.0-	30.5-	6.0	10.12		
	197	石 鏃	"		"	26.0	17.5-	5.0	1.93	I a やや欠	
	198	U. F.	"		"	-130.0-	82.0	12.0	98.37		
	199	石 鏃	"		"	30.0-	18.0-	5.0	1.84	II a	
	200	残核?	"		"	-38.0	53.0	12.0	34.42		
	201	残核?	"		"	28.0	-41.0	9.5	13.35		
	202	石器片	"		"	-39.0-	23.5	5.0	5.49		
	203	"	"		"	-17.5-	25.0-	5.0	2.52		
	204	"	"		"	-33.5	23.0-	7.0	3.55		

矢部堀越遺跡

	205	石器片	4区上 段南		サヌカ イト	-15.5	22.0	5.5	1.89		
	206	F. U.	"		"	-47.0	38.0	12.0	16.09		
	207	石器片	"		"	-34.5-	-28.0	5.5	4.72	大型鏃?	
	208	石 鏃	"		"	38.5	-16.5	5.0	1.81	II b、脚の一 方を欠く	
	209	"	4 区 中 段		"	-26.0	16.5	2.5	0.86	II a、ほぼ完	
S10	210	石 匙	"		"	29.0	-49.0	6.3	6.96	II ほぼ完	○
	211	打製石庖 丁	"		"	-45.0-	40.5	5.5	11.69	表面光沢あり	
	212	石器片	"		"	-28.5-	19.5	4.0	2.59	鏃未製品?	
	213	石器片	"		"	-27.0	28.0	5.0	4.89		
	214	スクレイ パー	4 区 下 段		"	-38.5-	35.5	6.0	7.77	I b.	
	215	石槍状石 器?	"		"	-56.5	35.5	11.0	25.86		
	216	石器片	"		"	-23.0-	24.5	5.0	3.07		
	217	"	"		"	-33.5	29.0-	8.0	8.38		
	218	石 鏃	"		"	-12.5	-17.0	4.5	0.98	I a	
	219	U. F.	4区北		玉 髓	33.0	26.0	6.0	5.55		
	220	打製石庖 丁?	4区?		サヌカ イト	-83.0-	56.0	12.0	72.39		
	221	スクレイ パー	4区北		"	49.0-	26.0	8.0	9.59	II b	
	222	打製石庖 丁	1-4	P 1122	"	-51.0	49.5-	12.0	26.35	袂部残	
	223	スクレイ パー?	1-4N		"	-30.0-	-32.2	6.0	3.88	II	
	224	石器片	5 区	H 502	"	-24.5	21.5	2.5	1.32	鏃未製品?	
	225	石器片	"	"	"	-20.0-	24.0	3.0	2.15	鏃未製品?	
	226	U. F.	"	K 502	"	22.0	20.5	4.0	1.87	ほぼ完	
S38	227	砥 石	"	H 502	頁 岩	84.0-	-41.5	12.5-	36.36		×
	228	石器片	"	D 502	サヌカ イト	-26.0	-29.0	3.5	2.88		

矢部堀越遺跡

	229	打製石庖丁	5区	D 502	サヌカイト	-40.0-	-42.0	8.5	22.80	表裏に磨耗痕 表面に光沢	
	230	U. F.	"	"	"	46.0	34.5	9.0	18.04	ほぼ完	
	231	楔形石器	"	D 516	"	43.0	45.0	9.5	18.04		
	232	残核	"	"	"	32.0	36.0	15.5	27.89	ほぼ完	
S37	233	残核	"	D 521	砂岩	124.5	123.0	41.5	935.68	Ⅱ裏面に磨痕 完	○
S6	234	石鏃	"	D 526	サヌカイト	-33.0	25.5	3.3	2.06	Ⅱcほぼ完	○
S60	235	残核	"	T-2	"	42.0-	48.5	17.0	46.33	楔の可能性あり	○
S14	236	スクレイパー	"	"	"	82.0	60.0	20.0	107.22	Ia	×
S47	237	打製石庖丁	"	T-3	"	17.5-	-32.5-	4.8	2.90	小型、光沢あり	×
	238	敲石and 磨石	"	"	花崗岩	86.0-	95.0	40.5	451.87	Ⅱ	
	239	楔形石器	"	淡暗褐色層	サヌカイト	27.5	31.0	7.0	8.10		
	240	U. F.	"	淡暗褐色	"	27.0-	23.0	4.5	3.12		
	241	石鏃未製品	5区東南隅	黄灰褐色土	"	-22.0	17.0-	2.5	1.23		
	242	石槍状石器	"	"	"	-38.0	19.5	5.0	3.90	小型	
	243	不明石器	"	"	"	37.0	-23.5	4.5	4.98		
	244	石器片	"	"	"	-27.5	-25.0	5.5	3.86		
	245	不明石器	5区	黒褐色土	"	37.5-	32.0	5.0	6.83		
	246	打製石庖丁	5区東南	"	"	-60.0	49.5	10.0	28.77	抉り部残	
S54	247	大型蛤刃石斧	"	"	細粒閃緑石	198.5	72.0	57.5	1230.37		○
S58	248	敲石	5区		安山岩	114.5	98.0	40.5	705.13	Ⅱ、凹石的完	×
	249	石器片	"		サヌカイト	-26.0-	39.5	5.5	7.29	楔?	
	250	鏃未製品	"		"	27.5	18.5	3.0	1.28		
S43	251	打製石庖丁	"	暗灰褐色砂	凝灰岩	61.0-	53.0	12.4	52.32	約1/2残	○
S46	252	打製石庖丁	"	黄灰褐色土	サヌカイト	61.0-	34.5	8.0	20.30	小型、表裏面珪酸付着、約2/3残	×



矢部堀越遺跡

	253	スクレイパー	5 区	D 517	サヌカイト	43.5	-26.5	5.0	7.47	I	
	254	不明石器	"	T-2	"	-23.0	-22.0	4.0	2.66		
	255	スクレイパー	"	T-4	"	39.0-	-28.0	7.0	6.18	II a	
	256	石器片	"	"	"	-24.5-	28.5-	4.5	4.47		
	257	スクレイパー	"	暗灰褐色土	"	-44.5-	-53.5	6.5	15.54	I	
	258	石器片	"	"	"	-35.5	33.0	9.5	13.25		
	259	U. F.	5 区 東 南	暗灰色砂	"	-26.0	22.5	4.0	1.99		
	260	石 鏃	5 区	表 採	"	26.5	12.5-	3.0	0.88	II a	
S 22	261	石 鏃	6 区	H 616	"	-16.5	11.5-	1.8	0.34	II a	○
S 24	262	石槍状石器	"	"	"	-59.3-	32.8	9.4	21.54		○
	263	スクレイパー?	"	"	"	-40.5-	37.5	6.0	9.49	I b	
	264	スクレイパー?	"	"	"	50.5	32.5	14.0	17.94	I a	
	265	石器片	"	"	"	22.5-	11.0-	6.0	1.03		
	266	"	"	"	"	-18.0-	-25.0	9.0	3.57		
	267	U. F.	"	"	"	34.5	-20.5	3.0	2.60		
S 27	268	石 鏃	8 区	H 817	"	-22.0	15.0	3.3	1.29		○
	269	打製石庖丁片	7 区	H 718	"	-15.0-	-31.0	6.0	2.60	小片 表面光沢	
S 33	270	石錐頭部	6 区	P 601	"	-28.8-	24.3-	6.5	3.35		×
	271	石錐?	7 区	D 701	"	28.5-	8.5-	3.5	0.84		
	272	石器片	"	"	"	-33.0-	-34.0	5.0	5.27		
	273	石 鏃	"	"	"	-13.0-	-13.0	2.0	0.33	小片	
	274	不明石器	"	"	"	-17.0	-12.0	3.5	0.73		
	275	打製石庖丁	"	"	"	58.5-	40.0	10.0	28.22	約1/2残 抉り部残	
S 35	276	"	"	"	"	-34.0	48.0	8.6	13.28		×

矢部堀越遺跡

	277	打製石庖丁	7区	D 701	サヌカイト	-33.5-	50.0	10.0	16.69	両端を欠く	
	278	打製石庖丁	6区	古道上 手1層	"	-45.0-	37.0	13.0	11.44	表裏面刃部付 近磨耗光沢	
	279	打製石庖丁	"	古道	"	-60.5-	52.5	7.5	34.19	両端を欠く	
	280	スクレイパー	"	古道上 下層	"	-27.0-	32.0	7.0	8.08	II b	
S20	281	扁平片刃石斧	6区東 下段	H 616 下方	緑色片 岩	87.5	53.5	14.5	104.87	ほぼ完	○
	282	打製石庖丁 背部小片	6区	土手1 7層	サヌカ イト	-20.5-	16.0-	9.0	1.81	背部小片	
	283	スクレイパー	"	"	"	-22.0-	-23.5	4.0	2.24	I 小片	
	284	打製石庖丁 orスクレイパー	"	東斜面	"	-22.5	39.0	5.0	3.74	I 挟り残	
S52	285	スクレイパー	"	"	"	87.5	-61.0	10.0	52.03	I a	○
	286	スクレイパー?	6区東	"	"	-70.0	38.5	12.0	33.50	I b	
	287	石鏃未製品	"	"	"	-21.0	21.5	3.0	1.29	I a or II a? 基部調整なし	
	288	打製石庖丁	"	"	"	-28.5	-30.0	10.0	10.28	刃部片 表裏 面やや磨耗	
S51	289	スクレイパー	6区東 北端	"	"	-116.0	53.5	9.0	48.20	I b 表面使用痕有	○
	290	石器片	6区	"	"	-23.5-	24.5	4.0	3.50		
	291	石 鏃	"	排土	"	28.0	13.0	4.5	1.51	I a 完	
	292	"	"	"	"	18.0	12.5	3.0	0.53	I a ほぼ完	
	293	"	"	"	"	-14.5	14.5	2.0	0.31	II d	
	294	"	"	"	"	-13.0	15.0	3.0	0.64	II b?	
S21	295	砥 石	"	H 616	凝灰岩	-64.5	60.5	15.0	82.76		×
S23	296	石 錐	"	H 616 7層	サヌカ イト	25.1-	-14.2-	3.0	0.81		○
	297	石器片	"	"	"	-22.5-	-17.0	9.5	3.10	小片	
	298	スクレイパー	7区北	H 719	"	94.3	46.5	9.2	45.53	I a、ほぼ完	
S28	299	扁平片刃石斧	8区	H 817	安山岩	-37.5	54.5	19.5	57.36	刃部	○
S25	300	打製石庖丁	7区	H 719 上層	サヌカ イト	128.0	56.5	12.0	104.09	表裏面に珪酸 付着ほぼ完	○

矢部堀越遺跡

	301	打製石庖丁	7区	H 719	サヌカイト	41.0-	49.0	9.0	21.92	表裏面に磨耗痕抉部残	
	302	不明石器	"	P 704	"	32.7-	-17.0	2.9	1.78	鏃未製品片?	
	303	スクレイパー	"	D 701	"	-77.3-	55.0	7.3	32.69	I b	
	304	楔形石器	7区北	"	"	-31.8	25.7	11.0	7.64	?	
	305	石 鏃	7区	D 702	"	-13.5	-12.7	3.2	0.45	I a	
	306	R. F.	7区北	"	"	31.5-	20.5	4.0	2.30		
	307	"	7区	土手 <sup>2</sup> <sub>1層</sub>	"	-39.0-	33.6	4.7	6.41		
S59	308	楔形石器	"	土手 <sup>2</sup> <sub>3層</sub>	"	27.5	24.5	7.0	6.23	完	○
S39	309	打製石庖丁	7区南		"	106.0	52.5	14.0	68.87	表裏磨耗痕ほぼ完	×
	310	U. F.	"		"	-42.6	26.0	8.3	8.14		
	311	石器片	7区南		"	29.5	-18.7-	5.2	3.72		
	312	石 鏃	7区南		"	-21.0	-14.5	2.0	0.71	I a 若干欠く	
	313	打製石庖丁	"		"	35.7-	-21.7-	15.2	14.67	背部	
	314	石器片	"		"	-32.3-	30.0-	12.3	11.30		
	315	"	"		"	-35.5	-19.6	8.0	4.96		
	316	石 鏃	"		"	33.0	13.8	4.5	1.57	Ⅳ a 完	
	317	R. F.	"		"	42.3	25.7	4.2	3.57	完 H-11?	
	318	スクレイパー	7区北		"	37.5-	47.0	6.7	9.50	I b	
	319	石 鏃	"		"	19.7	14.7-	3.0	0.80	I a ほぼ完	
	320	"	"		"	-30.0	12.0	3.5	1.28	Ⅲ ほぼ完	
	321	R. F.	"		"	-24.6-	-26.3	2.7	1.68		
S55	322	挟入柱状片刃石斧	"		結晶片岩	-87.0	43.0	30.7	231.87	挟入	○
	323	スクレイパー	7区		サヌカイト	42.5-	-27.0	4.2	3.40	I 表裏面磨耗	
	324	"	8区	H 817	"	-35.0-	48.0	6.5	11.15	I	

矢部堀越遺跡

S 26	325	石 鏃	8 区	K 801 1層	サヌカ イト	-27.5	18.0	5.0	2.44	Ⅱ a ほぼ完	×
	326	"	"	集 石	"	-11.5	-15.0	4.0	0.64	Ⅱ a	
	327	スクレイ パー	"		"	-48.0-	31.5	8.0	9.83	I b	
S 57	328	扶入扁平 磨石	"		粘板岩	147.2	122.5	19.8	639.78	完	○
	329	砥石片	"		頁 岩	52.0	46.0	8.0	19.63		
S 48	330	打製石胞丁 未製品?	"		凝灰岩	176.5	83.5	31.8	513.44	ほぼ完	○
	331	石 鏃	"		サヌカ イト	17.0	13.5-	3.0	0.51	Ⅱ b	
	332	打製石胞 丁	9 区	P 901	"	-39.5	42.2	9.5	22.87	裏面に光沢	
	333	スクレイ パー	"	D 904 南 半	"	-42.0	55.0	6.0	16.73	I b	
	334	"	"	"	"	105.0	74.0	10.0	70.83	I b 完	
S 4	335	尖 頭 器	"	D 904 下 層	"	-60.0-	26.8	15.4	21.35		○
	336	U. F.	"	表 土	"	34.5-	26.0	6.5	3.63		
	337	"	10 区		"	114.0	78.0	18.0	124.17	完	
	338	打製石胞 丁	4 区		"	-42.5-	53.0	12.5	43.72	表裏面に磨耗 痕	
	339	スクレイ パー	"		"	-16.5-	28.0	4.0	2.75	I a	
	340	石 鏃	"		"	-16.7	14.8	2.5	0.60	ほぼ完	
	341	"	"		"	19.0	17.0	3.0	0.99	I a ほぼ完	
	342	R. F.	"		"	-31.0	19.0	3.0	1.63	鏃未製品	
	343	石 鏃	"		"	28.5	-12.5	4.0	1.19	I b ? ほぼ完	
	344	"	"		"	-21.5-	15.0	4.5	1.69		
	345	"	"		"	-33.5	23.0-	5.0	3.72	I a ?	
	346	"	"		"	-24.5	12.0	3.0	1.15	I a	

※ 計測値の“-”は、計測値を石器の正位置としてみた場合の欠損部の位置を示す。

※ 備考欄のI a、I b等は、各石器の形態分類を示す（山陽自動車道建設に伴う発掘調査5の石器形態分類を参照）

## IV. 自然科学分野における分析・鑑定

1. 倉敷市矢部古墳群A出土の人骨

池田次郎

2. 矢部古墳群B中の数基の主体部に遺存した赤色顔料の微量化学分析

安田博幸  
森 眞由美

3. 矢部古墳群Bの液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定結果報告書

山田 治

4. 矢部貝塚出土の動物遺体

金子浩昌

5. 矢部奥田遺跡（矢部貝塚）出土種子同定報告

パリノ・サーヴェイ

6. 矢部貝塚（矢部奥田遺跡）付近の地形環境

日下雅義

7. 矢部奥田遺跡・矢部古墳群A・矢部堀越遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大澤正己

## 1. 倉敷市矢部古墳群A出土の人骨

池田次郎

昭和61年度に岡山県教育委員会が実施した倉敷市矢部古墳群Aの発掘調査によって、38号墳および53号墳から人骨および人歯が検出された。

### 38号墳

大臼歯の小破片が1点発見されたが、性別、年齢は不明である。

### 53号墳

脳頭蓋、右上顎骨骨体の破片および遊離歯7本が残存する。

脳頭蓋骨の保存は悪く、頭蓋冠外板は大部分が剝離している。比較的残っているのは、後頭骨の外側部から底部、左右の側頭骨の関節窩、外耳孔付近、蝶形骨の骨体、大翼にかけての頭蓋底中央部で、それ以外に後頭骨の鱗部破片と左右の頭頂骨の後半分だけが検出された。

7本の遊離歯は、上顎の右の第2小臼歯と第1・第2大臼歯、左の中切歯、犬歯、第1小臼歯および上下左右不明の大臼歯の破片である。いずれの歯も歯冠遠心径が大きく、畿内現代人男性の平均値に一致するか、もしくはそれを上まわる。また歯冠の磨耗はかなり強い。

性の判定、年齢の推定は困難であるが、歯の大きさ、磨耗の程度から壮年男性骨と考えられるが、断定することはできない。



53号墳人骨出土状況

## 2. 矢部古墳群B中の数基の主体部に遺存した赤色顔料の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田 博幸・森 眞由美

岡山県倉敷市矢部に所在する矢部古墳群Bは、木棺直葬を主な内部主体とする古墳時代初頭期の古墳群であるが、山陽自動車道建設に伴う1988年の発掘調査で、これらの数基の主体部から、赤色顔料が検出された。

今回、それらの赤色顔料について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法<sup>1)</sup>とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、所見を得たので報告する。

### 試料の外観

試料の1～3の3種の試料は、いずれも、微量の赤色顔料にまみれて、表面の淡赤く彩られた、粘土小塊～小粒数十個よりなり、なかには、局部的に赤色顔料を留める小片もある。各試料の考古学的資料については、後出の表1に分析結果とともに表示する。

### 分析用試料の採取

試料1～3のそれぞれの試料小塊のなかで、最も赤く識別される箇所の赤色顔料部分を、網針を用いて注意深く削り取り、その5mgを分析用試料とする。

### 試料検液の作製

上記の分析用試料のそれぞれをガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加熱して酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は、試料番号にそれぞれ対応させる。

### ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B (2cm×40cm)を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン( $\text{Fe}^{3+}$ )と水銀イオン( $\text{Hg}^{2+}$ )の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上の発現するそれぞれの呈色スポットの位置(Rf値で表現する)と色調を検した。

(1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出： $\text{Hg}^{2+}$ は紫色、 $\text{Fe}^{3+}$ は紫褐色のスポットとして検出される。

(2) ジチゾンによる検出： $\text{Hg}^{2+}$ は橙色スポットとして検出され、 $\text{Fe}^{3+}$ は反応陰性のため呈色せず。

上記試料検液、ならびに、対照イオンの標準液について得られたる紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1の該当欄のとおりである。

表1 矢部古墳群B中の数基の主体部より検出された赤色顔料にかかわる考古学的資料と微量化学分析結果

試料番号	出土遺構	試料採取位置	(1) ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値(色調)	(2) ジチゾンによる呈色スポットのRf値(色調)	判定	共伴遺物	備考
試料1	18号墳(方墳)木棺真	床面の数ヶ所(7g)	0.10(紫褐色) 0.89(紫色)	0.89(橙色)	水銀朱	鉄器 1	
試料2	42号墳(方墳)木棺真	小口板と掘り方の間(20g)	0.12(紫褐色)	呈色スポット発現せず	ベンガラ	鉄器 2 ガラス小玉 1	特殊器台形ハニワ 2
試料3	43号墳(方墳)木棺真	床面の数ヶ所(9g)	0.12(紫褐色) 0.91(紫色)	0.89(橙色)	水銀朱	ガラス小玉 1	
	$\text{Fe}^{3+}$ 標準液 $\text{Hg}^{2+}$ 標準液		0.12(紫褐色) 0.89(紫色)	呈色スポット発現せず 0.89(橙色)			

#### 判定

上記の表1の結果のように、矢部古墳群B中の18号墳と43号墳の主体部木棺内の床面粘土試料片に遺存した赤色顔料の試料検液1、3から、 $\text{Hg}^{2+}$ が検出されたことから、葬送儀礼にあたって、この位置に水銀朱(辰砂、 $\text{HgS}$ )が献じられたことが確認された。一方、42号墳にかかわる試料の赤色顔料の試料検液2では $\text{Hg}^{2+}$ が検出され、 $\text{Fe}^{3+}$ が検出されただけであったことから、この部位の使用された赤色顔料は、水銀朱 $\text{HgS}$ ではなくベンガラ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )であることが明らかになった。42号墳における試料2の採取位置が、「木棺の小口板と掘り方の間」であったという表1の記載は、まことに示唆的であって、葬送儀礼において水銀朱とベンガラの位置的な使い分けのあったことを、はからずも示すことになった今回の分析結果は興味ある収穫と言えよう。

(1991年分析)

#### 註

注1 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『齊藤 忠編集 日本考古学論集1 考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp.389-407 (1986)

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならび技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集 第七』吉川弘文館 pp.449-471 (1984)



### 3. 矢部古墳群Bの液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定結果報告書

京都産業大学理学部 山田 治

測定番号	試料名・採取地	<sup>14</sup> C年代測定値 (BP)
KSU-2130	矢部古墳群、B1 木炭 (焼失住居)	1980±40

④<sup>14</sup>C年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。

(1)<sup>14</sup>Cの半減期は5568年とします。

現在知られている最も確からしい<sup>14</sup>Cの半減期は5730±30 (年) ですが、まだ完全ではありません。今までずっとLibbyの採用した半減期5568年が用いられてきているので、確実な半減期が得られるまで変更しないほうが世界全体のデータの比較のために便利です。

(2)BPはBefore Presentの略です。

ただし、PresentはAD1950年に固定しています。例えば、500BPということはAD1950年から500年前であることを意味します。

(3)測定誤差は1標準偏差です。なお、真の値が1標準偏差の中にはいる確立は68%、標準偏差の2倍幅の中には95%、3倍幅の中には99.7%が入ります。

(4)測定値には測定機関記号 (京都産業大学の場合はKSU) と測定番号をつけることになっています。データの索引や確認になくてはならないものですから、記録や引用の際には必ずこの記号と番号とをつけておいて下さい。

## 4. 矢部貝塚出土の動物遺体

金子 浩 昌

はじめに

矢部貝塚は岡山県西部を流れる足守川流域の貝塚として1953年頃にその存在が知られたが、その位置がこの流域の最奥部にあることから注目されてきた。それは貝塚の形成と関わる縄文海進の様相を確かめる上で、そしてまたその頃の人々の食糧の資源特に動物質のものがどのように獲得されているかを知る上で確かな資料を提供するであろうことが考えられたからである。1987年の調査とその後の資料の分析によってそれが疑いのない事実であることが知られ、ここにその報告をまとめることになった。筆者がこの貝塚の資料を初めて見たときから既に4年有余の年月が流れ、実際に作業を初めてからも1年余りも過ぎている。それだけ資料も多く手間もかかったのである。その間古代吉備文化財センターの山磨康平氏、古市秀治氏には種々お世話になった。厚く御礼申上げる次第である。

### 矢部貝塚出土の動物遺体種名表

I 軟体動物門	Phylum Mollusca		
a. 腹足綱	Class Gastropoda		
原始腹足目	Order Achaegastropoda	新腹足目	Order Neogastropoda
アマオブネガイ科	Family Neritidae	アケキガイ科	Family Muricidae
ヒロクチカノコガイ	<i>Dostia violacea</i>	アカニシ	<i>Rapna thomasi</i>
中腹足目	Order Mesogastropoda		
ヤマタニシ科	Family Cyclophoridae		
ヤマタニシ	<i>Cyclophorus herklosti</i>		
カワニナ科	Family Pleuroceridea		
カワニナ	<i>Semisulucospira bensoni</i>		
ウミニナ科	Family Potamididae		
カワアイ	<i>Cerithideopsilla djadjariensis</i>		
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i>		
b. 斧足綱	Class Pelecypoda		
真多歯目	Order Eutaxodontia		
フネガイ科	Family Arcidae		
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i>
貧歯目	Order Dysodontia	マルスダレガイ科	Family Veneridae
イタボガキ科	Family Osteidae	オキシジミガイ	<i>Cyclina sinensis</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
異歯目	Order Heterodontia	ナミノコガイ科	Family Donacidae
シジミガイ科	Family Corbiculidae	フジナミガイ	<i>Hiatula boeddinghausi</i>
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>	マテガイ科	Family Solenidae
フナガタガイ科	Family Trapeziidae	マテガイ	<i>Solen strictus</i>
II 節足動物門	Phylum Arthropoda		
甲殻綱	Class Crustacea		

完胸目	Order Thoracica		
フジツボ型亜目	Suborder Balanomorpha		
フジツボ科	Family Balanidae		
属・種不明	Gen.et sp.indet.		
Ⅲ 脊椎動物門	Phylum Vertebrate		
a. 軟骨魚綱	Class Chondrichthyes		
サメ目	Order Lamniformes	エイ目	Order Rajiformes
メジロザメ科	Family Carcharhinidae	トビエイ科	Family Myliobatidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.	トビエイ	<i>Holorhinus tobiiei</i>
b. 硬骨魚綱	Class Osteichthyes		
コイ目	Order Cypriniformes	スズキ目	Order Perciformes
コイ科	Family Cyprinidae	スズキ科	Family Serranidae
フナ	<i>Crassius auratus</i>	スズキ	<i>Lateolabrax japonius</i>
ナマズ目	Order Siluriformes	タイ科	Family Sparidae
ナマズ科	Family Siluridae	クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegeli</i>
ナマズ	<i>Parasilurus asotus</i>	フグ目	Order Tetraodontiformes
キギ科	Family Bagridae	マフグ科	Family Tetraodontidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.	属・種不明	Gen.et sp.indet.
ボラ目	Order Mugiliformes	カサゴ目	Order Scorpaeniformes
ボラ科	Family Mugilidae	コチ科	Family Platycephalidae
ボラ	<i>Mugil cephalus</i>	コチ	<i>Platycephalus indicus</i>
		科・属・種不明	Fami.et gen.indet.
c. 爬虫綱	Class Reptilia		
カメ目	Order Colonia	有鱗目(ヘビ亜目)	Class Ophidia
スッポン科	Family Trionychidae	ナメラ科?	Order Colubridae
スッポン	<i>Trionyx sinensis japonicus</i>	属・種不明	Gen.et sp.indet.
d. 鳥綱	Class Aves		
e. 哺乳綱	Class Mammalia		
霊長目	Order Primates	偶蹄目	Class Artiodactyla
オナガザル科	Family Cercopithecidae	イノシシ科	Family suidae
ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
齧歯目	Class Rodentia	シカ科	Family Cervidae
リス科	Family Sciuridae	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>		
食肉目	Class Carnivora		
イヌ科	Family Canidae		
タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>		
イヌ	<i>Canis familiaris</i>		
イタチ科	Family Mustelidae		
アナグマ	<i>Meles meles</i>		

## 動物遺体の概要

### I. 軟体動物

この貝塚の貝類は別表の出現率表にみるようにヤマトンジミを主体とするものであって、汽水系の貝塚とすることができる。ヤマトンジミは殻高・幅共に25.0mm前後の大きさのものが大部分であったが、30.0mmになる殻も少数みられた。本邦における新石器時代貝塚のヤマトンジミとしては中程度の大きさのものといえよう。本貝塚は足守川谷の最奥の貝塚といわれているが、時期的には中期末葉期であって貝種も汽水系のものであり最海進期の様相を示していない。おそらくそのような貝塚はさらに深い場所に埋没しているのであろう。なお旧児島湾地域は勿論瀬戸内沿岸域での新石器時代貝塚の調査例はまだ少ないようである。本貝塚は貴重な一

例といえよう。

ヤマトシジミに次ぐのはマガキであるが、その数はヤマトシジミよりもはるかにすくなく、殻も小さいものが大部分であったようである。殻高60.0mm位が大きい方である。これらのカキは内湾の奥部に生息していたものであろうが、そうした貝もこの地域ではあまり見ることがなくなっていたのである。

ハイガイはこの地域の内湾の貝塚の代表的な貝種であるが、本貝塚では2.5%を占めるのみで、殻長は大型のもので60.0mmになったが、多くはそれより小さい殻であった。

巻貝類ではカワアイが多い。汽水域の潮間帯の砂泥底に生息する。小さい貝であり肉量も決して多くはないが、食糧の一部に当らている。出土する殻の頂部が壊れているのは殻の口の方から肉を吹き取ったのであろう。このような小型の貝がみられると、それらの食糧的な価値の乏しさ、あるいは食糧の貧弱さを強調するようなことがあったが、食べ物さまざまな条件下で食べられるもので、小さい貝を食べるときはそれなりの価値を考えていたのであろう。マテガイという貝が取られているが、この貝などは採るのが大変面倒である。しかし、これを採るための一種の特技があったのではなかろうか。こうして手にいれた貝であるからこそこれを食べる楽しみもあったのである。

フジナミガイもハイガイと略同じ程度に出土した貝であるが、殻が薄いために小さい破片になっているものが多い。殻長50~60.0mm位になるものであろう。内湾の奥の貝塚で多い。この貝も砂泥底に深く潜るので、採るのが厄介である。

## Ⅱ. 脊椎動物遺体

### a 軟骨魚綱

#### 1. メジロザメ科の一種

やや大きな歯が一点だけ検出されている。

歯根部最大幅 18.05mm、歯冠部最大高 13.18mm

同幅（最下部で計測） 9.45mm

メジロザメ科にみられる鋸歯があり、細長い三角形を呈するところから下顎歯である。体長3m以上になる個体のものである。

#### 2. エイ類

椎体と遊離した歯板を多く出土している。この歯板の形態でみる限り、トビエイ *Holorhinus tobijeii* のものと思われる。他に尾棘があるが、おそらくこの種のものなのであろう。貝塚からはマダラトビエイの歯板が出土するが、本貝塚では確認できなかった。

#### 3. ガンギエ科

多数の鱗が出土している。円もくは楕円形の座骨部に斜向して突出する背の低い棘がつく。

エイ類の椎体は最も多く検出されていて、場所によっては数十個が検出されている。エイは一個体に多数の椎体があるので、個体の推定は無理であるが、全体の出土量としてこれ程多い例は（もちろん一定の発掘容積の割で見た上でのことである）稀である。椎体は最大のもので椎体径12.0mm、椎体長7.27mmに達する。かなり大型の椎体である。なお、この最大型の椎体は一点のみの検出で、他にはこれに近い大きさのものも検出されていない。特に大型の椎体は何らかの用途をもっていたことも考えられる。埋存率の低いのは大形の個体の捕獲が稀であったことを示すのであろう。

## b 硬骨魚綱

### 1. ナマズ

歯骨が1点確認されたのみである。この標本は連合部の小片で、連合部の咬面幅4.63mmであった。

### 2. キギ類

検出された骨は少ない。キギ類に特有な棘をつけた形の胸鰭が1点確認されている。

### 3. コイ

咽頭骨の歯の部分と、棘のある鰭が検出されている。標本は極めて少ないが、咽頭骨の遊離歯や鰭棘には大きな標本があり、体長40cm近い個体のももあったらしい。

### 4. フナ

咽頭骨の断片を検出しているが、その数はコイに比べて少ない。

### 5. ボラ

本貝塚で主体的に検出された魚の一つである。東アゼと中アゼを主に、主鰓蓋骨が各グリッドに一点ずつ、そして眼下骨が数点ずつ、左右不明の標本も加えて推定個体数は10個体前後となろうか。スズキ、クロダイに大、小の個体のあるようにボラにもかなり大型の個体と小型の個体のあることが確かめられているが、標本の数が少ないので全体的な傾向は不明である。そのうち体長40cm以上になるような個体は主鰓蓋骨、椎体で各一個を確認したのみである。なお、眼下骨、主鰓蓋骨からみる限り本種一種のみである。

### 6. スズキ

最も多くの遺骸をのこしていた種類で、他にも比較的多かったクロダイ、ボラと比べてもその検出量ははるかに多かった。東、中アゼが分布の中心で、特に目立ったのは中アゼの43.46で特定部位の標本5～6点が含まれていたのである。他のグリッドでは大部分が1～2点という数であった。

検出されている骨格の部位は確認されたものだけでも主要な骨格の大部分を含むもので、その他の脆弱は骨あるいは検出しにくい骨も破片となって含まれている可能性はあると思われる。

る。

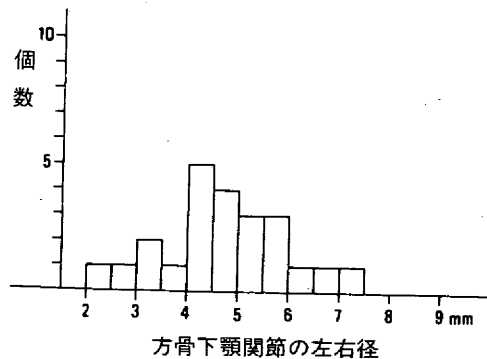
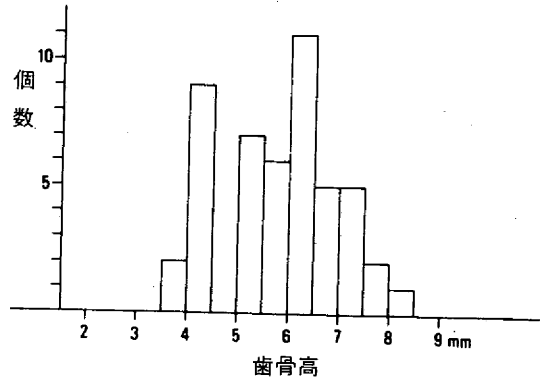
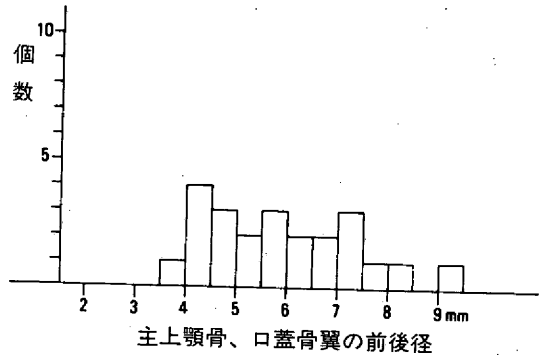
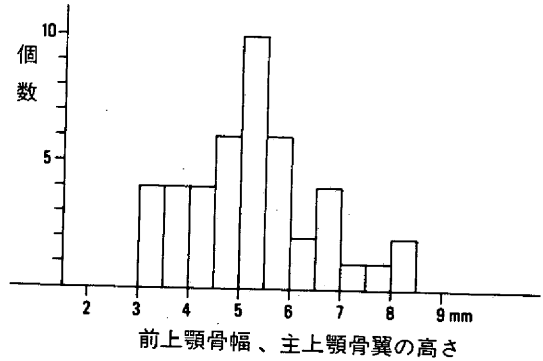
しかし本貝塚でのこうした骨類の保存は必ずしも良好とはいことが出来ず、完存する骨は主上顎骨が唯一あったのみである。このためにスズキ属の中でスズキを特徴付ける幾つかの骨学的な表徴を多くの標本について確認することが出来なかった。

しかし、主鰓蓋骨ではスズキの特徴をもつ標本が確認されているし、主上顎骨、擬鎖骨もスズキのそれとみてよいと思う。ただ若干はヒラスズキが混在するかもしれないが、これについては良好な標本で確認しなければならないであろう。

次に本貝塚でのスズキの体長組成であるが、これについては別掲のグラフに幾つかの計測結果を示す。このうちよく比較に使われる「歯骨高」でみると、10mm以上になるのはなく、6.0mmまでの標本が多く、4.0mm台のところにもピークが来るといった状態である。貝塚から出土するスズキの骨格は一般にかなり大型の個体のものが多いが、本貝塚ではむしろ小型のものが多いことが認められ、体長20~25cmといったものが多く、大きくても30~35cm前後までが大部分であった。

#### 7. クロダイ

スズキに次ぐ量が検出されているが、スズキとの量差は大きく最小個



スズキの顎骨の計測値と数量グラフ

件数では寸位になっている。ボラとほぼ同程度の出土であるが、クロダイの方が検出し易い骨があるので部分的な骨は多くなる。スズキと同様に東・中アゼ地区での出土が中心で、その他の地域には散在するように出土している。前上顎骨、歯骨、口蓋骨の出土が多く、また大型の棘である臀鰭第2棘も同程度の量が廃棄されていた。

石器時代のクロダイは内湾貝塚の代表種であって、大型の個体の標本がよくのこされるが、本遺跡での標本についてその検出顎骨の大きさをみると、小型のものが多いことが認められる。前上顎、歯骨長とも30mmまでがピークで、それ以上になると急激に減少している。前上顎骨長30.0mmで体長は35cm位であるから、本遺跡でのクロダイは25~30cm位が大部分であり、しかも普通にはほとんどみることのない体長20cm未満15cm前後位のものもみられた。実際にはメッシュにかからないようなさらに小型の顎骨もあったかも知れないのである。

#### 8. コチ

検出されている骨は少ないが、本貝塚での主要魚種のうちにはいる種類であろう。東・中アゼの地区での出土が中心であるので、スズキやクロダイと混在した出土状態である。特徴的な前鰓蓋骨後縁の棘の部分、前上顎骨、歯骨などがほぼ同じ割合いで出土している。石器時代のコチも大型の標本のみられるのが一般的であるが、本貝塚の標本にも比較的大型の個体のものが含まれていた。しかし、クロダイやスズキにみるような特に小さい個体の標本はなかったようである。

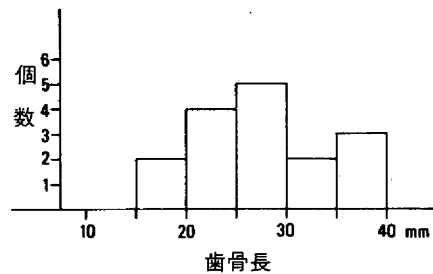
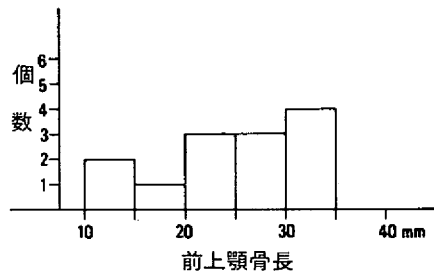
#### 9. カサゴ類

主鰓蓋骨が1点出土しているのみである。

##### c 爬虫類

##### 1. スッポン

ごく少量の骨が検出されているのみである。スッポンに特徴的な背・腹甲板の破片もほとんどみることがなかった。湾奥部ではあったが、スッポンの生息可能な淡水域がないか、ごく狭



クロダイの顎骨の計測値と数量グラフ

かったためであろう。

## 2. ヘビ類

椎体のみが検出されており、中アゼからの検出が目立っている。小型のヘビの椎体で、貝塚からの検出例としては多い方である。出土地点が魚類などと比べてややずれているのは、魚とは違った人との関りがあったことを示すのであろう。

### d 鳥 綱

鳥骨の出土は極めて少なかった。断片的なものは検出されているが、それも部位の判明する標本はごく稀である。鳥骨がこれ程少ないのも珍しい。

### e 哺乳綱

#### ネズミ類

大型のネズミ類であるRattus属の肢骨が採集されているが、おそらく新しい時期のものであろう。

#### ムササビ

上顎歯が1点検出されているのみである。

#### ニホンザル

上腕骨の遠位部分の破片を1点検出しているのみである。

#### タヌキ

下顎骨の破片が、第一次と第二次で各1点ずつ検出されているが、その他頭頂骨の断片と思われるものが第一次調査で検出されている。

#### アナグマ

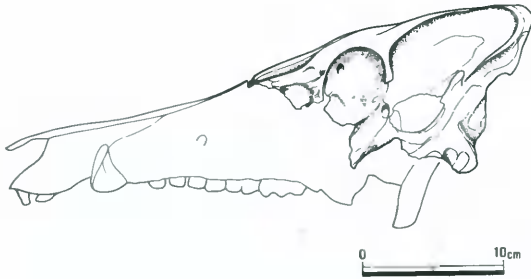
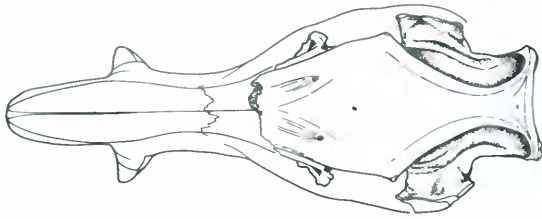
下顎骨と上顎犬歯が各1点第一次調査で検出されている。

#### イノシシ

獣骨中主体的な量を占めるもので、標本も比較的保存の良い頭蓋片あるいは下顎骨片が検出されている。次頁に図示した標本は前頭骨から頭頂・後頭部にかけてのこるもので、上顎部を失っている。重量のある上顎骨はこわされ、脱れたのであろう。頭頂部はほぼ完存している。このような状態の標本は各地の貝塚で時々みることができる。

下顎骨の2点は雄のもので大型であった。特に第一次調査で出土した下顎骨は近遠心端を欠くが大型のものであった(図版122)。この下顎骨の吻端の欠損は犬歯を摘出するための加工でもあったと思う。別に出土している下顎犬歯(雄)も大きく幅24.55mmを計測する。おそらく西日本では最も大型になるものの一例であろう。この犬歯の一端は歯根部分に当たり、それより直線で8.5cm程先に行ったところで擦り切られている。おそらくこれを材料にした加工品をつくる目的からの加工であろう。





出土したイノシシの頭骨片とその大きさの推定図

歯牙の咬耗を次に示す。

- 左上顎骨：(P<sup>4</sup> M<sup>1</sup> M<sup>2</sup> M<sup>3</sup>)
- 左下顎骨：(P<sup>2</sup> P<sup>3</sup> P<sup>4</sup> M<sup>1</sup> M<sup>2</sup> M<sup>3</sup>) ♂?
- 左下顎骨：(P<sup>4</sup> M<sup>1</sup> M<sup>2</sup> M<sup>3</sup>)
- 左下顎骨：(P<sup>1</sup> P<sup>2</sup> P<sup>3</sup> P<sup>4</sup> M<sup>1</sup> M<sup>2</sup> M<sup>3</sup>) ♂
- 右遊離歯：M<sup>2</sup> M<sup>3</sup>
- 右下顎骨 (dm<sub>2</sub> dm<sub>3</sub> <dm<sub>4</sub>>)

乳歯をもつ下顎骨1、他はM<sub>3</sub>まで萌出しているものである。M<sub>3</sub>の萌出と咬耗の状況を見るとはその初期から萌出の完了、さらに+・-・-⇒+・+・+⇒+++・+・-⇒+++・++・-、(この間に2~3段階はある)、そして+++・+++・+++のように三つの咬頭の咬耗が進行していく状況を見る。最初の段階はM<sub>3</sub>の萌出の初期である2才の秋で、その次が3才の春、そしてそれ以後4~5才位から6~7才までの個体と思われる。

四肢骨で完存するのは指趾骨、距骨などで、他の骨は両端が割られるか、縦に割られている。中手・中足骨のような骨まで割っているので、かなり徹底的に利用されていることがわかる。

ニホンジカ

イノシシに比べると骨の遺存が少ないようである。上顎骨が左右各1個、下顎骨は歯を含めて全くなく、主要な四肢骨も肩甲骨2、大腿骨、脛骨各1点という数である。鹿角も枝の部分の断片に限られている。個体はイノシシと同様

に大型のものがあり、雌の前頭骨片で、その幅は83.92mmあり、肩甲骨2点も頸部最小幅が30.59mm、26.46mmあり、関東～東北から出土するシカと変わらない大きさである。

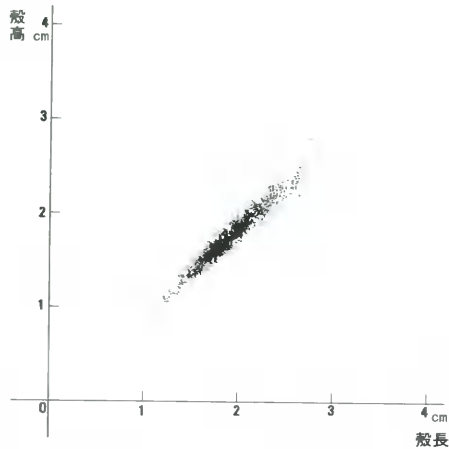
## 収束

### 貝類

ヤマトシジミを主体としているので、本貝塚は汽水性の水域の環境下で形成されたものである。カワアイがそれに次いで多いのは略同じ場所で採れたからであろう。広大な旧児島湾沿岸の貝塚には幾つかの汽水系貝塚が知られている。岡山市沼・竹原貝塚がそれで、東岸城奥部にあり沼貝塚は前期に属し、この地域での汽水化の開始を知ることが出来る。そして同じ岡山市大内田貝塚の後期貝層がヤマトシジミといわれているので、この頃には旧児島湾の奥部は汽水化が進行していたようである。前期から中・後期にかけてラグーン化がどのように形成されたかは今後の課題である。

### 魚類

多くの骨を検出している。スズキが主体になっているのは汽水域が支配的であったことによるが、瀬戸内沿岸では珍しい例であろう。クロダイもやや目立ったが、ラグーン内奥にまで進入することが制約されたために量的に少なくなっている。スズキ、クロダイともに従来知られ



ヤマトシジミ (殻高・殻長計測グラフ)

\* 計測数量の2%

てきた貝塚出土例と比べると小さい個体が目立つ。漁法・漁期を考ええる資料となろう。サメの歯が一点あるが、おそらく歯のみが運ばれてきたのであろう。マダイも湾口部で捕れたと思われるが全く検出されなかった。交易の品としての搬入も考えられるが、それも確認することはできなかった。

#### 爬虫類・鳥類

へビ類の骨を普通の貝塚例にみるよりも多く検出している。本貝塚で骨がかなり微細なものまで採集された結果であろう。同じような検出例は他の遺跡でも見られることがある。へビの捕食も十分考えられよう。ただカエル、ネズミ類と同様に自然のものとの混入もあり得ることも考慮しておかねばなるまい。

鳥類で種名の判明できた標本は一つもなかった。当時のラグーン内でのカモ猟や内陸でのキジ猟などは普通に考えられる猟である。これについては別の資料の検討までまちたいと思う。

#### 哺乳類

狩猟獣としてイノシシ・ニホンジカ・タヌキ・アナグマが知られている。イノシシとシカとでは出土する骨の量の上でかなり差が見られている。イノシシの方が倍ちかくの出土量である。1979年岡山県大橋貝塚の報告が刊行されているが、この中・前期貝塚ではイノシシとシカが同じ程度に、しかも数量も多く出土している。この両者の違いをどのように考えたらよいか、結論は保留しておかざるをえない。なお現在のこの地域のイノシシとシカの分布量には、両者の間にかかなりの差がみられ、シカの数はイノシシに比べてはるかに少ないようである。縄文時代と現在とを直接比べることはできないが、シカの減少する傾向はあったのかも知れない。

矢部貝塚貝類の出現率表

貝種	数量	%	重量(g)	%
ヤマトシジミ	91,896 (総数の1/2)	94.8	52,696	70.7
マガキ	R991 L902	2.1	18,142	24.3
ハイガイ	R 86 L100	0.2	1,855	2.5
カワアイ	1,179	2.4		
ヘナタリ	40	0.1		
クロヘナタリ	44	0.1		
ヒロクチカノコガイ	15	+	1,429	1.9
カワニナ	1	+		
イボウミニナ	1	+		
アカニシ	2	+		
サルボウ	R 1	+		
オキシジミ	R 1 L 4	+		
ハマグリ	R 1	+	452	0.6
フジナミガイ	R101 L99	0.2		
マテガイ	R48 L34	0.1		
計		100	74,574	100

\*整理箱84個のうち8箱(約10%)の計量。数量の多い貝種をはじめにあげ、その他を腹足、斧足、網の順に表示した。  
\*ヤマタニシ・フジツボは除く。

中型獣としてタヌキ・アナグマがあるが、この地域の貝塚ではアナグマが目につくようである。イヌの遺骸は全く検出されていない。

#### 参考文献

邑久町教育委員会：岡山県邑久郡邑久町大橋貝塚発掘調査報告書—長谷川県営砂防工事に伴う調査—、  
1979. 3

平井 勝：縄文時代、地域考古学叢書「岡山県の考古学」、吉川弘文館 1987、8 p.73

金子浩昌：南三島遺跡3・4区出土の脊椎動物遺存体、茨城県教育財団文化財調査報告 第44集 竜ヶ崎  
ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16「南三島遺跡3・4区〔1〕」 1987、12 p.480

動物遺存体出土量表

サメ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
中 58	r																	歯 1
計	r																	歯 1

トビエイ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
東 2	r																	歯板 1
東 3	r																	歯板 1
西 33	r											2						歯板 2
計	r											2						歯板 4

エイ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
東 1	r											2						ウロコ 1
東 2	r											1						
東 4	r											2						
東 6	r											1						ウロコ 1
東 7	r											1						
東 9	r											1						歯板 1
東 10	r											1						

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨								ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (關節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他
東 11	r											2					
東 12	r											2					
東 15	r											1					
東 16	r											5					
東 17	r											3					
東 19	r											7					歯板 1
東 21	r											2					
東 22	r											2					
東 23	r																ウロコ 1
東 24	r											1					
東 計	r											34					ウロコ 3 歯板 2
中 40	r											1					
中 41	r											4					
中 42	r											17					尾棘片 4
中 43	r											1					
中 44	r											30					
中 45	r											1					
中 46	r											1					
中 48	r											1					
中 50	r											1					ウロコ 1
中 51	r																尾棘片 1

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem	max	pax	den	an 角 (関節)	qu	hyo	preo	ope	脊椎骨	p.ten	s.cl	cl	sc.	その他
中 52	r											3					尾棘 1
中 54	r											2					ウロコ 1
中 55	r											4					
中 56	r											2					尾棘片 2
中 57	r											9					
中 58	r																ウロコ 1
中 59	r											1					ウロコ 1
中 60	r											2					
中 61	r																ウロコ 1
中 計	r											80					ウロコ 5
西 26	r											3					
西 27	r																ウロコ 1 歯板 1
西 28	r											3					
西 30	r											7					棘 9
西 32	r											1					
西 34	r											1					ウロコ 1
西 計	r											15					ウロコ 2 歯板 1
東アゼ 64	r											3					
東アゼ 66	r											1					ウロコ 1
東アゼ 67	r																脊椎骨 1

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋸蓋	ope 主鋸蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 鎖肩甲	その他
東アゼ 69	r											1					
東アゼ 70	r											1					
東アゼ 72	r											4					
東アゼ 73	r											4					
東アゼ 計	r											14					ウロコ 1
西アゼ 35	r											2					
西アゼ 39	r											4					
西アゼ 計	r											6					
貝層 T77	r											1					ウロコ 1
T79	r											3					
T80	r											2					
T82	r											11					
T83	r											1					
T84	r											1					
貝層 T 計	r											19					ウロコ 1
貝層 上面88	r											35					ウロコ 2 尾棘片 1
貝層 上面計	r											35					ウロコ 2
計	r											203					ウロコ 14 歯板 3



ナマズ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
東アゼ 65	r																	背鰭 1
計	r																	背鰭 1

ギギ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
中 50	r					1												
貝層 T81	r																	胸鰭 R 1
計	r					1												胸鰭 R 1

コイ

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
東 3	r																	棘 1
東 5	r																	咽頭歯 1
中 43	r																	鱗棘片 1
貝層 T83	r																	咽頭歯 1
計	r																	棘 2 咽頭歯 2

咽頭歯：咽頭骨からの遊離歯

コイ科

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
貝層 T85	r					1												咽頭骨片 1

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上漿鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 24	r																鱗棘 1
	l																
中 44	r																鱗棘 1
	l																
貝層上面88	r																棘 1
	l																
計	r																咽頭骨片 1
	l					1											鱗棘 3

ボラ

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上漿鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 1	r																
	l										1						
東 2	r																
	l					1											
東 5	r																
	l																眼下骨 1
東 9	r																
	l										1						
東 17	r																棘 5
	l																鱗 8
東 18	r																
	l											1					
東 24 (小計)	r										1	1	1				眼下骨 L 2
	l					1						2	1				
中 41	r																
	l											2					
中 43	r																
	l																1
中 45	r																
	l																1
中 48	r																
	l																1
中 52	r																眼下骨 R 1
	l																1
中 61 (小計)	r																
	l										1	5	2				

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
西アゼ 36 (小計)	r											1・1					
西 32	r											1					鱗棘 1
西 34 (小計)	r																眼下骨 L1, R1
東アゼ 76 (小計)	r										1 1						
貝層 T77 (小計)	r										2 (2)						
貝層 上面 88 (小計)	r										1 1						
計	r								1		3 (2)	5					眼下骨 2 眼下骨 4

スズキ

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 1	r	1		1			1			2					1		a.f.l
	l	1					2	1									a.if.l
東 2	r			1				2					1		1		
	l		1	2		1	1								1		
東 3	r					1	1	1		(1)							
	l																
東 4	r		1				1										
	l					2		1									
東 5	r			1		2					1						
	l					4		2		2					1		
東 6	r		1														
	l			2				1		1	1						
東 9	r		1														
	l		1														
東 10	r		1			1											基後頭
	l																
東 13	r	1									1						a.f.l
	l			1		2									1		
東 14	r															1	
	l																

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臟骨										ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (關節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
東 16	r			2			1											
	l																	
東 17	r		1			1	1	1									a.if.2	
	l																	
東 18	r		1	2				1										
	l									1								
東 19	r						1									1		
	l									1						1		
東 20	r																	
	l																	
東 21	r		3			1							1				角舌R1	
	l		1			1							1		2		L1	
東 22	r					1		1									角舌R1	
	l																	
東 23	r							1										
	l																	
東 24	r	1						1			1							
	l	1													1			
東 計	r	2	9	7		7	6	8		2	2		2		4		a.f.2	
	l	2	3	5		10	3	5		(1) 5	2		1		7		a.if.3	
中 40	r					1							1		1		角舌R1	
	l			1														
中 41	r																a.f.1	
	l														1			
中 43	r			4		6	1	1							1		a.if.2	
	l			1		2		3			1						a.f.1	
中 44	r																a.f.1	
	l		2	1														
中 45	r																a.f.1	
	l		1															
中 46	r		2	2		1												
	l					5												
中 48	r					2												
	l			1			2	1							1			
中 49	r																	
	l		1			1												
中 50	r																a.if.1	
	l		1			1		1										
中 51	r							1										
	l																	
中 52	r																	
	l			1														
中 53	r						1											
	l					1	1											

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨								ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考	
	vo 前頭	fro supo 前頭	premax 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前齶蓋	ope 主齶蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他
中 54	r							1									
	l														1		
中 56	r																
	l						1										
中 57	r																
	l														1		
中 58	r			3			1										a.if.1
	l			1			1			1							
中 59	r																
	l						1										
中 60	r			1			1										a.if.1
	l										1						
中 61	r		1														
	l			2				2									
中 62	r						1										
	l																
中 計	r		3	10		12	3	3					1		2		a.f.4 a.if.5
	l		5	8		10	6	7		1	2				4		
西 26	r							1									
	l																
西 27	r					2中											
	l														1		
西 28	r		2														
	l						1								1		
西 29	r							1小									
	l																
西 30	r		1					1								1	
	l			1													
西 31	r					1											
	l																
西 33	r			1													
	l																
西 34	r								1		1						
	l			1		1											
西 計	r		3			3	1	2	1	(+)					1		
	l			3		1	1								2		
東アゼ 64	r																角舌L1
	l		1														
東アゼ 65	r						1			1							
	l														1		
東アゼ 66	r			1												1	
	l		1					1			1						
東アゼ 69	r																
	l			1			1中										

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考 その他
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.ci 上腕鎖	cl 鎖	sc. 肩		
東アゼ 70	r																1	
	l												1					
東アゼ 計	r			1			1			1							2	
	l		3			1		1			1		1		1		1	
西アゼ 35	r																	
	l					1												
西アゼ 36	r			1														角舌L1
	l					1												
西アゼ 37	r																1	
	l																	
西アゼ 38	r					3	1											a.f. 1
	l					1		1	1				1					
西アゼ 39	r								1									
	l								1									
西アゼ 計	r			1		3	1										1	a.f. 1
	l					3		2	1				1					
貝層 T77	r	1																
	l		1	1														
T78	r			1大														角舌L2
	l									1								
T79	r																	
	l		1															
T80	r																	其後頭 1
	l		2	1									1					
T81	r					1			1小									
	l									1				1				
T82	r																	a.f. 1
	l			2						1								
T84	r						1		1大									a.f. 1
	l						2											後頭 1
T85	r																	a.if. 1
	l					2												
T88	r		1	1		1	2										1	
	l		1	2		2												
貝層T 計	r		1	2		2	3	1	1								1	a.f. 2 a.if. 1
	l									(2) 1								
計	r	3	2	16	21		27	15	14	2	3	2						a.f. 9 a.if. 9
	l		2	16	22		29	12	15	1	(4) 7	5		4	1	14		

クロダイ

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo 前頭	fro supo 前上顎	premax 上顎	max 口蓋	pax 齒	den 齒	an 角(關節)	qu 方舌	hyo 顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
東 1	r l						2				2						a.f.1	
東 2	r l			1														
東 4	r l																	
東 5	r l			1	1	1					1							
東 6	r l					2中 1												
東 9	r l		1															
東 13	r l												1					
東 14	r l						1											
東 16	r l					1 1												
東 17	r l		1					1										
東 20	r l									1								
東 21	r l				1		1											
東 22	r l				1			1										
東 23	r l		1		1			1										
東 24	r l		1			1	1			1							s.o.1 a.if.1	
東計	r l		1 (+) 1	2	2	2 5	4 4	1 2		2		3		1			a.if.1 a.f.1	
中 40	r l			1														
中 41	r l					1		1										
中 42	r l					2												
中 43	r l					1小												
中 45	r l							1										

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前齶蓋	ope 主齶蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 鎖肩甲	その他	
中 46	r		1			1											a.if.1	
	l																a.f.1	
中 50	r		1															
	l																	
中 52	r		1														a.if.1	
	l																	
中 53	r			1														
	l																	
中 58	r		1															
	l																	
中 59	r		1			1												
	l																	
中 60	r			1		1											a.if.1	
	l																	
中計	r		4	1		4		1									a.f.1	
	l		3	1		3	1										a.if.3	
西アゼ 37	r																a.if.1	
	l																	
西アゼ 計	r																a.if.1	
	l																	
西 26	r							1										
	l																	
西 28	r									1			1				a.f.3	
	l																	
西 30	r					1												
	l																	
西 31	r																	
	l																	
西 32	r									1	1							
	l																	
西 34	r						1大											
	l																	
西 計	r					1		1		1	2		1				a.f.3	
	l					1	1											
東アゼ 66	r			1													a.if.1	
	l																	
東アゼ 69	r					1												
	l																	
東アゼ 72	r													1				
	l																	
東アゼ 75	r		1		1		1											
	l																	
東アゼ 76	r		1															
	l																	



地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	pren 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (關節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鱗	cl 擬鱗	sc. 肩甲	その他	
東アゼ 69	r			1													a.f.1	
東アゼ 計	r		1		1	1											a.if.1	
貝層 T77	r																a.f.1	
T 78	r						1										a.if.1	
T 79	r			3													a.f.1	
T 80	r						1										a.f.1	
T 81	r								1									
T 82	r				1													
T 84	r																a.if.1	
T 85	r	1							1									
貝層T 計	r	1			1				1								a.if.3 af.2	
貝層 上面88	r		2			1	1		1								a.if.2	
貝層 上面計	r		2			1	1		1								a.if.2	
計	r	1	8	1	4	10	3	2	2	2							a.f.8 a.if. 11	
	l	1	(+) 10	4	3	10	(+) 8	2	1	1	5		1	1	1		歯16	

コチ

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前齶蓋	ope 主齶蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
東 3	r l									1								
東 4	r l						1											
東 11	r l			1														
東 12	r l									1								
東 15	r l					1											後基底骨 1	
東 18	r l		1															
東 20	r l					1						5						
東 24	r l		1														下顎節骨 1	
西 26	r l									1								
中 40	r l												1中					
中 43	r l									1								
中 44	r l		1															
中 46	r l			1														
中 51	r l					1												
中 55	r l			1														
中 59	r l			1		2												
中 60	r l		1			1											鋤骨 1	
中 61	r l		1															
東アゼ 66	r l		1															
東アゼ 67	r l									1小								
西アゼ 35	r l					1												

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
貝層 T85	r			1														
貝層 上面88	r									1								
計	r		4	3		4				2		5						
	l		2	2		4	1			(1) 4								

カサゴ科

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
貝層 上面88	r										1							
計	r										1							
	l																	

魚 (椎骨・鰭棘・その他破片)

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
東 1	r											16						鰭棘10
東 2	r											7						
東 3	r											5						鱗 4
	l																	棘 3
東 4	r																	鱗 4
	l																	
東 5	r											10						鱗 6
	l																	鰭棘2
東 6	r											10						鱗 4
	l																	鱗 1
東 7	r											2						鰭棘2
	l																	その他7
東 9	r											4						鱗 6
	l																	鱗棘5
																		その他21
																		鱗1血管棘1
																		不明5

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨								ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	el 擬鎖		sc. 肩甲
東 10	r											2					鰓棘 4
	l																その他 6
東 11	r											5					棘 3
	l																鰓 1
東 12	r											8					鰓 8
	l																棘 3
東 14	r											4					棘 4
	l																鰓 3
東 15	r											1					鰓 3
	l																棘 1
東 16	r											19					鰓 5
	l																鰓棘 6
東 17	r											7					
	l																
東 18	r																鰓 4
	l																棘 6
東 19	r											9					鰓 6
	l																棘 7
東 20	r																スッポ ン 軟骨破 片 1
	l																鰓棘 4 腎鰓等 1 棘 1
東 21	r											15					鰓棘 11 12
	l																間神経 棘 1
東 22	r											11					鰓 1
	l																鰓棘 6
東 23	r											8					鰓 3
	l																棘 11
東 24	r											12					鰓 8
	l																棘 12
東 計	r											155					
	l																
中 41	r											5					鰓 6 鰓棘 4
	l																突起を もつ椎 2
中 42	r											57					鰓棘 115
	l																腎鰓棘 4
中 44	r											46					
	l																

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前髁蓋	ope 主髁蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他	
中 45	r l											5						
中 46	r l											24					鰓棘5 棘20	
中 48	r l											4					ウロコ5	
中 49	r l											5					鰓棘7 鰓棘7	
中 51	r l											3					鰓棘4	
中 52	r l											5					ウロコ2	
中 53	r l											7					鰓棘8	
中 54	r l											5						
中 55	r l											6					鰓棘12	
中 56	r l											1					鰓棘2 鰓棘9	
中 57	r l											18					鰓棘8 タイ歯1	
中 58	r l											17					鰓棘12 棘26	
中 59	r l											10					鰓棘44 鼻骨1 鰓棘68	
中 60	r l											6					鰓棘1 鰓棘2 不明12	
中 61	r l		1									9					鰓棘7 鰓棘11 へび2 不明27	
中 63	r l											13					鰓棘4 棘16	
中 計	r l											246						
西 26	r l											7					鰓 3 棘 7	
西 27	r l											4					鰓棘1 鰓棘8	
西 28	r l											9					鰓棘19 その他13	

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.ci 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	その他
西 29	r											5					鰭棘 4
西 30	r																鰭棘 3 鰭棘 9 その他 16
西 31	r																鰭棘 2 不明 12
西 32	r											1					
西 33	r											3					タスキ ul. L 鰭 2 棘 11
西 34	r											4					鰭棘 3 棘 1
西 計	r											33					
東アゼ 64	r											3					鰭棘 3 鰭棘 3
東アゼ 65	r											6					鰭棘 4 棘 2
東アゼ 66	r											3					鰭棘 8 鰭棘 4
東アゼ 67	r					1											脊椎 2 棘 4 鰭棘 6
東アゼ 68	r																棘 8 鰭棘 3
東アゼ 70	r											2					鰭棘 2 鰭棘 3
東アゼ 71	r											1					
東アゼ 72	r											24					鰭棘 1 棘 16
東アゼ 73	r																鰭棘 4 鰭棘 13
東アゼ 74	r											5					棘 2 鰭棘 1 間神経 棘 2
東アゼ 75	r											4					

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考 その他
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 鎖肩甲		
東アゼ 76	r											2					鰓棘 4 鰓棘 1	
東アゼ 69	r											8					棘 8 鰓棘 1	
東アゼ 計	r											58					鰓棘 4 鰓棘 1	
西アゼ 38	r											12					鰓棘 6	
西アゼ 計	r											12						
貝層 T77	r											3					鰓棘片 4 " 完 1	
T78	r											5					背鰓 4 條鰓 2 鰓の棘 4	
T79	r											13					鰓棘 6 鰓棘 4	
T81	r											8					鰓棘 3	
T82	r											10					鰓棘 14 肋骨 2	
T83	r											7					鰓棘 4	
T84	r											8					鰓棘 3 棘 6	
T85	r											5					鰓棘 6	
貝層 T 計	r											59						
貝層 上面 88	r											72						
計	r											635						

カエル類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨										ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考 その他
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 鎖肩甲		
東 18	r																肢骨 2	

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (關節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
西 26	r																	肢骨 1
東アゼ 70	r																	肢骨 2
中 44	r																	肢骨 1
中 57	r											1						
西 33	r																	肢骨 1
東アゼ 67	r																	骨盤 1
貝層 上面 88	r																	肢骨 1
不明	r											1						肢骨 9
計	r											2						18

へび類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考	
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 齒	an 角 (關節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲		その他
東 17	r											1						
東 23	r											1						
中 41	r											9						
中 42	r											8						
中 44	r											10						
中 46	r											1						
中 56	r											1						
中 57	r											16						
中 59	r											2						
中 63	r											1						



地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
西アゼ 35	r											2					
貝層 T77	r											1					
T82	r											1					
貝層 上面88	r											17					
計	r											71					

スッポン

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 23	r																頸椎 1
中 58	r																甲骨板片 1
計	r																2

鳥・スッポン

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 2	r																頸椎 1
東 21	r																不明 1
計	r																2

フジツボ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shoudergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鋤蓋	ope 主鋤蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 24	r																2
計	r																2

カニ類

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 17	r																はさみ脚片
計	r																I

獣骨片

地点	skull 頭骨		visceral skeleton 内臓骨									ver. colu. 脊柱	shouddergirdle 肩帯				備考
	vo	fro supo 前頭	prem 前上顎	max 上顎	pax 口蓋	den 歯	an 角 (関節)	qu 方	hyo 舌顎	preo 前鰓蓋	ope 主鰓蓋	脊椎骨	p.tem 後側頭	s.cl 上擬鎖	cl 擬鎖	sc. 肩甲	
東 2	r																不明 2
中 59	r																不明 1
東アゼ 67	r																不明 4
貝層上面 88	r																不明 5
東 24	r																7
東 17	r																at
中 44	r																小型獣 mic. 2 大腿L1
中 42	r																ネズミ 不明 1
中 48	r																ネズミ 寛骨L1
計	r																25

イノシシ (1)

地点	cran 頭蓋骨	mand 下顎骨	vertebr 脊椎骨 肋	ribr 肋骨	scap 肩甲骨 p d	hum 上腕骨 p (s) d	rad 橈骨 p (s) d	ul 尺骨 p (s) d	mc 中手骨 p (s) d	pel 寛骨 p (s) d	fe 大腿骨 p (s) d	tib 脛骨 p (s) d	fib 腓骨 p (s) d	ta 距骨	ca 踵骨	mt 中足骨 p (s) d	dig 趾骨 I ④
東 1	r i																
	i 胸腺骨																
東 5	r i		cer														
東 7	r i	C 3	rib17														
東 8	r i													1			2
東 9	r i		L rib(No.1)														
東 11	r i		L														1 ④
東 12	r i											1					1
東 13	r i					1						1					
東 14	r i		rib														
東 15	r i		rib(No.4)							1							
東 16	r i		rib(No.5)			1 ~											
東 17	r i	C 3	rib(No.17) T.														
東 18	r i					1 ~											1
東 20	r i	C 1	rib														
東 23	r i						1										1
東 24	r i		rib②														
計						1 1	1			1		1		1			3 2 1
東 70	r i								1								
西 56	r i		物														
中 41	r i													1			
中 47	r i																
中 50	r i		T														
中 52	r i		rib														
中 54	r i		cer														
中 56	r i		物												(C+4)*		
中 58	r i		L. ca														
?	r i		物 T. L. 2.														
計									1					1			

\*足根骨

イノシシ (2)

地点	cra 頸蓋骨	nd 下顎骨	vert rib 脊椎骨	scap 肩甲骨	hum 上腕骨	rad 橈骨	ul 尺骨	mc 中手骨	pel 寛骨	fe 大腿骨	tib 脛骨	fib 腓骨	ta 距骨	ca 踵骨	mt 中足骨	dig 指骨
	r	i		p (s)	p (s)	p (s)	p (s)	p (s)	p (s)	p (s)	p (s)	p (s)			p (s)	I ① II
貝塚 79	r	i														
	i	(dn <sub>1</sub> ~dn <sub>4</sub> )														
81	r	i														
	i	(P <sup>2</sup> ~P <sup>3</sup> )														
No 1	r	i		1												
No 2	r	i			1											
No 3	r	i														
	i	(P <sub>1</sub> ~M <sub>2</sub> )														
No 4	r	i	rib 7				1									
No 10	r	i	L													
No 11	r	i		1												
No 2	r	i														
	i	(P <sup>2</sup> ~P <sup>3</sup> )														
上層	r	i	M <sub>2</sub> ・M <sub>3</sub>													
	r	i														
	r	i														
?	r	i	T・L					1								
計	r	i			1				1							
	i			2			1	1								
総計	r	i			1	1		1		1		1		2		3 2 1
	i			2	1	1	1	1			1					
一次調査分	r	i	L		1	1		1								
	i	M <sub>2</sub>	A.T.					1		1				(C+4)		1 2
	r	i						V								
	i	(P <sub>2</sub> ~M <sub>2</sub> )														
二次分計	r	i			1	1	1	1	3	1	1		1		N	
	i	A*		2	2	1	1	1	2		1		2		1	4 2 1

A T : 環椎、C : 頸椎、T : 胸椎、L : 腰椎、仙 : 仙骨、\* 歯と顎骨から推定される数  
 中手・中足骨の II・IV は第 II・IV 中手・足骨をさす。

ニホンジカ

地点	cra 頭蓋骨	md 下顎骨	ver 椎骨	rib 肋骨	scap 肩甲骨 p (s) d	hum 上腕骨 p (s) d	rad 橈骨 p (s) d	ul 尺骨 p (s) d	mc 中手骨 p (s) d	pel 寛骨 p (s) d	fe 大腿骨 p (s) d	tib 脛骨 p (s) d	fib 腓骨 p (s) d	ta 跗骨	ca 蹠骨	mid 中足骨 p (s) d	dig 指骨 I II III
東 12	r l																
東 14	r l										1						
東 15	r l													1			
東 20	r l															1	
東 24	r l																1
東ア 64	r l																1
東ア 73	r ant. l fr.																
中 41	r l																1
中 47	r ant. l fr.																
中 60	r fro. # l																
中 62	r l																1
東ア 64	r l																1
?	r l		cer.														
西 33	r l														1		
No. 2	r l				1												
No. 9	r l											1					
No. 13	r l																1
中 41	r l																1
兵庫 上層	r l				1												
計	r l				2						1		1	1	1	1	5 3

## 5. 矢部奥田遺跡（矢部貝塚）出土種子同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

矢部奥田遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。今回の調査で矢部貝塚の一部が対象とされ、ヤマトシジミ・カキ・ハイガイから成る1m（厚）の貝層中に縄文時代中期末を中心とする土器片と獣骨・魚骨が認められている。

今回の分析試料は、矢部貝塚より出土した種子3試料（中59・東7・東11）である。中59試料は1粒、東7試料は1粒、東11試料は3粒であった。

### 2. 方法

肉眼および実体顕微鏡を用いて同定を行い、写真撮影も行った。

### 3. 結果および考察

本遺跡から得られた大型植物遺体は、すべて炭化状態のコナラ属と考えられるものである。

なお、コナラ属の一部いわゆるドングリ類が食用として用いられ、不要となったものが貝塚に投棄されたとも解釈できるが、産出量や検出された部位、形状から断定することは難しい。

以下に種類の特徴を述べる。

#### ・コナラ属 (Quercus sp.) 果実

果実は炭化し、黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ10mm、径8mm程度。殻斗・果皮などの産出が認められないため、ここで広義のコナラ属とする。

種実遺体の顕微鏡写真



1

1. コナラ属 果実 (中59×5)

## 6. 矢部貝塚（矢部奥田遺跡）付近の地形環境

日 下 雅 義

はじめに

矢部貝塚は、花崗岩および石英閃緑岩類よりなる起伏の小さい山地の東麓に位置する。貝塚付近の標高は15～16mであり、東方の足守川沿い低地より少なくとも13～14mは高い。貝塚は、今からおよそ4,000年前に形成された。そこは最終氷期末の堆積物（粘土、シルト、砂など）が段丘化した肩の部分にあたる。

本稿では、まず低地の微地形および表層地質を分析して、足守川中流域の地形環境を広くとらえたのち、矢部貝塚の立地環境とその後の変化について、若干の検討を行ってみたい。

### 1 地形の特色

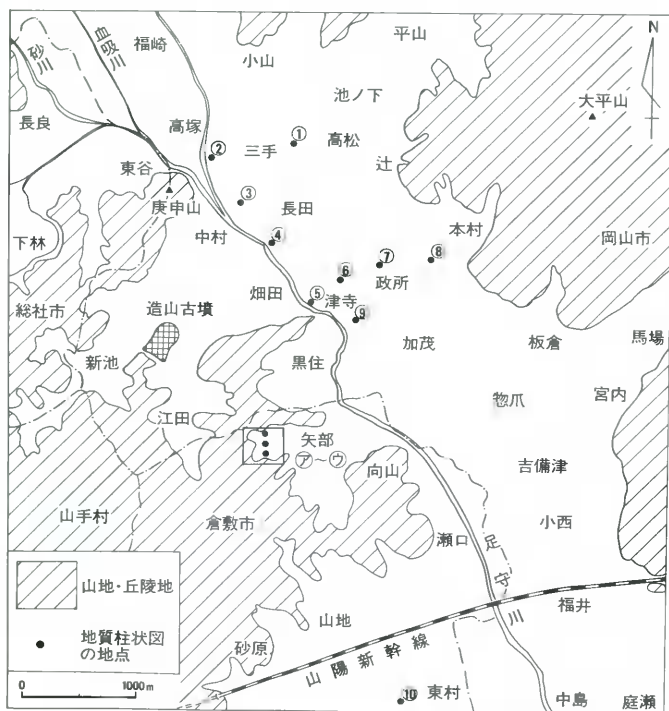
足守川以西の山地は、花崗岩類と石英閃緑岩類よりなり、主軸は東北から西南方向をとっている。造山古墳の北側の山地は、標高が60～70mであり、孤立丘の性格を示す。それに対し、矢部貝塚の西に連なる山地は、標高が若干大きく、仕手倉山は223.8mに達する。足守川以東の山地は、花崗岩類と古生層が主体をなし、一部に白亜紀火山岩類や石英閃緑岩を含んでいる。北部の大平山は191.7m、南部の吉備中山は162.2mで、いずれもあまり高くはない。

これらの山地を刻んで流れ下る小河川は、山麓に狭くて傾斜の比較的大きい低地を発達させている。沖積錐、扇状地、開析谷、谷底低地などの地形がこれに当たるが、ここではそれらを一括して山麓緩斜面として示した。造山古墳の西方や南に発達する山麓緩斜面は谷底平野の性格がつよいのに対し、矢部貝塚付近や板倉北部の低地は傾斜が割合大きく、扇状地と解してよい。

自然堤防は、低地にあって、周りより若干高くなった地形である。形成後、人間によって輪郭が変えられたり、さらにその上に盛土されたものがほとんどである。高塚、政所、小西などの伝統的な集落の多くはこの地形面に立地する。この地域では、自然堤防の数は割合少ない。

氾濫原は、低地の一般面であり、足守川に沿ってもっとも広く展開している。平均傾斜は880分の1前後であり、瀬口と小西を結ぶ線以南は、三角洲の特徴を示す。この地形面は、主に農地となっているが、近年住宅地、工場、交通路などの進出が著しい。

旧河道は、低地の一般面を若干切り込んだ部分である。土地割も帯状に乱れている。空中写



図中のワクは遺跡近傍図の範囲

図1 地域概念図

真で見るとよくわかるが、現地でそれを検出することはかなり難しい。この地域には旧河道が無数に存在するが、地図にはその主なもののみを示した。

足守川右岸では、庚申山の北を屈曲しながら西から東に向かうものがまずあげられるが、これは前川として、今なおその名残りをとどめている。この規模の大きい旧河道は、かつての高梁川の一部がここを流れていたことを暗示させる。つぎは下流の瀬口付近から南に向かうものであり、ここにもわずかに細流をとどめている。

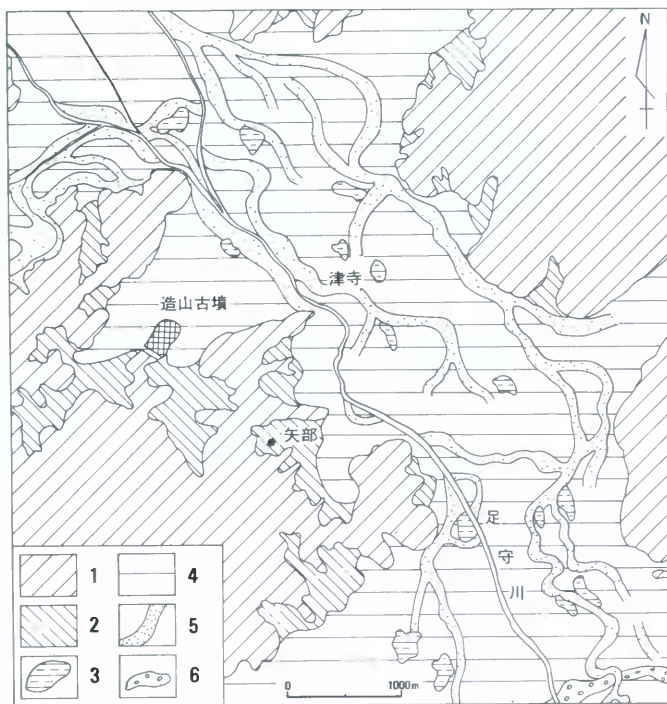
足守川左岸では、福崎の東方から高松に向かい、板倉、小西を通して庭瀬の西に至るものである。もっとも上流寄りでは、何本にも分岐しており、一時的に流れた河道の性格がつよい。それに対し、小西付近より下流の旧河道は長期的なものである。かつての足守川の本流はここ



に求めるべきであろう。

浜堤は地図の東南端にはほぼ東西に延びており、この微高地に庭瀬、中島などの集落が立地する。これは河川が運び出した土砂というよりは、波浪によって形成されたものであり、過去のある時代の汀線を示す。足守川の流れとはほぼ直角方向に走っている点に注目したい。

以上が、当地域の現在の微地形の概略である。河岸段丘が発達していないこと、自然堤防の数が少ないことなどが特徴といえる。空中写真から検出する旧河道は、せいぜい300年くらい前までのものであり、したがって、これは古代や中世の河道を示すものではない。ただし、古代や中世にも同じ場所を流れていたと考えられるところがないわけではない。足守川右岸の前川ぞいと同じく左岸の小西より下流部がそれにあたる。



1. 山地、丘陵地 2. 山麓緩斜面 3. 自然堤防 ●印は貝塚の場所  
4. 氾濫原 5. 旧河道 6. 浜堤

図2 地形分類図

## 2 表層地質の性格

過去の地形環境を知るためには、微地形のはかに、表層地質を調べる必要がある。地質は露頭観察のほか、既存のボーリング資料を用いたり、ハンドオーガー、ブルームサンプラー、検土杖などによって明らかにされる。ここでは、既存のボーリング資料によって、若干の考察を試みたい。収集しえた資料は山麓緩斜面で3地点、足守川低地で10地点である。

山麓緩斜面のボーリング資料は、山陽自動車道の建設に伴って作成されたものである。ここでは北からア〜ウの3地点について述べてみたい。アは、石英閃緑岩類を刻む谷の北よりの肩に近い部分にあたる。谷を埋める砂質ローム層は厚さが275cmであり、そのなかに腐植物を若

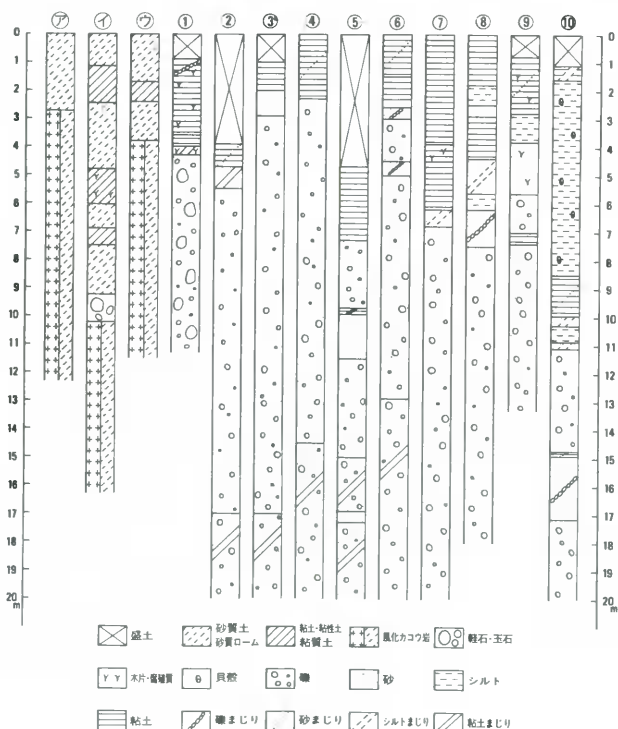


図3 地質柱状図

干混入している。地層は暗灰色を呈する。その下は褐灰色をした風化花崗岩（石英閃緑岩）である。

イは開析谷のはぼ中央部の深いところにあたり、二次堆積物が厚くて、層相はかなり複雑である。すなわち地表から深さ925cmまでは砂質土と粘性土が交互に堆積している。これは堆積環境が周期的に変化したことを物語る。砂質土は褐灰ないし暗灰色を示し、粘性土は緑灰ないし暗青灰色を示す。そしていずれの層にも腐植物を混入しているが、それは深さ480～605cmの粘性土層でもっとも多い。静水環境が長くつづいたためであろう。

ウは谷の南よりの肩に近い部分にあたり、この地点付近に矢部貝塚が存在する。谷を埋積する二次堆積物の厚さは、380cmである。ここでは暗灰ないし黄灰を示す砂質土の間に、厚さ70cmほどの粘性土が堆積する。この粘性土の<sup>14</sup>C年代を測定したところ、14230プラスマイナス470年の値が出た。（日本大学の小元久仁夫教授による。NU-076）これは最終氷期の終わりに近いころの堆積物といえる。外山秀一氏（皇学館大学）のプラント・オパール分析によると、この湿地にはヨシが一面に茂っていた。380cm以深は、淡褐色をした風化花崗岩となっている。なお二次堆積層はイとウの中間が最も厚く、130cm前後を示す。層相はかなり複雑である。

つぎに、足守川ぞい低地について見ることにする。①は、岡山市立高松中学校構内のボーリング資料である。ここでは90cmの盛土の下に、深さ430cmまで軟い粘土ないし砂混り粘土が堆積している。これは沖積層と考えてよいであろう。薄くて所々に木片を混えるのが特徴である。この沖積層の下は、よく締った玉石混り砂礫層となっている。この砂礫層は、基底礫層と考えてよい。

②～④は、津寺付近のインターチェンジから分岐して北に向かう高速道路ぞいの資料である。このルートでは、北から南にむかうにつれて沖積層は少しずつ厚くなっているが、全体として薄い。すなわち②地点でその厚さは160cm、インターチェンジにあたる⑤地点で260cm程度である。足守川の流路に近いが、堆積物は全般的に細かく、砂混り粘土ないし粘土が中心となっている。この層の下部はいずれもよく締まった砂礫層である。円礫が主体であり、風化はほとんど進んでいない。

⑥～⑧は、山陽自動車ぞいの地質資料である。⑥地点では沖積層の厚さが260～300cmであり、⑤地点とはほぼ同じ傾向を示す。上部150cmまでは褐灰色をした砂質粘土、その下260cmまでは褐灰ないし暗青灰色の粘土層で、硬い砂礫層との間に厚さ約40cmの砂混り砂層が堆積する。その東に位置する⑦地点では、沖積層が厚く深さは680cmに達する。地表近くの20cmと基底礫層に接するところに60cmほど砂を混えるほかは暗灰ないし黒灰色の粘土層であり、所々に腐植物を混じえている。

⑧地点では、地層の垂直的変化がやや複雑である。すなわち、粘土層とシルトないし砂層が交互に堆積し、その厚さは620cmとなっている。深さ440cm以深に若干の腐植物を混じえる。

⑨は、岡山市立加茂小学校構内の地質資料である。ここでは、沖積層の厚さが460cm前後となっている。深さ280cmまでは茶灰色をした砂混じり粘土層であり、腐植物を含む。その下約100cmは暗青灰色をしたシルト層で若干細砂を混じえる。そして、その下は暗青灰色の砂層で、ここにも若干の腐植物を含んでいる。

最後に、⑩地点は倉敷市庄公民館の敷地にあたる。ここでは、つぎの二つの点でこれまでの地層と異なる。その一つは沖積層が厚いことで、それは900cm近くに達する。つぎは深さ110～850cmまでの範囲に堆積するシルト層の中に貝殻を混入することである。貝の種類は不明だが、これは沖積世になって、海がこの地点にまで侵入したことを物語る。貝殻を含む層の下には粘土、砂、シルトなどが複雑に堆積している。

きわめて限られた資料からであるが、つぎのようなことはいえる。すなわち、この地域では沖積層は全般に薄く、その下に埋没段丘のようなかっこうで、砂礫層が堆積する。津寺付近では、氷期の谷は現在の足守川の流路よりかなり東にあった。沖積世になって、海は山陽新幹線の北まで侵入したが、津寺付近にまで達することはなかった。せいぜい図1に「吉備津」と記した付近までであろう。当時の足守川の河口は、このあたりにあり、深い入江をつくっていたらしい。

### 3 矢部貝塚付近の地形変化（図4参照）

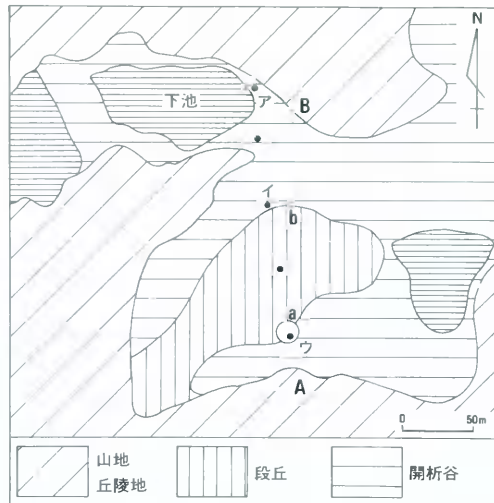
石英閃緑岩類よりなる基盤の東向き傾斜に、幅が割合広くて短い谷I（A—B）が形成された。背域は小さく、鞍部のようになっていた。

その後、この谷は徐々に埋積され、堆積物の厚さは10～12mに達した。堆積物は砂、シルト、粘土、腐植質粘土などであり、堆積環境の多様性を示す。また湿地の状況をしばしば呈したのである。この湿地は一時的な、そして海とは関係のない独立した静水域だったと考えてよい。

ほぼ1万年前から再び開析がはじまり、ここに新しい谷が2本（A—a、B—b）形成されるようになった。その結果、新しい2つの谷の間は舌状をした微高地（段丘）として残された。

平坦で、日当りのよいこの段丘面には、その後縄文人が住みつき、周りをゴミ捨て場とした。それが矢部貝塚である。貝塚は段丘面の南端、すなわち南寄りの谷（A—a）の左肩の部分に位置する。貝塚の年代は3950±110年であり、これは考古学サイドから導き出された値と一致する。当時の海は現在の山陽新幹線付近にあり、旧足守川の河口部は深い入江をなしてい

たとえられる。縄文人は、段丘から下りて3kmも離れた浜まで、貝を採りに行ったのである。貝塚地点の標高(15~16m)、それから当時の海岸線の位置から見て、貝塚が当時の汀線を示すものでないことは明らかである。その後、この段丘面の一部では採土が行われ、やがて耕地化された。また谷Ⅱでは、あちこちに溜池が作られたのである。



○印は貝塚の地点 ●印はボーリング地点

図4 矢部遺跡近傍の地形環境

## 7. 矢部奥田遺跡・矢部古墳群A・矢部堀越遺跡出土鉄滓の 金属学的調査

大澤正己

### 概要

矢部奥田遺跡・矢部古墳群A・矢部堀越遺跡の出土鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

〈1〉古墳時代前半～中頃から近世（土師器と近世椀共伴土壌もある）と年代幅をもつ矢部奥田遺跡の土壌出土鉄滓は、鉍石製錬滓であった。年代の遡る鉍石製錬炉の存在の可能性を秘めた鉄なので、今後周辺遺跡の調査に当っては十分なる注意が必要であろう。

〈2〉7世紀初・前半に属する矢部古墳群Aの11、37、38、45号墳出土鉄滓は、砂鉄精錬滓から鉄素材成分調整の精錬鍛冶滓、鉄器製作時の鍛錬鍛冶滓らが認められた。7世紀代の砂鉄を始発原料とする製鉄一貫作業を証明する古墳供献鉄滓と考えられる。

〈3〉矢部堀越遺跡の6世紀後半に比定される竪穴住居跡から出土した鉄滓は、鉄器製作時に排出された鍛錬鍛冶滓であった。又、同時期のX303横穴式石室検出の鉄滓も同質鉄滓である。両者は有機的な繋がりをもつものと考えられる。この鍛冶に供された鉄素材は鉍石系の可能性をもつ。

### 1. いきさつ

矢部奥田遺跡は、倉敷市矢部1974番地に所在する縄文時代から中世に亘る複合遺跡である。当遺跡内調査区北半部の谷に近い斜面から古墳時代前半期の径2m前後、深いもので2m以上の大型土壌が20基程検出された。この中の土壌6、7、9号から鉄滓が出土した。

又、この土壌群の南側には、同時期と想定される大規模な粘土採掘跡がある。これも径2m前後の円形もしくは楕円形の掘り方が連続して掘削されていて、この使用目的がどんなものだったのか注目されている。

矢部古墳群Aは倉敷市矢部に所在し、山陽自動車道用地内にかかるもののうち、南尾根側の標高90～115mの間に位置する古墳群のことである。この古墳群のなかで、11、37、38、45号墳から鉄滓が出土した。

矢部堀越遺跡は、倉敷市矢部の西端、ほぼ東西に走る旧山陽道（県道清音一真金線）に接し、矢部峠の東斜面に所在する。弥生時代中期から中世にかけての集落跡である。

此のうち、古墳時代後半の竪穴住居跡は調査区の東端・北東端に4軒散在し、H101とH106より鉄滓は検出された。更に同時期の横穴式石室（X303）があり、礎床と奥壁の一部が残

存し、遺物は須恵器の坏、高坏の破片が鉄滓と共に石室内より出土した。

以上の3遺跡は矢部地区に近接して所在する。これら各遺跡出土鉄滓の専門調査を岡山県古代吉備文化財センターより要請されたので金属学的調査を行なった。

## 2. 調査方法

### 2-1、供試材

Table.1に示す。3遺跡12点の鉄滓が調査試量となっている。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目			
					大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA	化学組成
YBO-1	矢部 奥田	ガラス質鉄滓	土壌6西半	近世(18C) ~古墳時代前半	48×60×35	60	○			○
2	"	鉱石製鉄滓	土壌7東区	古墳時代前半 ~中頃	33×35×18	27	○			○
3	"	"	pit178	14C前半	23×30×17	13	○		○	○
YBA-1	矢部古墳群A	鍛鉄鍛冶滓	11号墳丘裾部	—	38×50×17	48	○	○	○	○
2	"	砂鉄製鉄滓	37号石室床面	7C前半	25×35×20	17	○	○		○
3	"	精鉄鍛冶滓	"	"	22×28×23	20	○	○		○
4	"	"	38号石室内	7C初	25×30×25	21	○	○		○
5	"	ガラス質滓	" 前庭部	"	63×81×30	140	○			○
6	"	鍛鉄鍛冶滓	45号周溝内	—	50×73×35	132	○			○
YBH-1	矢部 堀越	鍛鉄鍛冶滓	X303 横穴式石室	6C後半	13×18×9	4	○	○		—
2	"	"	H101 竪穴住居	6C後半	38×55×25	73	○	○	○	○
3	"	"	H106 竪穴住居	"	47×84×33	215	○			○

### 2-2、調査項目

#### (1) 肉眼観察

#### (2) 顕微鏡組織

供試材の鉄滓は、よく水洗乾燥後中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#400、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3 $\mu$ と1 $\mu$ で仕上げている。

#### (3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の同定のため、マイクロ・ビッカース断面硬度 (Micro Vickers Hardness Test) の測定を行なった。試料は鏡面琢磨した試料 (顕微鏡試料併用) に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その荷重を除した商を硬度値としている。

#### (4) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得、これを標準試料とのX線強度の対比から、元素定量値を得ることができるコンピューター内蔵の新鋭機器である。旧器はX線マイクロアナライザーともEPMA (Electron Probe Micro Analyzer) とも呼ばれている。

#### (5) 化学組成

分析は次の方法で実施した。

容量法：全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO)。

燃焼容量法、燃焼赤外吸収法：炭素 (C)、硫黄 (S)。

ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 誘導結合プラズマ発光分光分析：二酸化珪素 ( $\text{SiO}_2$ )、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化カルシウム (CaO)、酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化マグネシウム (MgO)、酸化ナトリウム ( $\text{Na}_2\text{O}$ )、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )、五酸化磷 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )、バナジウム (V)、銅 (Cu)。

#### (6) 粘土の耐火度

耐火度の火熱に耐える温度とは、熔融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲル・コーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

### 3. 調査結果

#### 3-1、矢部奥田遺跡出土品

(1) YBO-1、炉壁溶解ガラス質鉄滓：土壌6西半出土、古墳時代前半～近世(18世紀)

##### ① 肉眼観察

炉材粘土の溶解した黒色無光沢のガラス質滓を付着した炉壁である。粘土側は小豆色を呈したスサ入りで高温焼成を受けている。

##### ② 顕微鏡組織

Photo. 1の①に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグに白色多角形状のマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) を晶出する。組織の大半は暗黒色ガラス質スラグのみで占められる。

##### ③ 化学組成

Table. 2に示す。粘土熔融物なので鉄分少なくガラス質主体となる。全鉄分 (Total Fe) 7.98%で、そのうち金属鉄 (Metallic Fe) 0.16%、酸化第一鉄 (FeO) 2.38%、酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 8.62%の割合である。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は85.63%と大部分である。二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) が1.27%と粘土としては高目傾向を示す。当地特有の成分傾向であろう。

なお、炉材粘土の耐火性を要求される成分としての酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) は、



17.98%であって特別高目組成ではなかった。媒溶剤的塩基性成分 (CaO+MgO) は3.0%であって鉄と滓の分離にはますます効いたと考えられる。

#### ④ 耐火度

炉壁粘土の耐火度は1310℃であった。当温度であれば製鉄炉材として使用に耐えたであろう。製鉄炉の炉材として要求性状は次の点である。Ⅰ 高温に加熱されても軟化しない事。Ⅱ 温度の急変にあっても膨張収縮による亀裂を起さぬ事。Ⅲ 鉄と滓の分離を促進する媒溶剤的成分 (CaO、MgO) を適当に含有する事などである。

(2) YBO-2、鉍石製錬滓、土壌7東区出土、古墳時代前半～中頃。

#### ① 肉眼観察

表皮は淡茶褐色を呈し、一部流動状肌をもつ炉内流動滓である。破片で破面が緻密で気泡は認められない。裏面は反応痕をもち、局部に粘土の噛み込みが認められた。

#### ② 顕微鏡組織

Photo. 1の②～④に示す。鉍物組成は、淡灰色長柱状ファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) 主体で、これに微小結晶の白色微小結晶のヴスタイト (Wüstite: FeO) が樹状晶として晶出する。基底は暗黒色ガラス質スラグである。鉍石製錬滓の典型的晶癖である。

#### ③ ビッカース断面硬度

Photo. 1の④にファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) の硬度測定の写真を示す。硬度値は673Hvである。ファイヤライトの文献硬度値が600～700Hvであるので<sup>②</sup>、該値はファイヤライトとして認定できる。

#### ④ 化学組成

Table. 2に示す。全鉄分 (Total Fe) は40.13%に対して金属鉄 (Metallic Fe) は0.14%、酸化第1鉄 (FeO) 44.30%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 7.94%の割合である。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は45.08%であり、このうち、塩基性成分の酸化カルシウム (CaO) が6.61%、酸化マグネシウム (MgO) が1.17%と高目が鉍石製錬滓の特徴である。二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 0.41%、バナジウム (V) 0.01%ら砂鉄特有元素は低目であった。他の随伴微量元素もおしなべて低目で、酸化マンガン (MnO) 0.41%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) 0.03%、硫黄 (S) 0.012%、五酸化燐 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ ) 0.43%、銅 (Cu) 0.003%であった。化学組成からも二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、バナジウム (V) 低くて酸化カルシウム (CaO) の多いことから鉍石製錬滓と判定できる。

(3) YBO-3 鉍石製錬滓 Pit178出土、14世紀遺物共伴。

#### ① 肉眼観察

表裏共に灰褐色の炉内流動滓の小破片である。緻密質。裏面に微細な石英粒を付着する。

## ② 顕微鏡組織

Photo. 1 の⑤～⑦に示す。鉱物組成はファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) と微小結晶のマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なお、⑤の組織において写真中央に白色鉱物がスポット的に検出されたので、CMA分析を行なった。全体の組織は、前述したYBO-2 鉱石製錬滓に準ずるものである。

## ③ CMA調査

Photo. 2 のSE (2次電子像) に示すファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) と微結晶の白色多角形のマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、基地の暗黒色ガラス質スラグの高速定性分析結果をTable. 3に提示した。

検出元素は、鉱物組成に見合ったもので、珪素 (Si)、カルシウム (CaO)、鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、チタン (Ti)、マグネシウム (Mg)、カリウム (K)、マンガン (Mn)、ナトリウム (Na) らである。

この結果を視覚化して面分析とした特性X線像をPhoto. 2に示す。分析元素の存在は、白色輝点の集中によって読み取ることとなる。ファイヤライトの盤状結晶には、鉄 (Fe) と、珪素 (Si) に白色輝点は集中する。なお、これにカルシウム (Ca) が加わるのが今回の特徴である。又、マグネタイトの方は、鉄 (Fe) に強く白色輝点が集中し、これに弱くチタン (Ti) が検出される。製鉄原料は磁鉄鉱が想定される。ガラス質成分の珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca) らはマグネタイトの個所は黒く抜ける。

次に顕微鏡組織のPhoto. 1の⑤に示した組織写真中央に存在する白色鉱物の分析結果をPhoto. 4とPhoto. 3に示している。白色鉱物は周縁部から還元が始まった状態で中央部にチタン (Ti) が濃縮する。チタン (Ti) - 鉄 (Fe) - アルミニウム (Al) の化合物で、磁鉄鉱の中での偏析個所かも知れない。鉱物組成の追求は、今後の研究課題として後日明らかにしてゆきたい。

## 3-2、矢部古墳群A出土品

(1) YBA-1、碗形状鍛錬鍛冶滓 11墳丘裾部出土。7世紀代?

### ① 肉眼観察

鍛冶炉の炉底部に堆積形成した30×40mm楕円形状の小型碗形滓である。外皮は赤褐色被膜の下に黒色多孔質肌を有している。

### ② 顕微鏡組織

Photo. 4の①～⑤に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite:  $\text{FeO}$ ) と淡灰色長柱状結晶のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なお、ヴスタイト粒内には茶褐色微小析出物のチタン (Ti) - 鉄 (Fe) 化合物のウルボスピネル (Ulvöspinel:  $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ) が析出する。鍛冶に供した鉄素材は砂鉄系である。

### ③ ビッカース断面硬度

Photo. 4 の⑤にヴスタイト粒硬度測定の写真を示す。硬度値は503Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hvであるので、ほぼ妥当な値を考える。

### ④ CMA調査

Photo. 7のSE（2次電子像）に示したヴスタイト（Wüstite: FeO）とその粒内析出物のウルボスピネル（Ulvöspinel:  $2\text{FeO}:\text{TiO}_2$ ）、ファイヤライト（Fayalite:  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）、基地の暗黒色ガラス質スラグの分析結果をTable. 5に示す。検出元素は、鉄（Fe）、珪素（Si）、アルミニウム（Al）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、ナトリウム（Na）となる。

以上の検出元素を視覚化し、面分析とした特性X線像がPhoto. 7である。白色粒状のヴスタイトには鉄（Fe）で白色輝点が集中し、その粒内析出物にはチタン（Ti）が重なって鉄（Fe）—チタン（Ti）析出物のウルボスピネル（Ulvöspinel:  $2\text{FeO}:\text{TiO}_2$ ）と同定できる。又、長柱状結晶のファイヤライトは、 $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ の化学式が表す様に、白色輝点は鉄（Fe）と珪素（Si）に集中する。それらの粒間の暗黒色ガラス質スラグには、珪素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリウム（K）、ナトリウム（Na）らガラス質成分が検出される。

### ⑤ 化学組成

Table. 2に示す。該品は鉄分が多くてガラス質成分が少ない。全鉄分（Total Fe）は57.26%あり、このうち、金属鉄（Metallic Fe）は0.16%、酸化第1鉄（FeO）は60.37%、酸化第2鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）14.55%の割合である。金属鉄の残留はほとんどない。ガラス質成分（ $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ ）は21.39%と少ない。砂鉄特有成分の二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）は1.73%、バナジウム（V）0.07%は砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛接時の排滓に分類される。

他の随伴微量元素は、低め傾向で酸化マンガン（MnO）0.20%、酸化クロム（ $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ）0.04%、硫黄（S）0.016%、五酸化リン（ $\text{P}_2\text{O}_5$ ）0.17%、銅（Cu）0.004%であった。

以上の成分構成は、鉄器製作時の鍛接工程の高温時排出滓の鍛錬鍛冶滓に分類される。鍛冶に供した鉄素材は、ややスラグ質成分を残存されたあまり品位の高いものでなかったと推定される。

### (2) YBA—2、砂鉄製錬滓 37号墳石室 7世紀前半

墳丘直径8m。周溝あり。横穴式石室現存長4.5m・幅1.1m・高1m。天井石・奥壁上半なし。須恵器・鉄釘・鉄鏃・鉄滓7点出土。

### ① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈する炉内残留滓の破砕品である。裏面は気泡が多く露出する。比重は大きい。

#### ② 顕微鏡組織

Photo. 4 の⑥～⑧に示す。鉱物組製は白色多角形状のウルボスピネル (Ulvöspinel:  $2\text{FeO} : \text{TiO}_2$ ) と、淡灰色長柱状結晶のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。

#### ③ ビッカース断面硬度

Photo. 4 の⑧にウルボスピネル結晶に硬度を測定した圧痕写真を示す。硬度値は657Hvである。マグネタイトの文献硬度値は500～600Hvである。マグネタイトにチタン分を固溶した分を考慮すると妥当な硬度値であろう。

#### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は44.22%で、このうち、金属鉄 (Metallic Fe) は0.09%、酸化第1鉄 (FeO) は41.79%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 16.99%の割合である。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は25.74%となる。砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は11.64%は始発原料砂鉄は酸性砂鉄と塩基性砂鉄の中間的レベルだったと想定される。バナジウム (V) は0.2%は低目気味であるが製錬滓レベルである。

他の随伴微量元素も一般的傾向である。酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) 0.76%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) 0.09%、硫黄 (S) 0.029%、五酸化リン ( $\text{P}_2\text{O}_5$ ) 0.42%、銅 (Cu) 0.005%であった。

#### (3) YBA-3、精錬鍛冶滓 37号墳石室出土 7世紀前半。(7点中2点調査)

##### ① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、滑らか面と粗鬆面を併せもち、木炭痕を残す。裏面は反応痕に気泡を露出する。

##### ② 顕微鏡組織

Photo. 5 の①～⑤に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイト (Wüstite: FeO) と淡茶褐色多角形のウルボスピネル (Ulvöspinel:  $2\text{FeO} : \text{TiO}_2$ )、淡灰色盤状結晶のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) それに基地の暗黒色ガラス質スラグである。なお、ヴスタイト粒内には微小結晶のウルボスピネルが析出する。砂鉄系荒鉄 (製錬炉から引き出された小鉄塊系遺物) の成分調整で排出された精錬鍛冶滓である。

##### ③ ビッカース断面硬度

Photo. 5 の④にヴスタイト、⑤にウルボスピネル結晶に硬度測定した圧痕写真を示す。ヴスタイトは498Hv、ウルボスピネルは707Hvであった。文献硬度値と比較して、ヴスタイトは妥当な数値であり、ウルボスピネルは若干高目傾向を呈している。

#### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。鉄分が多くて、ガラス質成分は少なく、かつチタンが減少して精錬鍛冶滓の傾向を呈するものである。全鉄分 (Total Fe) は59.05%に対して金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄 (FeO) 53.58%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 24.98%の割合である。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は11.192%と低目となり、このうちの酸化カルシウム (CaO) は0.72%と低減する。砂鉄特有元素の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) も7.15%と低くなる。バナジウム (V) も同様に0.09%まで下る。

他の随伴微量元素も低減され、酸化マンガン (MnO) 0.37%、酸化クロム (Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 0.03%、硫黄 (S) 0.010%、五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) 0.16%となるが、銅 (Cu) のみは鉄 (Fe) に固溶されるので全鉄分の増加で0.013%と上向している。

#### (4) YBA-4、精錬鍛冶滓 38号墳石室出土。7世紀初

本支群中最大で唯一東に開口する。墳丘直径13m。周溝有り。片袖式横穴式石室 現存長8.5m・幅1.6m・高1.9m。天井石3枚有り。須恵器・鉄斧・鉄鏃・鉄釘・鉄滓・窯壁・耳飾り(銀環)・人骨出土。

##### ① 肉眼観察

表皮は赤褐色を呈する粘土質鉄滓である。破面は青灰色多孔質。しかし、比重は大きい。

##### ② 顕微鏡組織

Photo. 5 の⑥～⑧に示す。鉱物組成はヴスタイト (Wüstite: FeO)、ウルボスピネル、ファイヤライト (Fayalite: 2 FeO・SiO<sub>2</sub>)、基地の暗黒色ガラス質スラグで構成される。砂鉄系の精錬鍛冶滓の晶癖である。

##### ③ 化学組成

全鉄分 (Total Fe) が51.48%と若干低く、ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は21.37%と高目であるが他成分は前述したYBA-3に準じた精錬鍛冶滓分類の成分であった。

#### (5) YBA-5、炉壁溶解ガラス質鉄滓 38号墳前庭部出土 7世紀初

##### ① 肉眼観察

表皮は黒色のガラス質スラグで緻密質。破面は煉瓦肌で小気泡無数。裏面はスサ入り粘土が付着する。

##### ② 顕微鏡組織

Photo. 6 の①～③に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグに砂鉄から還元された金属鉄が粒状に残存する。金属鉄は極低炭素網で炭化物は認められない。なお、暗黒色ガラス質スラグの一部には微細結晶のファイヤライト (Fayalite: 2 FeO・SiO<sub>2</sub>) が晶出する。

### ③ ビッカース断面硬度

金属鉄の硬度測定を行った。Photo. 6の③に示す。硬度値は127Hvであった。極低炭素鋼としては若干高目である。金属鉄の面積が小さい為にスラグの硬さが影響したものと考えられる。

### ④ 化学組成

Table. 2に示す。全鉄分 (Total Fe) は8.68%に対して金属鉄 (Metallic Fe) 0.08%、酸化第1鉄 (FeO) 4.32%、酸化第2鉄7.50%の割合である。顕微鏡組織で観察された金属鉄から、鉄分がもう少し高目で表れそうに思われたが量は少なかった。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は86.93%である。酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) が13.84%と低値であるので耐火度は1200~1300℃の間となろう。塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) は3.09%である。前述した矢部奥田遺跡の炉壁溶着スラグに近似する。二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 0.92%、他の随伴微量元素も大差ないところである。在地粘土の使用が想定できる。

### (6) YBA-6 精錬鍛冶滓 45号墳周溝内出土。7世紀代?

墳丘直径4m。周溝あり。横穴式石室現存長1.5m・幅80cm・高80cm。天井石一枚有り。周溝内から須恵器・土師器・鉄滓出土。

#### ① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、木炭痕と気泡を露出するが流動状肌をもつ。裏面は反応痕をもち鍛冶滓傾向を示す。

#### ② 顕微鏡組織

Photo. 6の④~⑧に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite: FeO)、木ずれ状淡灰色のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。鉄器製作時の折り返し鍛接作業での排出滓であろう。

#### ③ 化学組成

Tabel. 2に示す。全鉄分 (Total Fe) は42.00%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.13%、酸化第1鉄 (FeO) 36.16%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 19.68%の割合である。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) はやや高めで38.02%を有する。二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は0.90あり、砂鉄系鉄素材の鍛錬鍛冶滓成分である。バナジウム (V) 0.02%もこれを裏付ける。他の随伴微量元素も低目傾向であった。

### 3-3 矢部堀越遺跡出土品

#### (1) YBH-1、鍛錬鍛冶滓 X-303横穴式石室出土。6世紀後半

#### ① 肉眼観察

表裏共に灰褐色の被膜に覆われ、破面は黒色を呈する4gの小片。

## ② 顕微鏡組織

Photo. 8 の①～③に示す。鉱物組成は、白色粒状のよく発達したヴスタイト (Wüstite: FeO) が大量に晶出する。ヴスタイト粒間には、少量のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) と暗黒色ガラス質スラグが埋める。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。鉄器製作時の鍛接作業での排滓であろう。

## ③ ビッカース断面硬度

Photo. 8 の③にヴスタイト (Wüstite: FeO) の硬度圧痕写真を示す。硬度値は446Hvであった。文献硬度値の下限値であった。

## (2) YBH-2 鍛錬鍛冶滓 H-101 堅穴住居出土 6世紀後半

### ① 肉眼観察

表皮は赤褐色を呈し、滑らか肌を有す。破面は黒色で多孔質。裏面は灰褐色で一部粘土を付着する。碗形滓の欠損品であろう。

### ② 顕微鏡組織

Photo. 8 の④～⑥に示す。鉱物組成はヴスタイト (Wüstite: FeO) とファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、暗黒色ガラス質スラグから構成される。ヴスタイトの晶出量は少ないが鍛錬鍛冶滓に分類される。なおヴスタイト粒内には微小析出物のヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) が認められた。

### ③ ビッカース断面硬度

Photo. 8 の⑥に硬度圧痕写真を示す。硬度値は488Hvであった。文献硬度値の範ちゅうに入る。

### ④ CMA調査

ヴスタイト粒内に微小黒色斑点状の析出物がみつかったので同定した。Photo. 9のSE (2次電子像) に示したヴスタイト (Wüstite: FeO) とその粒内析出物、ファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、暗黒色ガラス質スラグである。Table. 6の高速定性分析で検出された元素は、Si、Fe、Ca、Al、Mg、Ti、K、Mnらである。鉱物組成に見合っている。

Photo. 9に特性X線像を示す。分析元素の存在は白色輝点の集中度で見分ける面分析である。白色粒状のヴスタイトには、FeOの化学式で示される様に鉄 (Fe) にのみ白色輝点が集中し、ガラス質成分の珪素 (Si) やアルミニウム (Al)、カルシウム (Ca) らは黒く抜ける。

ヴスタイト内の微小析出物には鉄 (Fe) とアルミニウム (Al) に白色輝点が集中する。鉄とアルミニウムの化合物はヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) である。なお、チタン (Ti) が極く微量ヴスタイト粒界に沿って認められる。該材の始発原料は磁鉄鉱が想定される。

### ④ 化学組成





Table 3 矢部奥田遺跡出土鉄石製録洋 (YBO-3①) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POSNO. 2  
 COMMENT : YBD-3 (その1)  
 ACCEL.VOLT(KV): 15  
 PROBE CURRENT : 5.000E-06 (A)  
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

06-FEB-82

CH (1) TAP				CH (2) PET				CH (3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	160	*****	OTI-k	2.75	207	*****++	BI-1	1.14	56	*****
RE-m	6.73	686	*****++	BA-1	2.78	78	*****	PB-1	1.18	56	*****++
SR-1	6.86	165	*****	CS-1	2.89	71	*****	TL-1	1.21	58	*****++
W -m	6.98	171	*****	CS-k	3.03	70	*****	HO-1	1.24	61	*****
OSI-k	7.13	8087	*****++++	I -1	3.15	72	*****	AU-1	1.28	54	*****
TA-m	7.25	184	*****	TE-1	3.29	68	*****	PT-1	1.31	54	*****
RB-1	7.32	125	*****	OCA-k	3.36	4034	*****++++	IR-1	1.35	48	*****
HP-m	7.54	104	*****	SB-1	3.44	61	*****	OS-1	1.39	48	*****
LU-m	7.84	78	*****	SN-1	3.60	37	*****	ZN-k	1.44	50	*****
YB-m	8.15	80	*****	OK -k	3.74	182	*****++	CU-k	1.54	37	*****
AL-k	8.34	1107	*****++++	IN-1	3.77	32	*****	NI-k	1.66	38	*****+
BR-1	8.37	254	*****	U -m	3.91	33	*****	TM-1	1.73	27	*****
ER-m	8.82	39	*****	CD-1	3.96	37	*****+	CO-k	1.79	36	*****+
SE-1	8.99	43	*****	TH-m	4.14	25	*****	OPE-k	1.94	3890	*****++++
HO-m	9.20	42	*****	AG-1	4.15	25	*****	GD-1	2.05	18	*****+
DY-m	9.59	29	*****	PD-1	4.37	25	*****+	MN-k	2.10	80	*****++++
AS-1	9.67	35	*****	RH-1	4.60	12	*****	EU-1	2.12	11	*****
OMG-k	9.89	189	*****++++	CL-k	4.73	11	*****	SM-1	2.20	15	*****+
TB-m	10.00	38	*****	RU-1	4.85	18	*****	CR-k	2.29	11	*****
QE-1	10.44	24	*****	S -k	5.37	11	*****+	ND-1	2.37	7	*****
OA-1	11.29	15	*****	MO-1	5.41	11	*****+	PR-1	2.46	6	*****
ONA-k	11.91	35	*****+	NB-1	5.72	6	*****	V -k	2.50	7	*****
**	14.72	6	*****	ZR-1	6.07	3	*****	CE-1	2.56	7	*****+
F -k	18.32	5	*****	P -k	6.16	11	*****	LA-1	2.67	3	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

NA MG AL SI K CA TI MN PE 一検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

Photo 2 の SE (2 次電子像) によるファイアライト (Fayalite: 2FeO · SiO<sub>2</sub>)、微小マグネサイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)、基底の黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。硅素 (Si) 8,087、カルシウム (Ca) 4,034、鉄 (Fe) 3,890、アルミ (Al) 1,107、チタン (Ti) 207、マグネシウム (Mg) 189、カリウム (K) 182、マンガン (Mn) 60、ナトリウム (Na) 35 となる。検体組成に見合った検出元素である。

Table 4 矢部奥田遺跡出土鉄石製録洋 (YBO-3②) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POSNO. 2  
 COMMENT : YBD-3 (その2)  
 ACCEL.VOLT(KV): 15  
 PROBE CURRENT : 5.000E-06 (A)  
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

07-FEB-82

CH (1) TAP				CH (2) PET				CH (3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	163	*****	OTI-k	2.75	5598	*****++++	BI-1	1.14	56	*****
RE-m	6.73	476	*****++	BA-1	2.78	121	*****	PB-1	1.18	60	*****
SR-1	6.86	148	*****	CS-1	2.89	78	*****	TL-1	1.21	56	*****++
W -m	6.98	159	*****	CS-k	3.03	74	*****	HO-1	1.24	60	*****+
TA-m	7.13	5580	*****++++	I -1	3.15	70	*****	AU-1	1.28	56	*****
TI-k	7.25	161	*****	TE-1	3.29	48	*****	PT-1	1.31	50	*****
RB-1	7.32	123	*****	OCA-k	3.36	2193	*****++++	IR-1	1.35	65	*****
HP-m	7.54	122	*****	SB-1	3.44	47	*****	OS-1	1.39	49	*****
LU-m	7.84	89	*****	SN-1	3.60	40	*****	ZN-k	1.44	53	*****
YB-m	8.15	72	*****	OK -k	3.74	71	*****+	CU-k	1.54	37	*****
AL-k	8.34	1094	*****++++	IN-1	3.77	28	*****	NI-k	1.66	28	*****
BR-1	8.37	265	*****	U -m	3.91	37	*****+	TM-1	1.73	27	*****
ER-m	8.82	49	*****	CD-1	3.96	33	*****+	CO-k	1.79	41	*****+
SE-1	8.99	45	*****	TH-m	4.14	24	*****+	OPE-k	1.94	3857	*****++++
HO-m	9.20	38	*****	AG-1	4.15	21	*****	OD-1	2.05	17	*****
DY-m	9.59	31	*****	PD-1	4.37	17	*****	MN-k	2.10	68	*****++++
AS-1	9.67	34	*****	RH-1	4.60	18	*****	EU-1	2.12	14	*****
OMG-k	9.89	215	*****++	CL-k	4.73	15	*****	SM-1	2.20	9	*****
TB-m	10.00	31	*****	RU-1	4.85	14	*****	CR-k	2.29	14	*****
QE-1	10.44	23	*****	S -k	5.37	9	*****	ND-1	2.37	11	*****
OA-1	11.29	18	*****	MO-1	5.41	10	*****	PR-1	2.46	10	*****
ONA-k	11.91	52	*****+	NB-1	5.72	6	*****	V -k	2.50	16	*****
**	14.72	10	*****	ZR-1	6.07	6	*****	CE-1	2.56	4	*****
F -k	18.32	4	*****	P -k	6.16	14	*****+	LA-1	2.67	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

NA MG AL SI K CA TI MN PE 一検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

Photo 2 の SE (2 次電子像) に示した 100μ 程度の結晶と微小ファイアライト (Fayalite: 2FeO · SiO<sub>2</sub>)、基底の黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。チタン (Ti) 5,598、硅素 (Si) 5,580、鉄 (Fe) 3,857、カルシウム (Ca) 2,193、アルミ (Al) 1,094、マグネシウム (Mg) 215、カリウム (K) 77、マンガン (Mn) 68、ナトリウム (Na) 52 である。不定形 100μ 化合物は Ti-Fe-Al 化合物であるが、多少的に存在するものがある。

Table 5 矢部古墳群A11号墳出土埴形鏡鍍銀治滓 (YBA-1) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POSNO 1  
 COMMENT : YBA-1  
 ACCEL.VOLT(KV): 15  
 PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)  
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

08-FEB-92

CH (1) TAP				CH (2) PET				CH (3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	8.45	205	*****	OTI-k	2.75	625	*****+++++	BI-1	1.14	89	*****
RE-m	8.73	227	*****	BA-1	2.78	111	*****	PD-1	1.18	70	*****
SR-1	8.88	151	*****	CS-1	2.89	86	*****	TL-1	1.21	78	*****
W -m	8.98	152	*****	CS-k	3.03	83	*****	HO-1	1.24	73	*****
OSI-k	7.13	2892	*****+++++	I -1	3.15	89	*****	AU-1	1.28	71	*****
TA-m	7.25	137	*****	TE-1	3.29	84	*****	PT-1	1.31	72	*****
RB-1	7.32	132	*****	OCA-k	3.36	431	*****+++++	IR-1	1.35	60	*****
HF-m	7.54	127	*****	SB-1	3.44	93	*****	OS-1	1.39	71	*****
LU-m	7.84	83	*****	SN-1	3.60	49	*****	ZN-k	1.44	58	*****
YB-m	8.15	74	*****	OK -k	3.74	324	*****+++++	CU-k	1.54	52	*****
AL-k	8.34	764	*****+++++	IN-1	3.77	36	*****	NI-k	1.66	39	*****
BR-1	8.37	218	*****+	U -m	3.91	45	*****	TM-1	1.73	38	*****
ER-m	8.82	47	*****	CD-1	3.98	30	*****	CO-k	1.79	38	*****
SE-1	8.99	48	*****	TH-m	4.14	30	*****	PE-k	1.94	853	*****+++++
HO-m	9.20	34	*****	AG-1	4.15	28	*****	GD-1	2.05	21	*****
DY-m	9.59	33	*****	PD-1	4.37	24	*****	MN-k	2.10	33	*****+
AS-1	9.87	43	*****	RH-1	4.80	23	*****	SU-1	2.12	13	*****
OMO-k	9.89	137	*****++	CL-k	4.73	17	*****	SM-1	2.20	18	*****+
TB-m	10.00	28	*****	RU-1	4.85	21	*****+	CR-k	2.29	17	*****+
OE-1	10.44	24	*****	S -k	5.37	11	*****	ND-1	2.37	4	*****
GA-1	11.29	19	*****	MO-1	5.41	11	*****	PR-1	2.46	8	*****
NA-k	11.91	34	*****+	NB-1	5.72	6	*****	V -k	2.50	12	*****
**	14.72	7	*****	ZR-1	8.07	8	*****	CE-1	2.58	10	*****+
F -k	18.32	3	***	P -k	8.16	9	*****	LA-1	2.87	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

NA MG AL SI K CA TI MN PE 一検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

MN RU OD RE OS

Photo 7のSE (2次電子像) に示したグスタイト (Wüstite: FeO) とその粒内に析出する霏小晶ファイファイライト (Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>)、黒色の暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 6,863、錳 (Mn) 2,154、アルミ (Al) 782、チタン (Ti) 625、カルシウム (Ca) 431、カリウム (K) 324、マグネシウム (Mg) 137、ナトリウム (Na) 24となる。観測組成と見合った検出元素でチタン (Ti) の存在から磁鉄系と判る。

Table 6 矢部堀越遺跡H101堅穴住居跡出土鉄滓 (YBH-2) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POSNO 1  
 COMMENT : YBH-2  
 ACCEL.VOLT(KV): 15  
 PROBE CURRENT : 4.983E-08 (A)  
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

07-FEB-92

CH (1) TAP				CH (2) PET				CH (3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	8.45	178	*****	OTI-k	2.75	187	*****+++++	BI-1	1.14	67	*****
RE-m	8.73	284	*****	BA-1	2.78	105	*****	PD-1	1.18	73	*****
SR-1	8.86	177	*****	CS-1	2.89	80	*****	TL-1	1.21	80	*****
W -m	8.98	189	*****	CS-k	3.03	70	*****	HO-1	1.24	80	*****
OSI-k	7.13	7154	*****+++++	I -1	3.15	73	*****	AU-1	1.28	57	*****
TA-m	7.25	175	*****	TE-1	3.29	54	*****	PT-1	1.31	58	*****
RB-1	7.32	142	*****	OCA-k	3.36	515	*****+++++	IR-1	1.35	57	*****+
HF-m	7.54	93	*****	SB-1	3.44	53	*****	OS-1	1.39	55	*****
LU-m	7.84	96	*****	SN-1	3.60	39	*****	ZN-k	1.44	58	*****+
YB-m	8.15	71	*****	OK -k	3.74	109	*****	CU-k	1.54	44	*****
AL-k	8.34	444	*****+++++	IN-1	3.77	35	*****	NI-k	1.66	38	*****+
BR-1	8.37	121	*****+	U -m	3.91	31	*****	TM-1	1.73	31	*****
ER-m	8.82	47	*****	CD-1	3.98	29	*****	CO-k	1.79	41	*****+
SE-1	8.99	48	*****	TH-m	4.14	33	*****	PE-k	1.94	5971	*****+++++
HO-m	9.20	37	*****	AG-1	4.15	33	*****	GD-1	2.05	24	*****
DY-m	9.59	37	*****+	PD-1	4.37	21	*****	MN-k	2.10	44	*****++
AS-1	9.87	38	*****	RH-1	4.80	19	*****	SU-1	2.12	16	*****+
OMO-k	9.89	238	*****++	CL-k	4.73	15	*****	SM-1	2.20	14	*****+
TB-m	10.00	37	*****	RU-1	4.85	12	*****	CR-k	2.29	13	*****+
OE-1	10.44	27	*****	S -k	5.37	12	*****	ND-1	2.37	8	*****
GA-1	11.29	17	*****	MO-1	5.41	7	*****	PR-1	2.46	7	*****
NA-k	11.91	23	*****	NB-1	5.72	10	*****+	V -k	2.50	8	*****
**	14.72	10	*****	ZR-1	8.07	6	*****	CB-1	2.58	7	*****
F -k	18.32	4	***	P -k	8.16	8	*****+	LA-1	2.87	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

MG AL SI K CA TI MN PE 一検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

BR I OD RE

Photo 9のSE (2次電子像) に示したグスタイト (Wüstite: FeO) とその粒内に析出する霏小晶ファイファイライト (Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>)、黒色の暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。錳 (Mn) 7,154、鉄 (Fe) 5,971、カルシウム (Ca) 515、アルミ (Al) 444、マグネシウム (Mg) 238、チタン (Ti) 187、カリウム (K) 105、マンガン (Mn) となる。

Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は43.75%に対して金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第1鉄 (FeO) 43.01%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 14.65%の割合である。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) は38.68%を有する。このうち酸化カルシウム (CaO) は2.20%と多い。二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.34%、バナジウム (V) 0.01%と両者が低めで、銅 (Cu) が0.021%を高めを勘案すると、該品は鉱石系鉄素材の鍛錬鍛冶滓に分類できる。

(3) YBH-3 半裁椀形鍛錬鍛冶滓 H-106堅穴住居跡出土。6世紀後半

① 肉眼観察

灰褐色を呈し、平坦面をもつ椀形滓の½欠損品である。裏面は反応痕をもち、気泡を露出する。

② 顕微鏡組織

Photo. 8の⑦に示す。鉱物組成は大きく成長した白色粒状のヴスタイト (Wüstite: FeO) と淡灰色長柱状結晶のファイヤライト (Fayalite: 2 FeO · SiO<sub>2</sub>)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成

Table. 2 に示す。前述したYBH-2鉄滓に準じた成分系である。同系成分と見做される。

#### 4. まとめ

古墳時代前半・中頃の可能性をもつが、中・近世陶器を混入させた矢部奥田遺跡の土壙出土の鉱石製錬滓、6世紀後半に比定される矢部堀越遺跡の横穴式石室及び堅穴住居跡から出土した鉱石系鍛錬鍛冶滓、7世紀初・前に属する矢部古墳群Aに供献された製鉄一貫作業の砂鉄系鉄滓 (製錬滓・精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓) らは、倉敷市矢部地区の近接した地域で検出された。

列島内での製鉄開始時期が定着しない現在、限定された小地域で、古墳時代の鉄生産の動向が伺えるのは稀有のことである。以下にこの3遺跡の特質を述べておく。

矢部奥田遺跡から出土した鉄滓の鉱物組成は、ファイヤライト (Fayalite: 2 FeO · SiO<sub>2</sub>) 主体でこれに微小結晶のヴスタイト (Wüstite: FeO) がマグネタイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) を晶出した典型的鉱石精錬滓の晶癖を示す。化学組成は全鉄分 (Total Fe) 32~41%台、酸化カルシウム (CaO) 6.61~9.61%と高く、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.41~0.87%であって、岡山県の総社市や津山市出土鉱石製錬滓に近似する<sup>9)</sup>。

ただし、古墳時代前半・中頃の土壙と確定できるのは土壙7 (YBO-2鉄滓) であって、土壙6は、古墳時代前半の土師器と近世椀が共伴している。ここからは炉壁片の出土である。又、Pit178出土鉄滓は14世紀前半の遺物を伴うとされて、鉄滓の推定年代に幅を持せざるをえない状況である。現在迄のところ、岡山県下で中世の鉱石製錬滓は存在していない。鉱石製錬滓は古墳時代から古代に集中している。

この遺跡の鉱石製錬滓は、列島内の製鉄始源にも拘る問題なので短絡的には捉えずに慎重に検討すべきであろう。裏付けデータのの一つとして粘土掘削墳の胎土と土壌 6 の炉壁粘土との成分比較も重要と考える。

矢部堀越遺跡は、6世紀後半の鉱石系鍛冶滓を出土する。遺溝は横穴式石室と竪穴住居跡である。竪穴住居跡出土鉄滓の一つは鍛冶炉の炉底に堆積された碗形滓である。鉄器製作に際し折り返し鍛接作業時の排出鉄滓である。鉱物組製は大きく成長した白色粒状のヴスタイト (Wüstite: FeO) が大量に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。化学組製は、全鉄分 (Total Fe) 40~44%台、酸化カルシウム (CaO) 2.2~2.5%、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 0.32~0.34%と低めで、銅 (Cu) を0.021~0.027%と高めで鉱石系を表わす。

矢部地区での5~6世紀代は鉱石製錬が先行し、鉄器製作へと繋がってゆく。地元の原料事情と技術の系譜であろうか。6世紀後半代は他地域では砂鉄製錬も盛行期に入っている筈である。

矢部古墳群Aは11、37、38、45号墳と7世紀初・前に比定されて鉄滓供献の古墳である。出土鉄滓は、酸性砂鉄を木炭でもって還元した製錬滓、還元された小鉄塊の成分調整を行って鉄素材とした時の排出滓の精錬鍛冶滓、出来た鉄素材を用いて鉄期製作時、鍛接加工時の排出による鍛錬鍛冶滓らが検出された。この古墳群の鉄滓は製鉄一貫作業を表わすものである。当地において7世紀初になって砂鉄系が認められて完成された鉄生産体制が組れたことになる。

破損は著しく、遺物関係も定かでないが、大型古墳で製錬・精錬遺物が副葬されて小型古墳で鍛錬鍛冶となっている。製鉄集団中で技術レベルの扱いの差が葬送儀礼に表われたのであろうか。今後の研究課題としたい。Table. 7に矢部古墳Aの各古墳と鉄滓の化学組成と鉱物組成の関係を示しておく。

Table. 7 矢部古墳群Aの各古墳と出土鉄滓の組成関係

滓分類 墳別 組成	製 錬 滓		精 錬 鍛 冶 滓		鍛 錬 鍛 冶 滓	
	37号墳 (YBA-2)	38号墳(炉壁) (YBA-5)	37号墳 (YBA-3)	38号墳 (YBA-4)	11号墳 (YBA-1)	45号墳 (YBA-6)
TiO <sub>2</sub>	11.64	(0.92)	7.15	7.03	1.73	0.90
V	0.18	(0.01)	0.02	0.17	0.09	0.27
CaO	2.36	(1.87)	0.73	1.22	1.54	3.05
Total Fe	44.22	(8.62)	59.05	51.48	57.26	42.0
鉱物組成	U+F	(ガラス質)	W (粒内微小U) + U+F		W+F	

U: Ulvöspinel, 2FeO · TiO<sub>2</sub> F: Fayalite, 2FeO · SiO<sub>2</sub> W: Wüstite, FeO

砂鉄系鉄滓の各工程成分の指標となるのが二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) である。製錬から精錬鍛冶、鍛錬鍛冶と工程が進むなかで濃度は減少してゆく。この傾向は砂鉄系一般に言えることであるが、絶対値は原料砂鉄によって異なってくるので地域差が大きい。

最後にTable. 2に示した各遺跡から出土した鉄滓のチタン (Ti) とバナジウム (V) の含有量

を鉄 (Total Fe) で除した  $Ti/T \cdot Fe$ 、と  $V/T \cdot Fe$  で相関図を作成したのが Fig. 1 である。Table. 7 の  $TiO_2$  の減少傾向をグラフ化したものである。各試料は45度の直線上に或るバラツキをもちつつも分布する。砂鉄製錬滓は右上方にシフトし、精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓らは左下方と移動する。鉄製品は更に左下へと分布すると考えられる。今後共データの蓄積を計りつつ鉄器の産地固定の基礎資料としてゆきたいと考える次第である。

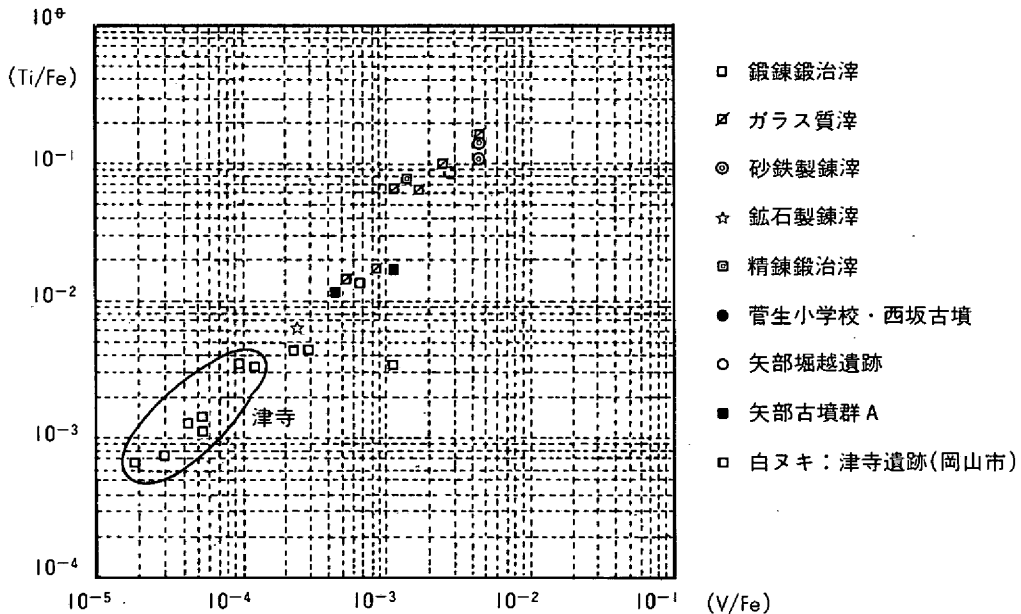


Fig.1 倉敷市矢部地区出土鉄滓のTiとVの相関図

注

注① 岡山県古代吉備文化財センター『岡山県埋蔵文化財報告』18 1988よりの引用。

注② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

符号	硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値※1
	Fayalite ( $2FeO \cdot SiO_2$ ) ※2	560,588	600~700Hv
	磁鉄鉱 ※2	513,506	530~600Hv
	マルテンサイト ※2	641	633~653Hv
	Wüstite ( $FeO$ ) ※3	481,471	450~500Hv
	Magnetite ( $Fe_3O_4$ ) ※4	616,623	500~600Hv
	白鑄鉄 ※5	563,506	458~613Hv
	亜共析鋼 (c : 0.4%) ※5	175	160~213Hv

- ※1 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968他。
- ※2 滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物 7C末~8C初
- ※3 兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓 4C後半
- ※4 新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓 Ulvöspinel 平安時代
- ※5 大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鑄造鉄斧 古墳時代前期
- ※6 埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鉄 5C中頃

注② 大澤正己「日本古代製錬遺溝出土鉄滓の金属学的調査」『たたら研究』第29号 たたら研究会 1988. 12

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6

(本文)

1993年3月20日 印刷

1993年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

発行 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所  
岡山県教育委員会

印刷 西日本法規出版株式会社

# 山陽自動車道 建設に伴う発掘調査 6

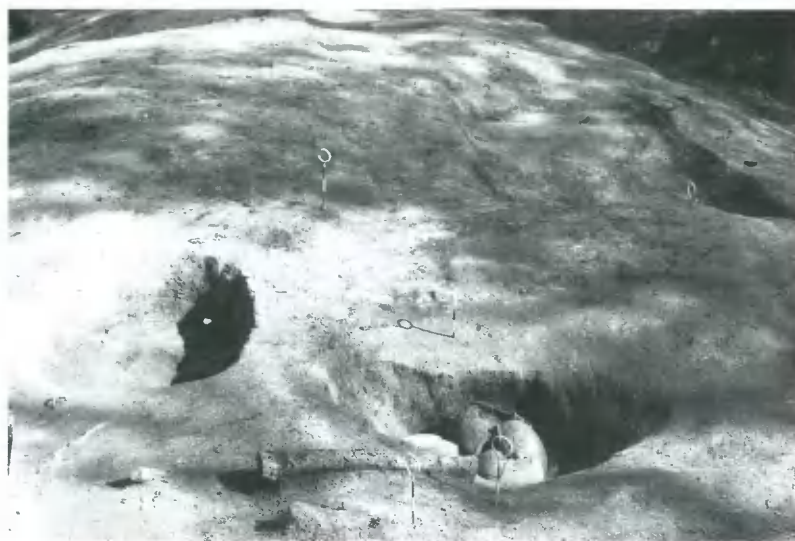
(写真図版)

1. 矢部古墳群 A
2. 矢部古墳群 B
3. 矢部大冢遺跡
4. 矢部奥田遺跡
5. 矢部堀越遺跡

1993・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会



1. 58号墳全景（南西から）



2. 土壇-10（北から）





1. 壺棺-2 (南から)



2. 壺棺-3 (北から)



1. シストー2 (北から)



2. シストー2 天井石除去後 (西から)

図版 4



1. 石蓋土壙-2 (東から)



2. 石蓋土壙-2 完掘後 (西から)



1. 石蓋土壙-3 (西から)



2. 石蓋土壙-3 完掘後 (西から)

図版 6



1. 57号墳全景（北から）



2. 57号墳全景（西から）



1. 54号墳全景（東から）



2. 54号墳全景（東から）



図版 8



1. シスター-1 (西から)



2. シスター-1 頭骨検出状況 (東から)



1. 53号墳全景 (南から)



2. 53号墳全景 (南から)





1. 10号墳全景（西から）



2. 土壙-1（北から）



3. 鉄斧出土状況（南から）



1. 古墳群A3・4区 (北から)



2. 塚-1・2 (北から)

図版12



1. 38号墳発掘前（東から）



2. 38号墳天井石除去後（東から）



1. 38号墳遺物出土状況（東から）



2. 38号墳石材除去後（東から）



図版14



1. 37号墳発掘前（北から）



2. 37号墳遺物出土状況（南から）



1. 36号墳発掘前（北から）



2. 36号墳遺物出土状況（東から）



1. 45号墳発掘前（東から）



2. 45号墳全景（北から）



1. 45号墳石室（南から）



2. 45号墳石室（北から）





1



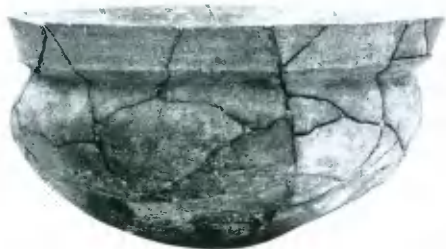
3



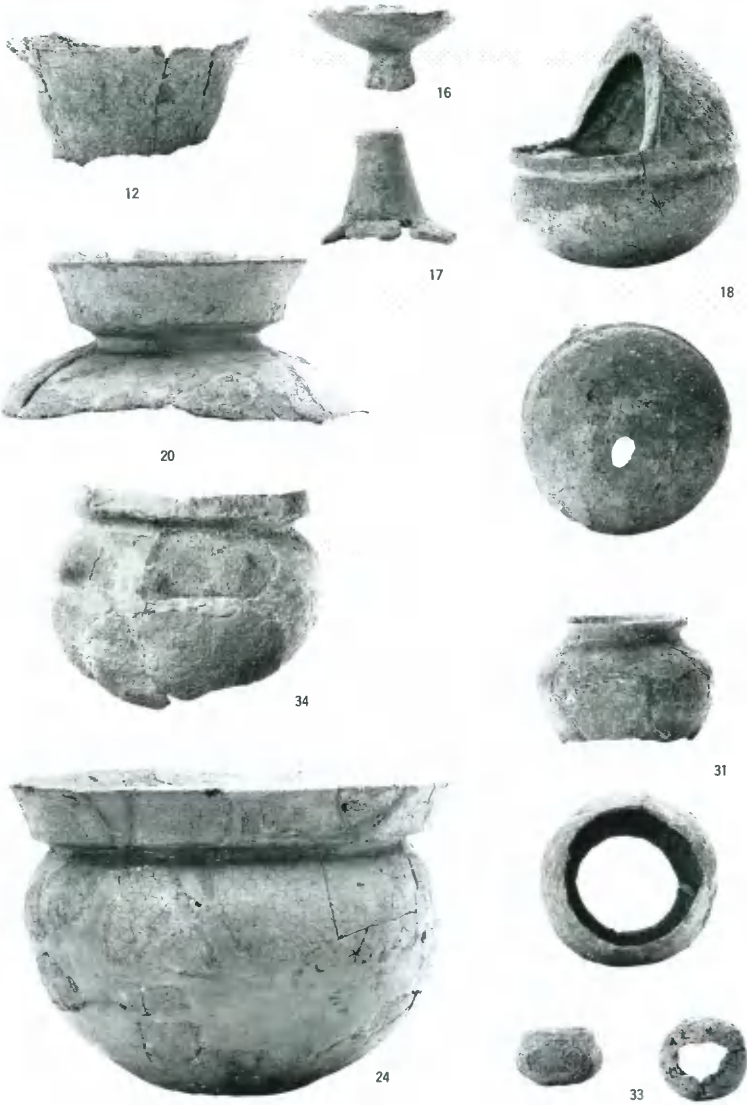
4



8



45



溝出土の土器



51



61



53



62



55



64



58



65



73



74



78



80



79



81



82



83



84



85



86

1. 37号墳出土の土器



87



95



88



97



90



94



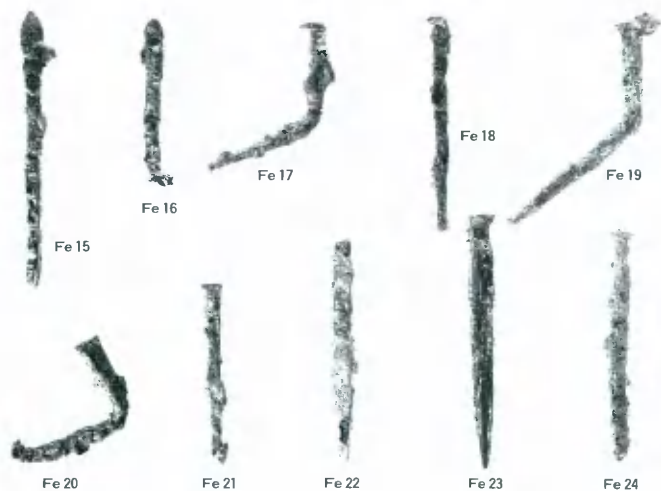
98

2. 36号墳出土の土器



各区出土鉄器

図版24



1. 37号墳出土鉄器



2. 38号墳出土耳飾り



3. 各区出土石鏃



1. 調査前の遠景（東から）



2. 表土除去後の遠景（東から）





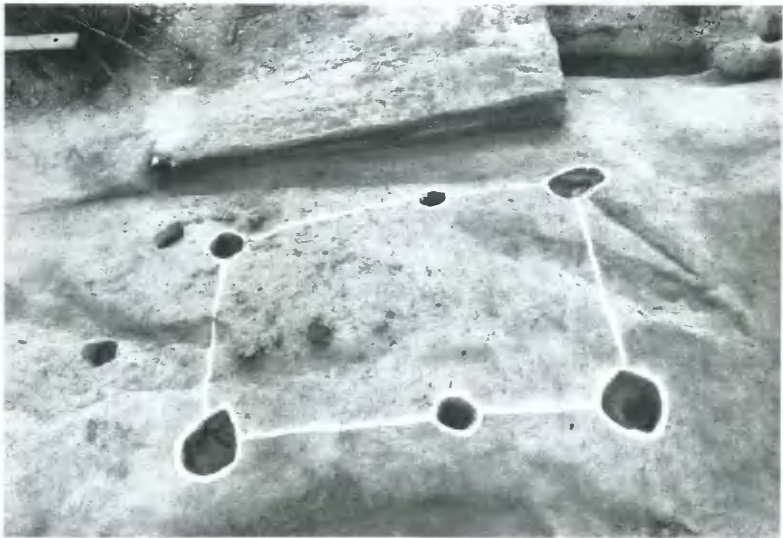
1. 竪穴住居1 (北から)



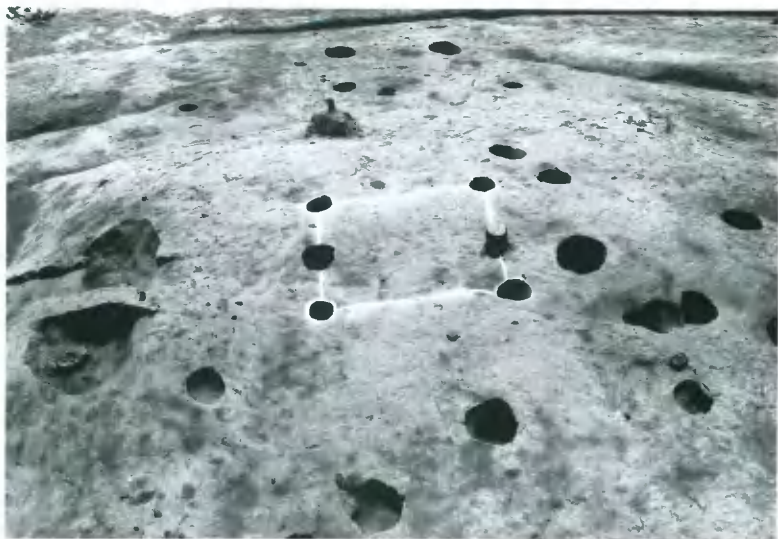
2. 竪穴住居2 (北から)



1. 建物1 (東から)



2. 建物2 (北から)



1. 建物3 (北西から)



2. 竪穴住居1、建物1、2の全景 (南西から)



1. 18号墳主体部の全景（南から）



2. 18号墳主体部枕石（東から）



図版30



1. 19号墳主体部の全景（北西から）



2. 19号墳主体部木棺痕跡（南西から）



1. 42号墳主体部の全景 (北西から)



2. 46号墳の全景 (北西から)



1. 特殊埴輪出土状態



2. 鼓形器台出土状態



1. 44号墳主体部検出状態（北から）



2. 44号墳主体部 蓋石除去後（北から）



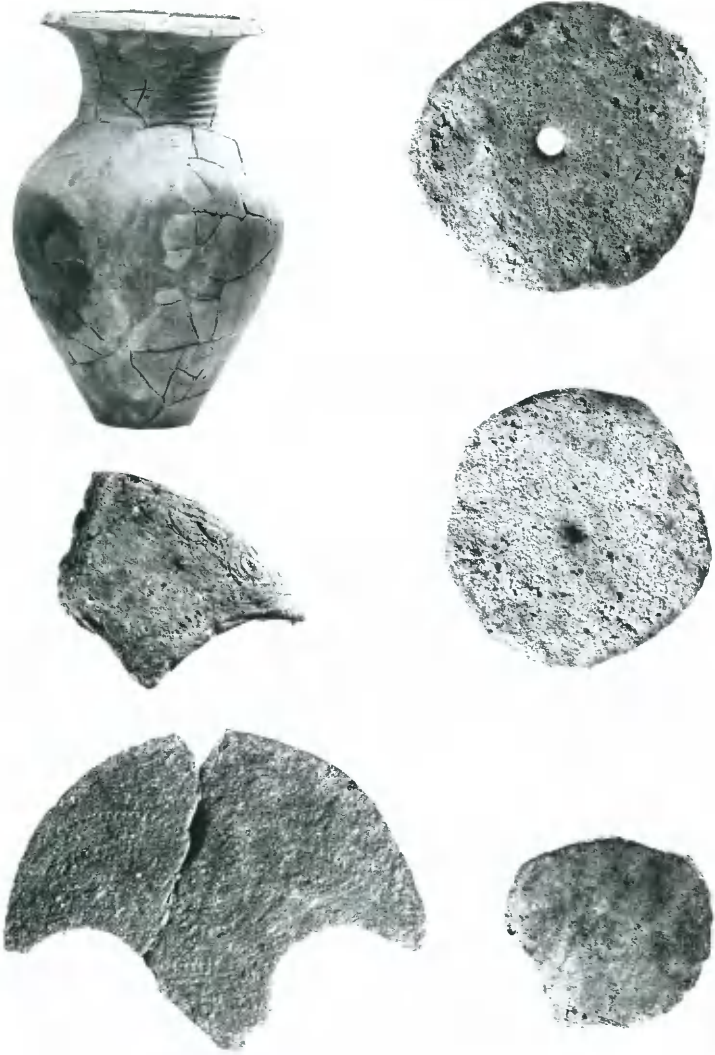
図版34



1. 43号墳主体部の全景（西から）



2. 47号墳主体部の全景（南から）



出土遺物（弥生土器，分銅形土製品，紡錘車）

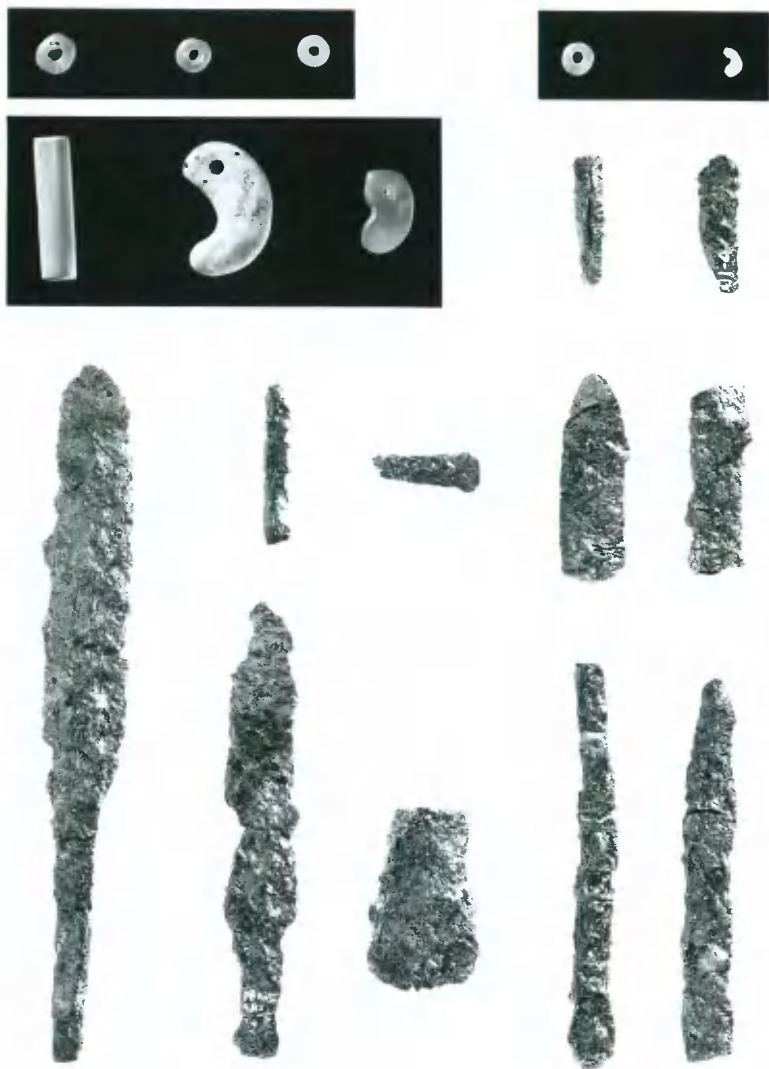


出土遺物（特殊埴輪）



出土遺物（須惠器，土師器，鼓形器台）

図版38



出土遺物（玉類，鉄器）



出土遺物（石鏃，石錘，石庖丁）



出土遺物（砥石、石錘等）





1. 南区全景（南西から）



2. 北区全景（南から）





1. 溝-1 土器出土状況（西から）



2. 岩陰遺構（東から）



出土遺物 (1)





1. 出土遺物 (3)



2. 出土遺物 (4)



1. 出土遺物 (5)



2. 出土遺物 (6)



1. 調査前全景（北から）



2. 調査後遠景（東から）



図版48



1. 一次調査 T16  
貝塚検出状況  
(南から)



2. 一次調査 T16  
獣骨検出状況  
(南から)



3. 一次調査 T8  
土層断面  
(南から)



1. 第1調査区南端 中世遺構全景 (西から)



2. 第1調査区南端 下層遺構全景 (西から)





1. 第1調査区西半部 上層遺構全景 (西から)



2. 第1調査区東半部 上層遺構全景 (北東から)



1. 第1調査区東半部 粘土採掘跡全景（南から）



2. 第1調査区西半部 粘土採掘跡（北西から）

図版52



1. 第1調査区西半部  
採掘内遺物出土状況  
(南から)



2. 第1調査区西半部  
採掘内遺物出土状況  
(東から)



3. 第1調査区西半部  
採掘内遺物出土状況  
(北東から)



1. 第1調査区 土坑41 (北東から)



2. 第1調査区 土坑53 (南から)



1. 第1調査区 矢部貝塚上面検出状況（西から）



2. 第1調査区 矢部貝塚堆積状況（西から）





1. 第1調査区 矢部貝塚  
獣骨出土状況  
(南東から)



2. 第1調査区 矢部貝塚  
獣骨出土状況  
(南から)



3. 第1調査区 矢部貝塚  
調査風景  
(北から)

図版56



1. 第1調査区 矢部貝塚堆積状況（北から）



2. 第1調査区 矢部貝塚土層断面（西から）



1. 第1調査区 黒色粘土堆積状況（北東から）



2. 第1調査区 黒色粘土堆積断面（北東から）





1. 第2調査区東半部 全景（北東から）



2. 第2調査区 溝1周辺（東から）



1. 第2調査区 溝1  
遺物出土状況  
(南西から)



2. 第2調査区 溝1  
遺物出土状況  
(南西から)



3. 第2調査区 溝1  
遺物出土状況  
(南西から)



1. 第2調査区 竪穴住居（西から）



2. 第2調査区 竪穴住居下土壇12(左)、土壇13(右)（北から）



1. 第3調査区西半部 土壇群上面検出状況（西から）



2. 第3調査区西半部 土壇群（西から）

図版62



1. 第3調査区  
土壙6  
(東から)



2. 第3調査区  
土壙6  
上部土層断面  
(西から)



3. 第3調査区  
土壙6  
下部土層断面  
(東から)





1. 第3調査区 土壇8 (南東から)



2. 第3調査区 土壇8土層断面 (東から)



1. 第3調査区 土坑7 (南東から)



2. 第3調査区 土坑10 (北から)



1. 第3調査区 土壙9 (南から)



2. 第3調査区 土壙9 上部土層断面 (北から)



図版66



1. 第3調査区  
土壇17  
(西から)



2. 第3調査区  
土壇15・16  
(北西から)



3. 第3調査区  
調査風景  
(南東から)



1. 第4調査区 土壇3B土層断面（南東から）



2. 第4調査区 土壇3B（南東から）



1. 第4調査区 土壌2B 土層断面(北から)



2. 第4調査区 土壌5B 土層断面(南東から)



3. 第4調査区 土壌7B 土層断面(南から)



1. 第4調査区 土壙 3B  
遺物出土状況  
(北西から)



2. 第4調査区 土壙 5B  
遺物出土状況  
(北から)



3. 第4調査区 土壙 7B  
遺物出土状況  
(北から)

図版70



1. 第5調査区 全景 (北から)



2. 第5調査区南半 土層断面 (北東から)





1. 第5調査区 土壇54 (北から)



2. 第5調査区北半 土層断面 (東から)



1. 縄文中期 I・II類



2. 縄文中期 I類



1. 縄文中期Ⅰ類



2. 縄文中期Ⅲ類





1. 縄文中期Ⅲ・Ⅳ類



2. 縄文中期Ⅳc類



1. 縄文中期Ⅳa-g類



2. 縄文中期Ⅲ・Ⅳ類



1. 土壇-12・周辺出土遺物



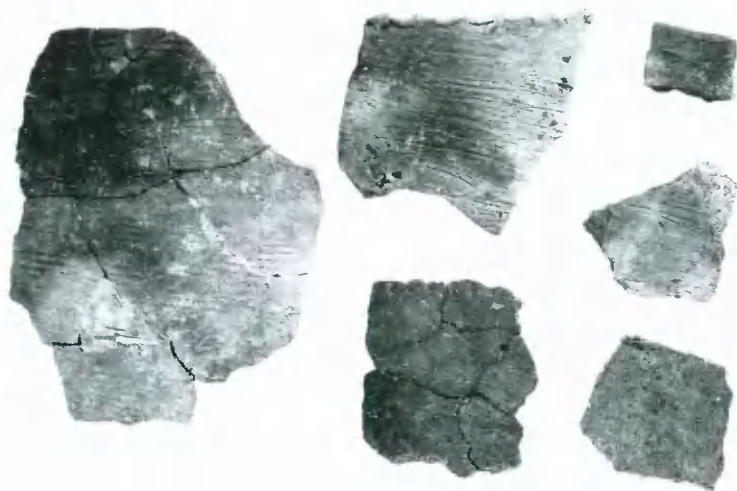
2. 縄文中期M/h類



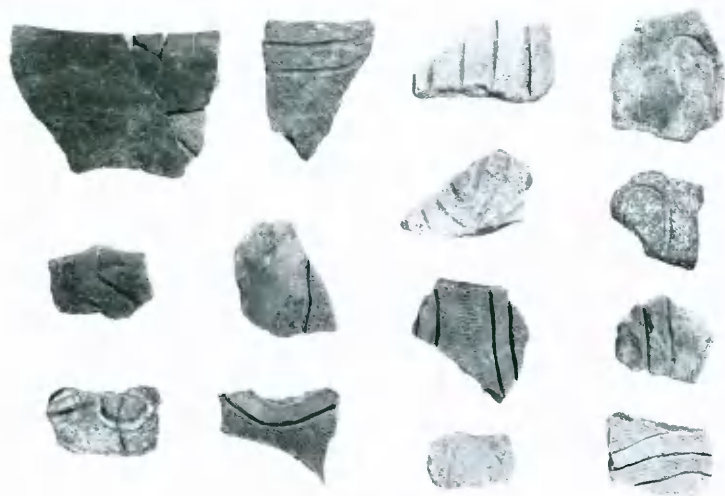
1. 縄文中期 IVe 類



2. 縄文中期 IV 類



1. 縄文中期V類



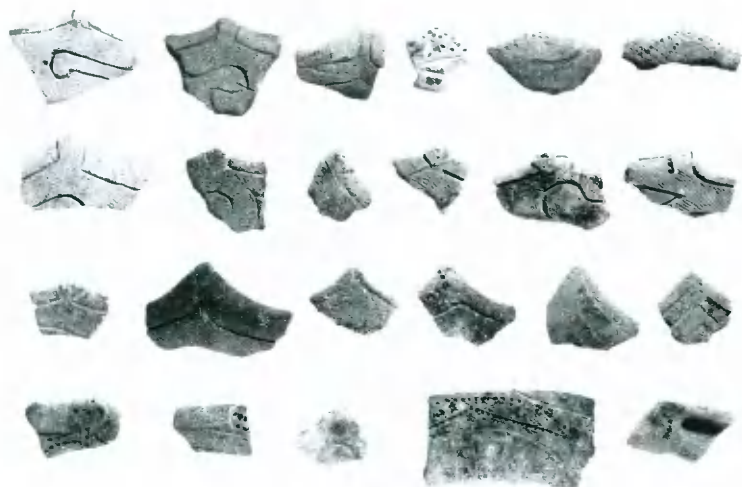
2. 縄文後期I類



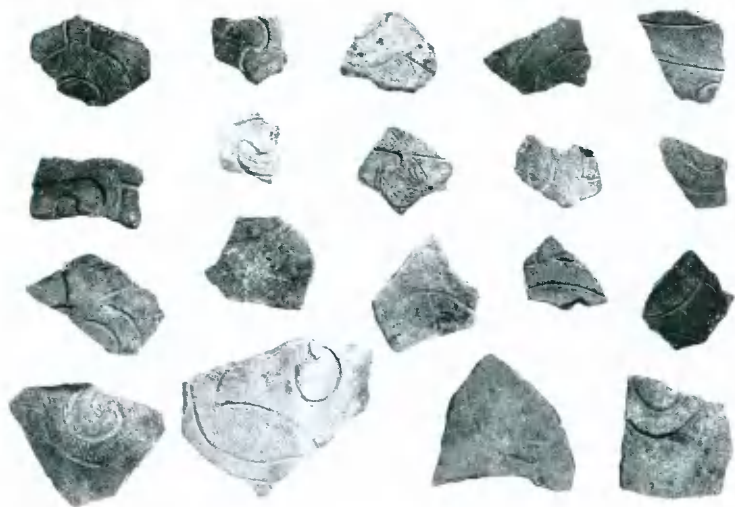
1. T-16 貝層上面出土遺物



2. 縄文後期Ⅱ類

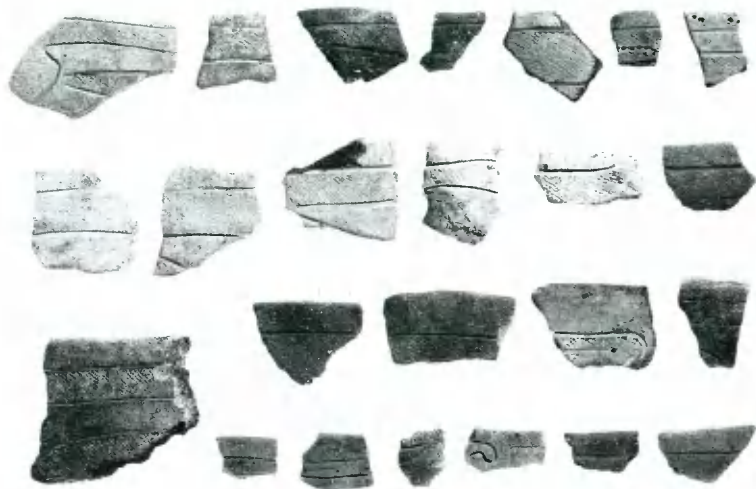


1. 縄文後期Ⅱ類



2. 縄文後期Ⅱ類





1. 縄文後期Ⅱ類



2. 縄文後期Ⅱ類





1. 縄文後期Ⅱ類



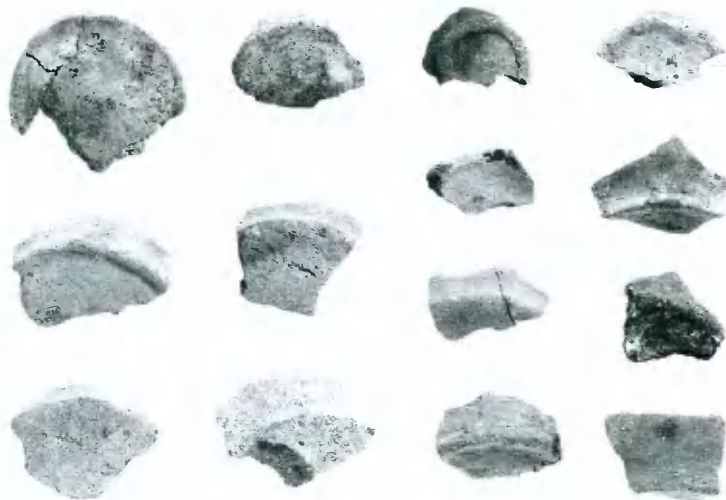
2. 縄文後期Ⅳ類



1. 縄文後期Ⅲ類 (表)



2. 縄文後期Ⅲ類 (裏)



1. 縄文中・後期底部



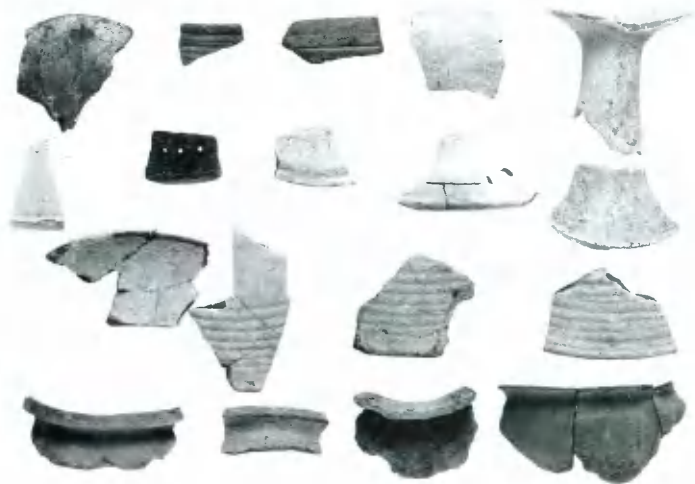
2. 早期I類



3. 耳飾り



1. 出土土器 1 (弥生土器)



2. 出土土器 2 (弥生土器)



900



901



948



934



954



960



959

出土土器 3 (弥生土器)



983



984



1016



979

出土土器 4 (土師器)



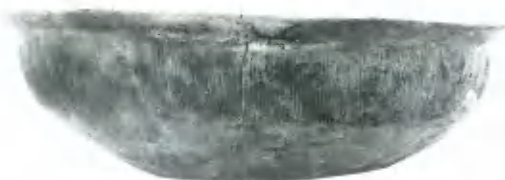
出土土器 5 (土師器)



1034



1083



1082



1074

出土土器 6 (須恵器, 中世土器)





1. 出土土器 7 (中世土器)



2. 出土銅銭



4



6



5



3



10



9



11



17



7



13



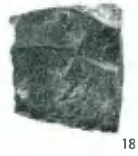
8



16

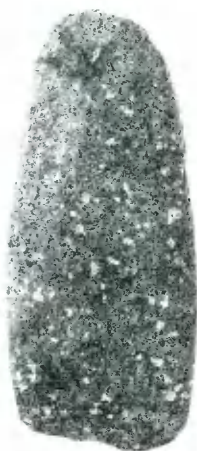


12





34



33



1



37



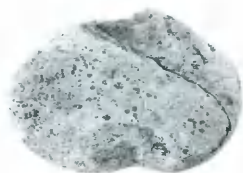
36



2



39



42



40



41



46



44



38



43



1. 発掘前全景（北から）



2. 1区全景（南から）



1. 2区全景（北から）



2. 3区南全景（北から）





1. 5区全景（北から）



2. 6区全景（西から）





1. 竪穴住居-H102 (北から)



2. 竪穴住居-H105 (南から)



1. 竪穴住居-H312 (北から)



2. 竪穴住居-H315 (東から)



1. 竪穴住居-H616 (東から)



2. 竪穴住居-H502 (南から)



1. 建物-B101 (南から)



2. 建物-B702 (東から)



1. 竪穴住居-H101 (北から)



2. 竪穴住居-H104 (北から)

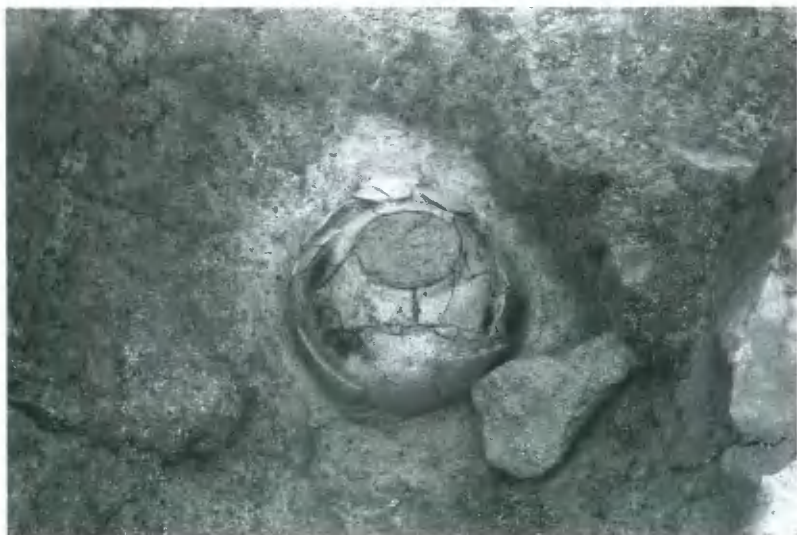




1. 竪穴住居-H106 (南から)



2. 竪穴住居-H211 (西から)



1. 土器棺-X305 (南から)



2. 箱式石棺-X301 (西から)



1. 石蓋土壙-X302 (西から)



2. 横穴式石室-X303 (南から)





1. 建物-B102 (南から)



2. 建物-B401 (南から)



1. 土壇-K102 (西から)



2. 土壇-K204 (東から)



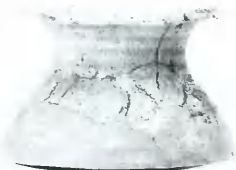
1. 土壇-K206 (北から)



2. 土壇-K403 (南から)



37



14



88



85



94



84



74

弥生中期土器（壺・甕）



105



45



54



69



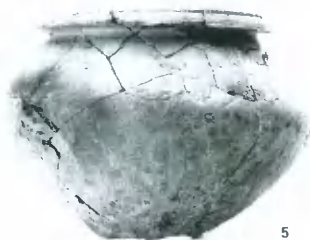
95



114



122



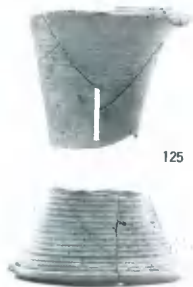
5



107



116



125

弥生中期土器（甕・鉢・高杯・器台）



二号埴輪 127



一号埴輪 126





170



208



216



180



182



219



183



237



268



201



224

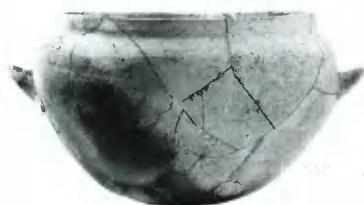
須恵器 (杯・高杯・鉢・甕)



192



194



196



193



197



須恵器 (横瓶・こしき・鍋・蓋)

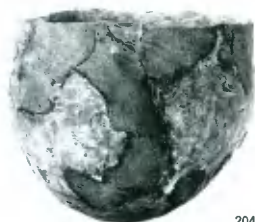




205



203



204



291



294



279



286



287



299



318



315



322



321



307

312



280



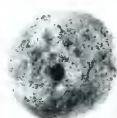
281



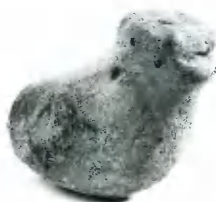
C3



C2



C1



C5



C4



C6



S1(1 2.5)



S2  
(1 1.5)



S3  
(1 2)



S4  
(1/2)



S5  
(1 2)



S6(1/1)



S8(1 1)



S11  
(1 2)



S9  
(1/2)



S10  
(1 2)



S19  
(1 2)



S13  
(1 3)



S15  
(1 3)



S17  
(1/3)



S 22  
(1/1)



S 27  
(1/1)



S 31  
(1/1)



S 32  
(1/1)



S 30  
(1/1)



S 29  
(1/1)



S 23  
(1/1)



S 34  
(1/2)



S 24  
(1/2)



S 25  
(1/3)



S 50  
(1/3)



S 43  
(1/3)



S 48  
(1/3)



S 51  
(1/3)



S 53  
(1/2.5)



S 60  
(1/2.5)



S 18  
(1 3)



S 37  
(1 3)



S 28  
(1 2.5)



S 16  
(1 2.5)



S 57(1 3)



S 54  
(1 3)



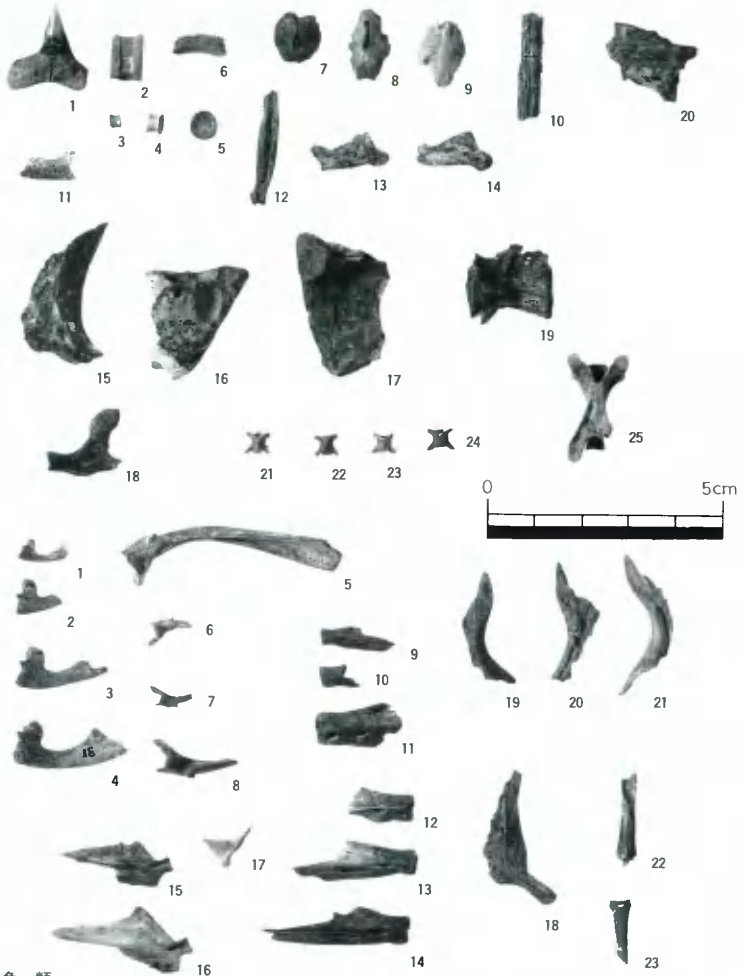
S 55  
(1 2.5)



S 20(1, 2.5)



S 59  
(1 1.5)



上段：魚 類

1. サメ 2~5. エイ類椎体 6. 同歯板 7~9. 鱗 10. 同棘 11. ナマズ歯骨片 12. コイ類背鱗棘  
13, 14. ボラ左眼下骨 15. 同前鰓蓋骨 16. 同左主鰓蓋骨, 17. 右主鰓蓋骨 18. 同左歯骨 19. 同尾  
椎体 20~24. ヘビ類椎体 25. スッポン椎体

下段：スズキ

1~4. 右前鰓蓋骨 5, 6. 右主上顎骨 7, 8. 左主上顎骨 9~11. 左歯骨 12~14. 右歯骨 15, 16. 左  
角骨 17. 左方骨 18. 右前鰓蓋骨 19. 右擬鎖骨 20, 21. 左同 22. 腎臓血管間棘 23. 腎臓第2棘片

図版 120

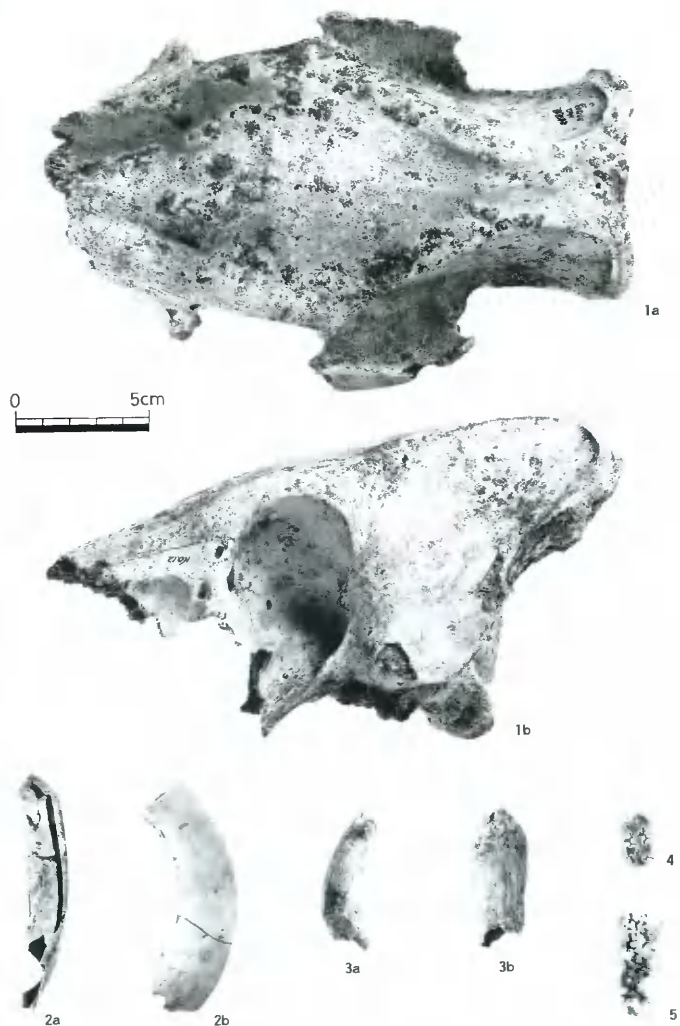


上段：クロダイ(1～12)とコチ(13～16)

1. 左前上顎骨 2. 左同 3. 4. 左同(2, 3は咬面側) 5. 6. 左上上顎骨 7. 同(同側) 8ab. 右歯骨  
9ab. 左同 10. 右角骨 11, 12. 血管間棘 13. 肋骨 14, 15. 右前上顎骨(15咬面) 17, 18. 右歯骨  
(咬面) 16. 左上上顎骨

下段：ニホンザル、タヌキ、アナグマ

1. ニホンザル 右上腕骨遠位端 2, 3ab. タヌキ 下顎骨(2:左, 3:右) 4ab. アナグマ 左下顎骨  
5. アナグマ 上顎犬歯



イノシシ

1a. 頭蓋上面 b. 同左側面(後頭部に特別の破損はみられない) 2. 左下顎犬歯(♂) a. 遠心面, b. 舌側面(△印カ所に切痕) 3. 左上顎犬歯(♂) a. 遠心面 b. 舌側面 4. RM<sub>2</sub> 5. RM<sub>3</sub>





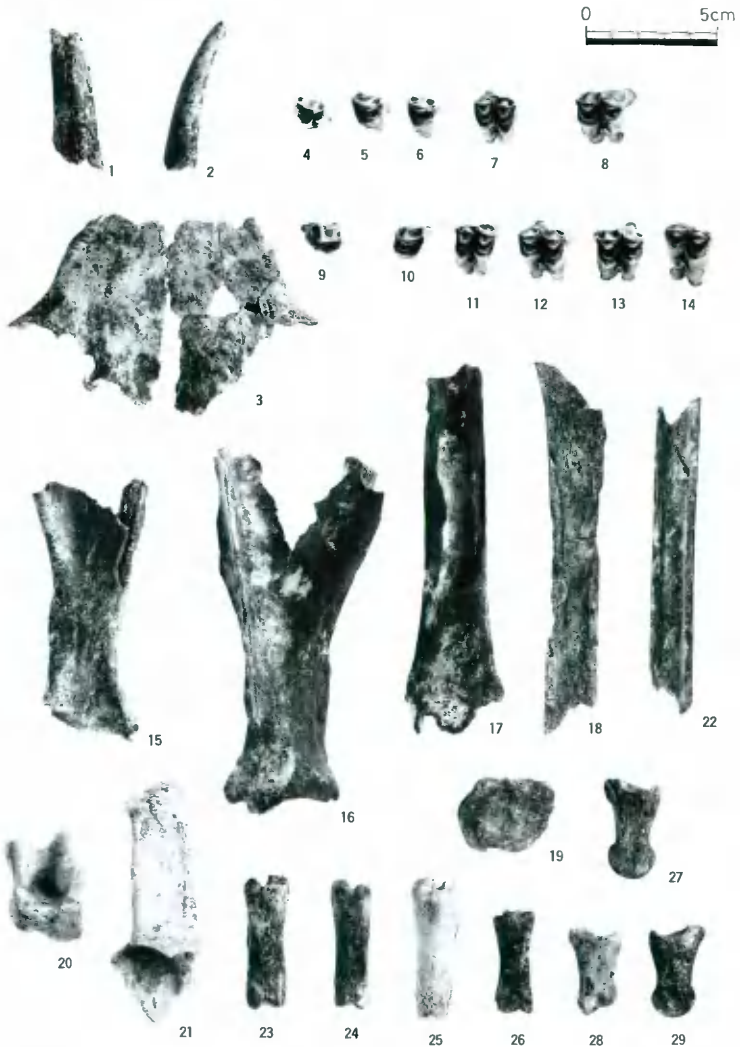
イノシシ

1. 右上顎骨 2. 左上顎骨 3ab. 左下顎骨(♂) 4. 左下顎骨 5. 左下顎骨  
(dm<sub>4</sub>をもつ)



イノシシ

1. 環椎 2. 腰椎 3, 4. 左肩甲骨 5, 6. 左上腕骨 7. 左橈骨 8. 右橈骨 9. 左尺骨 10. 右尺骨 11, 12. 右寛骨 13, 14. 右距骨 15. 右第Ⅲ中子骨 16. 左同 17. 基節骨 19, 20. 末節骨



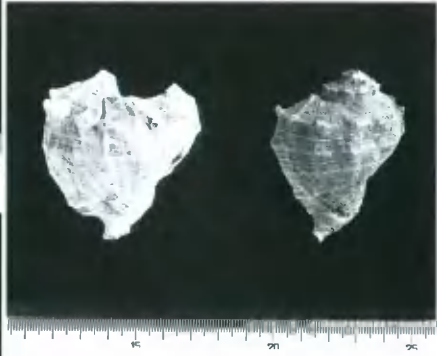
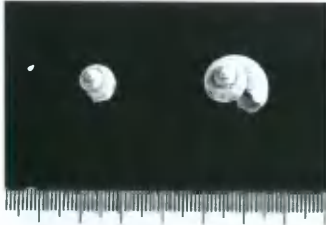
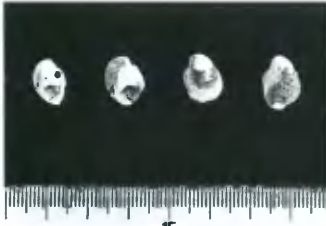
ニホンジカ

1, 2. 鹿角片 3. 前頭骨(♀) 4~8. 左上顎歯(P<sup>2</sup>, P<sup>3</sup>, P<sup>4</sup>, M<sup>1</sup>, M<sup>3</sup>) 9~10. 右上顎歯(P<sup>2</sup>, P<sup>4</sup>, M<sup>1</sup>, M<sup>2</sup>, M<sup>3</sup>) 15. 右肩甲骨 16. 左肩甲骨 17. 左脛骨 18. 脛骨片 19. 右中心+第4足根骨 20. 左距骨 21. 右踵骨 22. 中足骨片 23~26. 基節骨 27~29. 中節骨

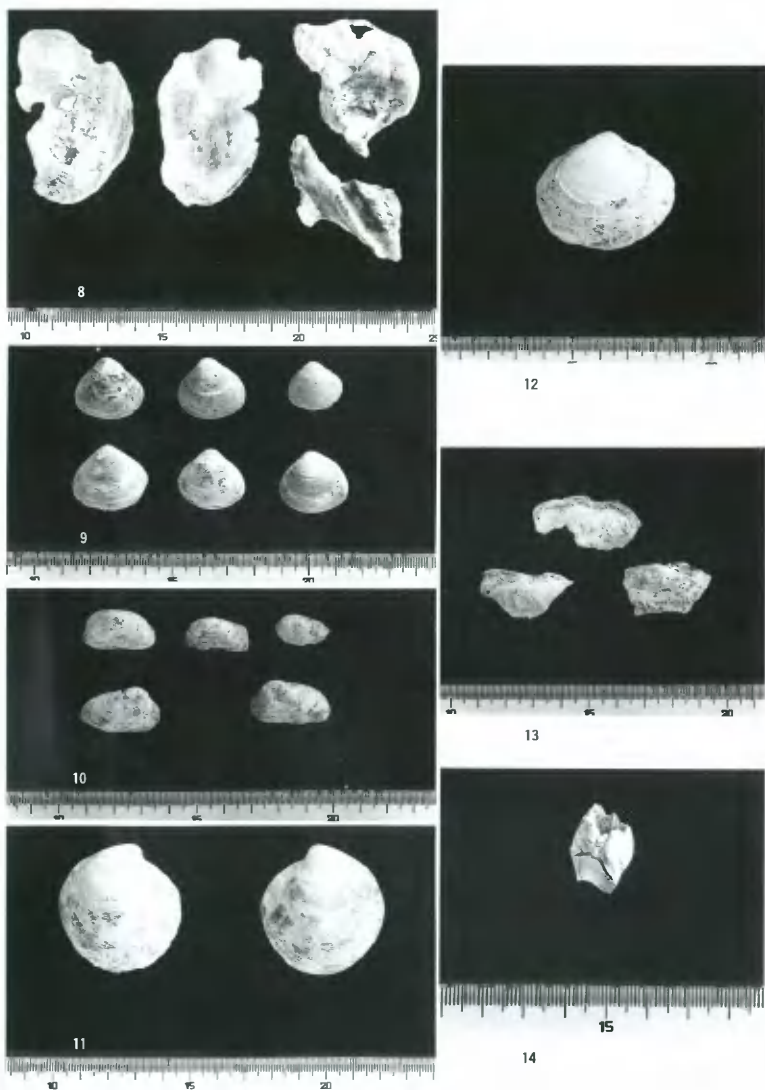


ヒト (1/2)

1. 左上腕骨遠位端 2. 右橈骨 3. 左尺骨 4. 右大腿骨



1. ヒメカノコガイ 2. ヤマキサコ 3. カワニナ 4. カワアイ 5. フトヘナタリ  
6. アカニシ 7. ハイガイ



8. マガキ 9. ヤマトシジミ 10. ウネナシトマヤガイ 11. オキシジミガイ 12. ハマグリ  
13. フジナミ 14. フジツボ類

図版128


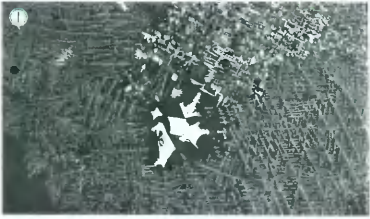


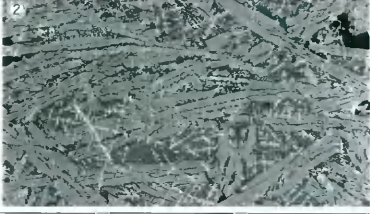



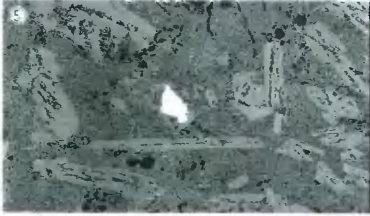
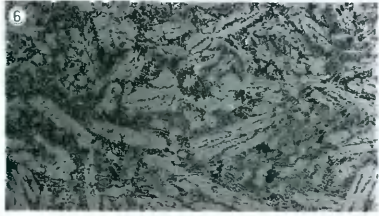
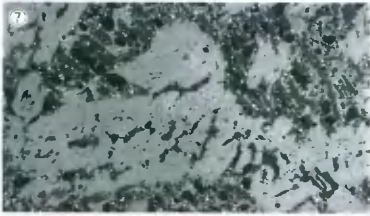
<p>1) YBO-1 矢部奥田遺跡 (土城6 西半出土) 炉壁溶着ガラス質滓 暗黒色ガラス質スラグ 中にMagnetite晶出 ×400</p>	 <p>外観写真 1/1.8</p>	
<p>(2) YBO-2 矢部奥田遺跡 (土城7 東区出土) 鉍石製錬滓</p> <p>② ×100 Fayalite +微小Wustite</p> <p>③ ×400 Fayalite +微小Wustite</p> <p>④ ×200 硬度正試 Fayalite 673Hv(荷重100g)</p>	<p>表側</p>  <p>裏側</p>  <p>外観写真 1/1.8</p>	
<p>(3) YBO-3 矢部奥田遺跡 (Pit 178出土) 鉍石製錬滓</p> <p>⑤ ×100 白色(中央)結晶 はTi-Fe-Al 化合物</p> <p>⑥ ×100 Fayalite 微小Magnetite</p> <p>⑦ ×400 同左拡大</p>	<p>表側</p>  <p>裏側</p>  <p>外観写真 1/1.8</p>	
<p>⑥ ×100 Fayalite 微小Magnetite</p>	<p>⑦ ×400 同左拡大</p>	
		

Photo. 1 鉄滓の顕微鏡組織 縮小0.8




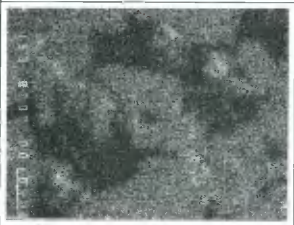



<p>SE</p> <p>YBD-3 (3-8)</p> <p>×1500</p>		<p>SE</p> <p>×200</p>
<p>Fe</p>		<p>Si</p>
<p>Ti</p>		<p>Al</p>
<p>Mn</p>		<p>Ca</p>
<p>K</p>		<p>Mg</p>

Photo. 2 矢部奥田遺跡出土鉄滓(YBO-3①)の特性X線像×1500 縮小0.53



図版130

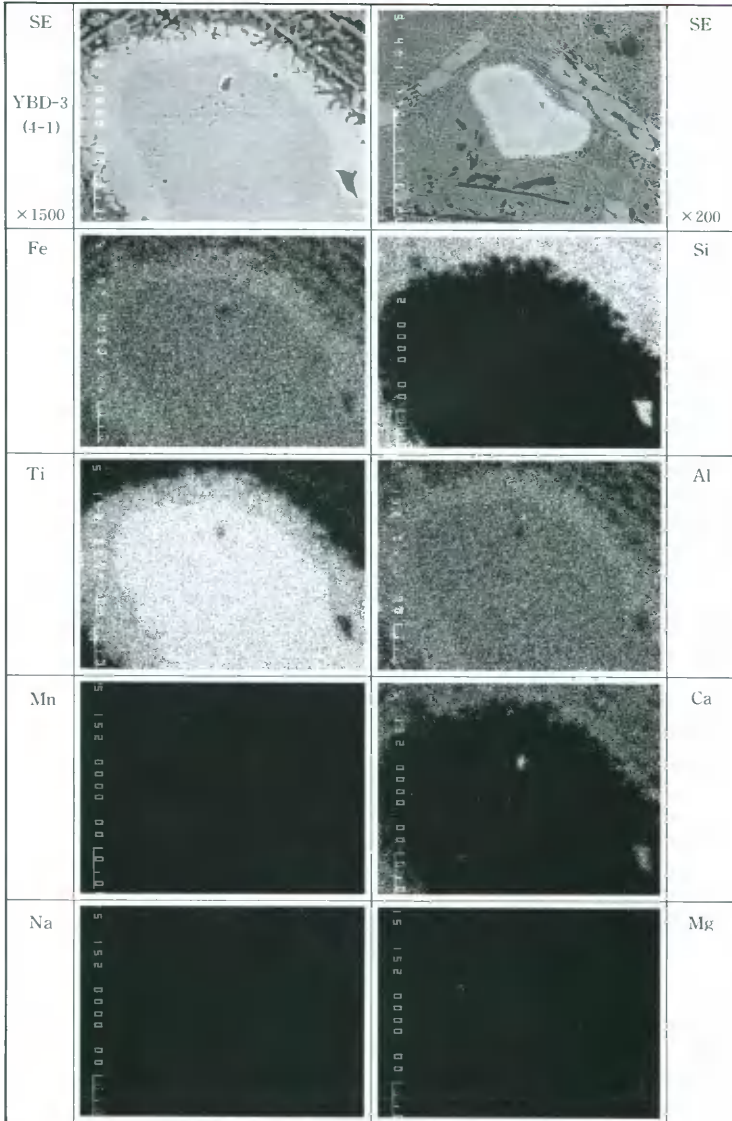


Photo. 3 矢部奥田遺跡出土鉄滓(YBO-3 2)の特性X線像×1500 縮小0.53

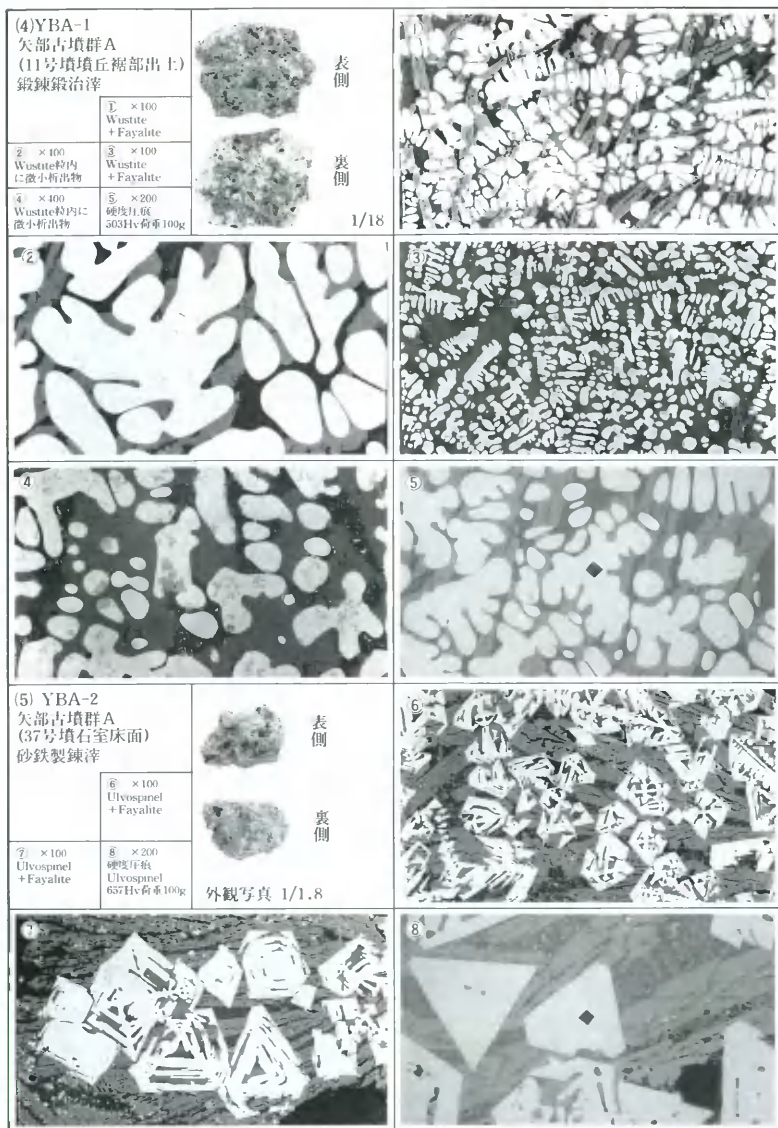


Photo. 4 鉄滓の顕微鏡組織 縮小0.8

図版132

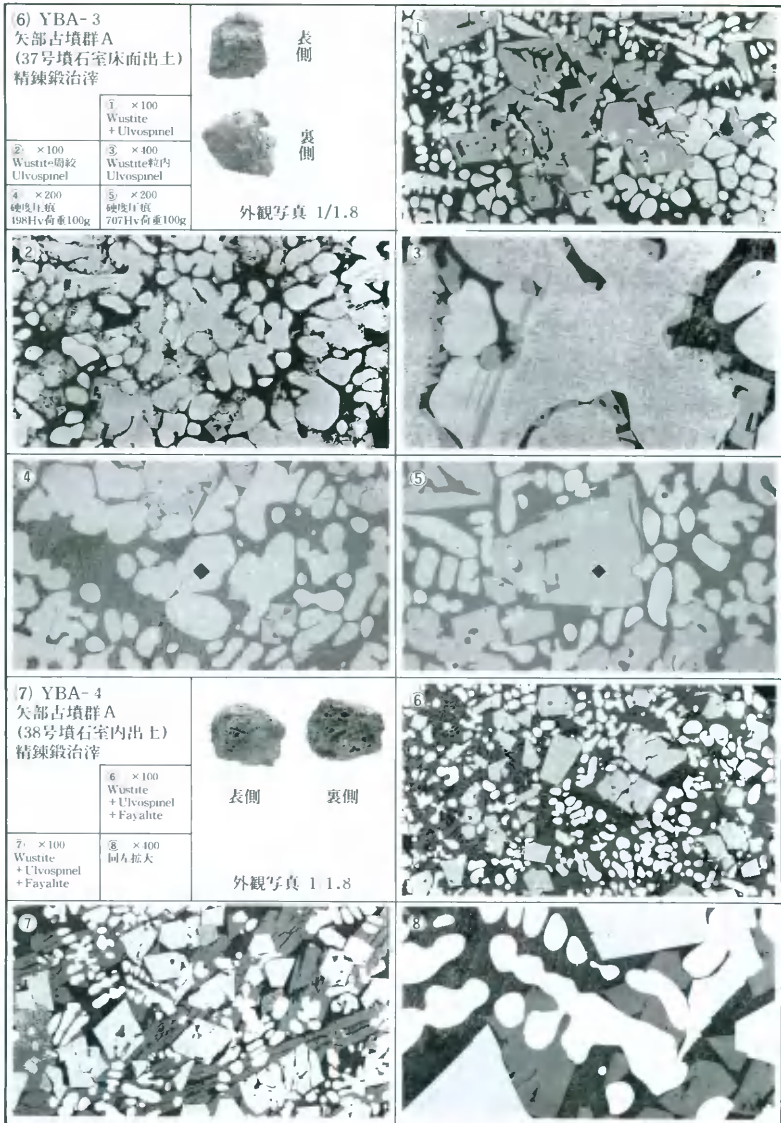


Photo. 5 鉄滓の顕微鏡組織 縮小0.8

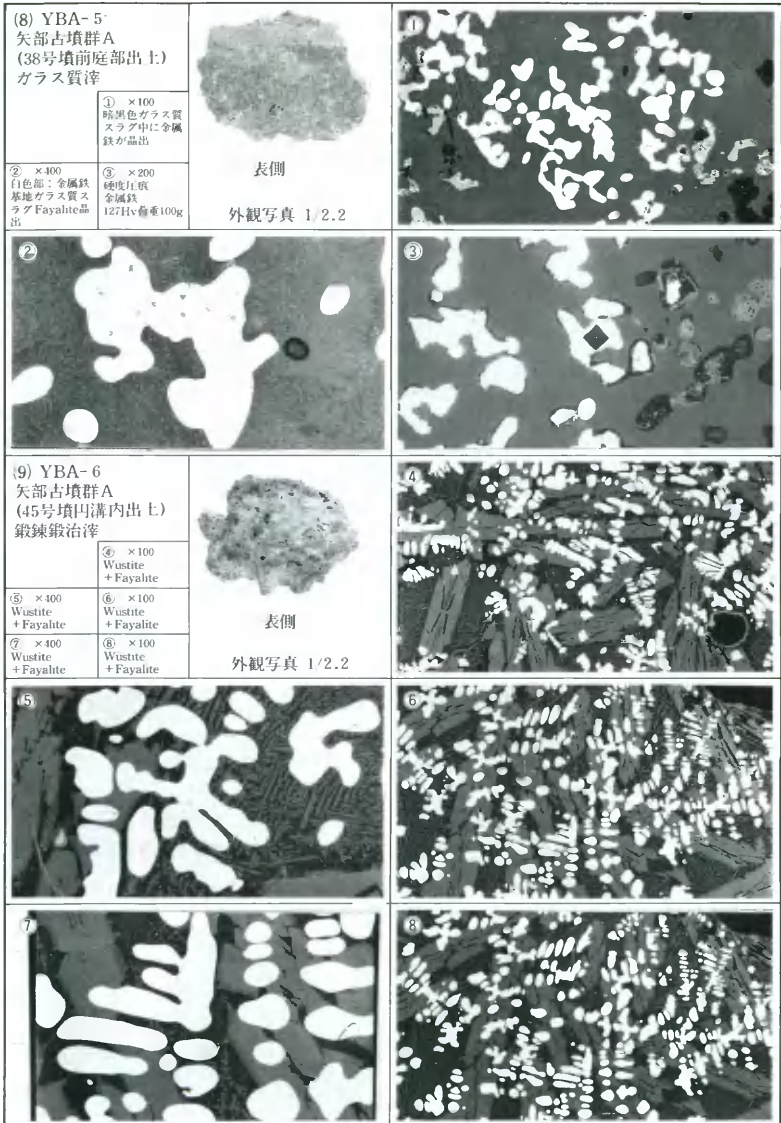


Photo. 6 鉄滓の顕微鏡組織 縮小0.8



図版134

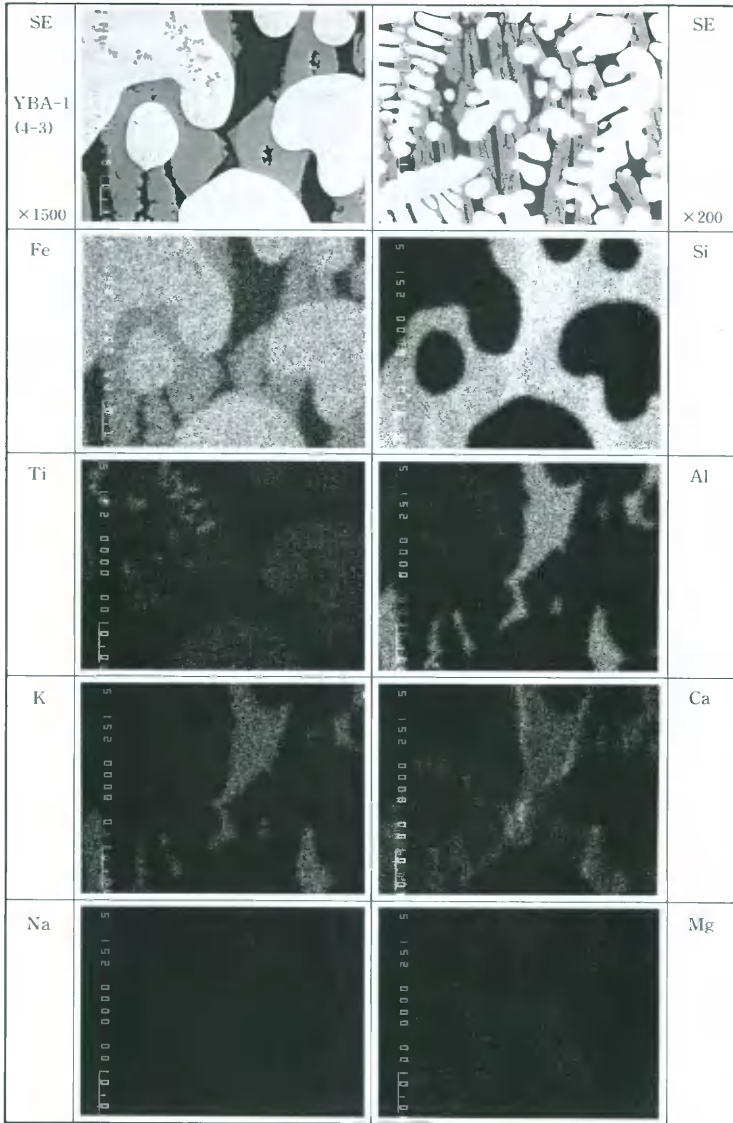


Photo. 7 矢部古墳群A 11号墳出土土椀形銀鍍銀治滓(YBA-1)の特性X線像×1500

縮小0.53

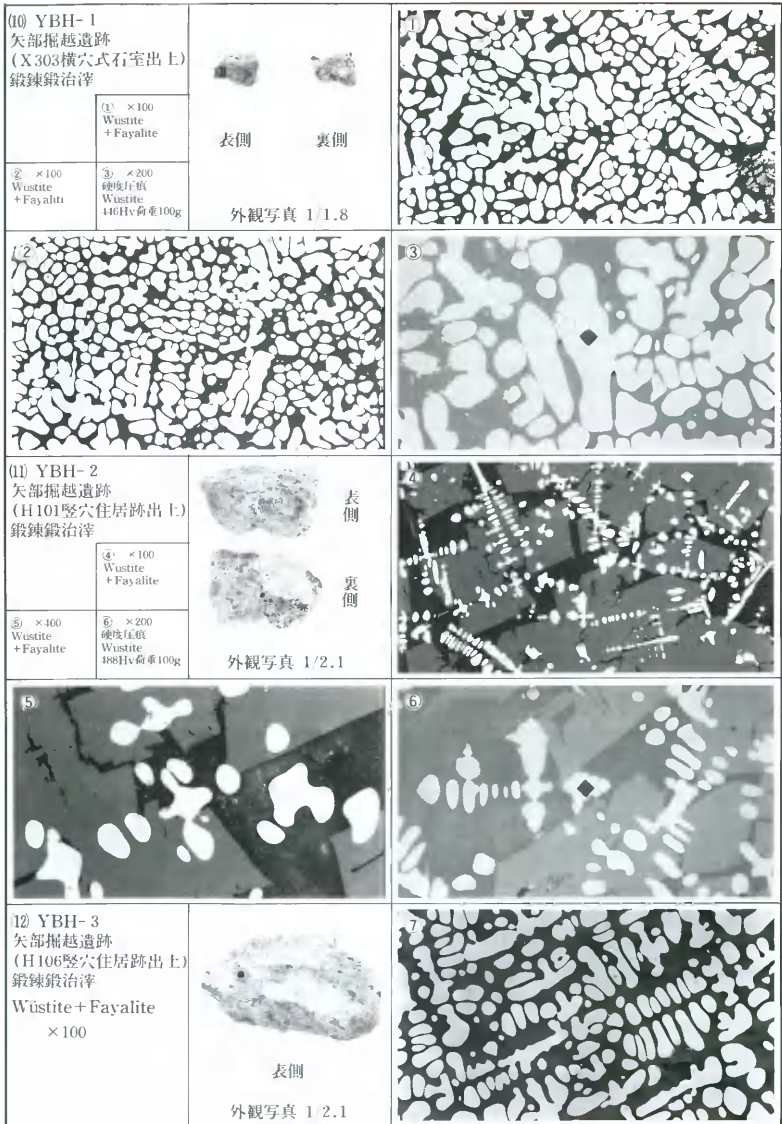


Photo. 8 鉄滓の顕微鏡組織 縮小0.8

図版136

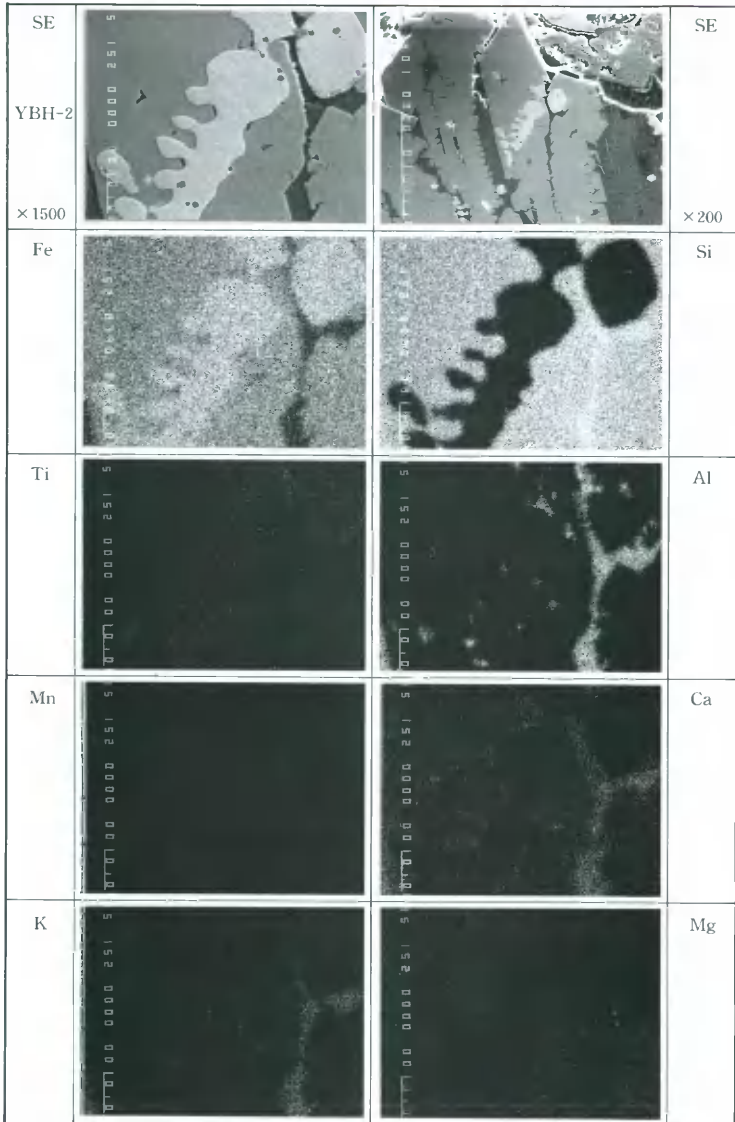


Photo. 9 矢部堀越遺跡H101 竪穴住居跡出土鉄滓(YBH-2)の特性X線像X1500  
縮小0.53

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6

(写真図版)

1993年3月20日 印刷

1993年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
発行 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所  
岡山県教育委員会  
印刷 西日本法規出版株式会社